

熊本県文化財調査報告第 303 集

熊本城跡遺跡群

J R 鹿児島本線外一線連続立体交差事業に伴う
新馬借遺跡および花岡山・万日山遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書

2014.3

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第 303 集

熊本城跡遺跡群

J R 鹿児島本線外一線連続立体交差事業に伴う
新馬借遺跡および花岡山・万日山遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書

2014.3

熊本県教育委員会

巻頭カラー



熊本城と熊本城跡遺跡群（空撮）



高麗門調査区（空撮）



トレンチ断面に見る参道跡と堀の肩

序 文

J R 鹿児島本線外一線連続立体交差事業は、九州新幹線建設工事に相前後して工事が進められ、熊本市域の交通網の整備の一環として、渋滞の解消、道路幅の拡幅などを企図して推進されてきました。

九州新幹線鹿児島ルートが平成 23 年の春に開業し、J R 鹿児島本線は熊本市中心域では新幹線に並行して高架化工事が進められています。

このように工事が進展する中で、文化課は新幹線建設時に埋蔵文化財の調査を行い文化財保護に努めてきました。この高架化事業においても同じく調査を実施し文化財保護に努めてきたところです。

調査の進展する中で、今回報告いたします新町周辺には熊本城の惣構の一角であり、西側の出入り口にあたる高麗門があったといわれ、絵図などの近世の資料に記されておりましたばかりでなく、明治初年の写真資料にその当時の姿が写されていたことが分かっておりました。また、その南北には土塁とその外側に配された堀、さらに参道もあったことが絵図に描かれ、古写真として残されてもおりました。それらの証拠と今回の工事対象地を比較しましたところ、高麗門や土塁、堀が想定される場所が今回の工事箇所と重なる可能性があることが分かりました。そこで、緊急かつ綿密に試掘・確認調査を実施すると同時に検討委員会を設け、そこからさらに確認調査を実施し、そこで出土した遺構等を慎重に検証しましたところ検出した遺構が高麗門跡の一部と、細川期の御成道の一部が鉄道路の下に残されていることを確認しました。

そこで、国の特別史跡である『熊本城』の一角にも含まれるものとして検討委員会から、是非現地保存が必要であるとの提言を受けました。それを受け現地保存の方策を事業部局と協議し、工法の一部変更によって、確認した門跡範囲は現状保存、参道についてはできる限り残せることとなりました。

しかし、工法変更によっても保存できない部分については、発掘調査を実施しました。この報告書ではその発掘調査成果とこれまでの経緯を記録としてまとめております。

この報告書が今後の文化財保護行政にとって何らかの資料を提供できれば幸いです。

最後になりましたが、熊本県土木部都市計画課鉄道高架推進室、熊本駅周辺事務所、熊本市などの行政及び地元の方々、また、J R 及び J R 工事の関係者の皆様にはお世話になりました。改めて謝意を表します。

平成 26 年 3 月 26 日

熊本県教育長 田崎 龍一

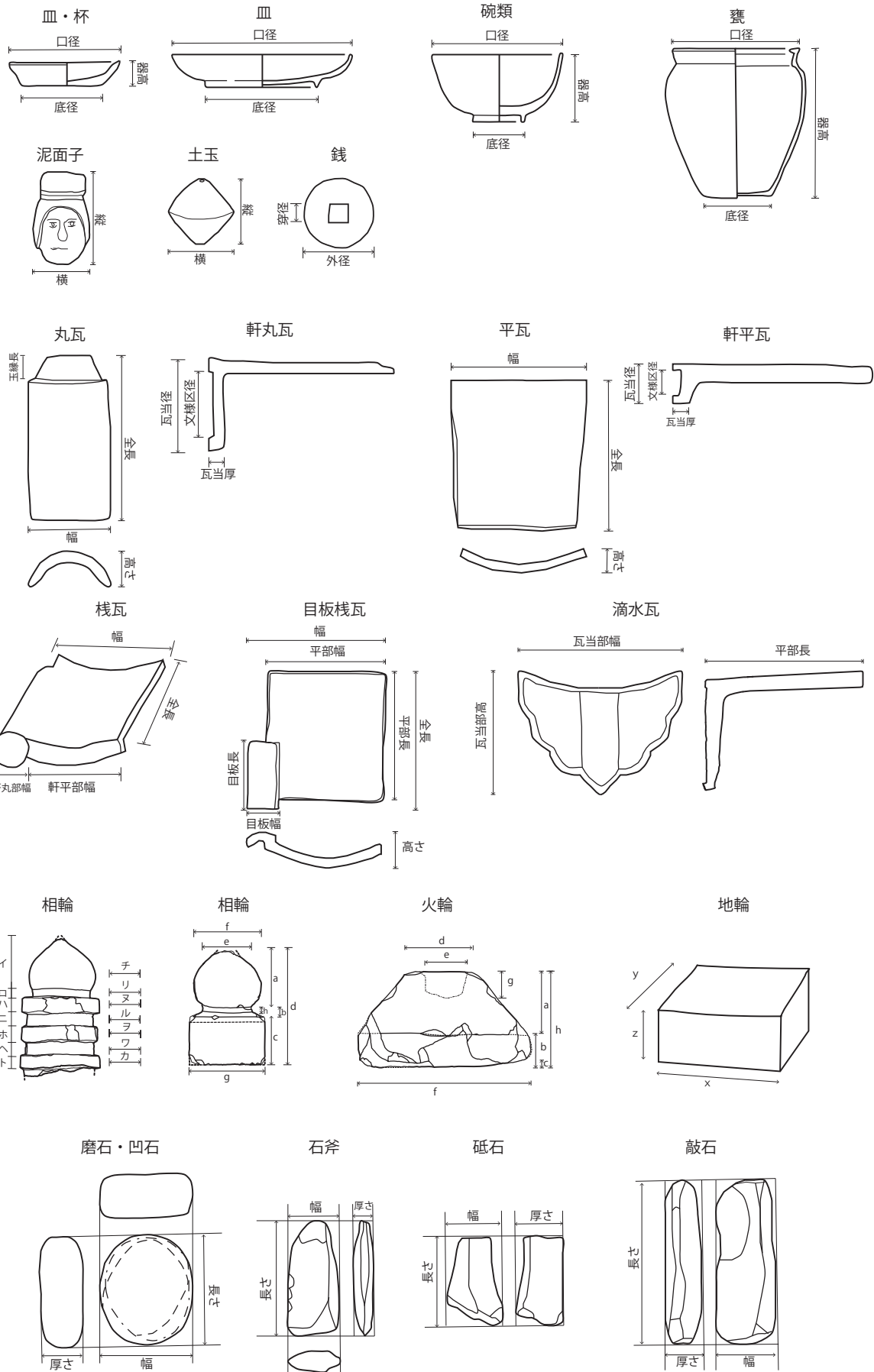
例 言

- 1 本書は熊本県教育委員会が熊本県土木部都市計画課新幹線都市整備室のJR鹿児島本線外一線立体交差事業を受けて実施した、熊本県熊本市中央区新町3丁目及び横手町1丁目にある新馬借遺跡及び花岡山・万日山遺跡群の調査報告書である。
- 2 本調査は平成23年11月から平成24年11月までの期間、熊本県教育庁教育総務局文化課が発掘調査を実施した。
- 3 発掘調査にともなう遺構の実測図作成の一部ならびに現地の写真撮影は、坂田和弘・山下義満・後藤克博・尾崎潔久・宮本大・上土井朋美・浦辻栄治・土野雄貴・川俣幸次・宮川香織・桑島幸平が行った。一部の発掘調査及び写真・実測図作成については株式会社有明測量開発社に委託した。
- 4 調査区の4級基準点測量、メッシュ杭の設置作業は株式会社十八測量設計及び有明測量開発社で実施した。
- 5 自然科学的分析の内、地中レーダー探査は応用地質株式会社が実施し、出土人骨の取上げ・整理・報告書の作成は、特定非営利活動法人人類学研究機構が実施した。
- 6 自然科学的分析の内、地中レーダー探査は応用地質株式会社が実施し、出土人骨の取上げ・整理・報告書の作成は、特定非営利活動法人人類学研究機構が実施した。
- 6 各調査区の空中写真撮影は、九州航空株式会社が実施した。
- 7 土層註記及び遺物等の色調は、『新版標準土色帖2006年版』（日本色彩研究所）を基準に使用した。
- 8 整理作業及び報告書作成は、平成24年12月から平成26年3月までの16ヶ月間、熊本県文化財資料室で行った。遺物の整理作業の一部は有明測量開発社に委託した。
- 9 遺物の実測は師富成香・永松望・岩瀬和代・福原洋子・岩瀬朱実で行った。一部は株式会社イビソク九州支店に委託した。
- 10 遺構の製図は、主に九州文化財研究所に委託し、一部、後藤・坂田が行った。遺物の製図は後藤・坂田・師富・岩瀬和・福原・岩瀬朱で行った。また写真図版掲載の遺物の写真撮影は坂田が行った。
- 11 本書の執筆は、第3章の4、7、9節と12節の一部を師富が、第4章を応用地質株式会社、特定非営利活動法人人類学研究機構が、それ以外は、第5章を除き、坂田が執筆した。第5章は、甲元眞之、北野 隆、松本寿三郎、稲葉継陽、高瀬哲郎の各氏から玉稿を戴き掲載した。

凡 例

- 1 全調査区位置関係図は2,500分の1とした。
- 2 現地での実測作業では遺構配置図を100分の1、現地での各遺構・土層の実測縮尺は20分の1もしくは10分の1で行った。本書への掲載縮尺は掲載場所に収まることに基本を置き、20分の1、30分の1、40分の1、50分の1、60分の1、80分の1、100分の1、120分の1、500分の1で掲載し、図中に縮尺を示した。
- 3 出土遺構は現地では調査区ごと遺構に通し番号をふったが、本書への掲載にあたって、整理作業の都合と対照表作成の手間を省くため、あえて調査区+遺構名の組み合わせで記載した。遺物の掲載縮尺は3分の1を基本とした。大形遺物については、それぞれ縮尺を図中にスケール等によって表示した。
- 4 出土遺物の掲載については実測図を原則としたが、時間的制約から写真のみを掲載しているものもある。
- 5 出土遺物の解説は本文中に記した。種別・形式・法量・出土層位等については、挿図毎に表形式で掲載した。表中遺物の計測部位は左図によって行った。

出土遺物計測部位模式図



本文目次

巻頭カラー 1

巻頭カラー 2・3

序文

例言

凡例

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	3
1 調査の契機	
2 一次調査	
3 二次調査	
第2節 三次調査の経過	6
1 全体計画	
2 調査体制	
3 調査作業の経過	
4 調査検討委員会	
5 現地説明会等	
第3節 整理等作業の経過	13
1 全体計画	
2 体制	
3 作業経過	
4 検討委員会の設置	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	17
第2節 遺跡の歴史的環境	17

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法	25
1 一次調査の方法	
2 二次調査の方法	
3 三次調査の方法	
4 整理作業の方法	
第2節 一次調査と二次調査の成果	31
1 一次調査の成果	
2 二次調査の成果	
(1) 調査概要	
(2) 高麗門調査区の確認遺構と遺物	
ア) 層序について	
イ) 石垣遺構	
ウ) 根固め遺構	

	エ) 版築層の確認	
	オ) 高麗門調査区出土遺物	
	(3) 二次調査参道部調査区の調査成果	
	(4) 下馬天神踏切南側の調査	
第3節	文化財保護と工事変更	63
	1 協議	
	2 工事変更と法的手続き	
	3 工事内容と文化財保護	
第4節	新馬借遺跡B調査区	65
	1 調査区概要	
	2 遺構と遺物	
第5節	新馬借 A-1 調査区	97
	1 調査区概要	
	2 遺構と遺物	
第6節	花岡山・万日山 A-2 調査区	149
	1 調査区概要	
	2 遺構と遺物	
第7節	花岡山・万日山 A-3 調査区	167
	1 調査区概要	
	2 遺構と遺物	
第8節	花岡山・万日山 A-4 調査区	201
	1 調査区概要	
	2 遺構と遺物	
第9節	花岡山・万日山 A-5 調査区	245
	1 調査区概要	
	2 遺構と遺物	
第10節	工事立会	281
	1 概要	
	2 排水路工事の立会結果	
	3 電気配管付替え工事立会結果	
	4 A-2 調査区暗渠排水遺構の撤去工事立会結果	
第11節	追加調査 花岡山・万日山 A-6 調査区	286
	1 調査区概要	
	2 調査結果	
第12節	発掘調査のまとめ	289
	1 遺構	
	2 遺物	
第4章	自然科学分析	
第1節	花岡山・万日山遺跡群埋蔵文化財発掘調査に伴う地中レーダー探査(抄)	307
第2節	熊本市花岡山・万日山遺跡群および新馬借遺跡出土の中世人骨	326
第3節	花岡山・万日山遺跡群(P-193)出土の近世人骨	340

第5章 各論		
第1節 熊本城関連遺跡	359	
第2節 建築学的に見た高麗門	371	
第3節 絵図に見る熊本城惣構	374	
第4節 文献史料からみた熊本城の惣構と高麗門	379	
第5節 高麗門一帯の石造遺構について	390	
第6章 総括		
第1節 調査成果のまとめ	401	
1 「高麗門跡」		
2 土塁		
3 「堀跡」		
4 参道		
5 まとめ		
第2節 熊本城惣構と発掘調査	407	
1 熊本城惣構における門・土塁・堀		
2 妙解寺と参道		
第3節 今後の課題	410	
報告書抄録		

挿図目次

Fig.1 J R 鹿児島本線高架化事業工事図	4	Fig.18 計画見直し状況図	64
Fig.2 熊本市周辺の地質図	18	Fig.19 B23 調査区遺構配置図及び東壁土層図	67
Fig.3 新馬借遺跡及び花岡山・万日山遺跡群	19	Fig.20 B24 調査区遺構配置図 及び東壁土層図 1	68
Fig.4 調査範囲及び調査区グリッド図	26	Fig.21 B24 調査区遺構配置図 及び東壁土層図 2	69
Fig.5 一次・二次・三次調査区位置図 (1)	27	Fig.22 S002 平面・断面実測図	72
Fig.6 一次・二次・三次調査区位置図 (2)	28	Fig.23 S001 実測図	74
Fig.7 三次調査区割図	30	Fig.24 S002・003・004 実測図	76
Fig.8 一新小西側トレンチ略測図	32	Fig.25 S006 実測図及び東西土層断面図	78
Fig.9 高麗門調査区平面・断面実測図	34	Fig.26 S007 実測図及び東西ベルト・中央 トレンチ北端・中央トレンチ土層図	81
Fig.10 高麗門調査区石垣実測図	37	Fig.27 S007 実測図 2	82
Fig.11-13 高麗門調査区 出土遺物実測図 (1)～(3)	38	Fig.28 S008 実測図	86
Fig.14 参道調査区 No.1 トレンチ平面図 及び見通し実測図	43	Fig.29 K70～74 東壁トレンチ遺物出土状況図	88
Fig.15 参道調査区 No.3 トレンチ実測図	44	Fig.30 近代遺構配置図	99
Fig.16 参道調査区 No.6・7 トレンチ実測図	46		
Fig.17 二次調査追加トレンチ 1・2・3 実測図	48		

Fig.31	近世遺構配置図	100	Fig.84	S008 出土遺物実測図	185
Fig.32	1・2・3 トレンチ土層図	102	Fig.85	S009 出土遺物実測図	185
Fig.33	I-45 グリッド出土遺物実測図	105	Fig.86	S013 出土遺物実測図	186
Fig.34-43	I-46 グリッド 出土遺物実測図 (1)～(10)	106	Fig.87	S014 出土遺物実測図	186
Fig.44-48	I-47 グリッド 出土遺物実測図 (1)～(5)	116	Fig.88	S016 出土遺物実測図	186
Fig.49	I-48 グリッド出土遺物実測図	120	Fig.89	S019 出土遺物実測図	187
Fig.50	上位中世層遺構配置図	122	Fig.90	A-3 調査区出土遺物実測図	188
Fig.51	最下層中世遺構出土状況図	123	Fig.91	A-4 調査区遺構配置図	202
Fig.52	J-45 グリッド出土遺物実測図	124	Fig.92	鉄道石垣平面実測図	203
Fig.53	J-47 グリッド出土遺物実測図	125	Fig.93	A-4 調査区近世・近代初頭遺構配置図	205
Fig.54	J-48 グリッド出土遺物実測図	125	Fig.94	S001～004・005・006・007・016・017・ 018・019 実測図及び堀出土遺物実測図	208
Fig.55	I-45～J-46 グリッド出土遺物実測図	125	Fig.95	S028 平面・断面実測図出土遺物実測図	209
Fig.56	S002 出土遺物実測図	126	Fig.96	S008・009・010・012・013・014 実測図及び調査区土層断面図	210
Fig.57	S006 出土遺物実測図	127	Fig.97	S020・021・022・023・024・026・ 029 実測図	214
Fig.58-59	包含層出土遺物実測図 (1)～(2)	128	Fig.98	S015・025・027 遺物出土状況及び 土層断面実測図	215
Fig.60	A-2 調査区遺構配置図	150	Fig.99	S030 平面及び S015・030 土層断面 実測図	219
Fig.61	S001 (暗渠) 平面実測図	152	Fig.100	S030 出土頭蓋骨実測図	220
Fig.62	S001 部分掘削部平面・断面実測図	153	Fig.101	E-12・13 グリッド南端トレンチ 遺物出土状況及び出土遺物実測図	221
Fig.63	S002・S004 実測図	154	Fig.102	S003・S007 出土遺物実測図	223
Fig.64	S003 遺物出土状況実測図	154	Fig.103	S015・S017 出土遺物実測図	223
Fig.65	S005 実測図	155	Fig.104	S025 出土遺物実測図	224
Fig.66	S001 (暗渠) 出土遺物実測図	157	Fig.105	S027 出土遺物実測図	225
Fig.67	S003・石垣東裏込め出土遺物実測図	157	Fig.106	F-14・15 グリッド出土遺物実測図	226
Fig.68	S005 出土遺物実測図	158	Fig.107	A-5 調査区遺構配置図	248
Fig.69	H-36 グリッド出土遺物実測図	158	Fig.108	A-5 調査区遺構配置図及び参道土層図	249
Fig.70	G・I-34・H-34～35 グリッド 出土遺物実測図	159	Fig.109	A-5 調査区土層図	250
Fig.71	H-35 グリッド出土遺物実測図	160	Fig.110	A-5 調査区エレベーション	255
Fig.72	調査区内遺構配置図	168	Fig.111	S001 (石垣) 実測図	256
Fig.73	石垣平面実測図	169	Fig.112	S002 (杭列) 実測図	257
Fig.74	A-3 調査区遺構配置図	172	Fig.113	S003・004・018 実測図	258
Fig.75	中央トレンチ土層断面図・ 参道土層断面図	173	Fig.114	S005 (道路硬化面) 実測図	259
Fig.76	S001・004・005・007・008・009・010・ 011・012・015・016・017・018 平面・ 断面実測図及び参道遺物出土状況図	174	Fig.115	S006・S019 実測図	260
Fig.77	S006・013・014 平面・断面実測図	177	Fig.116	S007・008・009・010・011 実測図	261
Fig.78	S019 平面・断面実測図	178	Fig.117	S012・013・014・015・016・ S017・020・021 実測図	262
Fig.79	1・2 トレンチ実測図	179	Fig.118	S001・003・004・005・006 出土遺物実測図	263
Fig.80	3・4 トレンチ実測図	181	Fig.119	S007・S011 出土遺物実測図	264
Fig.81	S001 出土遺物実測図	182			
Fig.82	S003 出土遺物実測図	183			
Fig.83	S005・006 出土遺物実測図	184			

Fig.120 S003・015・016 出土遺物実測図	265	Fig.134 スライス深度の模式図	320
Fig.121 S017 出土遺物実測図	266	Fig.135 タイムスライス結果	321
Fig.122 包含層出土遺物実測図	267	Fig.136 遺構分布推定図	325
Fig.123 工事立会対象工事図	281	Fig.137 遺跡の位置図	327
Fig.124 No.1 トレンチ北壁土層断面図	287	Fig.138 人骨の残存図	334
Fig.125 No.2 トレンチ南壁土層断面図	287	Fig.139 人骨出土位置図	341
Fig.126 高麗門・土塁・堀・参道推定図	292	Fig.140 人骨の残存図	352
Fig.127 調査位置図	308	Fig.141 花岡山・万日山遺跡群 A-6 調査区 P-193 ST-01 (女性・熟年) 出土状況実測図	355
Fig.128 地中レーダー探査測定概念図	311	Fig.142 熊本城下罹災範囲	368
Fig.129 波形記録の表現方法	311	Fig.143 熊本城下水没範囲	368
Fig.130 測線配置図	315	Fig.144 各調査区で検出した参道	406
Fig.131 記録例の測線位置	317	Fig.145 参道断面推定図	407
Fig.132 記録例①	318	Fig.146 高麗門・参道・堀・土塁復元図	408
Fig.133 記録例②	319		

表目次

Tab.1 新馬借遺跡・花岡山・万日山遺跡群 周辺遺跡一覧表	20	Tab.68 測線一覧・数量表	316
Tab.2-11 花岡山・万日山高麗門調査区 遺物観察表 (1) ~ (10)	59	Tab.69 資料数	328
Tab.12-15 新馬借 B 調査区 遺物観察表 (1) ~ (4)	96	Tab.70 出土人骨一覧	328
Tab.16-26 新馬借 A-1 調査区 遺物観察表 (1) ~ (11)	143	Tab.71 年齢区分	328
Tab.27-32 花岡山・万日山 A-2 調査区 遺物観察表 (1) ~ (6)	165	Tab.72 上腕骨計測値	330
Tab.33-40 花岡山・万日山 A-3 調査区 遺物観察表 (1) ~ (8)	198	Tab.73 脳頭蓋	333
Tab.41-52 花岡山・万日山 A-4 調査区 遺物観察表 (1) ~ (12)	240	Tab.74 顔面頭蓋	333
Tab.53-59 花岡山・万日山 A-5 調査区 遺物観察表 (1) ~ (7)	277	Tab.75 下顎骨	333
Tab.60 各調査区の出土瓦数	295	Tab.76 上腕骨	333
Tab.61 文様のある瓦の分類	297	Tab.77 資料数	342
Tab.62 刻印の分類 1	299	Tab.78 人骨一覧	342
Tab.63 刻印の分類 2	300	Tab.79 年齢区分	342
Tab.64 各調査区の泥面子総数	301	Tab.80 脳頭蓋計測値	345
Tab.65 古銭観察表	304	Tab.81 顔面頭蓋	345
Tab.66 銭貨観察表	304	Tab.82 鼻根部	346
Tab.67 地中レーダー探査装置の仕様	312	Tab.83 上腕骨計測値	346
		Tab.84 脳頭蓋	349
		Tab.85 顔面頭蓋	349
		Tab.86 鼻根部	349
		Tab.87 下顎骨	349
		Tab.88 上腕骨	350
		Tab.89 橈骨	350
		Tab.90 尺骨	350
		Tab.91 形態小変異の出現頻度	351

写真目次

巻頭カラー 1 熊本城と熊本城跡遺跡群

巻頭カラー 2 高麗門調査区

巻頭カラー 3 トレンチ断面に見る参道跡と堀の肩

PL.1-4	調査検討委員会の様子 (1) ~ (4) ……	11	PL.81	排水路工事掘削確認状況 ……	283
PL.5-6	現地説明会の様子 (1) ~ (2) ……	12	PL.82	高麗門南側橋台検出状況 (右側に別石垣) ……	283
PL.7-8	高麗門調査区遺構写真 (1) ~ (2) ……	50	PL.83	出土した石 ……	283
PL.9	参道トレンチ調査区遺構写真 ……	52	PL.84	石に残る矢穴の状況 ……	283
PL.10-15	高麗門調査区 遺物写真 (1) ~ (6) ……	53	PL.85	堀跡埋土状況 ……	283
PL.16-18	新馬借 B24 調査区 遺構写真 (1) ~ (3) ……	89	PL.86	橋台・水路・桁橋の配置状況 ……	283
PL.19-22	新馬借 B23・24 調査区 遺物写真 (1) ~ (4) ……	92	PL.87	天井石出土状況 ……	284
PL.23-25	新馬借 A-1 調査区 遺構写真 (1) ~ (3) ……	131	PL.88	左壁の石垣出土状況 ……	284
PL.26-34	新馬借 A-1 調査区 遺物写真 (1) ~ (9) ……	134	PL.89	道路側石垣の断面状況 ……	285
PL.35	S001 西側壁面 ……	153	PL.90	A-2 調査区 S001 (暗渠) 天井部石材 ……	285
PL.36	S001 東側壁面 ……	153	PL.91	A-2 調査区 S001 (暗渠) 構造変化状況 ……	285
PL.37	花岡山・万日山 A-2 調査区遺構写真 ……	161	PL.92	A-2 調査区 S001 (暗渠) 内部状況 (1) ……	285
PL.38-40	花岡山・万日山 A-2 調査区 遺物写真 (1) ~ (3) ……	162	PL.93	A-2 調査区 S001 (暗渠) 内部状況 (2) ……	285
PL.41-44	花岡山・万日山 A-3 調査区 遺構写真 (1) ~ (4) ……	189	PL.94	墓壇検出状況 ……	288
PL.45-49	花岡山・万日山 A-3 調査区 遺物写真 (1) ~ (5) ……	193	PL.95	人骨検出状況 ……	288
PL.50	中央トレンチ土層状況 ……	201	PL.96	出土泥面子 (1) ……	303
PL.51	調査区南側壁 (堀部) 土層堆積状況 ……	201	PL.97	出土泥面子 (2) ……	303
PL.52	S031 第 1 硬化面 (北から) ……	206	PL.98	出土銭 (表) ……	303
PL.53	S031 第 2 硬化面 (北から) ……	206	PL.99	出土銭 (裏) ……	303
PL.55-57	花岡山・万日山 A-4 調査区 遺構写真 (1) ~ (3) ……	227	PL.100	暗渠状遺構の発掘状況 ……	309
PL.58-67	花岡山・万日山 A-4 調査区 遺物写真 (1) ~ (10) ……	230	PL.101	地中レーダー探査測定状況 ……	310
PL.68-71	花岡山・万日山 A-5 調査区 遺構写真 (1) ~ (4) ……	268	PL.102-104	花岡山・万日山 A-4 調査区 S030 ……………	335
PL.72-76	花岡山・万日山 A-5 調査区 遺物写真 (1) ~ (5) ……	272	PL.105	花岡山・万日山 D-13 グリッド ……	338
PL.77	夜間工事立会 ……	282	PL.106	新馬借遺跡工事立会 (ST-01) ……	339
PL.78	配石遺構検出状況 ……	282	PL.107-108	花岡山・万日山遺跡群 A-6 調査区 P-193 ST-01 ……	353
PL.79	人骨及び墓壇検出状況 ……	282	PL.109	寛永年間製作 熊本屋舗割下絵図 ……	360
PL.80	掘削状況 ……	282	PL.110-111	新町通り ……	362
			PL.112	中津城 (幕末) ……	362
			PL.113	中津城 (寛文 3 年以前) ……	362
			PL.114	加藤氏代熊本ノ図 ……	364
			PL.115	熊本屋舗割下絵図 ……	364
			PL.116	平山城肥後国熊本城廻絵図 ……	364

PL.117	肥後国熊本城廻之絵図	364	PL.159	No.3 トレンチの根切り状況	392
PL.118	熊本之図	365	PL.160	No.6 トレンチ土層断面と根切り状況	392
PL.119	熊本城下絵図	365	PL.161	通路西側の石組排水溝	393
PL.120	熊本惣絵図	365	PL.162	現在の桁橋	393
PL.121	熊本府の絵図	365	PL.163	桁橋の詳細と水制（水切り）	393
PL.122	高麗門 塩屋町之絵図	366	PL.164	桁橋下部の石組み（床石）	394
PL.123	高麗門 塩屋町絵図	366	PL.165	桁橋の橋脚・梁材に残る矢穴	394
PL.124	高麗門 塩屋町絵図	366	PL.166	高麗門の檜石垣（黒塗り）と堀	394
PL.125	高麗門 塩屋町之絵図	366	PL.167	明治期頃の桁橋と堀	394
PL.126-127	中津城土塁	370	PL.168	石橋石材に刻まれた刻印	394
PL.128	加藤時代の高麗門 「熊本屋舗割之下絵図」	371	PL.169	細川家菩提所・妙解寺参道橋	396
PL.129	高麗門	371	PL.170	同左. 石橋の梁石材に残る矢穴	396
PL.130	細川時代の高麗門	372	PL.171	天草市祇園橋	396
PL.131	高麗門から妙解寺までの御参道	372	PL.172	同左. 祇園橋の四角柱橋脚	396
PL.132	「西南ノ役」前の高麗門	373	PL.173	人吉城御館御門	396
PL.133	江戸時代末期の高麗門	373	PL.174	同左. 御館御門橋の八角柱橋脚	396
PL.134	熊本屋舗割下絵図	376	PL.175	熊本城の西埋門	397
PL.135-148	妙解寺御門外図	383	PL.176	同左. 西埋門内部の角材と矢穴	397
PL.149	高麗門付近	387	PL.177	本妙寺参道の鉤形文	397
PL.150	妙立寺参道	387	PL.178	熊本城桜橋の鉤形文	397
PL.151	妙永寺馬場	387	PL.179	熊本屋舗割下絵図	402
PL.152	安国寺馬場	387	PL.180	絵図中の高麗門	402
PL.153	高麗門西側の石垣と堀	390	PL.181	古写真に見る高麗門	402
PL.154	東側石垣の構築状況	391	PL.182	高麗門・新三丁目御門	409
PL.155	同石垣の構築状況	391	PL.183	新三丁目御門	409
PL.156	No.1 トレンチの土層断面	392	PL.184	新三丁目橋から見た参道	410
PL.157	No.1 トレンチの根切り状況	392	PL.185	新三丁目橋から見た参道	412
PL.158	No.3 トレンチの土層断面	392	PL.186	296 塩屋町の絵図	412

第 1 章

調査の概要

第1節 調査に至る経緯

1 調査の契機

平成3年から本格的に始まった九州新幹線建設事業に伴って、J R鹿児島本線の立体交差事業も始まり熊本駅及び周辺の整備事業は、平成13年から始まった。さらに田崎から上熊本付近にかけては新幹線とほぼ平行して走る路線の高架化および駅舎の建替が行われることになった。

この事業が推進される過程で埋蔵文化財の取り扱いについて、県の都市計画課新幹線都市整備室（現在鉄道高架推進室）と文化課の間で協議を平成10年から行ってきた。新幹線事業を進める過程でこの区間で遺跡とされた対象地域は、主に調査第一係で協議・調査を行った。その一方で在来線については、第二係が主に対応してきた。対象地域がほぼ平行するため新幹線事業での協議・調整・調査の終了の後を追う形になった。

その中で、新幹線事業において問題となった国指定史跡「妙解寺跡」及び周辺の景観、埋蔵文化財に影響を与える工事については新幹線の橋脚を設計変更することで切り抜けたが、同時にJ R在来線工事も影響を受けた。その他の新幹線路線上に位置する埋蔵文化財については用地買収の状況を見ながら随時試掘・確認調査を行うこととなった。

新幹線事業における試掘・確認調査の結果、花岡山・万日山遺跡群の範囲で4箇所、新馬借遺跡及びその隣接地で1箇所の本調査を行うこととなった。

その調査で、新馬借遺跡隣接地において、道路跡を確認した。これは江戸時代の絵図や現在の土地の状況から、智雄院（妙永寺）へと至る道と推定できる。現在もその確認した道の延長上に妙永寺へ延びる道があり、その方向と同じである。また、妙解寺跡付近で行った調査の際にも道路跡を検出している。これは直接妙解寺へと続く道と考えられ、現在、存在する道の方向と繋がっている。

道路跡（参道）は、新幹線建設前の市道と今回調査したJ R鉄道部分と重なっていたと考えられたが、新幹線建設事業の際にはまだ用地交渉やそれに伴う道路の付け替え工事が不十分であったため、調査時期を十分確保することができず、先に述べた部分を除いて調査が困難であった。同時に高麗門踏切より北側に存在したと考えられる堀跡も確認できなかった。

新幹線が完成し、その関連事業としてJ R鹿児島本線等の高架化事業が始まった。この事業では、J R路線のうち、崇城大学前駅の南側から熊本駅南側付近までの全長約6 km間を高架化する事業である。そのほとんどが新幹線の路線に並行して高架化するため、新幹線事業において本調査を行った部分はほぼそのまま調査範囲とした。その一方で新幹線事業地の東側に当たるため、江戸期の絵図などからその付近に存在したとされる高麗門、土居、堀、妙解寺参道などがどの程度地下（J R用地内）に残されているか確認する必要があった。

そこで熊本県土木部都市計画課、工事担当のJ R九州、熊本県文化課の三者で協議し、文化課が事前の調査を実施することになった。

2 一次調査

一次調査は、遺跡の有無を確認するため、平成23年6月から9月初旬にかけて実施した。

その結果、北は一新踏切から南は下馬天神踏切の間の400 mに渡って弥生時代後期の遺物と竪穴遺構、近世の遺物や石垣など良好な遺構の存在が確認できた。とくに高麗門が想定された高麗門踏切北側では、門跡につながるような遺構や遺物の出土があった。（平成24年4月6日付教文第36号及び平成24年6月15日付教文第656号で通知）

一次調査結果を元に熊本県土木部と文化課は協議し、「高麗門」関連と考える遺構が出土した高麗門踏切



Fig.1 JR鹿児島本線高架化事業工事図

北側と細川家の菩提寺である妙解寺までの参道が想定される高麗門踏切南側についてはさらに調査を進めることとした。また、検出された遺構が特別史跡「熊本城跡」とも関連する可能性が高かったので、考古学、建築学、文献学等の専門家を委員とする「検討委員会」を設置し、調査成果の是非、妥当性を審議してもらうことも土木部と合意した。

一方、橋脚の建築工期が迫っていた一新踏切直南側の橋脚 P171 については、直接「熊本城跡」に関係しない弥生時代の遺構・遺物を確認であったことと遺構密度、工事工程等勘案し、緊急に本調査を実施することとし、平成 25 年 3 月末までに終了した。

3 二次調査

二次調査は、平成 24 年 11 月 7 日から平成 25 年 3 月 8 日まで実施した。北は「高麗門跡」想定調査区を含めた高麗門踏切北側約 30 m 付近から、南は下馬天神踏切南側の坪井川が L 字状に屈折する付近までを範囲として調査した。

その結果、旧鉄道に係る石垣列を高麗門踏切から下馬天神踏切までの範囲で確認した。その石垣列で挟まれた部分で参道の一部と堀の土手に係る部分と、その東側に堀の一部を確認した。また、高麗門踏切の北側で発見した石垣もその範囲を確認することができた。「高麗門」想定地の石垣で囲まれた部分では、建物の土台である版築土層を確認した。さらに慶長期の銘を持つ瓦など関連遺物も出土した。

そこで、その結果を検討委員会にかけて審議した結果、確かに「高麗門」に関係する遺構が確認でき、「参詣道」「堀」などの遺構がまだ地下に残っていることが確認できたため、この場所が特別史跡「熊本城跡」を含めた惣構の西側の端を示す重要な近世遺構をもつ遺跡であり、将来に残すべき遺跡であると文化課へ答申された。

その結果を受けて、文化課としては平成 24 年 4 月 6 日付けで調査結果を報告した。さらに土木部都市計画課から知事名で提出された文化財保護法第 94 条に基づく埋蔵文化財包蔵地における発掘の通知に対し、平成 24 年 7 月 17 日付教文第 590 号で教育長から土木部長への勧告として、高麗門踏切より北側の高麗門推定地については現地保存、高麗門踏切から下馬天神踏切までの区間についてはできる限り現地保存をするように回答を行った。

それに対して、事業主体である土木部都市計画課及び JR 九州は、高架化事業計画の見直しを行い、工事内容を変更した。すなわち高麗門踏切北側については、高麗門推定地を外した橋梁の仕様として、現地での保存を行うこととした。また、高麗門踏切南側では、基礎部分を全面掘削する工法から、地上部の橋脚 1 本ごとに必要な範囲のみの最小限掘削にとどめる工法に変更し「参道」をできる限り残す方向で設計を変更した。それに伴い、工事費の増額と工事期間の延長を県に求めることとなった。県はそれを了承し、現地保存と一部保存ができることとなった。

しかし、「高麗門跡」北側の橋梁部である新馬借遺跡、高麗門踏切南側の橋梁 4 箇所については工事によって破壊されるため、その箇所の本調査は実施する必要があった。

ところが、高麗門踏切付近及び南側の本調査対象地については、遺跡地図上では周知の埋蔵文化財包蔵地となっていなかったため、熊本市の文化財保護部局と協議し、「高麗門跡」、「参道」については新幹線を挟んで高麗門踏切の北側までを「花岡山・万日山遺跡群」の範囲を拡幅し、平成 24 年 7 月 4 日付け教文第 811 号で遺跡地図の変更を行った。

その後、平成 24 年 8 月 10 日付で駅整第 86 号熊本駅周辺整備事務所長から発掘調査の依頼が文化課あてに提出され、平成 24 年 8 月 22 日付で文化課長から文化財保護法第 99 条に基づく埋蔵文化財の発掘調査の通知を教育長へ提出し、平成 24 年 9 月 5 日から本調査を開始した。新馬借遺跡について平成 23 年度に引き続き、平成 24 年 5 月末から本調査を実施した。

第2節 三次調査の経過

1 全体計画

工事と調査工程に関しては文化課、J R九州株式会社（J V含む）・都市計画課都市整備総室との三者間で協議しながら、工事工程を勘案しながら予算・調査工程を詰めていった。その結果、新馬借遺跡（一新踏切～高麗門踏切間）を平成24年8月までに調査完了を、さらに高麗門踏切～下馬天神踏切間を平成24年11月までに調査完了するというこゝでまとまった。工事工程との調整により調査期間の短縮などの可能性はあったし、実際そのようにならざるを得なかった。

工事工程を基に発掘調査体制を、4班投入することとした。さらに高麗門踏切北側では大きく2班、高麗門踏切以南に至っては4班とした。実際には工事工程から考えられる調査期間に対してその数の調査班では無理があるため、民間調査機関をもあわせて利用することとした。

2 調査体制

平成23年度に行われた一次調査・二次調査の体制は以下のとおりである。

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 小田信也（文化課長）
調査総括 西住欣一郎（主幹兼調査第二係長）
調査事務 川上勝美（課長補佐）
水元敬浩（高校教育課主幹兼文化課総務係長）
山田京子（高校教育課参事）
調査担当 廣田静学、木村元浩（参事）、後藤克博（文化財保護主事）
浦辻栄治、川俣幸次、上土井朋美（非常勤職員）

平成24年度に行われた本調査の調査体制は以下のとおりである。

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 小田信也（文化課長）
調査総括 西住欣一郎（課長補佐）
岡本真也（調査第二係長）
調査事務 川上勝美（課長補佐）
中津幸三（施設課課長補佐兼文化課総務係・助成係担当）
松尾康延（施設課参事）
稲本尚子（施設課参事）、天草英子（施設課主任主事）
調査担当（新馬借遺跡B調査区）
山下義満（参事）、宮本 大（文化財保護主事）
宮川香織、桑島幸平、土野雄貴（非常勤職員）
（新馬借A-1調査区・花岡山・万日山遺跡群）
坂田和弘（参事）、尾崎潔久、宮本 大（文化財保護主事）
浦辻栄治、土野雄貴、川俣幸次、宮川香織、桑島幸平（非常勤職員）
調査委託 測量・調査委託 株式会社 有明測量開発社
地下レーダー探査 応用地質株式会社
人骨鑑定 特定非営利活動法人 人類学研究機構

調査協力者 網田龍生・美濃口雅朗・金田一精・西川公夫（熊本市埋蔵文化財調査室）、
前川清一（元熊本県文化課課長補佐）、甲元眞之・北野 隆・稲葉継陽（熊本大学）、
松本寿三郎（元熊本大学）、高瀬哲郎（元佐賀県立名護屋城博物館）

3 調査作業の経過

三次調査では、二次調査の段階ではまだ遺跡名が確定していなかった箇所もあり、大まかに調査範囲を新馬借遺跡として、調査担当者間の取り決めで、一新踏切に近い箇所を新馬借遺跡B調査区（以下「新馬借B調査区」という。）、高麗門想定地以南を新馬借遺跡のA調査区（以下「新馬借A調査区」という。）という名称で呼んだ。平成24年度調査においても先行して開始した「新馬借B調査区」の名称はそのまま踏襲され、年度分けだけをして調査区名としては変えなかった。それを踏まえて、「高麗門跡」想定地北側に隣接する調査区も引き続き新馬借A調査区として、その調査区を前年度調査区との違いをつけるため、新馬借A-1調査区とし、その時点では高麗門踏切以南の4つの調査区を、順に北から新馬借「A-2」「A-3」「A-4」「A-5」調査区と呼ぶことにした。ところが、「高麗門跡」想定地より南側を「花岡山・万日山遺跡群」と遺跡名を後に設定したため、「高麗門跡」想定地の北側の調査区はそのまま「新馬借A-1調査区」としたが、高麗門踏切以南の調査区は「花岡山・万日山A-2調査区・・・A-5調査区」と名称を変えた。そのため煩雑にはなったが、調査時には特に支障はなく、整理作業もそのままで行ったので、今回の報告でもそのまま使用することとした。以下、この調査区名称を使って調査作業の経過を述べる。また、今後の調査報告においても同様である。

新馬借B調査区では、平成23年12月9日より調査に入り、表土剥ぎをまず行った。当初は、一定の調査範囲を平成24年度まで10ヶ月をかけて行う予定であった。ところが、JR工事の都合から一新踏切側の1橋脚のみを先行して終了し、工事終了後に前年度の続きを調査することとなった。工事のために埋め戻し作業まで平成23年度末中に文化課で行った。

平成24年度は4月当初に本調査に入る予定であったが、前年度末の橋脚工事の進捗が予定通り進まず、調査に入れる状況になく、再び調査に入ることができたのは5月末からであった。先の橋脚工事は本体工事に移り工事ヤード及び緩衝地を確保されたため、本調査も一度に表土を剥いで進めることができず、2回に分けて掘り返しながら調査を進めざるを得ず、本調査が遅れる要因にもなった。

その後調査では、近世の土塁の盛り土に関係する版築や配石遺構を確認し、弥生時代の出土層から焼土坑や土器等を確認し、8月30日までに調査を終了した。

新馬借A-1調査区は、新馬借B調査区の調査開始より遅れて6月に調査工程を再度組みなおし、7月9日より表土剥ぎを始めた。そして、調査期間はA-1調査区が平成23年7月～8月まで、高麗門踏切より南側の調査区を全て8月～11月までとなり、非常に圧縮した期間となった。そこで、途中、民間調査機関を導入することで調査効率を上げて対応することとした。

平成24年6月上旬より新馬借B調査区の表土剥ぎに入る。

当初は梅雨の初めで雨天も多く作業の進捗が思わしくなかった。特に工事工程に発掘調査を合わせる状況が続き、北側の橋脚（ピア）工事を先行するため、調査予定地の南側から表土を剥ぎ、本調査を進めざるを得なかった。工事終了後に先に調査した箇所を埋め戻し、改めて北側の表土剥ぎを行った。その調査の合間を縫って、排水路工事の立会いも行った。夜間立会いも含め、30日間を要した。

一方、高麗門調査区北側の新馬借A-1調査区の調査は埋蔵文化財保護措置のための設計変更・工事工程の見直し作業が遅れ、調査体制は整っていたが、本調査は7月まで入れなかった。工事工程の都合から11月末には調査を終了させる必要があった。調査工程も大きく見直す必要があった。

その後、新馬借B調査区の調査では、熊本城外郭に当たる土塁の盛り土の確認、それに関係すると考えられる石敷き遺構、それに先立つ中世の溝遺構、弥生時代後期の遺構と遺物の検出があった。

A-1 調査区では高麗門調査区北側に隣接し、「高麗門」の廃棄物を思わせる多量の瓦群の出土、堀の肩部・斜面の検出、土塁は確認できなかったもののそれに先行する中世末の遺構、遺物の出土などがあった。

調査は共に、平成24年8月30日をもって終了し、9月4日に埋め戻して完了した。

花岡山・万日山遺跡群の調査区は、掘削される4箇所のピア位置に合わせて、先に述べたように大きく4つの調査区を設定し、花岡山・万日山A-2調査区～A-5調査区とした。

表土剥ぎは、調査現場が鉄道路線上で細長く、排土作業も踏切幅に余裕のある高麗門踏切の一方からしかできなかった。表土剥ぎは事務的な手続きを効率化するため、前半の2箇所は県が、残り2箇所をJR側でそれぞれ2回に分けて行うこととなった。

第一回表土剥ぎはA-5調査区を平成24年9月4日から開始した。9月6日には、A-4調査区の表土剥ぎを開始した。9月7日に1回目は終了し、周辺整備を行いながら現場環境を整えた。それが済み次第A-5調査区から調査に入った。

第二回目の表土剥ぎは9月10日から開始し、A-3調査区、A-2調査区の順で行った。9月11日には全て終了した。

調査は、A-4調査区、A-5調査区から精査作業を開始し、A-3調査区、A-2調査区も表土剥ぎ後、順に精査に入った。4調査区が平行して作業を行うことになった。ただ、調査員数の制約から一度に平行して行えるのは3調査区で、A-2調査区は攪乱が多いということもあり、調査区の作業の合間を縫って行うことになった。

A-5調査区では線路敷きの下に、土坑、参道跡、堀の肩などを調査の過程で確認した。

9月には、堀と考える調査区東側の落ち込みを調査の主体として取り組んだ。湧水がひどいため、ポンプアップが欠かせなかった。掘削場所が狭く、作業員が数名入れるのみであったので、作業の進展は遅かった。結果的には丹念に調査ができたことで、堀の落ち際に粘土層を形成していたことを確認した。

また、参道の近世の最終面付近で砂層を確認し、これが西南戦争の際の水攻めの跡とした。また、西側の鉄道に隣接した土層断面にも参道の続きを確認し、参道が西側の新幹線の場所、即ち旧市道下にも続くことを確認した。全体の調査の遅れを補うため、民間調査組織を11月から導入し、11月末には終了した。

A-4調査区では参道中に掘削された土坑を確認し掘削した。参道の肩付近に広がる溝状遺構を掘削した。その下層に予想された加藤期の道を目指し掘削を進めた。結果的に加藤期とされる硬化面は調査区北側でのみ確認した。その後、加藤期の堀の可能性のある溝状遺構を掘り下げ、その掘削が中世まで遡り、近世の始め頃までに埋没もしくは埋められたことを確認した。

堀の掘削が進めると同時に、参道の肩を確認しようと努めたが、ちょうど鉄道敷設に伴う石垣により確認できなかった。ただ、掘削精査時に堀の斜面に掘削されていた土坑から韃の羽口と銅滓を多量に検出した。また、土人形や泥面子とその型も出土した。

調査はA-5調査区と同様民間調査組織を導入し、11月末には終了した。

A-3調査区は、表土剥ぎ後の精査を行い、全体的に土層の確認を行った。その結果、参道跡と考えた鉄道敷き下の本来の土層はほとんど砂で平野部の砂堆積によって形成されていることがわかった。そのため、参道の形成にあたって粘質土がかなり持ち込まれていた状況があった。断面で確認した多くの土坑の土層を観察すると何度も流れては埋め、そのたびに補修した痕跡が1cm幅の間隔で土層が形成していることから分かった。

10個以上のこのような土坑があったが、他の調査区とは明らかに埋没層の違いが大きいのは本来の堆積層の違いによるものであろう。

ここの調査区ではこのような参道を補修する場合のやり方がよく分かる状況であった。

A-2 調査区は、半分が旧市道であったことから地下の埋設物が多く攪乱が進んでいた。また、鉄道に伴う施設の埋設や撤去によっても破壊されていた。調査はそのような攪乱の撤去から始まった。攪乱も時期差があり、その前後関係を明確にしながら掘削した。そのような調査の中で、調査区東側で表土剥ぎの際から確認していた石組遺構を精査していくと、高麗門との関係があるのではないかとされる遺構を検出した。ただ、精査をしていくと暗渠施設ではないかと考えられた。しかしながら、内部の状況が不明なため、明確な時期判断ができなかった。そこで、削岩機で天井の柱状石を割ってみようとしたが、人力では限界があったため、ブレーカーを使って破壊して内部を見ることにした。精査している時点で内部にコンクリートが流し込まれていることが分かっていたが、重機による掘削でもかなり厚くコンクリートが流し込まれていたため、目的範囲を掘削するだけでも時間を要した。破壊した部分の精査を行うと、コンクリートの下には泥炭が厚く堆積していた。それを数人の作業員を使って徐々に除去したところ、石垣壁と底近くまで掘削できた。

石垣の形状から明治以後のもの確認でき、用途も暗渠であることが確認できた。

このほかに、いくつかの土坑と時期不明の道路跡を確認し、11月末に調査を終了した。

発掘調査は、全体的にほぼ11月末で終了した。

一方で、調査期間中に工事立会も合わせて行っている。その状況及び成果は、第3章に記載する。

4 調査検討委員会

平成24年度の調査では、いずれの調査区も工事により遺跡が失われる部分であり、これまでの一次・二次調査でのトレンチ調査より広い面的範囲での調査ができるため、限られた調査のみでは得られなかったデータが得られる。この調査によって遺跡の詳細もはっきりしてくるため、調査方針や成果の検討を必要とし、平成23年度に続き調査検討委員会を発足させた。

委員会委員は、前回に引き続き、以下のとおりとした。

- | | |
|-----|------------------------|
| 委員長 | 甲元 眞之（熊本大学永青文庫研究センター長） |
| | 松本寿三郎（熊本大学名誉教授） |
| | 北野 隆（熊本大学永青文庫研究センター教授） |
| | 稲葉 継陽（熊本大学文学部教授） |
| | 高瀬 哲郎（石垣技術研究機構） |

年二回開催することとし、調査途中（10月11日）と調査終了近く（11月21日）に実施した。

第一回目の検討委員会では、新馬借遺跡の調査成果、花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区～ A-5 調査区にかけての調査途中の経過報告を行った。

第二回目では、第一回検討委員会で解決できなかった問題点、及び今後必要な調査の方針を決定した。

以下に二回目の検討委員会協議事項等を記す。

- 1) 細川期の「参道」を面的に確認
- 2) 「参道」の東側に堀を確認
- 3) 加藤期の道と考えられる A-4 調査区の硬化面を確認
- 4) 鉄道整地層と「参道」層との間で西南戦争の痕跡を確認
- 5) A-2 調査区の石組遺構は明治以降のもの

今後の措置としては、

- ・今回本調査を実施した箇所については、次年度報告書としてまとめること。
- ・橋脚工事によりさらに破壊が進まないように、残された遺跡については細心の注意を払い、工事施工

に当たっても、地下に影響が及ばない措置をとること。

- ・残った「参道」については、将来の活用を考慮しつつも保存措置を十分考えること。
- ・A-2 調査区出土の石組遺構については、明治 10 年以降のものであり、工事に着手して差し支えない。

1) 細川期の「参道」を面的に確認

A-3 調査区～A-5 調査区の 3 調査区では、明治 20 年代に築かれた単線の鉄道路を面的に連続して確認した。路線の両端には鉄道を保護するため石垣が組まれていた。さらに西側には側溝も石垣で設けられていた。この鉄道路の基礎は、厚く粘土状の土で整地され固くしまっていた。昨年度のトレンチ調査からその下に厚さ 10cm ほどの硬化面があることが確認されていたので、鉄道の整地層を除去したところ、硬化面が面的に鉄道路に沿って現れた。

この硬化面は、調査を進めるとかなりしっかり整地されたことがわかってきた。特に地盤が砂地で崩れやすい A-3 調査区では、崩壊するたびに整地され一定の高さを常に保とうと努力した跡が層の状況からつかめた。さらにどの調査区でも、土坑がいくつも掘削されその上を整地した状況があった。

このようなことから、確認した硬化面の広がりや道路とすると、長年に渡り維持管理されたことと、絵図等に描かれたものから細川期の「参道」であると確証した。

道幅については、鉄道路の幅では約 2 m までは確認できる。東側石垣の付近を道路の端として、新幹線建設前の旧道の西端までを復元すると、「参道」の幅は約 8 m と推定した。

2) 「参道」の東側に堀を確認

1) の道跡の東側は掘削を進めると深く落ち込んでいることが層的に確認できた。客土を丹念に取り除き、本来の地形に近い形に掘り下げると、東側石垣の外側からやや平地を残し急斜面として落ち込んで行く。調査区をできる限りの範囲で掘り下げたところ、現地表面から 2 m を超える深さにまで落ち込んでいくことが、A-3 調査区、A-4 調査区、A-5 調査区で確認できた。上部の大部分は近現代の遺物がほとんどであったが、2 m 近く掘り下げると遺物の量は少なくなった。しかし、この調査区の最下層は落ち込みの底までは到達していない。この落ち込みは、先の道路遺構とともに絵図に描かれた「堀」であると考えられる。

現況では、調査区の東側には側溝が流れているのみで「堀」の痕跡とするには細すぎる。そこで、江戸期の絵図を参考に調査区内の落ち込み、東側の「側溝」、その東側の公園や団地のある場所を地形的に観察すると、「堀」は調査区の落ち込みから、1 m ほど地形的に高くなる付近までであったと考えられる。このように考えれば、「堀」の幅は約 18 ～ 20 m ほどとなる。

3) 加藤期の道と考えられる A-4 調査区の硬化面を確認

細川期の「参道」以前の道路遺構は加藤期のものが考えられるが、今回の調査区でそれに当たるものとされたのが A-4 調査区の硬化層である。昨年度のトレンチ調査では、今回細川期の「参道」と確認した層の下に 1 層ほどの間層をおいて厚さ 10cm ほどの硬化層を確認した。一旦間層をおくことから時期の違いを想定し、加藤期の道と想定した。この硬化面について、今回の調査では面的なつながりを期待したが、北側でのみ面的な広がりを確認できただけで、A-3 調査区では地盤の性質から確認できず面的な広がりや十分つかめなかった。現妙永寺参道が A-3 調査区付近へ伸びているため、その延長を調査区内で確認したが、攪乱のためできなかった。一方、A-4 調査区でのみ確認できたことについては、当時の妙永寺参道が異なっていたか、さらに別の施設等のために伸びていたのか、現時点では特定できなかった。

4) 鉄道整地層と「参道」層との間で西南戦争の痕跡を確認

A-3 調査区、A-4 調査区、A-5 調査区では、鉄道整地層と「参道」層との間で砂層が確認された。A-5 調査区では厚さ 20mm～50mmを測り、A-4 調査区では厚さ 10mm～20mmを測る。A-3 調査区でも若干確認されたが、先の2調査区ほど明確ではなかった。A-3 調査区、A-4 調査区、A-5 調査区、どの調査区でも同じ層位で確認されたことから面的な広がりが確認された。

この層の形成に関して、西南戦争時に熊本城を落とすため水攻めが行われたことが知られており、この砂質層の存在は時期的に西南戦争の水攻めによって形成された層の痕跡の可能性があると考える。

5) A-2 調査区の石組遺構は明治以降のもの

A-2 調査区から出土した石組遺構は当初、単線の鉄道敷設に先行するとは想定されたが、いつのものか明確ではなかった。そこでこの遺構の性格と構築時期を探るため、天井と考えられる石柱の一部を掘削した。その結果、コンクリートの注入は鉄道複線化に当たり、この遺構を撤去するより補強することで残すために行われたことが分かった。

さらに先に撤去した石柱が実は天井部であり、その下部に石垣組による壁が築かれ、遺構全体として暗渠として作られていたことがわかった。時期的には、単線鉄道の建設前であるが、壁の石垣の組み方が谷積であることから近代、特に明治半ばに構築されたものと考えられた。したがって、この石組遺構（暗渠）は、保存の対象としないこととなった。



PL.1 調査検討委員会の様子（1）



PL.2 調査検討委員会の様子（2）



PL.3 調査検討委員会の様子（3）



PL.4 調査検討委員会の様子（4）

5 現地説明会等

平成23年度には二次調査の結果、良好な成果が得られたため、平成24年3月5日に地元新町の人々を中心に現地説明会を実施する旨を伝え、開催した。生憎の雨にも拘わらず、多くの参加者があった。「高麗門」の遺構の検出状況の説明、「参道」については当時「御成道」として説明を併せて実施した。その後、この遺構について地元を中心に保存すべき遺構という認識が広がっていった。

平成24年度は、調査地点が、現在運行している鉄道に隣接しているため、一般的に広く公開することは憚れたが、調査終了近く（11月27日）に地元の方々を中心に門戸を開くこととした。日を決めて、地元へ参加を呼びかけたところ興味を持たれた10名程の方が説明会に来られた。中には通りすがりに行事を知り参加された方もあった。

説明会では、それぞれの調査区の説明と、出土遺物の一部を展示した。特に遺物では「高麗門」に関する遺物に対し非常に多くの質問や問いかけがあった。

また、踏切付近からは調査状況を見ることはできるので、一般公開こそしなかったが、通行人から質問等があった場合は、できるだけ対応することとした。その結果、頻繁に現場を見に来られる地元の方もおられた。

地元新町では新町のさまざまな場所をめぐるツアーが行われ、その一つのコースとして遺跡を周りから見られることも行われた。



PL.5 現地説明会の様子（1）



PL.6 現地説明会の様子（2）

第3節 整理等作業の経過

整理作業は、調査終了後の平成24年度から開始した。ただ、年度途中からであったためうまく作業工程を組めず、整理作業は平成25年度から実質行った。

1 全体計画

整理作業は、平成25年度中に発掘調査報告書の刊行までを行うこととした。

一次整理は平成24年度から開始していたが、作業員の不足からわずかしか進展していなかったため、平成25年度に主な作業を行うこととした。

二次整理についても一次整理同様平成25年度に作業の中心をおくこととした。特に遺構からの出土遺物の状況を適切に判断し、工事により失われる遺跡の記録保存として十分成果を得られる報告書の作成を目指すこととした。

2 体制

整理作業・報告書作成までの体制は以下のとおりである。

調査主体	熊本県教育委員会		
調査責任者	小田信也（文化課長）		
調査総括	西住欣一郎（課長補佐） 岡本真也（主幹兼調査第二係長）		
調査事務	川上勝美（課長補佐・平成24年度） 馬場一也（課長補佐・平成25年度） 中津幸三（施設課課長補佐兼総務・助成係担当・平成24年度） 廣石哲也（主幹兼文化・総務係長・平成25年度） 松尾康延（施設課参事・平成24年度、文化課参事・平成25年度） 稲本尚子（施設課参事・平成24年度）、有馬綾子（主任主事・平成25年度） 天草英子（施設課主任主事・平成24年度、文化課主任主事・平成25年度）		
調査担当	坂田和弘（参事） 師富成香、永松 望（非常勤職員）		
委託業務	遺物整理作業	株式会社	有明測量開発社
	遺構トレース	株式会社	九州文化財研究所
	遺物実測作業	株式会社	イビソク九州支店
	人骨整理鑑定	特定非営利活動法人	人類学研究機構
調査協力者	甲元眞之・北野 隆・稲葉継陽（熊本大学）・松本寿三郎（元熊本大学）、 高瀬哲郎（石垣技術研究機構）、富重清治（富重寫真所）、 網田龍生・美濃口雅朗・金田一精（熊本市埋蔵文化財調査室）、 一般財団法人 永青文庫、熊本県立図書館、熊本大学永青文庫研究センター		

3 作業経過

一次整理作業（水洗・注記・接合）は、平成24年度12月から一部の水洗い・注記作業を始めた。一部業務を業者に委託したものの、多くがまだ翌平成25年度に持ち越すことになった。

平成25年度には、作業工程は組んだものの、思いのほか出土遺物量が多く、工程通りに作業が進行しなかった。そこで、作業員を緊急的に集め、集約的に作業を行うこととした。その結果、どうにか水洗い・注記・接合作業は進展した。終了したものから随時実測作業に使用する遺物の選別を行った。

二次整理作業は遺構などの整理、遺構図作成を行った。遺構図のトレース作業は整理体制が不十分であったため、業者に委託した。選別した遺物の実測作業等に備えて遺物の選別作業を行った。

期間的に厳しい業務状況であったため、民間業者に遺構トレースや遺物実測を委託して作業の効率化も図った。

分析の分野では、追加調査で出土した人骨を人類学ミュージアムの松下氏に原稿を依頼した。また、福岡市埋蔵文化財センターの蛍光X線解析装置及びX線透過装置を借用し、鉄器のレントゲン写真撮影、ガラス玉、埴塼等に見られる付着成分の分析を行った。鉄器のレントゲン写真では、錆により膨張したり、不純物の除去を進めることができたし、蛍光X線解析装置によって、墓から出土したガラス製の数珠の成分分析ができた。また、埴塼に付着したくずから埴塼で生成したものが何か予想ができた。

そのような過程を経ながら、報告書は平成26年3月に刊行した。

4 検討委員会の設置

本報告書を作成するに当たり、遺跡の重要性にかんがみ、調査時の検討委員会に諮ることも行った。

そこで再び専門調査委員会を設置し整理方法と合わせて報告書の記載内容について検討を行った。

なお、委員会委員は以下のとおりである。

- | | |
|-----|----------------------------|
| 委員長 | 甲元 眞之（熊本大学永青文庫研究センター長・考古学） |
| | 松本寿三郎（熊本大学名誉教授・日本近世史） |
| | 北野 隆（熊本大学永青文庫研究センター教授・建築学） |
| | 稲葉 継陽（熊本大学文学部教授・日本中近世史） |
| | 高瀬 哲郎（元佐賀県立名護屋城博物館） |

第 2 章

遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

熊本平野は、阿蘇外輪山西麓から西へ延びた肥後台地と南西部の沖積低地からなる。阿蘇周辺に降った雨水は台地に浸透し、豊富な伏流水となって肥後台地の端部に江津湖等の湧水地帯を形成する。また原白川・緑川によって運ばれた砂礫や火山灰土は、肥後台地端部に扇状地を形成し、さらに広大な沖積平野を形成している。沖積平野には、白川・緑川およびその支流の両岸に微高地が形成されている。近年、この微高地上での遺跡の確認が相次いでいる。

今回調査した熊本城跡遺跡群（新馬借遺跡及び花岡山・万日山遺跡群）は白川下流右岸に繋がる坪井川右岸の沖積平野に臨む丘陵地から広がる扇状地や微高地にかけて立地する。旧遺跡名である新馬借遺跡、花岡山・万日山遺跡群は熊本平野でも北に位置する熊本城北側の藤崎台の西側に広がる低湿地帯を抜けて流れる現在の井芹川と、東から蛇行してくる坪井川に挟まれた地帯の北側に位置する。本来地形的には低湿地帯を形成していた土地に盛り土を施し屋敷、寺を造営した。今回の調査に伴って水路工事の立会いに際して、地下の状況を現地地表下3m程度まで観察することができた。現在の地表下は地点ごとに土砂の堆積状況が多様で現地表面にある表土の下には粘質土、硬質のシルト層、砂層、その相互層が見られ、粘質土層、硬質シルト層がいきなり途中で層が途切れ砂層に変わったりする。これは沖積平野の特徴を示し、その層の合間に水を持った層がありいきなり湧水がある。排水路の基礎付近の地表下3mほどになるとこの地点でもほぼ安定した粘性土になるが、それが安定しているかは不明である。ただ、そこまで下げれば必ず湧水があったことも事実であり、一日置けば一定の深さまで水が溜まる。このことは、この湧水した水の付近までは水を持った層が存在すること示す。この深さは近世の堀の深さにほぼ一致し、水を引かなくともこの付近では湧水による水で、堀は水を湛えることができていた可能性がある。

今回の調査を行ったのは、JR鹿児島本線高架化事業に係る範囲で、旧JR鹿児島本線の線路下である。この鉄道は、緩扇状地上に立地し、調査時の標高は約10mである。住所表記上は熊本市中央区新町3丁目及び横手1丁目にまたがっている。

第2節 遺跡の歴史的環境

熊本城跡遺跡群の周辺遺跡は、井芹川右岸の金峰山から東へ延びる丘陵上、先端に熊本城を有する京町台地、南の二本木遺跡群が立地する扇状地にかけて濃密に分布している。沖積平野部の遺跡は現在ほとんど地形変化を見分けるのが困難であるが、微高地上に立地している。

旧石器時代の遺跡は、金峰山系の丘陵上に数箇所の遺跡が知られているが、平野部では確認されていない。

縄文時代早期の遺跡は、丘陵端部に立地するものが多い。野添平遺跡・島崎遺跡で、炉穴・集石等の遺構が確認されている。続く縄文時代前期から中期の遺跡としては、高橋町遺跡群の高橋貝塚が中期の貝塚としてわずかに知られているくらいである。この時期の遺跡は現在の地表面下の湧水面よりも下にあったという説もある。

縄文時代後晩期になると、再び丘陵上に遺跡がみられるようになり、島崎遺跡・石神原遺跡・戸坂遺跡・野添平遺跡・高橋町遺跡群上高橋高田遺跡等で遺物が出土している。千原台遺跡群は、第1次調査区で鐘ヶ崎式から黒川式までのほぼ全型式の土器が出土しており、拠点的な集落であった可能性が指摘されている。また、石神原遺跡では打製・磨製石斧が多量に採集され、島崎遺跡では太郎迫式から山ノ寺式までの土器が出土している。熊本城跡では鳥井原式がまとまって出土し、京町台地の先端部にも縄文時代の遺跡が存在しているようである。今回の本遺跡の調査区では1点も確認しなかったが、この地点自体に存在しないのか、

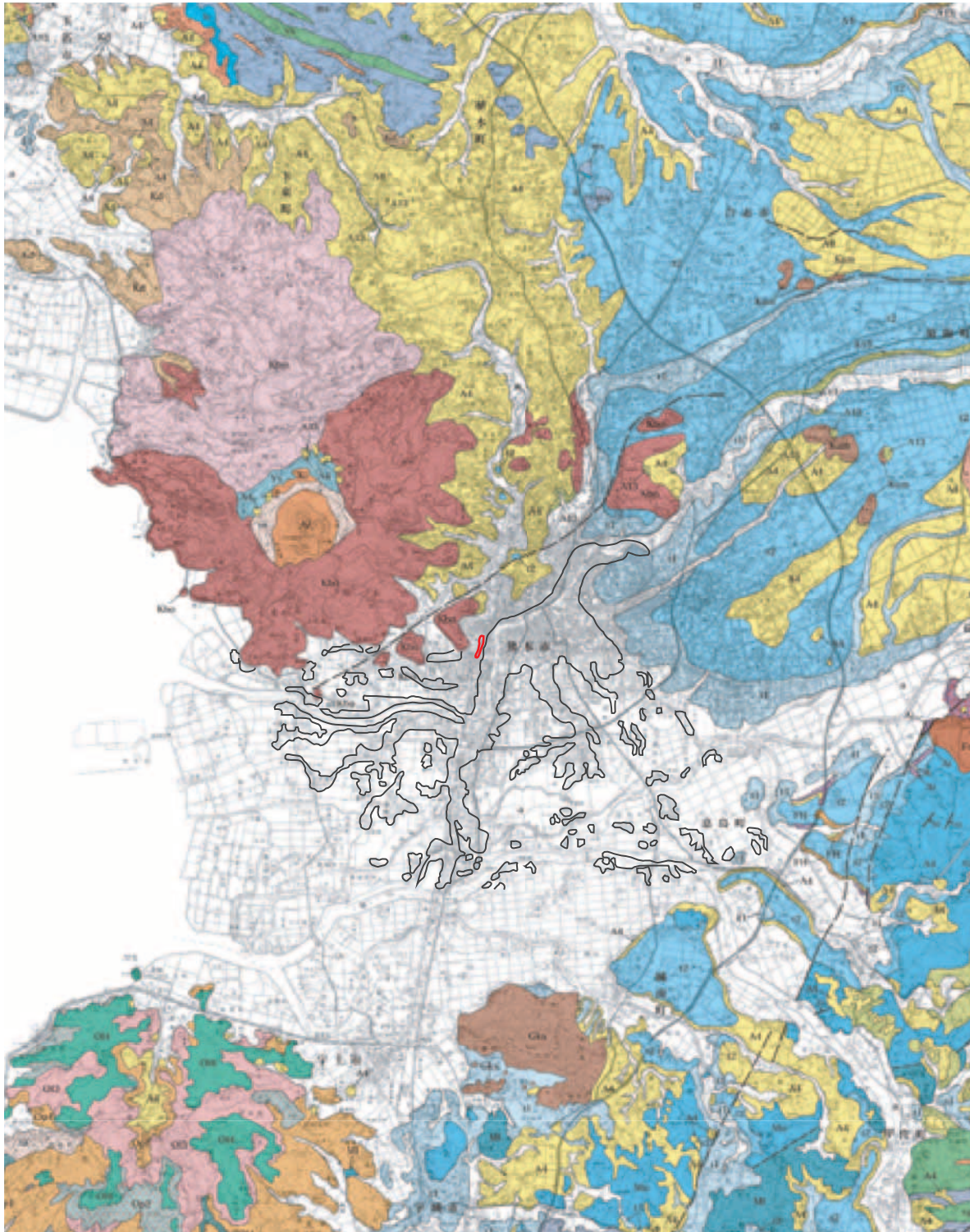


Fig.2 熊本市周辺の地質図 熊本県地質図（10万分の1）説明書（2008）より加筆引用

凡例

- A4：阿蘇-4 火砕流堆積物 Kbo：金峰火山古期噴出物 A13：阿蘇-1～3 火砕流堆積物 t1：低位段丘堆積物 t2：中位段丘堆積物
 Ki：金峰火山新期堆積物 Ys：芳野層 ta：崖錐堆積物 Kbm：金峰火山中期噴出物 Kum：熊本層群 Ai：赤井火山（砥川溶岩）
 Mu：御船層群上部層 FH：布田層・花房層 MI：御船層群下部層 vg：苦鉄質火山岩類 cc：結晶質チャート um：超苦鉄質岩類
 Gks：雁回山層 O11：大岳古期輝石安山岩溶岩 O13：大岳新期角閃石安山岩溶岩 O14：大岳新期輝石安山岩溶岩
 Op1：大岳新期角閃石安山岩火砕岩 Op2：大岳新期輝石安山岩火砕岩



Fig.3 新馬借遺跡及びひ花岡山・万日山遺跡群

Tab.1 新馬借遺跡・花岡山・万日山遺跡群周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	内容
1	野添平遺跡	縄文時代
2	戸坂遺跡	縄文時代、弥生時代、古代
3	千原台遺跡群	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代
4	石神原遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代
5	迎田遺跡	弥生時代
6	熊本城遺跡群	熊本城跡・古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋横穴群・茶臼山廃寺跡・藤崎宮跡・段山遺跡/縄文時代、古墳時代、古代、中世、近世、近代
7	藤園中学校校庭遺跡	弥生時代
8	花畑邸跡	近世
9	山崎古墳	古墳時代
10	辛島町遺跡	古墳時代
11	本庄遺跡	縄文時代、古墳時代、古代、中世、近世
12	古町遺跡（唐人町遺跡）	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世
13	船場町遺跡	新町2丁目甕棺遺跡/弥生時代、古代、近世
14	新馬借遺跡	古代、中世
15	吉祥寺横穴群	古墳時代
16	花岡山・万日山遺跡群	花岡山箱式石棺群・万日山古墳・万日山東古墳・万日山山頂古墳・万日山古墳参考地・妙解寺跡/古墳時代、中世、近世
17	二本木遺跡群	二本木国府及び関連遺跡・春日町遺跡・田崎本町遺跡・古町小学校校庭遺跡・延命寺塔心礎跡/弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世
18	石塘遺跡	近世
19	本山城跡（本庄城跡）	中世
20	世安池田遺跡	古代、中世
21	八島町遺跡	弥生時代、古代
22	道城方遺跡	弥生時代
23	南新宮遺跡	弥生時代、古代、中世
24	平田町遺跡	弥生時代、古代

今回の調査で到達しなかったさらに深い位置にあるのか不明である。

弥生時代の前期の遺跡はあまり確認されていないが、本調査区のA-4調査区から夜臼式か板付I式の丹塗り壺が1点出土した。その他には出土していないため、他の場所からの流れ込みか持ち込みの可能性はある。弥生時代の後期になると集落遺跡が急増し、発掘調査が行われただけでも千原台遺跡群・石神原遺跡・戸坂遺跡・古町遺跡・八島町遺跡・平田町遺跡などで竪穴住居群が確認されている。今回の調査では、後期の土器が一新小学校近くの新馬借遺跡B調査区からかなり多量に出土している。また、A-3調査区からも若干出土している。特に、新馬借B調査区での出土状況から集落跡に伴う何らかの遺構の資料と思われるが、今回の調査では遺構そのものは確認できなかった。

古墳時代の遺跡は、周辺に多く存在し、花岡山・万日山遺跡群・高橋町遺跡群・上代町遺跡群等で遺構・遺物が出土している。今回の調査では古墳時代に含まれる資料は確認できなかった。

古代には、熊本駅周辺を中心とする二本木遺跡群で一大中心地として生活痕跡としての遺構・遺物が非常に多く検出できるようになる。二本木遺跡群は、春日屯倉の想定地であったが、発掘調査で具体的な遺構は確認されていない。二本木遺跡群全体としては7世紀代から遺物がみられるようになり、8世紀後半から9世紀前半にかけて遺構・遺物が急増し、9世紀中葉以降は減少し、再び11世紀末から急増する。本庄遺跡第1次調査区、本庄遺跡（熊本大学埋蔵文化財調査室調査）、京町台遺跡群第1次調査区、戸坂遺跡第1次調査区、古町遺跡第4・5次調査区、高橋町遺跡群上高橋高田遺跡第1・2次調査区で、竪穴住居群等が確認されている。また、古町遺跡第5次調査区では、土坑墓が確認されている。しかし、出土する遺物の質・量、遺構の密度は、二本木遺跡群が他を圧倒する。

中世も、古代からの傾向を引きずり二本木遺跡群が有力である。特に12世紀後半から13世紀にかけての遺構・遺物の質・量からは、肥後国の中心地であったと言っても過言ではない。中世も後半になるとさすがに中心は移っていったようで遺構・遺物が減少する。発掘調査が行われた遺跡には古町遺跡、高橋町遺跡群上高橋高田遺跡、南新宮遺跡、本庄遺跡がある。南新宮遺跡第1次調査区では、12世紀代の土坑墓が確認され、湖州鏡が副葬されていた。

中世末戦国時代には国衆が肥後を闊歩し、隈本城の城氏、鹿子木氏などにより熊本の前身が形成されていく。この付近もその勢力下にあったのは間違いない。下馬天神のいわれである鹿子木氏がこの付近を押さえていた時期もあったのであろう。時期的にやや下るものの中世末の溝遺構や遺物が本調査区でも確認されている。

近世になると佐々成正の後を引き継いだ加藤清正による城下町整備のため、この地域は大きく変化を遂げていく。新町や横手村の寺の造営は、防衛という面でも大きな変化である。調査地付近には防衛のための土塁と堀が作られ、門によって城下と城外が分けられていく。城外の近辺には加藤家に縁のある人々の菩提寺を造営し、同時に防衛ラインとしても利用した。城下町として整備された古町遺跡・新町付近では近世前期以降の遺構・遺物が急増する。

続く細川氏の時代には加藤家の城下町造りを踏襲しながら、発展させていった。高麗門の周辺は人形町や細工町として手工業が盛んになり、その担い手が多く居住もしていた。特に江戸時代後期には産業の進展があったものと思われ、調査区から出土した人形やその雛形、鋳物に関する鞆羽口や鉄滓などにその状況が見てとれる。

明治時代になって御維新の名のもとに旧体制の産物である熊本城の廃城、さらに櫓の取り壊しなどが進められる。この明治初年頃に新三丁目御門、高麗門も相次いで破却されたものと考えられている。ただ、いつそれがなされたのか明確な記録は見つかっていない。この調査地周辺ではその後、1891年（明治24年）に熊本機関庫が設置され、1891年（明治24年）7月1日に九州鉄道の駅として、玉名-熊本間の延伸と

同時に鉄道が開業している。1907年（明治40年）7月1日には九州鉄道の国有化により国鉄の駅となっている。この鉄道の敷設によって今回の調査地の遺構が部分的に守られたことも事実である。その鉄道敷設の際に、立地的に条件の良い高麗門踏切付近に熊本駅舎を設ける計画があったという。しかし、地元の反対により現在の駅舎に建てられることになったようである。もし、その計画が実施されていれば、今回の遺構の確認に至らなかったし、高麗門や土塁、堀などの遺構も完全になくなっていた可能性が高い。

第 3 章

調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 一次調査の方法

一次調査は、第1章の調査の概要で述べたように、絵図や古写真等で存在が知られている高麗門、土塁、堀などの遺構の存在が問題となる箇所であるため、その有無を確認することがまず第一の目的であった。一方、今回の対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「新馬借遺跡」にも含まれる。この遺跡は、弥生時代の遺跡として知られており、近世と弥生時代の二時期の遺跡として調査を実施することとした。

そこで、JRの線路が新幹線橋脚の下に移転してすぐに調査を開始した。線路は撤去されているものの線路下の砂利敷きはそのままだけ残っているため、重機を使用して作業を行うこととした。

調査は、まず遺跡の存在とその広がりを押さえる必要があるため、ある程度距離をおいて任意に確認坑（以下「トレンチ」という。）を設定して調査を進めた。調査の順番については、工事との整合性も図った。この対象地は、工事が二つのJVでちょうど一新踏切付近を境として、熊本駅側と上熊本駅側の両方から工事を進めてきている状況であったため、その両方向に対応して作業を進めた。

まず、下馬天神踏切より南に3箇所のトレンチを設けた。下馬天神に近いところに1箇所と、妙解寺跡に近い場所に2箇所である。九州新幹線工事に伴う発掘調査で、妙解寺跡の正面に面する付近で道路跡を確認している。それが「参道跡」と一致するのであれば、鉄道路線下にその道跡が存在する可能性が高いためより細かく調査した。いずれのトレンチでも、現地表面から2mを超えるほど掘削したところで遺構・遺物の確認を行った。結果的には、3箇所のトレンチのいずれから「参道跡」は確認できず、他の時期の遺構・遺物も確認しなかった。「参道跡」の存在する層か、この時点では確認が十分ではなかった。

一方、一新踏切より北側にはNo.9からNo.12までの4トレンチを設定した。新馬借遺跡の範囲確認と「堀跡」の存在を確認するためであった。この調査では、南側のNo.11、No.12の2つのトレンチで鉄道の砂利層の下に明褐色粘質土を1mほど客土している状況を確認したが、近代の鉄道敷設に伴うものと判断した。いずれのトレンチでも、最終的には暗灰褐色の泥炭層であった。これらのトレンチでは、近代の鉄道敷設以降の客土等を除けば、遺構・遺物は検出しなかった。これらのことから、一新踏切北側では遺構が存在しないと判断した。しかし、その後排水管工事中に一新小の西側で石垣遺構が見つかり緊急に調査を行った。

一新踏切から高麗門踏切までの間には、No.1～No.3、No.7、No.8、No.13の計6箇所のトレンチを設定し調査した。No.13トレンチでは、1mほどの客土の下に黒色の遺物包含層を確認した。遺物としては、弥生時代後期ののものであり、その下に確認した竪穴遺構が存在することからこの地点には遺跡が存在することが分かった。さらにNo.7トレンチからは溝状遺構と土師器、No.8トレンチからは鉄道の砂利敷きを除去すると粘土状の土に包まれるようにして礫が配置されたような状態で出土した。これも時期不明ながら土塁に関係する遺構と推定した。

No.1～No.3トレンチは、高麗門推定地に設定したトレンチである。No.1トレンチでは、遺構を確認しなかった。No.2トレンチでは版築状の基礎遺構、瓦・白磁等の遺物を地表下40cmで検出した。No.3トレンチも同様であり、根固め石と考えられる遺構も検出した。

以上の結果に基づき、新馬借遺跡の範囲で弥生時代の遺構・遺物を、さらに高麗門推定地でも瓦や石垣等を検出し、文化財が残存している範囲が特定された。

2 二次調査の方法

一次調査の結果を受け、良好な状況で高麗門等の遺構が残っている可能性があったため、さらに詳細な調査の実施と検出した遺構の妥当性とその価値を判断するために、調査検討委員会の設置を土木部と協議した。

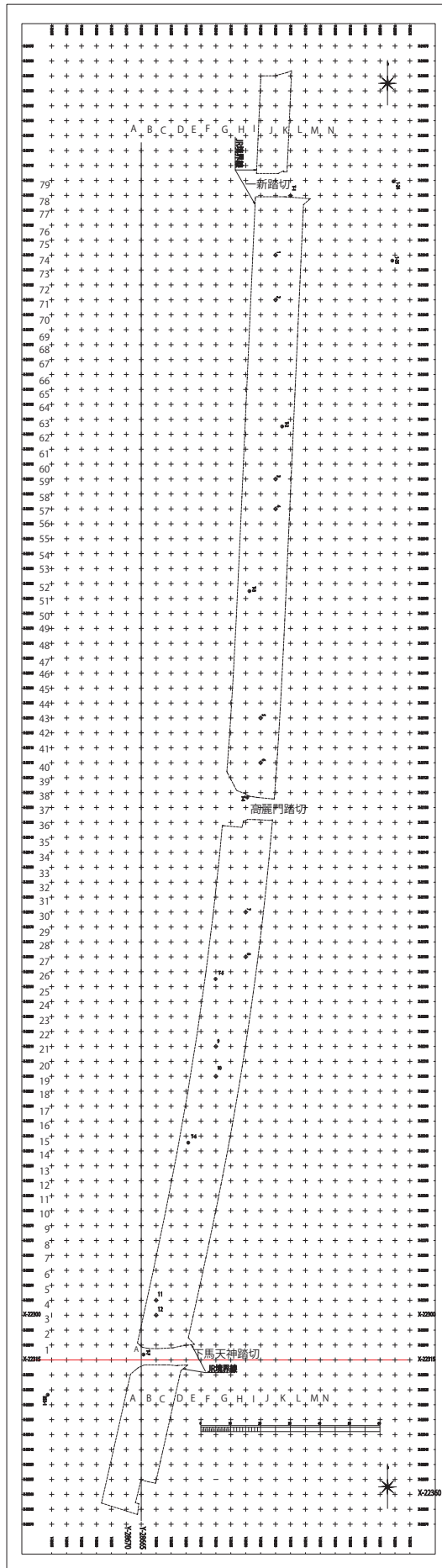


Fig.4 調査範囲及び
調査区グリッド図



Fig.5 一次・二次・三次調査区位置図(1) S=1/2000



Fig.6 一次・二次・三次調査区位置図(2) S=1/2000

そして、二次調査の実施と委員会の設置がなされた。

二次調査では、より正確な位置情報を得るため、世界測地系による座標値を伴う調査グリッドを設けた。これまでの調査成果を基に調査区全体に5mメッシュの小グリッドを設定（Fig.4 参照）し、遺構確認、遺物取上げ及び遺構実測図作成の際の基準とした。基点はX=-22315、Y=-28670とし、そこから東へ5mメッシュの区切りごとにA、B、C・・・とアルファベットを順に振り、北へ同じく1、2、3・・・として、その組み合わせでグリッドの名称を決め、それにしたがって調査を進めた。

調査は、一次調査のNo.1～No.3 トレンチ付近を中心にトレンチを拡張させる形で調査を行った。さらに一次調査で実施していない高麗門踏切から下馬天神踏切までの間のトレンチ調査を実施した。トレンチはNo.1からNo.9までである。必要に応じてトレンチの拡張も行った。

調査検討委員会の委員は考古学、文献史学や建築史学など各分野から選任し、調査で得られた遺構の見方や価値判断を専門的な見地から行ってもらうこととした。調査期間中、3回の委員会を開催して意見を得た。その結果を「意見書」として取りまとめてもらった。

3 三次調査の方法

一次調査及び二次調査の結果を受けて検討委員会を開き、結果として調査した範囲で確認した「高麗門」・「参道」・「堀」・「土塁」の遺構を含む一体の保存を求めることとなった。しかし、当該地が全てJRの鉄道高架化事業の対象地であり、そのまま残すことは不可能であった。そこで、できる限り保存を図り事業の遂行上、已むを得ない箇所は本調査を実施して記録保存によって遺跡の情報を将来に残すこととなった。そこで三次調査では「土塁」や「堀」、「高麗門」から「妙解寺」までの参詣の道について、より深い情報を補強し、同時にその他の関係遺構や他の時期の遺構等についても併せて記録保存を行うこととした。

本調査では、JRの在来線や新幹線路線に隣接することから、安全面で調査や調査範囲に制約が課せられたものの、できる限りデータの収集を行うこととした。

具体的には、調査区の設定は工事箇所である橋脚の基礎となる部分に加え、付帯工事等で影響の出る箇所についても本調査もしくは工事立会を行った。橋脚の箇所は、高麗門踏切を基点として北に大きく2箇所、南側で4箇所の調査を実施した。基礎杭を打ち込む前に施工主体であるJR側に工事の及ぶ範囲を表示させ、安全範囲を考慮して調査区を設定し、表土剥ぎ等を実施した。

調査体制は、工事期間による制約があったため、新馬借B・A-1を2班、花岡山・万日山A-2～A-5調査区については3班体制とし、工事の遅れを来さないように11月からは民間調査組織を組み入れ、調査の迅速化を図った。

4 整理作業の方法

整理作業では、出土遺物の水洗い・注記を行う際にできるだけ調査現場で記載したラベルの情報が遺物にも反映するようにしていった。今回の調査の場合、本調査箇所の資料だけでなく一次調査、二次調査も報告書に記載することから併せて整理作業もまとめて行った。

報告書作成までの期間が実質1年ほどのため、平成23年度は図面整理主体、平成24年度は遺物整理・実測・報告書作成を主体として取り組んだ。また、報告書作成に当たり、専門委員会を設け、遺跡の価値を考古学的な見地に加え、歴史学、建築学、石造建造物などの専門分野からの意見を聴取するとともに論考をいただき報告書に反映することとした。

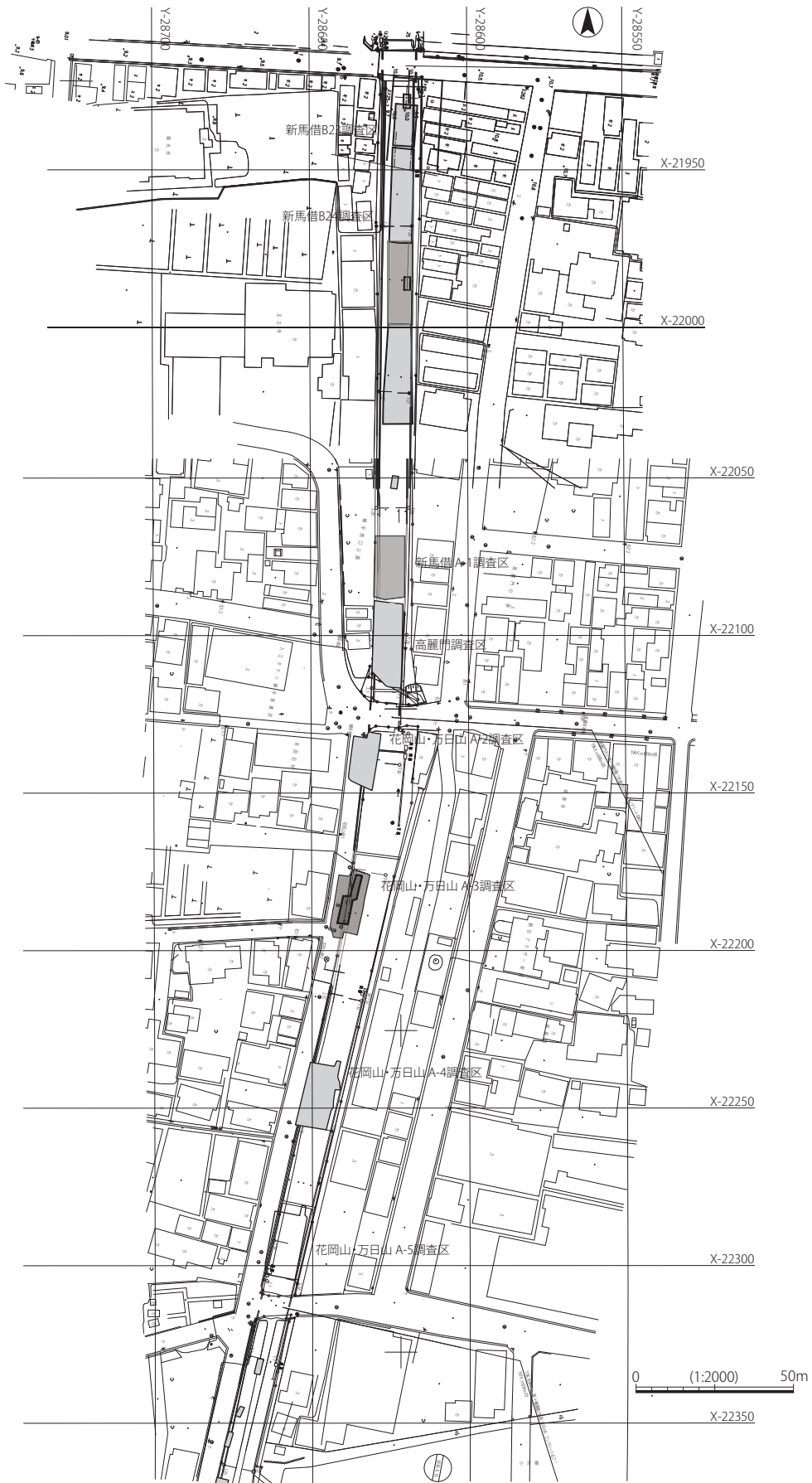


Fig.7 三次調査区割図 S=1/2000

第2節 一次調査と二次調査の成果

1 一次調査の成果

一次調査は土塁・堀・門などの各遺構が残っているかどうかを確認するために行った。まず、一新踏切を基点に北側及び南側の路線地（土塁・堀の想定地）、下馬天神南側の路線地（妙解寺参道想定地）、高麗門踏切基点の北側（高麗門の想定地）の3箇所を調査した。

一新踏切より北側での調査は、すでに第1節で調査方法と併せて概要も述べているので簡単にまとめれば、3箇所のトレンチのいずれでも泥炭層の確認と調査対象となる遺構・遺物を確認しなかった。したがって、この時点では一新踏切より北側での遺構の存在は否定的であった。

一新踏切南側の2箇所の確認トレンチでは、弥生時代後期の遺物とともに竪穴遺構など遺構を確認した。

一方、下馬天神踏切より南側の調査では4箇所のトレンチをあけ、妙解寺参道の確認を目指したが、いずれのトレンチでも攪乱を受けている状況からすでに工事等で破壊されて遺構は存在しないと判断した。その後、二次調査においても、確認トレンチの間隔が広がった部分について再度3箇所のトレンチを掘削したものの遺構を捉えることができなかった。そのため、下馬天神踏切南側はないものとし本調査範囲から外すこととした。

高麗門踏切の北側のトレンチでは、石垣と堀と考えられる遺構がトレンチから出土した。この石垣遺構が高麗門の石垣とすれば、その西側の湧水のある落ち込みを堀跡と考えたのである。絵図などから想定された高麗門や堀に合致するものと考えた。トレンチの拡張を行い慎重に調査を進め、さらに遺構の状況をつかむ必要が出てきた。そこで、検討委員会の設置とより深い確認調査を行うこととした。

2 二次調査の成果

(1) 調査概要

二次調査は、一新踏切から北側の一部、正立寺付近から下馬天神踏切の間、下馬天神南側40mほどまでの範囲を調査した。

調査は、平成23年11月7日から平成24年3月8日までの期間で行った。

一新踏切の北側では、一新小の運動場前付近で橋台跡を検出した。遺構は、橋台の痕跡である石垣とその間に排水のためのヒューム管を確認した。この橋台は面をきちんとそろえた布積石垣であることから、明治初期の鉄道敷設よりやや下った時期に何らかの理由で鉄道の補強を行った際のものとする。国鉄の複線化工事前まで利用されていたようで、新幹線工事図にも橋台のあったことが記載されていた。昭和40年代の複線化の際に埋め込まれ、下にヒューム管を配して一新小側からの汚水等の排水を行っていたようである。ただ、確認調査時には新幹線工事に伴い排水路は下流側で切断され、排水は別のルートを流すようになっていた。この付近はちょうど近世の絵図と照らし合わせて場所の比定を行うと、総構外郭の堀が通る場所にあたり、この付近で徐々にもしくは急激に一新小側に屈曲していく部分にあたる。その堀の名残として排水路もしくは流路があったと考えられる。

高麗門の存在が予想される高麗門踏切北側では、一次調査の際に確認していた石垣と、その後背地を中心にトレンチ範囲を広げながら遺構の確認をしていった。さらに、高麗門踏切の南側については、近世の絵図に描かれた妙解寺まで続く「参詣道」（以下「参道」とする。）と堀の位置を確認するため、最終的に大小9箇所のトレンチを設定し調査を行った。

調査にあたり、高麗門踏切を境に北側を1区、南側の方を2区と大まかに分けた。1区は「高麗門跡」の可能性を指摘されている遺構部分を中心とした一帯である。2区は妙解寺跡へ向かう参道の存在が想定され

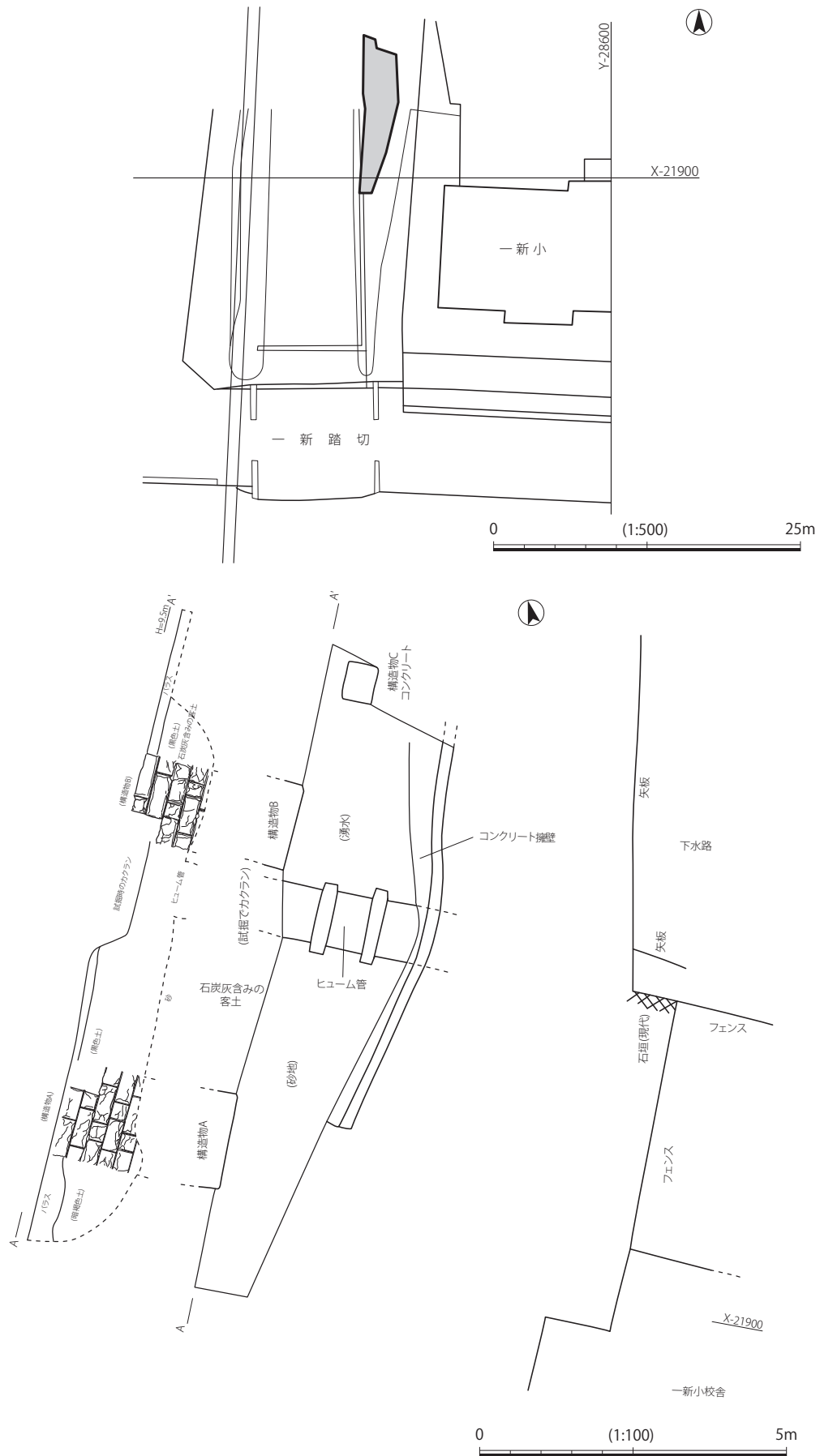


Fig.8 一新小西側トレンチ略側図 上図 S=1/500, 下図 S=1/100

る範囲である。

「高麗門跡」と想定された調査区では、一次調査で確認していた石垣、礎石の根固めなどを中心にトレンチ調査を行った。この調査区を調査時には第1調査区としていたが、調査成果を踏まえ、以後は「高麗門調査区」と呼ぶことにする。実際の高麗門の存在が想定される場所であり、高麗門踏切に面するからである。

石垣の時期判定が一つの課題であったので、石垣の状況を確認するため、できる範囲で石垣周辺の掘削を行った。すると鉄道の橋台に先行して石垣が設けられていることが判明した。さらに石垣の面を出してみると、築造方法は谷積であった。それが調査区のほぼ真ん中から南側に築造され、角はカーブを持った積み方であった。また、調査区西側には堀が想定されるので、その存在を確認するためにさらにトレンチを西側に広げて入れた。しかし、堀の底部に向けて3 m近くまで掘り下げたが、湧水が多く周囲の土砂の崩壊もあったため、安全面を考慮し底まで到達せず、途中で掘り下げを断念した。

高麗門踏切以南の参道が想定された範囲では、最終的には9箇所トレンチを設けて掘り下げた。それぞれのトレンチにはNo.1～No.9までの番号をふることにした（Fig.6参照）。それぞれのトレンチで参道の有無や状況を確認していった。参道跡と考えられる遺構は基本的に道の跡であることから、鉄道敷きの下で確認した硬化面が道の跡と想定し調査したところ、いくつかのトレンチで硬化面が確認できた。また、部分的ではあるが、二面の硬化面が確認できたところは、下層に加藤期に遡る可能性のある道の存在を確認した。

堀は埋土層の確認とその遺物の出土状況から、近代に入っても堀もしくは川としての形態を伴っていたことがわかった。高麗門踏切南側の参道部分になると、絵図から想定して参道の東側に位置したと考えられ、実際にトレンチの一部に堀と思われる落ち込みを確認した。

また、道路面の東側に側溝状の掘り込みをいくつかのトレンチの土層断面で確認できた。これが繋がっていれば、道の脇に側溝を設けていた可能性がでてきた。絵図の中には、この側溝を描いたかと思われる表現のものがあ、今後の検討課題となった。

No.6 トレンチでは加藤期の道路面を切るように深い溝が掘られていることが断面から確認できた。これが加藤期の堀を示すのではないかということも想定された。

土塁については、現状として土塁に匹敵するような高まりが見られないことから、すでに土塁は失われているものと考えた。

(2) 高麗門調査区の確認遺構と遺物

ア) 層序について

この調査区が高麗門跡の可能性はあるが、現状として高麗門そのものは失われているので、調査区でその基礎部分ないし土間部分などは残存していると考えた。基礎部分を確認するために調査区東側の東西に細長いトレンチを設定し、土層での確認を行った。

その結果、Fig.9に示すように東側土層断面は、その特徴から大きく4つの範囲、即ち図中の範囲A、範囲B、範囲C、範囲Dの4つに分けられた。以下にその概要をまとめる。

範囲A：版築の範囲が細かいものが集まる。

粘土層もあるが粗い砂層が多く含まれる。

範囲B：版築が見られるが粘土層が広がる。

根固めがこの範囲にある。

範囲C：遺物（瓦）が最も多い。

範囲D：堆積土であるが、殆ど遺物がない。

土手を築いたときの堆積土。



Fig.9 高麗門調査区平面・断面実測図 平面図S=1/120

高麗門調査区東側土層断面註記

- 1層：現代バラス
- 2層：Hue10YR3/4(暗褐色砂質土)；基本土層2層。しまり大。粘性小。玉砂利、炭化物粒、焼土粒を含む。
- 3層：Hue10YR3/2(黒褐色砂質土)；基本土層4層。しまり大。粘性小。全体に1cm大の炭化物粒、焼土粒をブロック状に含む(2層よりも多い)。
- 4層：Hue10YR3/3(暗褐色砂質土)；しまり大。粘性小(少し粘り気あり)。炭化物、焼土粒を少量含む。
- 5a層：Hue10YR3/1(黒褐色砂質土)；基本土層5層。しまり大。粘性ややあり。灰色の固い土が全体に入る。
- 5b層：Hue10YR3/2(黒褐色砂質土)；しまり大。粘性小。5a層とほとんど変わらないが砂が多い。
- 6層：Hue10YR4/2(灰黄褐色砂質土)；しまり大。粘性あり。瓦が集中して出土。
- 6b層：Hue7.5YR3/3(暗褐色土)；粘性大。しまり有。炭化物はほとんど含まない。瓦などの遺物を含む。
- 6c層：Hue7.5YR4/2(灰褐色粘質土)；粘性大。しまり小。瓦等の遺物を含む。
- 6d層：Hue10YR3/4(暗褐色土)；粘性あり。しまり小。炭化物、瓦等を含む。
- 6d'層：Hue10YR3/4(暗褐色土)；土層は6d層と同じ。瓦等はほとんど含まないが下層に硯が残る。
- 6e層：Hue10YR4/2(灰黄褐色土)；5a層の粘質土を含む。
- 6f層：Hue10YR3/3(暗褐色土)；粘性、しまり小。ブロック状の粘土を含み炭化物混じる。
- 6g層：Hue10YR4/2(灰黄褐色土)；粘性、しまり小。上層に遺物を含むが、大きな遺物はほとんど含まれない。
- 7層：Hue10YR2/3(黒褐色砂質土)；しまり大。粘性なし。さらさらした砂、極小の炭化物、焼土粒を少量含む。
- 8層：Hue10YR3/3(暗褐色砂質土)；しまり大。粘性小。
- 9層：Hue2.5Y3/1(黒褐色砂質土)；しまり大。粘りやや有。5層にあるような灰色の固い土が混じる。
- 10層：Hue7.5YR3/2(黒褐色砂質土)；しまり大。粘性小。灰色の固い土が全体に入る。瓦や土器片を少量含む。
- 11層：Hue10YR2/3(黒褐色砂質土)；基本土層3層。しまり大。粘性小。焼土が混じり灰色の固い土がわずかに入る。
- 12層：Hue7.5YR4/1(褐灰色土)；粘性有。しまり大。
- 13層：Hue7.5YR4/2(灰褐色土)
- 14層：Hue7.5YR4/2(灰褐色土)；炭化物を含み北側の落ち込み部分の底部に炭が残る。
- 14'層：Hue5YR4/3(にぶい赤褐色)；底部に炭を含む。
- 15層：Hue10YR3/2(黒褐色土)；粘性あり。しまり大。
- 15'層：Hue10YR3/3(暗褐色土)；粘性、しまり小。暗色土と褐色土がまだらに混じる。
- 16層：Hue10YR3/1(黒褐色シルト)；粘性あり。しまり弱。
- 17層：Hue7.5YR5/4(にぶい褐色砂質土)；粘性、しまり小。
- 18層：Hue7.5YR4/1(褐灰色砂質土)；しまり大。粘性小。
- 19層：Hue7.5YR6/6(橙色土)；粘性有。しまり弱。炭化物を含む。
- 20層：Hue7.5YR5/6(明褐色土)；炭化物を含む。古い時代の焼土。
- 21層：Hue7.5YR4/1(褐灰色砂)；遺物を含む。
- 21'層：Hue7.5YR4/1(褐灰色砂)；粗い砂。
- 22層：Hue10YR3/3(暗褐色土)；粘性、しまり強。瓦等の遺物を含む。
- 23層：Hue7.5YR4/3(褐色土)；粘性弱。しまり大。
- 24層：Hue7.5YR3/2(黒褐色土)；粘性、しまり弱。
- 25層：Hue7.5YR4/4(褐色土)；粘性、しまり弱。
- 26層：Hue10YR2/3(黒褐色土)；粘性、しまり強。
- 27層：Hue7.5YR3/2(黒褐色土)；粘性弱。しまり強。
- 28層：Hue7.5YR3/2(黒褐色土)；粘性、しまり弱。
- 29層：Hue7.5YR3/2(黒褐色土)；粘性弱。しまり強。
- 30層：Hue10YR3/4(暗褐色土)；粘性弱。しまり強。
- 31層：Hue7.5YR3/3(暗褐色土)；粘性、しまり強。
- 32層：Hue7.5YR3/2(黒褐色土)；粘性、しまり弱。
- 33層：Hue7.5YR3/2(黒褐色土)；粘性弱。しまり強。
- 34層：Hue5YR4/6(赤褐色粘質土)；粘性弱。しまり強。
- 35層：Hue10YR4/2(灰黄褐色砂質土)；粘性弱。しまり強。
- 36層：Hue10YR4/3(にぶい黄褐色粘質土)；粘性弱。しまり強。
- 37層：Hue2.5YR4/4(にぶい赤褐色粘質土)；しまり強。右肩に青灰色粘土塊を含む。
- 38層：Hue7.5YR3/3(暗褐色粘質土)；粘性弱。しまり強。
- 39層：Hue2.5YR3/2(暗赤褐色粘質土)；粘性弱。しまり強。
- 40層：Hue2.5YR4/2(灰赤色粘質土)；粘性、しまり強。
- 41層：Hue5YR4/3(にぶい赤褐色粘質土)；粘性弱。しまり強。
- 42層：Hue10YR4/1(褐灰色粘質土)；粘性、しまり強。
- 43層：Hue5YR2/2(黒褐色粘質土)；粘性有。しまり強。
- 44層：Hue10YR5/1(褐灰色粘質土)；粘性、しまり強。青灰色粘土ブロック状に入る。
- 45層：Hue7.5YR3/1(黒褐色砂)；粘性、しまり弱。
- 46層：Hue2.5YR4/6(赤褐色粘質土)；粘性、しまり強。
- 47層：Hue5YR3/4(暗赤褐色土)；粘性有。しまり弱。
- 48層：Hue7.5YR4/2(灰褐色砂質土)；粘性、しまり弱。青灰色粘土ブロック状に入る。
- 49層：Hue7.5YR4/6(褐色土)；粘性、しまり弱。
- 50層：Hue5YR3/4(暗赤褐色粘質土)；粘性、しまり弱。
- 51層：Hue5YR4/3(にぶい赤褐色砂質土)；粘性、しまり弱。
- 52層：Hue5YR3/2(暗赤褐色砂質土)；粘性、しまり弱。
- 53層：Hue7.5YR3/4(暗褐色粘質土)；粘性、しまり強。
- 54層：Hue2.5YR3/6(暗赤褐色粘質土)；粘性、しまり強。
- 55層：Hue2.5Y3/3(暗オリーブ褐色砂質土)；粘性、しまり弱。
- 56層：Hue2.5YR3/2(暗赤褐色粘質土)；粘性、しまり強。
- 57層：Hue2.5YR4/2(にぶい赤褐色砂質土)；粘性弱。しまり有。
- 58層：Hue2.5YR3/3(暗赤褐色土)；粘性、しまり弱。青灰色粘土含む。
- 59層：Hue2.5YR4/2(赤褐色土)；粘性有。しまり強。青灰色粘土含む。
- 60層：Hue5YR3/2(暗褐色粘質土)；粘性、しまり強。砂を含む。
- 61層：Hue5YR3/2(暗赤褐色土)；粘性有。しまり強。青灰色粘土含む。
- 62層：Hue5YR3/4(暗赤褐色粘質土)；粘性強。しまり有。
- 63層：Hue5YR3/2(暗赤褐色土)；粘性有。しまり弱。
- 64層：Hue5YR4/4(にぶい赤褐色砂質土)；粘性、しまり弱。土器、瓦片、礫含む。廃棄土が流れたもの。
- 65層：Hue7.5YR5/6(明褐色砂質土)；粘性、しまり弱。礫混じり土。
- 66層：Hue7.5YR4/4(褐色砂質土)；粘性、しまり小。
- 67層：Hue7.5YR3/2(黒褐色粘質土)；粘性大、しまり有。瓦を多量に含む。

版築の有無、堆積物の状況によって大きくは4箇所に分けられた土層はこの場所の土地利用に関係する。範囲Dはこの場所に高麗門が構築された時期、もしくはそれ以前に遡る可能性が高い。範囲Cは版築はなく、瓦などの遺物が多く含まれる層がある。このうち、4層・20層は焼土層であり、5a層は根固めの上部を含む。

20層より下位の部分（灰色部分）も造成部分であるが、A－B範囲の4層下位の造成部分よりも古い時代に造成されたものとする。

次に、調査区のほぼ中央部分で東西方向のトレンチを設定し土層を見てみると、やはり4層・20層に焼土を確認した。この焼土層の成因として考えうるのは、第二次世界大戦による空襲による火災、さらに明治以降まで含めると西南戦争による火災があげられる。この層が存在する箇所は、明治中期に鉄道の線路下であること、焼土層の前後の出土遺物をみると、江戸期から明治初年ごろまでのものがほとんどであることから西南戦争時の火災に関わるものと考えた方が妥当である。西南戦争の際は、新町一帯は焼け野原とした記録や古写真の映像などもその証左と考える。被熱した瓦が多く出土することも火災による焼土の形成に関係すると考える。

イ) 石垣遺構

西側の石垣は、当初絵図に描かれた高麗門の土台として構築されていた石垣ではないかと考えた。しかし、石垣自体の構築方法として谷積を使用していること、石垣の角部分に曲面を用いていること、石垣の裏込めから明治以降の新しい遺物が出土することなどから、明治時代以降に築かれたものと判断した。石材は安山岩であり、この石材がどこから持ってこられたのかという疑問に対する一つの回答として、「高麗門」本体の土台の石垣を再利用した可能性が考えられる。

さらにこの調査区内のうち、場所によって石垣の構築技法が違うという疑問点がある。石垣は西側の谷積み技法に対し、橋台そのものにはきっちりと石を並べた布積み技法が使用されている。しかも上部にはコンクリートが使用されている。石垣が設置されたのは鉄道敷設のためであることは確かであろう。この石垣の構造の違いをどう捉えるかである。ここでは、後の工事立会などを通じての結論として石垣構築時期の差と捉えておきたい。実際、橋台は西側の谷積を切っていることから谷積み技法が古いものであり、しかも高麗門の石材を利用した可能性があることから、鉄道に関係なく明治の早い時期に作られたと考えられる。ただ、一方で鉄道敷設時にあった当初の橋台部の石垣構造を、その後の鉄道の発展に伴う線路下の地盤強化のために布積の強固なものに変えたという考え方もできる。それを明確にするためには鉄道史、もしくは技術変遷史などの成果を得る必要がある。いずれにしてもここで確認した石垣遺構は明治に入ってからのものであることは間違いなからう。

高麗門そのものの土台としては、ほとんどの絵図に描かれているように石垣があったのは間違いがない。同じ新町の南の正門である三丁目御門の古写真が長崎大学に保管されていたが、それを見ると熊本城の石垣と変わらない。同じ熊本城の惣構の一角にある高麗門の石垣も同様のものだったと推定できる。富重写真所に残る高麗門の遠景が写り込んだ古写真を拡大してみると、かすかに石垣があったことが見て取れる。とすれば、かなりの数の石垣があったはずであるが、この調査区においては全く確認できなかった。どこへ消えたのか不明である。近年近くから見つかった高麗門の礎石といわれる数個の石はその石垣の名残である可能性が高い。まだ、近くの地下に埋もれている可能性を指摘しておくにとどめる。

ウ) 根固め遺構

一次調査時に確認した遺構である。何らかの礎石を伴う建物の存在を想定させる遺構である。出土したのは、礎石の下に敷いた根固めのみである。直径が約1mを測る。中心になる根固めの石材は凝灰岩で20cm

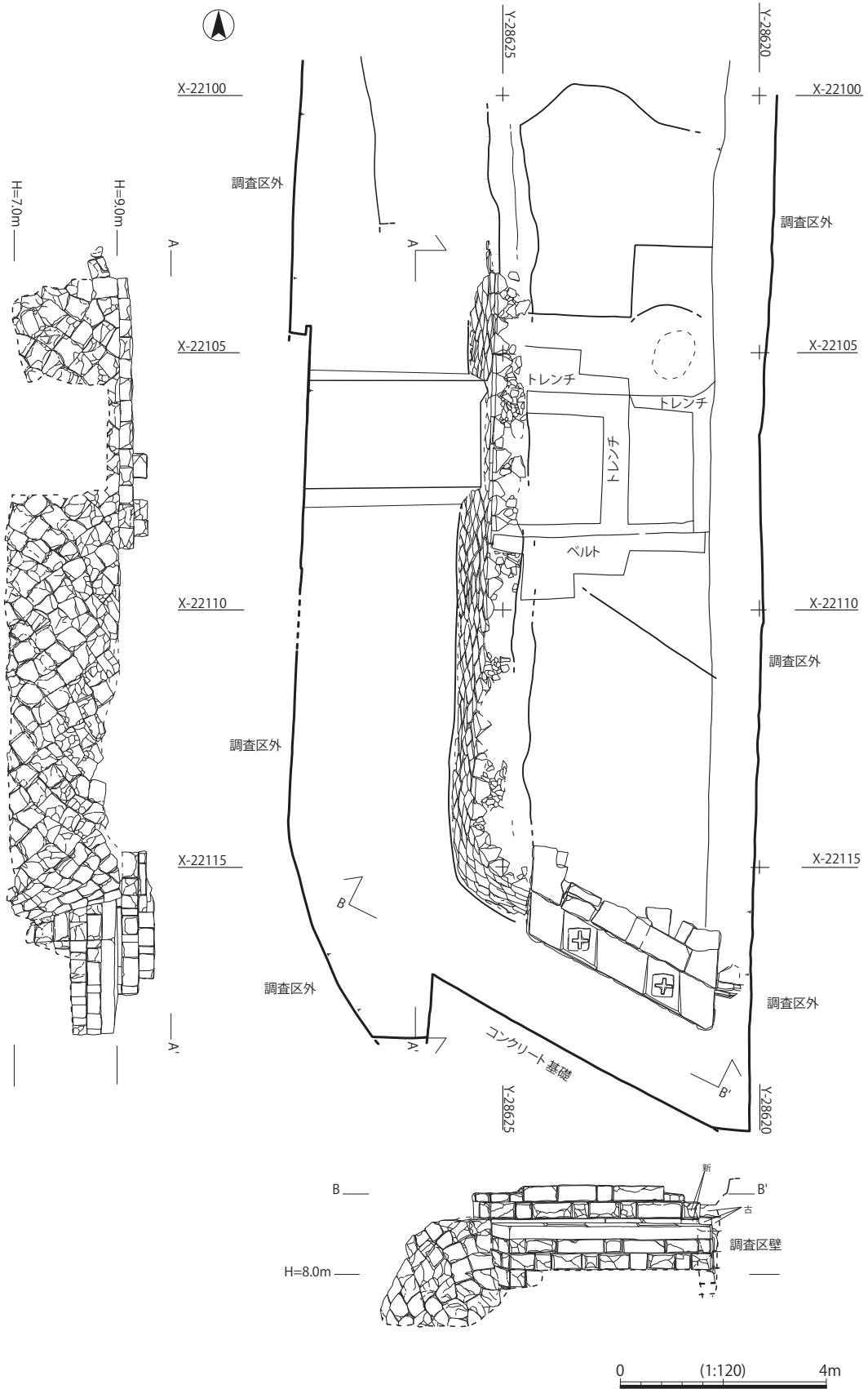


Fig.10 高麗門調査区石垣実測図 S=1/120

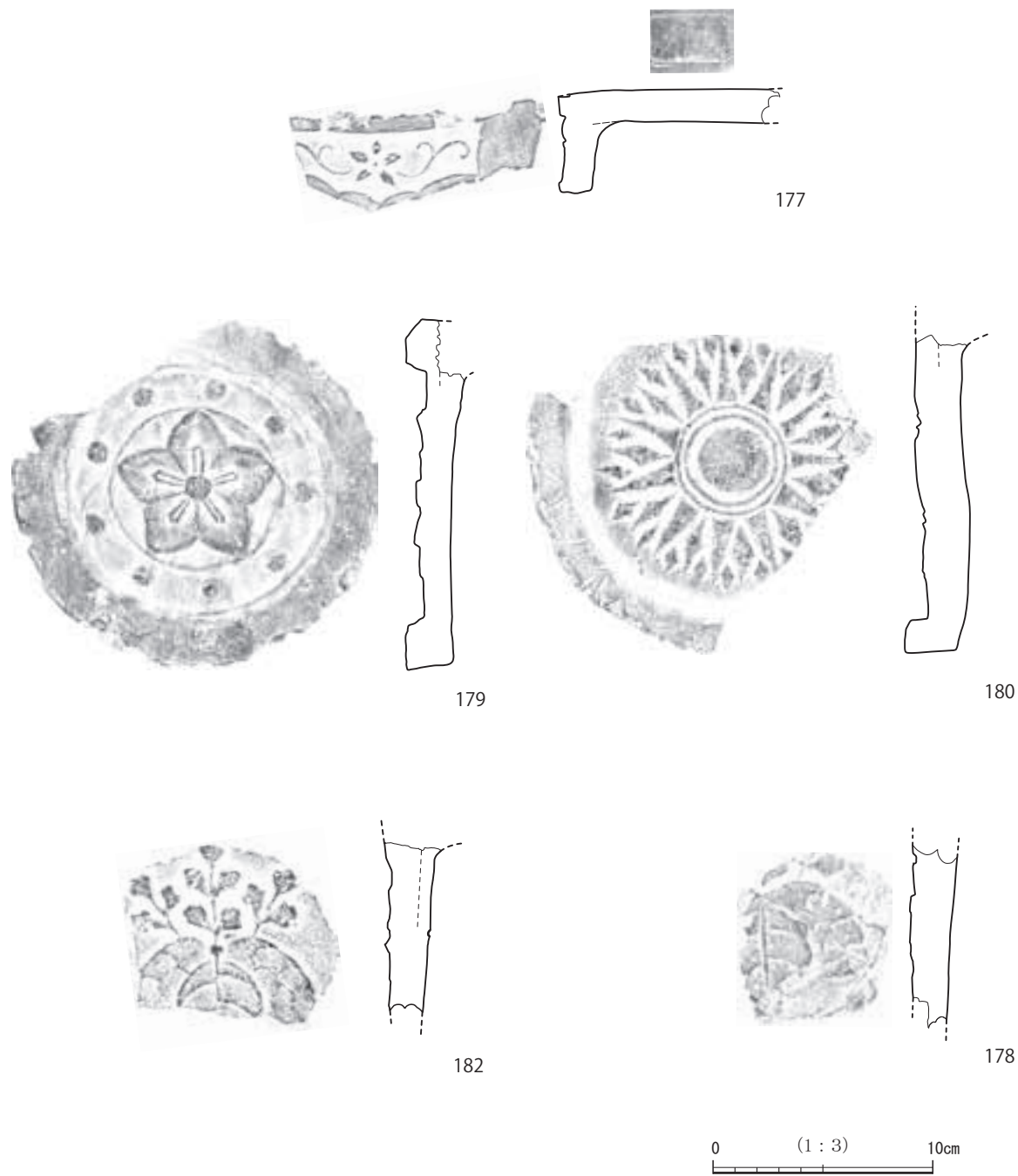


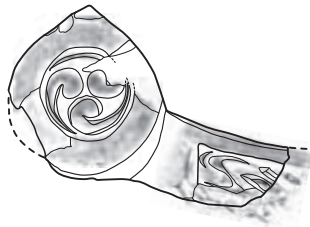
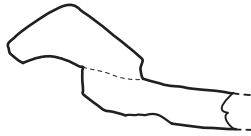
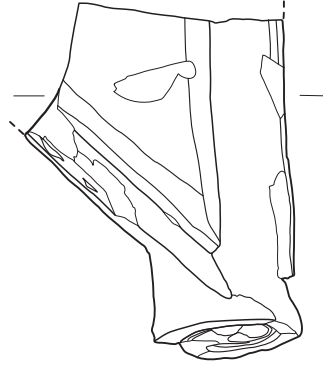
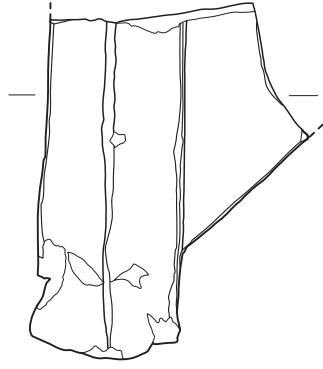
Fig.11 高麗門調査区出土遺物実測図(1) S=1/3

～40cm大のものを使用している。上部の礎石が不明のため礎石に乗る柱規模は不明であるが、根固め部分の大きさから考えれば径1mを超える礎石があったと考えられ、柱も大型のものが立っていたと想定できる。

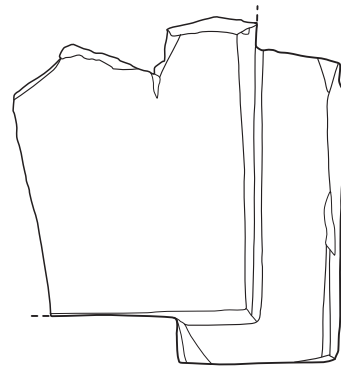
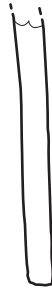
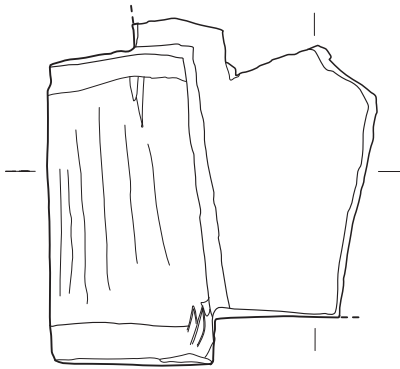
この遺構の構築時期は根固め石に伴って出土する遺物やさらに下部の土層中に包含される遺物から判断して19世紀前半、近世末近くと考えられ、当初の高麗門に伴う遺構ではないと判断できる。

エ) 版築層の確認

先の焼土層の検出に加えて重要なのが、先の根固め遺構の周辺からその北側付近にかけて検出した版築層がある。出土遺物はそう多くはないが、江戸後期以降の陶磁器などがあり、この版築層の形成時期に一定の



183



181

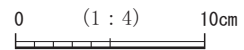


Fig.12 高麗門調査区出土遺物実測図(2) S=1/4

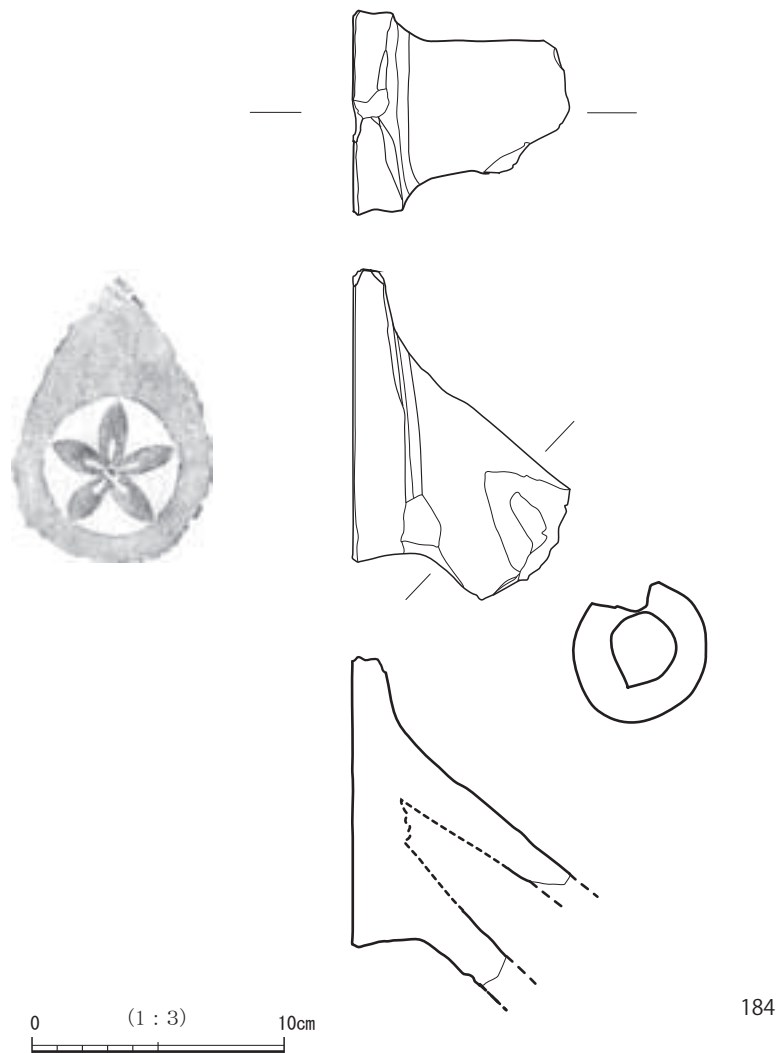


Fig.13 高麗門調査区出土遺物実測図(3) S=1/3

目安をつけることができる。この層中には明らかな近代に入る遺物は出土していない。

オ) 高麗門調査区出土遺物

・根固め遺構上部の遺物

土台部分の根固め遺構上部の5a層に磁器が出土した。磁器の皿であるが、いずれも底部に蛇の目凹型高台という特徴を持つ。

・調査区北側出土遺物

土手及び土手から掘にかけての法面において、瓦とともに陶磁器類も多く出土しており、染付変形皿の高台部分には「天明」の銘が記されているものがある。また色絵磁器の中には上手の手によるものと思われるものもある。

昭和の初期まで使われていたものも出土している。泥面子や一升徳利などもみられ、一升徳利には「高麗門」の文字が読み取れる。

根固め付近から出土した陶磁器には、虫かごとと言われる縦線に蝙蝠文をあしらった茶碗は21層からの出土である。

蛇の目凹型高台は18世紀後半から明治まで作られる。PL.11の563、PL.12の552、553は胎土から波佐見産と思われる、18世紀後半のものである。

したがって、Fig.9のA-B地点は少なくとも19世紀初めに土台部分を造っていると考えられる。その際に蛇の目凹型高台の皿も入り込んだものと思われる。

・焼土層上部の陶器

土手上部の2層（焼土）上層で出土した遺物が549、550、558等の陶器である。549、550は高田焼、558は唐津焼である。いずれも幕末から明治にかけてのものと思われる。

・金属製品

土手から堀への法面にかけて金属遺物も多い。鉄道関連のものもあるが、角釘、古銭、飾金具、鉄滓等が出土している。ただ、堀に流れ込んだものであり、必ずしも高麗門の存在時期もしくは高麗門に使用されていたものか明確にはできなかった。

・瓦

銘入瓦

銘が入った瓦が出土した。「土山少左衛門」、「土山五郎右衛門」、「御用」等の銘が見られ、いわゆる「土山瓦」といわれるものである。土山瓦は熊本城の瓦にも使われた瓦で、この銘文の人物は、土山姓を与えられたこの土山瓦生産にかかわりをもった職人の棟梁格の人名であろう。同様の銘は熊本城跡でも出土しており、この場所でこのような瓦が出土するところからも今回の調査地に「高麗門」が存在した可能性が高いと考える。

滴水瓦

この瓦も数点出土した。完形品ではないものの瓦当面に「慶長13年」の銘があるものがあり、熊本城でも同じ年号を記した瓦がある。熊本城惣構の一角に位置する「高麗門」にもこの瓦が使用されていることは、惣構を最初に築いたとされる加藤清正に縁のある遺物が出土したことになり、この場所の重要性を示すものともなろう。

その他の瓦類

上に述べた瓦以外にFig.11の179の桔梗文、180の日足文、178、182の桐文の軒丸瓦が出土している。これらの瓦は先の滴水瓦とともに加藤清正に関係する瓦として早くから有名であり、やはり熊本城跡でも出土している。特に桐文の瓦は佐賀の名護屋城から出土しているものと同様で、場合によっては同範関係になりそうである。加藤期の瓦である可能性が高い。177は中心に簡略した桔梗文を配した滴水瓦の類似品であろうか、熊本城に類例がある。瓦自体は製作技法から見ると江戸の後期かもしれない。184は鳥衾（鳥伏間）で、棟の最上部の鬼瓦等の上部に葺かれるものである。やや小振りであり、隅棟に葺かれたものだろう。

この他に高麗門に葺かれていたか不明であるが、181の目板棧瓦や183の切隅瓦なども出土している。これらの瓦は必ずしも高麗門に使用されていたとは限らないが、塀に使用されていた可能性はある。

(3) 二次調査参道部調査区の調査成果

・概要

この調査区は高麗門踏切から下馬天神踏切の間を、二次調査の際に「調査2区」としていたが、本報告書では、参道調査区とする。ここでは、以前の概要報告書とでは煩雑な扱いになることを断っておく。

ここでは、9箇所のトレンチを設定して調査を行った。参道調査区は先に述べたように、高麗門から細川家の菩提寺である妙解寺へ向かう参道があったとされる場所にほぼ重なる。調査の目的は、その参道の存在の有無、加藤期の参道の有無、参道の東側に位置する堀の状況などを確認することであった。

調査では、まず高麗門踏切と下馬天神踏切の間の鉄道線路下の砂利を取り除き精査をした。すると、一直線に伸びる石垣列の上面を二条確認した。高麗門調査区側では見られなかったこの遺構の出土に、当初これが参道遺構で、両側に石垣を配するものであるとの考えが出てきていた。特に西側に側溝らしき石垣の溝が出土したこともその要因である。

この調査区では、南側の下馬天神踏切に近い方にまず、No.1 トレンチを設定し、順次北の高麗門踏切までにNo.9までのトレンチを設定して調査を進めていった。表土下に参道の面が出土する可能性があったので、人力での掘り下げを行った。各トレンチとも、掘削の当初面には砂利が残り、表土層も硬くしまっていたため、人力での掘削は非常に時間を要した。

・No.1 トレンチ

No.1 トレンチ (Fig.14) は、最も南側のトレンチである。このトレンチでは、参道の構造と石垣が江戸期の参道に伴うものかどうかという観点、さらに参道の東側に存在した堀の確認を含めて調査を行った。

石垣の上面をまず押さえ、参道、石垣、堀の状況を知るため、石垣に対して横方向にトレンチを設定し掘り進めた。石垣を中心とし後ろ側からと前面から、さらに東側は堀方向により深く掘削した。

石垣の西側の表面をトレンチ幅で確認した。確認した範囲では上面は同じ高さに整えられ、二段に石垣は組まれていた。一段目を平面で見ると幅 30cm～40cm程で、奥のひかえは短冊状の方形気味のものや奥を細く細工したものと一様に整形しているものではなかった。不揃いな状況であったが、いずれも間知石として加工している。この石垣の石はすべてが安山岩であった。石垣の石の一部には幅 5cmほどの矢穴が認められるものが多かった。また、積み方としては、二段目との間では石と石の間をずらすような配置を取る布積の形式である。

裏込めの状況は非常に粗い破碎礫を入れたり、川原石だけだったり、小石砂利だったりと揃えられるものを揃えて入れたようである。さらに二段目の石垣の下には玉砂利を配しているようであった。

さらに石垣の石の配置状況を東側と西側とで比較してみると東側のほうにより大きく形のよいものを配置し、西側にはやや小振りのを配置してあり、東側に見せる主眼を置いたように感じられる。

先に設定したトレンチの方向に沿って石垣の一部を撤去してみると、地山を掘って据える場所を確保し、石垣を一部埋め込みながら積んでいたことが分かった。さらに最下部には玉砂利を配したことが確認できた。

参道の状況を確認するため石垣を撤去した後、さらにトレンチの掘り下げを行った。掘り進める中で石垣を設置した面よりも深い場所で古墳時代や古代の土師器・須恵器、中世瓦器などが出土した。何らかの遺構の存在も予想された。そこで精査したが、遺物の含まれる層を分層することは難しく、同じ層に時期差のある遺物が混じることから整地した層にたまたま遺物が混入した可能性もでてきた。

堀の調査では、地表面から 2 m以上掘り下げたが、湧水がありそれ以上掘るにはトレンチだけでは危険であった。出土した遺物も近世やそれ以降の遺物が混じることから、ここでは堀の状況はつかめなかった。

一方、参道そのものの状況が、断面だけではつかめなかったので、面的に確認するため、このトレンチの北側に、2.7 m×4.2 mほどの範囲で掘り下げを行った。徐々に掘り下げたところ表面の硬化した土の間に遺物が面的な広がりを見せながら出土した。出土したのは、近世末の陶磁器類、瓦、鉄片などであった。小破片となったものが多く、平面的に出土したことから道路の整地面か鉄道の基盤面であろうと推定した。遺物からみれば、江戸末から近代に入った頃のものの可能性が高かった。したがって、幕末頃の道の跡の可能性はあるものの大部分は近代のものであろうとした。ここでは 20cmほど掘り下げたところで中止した。

・No.2 トレンチ

No.2 トレンチは、No.1 トレンチの北側に設けたもので、東側石垣に沿って 3 m×4 mと小規模のもので、石垣の状況を補助的に観察するために設けた。状況は No.1 トレンチとほぼ同じであった。

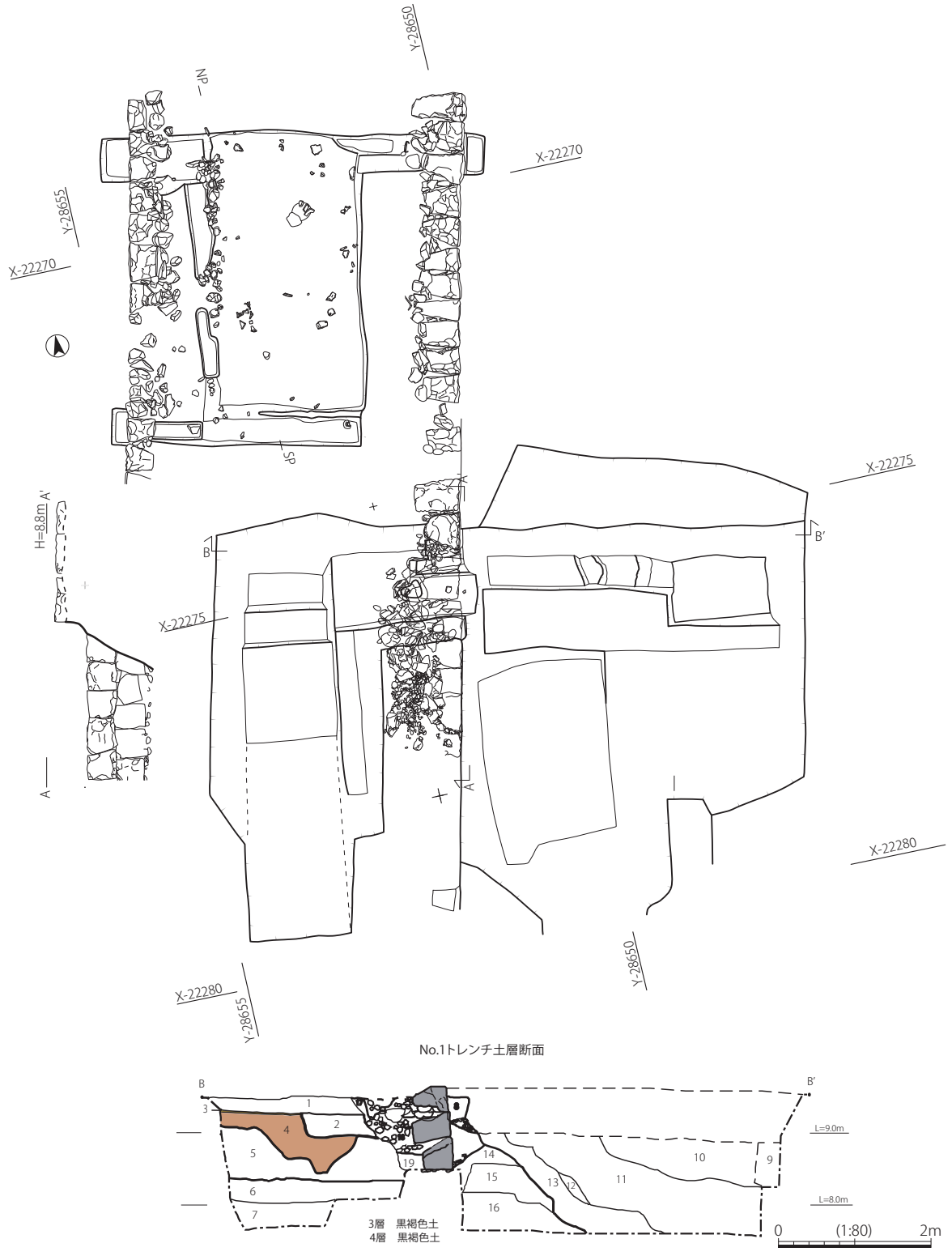


Fig.14 参道調査区 No.1 トレンチ平面図及び見通し実測図 S=1/80

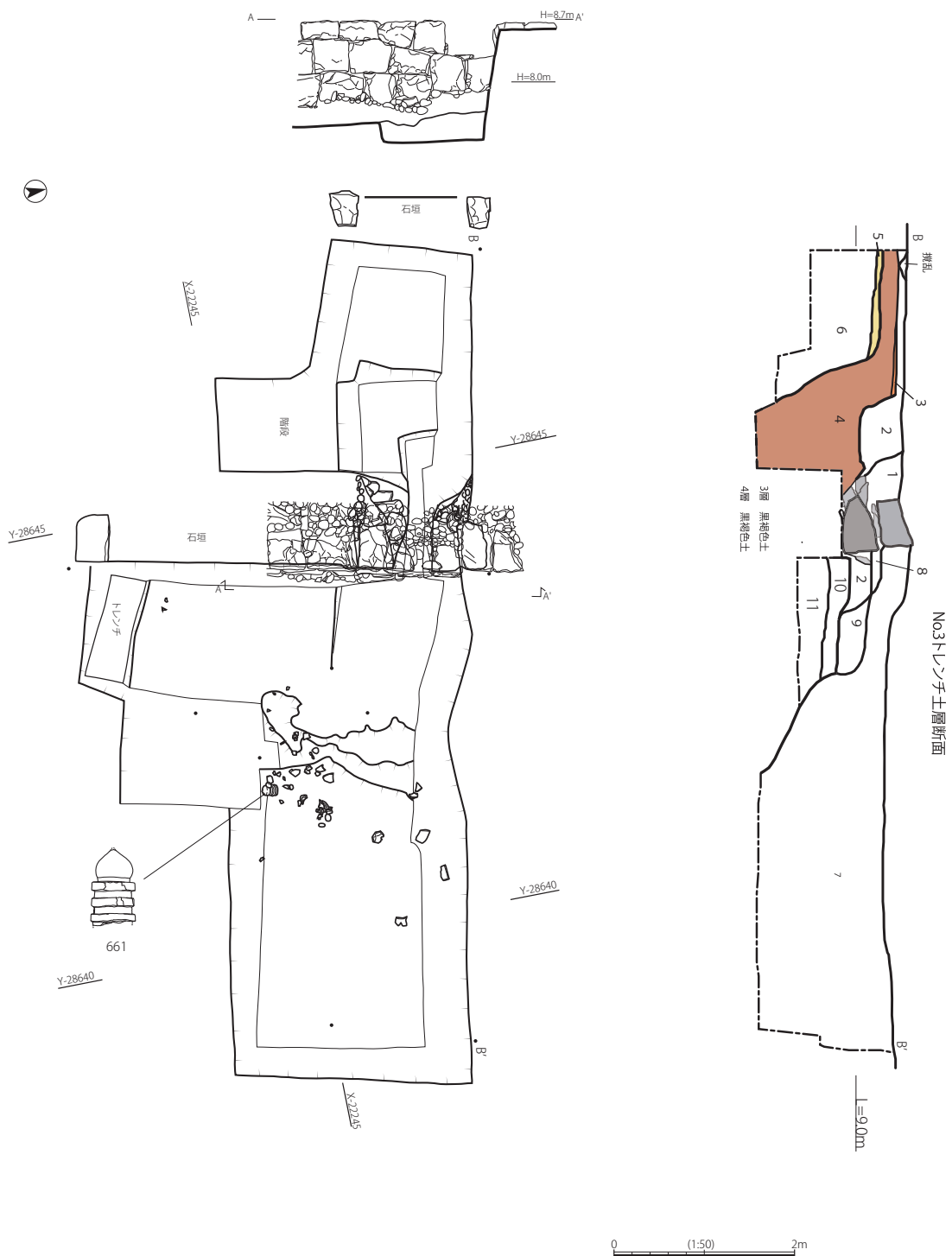


Fig.15 参道調査区 No.3 トレンチ実測図 S=1/50

・No.3 トレンチ (Fig.15)

No.3 トレンチは、さらに北側に設けたもので、No.1 トレンチと同じく東西方向に 10 m ほどの長さである。西側の石垣に一部かかり、東は現在も流れる排水路の傍までを範囲とした。このトレンチは、後に記す三次調査の花岡山・万日山 A-4 調査区の中に含まれる。

このトレンチでは堀側の状況をより広く捉えるため、東側石垣の前を 3.5 m × 2.5 m の範囲まで拡張した。当初は東西の土層断面を調査した。その結果、東側石垣の裏面のトレンチで 3 層と 5 層の二面で硬化面を確認した。鉄道敷設時の整地層の下に整地され硬化した 3 層を確認し、さらにその下に間層を挟んで厚さ 10 cm ほどの黄褐色粘質土の硬化した 5 層を確認した。この二つの層について先の No.1 トレンチでは硬化した層が 1 面だったことと、今回検出した層が間層を挟み明らかに時期差を持つと考えられることから、上部の硬化面を細川期のものとするなら、下の硬化面は加藤期のものであろうという推定がなされた。しかもその層を切るように深さ 1 m ほどの落ち込みが見え、対面する土層面にも同じ落ち込みがあることから溝状の落ち込みであることが分かった。この溝状の落ち込みは加藤期の堀ではないかと推測された。このトレンチによって細川期と加藤期の二時期に渡る道路もしくは参道の跡が存在することが確認されたことになる。

さらに先に記したように 5 層の上面の間層（4 層）は 5 層と溝を埋め込んでおり、その上に 3 層の硬化面がある。加藤期の道を埋めただけではなく、拡張して参道として使用されていると推測された。

一方、東側石垣の調査では、石垣の東表面を 2 m 程に渡って検出した。このトレンチでは石垣は三段に築成されていた。上の一段目は高さの低い石を配置し、二段目から No.1 トレンチに似た配置であった。ただ、トレンチ北側部分では二段になっており製作方法が異なっている。この違いは不明である。

さらに、トレンチの堀付近では石垣表面から 5.5 m ほど掘削した。掘り下げていくと、石垣足下 1 m ほどで灰色の硬くしまり硬化した岩盤質層があった。掘り下げはここまでで止めた。この硬化層は石垣足下から 2 m ほど先で層が断ち切れ、先はさらに落ち込んでいた。これは、岩盤を打ち抜き下層まで堀として掘削したためと考えた。しかし、その層になると湧水がひどく、ある程度のところで掘削を止めた。さらに深く落ちていくことは予想でき、この調査区の範囲では堀の最下層までは到達できないことが分かった。

土層の観察をしていくと、単に堀の埋土と考えていた土層もいくつものに分層でき、出土遺物から近世末から近現代に至る過程が読み取れた。特に近世に入ると思われる層に白色の粘土層があり、この層は堀の斜面を保護するための層とも考えた。これについては、三次調査の中でさらに述べる。

堀の埋土層中には多くの出土遺物があった。時代も近現代から江戸期のものまで様々であった。いずれも堀の埋土の傾斜に沿っての出土であった。その中で、幕末から明治初期にかけての層と考える暗褐色の層中に、宝塔もしくは宝篋印塔の相輪とみられるものが出土している。このトレンチが含まれる三次調査の花岡山・万日山 A-4 調査区でも、宝珠や五輪塔の火輪などが出土しており、堀にこの種の石塔類を遺棄したことがあったのかもしれない。また、他の調査区からも若干出土していたが、近世末の鞆の羽口が出土している。

石垣の下部の土層の状況は、自然層である 6 層の土層の状況とは異なり、いくつかに分層できる粘質土で小片ながら遺物が混入しており、これらの層が客土の可能性が高く、加藤期の道をさらに拡張したとすることに一致する。ただその時期は明確ではない。

・No.4 トレンチ

No.4 トレンチは、No.3 トレンチの北側の東側石垣の外側に設定した。長さ 4 m、幅 2.5 m ほどで、石垣の状況を確認するためのもので、石垣が二段であるところまで掘んだ。石は横長に使用し、二段目の下には先のトレンチで確認したように玉砂利が敷かれていた。

・No.5 トレンチ

No.5 トレンチは、No.4 トレンチの西側に設定したもので、長さ 3.5 m、幅 2 m ほどの調査範囲であった。

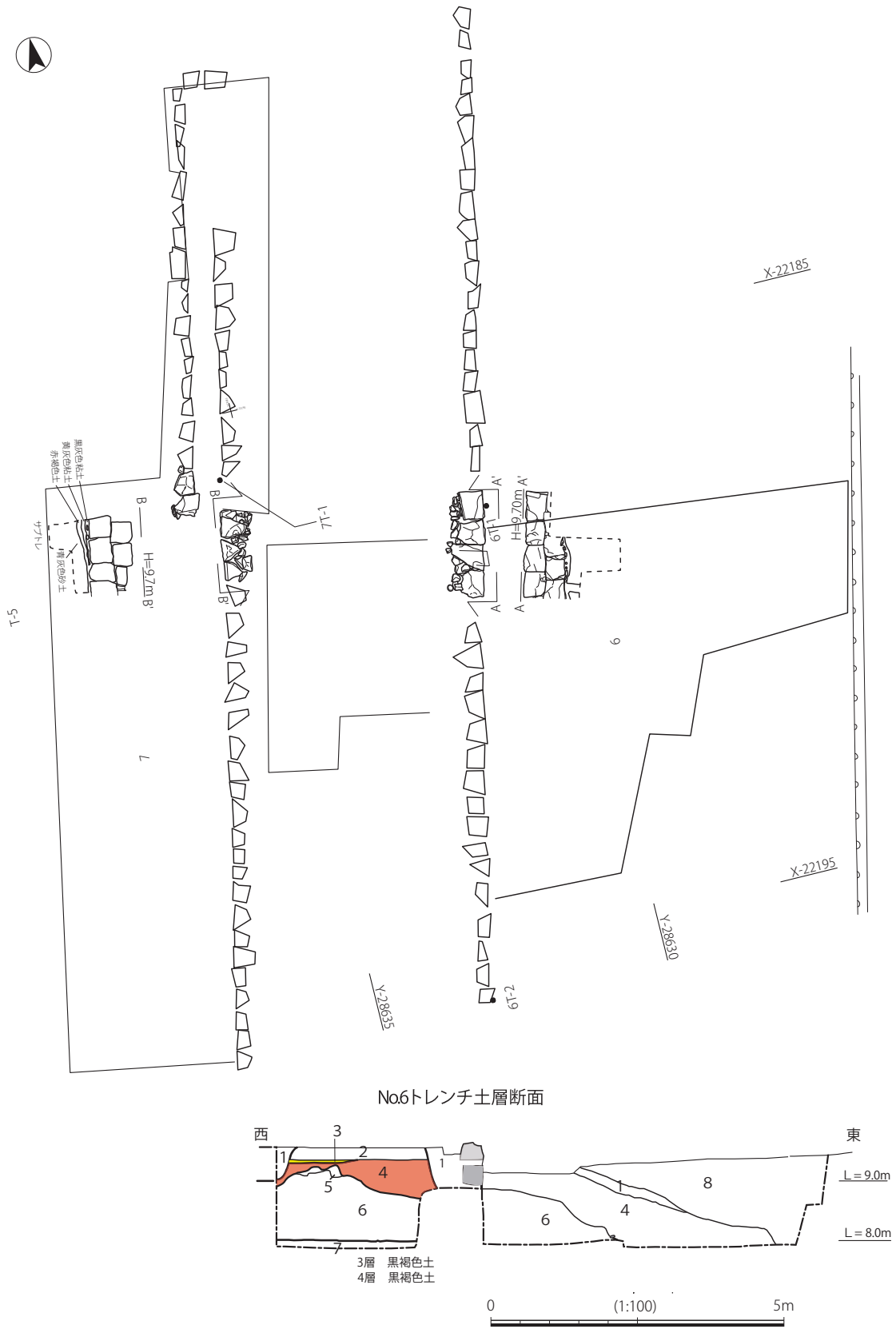


Fig.16 参道調査区 No. 6・7トレンチ石垣実測図 S=1/100

このトレンチでは、西側石垣表面の外側を確認した。石垣を3.5 mほど、二段確認したが、二段目は縦長になるように積んでいた。

・No.6 トレンチ (Fig.16)

No.6 トレンチとNo.7 トレンチは、No.4、No.5 トレンチの北側に設定されたトレンチで、No.6 トレンチは、石垣の内側から東側の排水路の縁までの長さ10 mほどに渡って設定された。No.3 トレンチで確認した参道と堀の北側での状況をつかむために調査された。

Fig.16の土層断面にみるように、No.3 トレンチで確認した3層の硬化面を確認し、間層において5層を断片的に確認できた。ただ、その下層の状況は、No.3 トレンチとは全く異なっていた。即ち、5層下位は砂層となっていた。砂層は深く、1 m以上掘削してもほとんど変わらず、その下もやや硬くしめる砂層であった。この砂層は遺物等は含まず、層的な汚れも見られないことから自然堆積層と判断した。No.3 トレンチとNo.6 トレンチの間は50 mほど離れているが、この距離で全く異なる層のあり方を示していた。

このように自然堆積状況は異なるものの、No.3 トレンチでも細川期、加藤期に当たる硬化面を確認したことで、加藤期の道と細川期の参道跡が確実に伸びていることが判明した。

さらに、石垣の東側部分でもNo.3 トレンチと同様の東側に傾斜する層を確認した。道と同じく堀の延長がこの範囲にも及ぶことを確認した。

このトレンチでは東側石垣を6 mほどに渡って確認した。やはり二段築成で下部には砂利や石片が敷かれていた。石垣に矢穴があることも分かった。

・No.7 トレンチ (Fig.16)

No.7 トレンチは、No.6 トレンチの西側に設定され、西側石垣の状況を掴むため南北方向に9 m、さらに西側の状況も掴むため一部3 m幅に拡張された。

このトレンチでは西側石垣の西側に側溝としての一段低い石垣列が平行して伸びていることが分かった。西側石垣は二段築成であったが、調査区の南側半分の一部壊れたか壊されたか不明であるが、積みなおしされていることも分かった。地山が砂層であるためかと思われた。

確認した側溝と考えられる石垣列は、これまで確認していた東西の石垣列と平行するが、一段低く積まれ鉄道からの排水路として利用されたと考えた。ただ、この側溝の石垣は途中でなくなっていた。その場所は西側石垣の乱れのあった場所であった。このような状況から、ある時期何らかの要因で石垣の破壊と再構築がなされたことがわかった。しかし、側溝までは再構築されていないところから、すでに側溝の機能は必要とされなかったと考えられた。

この調査区は、No.6 トレンチと共に、三次調査では花岡山・万日山 A-3 調査区の範囲に含まれ、さらに面的に調査を行った。

・No.8 トレンチ

No.8 トレンチは、No.6 トレンチの15 m北側に設定された。東側石垣の外側に設定され、長さ6 m、幅2 mほどである。このトレンチでも石垣の状況が確認された。長さ5.5 mほどを確認し、やはり二段築成であった。ここでも石材に矢穴を確認した。

・No.9 トレンチ

No.9 トレンチは、この調査では参道調査区の最も北に設定した調査区である。No.7 トレンチから30 mほど北へいったあたりに設定し、西側石垣の延長状況を確認するために、南北長4 m、東西幅1.5 mの広さを設定した。

調査では、深さ1 m近くまで掘り下げたが、石垣の残骸と思われる石材を数点確認したのみで、石垣列はなかった。この付近までは伸びていなかったのか、後に破壊されたのかは不明であった。

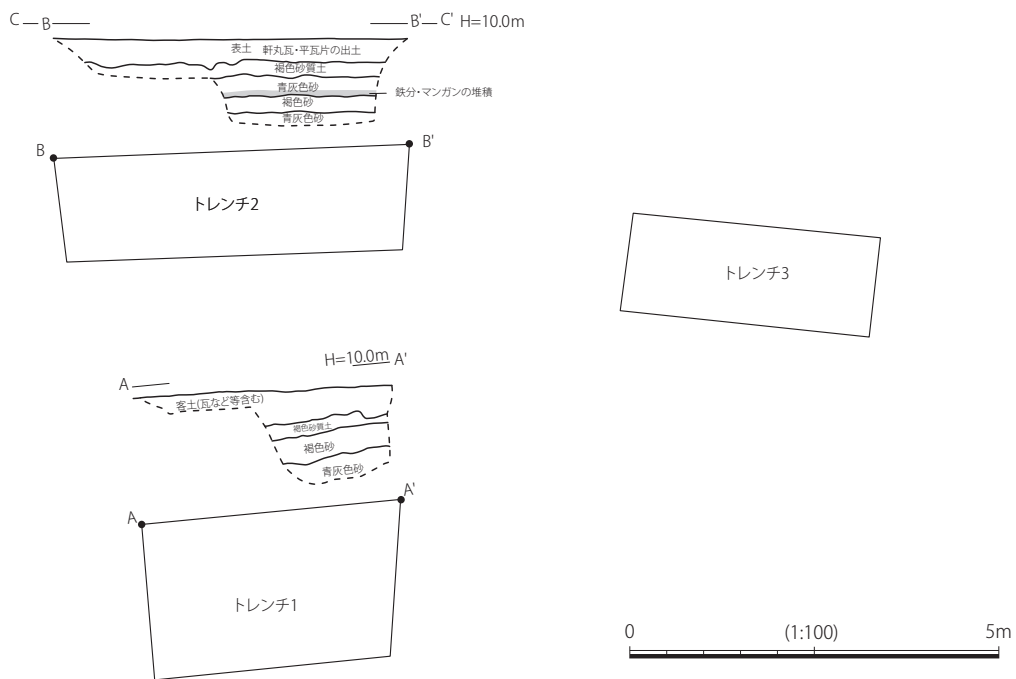
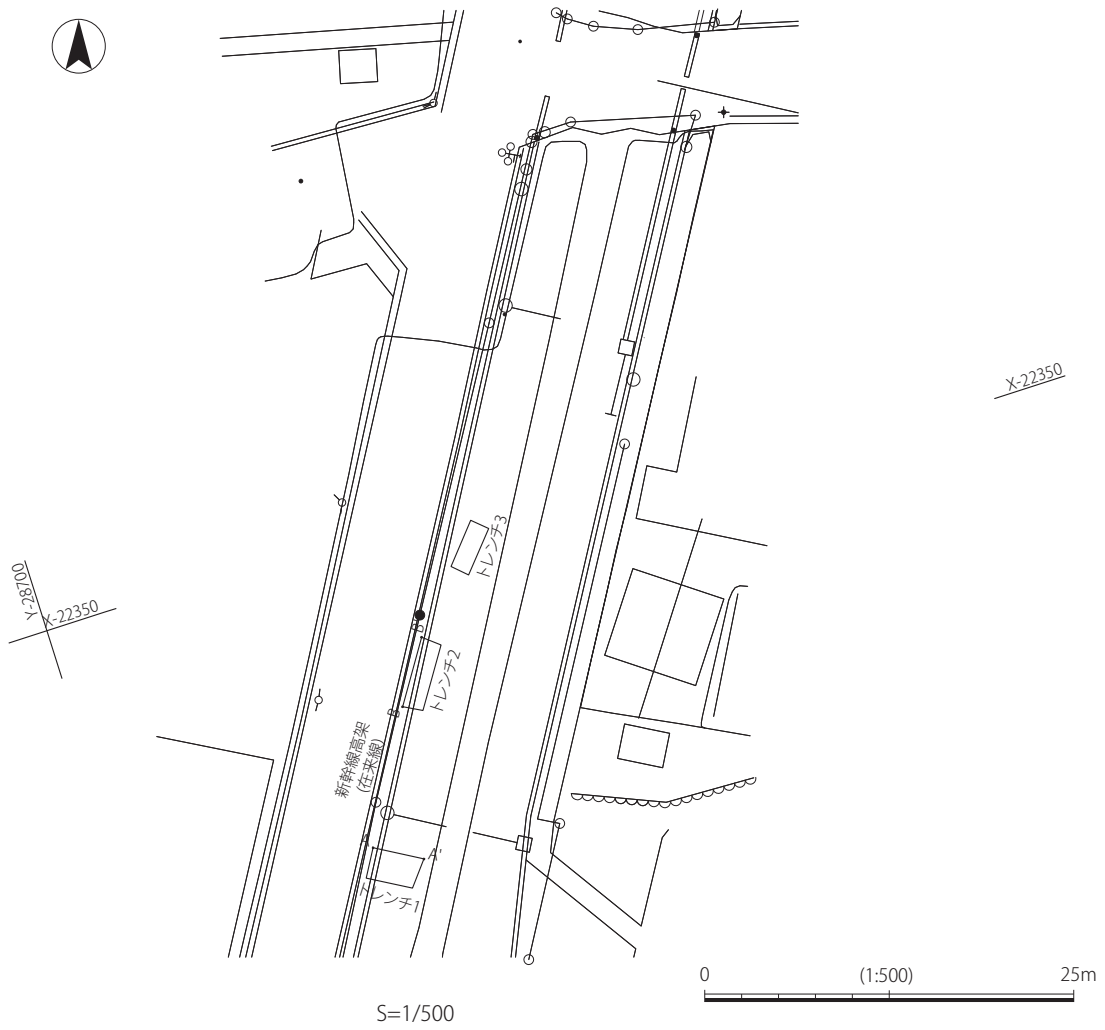


Fig.17 二次調査追加 トレンチ1・2・3実測図 S=1/100

この他、記録を取らなかったが、No.9 トレンチの付近は、高麗門と参道の関係で言えば、高麗門の出口で門外の勢屯の存在が予想される場所であった。そこで、No.9 トレンチの東側に重機で確認トレンチを入れてみたが、鉄道関係の工事による攪乱がなされ状況はつかめなかった。

(4) 下馬天神踏切南側の調査 (Fig.17)

一次調査では、下馬天神踏切のすぐ南側でトレンチ調査を行ったが、参道を確認できなかった。二次調査では再度確認調査を行った。

踏切の南側に、一次調査のさらに南側で西側によった3地点にトレンチを設定して調査した。ここでは各トレンチを調査時のままトレンチ1・2・3とする。

結果的には、いずれのトレンチでも下馬天神踏切で確認したような土層を確認しなかった。層的には、表土層には近世・近代の遺物の混入があるが、その下には砂層や砂質の粘性土があり、自然堆積層と考えた。攪乱はあったが、時期は近代のものと考えた。

この調査結果を踏まえ、下馬天神踏切以南には江戸期の参道は存在しないものと結論付けた。

PL.7 高麗門調査区遺構写真（1）



石垣検出状況（1）



石垣検出状況（2）



根固め周辺検出状況



根固め周辺土層断面



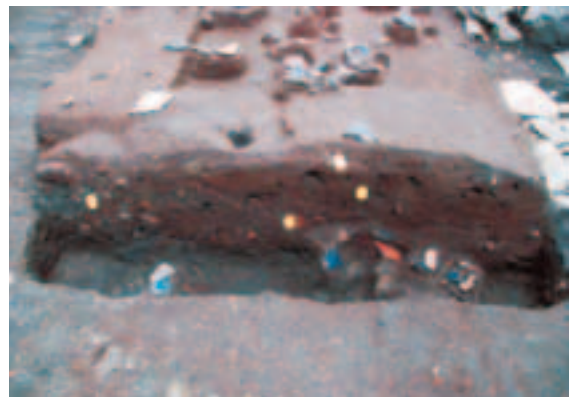
遺物出土状況



版築検出状況

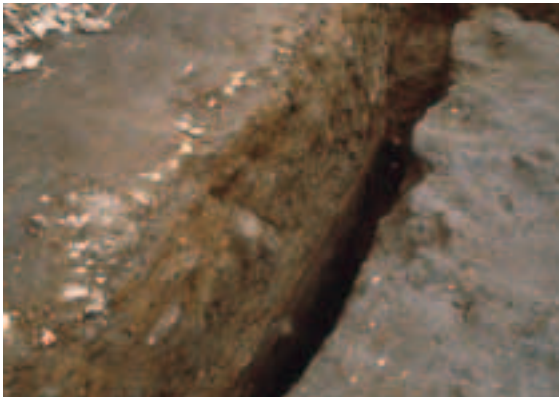


トレンチ北側土層断面



トレンチ東西土層断面

PL.8 高麗門調査区遺構写真（2）



東壁土層断面（1）



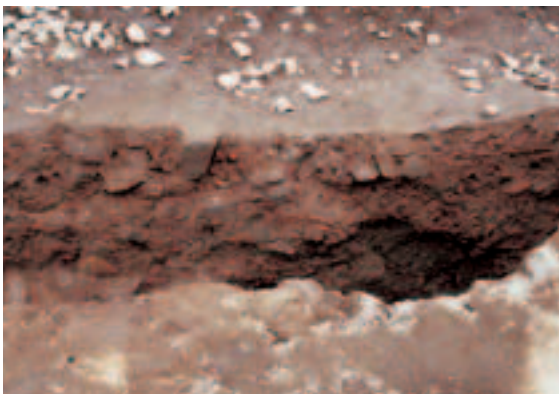
東壁土層断面（2）



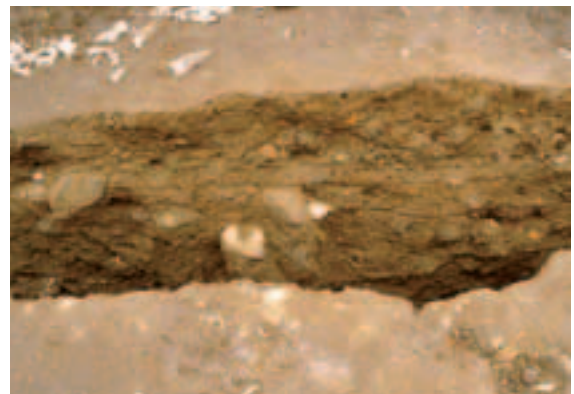
東壁土層断面（3）



東壁土層断面（4）



東壁土層断面（5）



東壁土層断面（6）



東壁土層断面（7）



根固め部遺物出土状況

PL.9 参道トレンチ調査区遺構写真



参道 No.1 トレンチ土層断面



参道 No.3 トレンチ土層断面



参道 No.6 トレンチ土層断面

PL.10 高麗門調査区遺物写真 (1)



572 根固め周辺出土 (外器面)



575 根固め周辺出土 (内器面)



577 根固め周辺出土 (内器面)



572 根固め周辺出土 (内器面)



575 根固め周辺出土 (外器面)



577 根固め周辺出土 (外器面)



573 根固め周辺出土



574 根固め周辺出土



576 根固め周辺出土



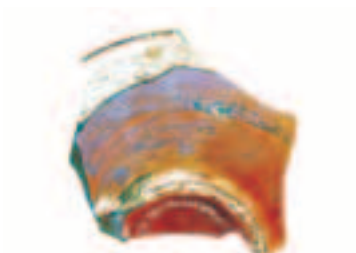
502 J-43 出土 (内器面)



571 J-43 出土 (内器面)



567 J-43 出土 (内器面)



502 J-43 出土 (外面器)



571 J-43 出土 (外面器)



567 J-43 出土 (外面器)



507 J-43 出土



505 J-43 出土



504 J-43 出土

PL.11 高麗門調査区遺物写真（2）



568 J-43 出土（内器面）



563 J-43 出土（内器面）



565 J-43 出土（内器面）



568 J-43 出土（外器面）



563 J-43 出土（外器面）



565 J-43 出土（外器面）



564 J-43 出土（内器面）



561 J-43 出土（内器面）



578 J-43 出土（内器面）



564 J-43 出土（外器面）



561 J-43 出土（外器面）



578 J-43 出土（外器面）



560 J-43 出土（内器面）



506 J-43 出土（内器面）



558 J-43 出土（内器面）



560 J-43 出土（外器面）



506 J-43 出土（外器面）



558 J-43 出土（外器面）

PL.12 高麗門調査区遺物写真 (3)



510 J-43 出土 (内器面)



503 J-43 出土



559 J-43 出土



510 J-43 出土 (外器面)



562 J-43 出土



569 J-43 出土



509 J-43 出土



566 J-43 出土



212 J-44 出土



551 J-42 出土 (内器面)



552 J-42 出土 (内器面)



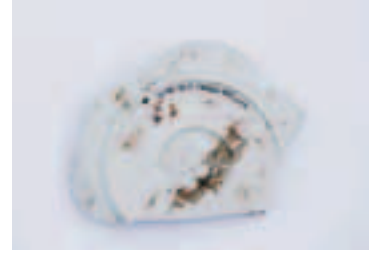
553 J-42 出土 (内器面)



551 J-42 出土 (外器面)



552 J-42 出土 (外器面)



553 J-42 出土 (外器面)



554 J-42 出土



550 J-42 出土



549 J-42 出土

PL.13 高麗門調査区遺物写真（4）



556 J-42 出土（内器面）



555 J-42 出土（内器面）



511 J-42 出土



556 J-42 出土（外器面）



555 J-42 出土（外器面）



557 J-42 出土



546 J-41 出土（内器面）



547 J-41 出土（内器面）



548 J-41 出土（内器面）



546 J-41 出土（外器面）



547 J-41 出土（外器面）



548 J-41 出土（外器面）



570 J-43 出土



181 I-44 出土（表面）



177 I-44 出土



182 I-44 出土



181 I-44 出土（裏面）



213 J-43 出土

PL.14 高麗門調査区遺物写真（5）



545 J-43 出土（内器面）



544 I-43 出土（内器面）



178 参道石垣付近出土



545 J-43 出土（外器面）



544 I-43 出土（外器面）



211 参道出土



508 調査区一括

PL.15 高麗門調査区遺物写真(6)



179 I-43 出土



183 I-44 出土



184 I-44 出土



180 I-44 出土

Tab.2 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (1)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径	高さ	内面	外面	内面			
14	211	参道	陶器	土瓶	トレンチ	1層	16.4	7.7	11.3	施釉(茶)、回転ナデ、ヘラケズ	Hue10YR8/4 浅緑	Hue10YR8/2 灰白	微細な茶色粒を少量含む。	良好	注口、把手。
13	213	高麗門	磁器染付	小瓶	J-43 サブトレ	1層	(1.6)	—	—	回転ナデ	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y7/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。
10	502	高麗門	陶器	小鉢	J-43	1層	(18.0)	(7.6)	5.4	施釉(灰)	Hue7.5YR3/4 暗褐	Hue7.5YR3/4 暗褐	白色粒、雲母を含む。	良好	高台部重ね焼き痕。
12	503	高麗門	陶器	鉢	J-43	—	—	—	—	施釉(白)	Hue5YR4/3 におい赤褐	Hue5YR4/3 におい赤褐	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に釉(緑、茶)を用いて模様が描かれている。
10	504	高麗門	陶器	鉢	J-43	—	—	—	—	施釉(茶)	Hue7.5YR5/3 におい黄褐	Hue7.5YR5/3 におい黄褐	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に釉(白)を用いて模様が描かれている。
10	505	高麗門	陶器	鉢?	J-43	2層	—	—	—	施釉(透明)	Hue10YR5/4 におい黄褐	Hue10YR5/4 におい黄褐	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に釉(緑)を用いて模様が描かれている。
11	506	高麗門	陶器	鉢	J-43	1層	—	—	—	施釉(灰白)	Hue5YR4/3 におい赤褐	Hue5YR4/3 におい赤褐	微細な白、黒色粒を含む。	良好	外面に釉(茶)を用いて模様が描かれている。
10	507	高麗門	磁器	小杯	J-43	1層	(6.0)	—	—	施釉(透明)	HueN9/0 白	HueN9/0 白	流入物なし。	良好	外面に色絵。
14	508	高麗門	陶器	鉢?	—	1層	—	—	—	施釉(透明)	Hue5YR4/3 におい赤褐	Hue5YR3/2 オリーブ黒	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に花の模絵。
12	509	高麗門	磁器染付	碗	J-43	5層	—	4.0	—	施釉(透明)	Hue7.5Y7/1 灰白	Hue7.5Y7/1 灰白	微細な黒、白色粒を含む。	良好	内外面に染付。
12	510	高麗門	陶器	鉢	J-43	4層	—	—	—	施釉(茶)	Hue5YR4/3 におい赤褐	Hue5YR4/3 におい赤褐	微細な白色粒を含む。	良好	外面に釉(白)を用いて模様が描かれている。
13	511	高麗門	土師器	火鉢	J-42	5下層	(17.0)	—	—	文様	Hue7.5YR6/4 におい緑	Hue7.5YR7/6 緑	微細な褐色粒を含む。	良好	外面に模絵。
14	544	高麗門	磁器染付	皿	J-43	—	(13.4)	8.3	3.8	施釉(灰白)、ヘラケズ	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	黒色粒を含む。	良好	内面染付。口唇部に群刺。此の目高台。
14	545	高麗門	陶器	土瓶?	J-43	—	(16.0)	—	—	施釉(薄緑)、回転ナデ	Hue2.5Y6/4 におい黄	Hue10YR5/4 におい黄褐	微細な黒色粒を多く含む。	良好	19世紀。キザ目。関西、福岡?
13	546	高麗門	磁器染付	碗	J-41	—	—	—	—	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。
13	547	高麗門	陶器	瓶	J-41	—	(9.6)	—	—	施釉(黒)、ヘラケズ	Hue7.5YR5/1 秘灰	Hue7.5YR5/1 秘灰	微細な白色粒を含む。	良好	貫入。
13	548	高麗門	陶器	碗、皿?	J-41	5・下層	—	(4.3)	—	施釉(透明)	Hue7.5Y5/1 灰	Hue7.5Y5/1 灰	黒色粒を含む。	良好	貫入。
12	549	高麗門	陶器	碗	J-42	—	—	—	—	施釉(薄オリーブ)	Hue10YR4/3 におい赤褐	Hue2.5Y6/2 灰	微細な黒色粒を含む。	良好	—
12	550	高麗門	陶器	碗	J-42	—	—	—	—	施釉(オリーブ)、回転ナデ	Hue7.5YR4/2 灰褐	Hue10YR6/1 秘灰	微細な黒色粒を多く含む。微細な白色粒を少量含む。	良好	明治。
12	551	高麗門	磁器染付	重ね鉢	J-42	—	(11.2)	(11.2)	—	施釉(透明)	HueN8/0 灰白	HueN8/0 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。肥前系。19世紀。
12	552	高麗門	磁器染付	皿	J-42	—	(12.8)	(6.0)	4.1	施釉(透明)	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y7/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。肥前の目高台。19世紀前。
12	553	高麗門	磁器染付	皿	J-42	—	—	—	—	施釉(透明)	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	微細な褐色粒を含む。	良好	内面に染付。蛇の目高台。
12	554	高麗門	磁器染付	皿	J-42	—	—	—	—	施釉(透明)	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内面に染付。肥前系。19世紀。
13	555	高麗門	磁器染付	碗	J-42	—	(10.0)	—	—	施釉(透明)	HueN8/0 灰白	HueN8/0 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。
13	556	高麗門	陶器	小鉢	J-42	最下層	—	—	—	ナデ	Hue2.5Y5/2 暗灰黄	Hue2.5Y5/3 暗灰黄	白、黒色粒を含む。	良好	—
13	557	高麗門	磁器染付	瓶	J-42	最下層	(3.2)	—	—	施釉(透明)、回転ナデ	Hue2.5Y7/1 灰白	Hue2.5Y7/2 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。明治以降。外面にイッチンによる模絵。
11	558	高麗門	陶器	鉢	J-43	—	—	—	—	施釉(透明)	Hue10YR4/2 灰黄褐	Hue10YR4/2 におい黄褐	微細な白色粒を少量含む。	良好	内面に釉(白)を用いて模様が描かれている。
12	559	高麗門	磁器染付	碗	J-43	—	—	—	—	施釉(透明)	HueN8/0 灰白	HueN8/0 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付(中国清)
11	560	高麗門	陶器	鉢	J-43	—	—	—	—	施釉(白)	Hue7.5YR4/1 秘灰	Hue7.5YR4/1 秘灰	微細な白色粒を主に含む。	良好	17世紀か18世紀? 肥前。白化粧。
11	561	高麗門	磁器染付	小杯	J-43	—	—	—	—	施釉(透明)	HueN8/0 灰白	HueN8/0 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。

Tab.3 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (2)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	内面	外面	内面			
12	562	高麗門	磁器染付	小碗	J-43		(8.0)	(3.0)	4.4	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付。19世紀前。肥前系。
11	563	高麗門	磁器	皿	J-43		(15.8)	(8.2)	4.8	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	蛇の目高台。
11	564	高麗門	磁器染付	蓋	J-43		(11.0)	(6.4)	3.2	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	良好	内外面に染付。
11	565	高麗門	磁器染付	小碗	J-43		(10.0)	3.6	5.5	施釉(透明)	施釉(透明)、回転ナデ	Hue7.5Y7/1 灰白	Hue7.5Y7/1 灰白	良好	内外面に染付。19世紀後。肥前。
12	566	高麗門	磁器染付	重鉢	J-43		—	—	(4.5)	施釉(透明)、回転ナデ	施釉(透明)	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	良好	外面に染付。19世紀。肥前系。
10	567	高麗門	磁器染付	蓋	J-43		—	(2.2)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	良好	内外面に染付。肥前系。18世紀後。
11	568	高麗門	磁器染付	蓋	J-43		—	4.4	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	良好	内外面に染付。明治。肥前。
12	569	高麗門	磁器染付	碗	J-43		—	5.7	—	施釉(透明)、回転ナデ	施釉(透明)、回転ナデ	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	良好	外面に染付。19世紀前半。肥前。
13	570	高麗門	磁器	油壺	J-43		—	—	—	ヘラカズ)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	外面に色絵。肥前。19世紀。
10	571	高麗門	陶器	口縁部	J-43	1層	—	—	—	施釉(白)、回転ナデ	施釉(白)、回転ナデ	Hue7.5YR3/1 黒褐	Hue7.5YR3/1 黒褐	良好	残りが悪く器種不明。
10	572	高麗門	磁器染付	蓋	根固め周辺	1層	(9.4)	(3.8)	2.5	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	良好	内外面に染付。19世紀前。
10	573	高麗門	陶器	行平蓋	根固め周辺	1層	—	(5.0)	—	施釉(薄オリーブ)、回 転ナデ	施釉(薄オリーブ)、回 転ナデ	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/3 灰黄	良好	外面に模線。
10	574	高麗門	陶器	碗	根固め周辺	1層	—	(5.6)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue7.5YR3/3 浅黄橙	Hue7.5YR3/4 浅黄橙	良好	
10	575	高麗門	陶器	土瓶?	根固め周辺	1層	(6.8)	—	—	施釉(透明)	回転ナデ	Hue2.5Y5/1 黄灰	Hue2.5Y5/2 黄灰	良好	底部。
10	576	高麗門	陶器	鉢?	根固め周辺	1層	—	—	—	施釉(オリーブ)	施釉(オリーブ、白)	Hue5Y4/1 灰	Hue5Y4/1 灰	良好	残りが悪く器種不明。
10	577	高麗門	陶器	胴部	根固め周辺	1層	—	—	—	回転ナデ	施釉(白)	Hue5Y6/2 灰オリーブ	Hue5Y3/1 オリーブ黒	良好	残りが悪く器種不明。
11	578	高麗門	磁器染付	碗	J-43	1層	—	(4.0)	—	施釉(透明)、回転ナデ	施釉(透明)	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	良好	内外面に染付。肥前系。明治。

Tab.4 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (3)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
						全長	玉縁長	高さ	瓦当厚	文縁区径	内面	外面			
14	11	高麗門	軒丸瓦	参道 石垣付近		—	—	—	6.8	不定方向のナデ	調整 横方向のナデ、文縁	Hue2.5Y7/1 灰白	HueN4/0 灰	1mm大の黒色粒を多く含む。	良好 桐文。
15	11	高麗門	軒丸瓦	I-43		—	—	14.8	10.9	カキヤブ、指押さえナ デ、不定方向のナデ、 ヘラナデ後指ナデ	調整 ナデ、文縁	Hue5Y6/1 灰	Hue5Y7/1 灰白	1mm大の黒色粒、微細な白色 粒を多く含む。	良好 桔梗文。
15	11	高麗門	軒丸瓦	I-44		—	—	13.8	2.3	指押さえナデ、不定方 向のナデ、ナデ	調整 ナデ、文縁	HueN4/0 灰	HueN4/0 灰	1mm以下の黒色粒を多く含む。 微細な白色粒を含む。	良好 日足文。
13	11	高麗門	軒丸瓦	I-44		—	—	—	—	不定方向のナデ、ナデ	調整 文縁	Hue2.5Y6/2 灰黄	HueN3/0 暗灰	1mm大の黒色粒を多く含む。	良好 桐文。

Tab.5 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (4)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
						全長	幅	高さ	瓦当厚	文縁区厚	文縁区径	内面			
13	11	高麗門	軒平瓦	I-44		7.2	—	1.5	1.5	3.0	横方向のナデ、指押 さえナデ	調整 指押さえナデ	HueN4/0 灰	HueN5/0 灰	1mm以下の長石を多く含む。 良好 外面に刻印。桔梗文唐草文。

Tab.6 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (5)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考		
						全長	幅	高さ	瓦当厚	軒丸部幅	軒平部幅	文縁区径				内面	外面
13	12	高麗門	目板棧瓦	I-44		18.4	17.3	3.8	—	8.5	11.8	—	縦方向の工具による ナデ、ナデ	HueM4/0 灰	HueN5/0 灰	1mm大の黒色粒、微細 な白色粒を含む。	良好 被熱。

Tab.7 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (6)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考	
						全幅	高さ	丸部全長	丸部全幅	平部全長	平部全幅	内面				外面
15	12	高麗門	切隅瓦	I-44		15.9	(6.6)	(15.0)	(7.3)	(12.7)	(6.5)	ナデ、ケズ	Hue3/0 暗灰	Hue3/0 暗灰	1~2mmの黒色粒を多く含む。 0.5~3mmの長石を含む。	良好 巴文。

Tab.8 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (7)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考	
						全幅	筒部幅	瓦当部長	瓦当部幅	文縁区径	文縁区幅	内面				外面
15	13	高麗門	烏奈瓦	I-44		8.7	5.5	11.4	7.8	5.5	5.2	ナデ	HueM4/0 灰	HueM4/0 灰	1mm大の黒色粒を多く含む。1mm 以下の白色粒を少量含む。	良好 桔梗文。

Tab.9 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (8)

図版 番号	挿載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
							全長	幅	内面	外面	内面	外面			
12	212	高麗門		硯	J-44		13.2	6.2	2.0	ミガキ	HueN1.5/0 黒	HueN1.5/0 黒	混入物なし。	良好	

Tab.10 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (9)

図版 番号	挿載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)											備考				
							イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル		ヲ	カ		
15	661	参道	五輪塔	相輪	3トレンチ		7.4	1.4	2.3	1.9	2.5	1.8	2.2	9.9	8.7	11.6	10.0	11.3	10.2	12.0	12.0	安山岩。2~5mm程度の黒雲母が目立つ。

Tab.11 花岡山・万日山遺跡群高麗門調査区遺物観察表 (10)

図版 番号	挿載 番号	調査区	種別	種類	出土地点	層位	寸法(cm)		色調	備考
							縦	横		
96	594	高麗門	泥面子	人形	J-42		3.2	2.1	Hue10YR8/4 淺黄橙	
96	595	高麗門	泥面子	人形	J-44		2.6	2.4	Hue5YR6/6 橙	
96	596	高麗門	泥面子	人形			3.0	2.5	Hue7.5YR7/6橙 赤色顔料。	
96	597	参道	泥面子	人形	2トレンチ		3.5	1.8	Hue10YR7/4 におい黄橙	
96	598	参道	泥面子	人形	2トレンチ		3.2	1.9	Hue10YR7/4 におい黄橙	
96	599	参道	泥面子	人形	2トレンチ		3.3	2.3	Hue10YR7/4 におい黄橙	
96	600	参道	泥面子	人形	トレンチ		4.2	2.2	Hue10YR7/2 におい黄橙	
97	618	高麗門	泥面子	人形	I-43	上層	3.0	2.4	Hue7.5YR8/6 黄橙	
97	619	高麗門	泥面子	動物	I-44	上層	2.2	2.8	Hue10YR8/6 黄橙	
97	620	参道	泥面子	植物	2トレンチ		3.3	3.2	Hue10YR6/4 黄橙	

第3節 文化財保護と工事変更

1 協議

文化課では、検討委員会から提出された遺跡保護の要望書を受けて、文化財保護の観点から確認された遺構の現地保存について事業主体者である土木部都市計画課鉄道高架推進室と協議を行った。また、そこを通じてJR九州や熊本市等関係機関との協議を併せて行った。限られた期間の中でできる限り要望書の趣旨に沿った保護案が検討されていった。

その結果、国特別史跡である「熊本城跡」と関係する重要な遺跡であることが認識されると共に最終的には熊本県知事の英断により、要望書にそって「高麗門」は現地保存、参道についてはできる限り現地保存ということになった。

2 工事変更と法的手続き

保護方針が決定されたところで、より具体的な工法やそのための方法をさらに検討・協議された。さらに、その場合の費用対効果の基準を保護すべき文化財の重要地点の割り出しとを経て、施工箇所の変更が検討されることになった。

法的な手続きでは、事業主体者から出された文化財保護法第94条の規定に基づく通知に対し、平成24年7月17日付教文第590号で熊本県教育長から熊本県知事あてに勧告を行った。それを受けて工事内容の見直し作業が法的にも進められた。

3 工事内容と文化財保護

工事に対する勧告を受けて工事内容の見直しによって、高麗門調査区については全面保存し、参道部分については可能な限り遺構を残すように工事内容が変更された。

具体的には、高麗門調査区付近に建てられる予定であった橋脚の位置を北側に移動し構造を強化し、さらにその橋脚を後ろで支えるために新たな橋脚をその北側に設けることになった。それに伴い当初のラーメン式高架橋構造の一部を変更させることになった。また、高麗門踏切以南に先の橋脚と踏切を跨いで繋がる南側の橋脚も上部に渡す橋を支えるために、構造を変えて強化することになった。

さらに、高麗門踏切以南の参道を確認した箇所については、その遺構をできる限り保護するため、当初計画にあったラーメン式高架橋構造から合成桁式高架構造の橋脚へと変更した。

以上のことをまとめて示したのが、Fig.18の模式図である。左の当初案が右の施工案へと変更された。

このような変更内容を受けて、文化課は検討委員会にも図り、最終的に要望書の内容に沿ったもので、文化財の保護が図れるとして了承した。

この変更によって、当初計画によってなくなるはずだった文化財が、その半分程度まで現地に残されることになった。また、文化財に影響の及ぶ範囲は、発掘調査を行い、記録保存として残し、現地に残された部分と合わせて将来の活用を待つこととなった。

このようなことが可能になったのは、熊本城にかかる貴重な文化財として認識され、知恵と技術力によって文化財保護を達成されたのは偏に熊本県土木部の英断の賜物である。併せて熊本県土木部及びその関係者と文化財保護部局の協力によって達成されたものでもある。

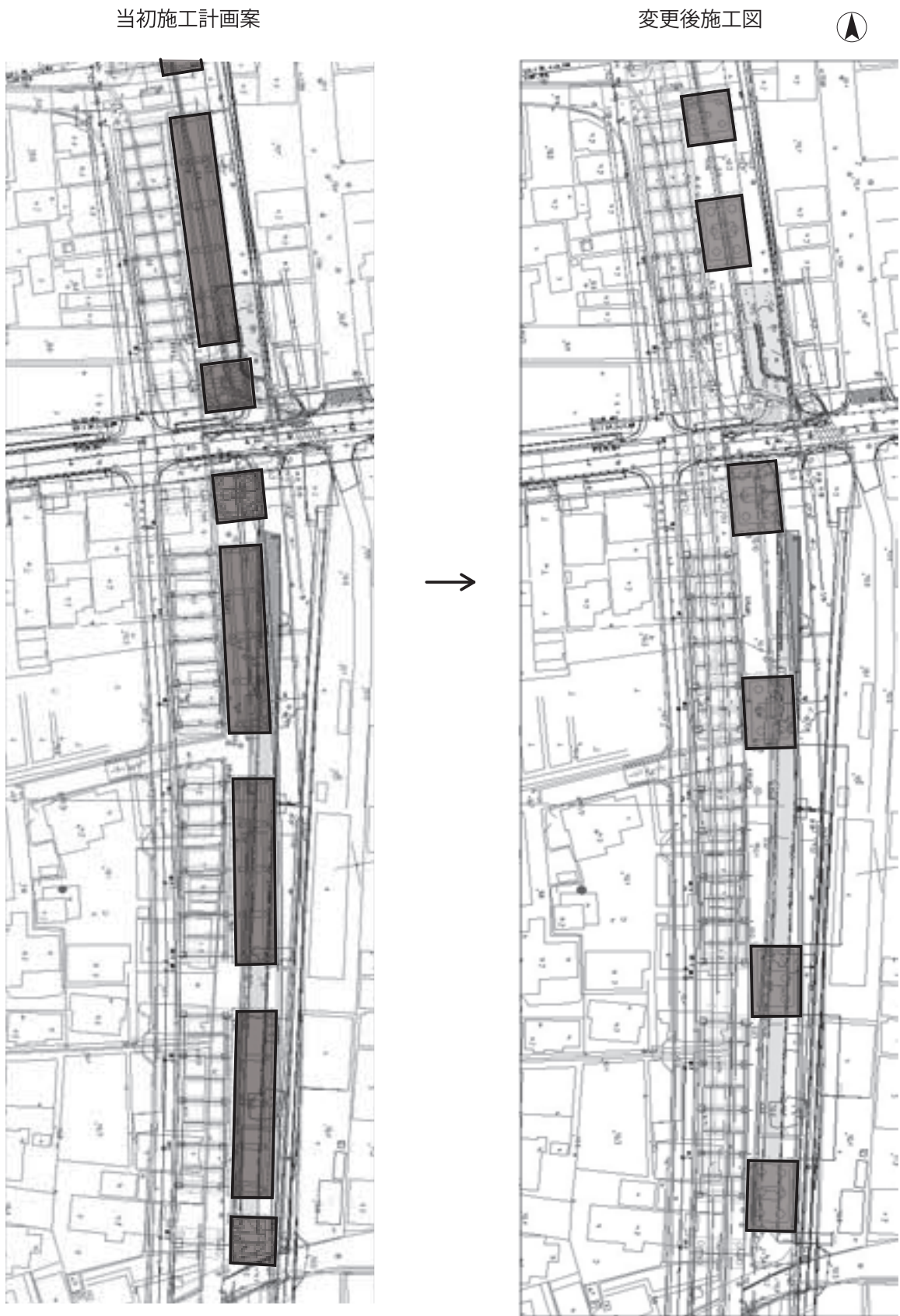


Fig.18 計画見直し状況図

第4節 新馬借遺跡B調査区

1 調査区概要

この調査区は、確認調査の結果、熊本城関係の遺構がないと判断した範囲である。先行して調査を実施した橋脚 P171 と、全面掘削される橋脚基礎 R173 が設置される場所に当たる。一次調査の結果では、弥生時代の竪穴遺構や焼土が確認されていた。

新馬借B調査区は、今回の報告書で扱う調査区の中で最も北側に位置する。すでに調査の経緯で述べている通り、平成23年度の12月から調査に入り、平成24年度の8月まで調査を行った。調査工程についての詳細は調査経過によるが、調査範囲については、平成23年度の調査範囲が橋脚 P171 に当たる部分で、平成24年度の調査範囲が、P172 と P173 に当たる部分となる。平成23年度の調査区は、工事工程の都合により調査期間が限られていたため、橋脚 P171 に限った範囲での調査となった。次年度も調査を行っているが、いったん平成23年度末に、それまでの調査区を埋戻すことになった。そのため、調査終了面に砂を敷き、その上を埋め戻すという形をとった。翌平成24年度に、本年度調査分の表土剥ぎを行うが、その際に、前年度の調査区範囲を一部掘り返す形となった。結果として、平成23年度調査区の南側半分ほどを再度掘り返し、そこから南側に調査区を広げ、それが平成24年度分の調査区となった。そのため、平成23年度の調査範囲と24年度の調査範囲が一部重なっている。各調査区は、B23調査区が南北13m、東西6mで面積は78㎡、B24調査区は南北83m、東西6.5mで面積539.5㎡となった。ちなみに、23年度分調査区は南北42m、24年度分調査区は南北83mで約30m、両調査区にダブリがあった。

遺構については、確認調査で弥生時代の竪穴遺構が確認されていたが、本調査ではそれを確認することができなかった。遺物の集中区はあったものの、明確な掘り込みを確認することができず、遺構と断定することはできなかった。それでも、弥生時代かと思われる土坑と硬化面を数箇所確認することはできた。また、中世の溝状遺構、近世の遺構も確認できた。全体としては、面積に対して遺構数は少なかったといえる。

遺物については、弥生時代の遺物を中心に、古代、中世、近世以降の各遺物が出土している。遺物についても、「多量に」とは言えない量であった。

次に、土層の状況についてだが、本調査の際に記録した土層断面については、Fig.19・Fig.20・Fig.21に記載している。調査区の北側は南から北へと傾斜しているが、南側になると逆に北から南へと落ちていく。このうち、上部の土層が近世の土塁に伴う層と考えられるため、まずそれについて詳述する。調査区北側は、自然堆積のようだが、中央になると「敷粗朶」がみられた。この調査区中央付近は、非常に水はけが悪く調査中にも水浸しになったり、底なし沼のようになりたりした条件の悪いエリアだった。そのため、湿地であったこの一帯の弱い地盤を補強するために、植物を間に挟みながら、細かく版築していった様子が確認できた。さらに調査区の南側にいくと、しっかりとした版築層が20mほどの範囲で確認できた。一つの層の厚さは10cm～20cmほどで、似たような層が交互に入ってくる。大きく3つの層に分けられた。粘質土を主体とする層、砂を主体とする層、粘質土と砂の混合層である。これらの層が、順番に重ねられ版築されていた。そして、この版築層の中に B24-S007 の石組がみられた。S007 の詳細については後に述べる。

次に、弥生時代後期の包含層について述べる。この層は、黒褐色を呈し泥炭層のような印象を受けるが、黒ボクに近い層で遺物包含層である。この層中には通常、遺構が多く遺物もかなり含まれているが、今回の調査では、遺構はあまり確認ができなかったが、遺物は多く得ることができた。

2 遺構と遺物

土層のところでも述べたが、この調査区で確認している遺構は、弥生時代のものと中世及び近世以降のものに大きく分けられる。

まず、弥生時代の遺構は、主にこの調査区下位の黒色の層中で検出した。弥生時代の遺構全般に言えることは、掘り込みが明確に確認できなかったということである。遺物の集中、断面での落ち込みなど遺構と思われるいくつかの状況が確認はできたが、プランや断面での立ち上がり等がはっきりとしないなどのあいまいな点もあった。

次に、各遺構の詳細について述べる。

今回の報告にあたり、調査が2ヵ年度にまたがり、年度ごとになるため遺構番号が重なってくる。そこで、便宜上同じ新馬借B調査区ではあるが「B」の後に年度を続け、B23調査区（B調査区の23年度調査分）とし、その後に遺構番号を続けることで年度ごとの遺構の違いを明らかにすることとした。

なお、調査の際に、B23-S001という遺構番号をつけて調査したが、遺構とは言えなかったので欠番とする。

[B23-S002] (ST01)

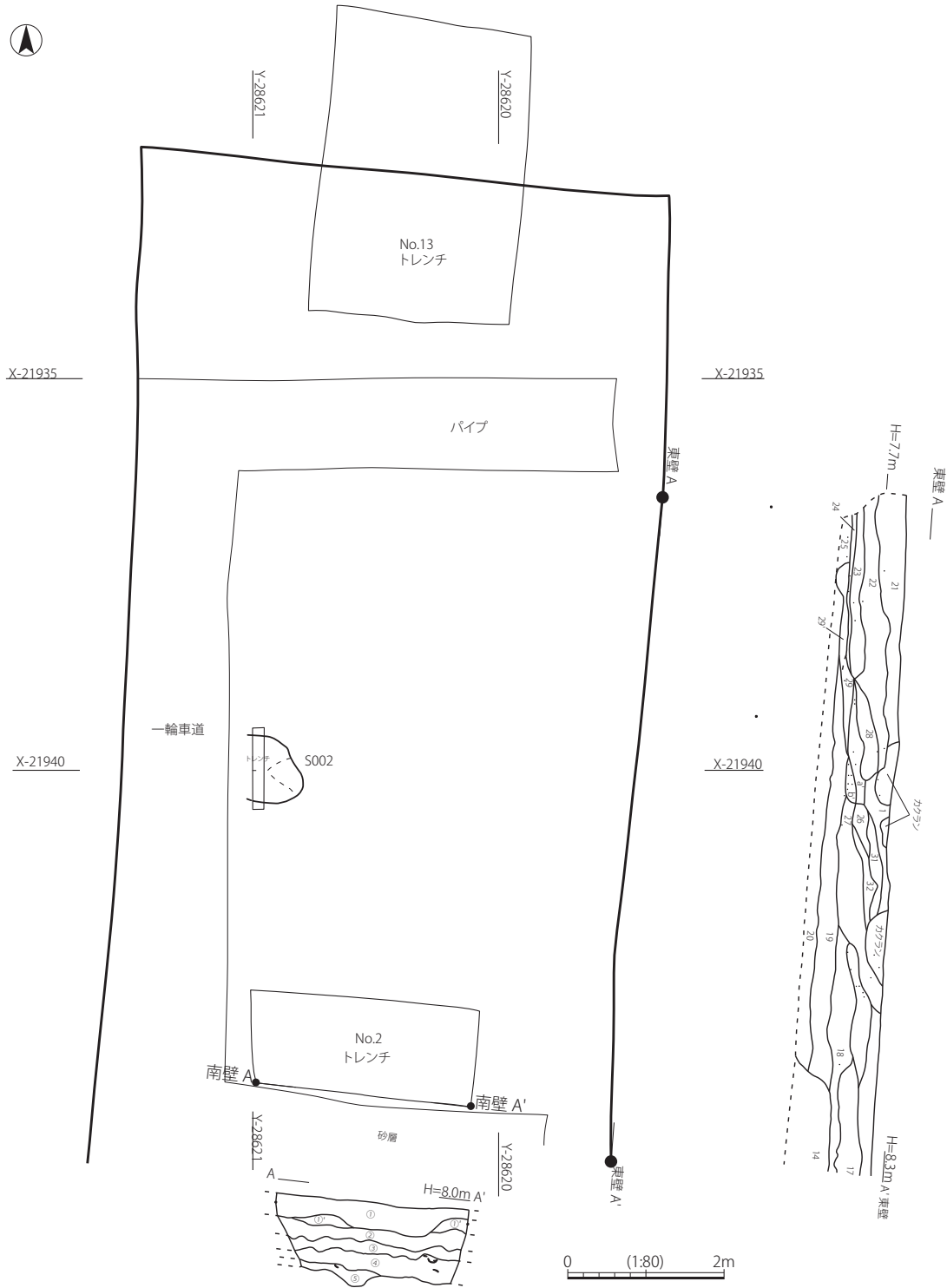
この遺構は、J-75・76グリッドで検出した東西65cm、南北86cmの土坑である。西側は、一輪車道として残っていた部分にかかり掘削することができなかつたため、正確な規模はわからない。掘り込みは、浅く皿状に窪む程度で、明確な掘り込みは確認できなかったが、埋土及び床面に焼土範囲が確認できた。遺物の出土量は少なく、土器片が僅かに出土する程度であった。そのため、時期の断定はできなかった。

[B24-S001] (SD01)

この遺構は、溝状遺構でJ-58グリッドからJ-63グリッドにかけて検出した。最終的に発掘した部分は、確認面で長さ20.5m、幅1.3m、深さ0.44mを測る。調査区の南端付近で確認し、遺構の北側は一輪車道で確認できず、南側は調査区外へと伸びていく。形状は、上部はかまぼこ型で丸みを持った形だが、下部になると急激に落ち、断面形状はバケツ型となる。

この遺構を調査する際に、まず3箇所土層断面を設定し、北からA-A'、B-B'、C-C'とした。各土層断面を観察すると、この遺構が北から南へと緩やかに傾斜していることが分かった。それぞれの土層断面によって、若干堆積状況に差異がみられるものの全体的には同じように埋没したと考えられる。各層の特徴として、遺物が少ない、鉄分の発色が多くみられる、マンガンの発色は少ないという3つの共通点が挙げられる。また、この遺構では、2面の硬化層を確認できた。硬化層が確認できたのは、B-B'とC-C'の土層断面で、B-B'では1面、C-C'では2面確認できた。A-A'では確認できなかったが、この土層断面をベルト状に残した際の断面をとった面の南側で僅かに硬化面を確認することができた。そのため、この遺構の上面には硬化面が形成されていたと考えられる。この硬化面の確認により、この溝状遺構は、埋没後に道路として転用されたと思われる。なお、道路としての転用は、C-C'で硬化面を2面確認していることから2回にわたったと考えられる。

この遺構からは、多くの石が出土している。石材は、凝灰岩がほとんどで、大小様々な大きさの凝灰岩が出土している。これらの石は、上層では数えるほどしか出土しなかったが、遺構底部付近からは多量に出土した。土器類の出土数は少なかったが、それらの多くは中世のものと思われる。出土遺物の残存状況はあまり良くなく、ほとんどが破片での出土で、接合もあまりできなかった。PL.19にこの遺構からの出土遺物を11点掲載しているが、380・379・371・370・369の5点は瓦質の火鉢である。どれも口縁部付近の破片であった。366は、瓦質の播鉢で、367は同じく瓦質の羽釜の破片である。331は土師器の皿で口縁部に煤が付着していたので灯明皿と思われる。また、374・375・376のような青磁や磁器の破片も出土してい



No.2トレンチ 南壁土層断面
 ①Hue10YR2/3(黒褐色土)粘性、しまりあり。黒褐色土に鉄分などを多く含みマーブル状である。
 ② Hue10YR2/3(黒褐色土)粘性、しまりあり。②層に近いがやや乱れがある。漸移層。土器片を含む。
 ③Hue10YR2/3(黒褐色土)粘性、しまりあり。土器片、鉄分を含む。
 ④Hue10YR3/4(暗褐色土)粘性、しまりあり。砂、鉄分、土器片を含む。
 ⑤Hue10YR3/3(暗褐色土)粘性、しまりあり。砂、鉄分を含んでおり、弥生土器が出土している。
 ⑥Hue10YR3/4(暗褐色土)粘性、しまりあり。④層の土を含み鉄分も多く含み非常に硬い。砂との境界部分は更に硬化している。

Fig.19 B 23 調査区遺構配置図及び東壁土層図 (S=1/80)

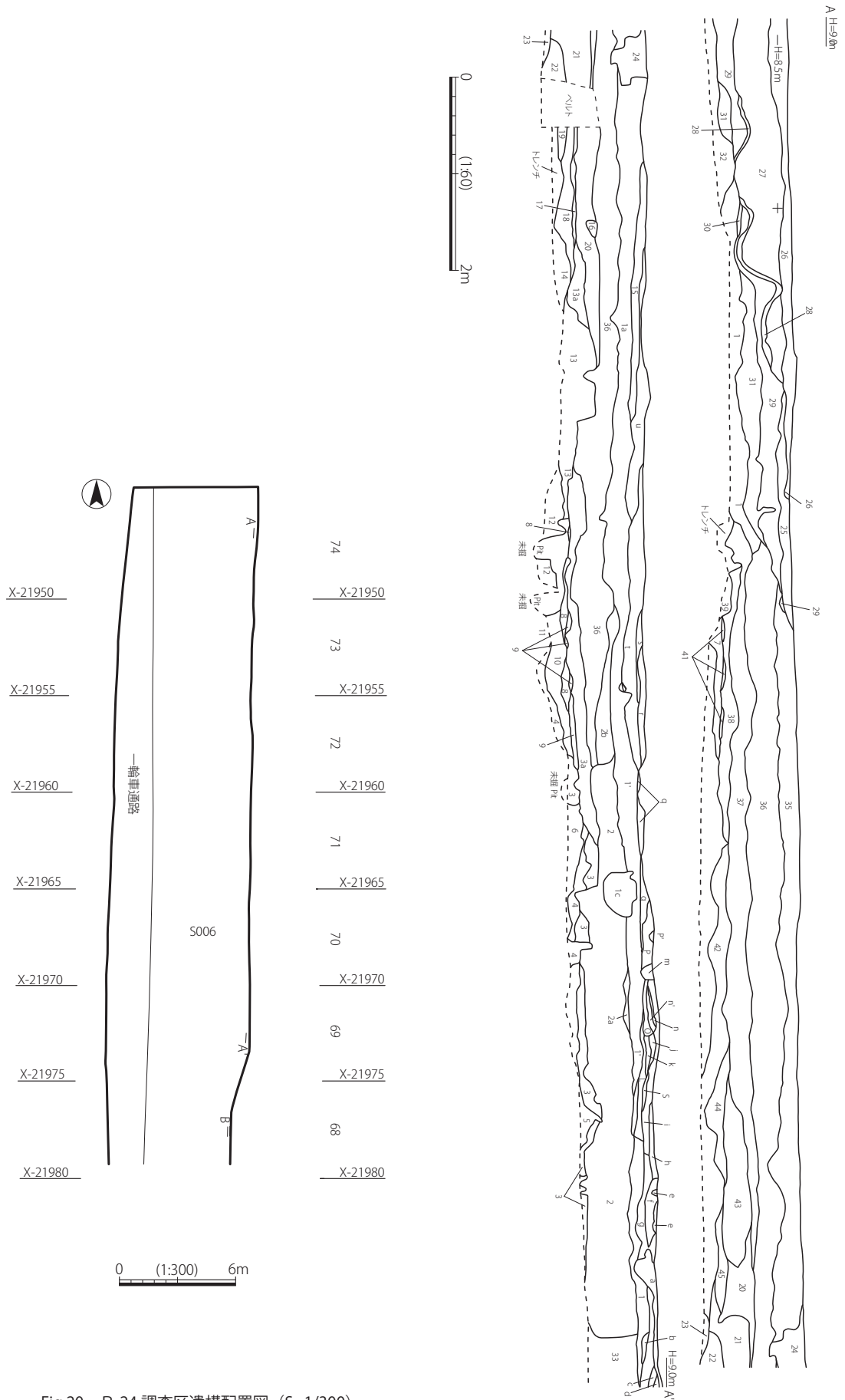


Fig.20 B 24 調査区遺構配置図 (S=1/300) 及び東壁土層断面図1 (S=1/60)

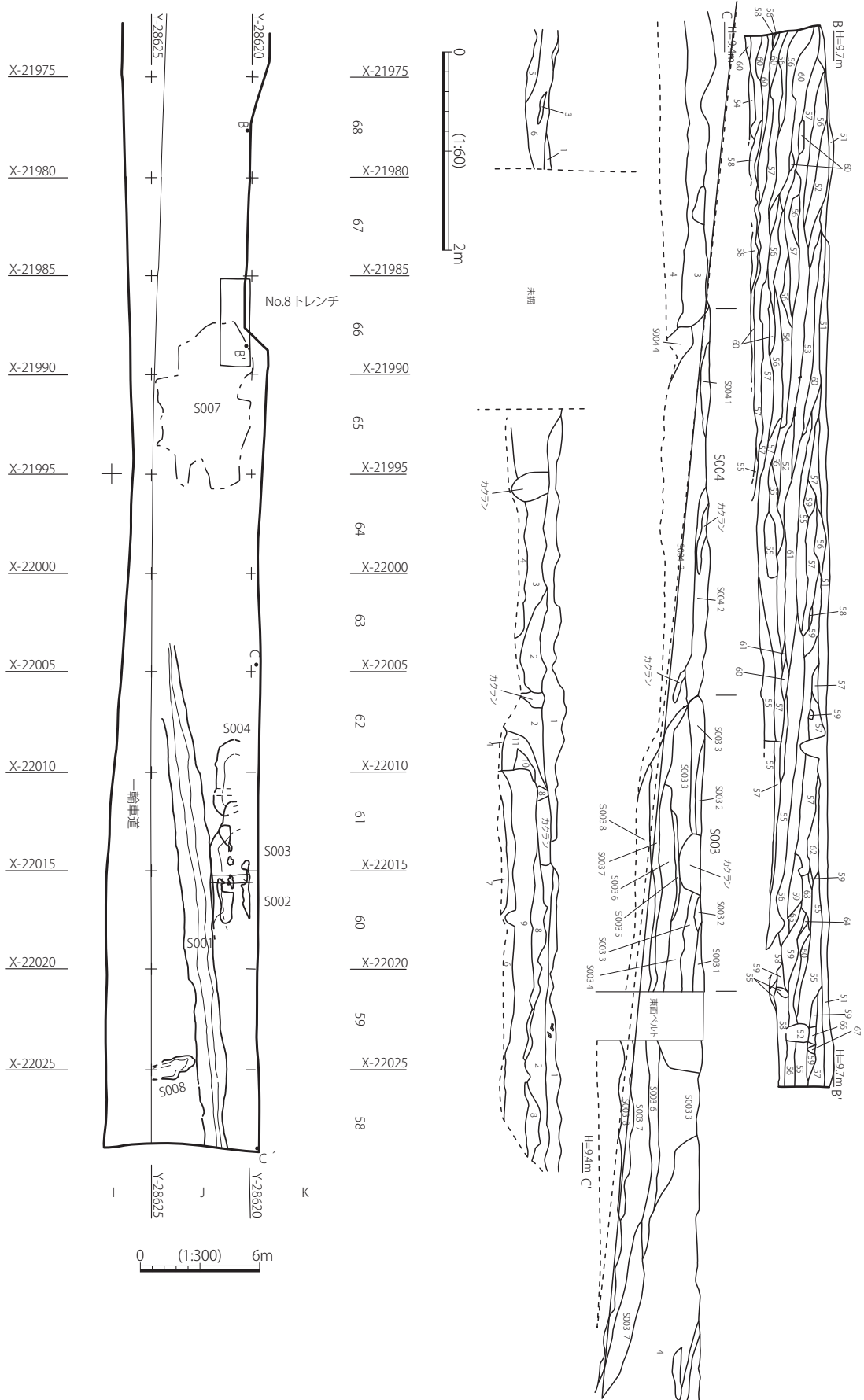


Fig.21 B 24 調査区遺構配置図 (S=1/300)
及び東壁土層断面図2 (S=1/60)

東壁土層註記 (Fig.20 A-A') (Fig.21 B-B', C-C')

- a層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。砂、礫、土器片、シルト質が混ざる。
- b層: Hue10YR2/1 (黒色土);しまり、粘性あり。弾力のあるシルト質。礫、酸化鉄が混ざる。
- c層: Hue10YR2/3 (黒褐色土);しまり、粘性あり。酸化鉄で硬くしまった土。
- d層: a層に似るが、砂、礫、土器片は含まれない。
- e層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。ブロック状のシルトが混ざり、酸化鉄、礫を含む。
- f層: Hue10YR2/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。礫、土器片を含む、黒色、褐色シルトが混ざった土。
- g層: Hue10YR4/4 (褐色土);しまり、粘性あり。礫、土器片、酸化鉄を含むシルト質の土。黒色、褐色シルト砂ブロックを含む。
- g'層: g層の土に砂、ブロック、酸化鉄、灰褐シルトを含む。
- h層: Hue10YR3/4 (暗褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土で礫、褐色シルトブロックを含む。
- i層: Hue10YR3/3 (暗褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土に礫、褐色シルト、土器片を含む。
- j層: Hue10YR3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土に砂が混ざり、礫、酸化鉄を含む。
- k層: Hue10YR3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土に砂、炭化物、礫を含む。
- l層: Hue10YR2/1 (黒色土);しまり、粘性あり。シルト質の土、砂、礫が混ざり、葉、枝を含む。
- m層: Hue10YR4/1 (褐灰色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。砂、礫、酸化鉄を含む。
- n層: Hue10YR3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土に砂、礫、酸化鉄、木片を含む。
- n'層: n層に似るが、礫、酸化鉄を含まない。
- o層: Hue10YR3/4 (暗褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土で黒褐色シルト、酸化鉄、砂、炭化物が混ざる。
- p層: Hue10YR2/1 (黒色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。礫、土器片、木片を含み、下の層との境に敷き粗朶が有る。
- p'層: p層に似るが、礫、土器片、木片を含まない。
- q層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土に炭化物、礫を含む。層境に粗朶がありしまりが悪くぼろぼろ。
- r層: Hue10YR2/1 (黒色土);しまり、粘性あり。しまりの強いシルト質の土。礫、炭化物、木片を含み、層境に敷き粗朶がある。
- s層: Hue10YR2/1 (黒色土);しまり、粘性あり。シルト質の土、礫、土器片、葉、枝を含む。
- t層: Hue10YR3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。礫、土器片、炭化物、葉、枝、木片を含み、敷き粗朶がある。
- u層: Hue10YR2/1 (黒色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。土器片、礫、葉を含む。
- v,w層: 不明
- 1層: Hue10YR2/1 (黒色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。ぼそぼそして土器片、酸化鉄を含む。
- 1a層: Hue10YR3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土で黒色、明褐色シルトが混ざり、礫、土器片、炭化物を含む。
- 1b層: Hue10YR3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。礫と酸化鉄を含む。
- 1c層: Hue10YR2/3 (黒褐色土);しまり、粘性あり。礫、土器片、酸化鉄が混ざったシルト質の土。
- 2層: Hue10YR2/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。土器片、炭化物、礫が混ざり、黄褐色、明褐色のシルトブロックを含む。
- 2a層: 2層の土に灰褐色シルトが混ざり、黄褐色、明褐色のシルトブロックがなくなった土。
- 2b層: Hue10YR2/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。黒色、褐色シルトが混ざり、礫、土器片、炭化物を含む。
- 3層: Hue10YR3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土に細砂が混ざり、礫を含む。
- 3a層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。黒色シルトが混ざり、土器片、炭化物、礫を含む。
- 4層: Hue10YR4/2 (灰黄褐色土);しまり、粘性あり。砂混じりのシルト質の土。褐灰色シルト、マンガン、暗オリーブの砂を含む。
- 5層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。細砂とシルト質がまざる土。酸化鉄とマンガンを含む。
- 6層: Hue2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色土);しまりあり、粘性なし。細砂の砂層。マンガンが含まれる。
- 7層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土に細砂が含まれ黒、褐色シルトが混ざる。
- 8層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまりあり、粘性弱い。シルト質の土に砂が混ざるのでしまりは弱い。黒色、褐色シルトを含む。
- 9層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。3a層と8層の間で砂を含むためしまりが強い。
- 10層: Hue2.5Y3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。砂と礫を含みぼそぼそしている。
- 11層: Hue2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土と砂、礫が混ざった土。
- 12層: Hue2.5Y3/1 (黒色土);しまり、粘性あり。細砂の砂層。礫を全体的に含む。
- 13層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。砂が混ざり、土器片、炭化物を含む。
- 13a層: 註記なし。
- 14層: Hue10GY2/1 (緑黒色土);しまり、粘性あり。細砂の層。一部岩盤あり。
- 15層: Hue10YR3/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。礫、炭化物、土器片を含む。
- 16層: Hue10YR4/2 (灰黄褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。炭化物、礫が少し混じる。
- 17層: Hue10YR4/2 (灰黄褐色土);しまり、粘性あり。礫、灰白シルトとにぶい黄橙砂が混ざって硬くしまる。
- 18層: Hue10YR3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質の土。礫、灰白シルト、暗褐色砂が混ざる。
- 19層: Hue10YR4/4 (暗褐色土);しまり、粘性あり。シルト質に砂が混ざる土。14層の砂、灰黄褐シルトを含む。
- 20層: Hue10YR3/3 (暗褐色土)しまり、粘性あり。シルト質の土。褐色、黒色シルト、炭化物を含む。
- 21層: Hue10YR3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。細砂を含むシルト質の土。黒、褐色シルト、炭化物を含む。
- 22層: Hue2.5Y3/1 (黒褐色土);しまり、粘性あり。シルト質に細砂が混ざる土。
- 23層: Hue2.5Y2/2 (オリーブ黒色土);シルト質の土。砂も混じるが、シルトが強く暗い緑色。
- 24層: Hue10YR2/2 (黒褐色土);しまり、粘性あり。酸化鉄が多く混ざる土。

- 25層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。礫、土器を含み全体に炭化物が混ざる。
- 26層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土で粘りが強い。炭化物、礫、土器片、酸化鉄を含む。
- 27層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。粘りが強く、炭化物、礫、土器片、黒色シルトを含み、層全体に酸化鉄が混ざる。
- 28層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。酸化鉄を帯状に含み炭化物が混ざる。
- 29層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。炭化物、礫を含み黄褐色の細砂、酸化鉄、マンガンが混ざる。
- 30層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土で層全体にマンガンを含み硬い。炭化物を少量含む。
- 31層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。細砂が混ざるシルト質の土。酸化鉄、褐色シルト、礫、土器片を含む。
- 32層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）；しまり、粘性あり。細砂の層。黒色シルト、マンガンが混ざる。
- 33層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。炭化物、礫を少し含み、層全体に酸化鉄が混ざる。
- 34層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；上層はしまり、下層はしまりなし。粘性あり。シルト、黒色土を含む。
- 35層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまり弱く、粘性あり。小礫、土器片、3mm大の黄褐色土を含む。
- 36層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり弱く、粘性あり。小礫、土器片、1cm以下の炭化物、3mm大の黄褐色土を部分的に含む。
- 37層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。炭化物、3mm大の黄褐色土を含む。
- 38層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり弱く、粘性あり。炭化物、小礫を含む。
- 39層：Hue2.5YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性強い。酸化鉄、シルトを含む。
- 40層：Hue10YR4/3（オリーブ褐色土）；しまり弱く、粘性あり。黒褐色のシルトがマーブル状に混ざる。
- 41層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；硬化面。
- 42層：Hue2.5YR4/3（オリーブ褐色土）；しまり、粘性なし。シルト質。
- 43層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。土器片、炭化物を含む。
- 44層：Hue 5YR2/2（オリーブ黒色土）；しまり、粘性が強い。
- 45層：Hue2.5YR3/2（黒褐色土）；粘性が強いシルト質。黄褐色の砂を含む。
- 46～50層：註記なし。
- 51層：混バラス
- 52層：黒粘性土
- 53層：暗褐色粘性土
- 54層：灰色粘性土
- 55層：粘性土
- 56層：粘性土と砂の混合層。
- 57層：粘性土と砂の混合層。しまる。
- 58層：砂層。ガチガチに締まる。
- 59層：砂層。しまる。
- 60層：砂層
- 61層：しまる土+シルト
- 62層：黄褐色土 ややしまる
- 63～67層：土層註記なし

東壁 A - A' 土層断面註記 (Fig.19)

21層: Hue10YR4/3 (にぶい黄褐色土); 上面にはJRのガラスが混じる。崩れやすくやわらかい土。
 22層: Hue10YR5/6 (黄褐色土); 小礫を多く含み、①よりもしまりのある土。
 23層: Hue10YR5/6 (黄褐色土); 小礫を少量含む。②よりもしまりのある土。土器片を含む。
 24層: Hue2.5Y5/2 (暗灰黄色土); 砂を多く含む層。
 25層: Hue2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色土); 土器の細片を多く含む。
 26層: Hue2.5Y7/1 (灰白色土); 見た目は脂の塊のようであり、ベタベタとした感触のある土。
 27層: Hue7.5Y3/4 (暗褐色土); 赤みのあるポロポロとした土。
 a'層: Hue2.5Y5/2 (暗灰黄色土); 26層の土に黒色土が混じる。

b'層: Hue10YR3/1 (黒褐色土); 27層の土に黒色土が強く入っている。
 28層: Hue10YR5/4 (にぶい黄褐色土); 土器片や小礫などを含む。混ざりの多いポロポロとした土。
 29層: Hue2.5Y5/4 (黄褐色土); a'層と似るが、より強く締まりのある土。土器片を含む。
 29'層: Hue2.5Y3/1 (黒褐色土); 土色は19層と同じであるが、19層より混じりがなく、より硬く締まる。
 30層: Hue7.5YR3/1 (黒褐色土); 27層の土に黒褐色土が混じる。
 31層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); ポロポロとした混ざりのある土。
 32層: Hue7.5YR3/4 (褐色土); ポロポロとした混ざりのある土。

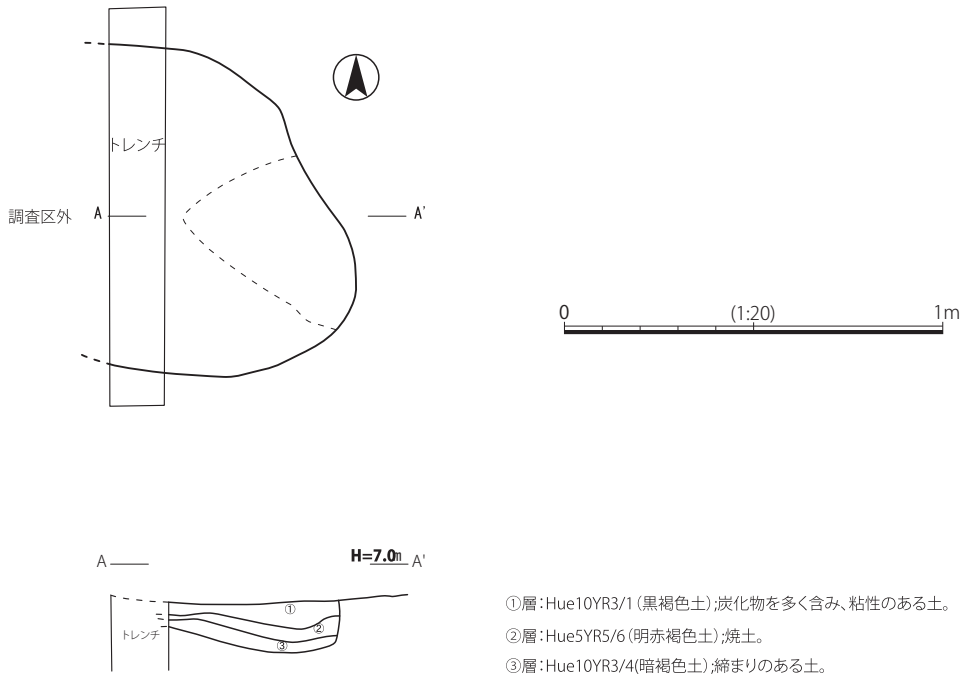


Fig.22 S002 平面・断面実測図 S=1/20

る。この遺構の掘削時には、遺構底部付近から底部糸切の土師皿が数点出土した。また、獣骨も出土しているが、何の骨かは確認していない。

遺物から判断して、この遺構の時期は中世後半であろう。

[B24-S002] (SX01)

この遺構は、J-60 グリッドから J-61 グリッドで硬化面のみを確認した不明遺構である。B24-S003 の上面にて検出した硬化面だが、調査区東壁沿いのトレンチ掘削中に検出したため、気づくのが遅くなり掘り飛ばした部分もあるかもしれない。また、この遺構の西側には B24-S001 があり、S001 に向かって硬化面が続くように見え、S001 の一部ではないかと考えたが、明確でない部分も多く確実に続くとは言い切れなかった。そのため、今回は確実な硬化面部分のみを B24-S002 という別遺構として処理した。確認した硬化面の範囲は、南北 4.94 m、東西 1.59 m であったが、遺構の東側は調査区東壁にかかるため、まだ東側に広がる可能性もある。また、S001 につながらない硬化面となると、竪穴住居の硬化面であった可能性も考えられる。硬化面の東側には焼土塊も確認できたのでその可能性はある。

出土遺物は、ほとんどなかったが、J-60・61 グリッド出土の遺物はあり、この硬化面が住居のものだとするとその遺構に伴う遺物がこの中にはあった可能性がある。

[B24-S003] (SX02)

この遺構は、不明遺構である。J-60 グリッドから J-61 グリッドにかけて広がり、確認した長さは 8.60 m、幅 1.10 m、深さ 48.2cm を測る。大きな土坑状の遺構で、この遺構の上には B24-S002 の硬化面が広がる。北側は、B24-S004 を切り、南側は別の遺構に切られていた。また、遺構の東側は、調査区東壁に沿って設定したトレンチにより切られているため、この遺構の東西の幅は検出したよりもさらに広がると思われる。

以上のように、遺構全体を把握することができなかつたうえ、土層断面でも北から南へ向かった埋土全体が落ちていく様子は確認できたが、立ち上がりは確認できなかつたし、遺構底部もうまく確認することができなかつた。そのため、不明遺構とすることになった。

埋土は、全体的に黒褐色で分層は困難だった。埋土全体の特徴として、シルト質の土に砂や礫が混じる層がある。そして、一部に鉄分の沈着やマンガンの発色がみられた。

出土遺物は、少ないが PL.20 の 381 のような土師器の皿などが出土している。遺構の性格も分からなかったが、時期についても遺物の量が少なく、破片がほとんどで遺構の時期断定はできなかつた。調査時には、龍泉窯系青磁の小破片が 1 点出土している。

[B24-S004] (SX03)

この遺構は J-61 グリッドから J-62 グリッドにかけて検出した不明遺構である。東側は調査範囲外に延びているため全体の形状は不明であるが、検出した範囲では楕円形を半裁した形状を呈する。長径が 3.6 m、短径側の確認できた長さが 0.9 m を測る。深さは 40cm である。

埋土は、全体的に黒褐色で分層は質感に頼るしかなかった。全体として、シルト質の埋土で、一部に炭化物や砂礫などを含む層であった。

遺物の出土はほとんどなく、小さな土師器片などが数点出土した程度である。そのため、時期の判断はできなかつた。

B24-S003 と S004 は切り合い関係があるため、遺構それぞれの土層断面として東西にトレンチを設定し、加えて両遺構を断ち割る形で南北の土層断面も設定した。切り合い関係ははっきりとわかったが、南北と東西の土層断面の整合を取るのが非常に困難だった。さらに、調査区東壁に両遺構はかかっており、その断面との層の整合が取れなくなった。全体的に、埋土が似ていることに加えて、少し離れると層が変わってしまうためである。これらの遺構が廃棄された後、埋まっていく際に層がかき乱されるような状況下におかれた

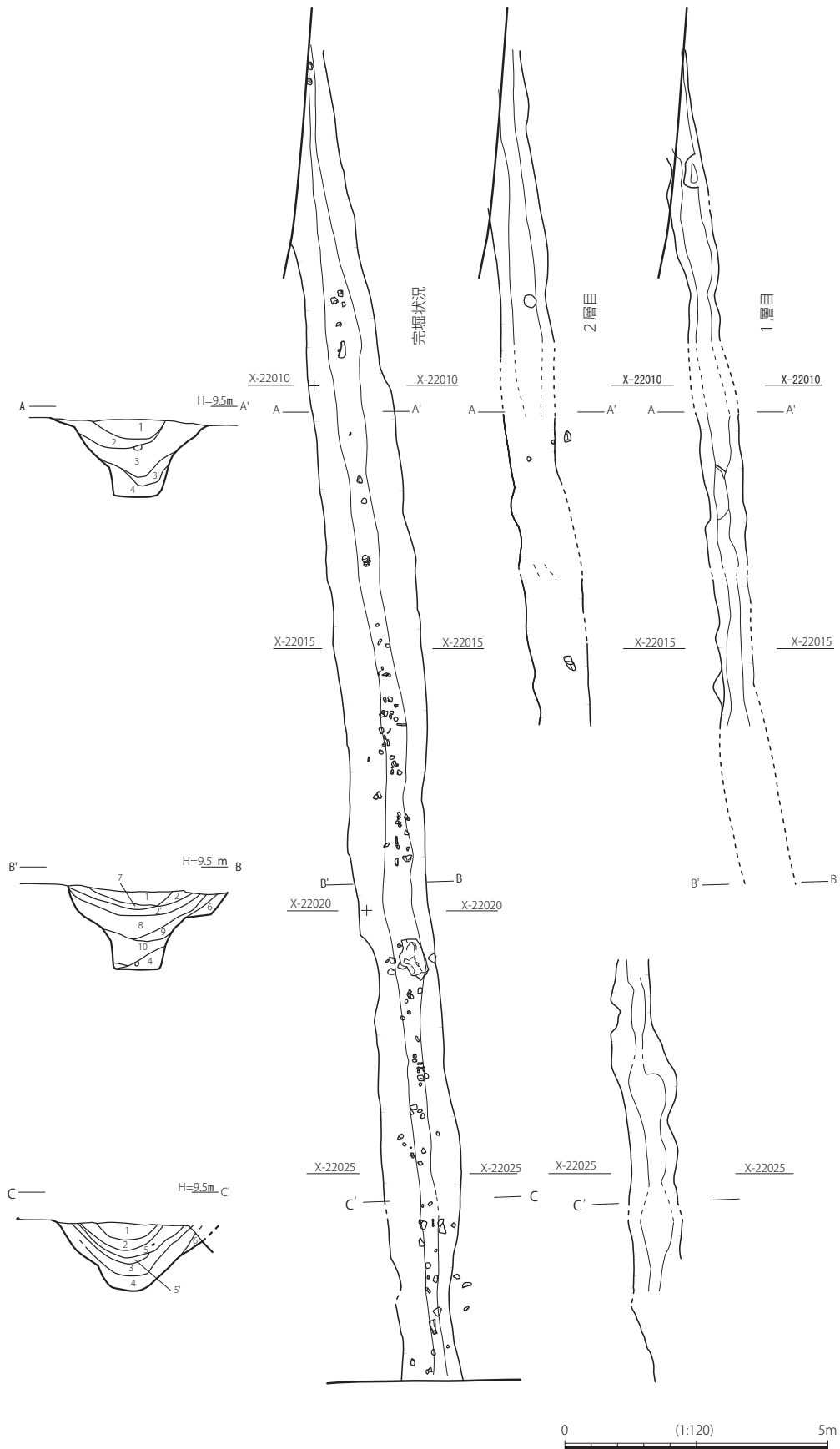


Fig.23 S001 実測図 S=1/120

新馬借B 23-S001 土層註記

- 1層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり、やや粘性あり。砂質を帯びた粘質土（砂質土と粘質土の混合層）。1cm大の礫、5mm大の粘質土をごく僅かに含む。
- 2層：Hue10YR3/1（黒褐色土）；よくしまり、粘性あり。1mm以下の炭化物粒、焼土粒をごく僅かに含む。鉄分の発色は少なめで、かつ部分的（上から入りこんでいる印象）。
- 2'層：4層に準じるが鉄分の発色が多く、マンガンの発色がごく僅かにみられる。
- 3層：Hue2.5Y3/2（黒褐色土）；よくしまり、粘性あり。部分的にきわめてよくしまる所あり。層内に一部薄い砂の層がみられる。鉄分の発色には部分的にムラがある。土器細片数点を伴う。
- 3'層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。5層との混合層で鉄分の発色が強く、2～3mm大の炭化物粒をごく僅かに含む。
- 4層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質を帯びた砂質土。4～5mm大の粘質土粒を含む。鉄分の発色が強い。
- 5層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまりなく、粘性あり。鉄分の発色は少なく、5～8mm大のマンガン粒発色がごく僅かにみられる。炭化物粒・焼土粒をごく僅かに含む（1mm以下）。土器片を含む。
- 5'層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまりなく、粘性あり。鉄分の発色が多い。1cm大のマンガン粒がごく僅かに発色している。
- 6層：Hue10YR3/1（黒褐色土）；しまりややあり、粘性あり。砂質を帯びた粘質土。
- 7層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；ややしまり、粘性あり。砂質を帯びた粘質土。鉄分の発色が多くみられる。
- 8層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；ややしまり、粘性あり。粘性を帯びた砂質土。鉄分の発色は少なくムラがある。マンガンの発色がごく僅かにみられる。
- 9層：Hue10YR3/1（黒褐色土）；粘質。やや縮まる。砂質を帯びた粘質土。
- 10層：Hue2.5Y3/2（黒褐色土）；しまりなく、粘性あり。土器細片、2cm大の凝灰岩礫などを含む。鉄分の発色は少ないが粒状に硬化する。

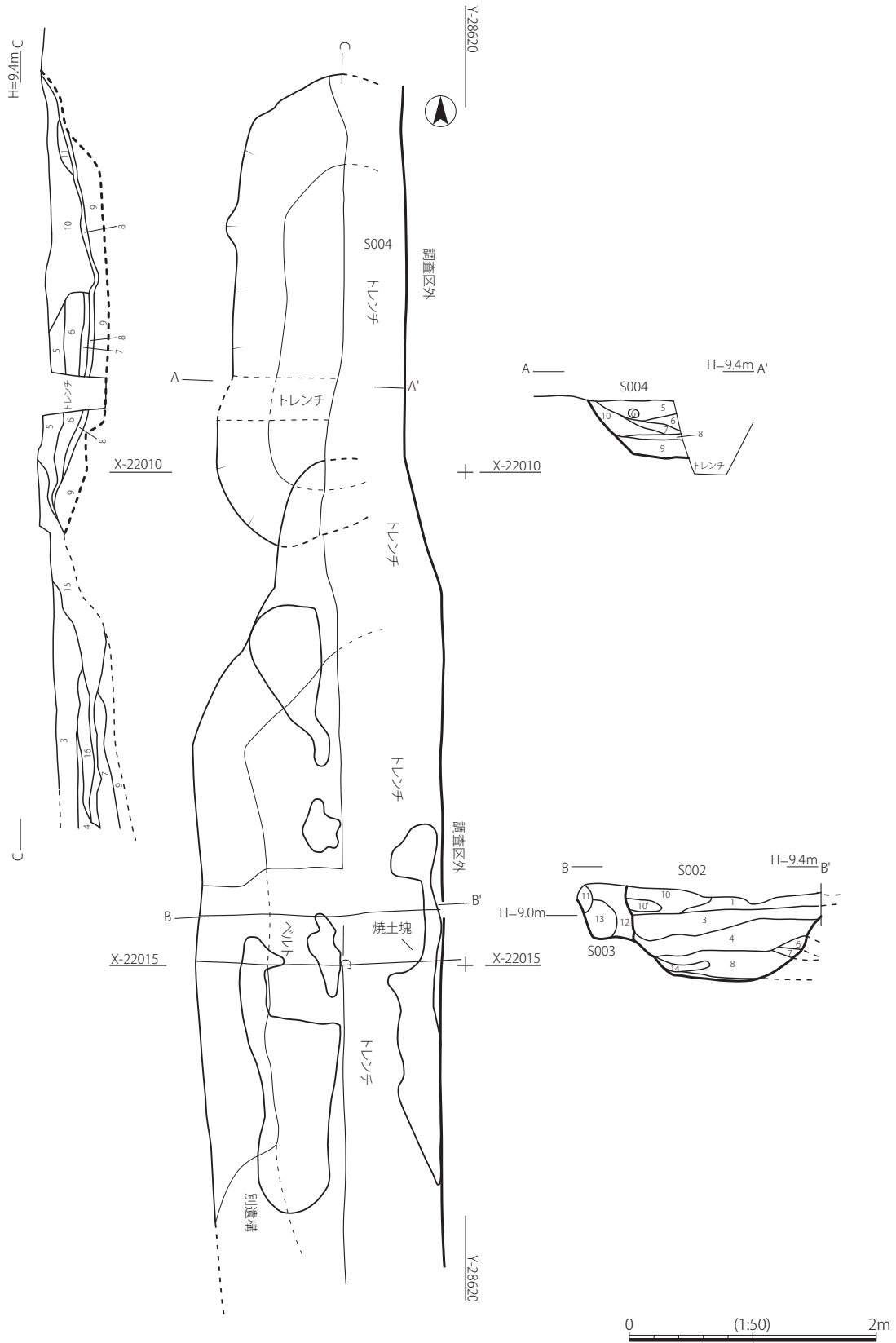


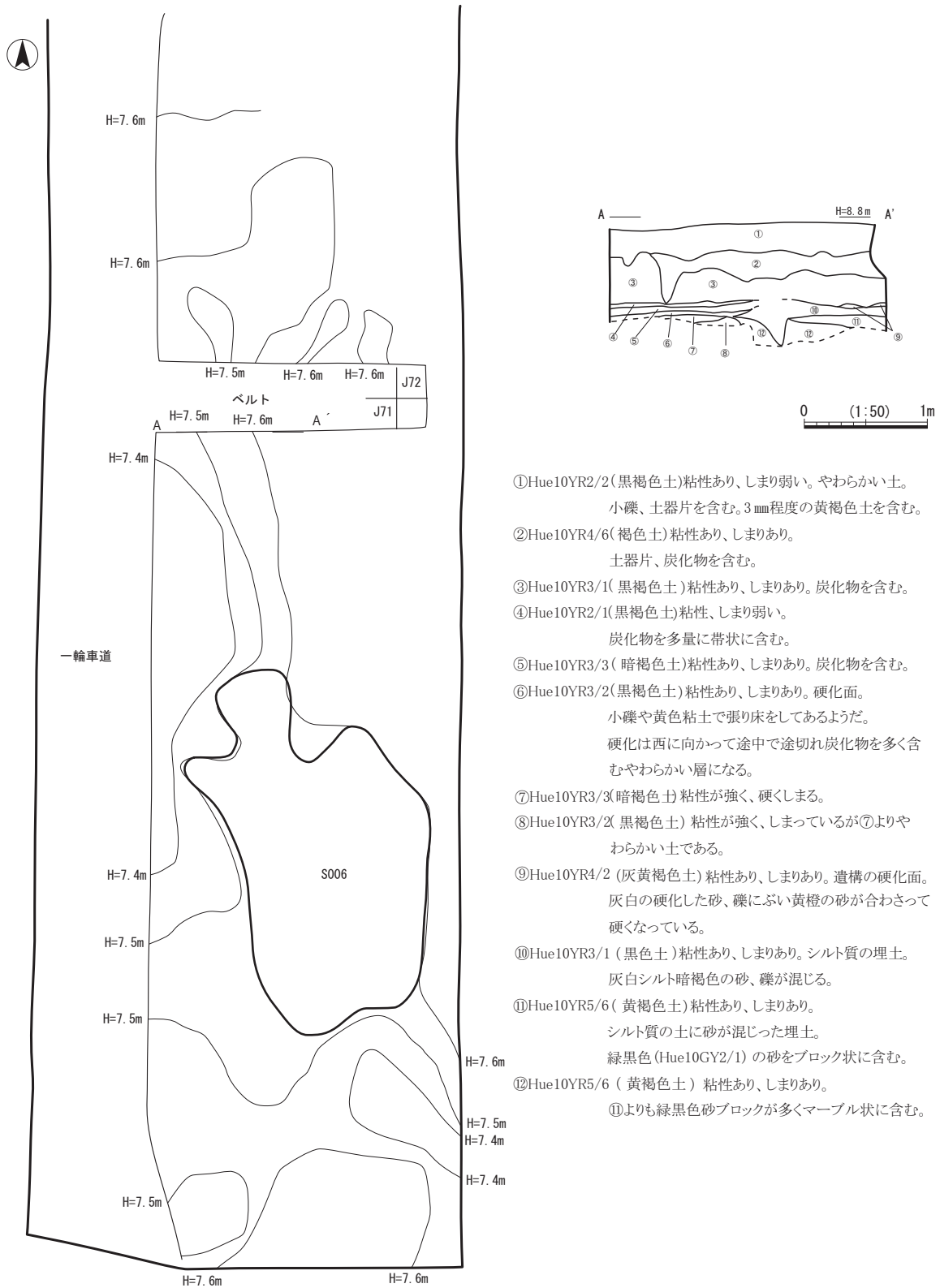
Fig.24 S002・S003・S004 実測図 S=1/50

S003 土層註記 (Fig.21 C - C' Fig.24 B - B' C - C')

- 埋1層：註記なし
- 埋2層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；シルト質。硬化した埋土に褐色シルト鉄分、炭化物が混じる。
- 埋3層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質。硬化埋土ににぶい黄褐色シルトが混じる。
- 埋4層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質。炭化物、鉄分、褐色ブロックが混ざる。
- 埋5層：Hue10YR3/1（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質。炭化物を帯状に含む。
- 埋6層：Hue2.5Y3/5（暗オリーブ色細砂）；しまり、粘性あり。帯状マンガン褐灰シルトブロックと礫を含む。
- 埋7層：Hue2.5 Y（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質。マンガンを含み炭化物と礫が混ざる。
- 埋8層：Hue2.5Y3/5（暗オリーブ色細砂）；しまり、粘性あり。マンガン、黒色・褐灰シルトが混ざる。
- 1層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。小礫、黄褐色土をブロック状に含み硬化している。
- 2層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。鉄分や砂を含むザラザラした土。
- 2'層：炭化物や焼土を含む。硬化ブロック。
- 3層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり弱く、粘性あり。鉄分を含み硬化している。炭化物、小礫を含む。
- 4層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；粘性の強い土。砂、黄褐色土ブロック、炭化物、鉄分を含む。
- 5層：赤茶けた砂の層。しまりや粘性はない。
- 6層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；粘性の強いシルト状の土でしまりは弱い。鉄分を含む。
- 7層：Hue2.5YR4/3（オリーブ褐色土）；鉄分を含む乱れた砂の層。黄褐色土ブロック、炭化物を含む。部分的にかたかったり、やわらかかったりする。
- 8層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；粘性の強いシルト土。炭化物と鉄分を若干含む。
- 9層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；粘性あり、しまり強い。土は乱れている。黄褐色土、炭化物を含む。かたい部分とやわらかい部分がある。
- 10層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；粘性、しまりあり。やわらかい土。S001の埋土？
- 11層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；粘性が強く、硬くしまる。黄褐色土ブロック、炭化物、小礫を含む。
- 12層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；黄褐色土ブロック。帯状に炭化物を含み鉄分を若干含む。
- 13層：Hue2.5YR3/2（黒褐色細砂）；しまりあり、粘性なし。褐灰粘土、シルト、マンガンが帯状に含まれる。
- 14層：砂を多く含む埋土。乱れた土色。ブロック的に入る層。

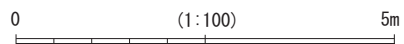
S004 土層註記 (Fig.21 C - C' Fig.24 A - A' C - C')

- 1層：Hue2.5Y3/2（黒褐色土）；砂を多く含み層全体に酸化鉄の発色がある。砂を多量に含む。
- 2層：Hue2.5Y3/2（黒褐色土）；①層と似るがそれよりもややしまる。黄褐色ブロックを部分的に含む。黒や褐色などの混ざったきめの粗い砂層。粒子は1mm以下。
- 3層：Hue2.5Y3/2（黒褐色土）；②層と似るが部分的にやや硬化している。混ざりの少ないしまりのある土。
- 4層：Hue2.5Y2/3（黒褐色土）；しまりなし、粘性あり。炭化物、礫、砂を含み層全体に酸化鉄の発色がある。
- 5層：上面は赤褐色の鉄分のためガチガチに硬い。黒褐色土の混ざりがある。
- 6層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ土）；ややしまりあり。ローム状の褐色土に黒褐色土をマール状に含む。
- 7～10層：註記なし



- ①Hue10YR2/2(黒褐色土)粘性あり、しまり弱い。やわらかい土。
小礫、土器片を含む。3mm程度の黄褐色土を含む。
- ②Hue10YR4/6(褐色土)粘性あり、しまりあり。
土器片、炭化物を含む。
- ③Hue10YR3/1(黒褐色土)粘性あり、しまりあり。炭化物を含む。
- ④Hue10YR2/1(黒褐色土)粘性、しまり弱い。
炭化物を多量に帯状に含む。
- ⑤Hue10YR3/3(暗褐色土)粘性あり、しまりあり。炭化物を含む。
- ⑥Hue10YR3/2(黒褐色土)粘性あり、しまりあり。硬化面。
小礫や黄色粘土で張り床をしてあるようだ。
硬化は西に向かって途中で途切れ炭化物を多く含むやわらかい層になる。
- ⑦Hue10YR3/3(暗褐色土)粘性が強く、硬くしまる。
- ⑧Hue10YR3/2(黒褐色土)粘性が強く、しまっているが⑦よりやわらかい土である。
- ⑨Hue10YR4/2(灰黄褐色土)粘性あり、しまりあり。遺構の硬化面。
灰白の硬化した砂、礫にぶい黄橙の砂が合わさって硬くなっている。
- ⑩Hue10YR3/1(黒色土)粘性あり、しまりあり。シルト質の埋土。
灰白シルト暗褐色の砂、礫が混じる。
- ⑪Hue10YR5/6(黄褐色土)粘性あり、しまりあり。
シルト質の土に砂が混じった埋土。
緑黒色(Hue10GY2/1)の砂をブロック状に含む。
- ⑫Hue10YR5/6(黄褐色土)粘性あり、しまりあり。
⑪よりも緑黒色砂ブロックが多くマーブル状に含む。

Fig.25 S006 実測図 (S=1/100)
及び東西土層断面図 (S=1/50)



のかもしれない。

[B24-S005]

この遺構は、J-71 グリッドで検出した硬化面である。範囲は5 mほどで、硬化面の上から多量の弥生土器が出土している。そのため、大型の竪穴建物の硬化面であった可能性がある。しかし、断面の確認、プランの確認ともにできておらず断定はできない。

遺物は、集中して出土した。土師器片がほとんどであったが、中には数点須恵器片も出土した。

[B24-S006]

この遺構は、敷き粗朶の敷かれた範囲である。J・K-69 グリッドから同-71 グリッドで確認した。この敷き粗朶は、南北5.5 m、東西3.05 mの範囲に敷かれていた。材料は植物質のものとししか捕らえていない。10cmから15cmほどの層の下部に植物質のものが入る。この粗朶は、レンズ状にくぼみつつ、うろこ状にくつつかの単位でおかれているようだった。また、粗朶の下には木の枝が並べられており、それを土台にしていたようである。湿地帯であったこの一帯の地盤を固めるために、このように植物を敷きながら、版築を行ったのではないかと考えられる。

出土遺物については、土器類はほとんど出土しなかった。しかし、石類は多く出土している。2 cmから5 cmくらいの丸い石が多く出土し、投石ではないかと考えられる。

[B24-S007]

この遺構は、配石遺構である。J-65 グリッドからJ-66 グリッドにかけて検出した。大きさが40cm～50cmほどの川原石を、一見無造作に積み上げた状態に見えたが、詳細に出土状況などを見ていくと、東西方向に細長く並べて配置されているのが分かった。後日、排水路工事に立会った際には、さらに調査区の東側に伸びていることを確認した。

この配石遺構は、主に褐色の粘質土に包まれるような状態で出土している。確認できた範囲は、幅がほぼ10 m程度で、やや南北に傾斜し、さらに東側から西側へ傾斜していく傾向が見られた。また、この配石遺構に伴う褐色の粘質土層の状況をみるためトレンチを設け掘削していたところ、古代の平瓦が2点出土した。さらに、工事立会の際も同じ層から2点出土した。これら4点の瓦が354・355・356・357の瓦である。このことから、この配石遺構が古代に遡る可能性も出てきた。ただ、この遺構の直上に盛られていた砂質層中からは、近世後期に属する磁器片が出土している。さらに、粘質土の上部にも近世磁器が出土しているのも、一概に古代の遺構であるとは言いかねるところである。石材は、凝灰岩と安山岩であった。

調査担当者は、遺構の直上層から近世磁器が出土することから近世の遺構で、土塁の構築されている位置に当たるため、この遺構は、土塁の一部をなし配石はその築造に関係するものではないかと考えている。即ち、土塁を作る際一気に構築したのではなく、時間をおいて構築する際の土留めとして作られたのではないかということである。

この遺構については、今回の調査区外の東西に伸びる可能性があり、今後どのような状況でさらに出土するか期待したい。

なお、この遺構の大部分は今回の工事では橋脚のベタ基礎のちょうど狭間に当たり現況で残ることだったので掘りきらずに現地に埋め戻して残している。

この石組の上は、版築がなされていた。10cm～20cmほどの層が積み重ねられている。版築層を観察すると、大きく砂層、粘土層、粘土と砂の混合層の3つに分けられる。正確に順番に重ねられているわけではないが、整理の段階で層を土質により色分けしてみたところ、似たような色のバランスとなった。そのため、版築の際も一定のルールで順番に重ねられたと思われる。版築の層は、北から南に緩やかに傾斜していく。東西については、ほぼ水平となっていた。今回の調査で版築の状況を詳しく知りたかったので、土層断面を多く設定したが、どの土層断面も似たような状況となり、石組の上全体に版築がなされていたと考えられる。

出土遺物は、前に述べた瓦以外はほとんどなかった。特に、石組の間からの出土はなく、東のトレンチ内からの出土がほとんどだったので、直接この遺構との関わりや時期を判断するような遺物は出土しなかった。
[B24-S008]

この遺構は、J-58・59 グリッドで検出した焼土面である。確認した範囲は、長径 82cm、短径が 58cmを測る。この遺構も、竪穴遺構であった可能性が考えられ、炉穴ではないかと思われる。

[K-70～74 東壁トレンチ]

今回の新馬借遺跡B調査区の調査では、東壁に沿って幅 1mほどのトレンチを設定した。このトレンチは、調査区の土層を確認するためだけでなく、多くの遺物を得ることができた。全長が 20m以上にもなるトレンチの中から多くの土器が出土している。その中でも 3箇所、土器の集中する場所があった。まず、1箇所目は K-74 グリッド中ほどである。他の 2箇所の集中区に比べ、出土量は少ないが弥生後期の高坏や壺などの破片が出土した。

2箇所目の集中場所は、K-72 と K-73 グリッド境付近になる。ここは、B24-S006 の確認できた付近であり、沼地のような場所である。そのようなところから、多くの土器片が出土した。やはり、弥生後期の遺物を中心に、土師器や須恵器も若干混じっていた。

3箇所目は、K-70 グリッドである。ここにも同じような時期の土器片が集中していた。

3箇所ともに、時期の違いはなく、器種も甕や壺など同じようなものが多かった。また、これらの土器の集中区はトレンチの中で納まるのではなく、調査区内外に広がりを見せるようであった。しかし、今回の調査では、この土器の拡がり全体を抑えることはできなかった。他の場所では、硬化面も確認されていることから、これらの場所も弥生時代の竪穴遺構の可能性も考えられる。ただし、今回は推測する事しかできなかった。

[包含層の出土遺物]

新馬借B調査区の調査では、確認した遺構数が少なく、その遺構からの出土遺物も少なかった。逆に、包含層からの出土遺物は多かった。以下に包含層からの出土遺物についてまとめる。

出土遺物の中心は土器片で、弥生土器が多くを占め、時期は後期となる。器種は、壺や甕が多く、きれいな砲弾型の甕で、PL.20 の 352 や 329 のような脚部の付くものが多いようである。中には PL.22 の 347 のような非常に長い脚部を持つような甕も出土している。PL.20 の 382、PL.21 の 334 と 377 のような免田式土器の破片も数点出土している。また、土玉も 2点出土している。(PL.20 333、PL.21 332) この 2点は形も大きさもよく似ていた。そして、ジョッキ型土器の破片も多く出土している。ただ、残念なことに、残りは悪くジョッキ型土器とわかる程度の大きさの破片であり、それらの破片同士、全く接合できなかった。

また、土器だけではなく石器も出土している。遺構に伴うものはなかったが、敲石や石斧が数点出土している。ここでは、特徴的な敲石として、530・525・528 がある。棒状の安山岩か凝灰岩を利用したものか、棒状の自然石の両端を敲打面として使用したものがある。

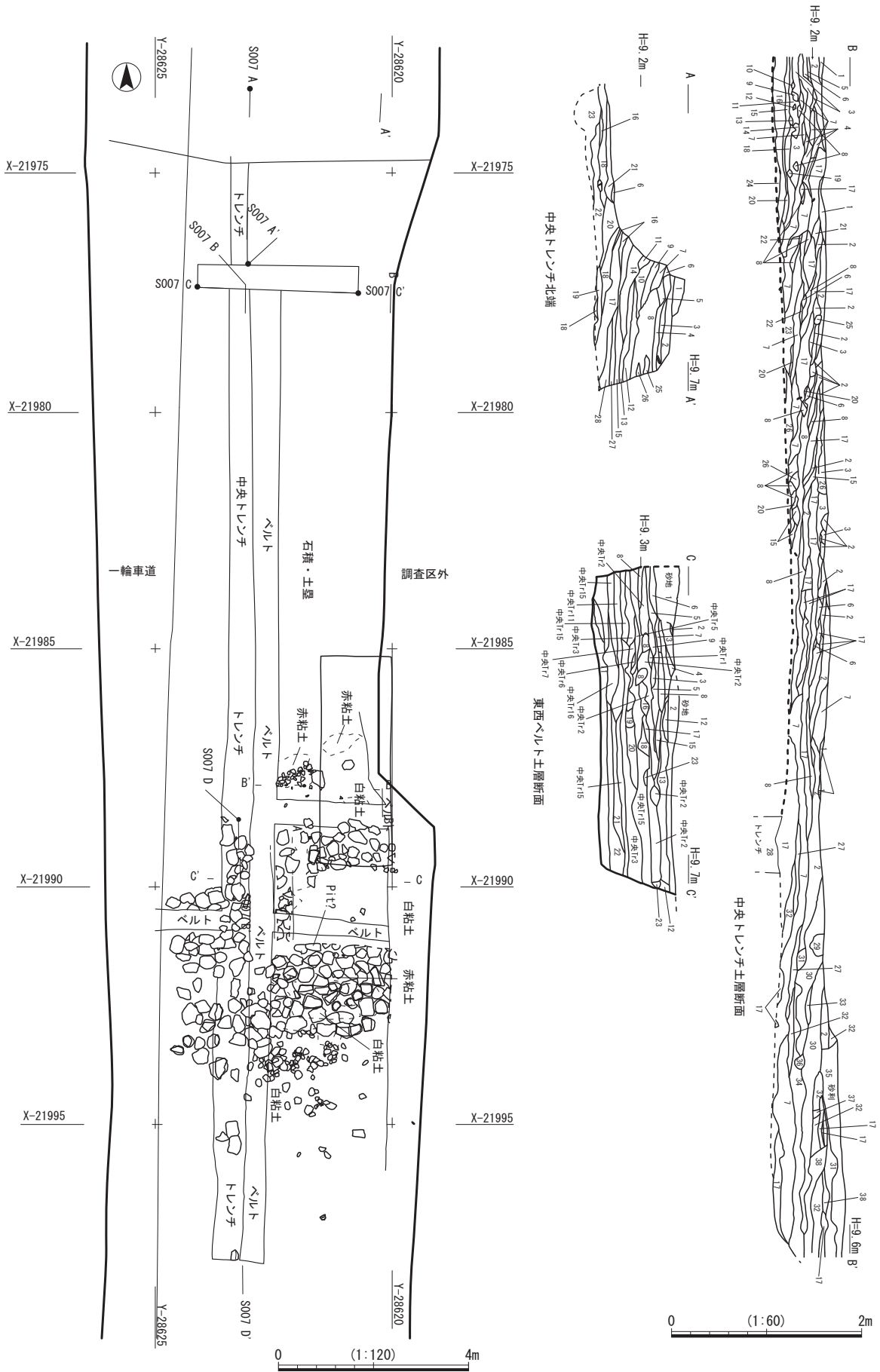


Fig.26 S007 実測図 (S=1/120) 及び東西ベルト・中央トレンチ北端・中央トレンチ土層図 (S=1/60)

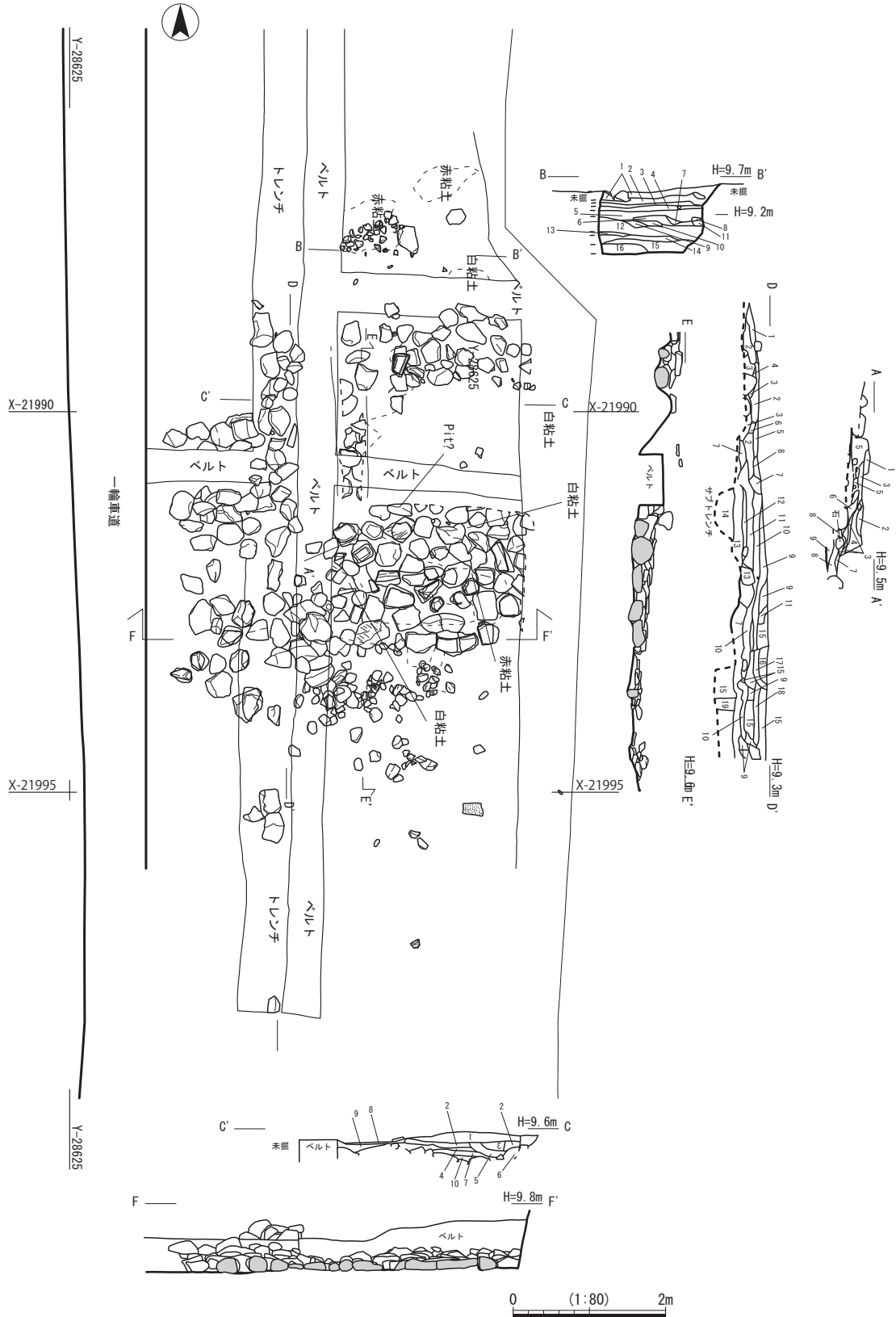


Fig.27 S007 実測図2 S=1/80

中央トレンチ土層断面註記 (Fig.26)

- 1層：バラス混土層。よくしまる。
 2層：粘質土の塊状混土層。きわめてよくしまる。酸化鉄発色。
 3層：Hue2.5Y5/3 (黄褐色土)；よくしまる。砂質土。粘性なし。
 4層：Hue2.5Y5/4 (黄褐色土)；よくしまり、粘性なし。砂質土。
 粘質土塊を含む。(2%)
 5層：粘質土。しまる。砂塊を含む。(3%)
 6層：Hue2.5Y5/3 (黄褐色土)；しまりあり、粘性なし。砂質土。
 酸化鉄の発色著しい。
 7層：粘質土塊と砂質土塊の混土層。しまる砂質土塊を含む。
 8～14層：中央トレンチ北端土層断面参照。
 15層：よくしまる。砂質を帯びた粘質土層。
 16層：しまる。
 17層：Hue10Y4/4 (褐色土)；よくしまり、粘性あり。砂塊3%。
 土器片をわずかに含む。
 18層：Hue10YR4/3 (にぶい黄褐色砂)；よくしまる。ガチガチの
 砂塊2% (3～6cm)
 19層 Hue2.5YR4/3 (にぶい赤褐色砂)；きわめてよくしまる砂塊。
 20層：Hue10YR3/4 (暗褐色砂)；ややしまる。
 21層：2層に似るが礫を含む。
 22層：30層に似るが、きわめてよくしまる。
 23層：22層に似るがよりしまる。
 24層：粘質土層。プライマリー。
 25層：Hue7.5YR4/6 (褐色砂)；ガチガチにしまる砂。
 26層：53層に似るがよくしまる。酸化鉄の発色著しい。
 27層：Hue10YR3/3 (暗褐色土)；しまる粘質土。
 28層：Hue10YR4/2 (灰黄褐色土) と Hue10YR3/3 (暗褐色土)
 の中間；粘質土。しまりなし。
 29層；Hue2.5Y5/3 (黄褐色土)；しまる砂質土。
 30層 Hue10YR5/6 (黄褐色土) と Hue10YR5/4 (にぶい黄褐色土)
 の中間。よくしまる砂質土。
 31層：粘質を帯びた砂質土。きわめてよくしまる。
 32層：4層と似るが、酸化鉄の発色が強い。
 33層：Hue10YR4/4 (褐色土)；よくしまる砂質土。
 34層：Hue10YR4/4 (褐色土)；きわめてよくしまる砂質土。
 35層：バラス混土層。きわめてよくしまる。
 36層：きわめてよくしまる砂質土塊。
 37層：29層と似るが、酸化鉄の発色が少し著しい。

中央トレンチ東西ベルト土層註記 (Fig.26)

- 1層：バラス混土層。きわめてよくしまる。23年度調査時の出入口痕。
 2層：バラス混土層。きわめてよくしまる。鉄道敷設時の地業面。
 3層：Hue2.5Y2/2 (極暗赤褐色土)；よくしまり、粘性なし。砂質土。
 4層：Hue10YR3/4 (暗褐色土)；よくしまり、粘性なし。粘性を
 帯びる砂質土。2～3cm大のよくしまる砂質土を塊状に含む。
 (3%)
 5層：Hue10YR5/4 (にぶい黄褐色土)；きわめてよくしまる砂質土。
 粘質土を塊状に含む。(2%)
 6層：Hue2.5Y2/2 (極暗赤褐色土)；よくしまり、粘性なし。砂質土。
 7層：3層と6層の混土層。きわめてよくしまり、粘性なし。砂質。
 8層：Hue10YR2/3 (黒褐色土)；しまる。粘質土。
 9層：Hue10YR5/4 (にぶい黄褐色土)；きわめてよくしまる砂質土。
 粘質土を塊状に含む。(2%)
 10層：24層と同一だが、さらによくしまる。
 11層：Hue10YR3/4 (暗褐色土)；しまり、粘性なし。砂質土。
 12層：Hue10YR3/4 (暗褐色土)；よくしまり、粘性なし。粘性を
 帯びる砂質土。
 13層：Hue10YR3/3 (暗褐色土)；よくしまる。粘質土。
 14層：Hue10YR3/2 (黒褐色土)；きわめてよくしまり、粘性なし。
 砂質土。
 15層：Hue10YR2/2 (黒褐色土)；しまる。粘質土。
 16層：Hue10YR2/2 (黒褐色土)；しまる。粘質土。
 17層：塊状砂質土と粘質土の混土層。
 18層：Hue10YR3/4 (暗褐色土)；33層と同質だが、砂質土の割
 合が多い。
 19層：Hue10YR4/4 (褐色土)；塊状によくしまる砂質土。
 20層：Hue10YR4/4 (褐色土)；ややしまり、粘性なし。砂質土。
 21層：Hue10YR3/3 (暗褐色土)；きわめてよくしまり、粘性なし。
 砂質土。
 22層：Hue10YR3/3 (暗褐色土)；しまりあり、粘性なし。砂質土。
 23層：Hue10YR3/4 (暗褐色土)；しまり、粘性なし。砂質土。

配石遺構 (S007) 上段東側覆土断面土層註記 (Fig.27)

- 1層：Hue10YR5/4 (にぶい黄褐色土)；きわめてよくしまり、粘
 性あり。粘質土。粒砂～礫を含む。(5%)粘質土塊を含む。
 2層：Hue10YR4/3 (にぶい黄褐色土)；しまりあり、やや粘性あり。
 砂質土。
 3層：Hue10YR4/3 (にぶい黄褐色土)；よくしまり、粘性あり。
 粘質土。
 4層：Hue10YR4/3 (にぶい黄褐色土)；しまりあり、粘性なし。
 砂質土。
 5層：Hue10YR4/3 (にぶい黄褐色土)；きわめてよくしまり、粘
 性あり。粘質土。
 6層：2層と5層の混土層。
 7層：Hue10YR3/3 (暗褐色土)；しまり、粘性なし。砂質土。
 8層：混バラス層。近現代？

中央トレンチ北端土層断面註記 (Fig.26)

- 1層：バラス混土層。きわめてよくしまる。鉄道敷設時の地業面。
 2層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；よくしまり、粘性なし。粘性を帯びる砂質土。2～3cm大のよくしまる砂質土を塊状に含む。（3%）
 3層：2層と同一だが、よくしまる砂質土を塊状に含む。（5%）
 4層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；よくしまる。粘質土。
 5層：4層土に砂質土を混入する。
 6層：Hue2.5Y2/2（極暗赤褐色土）；よくしまり、粘性なし。砂質土。
 7層：3層と6層の混土層。きわめてよくしまり、粘性なし。
 8層：7層と同一だが、粘性なし。ややしまる。
 9層：7層と同一だがしまる。
 10層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまりあり、やや粘性あり。砂質を帯びた粘質土。粘質土と砂質土は層状に入る。（1～5mm）よくしまる砂質土を塊状に含む。（2cm大）
 11層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ褐色土）；しまりあり、粘性なし。砂質土。
 12層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまる。粘質土。
 13層：12層と同一だが、よりしまる。
 14層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまる。砂質を帯びた粘質土。1cm大のよくしまる砂質土を塊状に含む。土器細片を1点含む。
 15層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまる。粘質土と砂質土の混土層。それぞれの土は塊状に入る。
 16層：Hue7.5Y3/4（暗褐色土）；きわめてよくしまり、粘性なし。砂質土。酸化鉄の発色、結合が著しい。
 17層：12層と14層の混土層。しまる。それぞれの土は層状に入る。
 18層：Hue10YR1.7/1（黒色土）；しまり、粘性あり。細砂粒をごく僅かに含む。
 19層：19層と16層の混土層。
 20層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；よくしまり、やや粘質あり。砂質土。
 21層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまりあり。粘質土。礫、土器細片、白色粒砂粒を含む。
 22層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；ややしまる粘質土。
 23層：Hue10YR1.7/1（黒色土）；しまり、粘性あり。植物片（未炭化）を僅かに含む。
 24層：3層と同一だが、礫を含む。
 25層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。粘質土。
 26層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。
 27層：Hue2.5Y3/3（暗褐色土）；きわめてよくしまり、粘性なし。砂質土。
 28層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり、粘性なし。砂質土。

中央サブトレンチ土層註記 (Fig.26)

- 1層：Hue10YR3/3（暗褐色土）とHue10YR5/4（にぶい黄褐色土）の混土層；よくしまり、やや粘性あり。粘質土。礫、焼土塊、炭化物を含む。
 2層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまりあり、やや粘性あり。粘質土。Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）粘質土を塊状に含む。（50%～）
 3層：1層に似るが、混合率は低い。（5%）
 4層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；しまりあり、やや粘性あり。粘質土。Hue10YR5/4（にぶい黄褐色土）粘質土を粒状に含む。（1%）
 5層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまりあり、粘性なし。砂質土。
 6層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまりあり、粘性なし。粘性を帯びる砂質土。
 7層：Hue10YR4/1（褐色土）；しまり、粘性あり。塊状な土質で土塊の間隙にやや酸化鉄が発色する。
 8層：5層と同一だがしまりは弱い。
 9層：Hue10YR4/4（褐色土）；よくしまり、粘性あり。不均質な粘質土。粗砂～礫を含む。（2%）
 10層：Hue7.5Y4/4（褐色土）；よくしまり、粘性あり。粘質土。やや不均一な土質。粗砂～礫を含む。（1%）
 11層：Hue10YR6/4（にぶい黄褐色土）；しまり、粘性あり。粘質土と砂質土の混土層。
 12層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；ややしまり、粘性あり。酸化鉄の発色が目立つ。下位層序との境にうすい酸化鉄の層が形成されている所もある。
 13層：Hue7.5YR2/2（黒褐色土）；よくしまり、粘性あり。ほぼ全面に酸化鉄の発色あり。土器片（弥生）を僅かに伴う。
 14層：16層と同一だが、酸化鉄の発色は少ない。やや暗めの印象を受ける。
 15層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまりあり、やや粘性あり。塊状に不均質な埋土。粗砂～礫を含む。（3%）
 16層：17層に似るが、粘土塊をより多く混入する。
 17層：15層に似るが、粘土塊をより多く混入する。
 18層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまりあり、やや粘性あり。19層よりややきめが揃う感じ。粗砂～礫を含む。（2%）
 19層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまりなし、やや粘性あり。シルト質土。粗砂～礫を含む。（10%）

南側東西ベルト土層断面註記 (Fig.27)

- 1層：Hue10YR4/4（褐色土）；きわめてよくしまり、粘性なし。シルト土。
 2層：Hue10YR6/3（にぶい黄褐色土）；きわめてよくしまり、粘性あり。シルト土。礫を含む。（30%）
 3層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；きわめてよくしまり、やや粘性あり。粘質土。
 4層：Hue10YR6/3（にぶい黄褐色土）；きわめてよくしまり、粘性あり。シルト土。礫を含む。（5%）粗砂～礫を含む。（10%）
 5層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；きわめてよくしまり、やや粘性あり。砂質を帯びる粘質土。粗砂～礫を含む。（30%）きわめて不均一な土質。
 6層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；きわめてよくしまり、粘性あり。シルト土。
 7層：Hue7.5YR6/6（橙褐色土）；よくしまり、粘性あり。シルト土。
 8層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。粘質土。
 9層：Hue2.5YR5/3（にぶい黄褐色土）；しまり、粘性なし。砂質土。

上段サブトレチ土層註記 (Fig.27)

- 1層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；よくしまり、粘性あり。粘質土。不均一な土質。粗砂～礫を含む。
- 2層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；砂質土と粘質土の混土層。層序下位にうすい酸化鉄の発色あり。
- 3層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；よくしまり、やや粘質あり。砂質を帯びた砂質土。
- 4層：Hue2.5Y5/3（にぶい黄褐色土）；きわめてよくしまり、粘性なし。シルト土。
- 5層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；よくしまる。粘質土と砂質土の混土層。酸化鉄の発色が目立つ。
- 6層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。粘質土。
- 7層：Hue2.5Y4/2（暗灰黄色土）；しまり、粘性なし。砂質土。
- 8層：Hue10YR5/2（灰黄褐色土）；ややしまる。粘質土。
- 9層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；砂質土と粘質土の混土層。
- 10層：Hue10YR5/4（にぶい黄褐色土）；しまり、粘性なし。砂質土。
- 11層：Hue2.5Y4/2（暗灰黄色土）；しまり、粘性なし。砂質土。
- 12層：Hue10YR4/6（褐色土）；しまりあり、粘性なし。砂質土。酸化鉄の発色が目立つ。
- 13層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；ややしまり、粘性あり。粘質土。
- 14層：Hue7.5YR4/3（褐色土）；きわめてよくしまり、粘性なし。砂質土。酸化鉄によって結合した感じ。
- 15層：14層と粘質土（Hue10YR4/2 灰黄褐色土）の混土層。しまる。
- 16層：Hue2.5Y4/1（黄灰色土）；しまり、粘性なし。砂質土。水分を多量に含む。

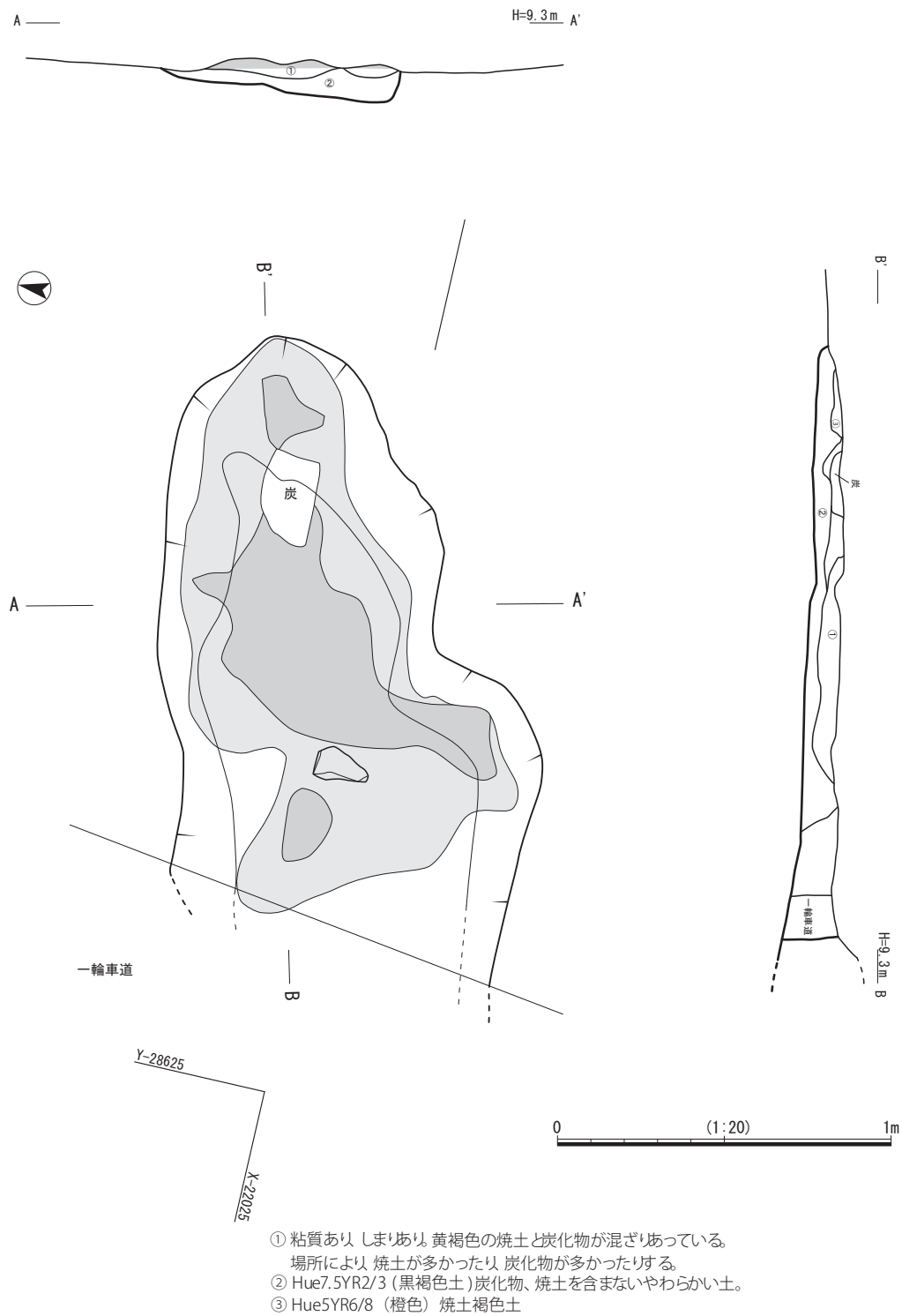


Fig.28 S008 実測図 S=1/20

土器、石器以外では、泥面子や泥人形、それらの型が多く出土している。これらの遺物は、遺構に伴う物ではなく、調査の最初の段階、表土剥ぎで出土している。この調査区の特徴的なのは、この泥人形の出土量である。破片の大きさも大きいのだが、多量に出土するため、調査の際にビニール袋に入りきれず、仕方なく土嚢袋にいれるほどの量であった。

なお、泥人形、泥面子については第12節で詳細を述べる。

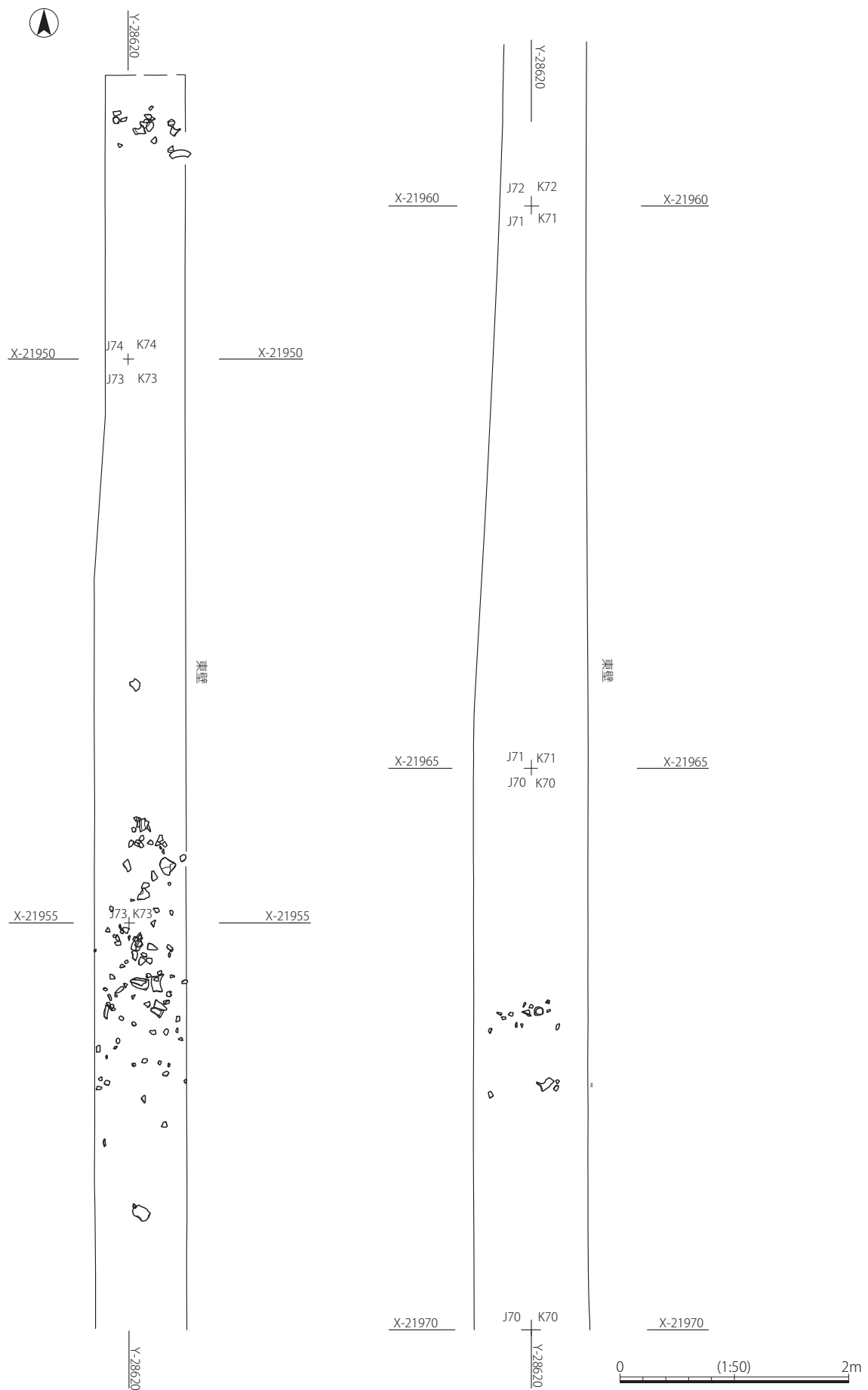
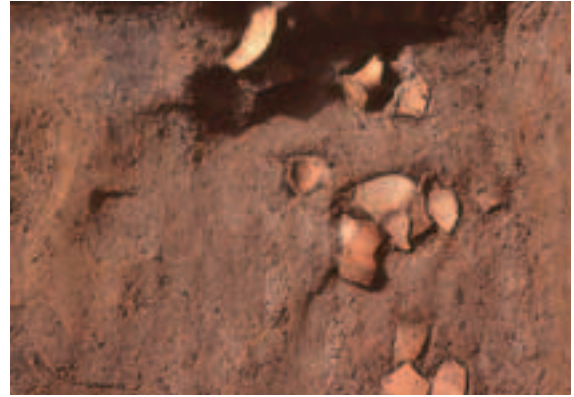


Fig.29 K70 ~ 74 東壁トレンチ遺物出土状況図 S=1/50

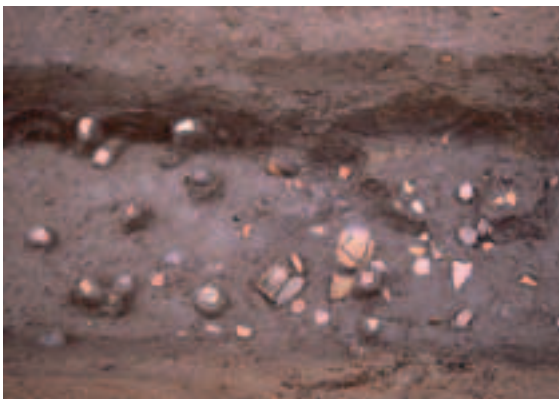
PL16 新馬借B 24 調査区遺構写真 (1)



遺物出土状況 1



遺物出土状況 2



遺物出土状況 3



S002 遺物出土状況



S001 1層完掘状況 (南東より)



S001 2層完掘状況 (南より)



S001 A - A' 土層断面



S001 B - B' 土層断面

PL.17 新馬借B 24 調査区遺構写真(2)



S001 C - C' 土層断面



S001 完掘状況



S002 硬化面検出状況



S003 完掘状況



S004 完掘状況



S006 敷き粗朶検出状況



S006 敷き粗朶断面状況



S007 遺物出土状況

PL.18 新馬借B 24 調査区遺構写真 (3)



S007 土層断面 1



S007 土層断面 2



S007 土層断面 3



S007 土層断面 4



S007 検出状況 1



S007 検出状況 2



S007 検出状況 3

PL.19 新馬借B 23・24 調査区遺物写真(1)



380 S001 出土



379 S001 出土



374 S001 出土



366 S001 出土



331 S001 出土



375 S001 出土 (内器面)



376 S001 出土



371 S001 出土



375 S001 出土 (外器面)



370 S001 出土



369 S001 出土



367 S001 出土



356 S007 出土 (凸面)



355 S007 出土 (凸面)



357 S007 出土 (凸面)



356 S007 出土 (凹面)



355 S007 出土 (凹面)



357 S007 出土 (凹面)

PL.20 新馬借B 23・24 調査区遺物写真 (2)



381 S003 出土



378 J-69・70 出土



383 J-69・70 出土



382 J-69・70 出土



363 J-69・70 出土



333 J・K-69～75 出土



364 J・K-71・72 出土



328 J・K-71・72 出土



352 J・K-71・72 出土



345 J・K-71・72 出土



341 J・K-71・72 出土



342 J・K-71・72 出土



329 J・K-71・72 出土



362 J・K-71～74 出土



358 J・K-72・73 出土



336 K-72・73 出土



359 J・K-72・73 出土



353 J・K-73・74 出土

PL.21 新馬借B 23・24 調査区遺物写真(3)



334 J・K-73・74 出土



335 J・K-73・74 出土



361 J・K-73・74 出土



377 J・K-74・75 出土



330 J・K-74・75 出土



351 J・K-74・75 出土



332 J・K-76・77 出土



344 表土剥ぎ出土



343 表土剥ぎ出土



579～587 J・K-69～77 出土



524 J-64～66 出土



530 J・K-73・74 出土



530 J・K-73・74 出土



543 J・K-72・73 出土



529 J・K-70・71 出土



528 J・K-70・71 出土



527 J・K-70・71 出土



525 J・K-70・71 出土

PL.22 新馬借B 23・24 調査区遺物写真 (4)



346 S005 出土



347 J.K-71.72 出土



354 S007 出土 (凹面)



354 S007 出土 (凸面)

Tab.12 新馬借遺跡B調査区遺物観察表(1)

Table with columns: 調査区, 遺物種別, 遺物番号, 遺物名, 出土地点, 層位, 寸法(cm), 口徑, 底径, 高さ, 内面, 外面, 重量, 内面, 外面, 色調, 加工, 焼成, 備考. It contains detailed archaeological data for various pottery fragments.

Tab.13 新馬借遺跡B調査区遺物観察表(2)

Table with columns: 調査区, 遺物種別, 遺物番号, 遺物名, 出土地点, 層位, 寸法(cm), 口徑, 底径, 高さ, 内面, 外面, 重量, 内面, 外面, 色調, 加工, 焼成, 備考. It continues the list of archaeological observations.

Tab.14 新馬借遺跡B調査区遺物観察表(3)

Table with columns: 調査区, 遺物種別, 遺物番号, 遺物名, 出土地点, 層位, 寸法(cm), 口徑, 底径, 高さ, 内面, 外面, 重量, 内面, 外面, 色調, 加工, 焼成, 備考. It continues the list of archaeological observations.

Tab.15 新馬借遺跡B調査区遺物観察表(4)

Table with columns: 調査区, 遺物種別, 遺物番号, 遺物名, 出土地点, 層位, 寸法(cm), 口徑, 底径, 高さ, 内面, 外面, 重量, 内面, 外面, 色調, 加工, 焼成, 備考. It concludes the list of archaeological observations.

第5節 新馬借 A-1 調査区

1 調査区概要

この調査区は、平成23年度に二次調査で実施した高麗門調査区のすぐ北側にあたる。鉄道高架化事業における橋脚P479の基礎部分および暗渠排水路工事に伴う掘削範囲を合わせたものである。しかし、掘削される部分の全てをカバーしたものではない。この調査区の西側にあるJR鹿兒島本線の仮設線路からの安全距離の確保が必要であったこと、同時期に平行して着手している新馬借B調査区のために進入道路を設ける必要があったこと、既設の暗渠排水路の撤去が不可能であったことなどにより、新幹線の橋脚下から5mほどの間を空けて調査区を設定した。また、調査区東側及び南側は、北から伸びてくる暗渠排水路工事範囲をこの調査区の中に組み入れた。その結果、調査区は南北約20m、東西約19m、面積約380㎡となった。調査区名は昨年度の調査区の新馬借A地区を踏襲し、新馬借A-1調査区とした。

この調査区では、隣接する高麗門調査区の状況から、薄く残る鉄道の砂利層と若干の攪乱を表土剥ぎで除去するにとどめた。攪乱として西側にあるコンクリートの側溝とその下の堀の落ち際までは下げることにした。ところが、調査区の大部分の表土は除去したが、西側の攪乱とした層付近で近現代の遺物に混じって瓦類が出土し、鯰瓦片が出るに至り、この部分については表土の除去を最小限に留めた。

調査は、全体の清掃を行い、遺構の確認から行った。その結果、鉄道が敷設されていたJ・K-45グリッドからJ・K-49グリッドまでの間で、鉄道の枕木痕や小ピット、線路下を横切る溝などを確認した。それらのグリッドは、ほとんど硬い鉄道敷設に伴う整地層であることが分かった。I-45グリッドからI-49グリッドでは、鉄道に関係する遺構と、複線化前までに西側にあった宅地などに伴う排水溝と考えられる遺構、ごみ捨て穴などを検出した。さらに複線化後に設置されたと考えられる道路の側溝の下付近に堀を埋めたと考えられる落ち込みを確認した。これらの遺構は近代以降の遺構で、百年ほどの期間での変化を示すものであった。そこでこの調査区では、人工的な遺構については近代以降の遺構についても遺構番号を付けていくこととした。

調査を進める中で、高麗門や堀の遺構を押さえるために、調査区の東西方向の土層の状況を確認するため、大きく北側(No.1)、中央(No.2)、南側(No.3)の3箇所にはトレンチを設定した。

調査ではまず、最初に確認した鉄道遺構やごく最近の遺構を掘削し、下位の遺構の存在の有無や、一段階古い遺構の存在を確認していった。また、東西トレンチを掘り下げ、各遺構の切り合い関係、鉄道敷設以前の状況を確認していった。トレンチの調査結果として、鉄道敷きの部分より下位に中世末遺物や灰などを含む層があることが分かり、岩盤と考えた灰色の硬質砂層付近で溝状の落ち込みが存在することが分かった。さらに西側では、上位の近代以降の遺構を掘削しながら、トレンチを確認していく中で、堀の落ち込みと考えられる急激に西側に傾斜する層と、その傾斜に沿って西側に落ち込む多量の遺物を含む層を確認した。遺物の中には多量の瓦が出土し、そのほとんどは、江戸期の大型の建物に葺かれていたと思われる丸瓦・平瓦であった。その瓦等を含む層の状況は、すでに上面は近代の遺構などで攪乱されているが、当時は現況よりもさらに上へ伸びていた可能性が高い。また瓦の出土する土層を詳細に観察すると大きく2つの層に分かれている状況が分かった。そこで、ここでは大きく2層と3層とに分けた。2層は明褐色粘性土で遺物が多く入り込み、瓦の大部分はこの層に入る。瓦のほかに近世陶磁器、土師質土器なども含まれている。中には漆喰の一部も入っていた。ただ、建築部材や釘、飾金具などは、ほとんど見つからなかった。3層は暗灰褐色の層で、瓦等の遺物は上層ではそれほど出土していないが、深くなるにつれて出土は増えるようであった。しかしながら、下位になるほど調査区の境近くになり掘削が十分できず最終的な状況は分からなかった。後日の水路工事の立会いに際し、下位の状況を見ていたが、下位では旧暗渠排水によって層は失われており実

際に遺物がどのようになっていたか不明である。この層の違いを出土遺物からの違いとして見分けることはできなかった。ただ、3層が暗灰褐色を呈することから堀がまだある程度機能していた時期とすれば、この層が一番この門の廃絶時期に近く、2層はそれより遅れてこの付近が再度整備されたと考えられる明治10年から鉄道敷設の明治24年頃までのものということができようか。

J・K-45～49グリッド部分では、トレンチ調査で遺物や灰などの出土があったため、J-48グリッドからJ-47グリッドにかけて長さ6m、幅2.5mの南北に長い広めのトレンチと長さ7.5m、幅2mの東西トレンチ(No.2トレンチ拡幅)を設置し、面的な調査を行った。しかし、土塁そのものの遺構の存在はつかめなかった。ただ、鉄道の整地層を除去した後、10cmほど掘削すると、中世末の土師器の坏や青花・色絵磁器の輸入陶磁器等、灰や炭化物が面的に出土した。ピット状の落ちはあったが柱などの遺構としては捉え難かった。その後も拡張トレンチをさらに1mほど掘り下げ、基盤層とした硬質の暗灰色を確認した。その面を精査したところ、溝状の落ちをいくつか確認した。これが人工的なものか自然地形のものか明確ではなかったが、わずかながら遺物が出土したことや獣骨を焼いたような痕跡があったことから遺構とした。

2 遺構と遺物

この調査区では、先に記したように遺構の存在時期が近世、近現代と非常に現在に近い短期間であるため、通常攪乱ですませる近代以降の遺構も通常の遺構とした。そのため、ほとんど現代から近代・近世・中世のものまでを遺構番号をつけて記録し、遺物を取り上げた。その一方で、明確に一つの遺構として扱えきれなかった堀、土塁なのか単なる地層の堆積なのかははっきりしなかったJ・K-45～49グリッドの土層については遺構番号はつけず、項目として記述する。

[A-1-S001]

この遺構は、溝遺構である。I-46グリッドからI-48グリッドまで伸び、さらに南北の調査区外まで伸びる。国鉄が複線化になる前に住宅や公園などに利用されていた際に、鉄道や住宅などの側溝として利用されていたものとする。埋土は暗灰褐色の軟質土で泥炭である。I-47グリッドの途中で西側の側溝の工事で一部掘削されている。この遺構はS003によって一部切られている。

確認した長さは10.7m、幅は50cm前後、深さ31cmほどを測る。調査区外まで延びている。

[A-1-S002]

この遺構も溝遺構で、S001同様にI-46グリッドからI-48グリッドまで伸び、さらに南北の調査区外まで伸びる。S001とほぼ平行し、同時期のものであろうか。確認した長さは14.8mを測るが、調査区外まで延びている。幅は1.1m前後、深さ22cmを測る。底部の高さは、S001とほぼ同じである。S001との間は、1.0mから1.2mほどである。

S002の途中でP1を確認したが、この遺構に伴うものか不明である。埋土を除去後に確認した。

[A-1-S003]

この遺構は、I-46グリッドで検出した。出土確認した面では浅い土坑であった。確認面では残存長が80cm、短径が70cmほどで、深さが6cmほどを測る。S001を切っている。

昭和期の第二次大戦後から複線化までの間に掘られたと考えられ、まとめて出土したガラス瓶6個体もほぼ同時期である。ごみ穴と考える。

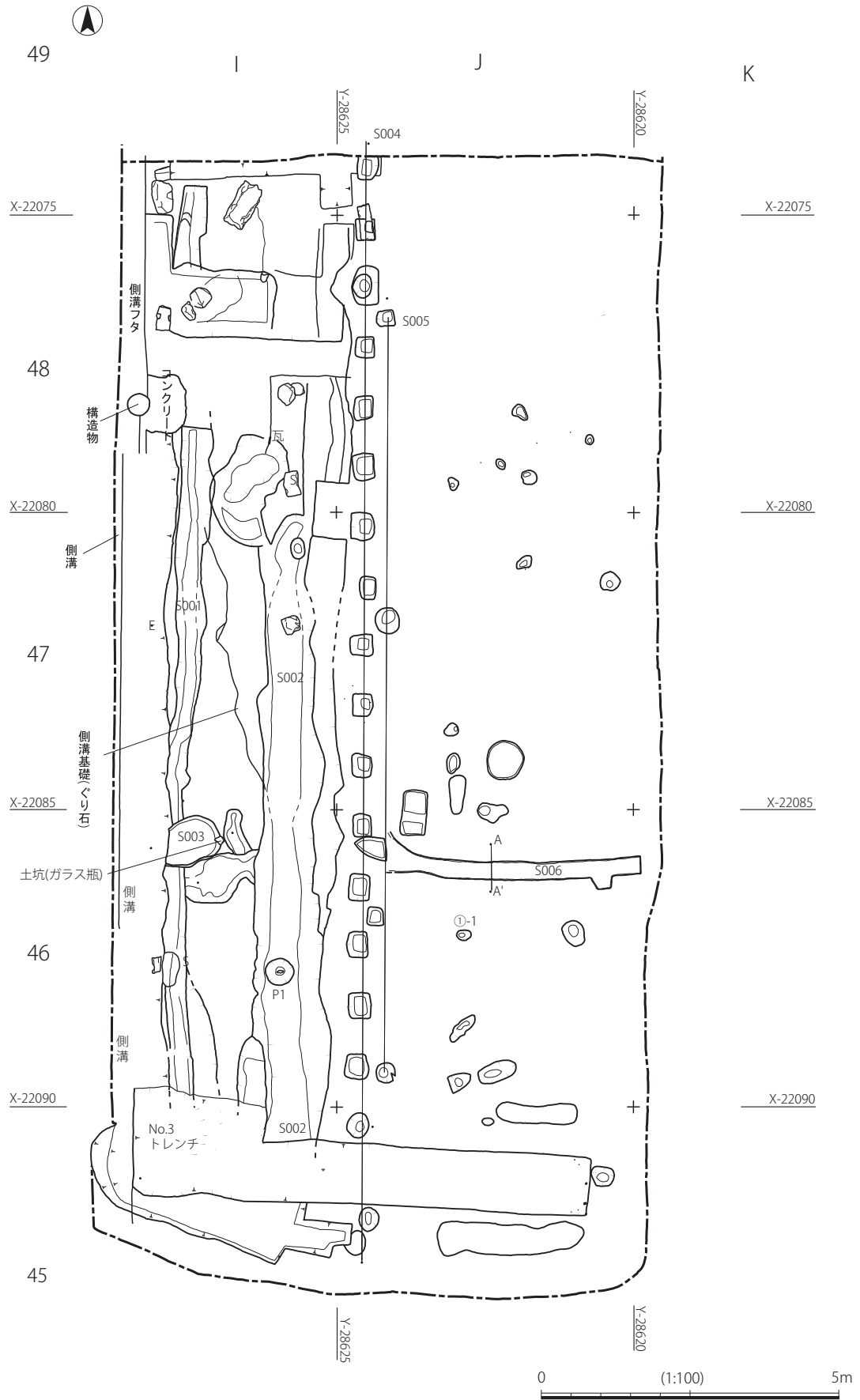


Fig.30 近代遺構配置図 S=1/100

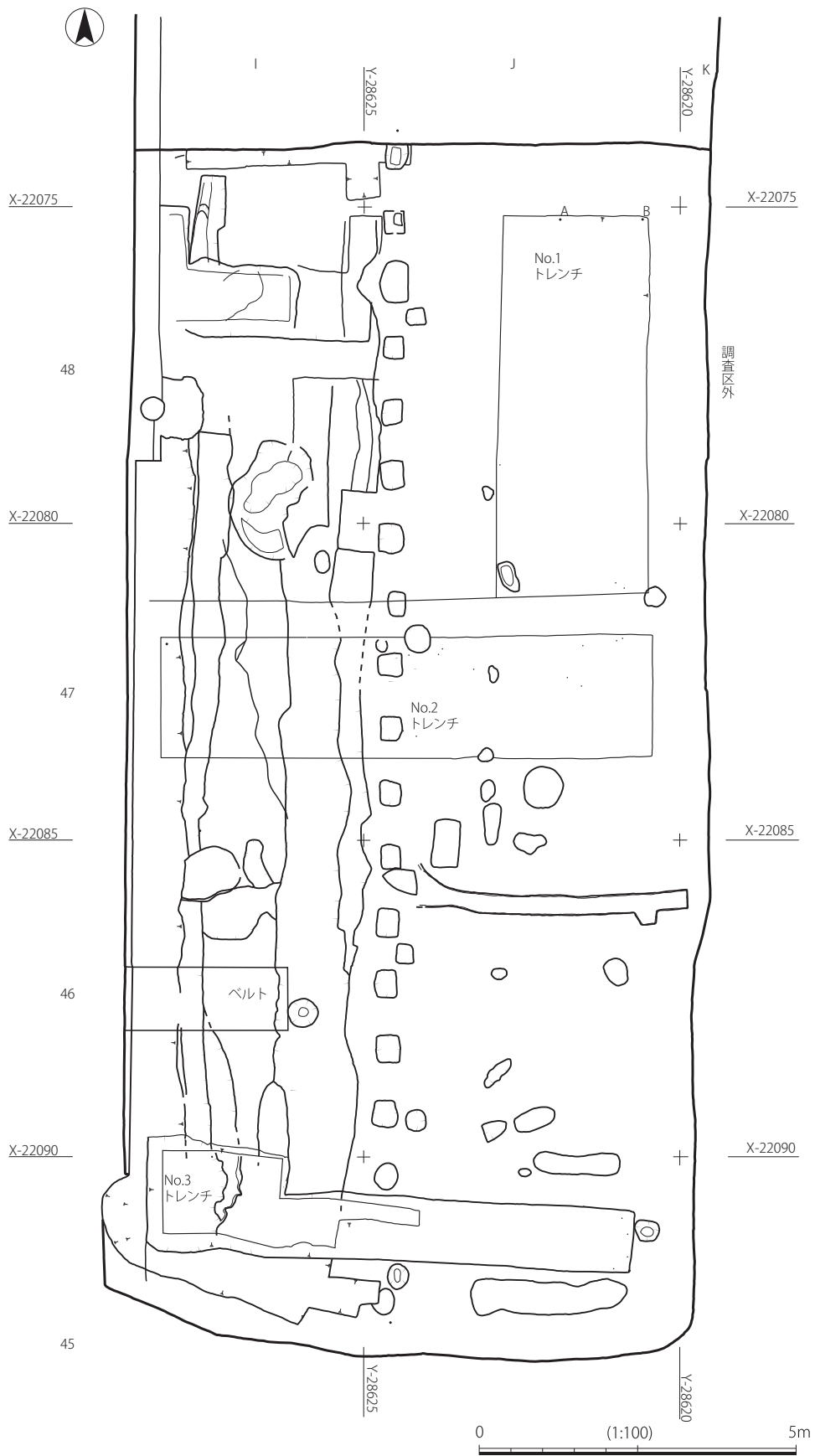


Fig.31 近世遺構配置図 S=1/100

[A-1-S004]

この遺構は、J-45 グリッドから J-49 グリッドまでの中で検出した柵列で、鉄道関連の防護柵の跡と考える。多くはほぼ一列になり、上端が長径 20cm ほど、短径 10cm ほどの隅丸方形で、深さは 40cm 前後、ピットの中心間は 1 m ほどである。確認したのは約 18 m ほどである。埋め込まれたのは形状から方形の柱であろうか。中には円形もあり、規格が異なっている場合がある。

鉄道関連の柵列として設置時期を確実に押さえられなかったが、少なくとも高麗門調査区の状況と、今回検出した場所から単線時代のものと考えられる。敷設時の明治 24 年から複線化する昭和 43 年（1968）までの間のものとしておく。

遺物の出土したピットもあったが、時期的には上記の範囲内か、それより若干古いものであった。

[A-1-S005]

この遺構は、ピット列で近代以降のものである。J-46 グリッドから J-48 グリッドまで検出した。調査区外にも伸び、柵列と考える。S004 に同じく鉄道に伴うものであろう。ピットの大きさの違いは時期差を示すものか。長さ 12.2 m、ピット間 3.21 m、深さ 16cm を測る。

列状にはなるものの、ピットの間隔はまちまちで一定ではなく、S004 に近接するものも多くあるので、S004 の補完的な役割を担ったものではなかろうか。

[A-1-S006]

この遺構は、J-46 グリッドで検出したものである。鉄道直下の整地層を精査中に検出したものである。近代以降の土管を埋設するための穴であろう。調査時には土管がまだ残っており、西側の端には水などが流出した跡があった。しかも最近まで利用されていた痕跡があった。ただ、鉄道が走っていたはずの場所になぜ最近まで存在していたか不明である。

残存長が、4 m 程、幅 30cm、深さ 16cm を測る。西側に緩やかに傾斜していた。

出土遺物として、33 の仏飯器、34 の陶器碗、37 の陶器碗などがある。37 は明らかに明治期のものであった。

[A-1- 堀]

ここでは、遺構名をつけていなかった「堀」跡に係わる部分についてまとめる。

I-45 ～ 49 グリッドは上部の近代以降の遺構の掘削と平行して、No.1 から No.3 までの東西トレンチを設けていたことは概要で述べた。そのトレンチのうち、特に No.3 トレンチと No.2 トレンチでは、I-45 ～ 49 グリッドにかかる部分は、近代以降の遺跡の掘削を補助するためと、瓦等の出土する層の状況を正確に見分け、堀の落ち際を掴むためとの目的で早くから掘り下げた。

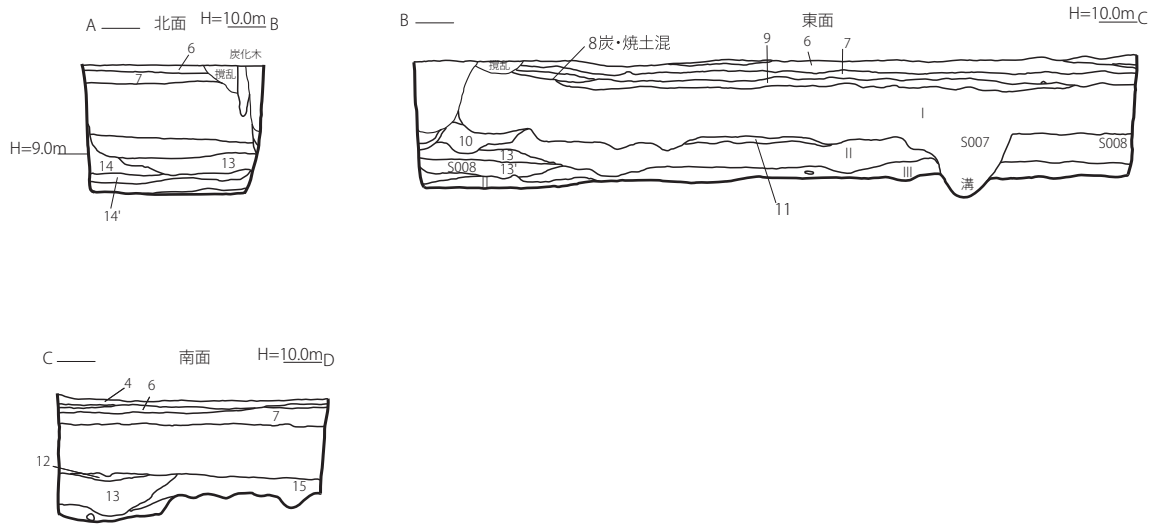
その結果、Fig.32 の No.2 トレンチ及び No.3 トレンチの土層断面において瓦類を中心に出土する土層の落ち込みを掴むことができた。また、近代の遺構の状況もつかめた。

No.3 トレンチでは、多くの瓦やその他の遺物が多量に出土した。出土範囲は、ほぼ調査区西側の 2 m 以内に限られた。土層を見ると 2 層に多くの遺物が含まれ、さらに 3 層にも入っている。その下には岩盤とした暗灰色の硬化した砂質層が地山としてある。この層は他のトレンチでも基盤層としてあることが分かっている。

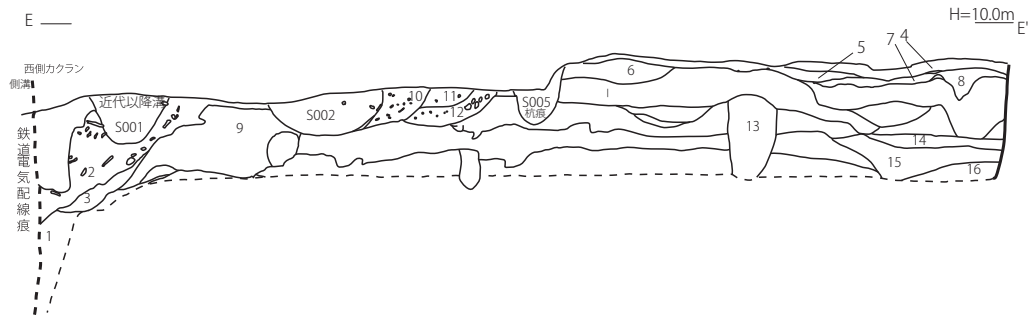
この層がトレンチでは、調査区の西端から約 1.2 m でなくなっており、そこから急激に落ち込んでいる。その落ち込みの傾斜に沿って遺物が落ち込む状況にある。

この落ち込みは、No.2 トレンチでも確認している。ここでは、調査区の西端から約 90cm ほどの位置で確

No.1トレンチ



No.2トレンチ (中央東西トレンチ)



No.3トレンチ南壁

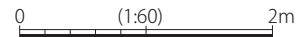
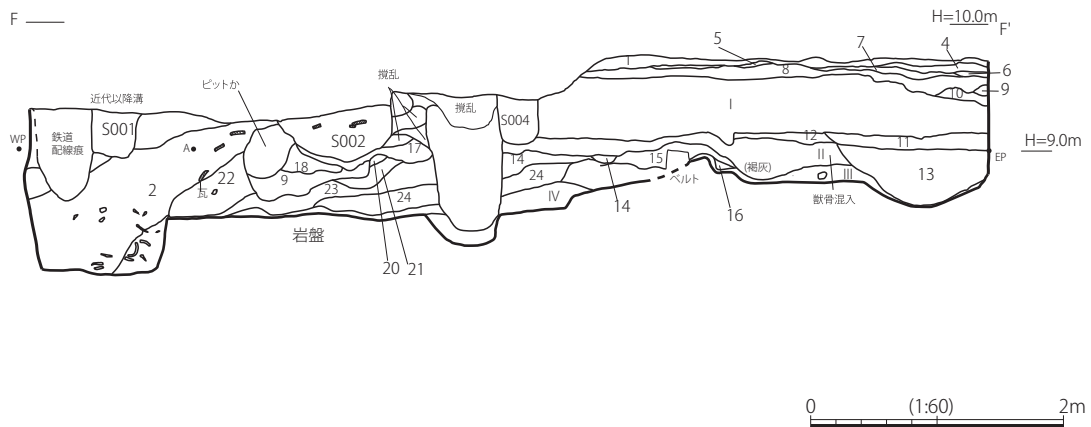


Fig.32 No.1・2・3トレンチ土層断面図 S=1/60

No.1 トレンチ土層註記 (Fig.32 A-B B-C C-D)

- | | |
|--|---|
| <p>I層：Hue5YR4/2（灰褐色土）；マンガン、黒色粘土など微粒子混じる。</p> <p>II層：Hue10YR4/1（褐灰色粘質土）；細砂混入粘質土。しまりあり。高師小僧入る。</p> <p>III層：Hue10YR3/1（黒色砂質土）；下層黒色の漸位層。やや粘土混じる。</p> <p>IV層：Hue10YR5/4（明褐色火山灰）</p> <p>1層：赤褐色土。焼土。</p> <p>2層：Hue10YR6/8（明黄褐粘質土）；しまりあり。瓦片、礫を多く含む。門の破壊後に掘りおこされた土。</p> <p>3層：下層に似るが、粗粒子混じる。色調は同じ。門の破壊後に掘りおこされた土。</p> <p>4層：Hue2.5YR6/1（明灰色土）</p> <p>5層：炭、焼土混入。</p> | <p>6層：Hue2.5YR5/1（暗灰色土）</p> <p>7層：Hue5YR4/3（赤褐色土）；少し黒っぽい。</p> <p>8層：炭、焼土混入。</p> <p>9層：Hue5YR4/3（赤褐色土）</p> <p>10層：鉄分集積層。</p> <p>11層：鉄分集積層、炭化物。</p> <p>12層：Hue2.5Y5/3（黄褐色砂）</p> <p>13層：鉄分集積層。上層より黒い。S008埋土。</p> <p>13'層：13層とほぼ同一だが、僅かに異なる。</p> <p>14層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；鉄分集積層。</p> <p>14'層：14層とほぼ同一だが僅かに異なる。</p> <p>15層：Hue10YR5/6（褐色土）</p> |
|--|---|

No.2 トレンチ（中央東西トレンチ）土層註記 (Fig.32 E-E')

- | | |
|---|---|
| <p>I～IV層：北東試掘溝と同一</p> <p>1層：暗褐色粘質土。瓦片、礫片、多く含む。</p> <p>2・3層：北東試掘溝と同一</p> <p>4層：褐灰色粘質土。5層に似るもやや異。</p> <p>5層：4層に似るもやや異なる。</p> <p>6層：註記なし。</p> <p>7層：Hue10YR1.7/1（黒土）；炭化物層。</p> | <p>8層：Hue10YR5/1（褐灰色土）；鉄分混入。</p> <p>9層：註記なし。</p> <p>10～12層：近代以降の溝状遺構。</p> <p>13層：褐色土。</p> <p>14層：Hue10YR4/1（褐灰色土）；砂粒多く、粘質少ない。S008埋土。</p> <p>15層：Hue10YR4/1（褐灰色土）；粘性強い。S008埋土。</p> <p>16層：註記なし。S008埋土。</p> |
|---|---|

No.3 トレンチ南壁土層註記 (Fig.32 F-F')

- | | |
|--|---|
| <p>I～IV層：No.1 トレンチと同一</p> <p>1層：褐灰粘質土。版築層時期。</p> <p>2・3層：No.1 トレンチと同一</p> <p>4層：黄褐灰色土。版築層時期。</p> <p>5層：褐灰粘質土。版築層時期。</p> <p>6層：黄褐灰粘質土。版築層時期。</p> <p>7層：褐灰粘質土。版築層時期。</p> <p>8層：褐灰粘質土。版築層時期。</p> <p>9層：版築層時期。</p> <p>10層：黄褐灰粘質土。版築層時期。</p> <p>11・12層：註記なし。</p> <p>13層：上層土に褐黄色の土混じる。S008埋土。</p> <p>14層：註記なし。</p> | <p>15層：暗褐色粘質土。</p> <p>16層：註記なし。</p> <p>17層：暗黄褐色土。</p> <p>18層：明褐色砂層。</p> <p>19層：暗褐色土。小礫含む。</p> <p>20層：註記なし。</p> <p>21層：暗褐色土。</p> <p>22層：暗褐色土。瓦片わずかに混じる。パミス状の粒子入る。場所により、下層の灰色粘質土礫塊入る。土塁の下層部分か。埋土は堀の土混じるか。</p> <p>23層：暗褐色粘質土。</p> <p>24層：Hue10YR5/6（褐色粘質土）</p> |
|--|---|

認している。調査区の設定では、調査区西側端は南北方位にほぼ沿っているが、地山の掘削ラインと調査区の端の間が9 mほどの距離の間で90cmほど狭くなっており、堀のラインがそれだけ西側に寄っていることを示している。これは、単線時の鉄道線が高麗門踏切付近から急激に西側に屈曲していたことと通じるもので、堀が北へ行くにつれて西側に張り出していたことと合致する。江戸期の絵図にも西側に張り出す状況を描いたものがある。

ただ、この調査区で確認できたのは西側に落ちるというところまでで、どこまで落ちるかは、その後の工事立会によって確認できている。ただし、この落ちている調査区西側には、第二次大戦以前に遡る可能性がある暗渠排水があり、3 m以上掘削されているので落ち際は確認したがどこまで堀の傾斜が残っているかは不明である。

ちなみに現状での落ち際の角度を堀の傾斜角と考えるなら、約40°～45°くらいの傾斜となり、かなり急な角度である。

次にこの堀の傾斜に落ち込んだ遺物についてまとめる。

出土した遺物は、圧倒的な数として瓦がある。詳細な数量的データは第12節の調査のまとめで述べるが、破片数量で15,000点を越えている。その後の排水路工事立会での分も加算されているとはいえ、数量的には今回の全ての調査区の7割に当たる。

瓦の種類別では、軒瓦（丸、平）、滴水瓦、棧瓦、目板棧瓦、特殊瓦などがあり、棧瓦の出土は高麗門のみの瓦が入っているのではない可能性を示す。しかし、丸瓦、平瓦が多いのは確かである。

ここでは、瓦を中心として他の遺物の状況について以下に述べていく。

まず瓦であるが、出土した数量は多くはなかったが、谷瓦が数点ある。112、121は谷丸瓦である。112は谷の右側に配されるもので、121は谷の左側に配されるものである。この瓦が存在することは、この瓦が葺かれた建物が谷部を持つものであることの証左である。屋根の構造では、屈曲を持つ場合谷部ができることになるが、絵図に描かれた高麗門のうち江戸後期のものはいずれもL字状に屈曲する。この屈曲部に使用されていた瓦の可能性を示すものである。ただ、数理的には6点と少ないのが難である。同じく谷平瓦も高麗門調査区と合わせて3点出土している。谷丸瓦と組み合わせるものである。

次に表土剥ぎ時に出土した117の鯨瓦がある。腹側から背、側面にかけてのごく一部である。蛇腹は3段確認できる。腹鱗と横に鱗らしきものが付けられている。体部には一本のヘラ描きによる鱗が描かれる。内器面には粘土紐の積み上げ痕が見える。

このわずかな破片から全体を想定するのはかなり難しいが、類例から想定すると全体高は60cmを超えるのではなかろうか。また、鱗の表現方法から一定の時期まで推定できそうである。この他にも鯨瓦の一部ではないかと考えられるものが5、6点ある。しかし、この鯨瓦がこの高麗門のものであったか確かではない。富重写真所蔵の写真では不明瞭である。同時期の古写真に、南の正門であった新三丁目御門の写真があるが、屋根を見ると鳥衾が置かれているだけである。

次に軒瓦についてみると、丸瓦では桐文、桔梗文、日足文、九曜文などが出土した。平瓦では滴水瓦、桐文の入る平瓦、三葉文の瓦など様々である。加藤家に縁の瓦としては、87・102の日足文のものや、84の桔梗文などがある。また、滴水瓦などもある。滴水瓦は出土点数も割りと多く、記念銘の入るものも多い。64には「慶長四年」、63には「明和二?年」、101には「文政十八年」と加藤・細川の江戸時代を通じて存在し、権威の象徴なのか、伝統なのか不明である。長期に渡り使用されてきている。新三丁目御門では滴水瓦が葺かれている状況が見て取れる。当初からのものではなかろうが、様式としての滴水瓦が城の一部に使用されることがあったと考える。

また、先に示した丸瓦にも長く使用されたものがあったのかも知れない。84の桔梗文の瓦は、製作技法

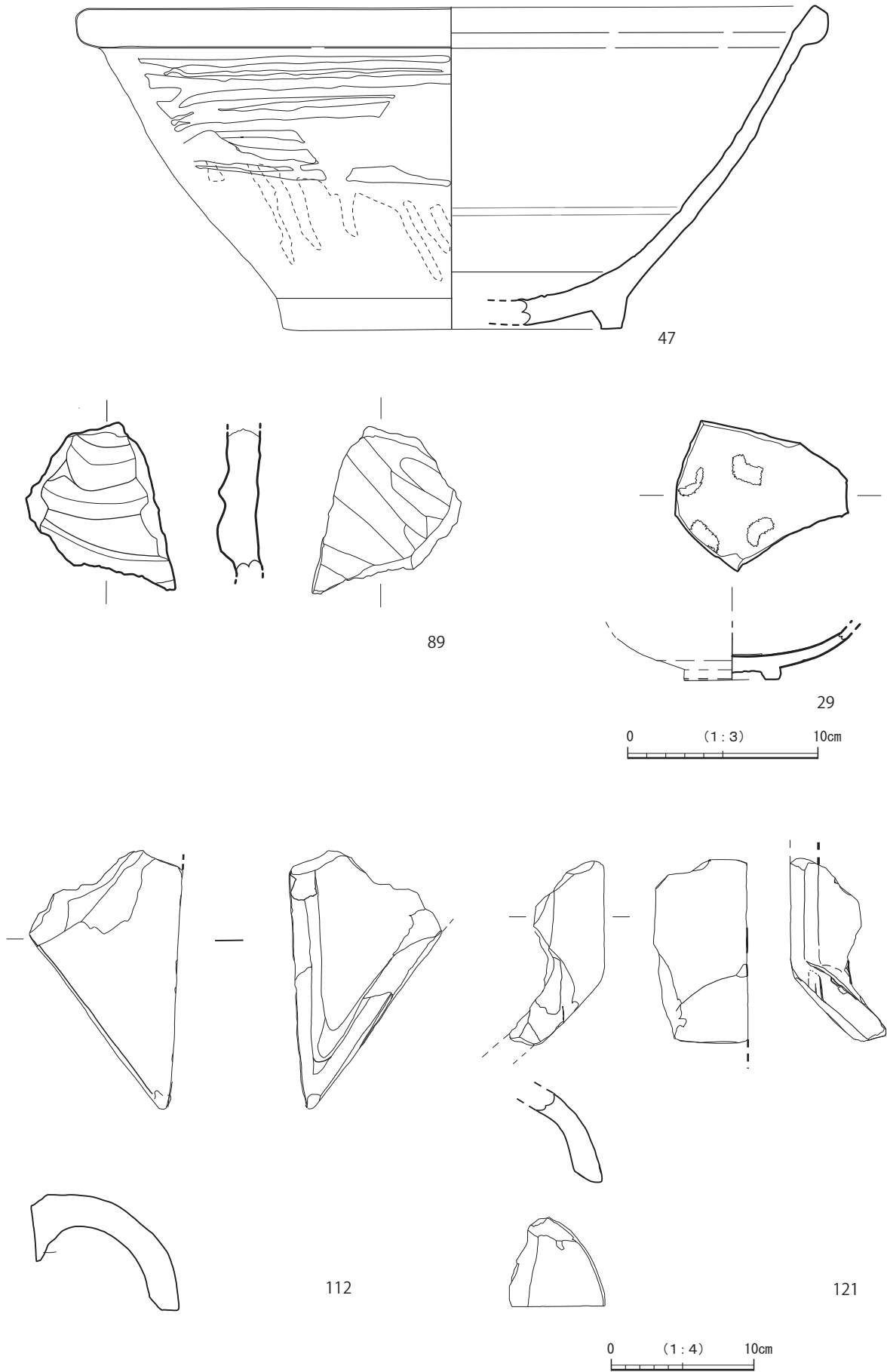


Fig.33 I-45 グリッド出土遺物実測図 S=1/3 112・121 S=1/4

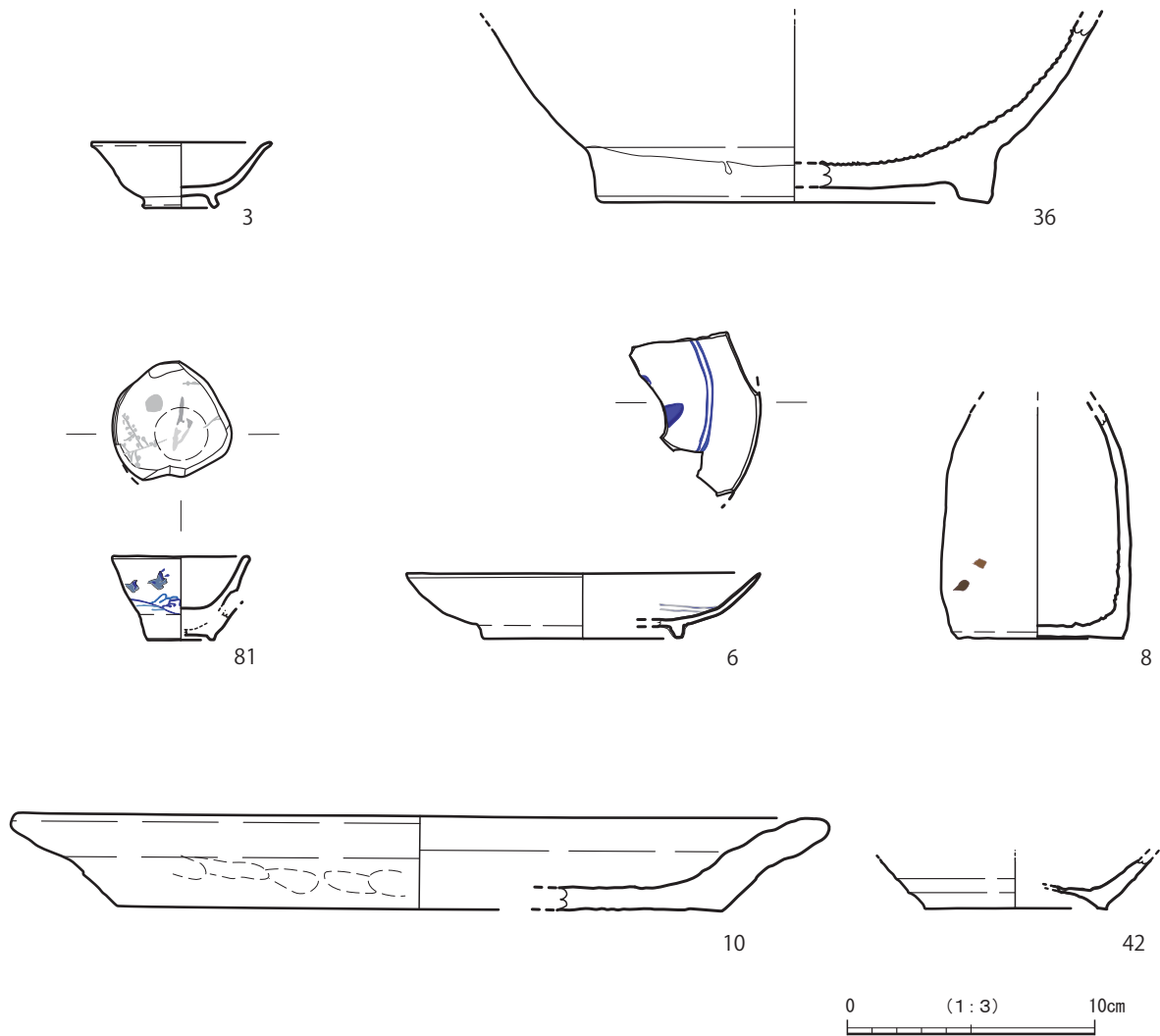


Fig.34 I-46 グリッド出土遺物実測図(1) S=1/3

から見るとさほど古さを感じない。滴水瓦と同様に細川氏の時代になっても新たに製作し、使用されたのではなかろうか。

細川氏の「九曜文」であるが、細川氏が熊本城に入ってからにしても長期に渡り使用されている。瓦の製作技法にも時代差を見ることができる。

瓦の製作については、これまでの研究があるが、製作者についてみると、近世に入ってからには丸瓦にし、平瓦にし、使用された瓦のほとんどに作者もしくは、製作した集団の印ともいべき判がおされている。その詳細は第12節に譲るが、熊本城跡の調査を中心として多くの種類の印跡が確認されている。中でも小山姓や土山姓を名乗る姓名を記したのものもある。多くは名前のみであるが、これも瓦を専業とする集団の構成員もしくは代表者であると考えられている。これまで小山瓦、土山瓦ということで熊本城の瓦を作る集団が特定され、古文書関係の研究も進んでいる。これまで、このような瓦は中心の熊本城付近で出土するものと決まっていたが、今回の調査によって、熊本城の中心部で使われていた同様の瓦が、惣構の外郭門に当たる高麗門に葺かれていた可能性が高いことは意義深い。しかも、それが加藤期まで遡る可能性があることが分かったことになる。逆にいえば、高麗門調査区とA-1調査区で出土した多量の瓦類の存在は、この場所に高麗門が存在したか、非常に近い位置にあったことを示すものといえよう。

次に、高麗門の廃棄時期とも関係する陶磁器類などの出土状況と個々の遺物についてみていく。

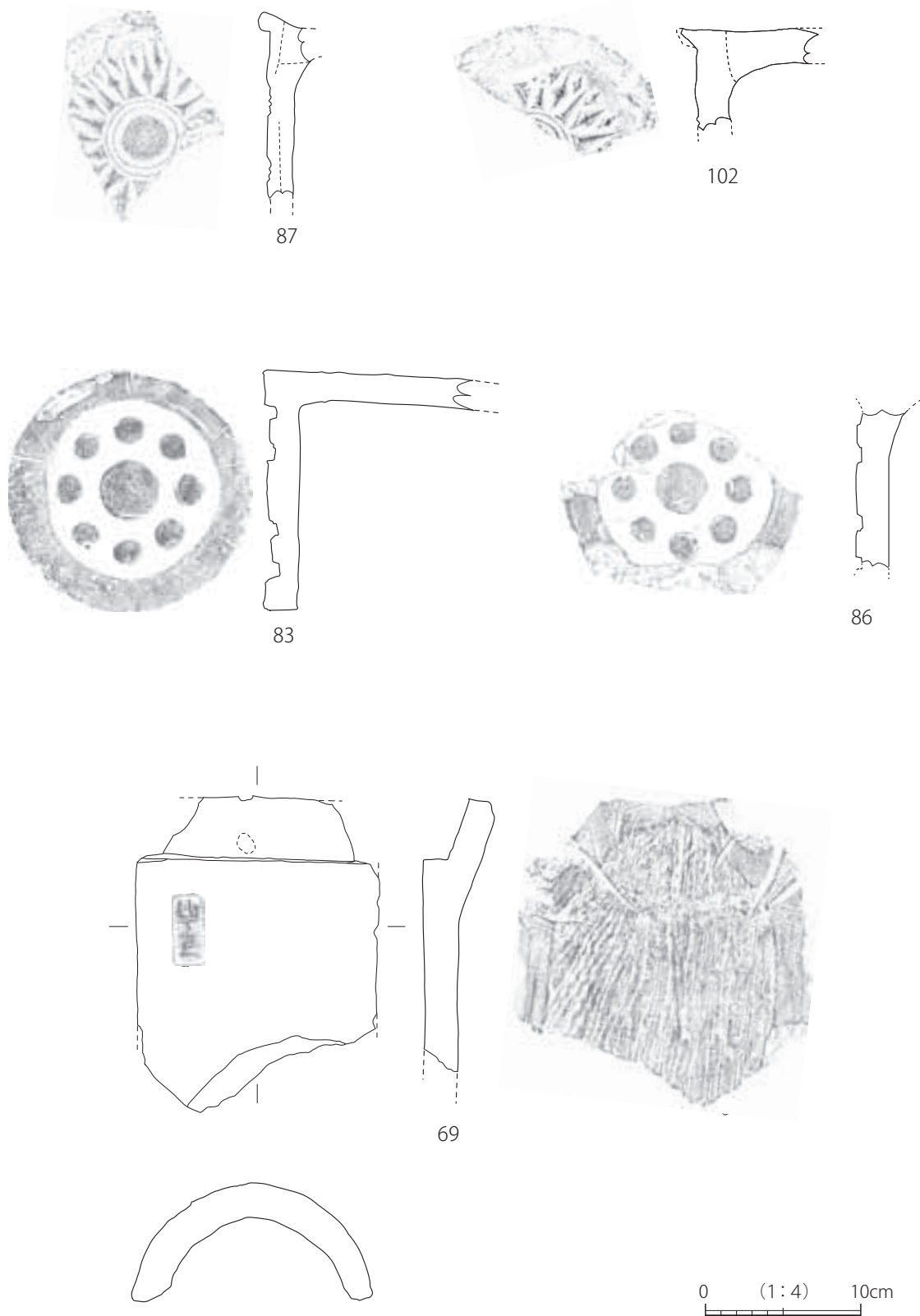


Fig.35 I-46 グリッド出土遺物実測図(2) S=1/4

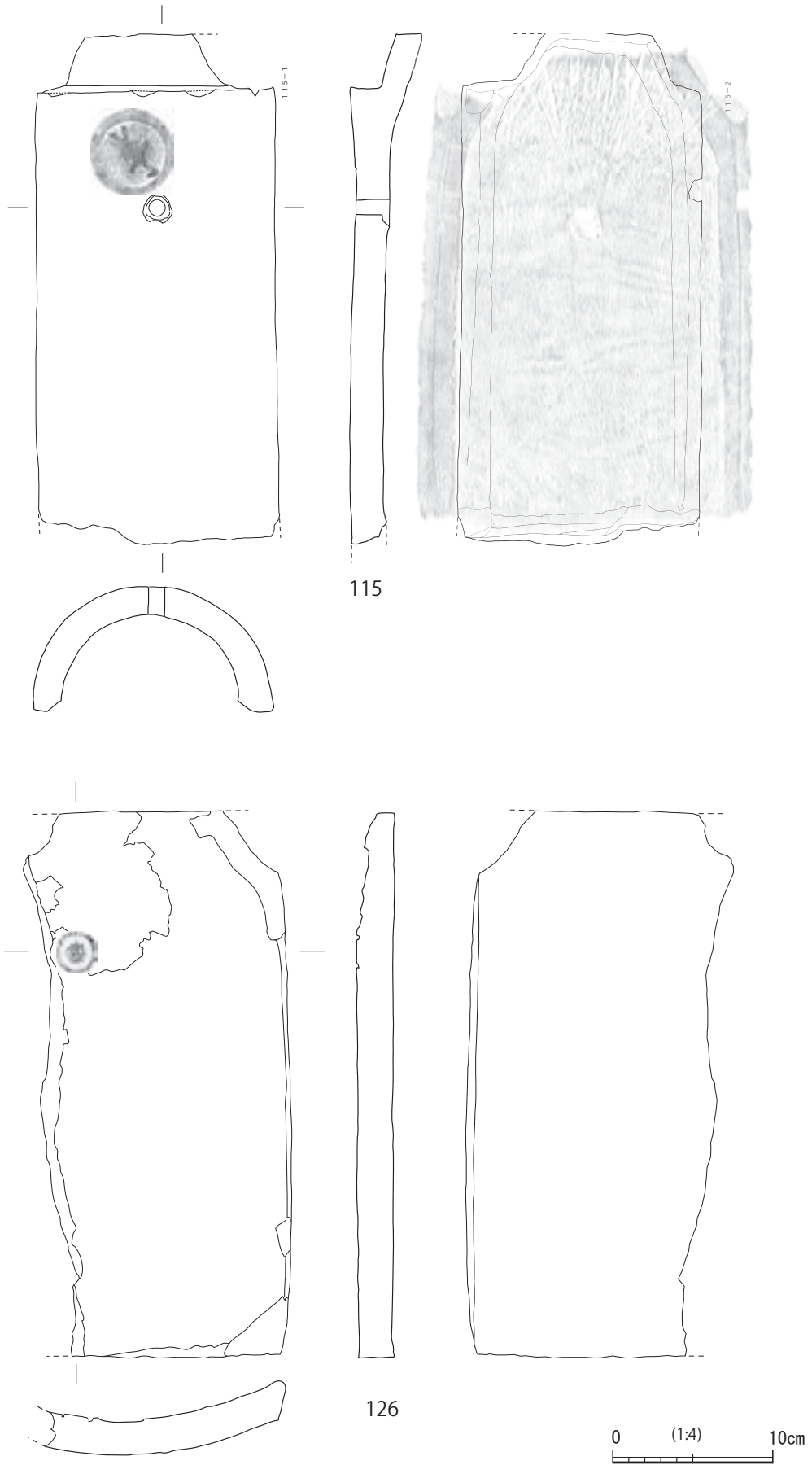


Fig.36 I-46 グリッド出土遺物実測図(3) S=1/4

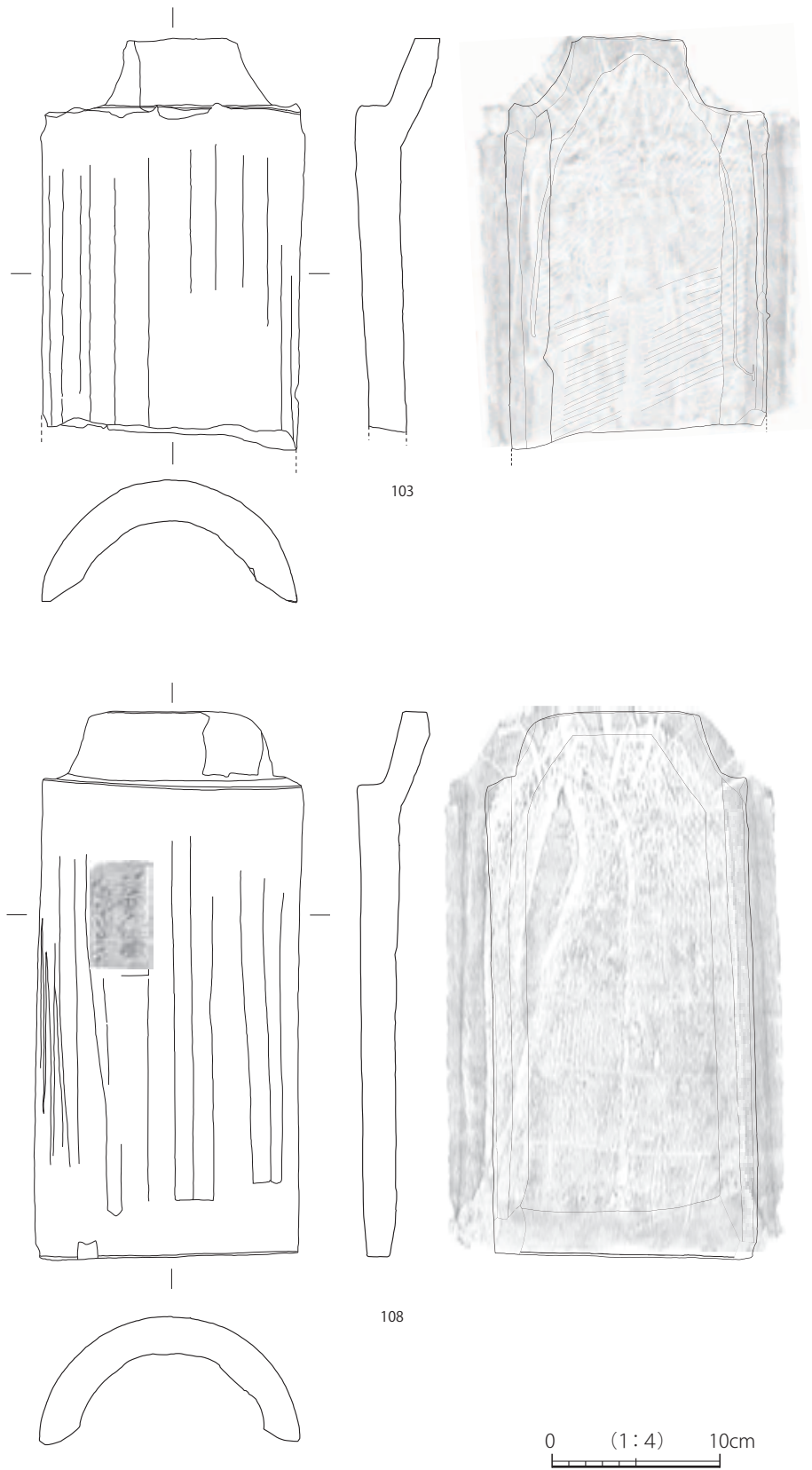


Fig.37 I-46 グリッド出土遺物実測図(4) S=1/4

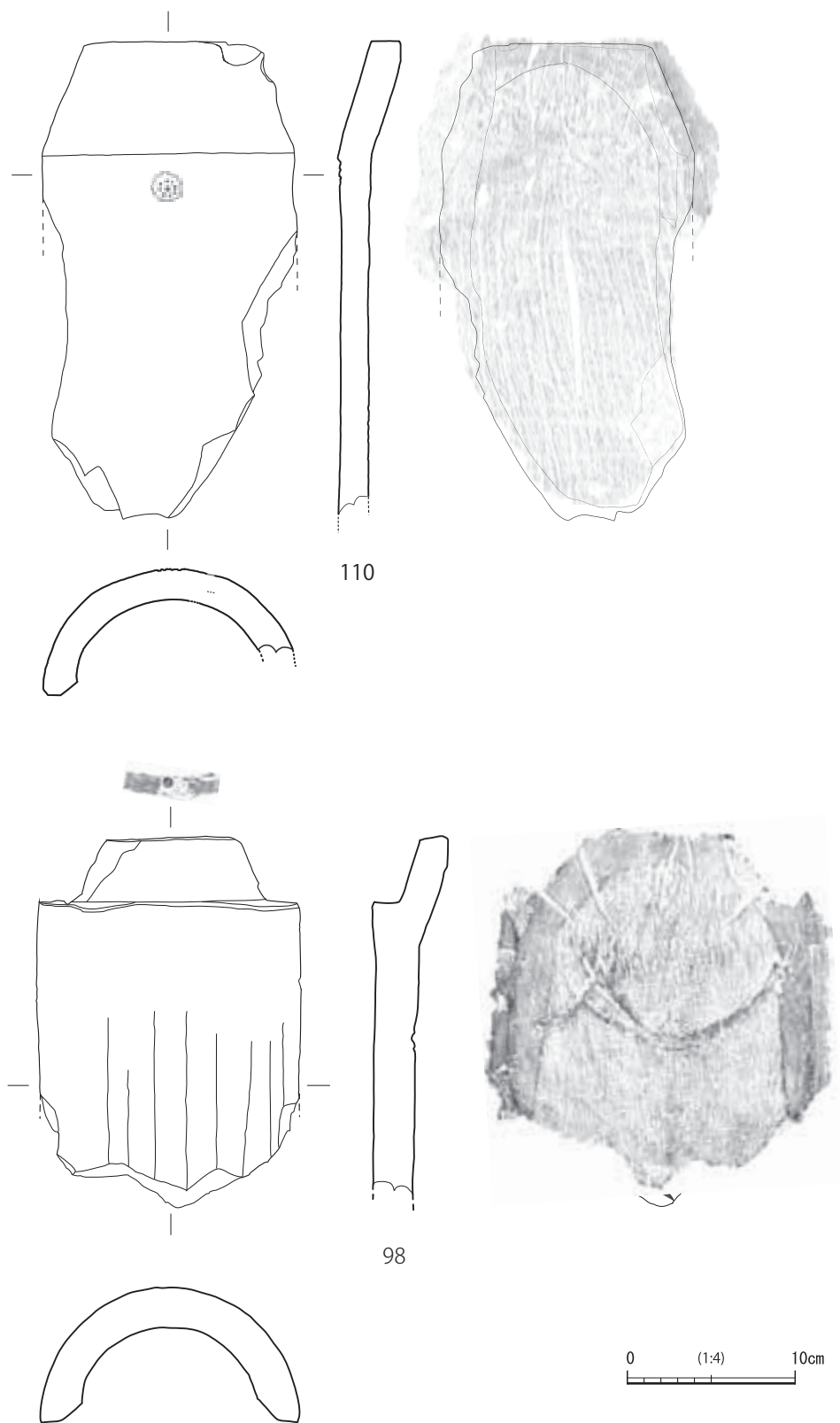


Fig.38 I-46 グリッド出土遺物実測図 (5) S=1/4

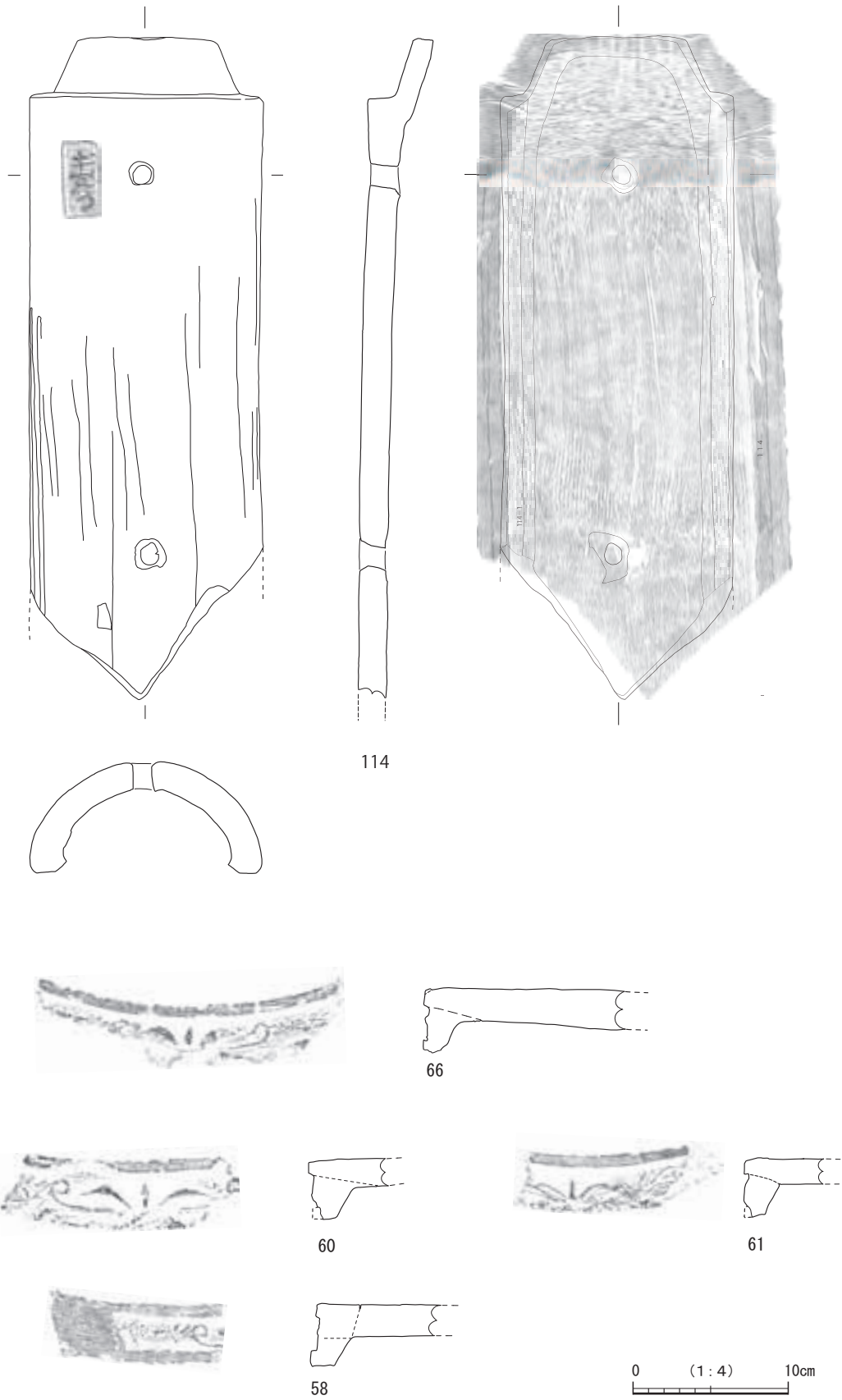


Fig39 I-46 グリッド出土遺物実測図(6) S=1/4

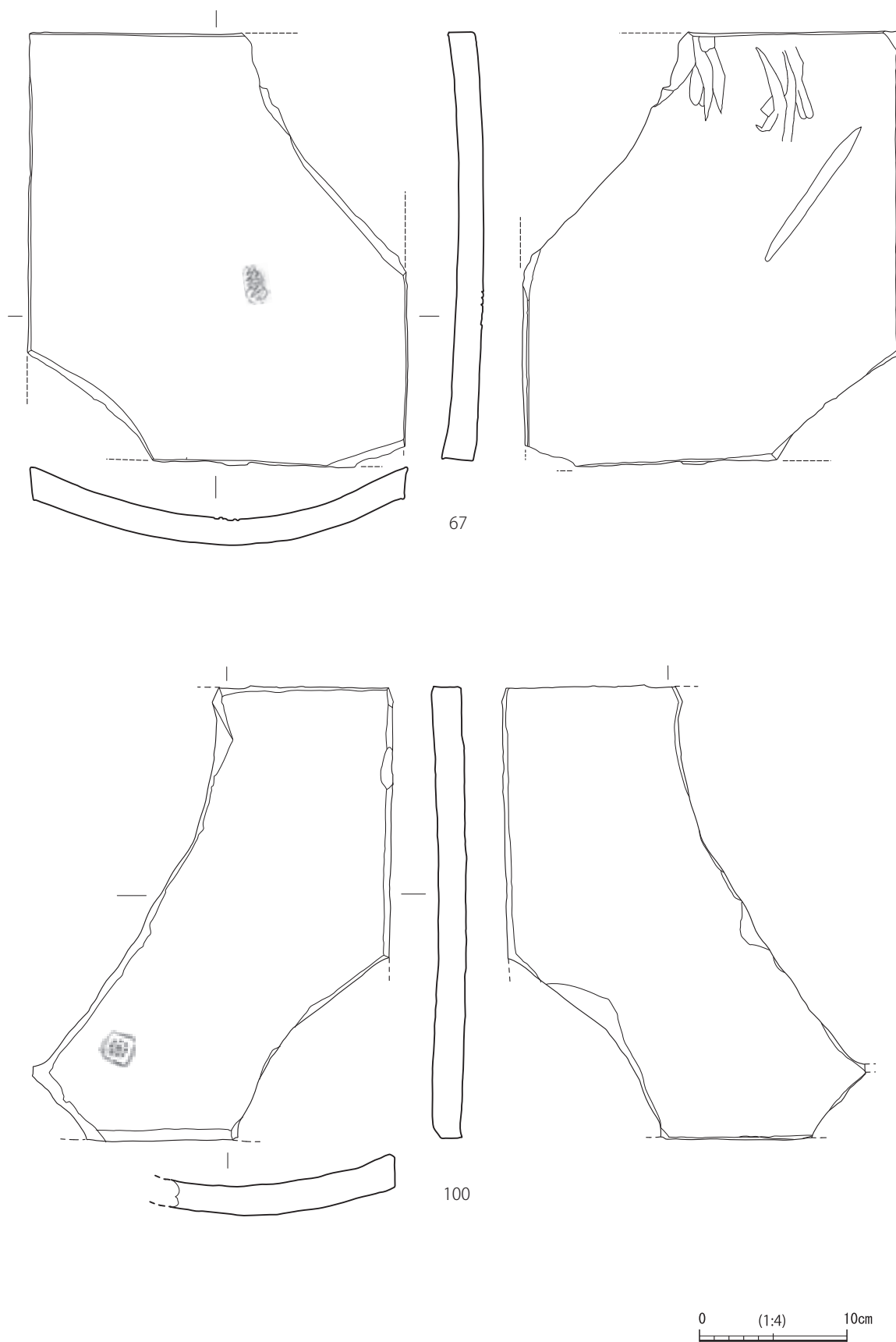
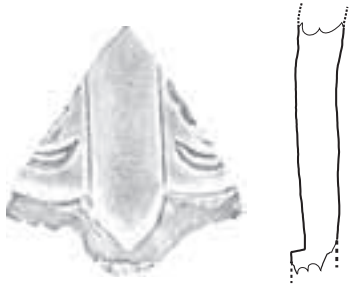


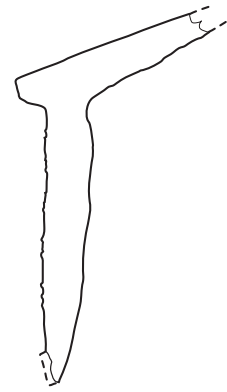
Fig.40 I-46 グリッド出土遺物実測図 (7) S=1/4



59



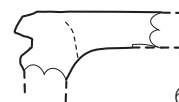
101



64



63



65

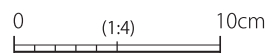


Fig.41 I-46 グリッド出土遺物実測図 (8) S=1/4

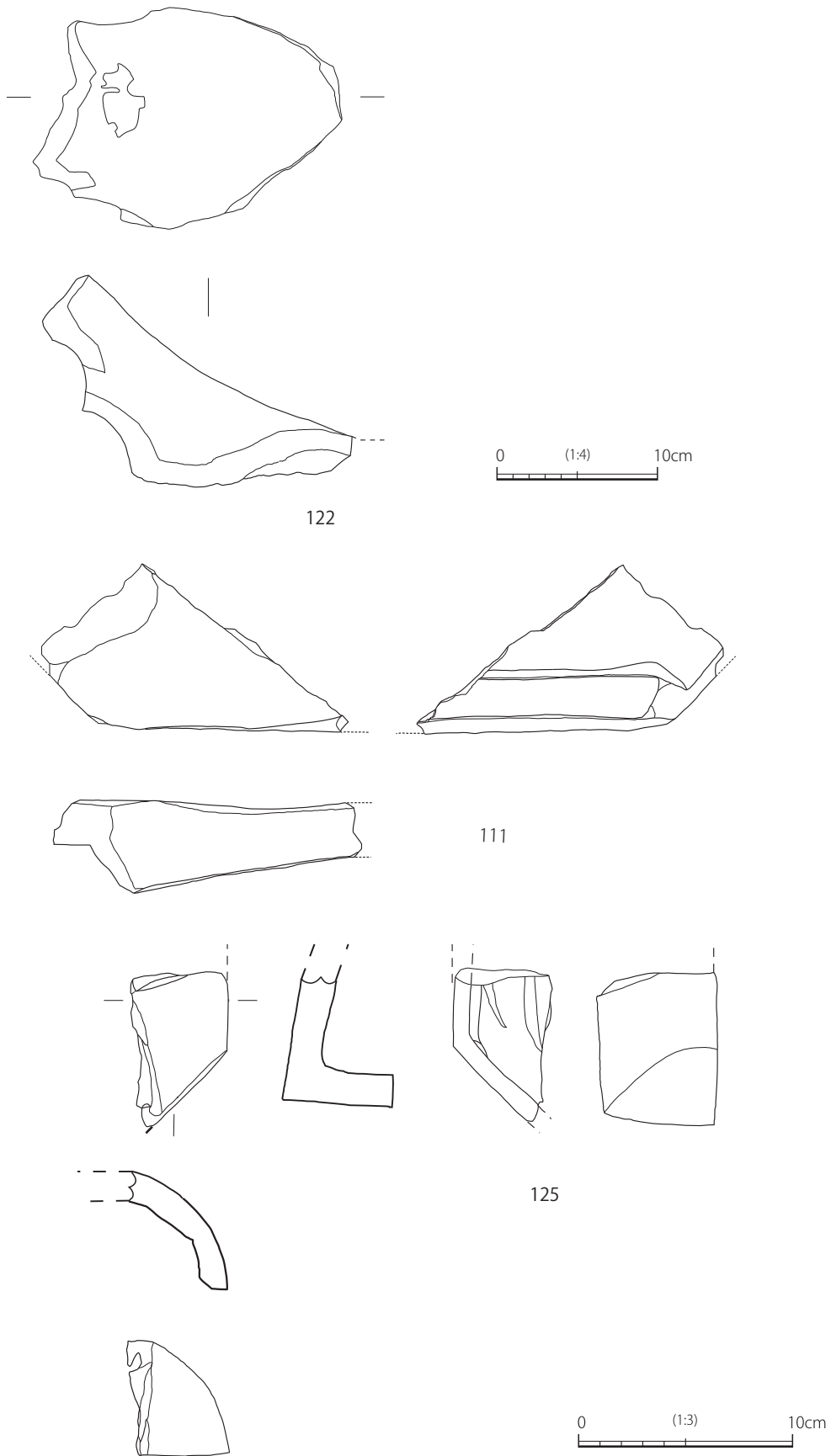


Fig.42 I-46 グリッド出土遺物実測図 (9)

122 S=1/4

111・125 S=1/3

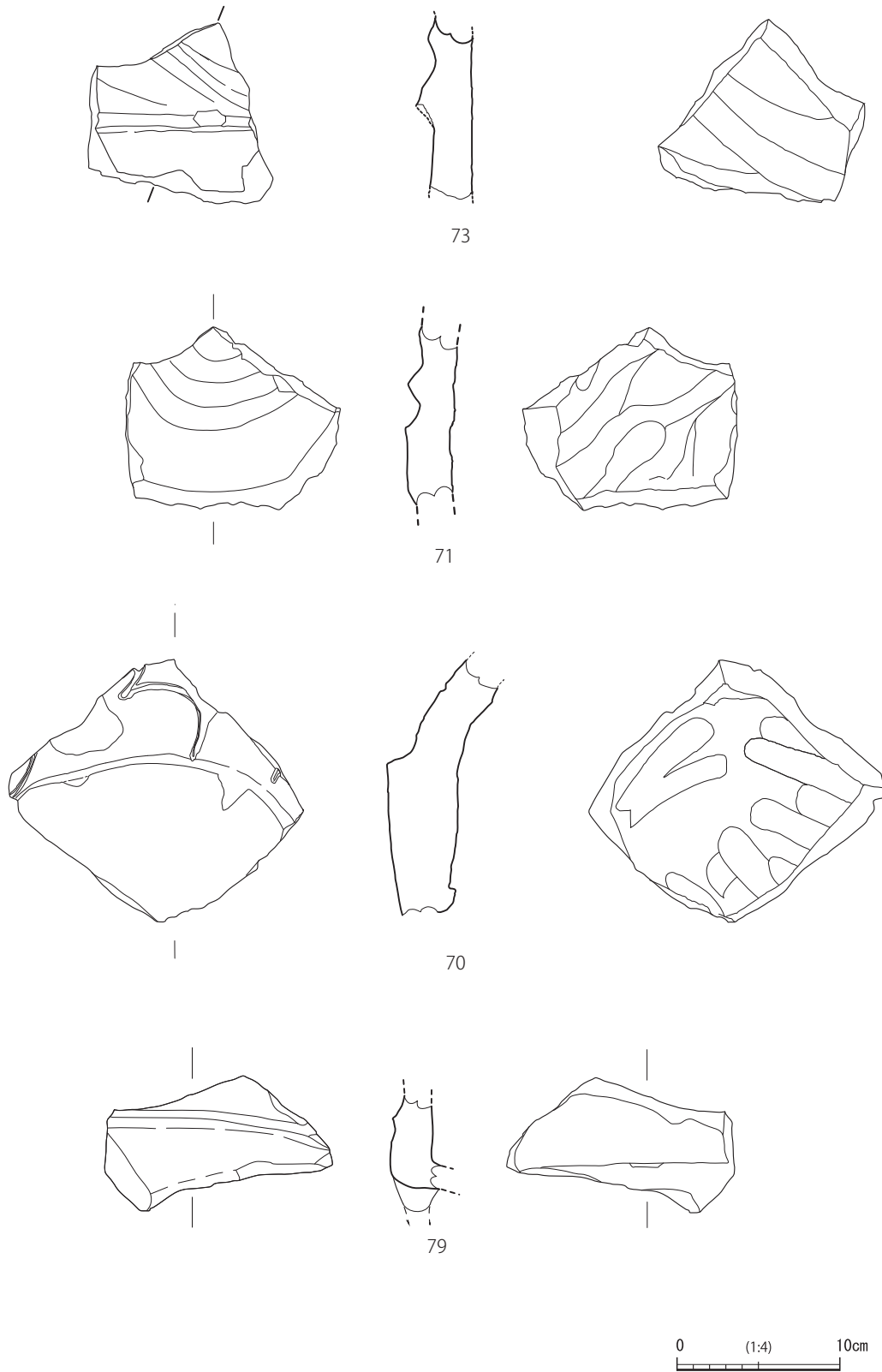


Fig.43 I-46 グリッド出土物実測図 (10) S=1/4

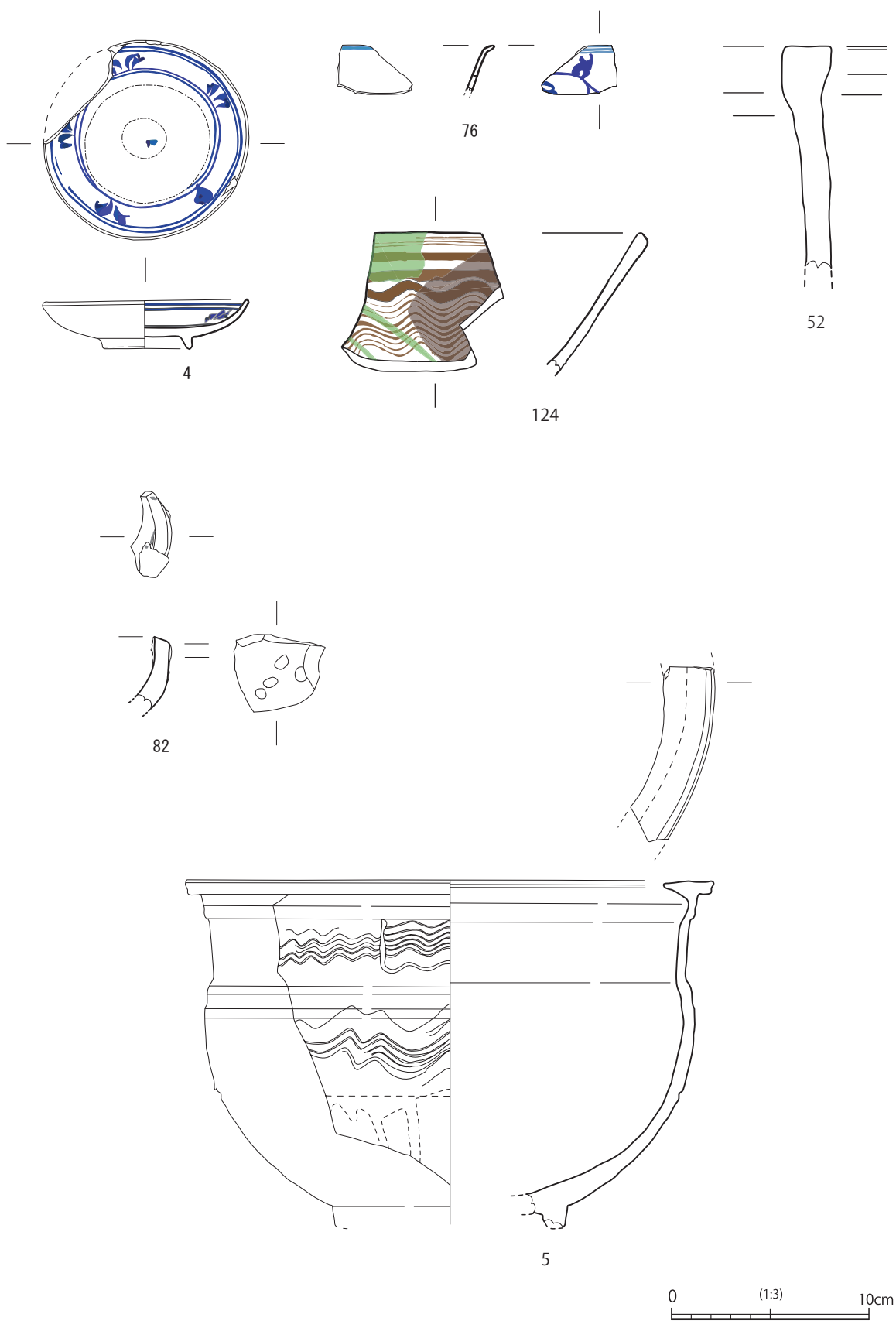


Fig.44 I-47 グリッド出土遺物実測図(1) S=1/3

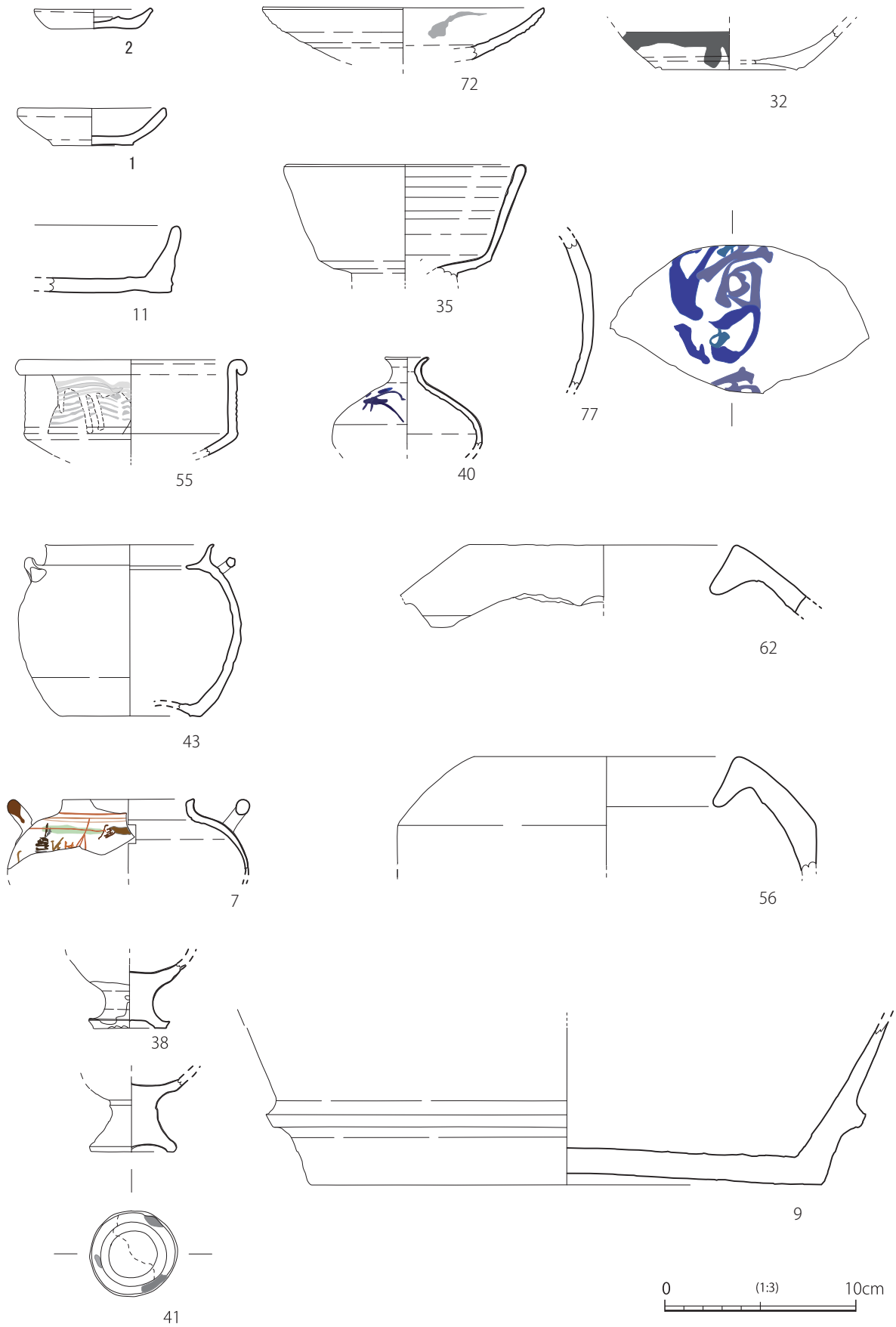


Fig.45 I-47 グリッド出土遺物実測図(2) S=1/3

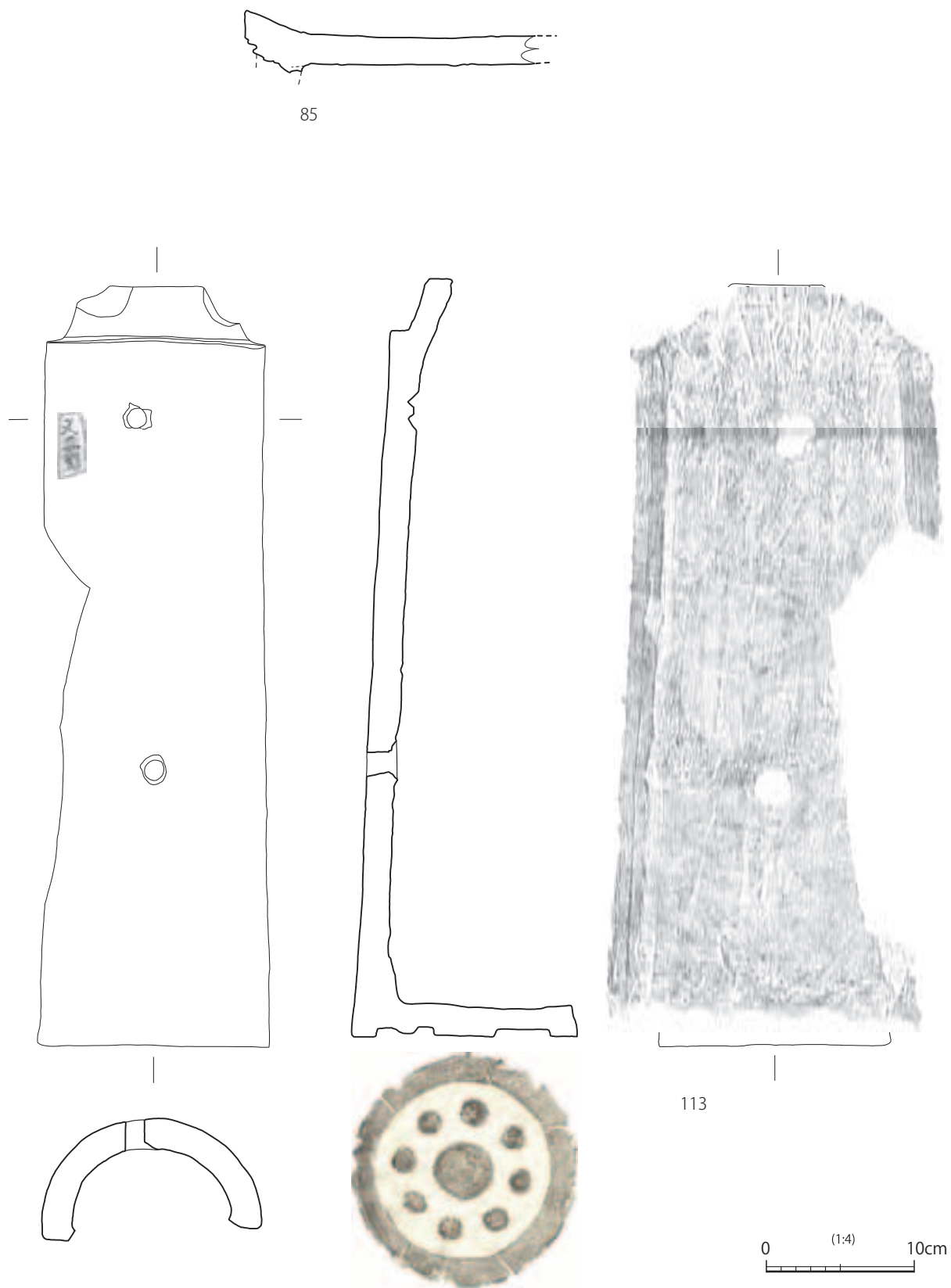


Fig.46 I-47 グリッド出土遺物実測図 (3) S=1/4

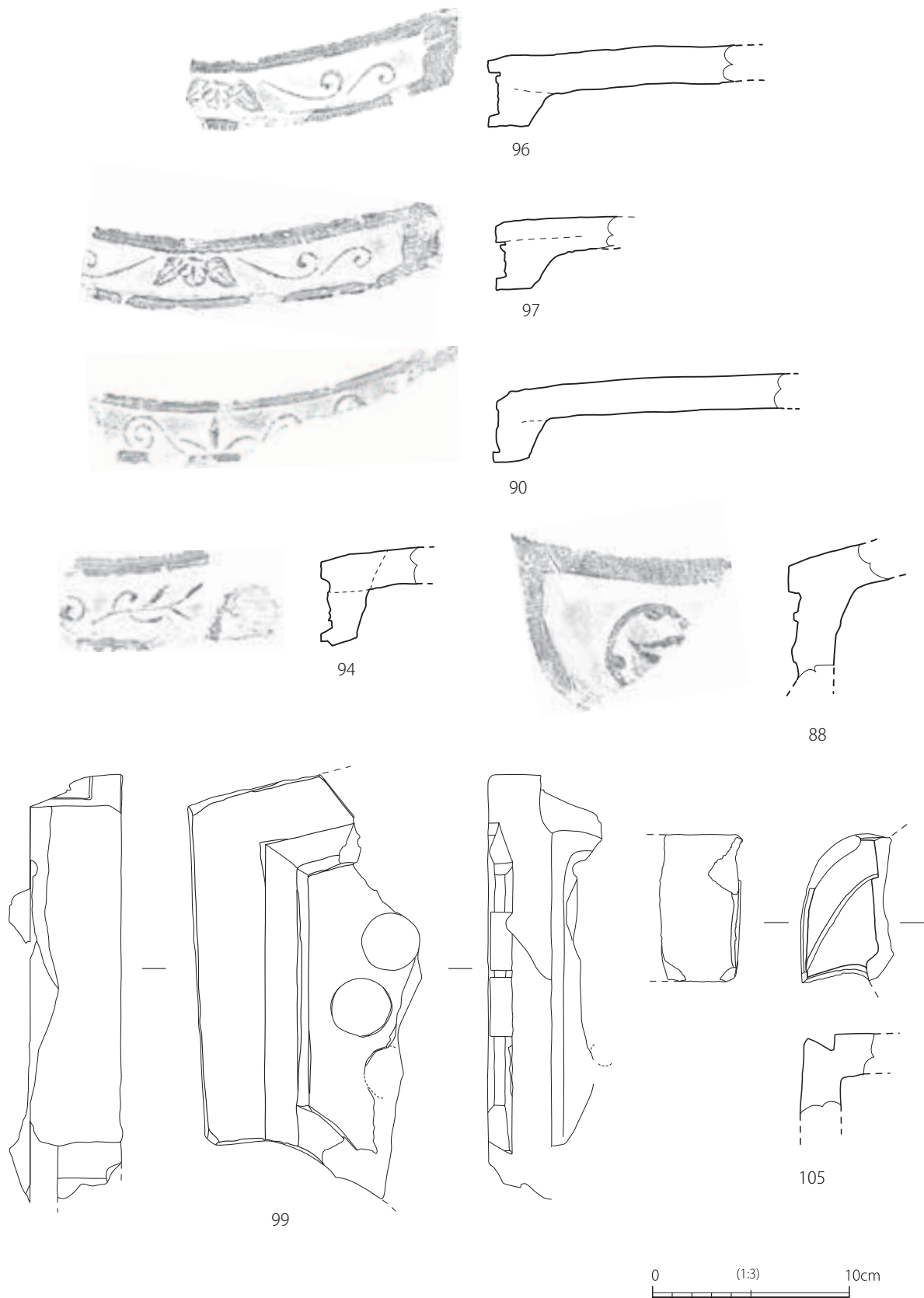


Fig.47 I-47 グリッド出土遺物実測図(4) S=1/3

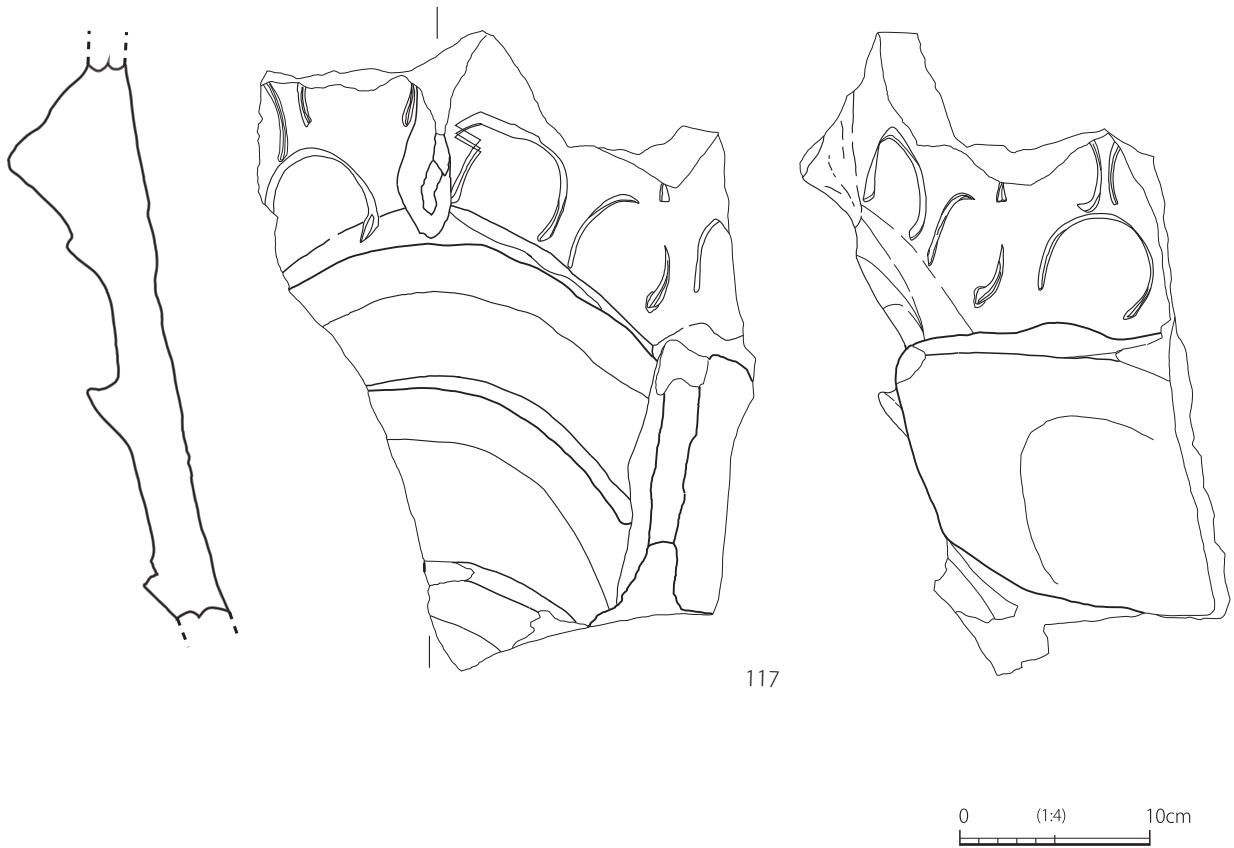


Fig.48 I-47 グリッド出土遺物実測図 (5) S=1/4

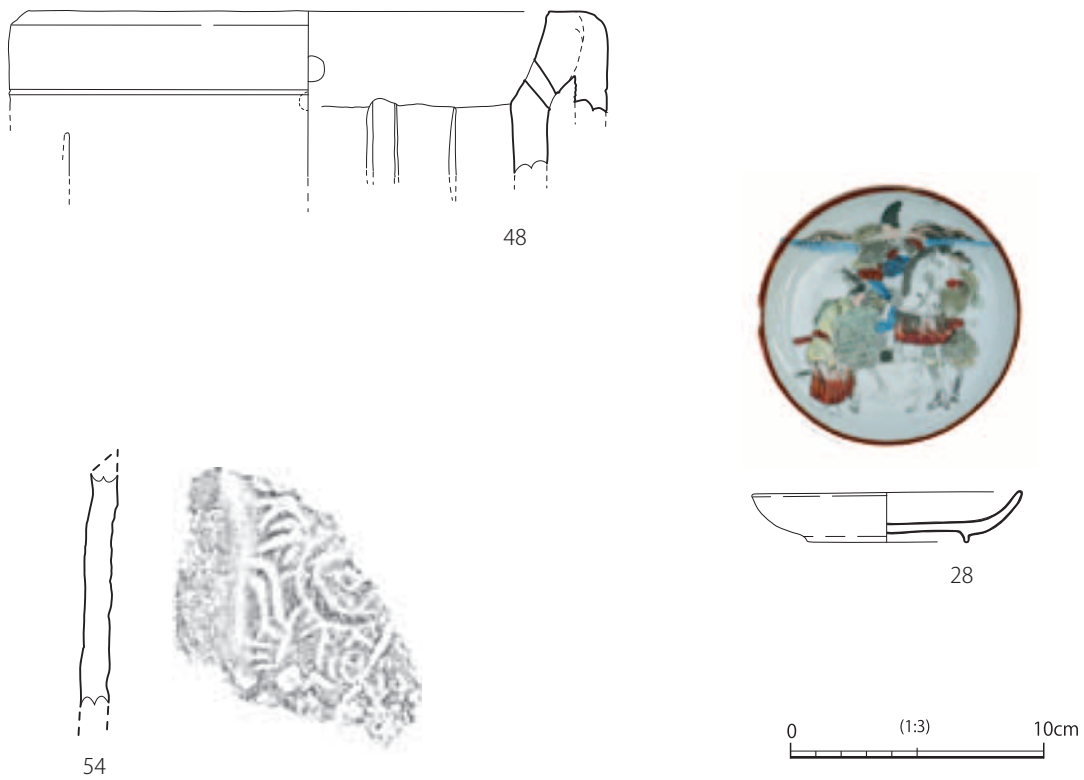


Fig.49 I-48 グリッド出土遺物実測図 S=1/3

瓦の多く出土した堀の落ち際に当たる I-45～I-48 グリッドでは、瓦に混じり陶磁器類も出土している。瓦の出土する層に混じる形で出土することから、この層の形成時期の判断をするために以下に出土遺物の状況を確認することとする。グリッドごとに遺物を見ていく。

I-45 グリッドは調査区の南端部にあたり、No.3 トレンチで先行して掘削した部分である。ここでの知見を元に遺物出土層の状況を述べる。

遺物が多く出土したのは、2層とした層で明褐色の粘質土で乾くと硬く締まる層である。これはいずれのグリッドでも共通する。ただ、純粋な堆積層ではなく暗褐色土が混じる場合もある。後に排水路工事の立会調査の際に、確認したところでは類似した土は地形的にやや高くなった部分に認められ、土塁等に使用されていたものかもしれない。

また、堀部分に限っていえば、2層の下に暗褐色の軟質土があり、これにも瓦が混じる。2層ほどのしまりがなく、その層の特徴から、堀に土砂や有機物が堆積していつて形成された泥炭層ではないかと考えられる。そこに最初に瓦類や他の遺物が落ち込み土塁などと一緒に埋められた可能性が推定できる。

まず、その I-45 グリッドから出土した遺物について記す。表土剥ぎ時に出土した 47 は、唐津系の陶器の大型鉢で、外器面に白化粧土による刷毛目文様の上に粗く透明釉をかける。内器面には、白化粧土を回転させて刷毛目文様をつける。29 は、胎土目積みの痕跡が残る陶器の皿で、口縁部に溝をつける「溝縁皿」である。底部高台には糸切痕が残る。

次いで I-46 グリッドから I-47 グリッドから出土した遺物について記す。この両グリッドが出土遺物の数量は多い。大部分は2層出土であるが、その下から出土したものもある。

3 は、緑釉磁器の盃である。6 は、磁器染付の皿である。8 は、陶器の瓶である。10 は、瓦質の鍋であろう。口縁部は手づくね的である。79 は、瓦質の火鉢片である。底部付近と脚の一部が残る。1・2 は土師器の皿で、外底部に糸切り痕が残る。4 は、磁器染付の手塩皿で、内器面見込みに蛇の目釉剥ぎがなされ、離れ砂が残る。5 は、唐津系の陶器の鉢で、外器面の胴部には白化粧土の刷毛目の上に緑色の釉をかける。胎土は赤褐色を呈する。7 は、陶器の土瓶で、外器面に白釉の上に緑色から褐色の釉で文様を描く。関西系のものである。9 は、瓦質の火鉢の底部のみである。外器面に一条の箍が回る。32 は、陶器の土鍋で、内器面に透明釉をかけ、外器面は無釉で、底部には煤が付着する。38・41 は、磁器の仏飯器である。杯部は一部残る。脚部は削り出している。17 世紀末から 18 世紀後半のものであろう。43 は、陶器の土瓶である。外器面に透明釉を胴部上半にかける。52 は、瓦質の大甕片である。外器面に格子タタキ痕が残る。55 は、陶器の火入れで、外器面に白の化粧土で櫛描き文を描き、口縁部から緑釉をかける。56・62 は、土師質の火鉢の一部であろう。外面に赤色顔料を塗布する。72 は、陶器の皿で、内器面から外器面の上部にかけて施釉し、青緑色に発色させている。見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。底部の大部分は無釉である。76 は、青花磁器の碗である。外器面に草文を配し、内器面上部に 1 本の圈線を廻らす。口縁部は外反する。口唇部に釉剥ぎがある。77 は、磁器の酒徳利の破片である。外面に「清田酒？」の文字が見える。明治から大正期のものか。82 は、埴塼で、器表面に金属の融解物の残滓が付着する。緑色を呈する錆びがあることから銅製品のものか。124 は唐津系陶器の鉢である。外器面に白化粧土を刷毛で平行線と羽状文を施したあと、茶色と緑色の釉をかけている。35 は、陶器の碗で、表土剥ぎ中に出土したもので透明釉を全体にかけ、黄橙色を呈する。抹茶碗として使用したものであろう。

以上、見てきたことから、遺物的では2層は幕末から明治初期の頃に形成されたといえる。高麗門が少なくとも明治の初期（5年前後）まで存在していたので、この層の形成は、高麗門の取り壊し直後か、もしくは一定の期間たってから埋め込んだかが課題である。

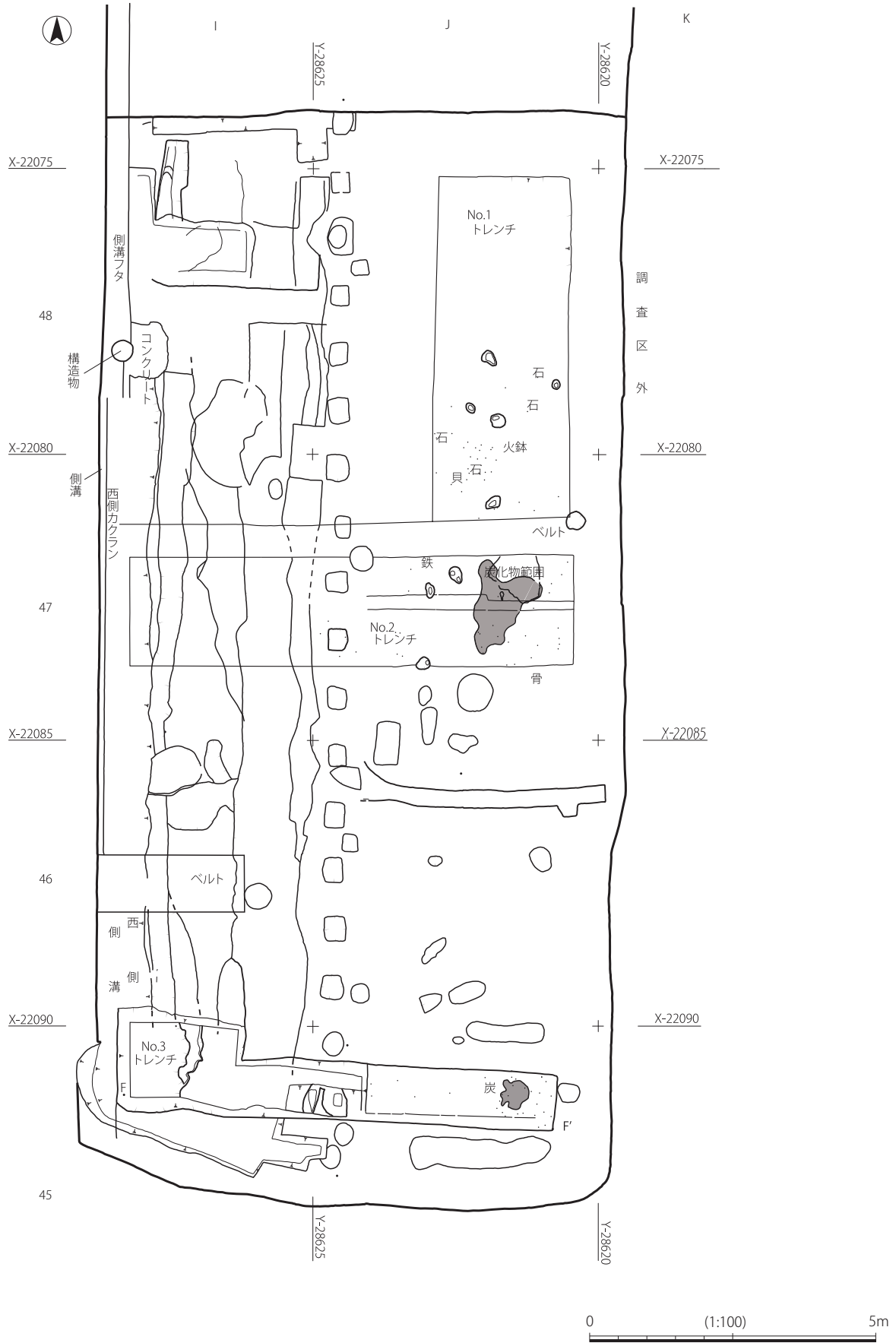


Fig.50 上位中世層遺構配置図 S=1/100

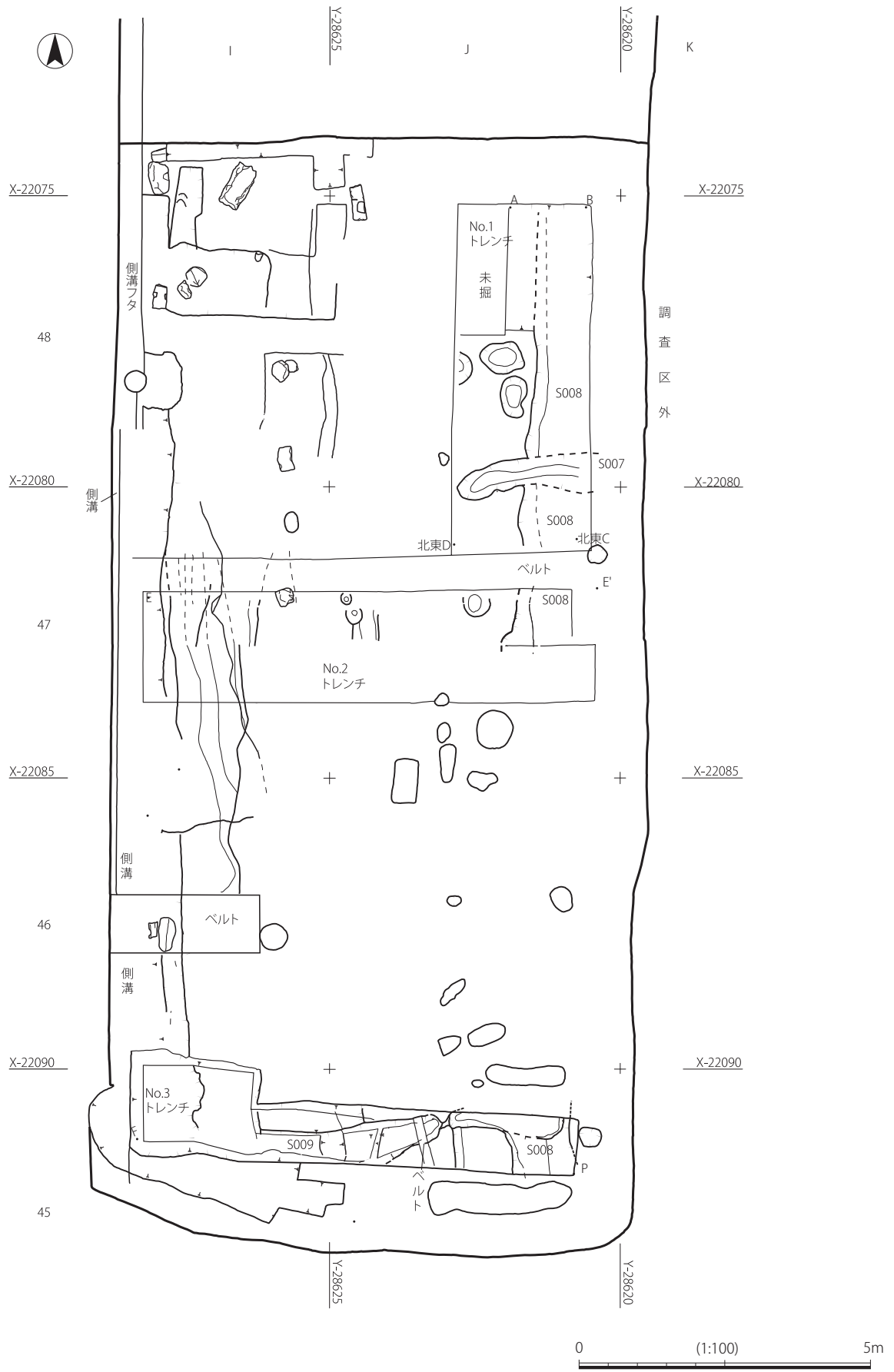


Fig51 最下層中世遺構配置図 S=1/100

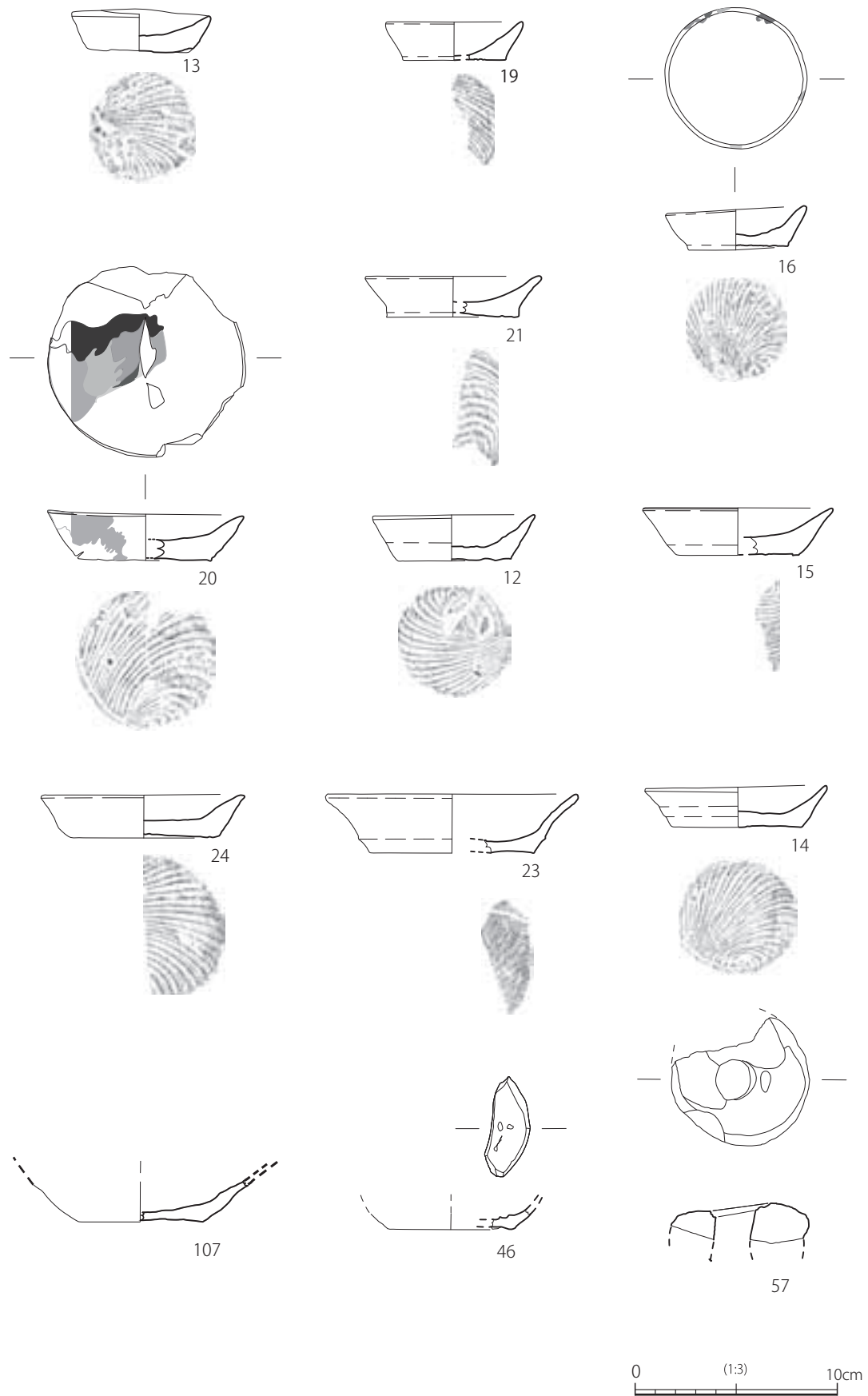


Fig.52 J-45 グリッド出土遺物実測図 S=1/3

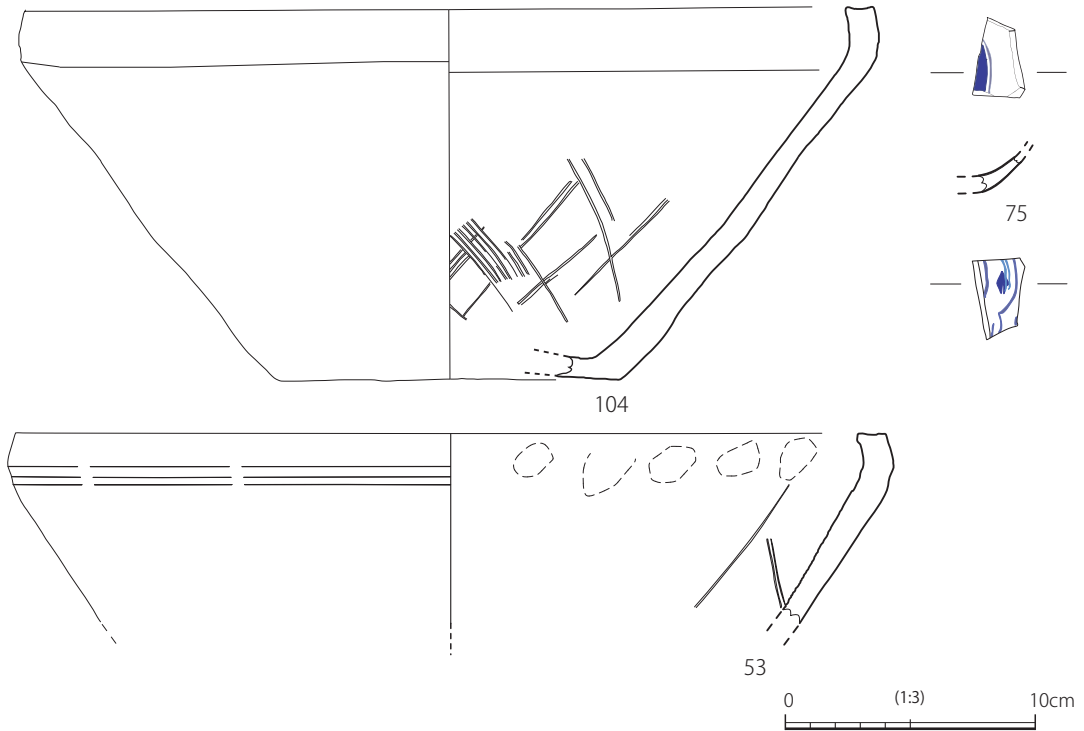


Fig.53 J-47 グリッド出土遺物実測図 S=1/3

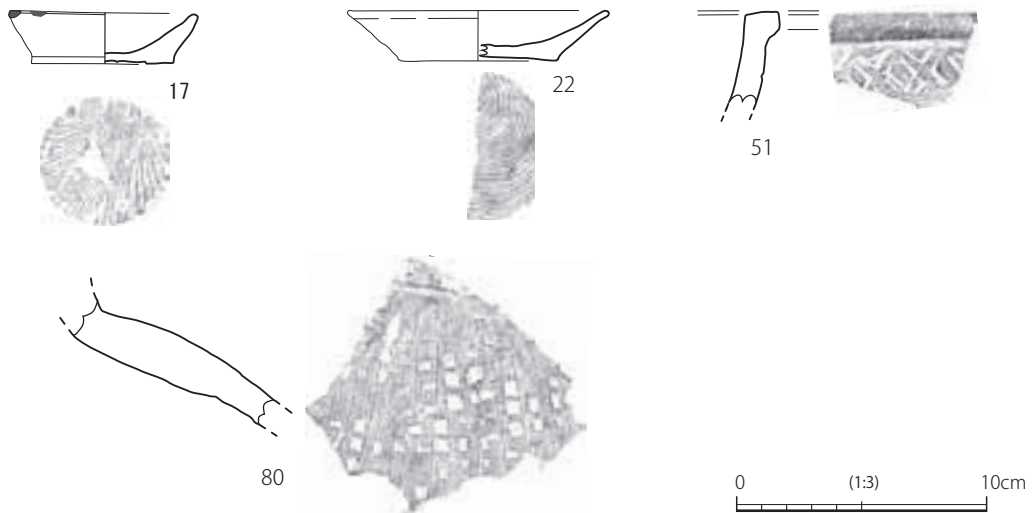


Fig.54 J-48 グリッド出土遺物実測図 S=1/3



Fig.55 I-45 ~ J-46 グリッド出土遺物実測図 S=1/3

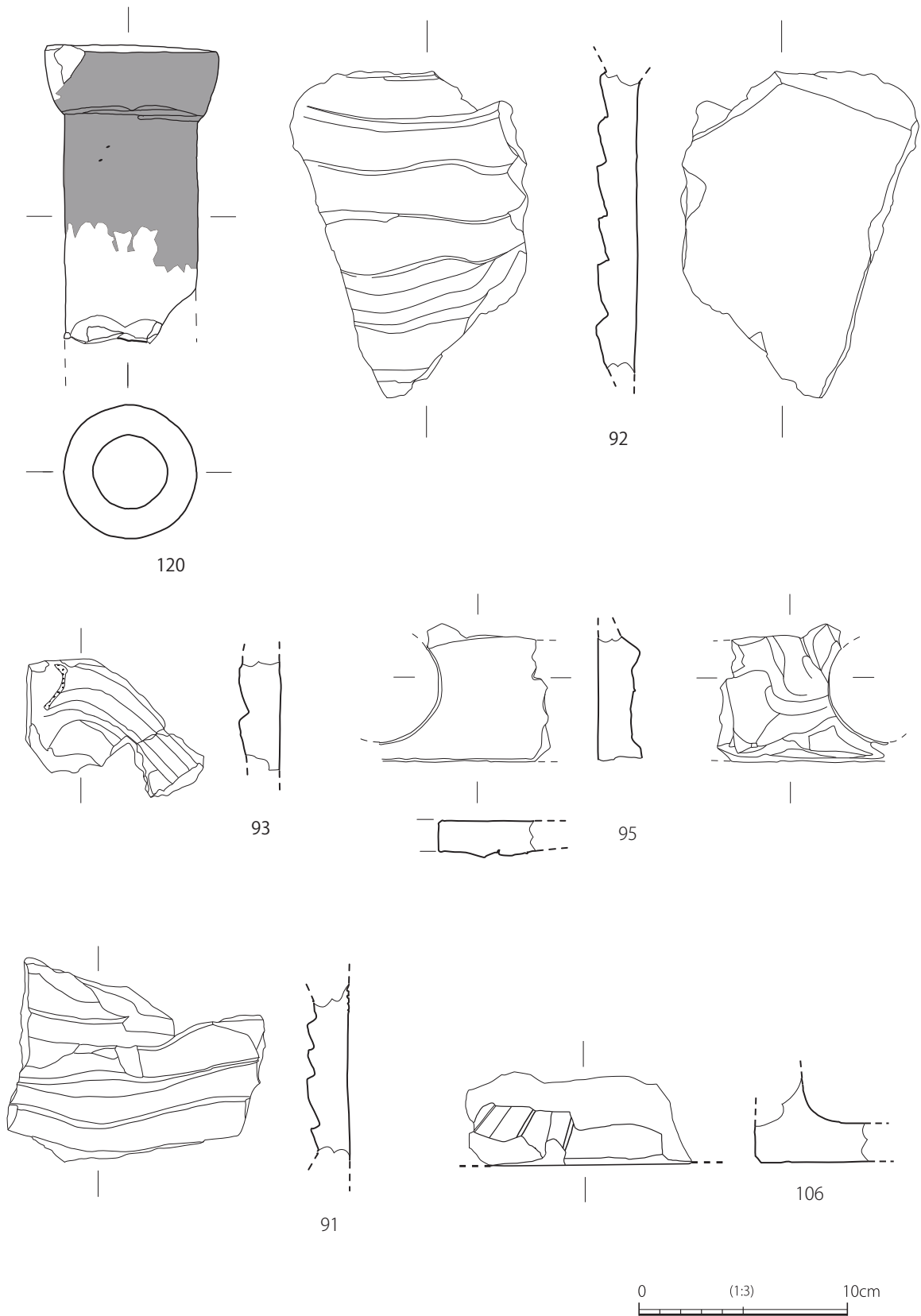


Fig.56 S002 出土遺物実測図 S=1/3

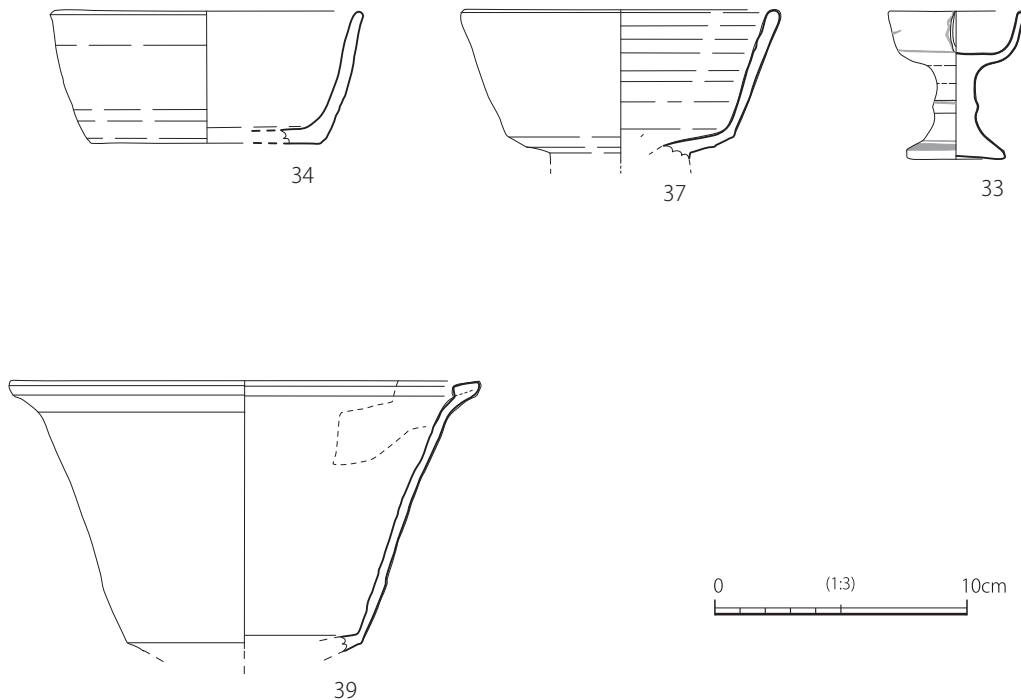


Fig.57 S006 出土遺物実測図 S=1/3

[A-1-S007]

この遺構は、No.1 トレンチの最下層で確認した遺構で、溝状遺構で、S008 を切っている。S008 及び東側壁を精査中に検出した。東側壁からやや南向きに曲がりながら西側方向へ伸びていた。確認した長さは、壁から 2.18 m で西側端部は浅くなり収束する。平均幅は 47cm、深さ 27cm ほどを測る。

この遺構から出土遺物はなく、時期の特定はできないが、S008 が中世とすれば、そう変わらないと考える。

[A-1-S008]

この遺構は、No.1 トレンチから No.2 トレンチで確認した溝状遺構である。No.1 トレンチの東側で南北に走る状況を確認した。No.1 トレンチと No.2 トレンチの間には土層観察用のベルトがあるが、両トレンチに渡って遺構の繋がりが分かることが分かった。さらに同じ溝と考えたのが、No.3 トレンチの遺構である。このトレンチは先にも述べたが、A-1 調査区では早くに掘削し、土層の状況や遺構掘削の参考にしてきた。このトレンチ東側で、最初は土坑であろうということで掘削を進めた。底近くから骨の小片と層状になった灰が検出され、火葬場ではないかと考えた。ただ、小骨片は取上げ難く、形状もよく分からなかった。その掘り込みの上部の縁で獣骨（牛か）の上腕骨の一部が出土したことから、この灰に混じる骨片も動物骨ではないかと判断した。さらにその箇所を精査すると、南北に伸びる溝状の遺構ではないかと考えた。その後、先に述べた S008 と方向的に似ており、底部の形状も類似するため、S008 がここまで伸びたものと判断し、同じ遺構番号をふった。しかし、その後全体を岩盤まで掘り下げる期間が取れなかったため、果たして同じ遺構か確証はない。

この遺構の規模を No.1 トレンチ及び No.2 トレンチで確認すると、確認した長さは 7 m ほどを測り、幅は確認した範囲では 1 m 以上はあると考える。深さは、25cm ほどである。確認した状況からすると、No.2 トレンチでやや南による傾向が認められた。

時期は少数の遺物から見て中世後半ぐらいの幅でとどめる。

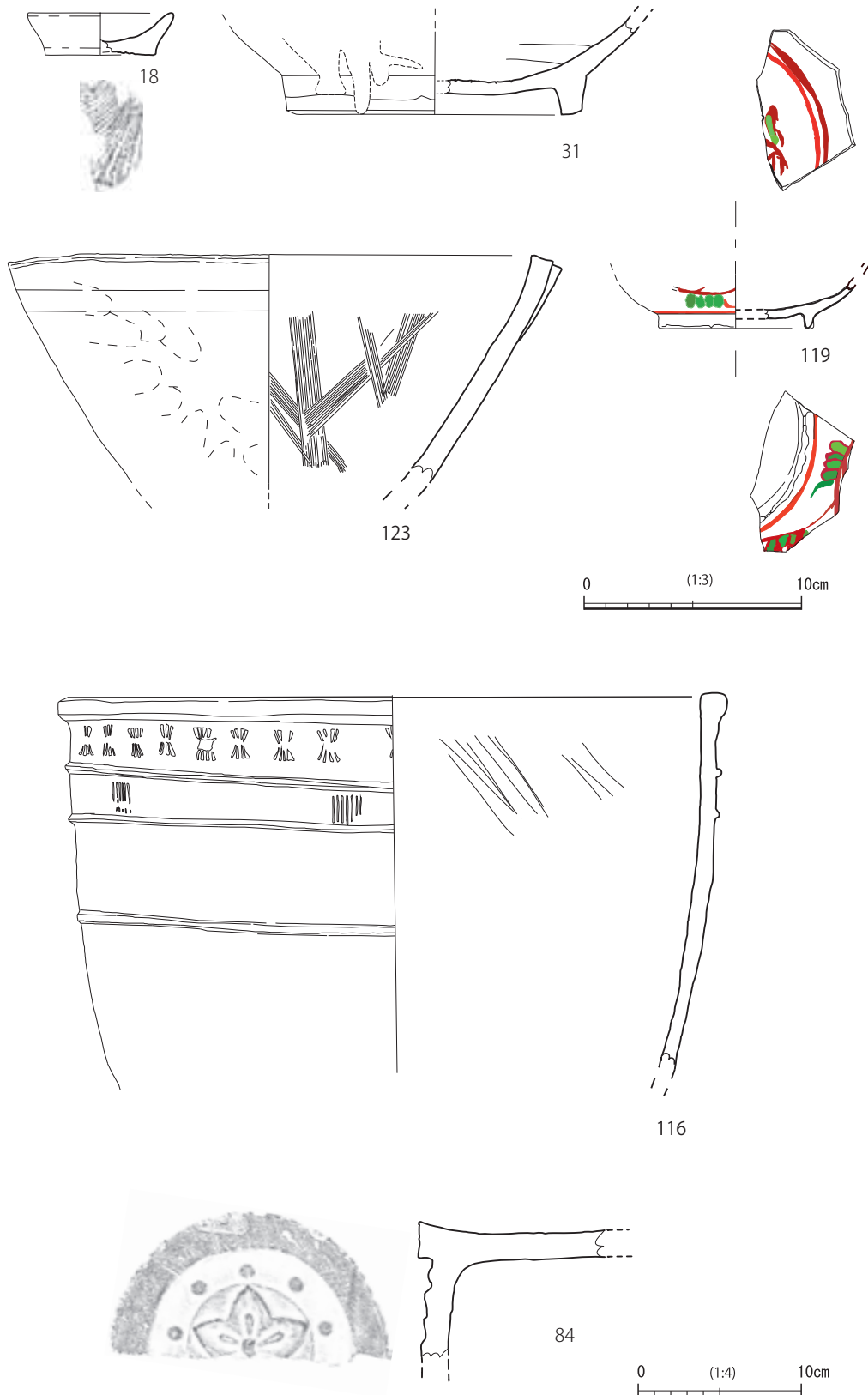


Fig.58 包含層出土遺物実測図(1)
 18・31・119・123 S=1/3
 116・84 S=1/4

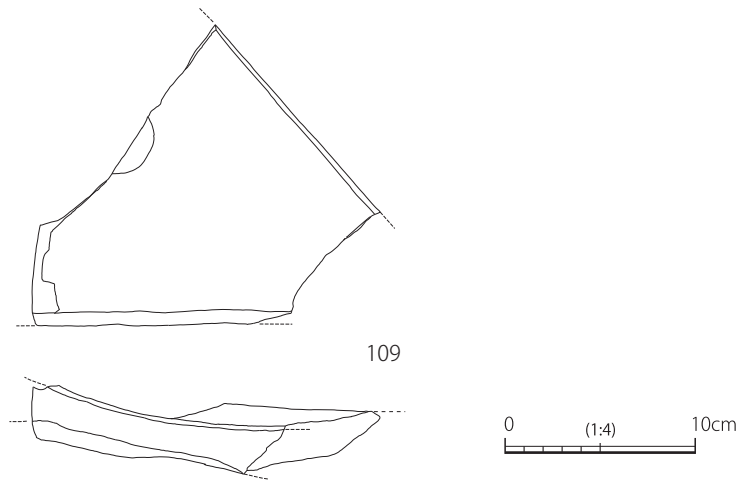
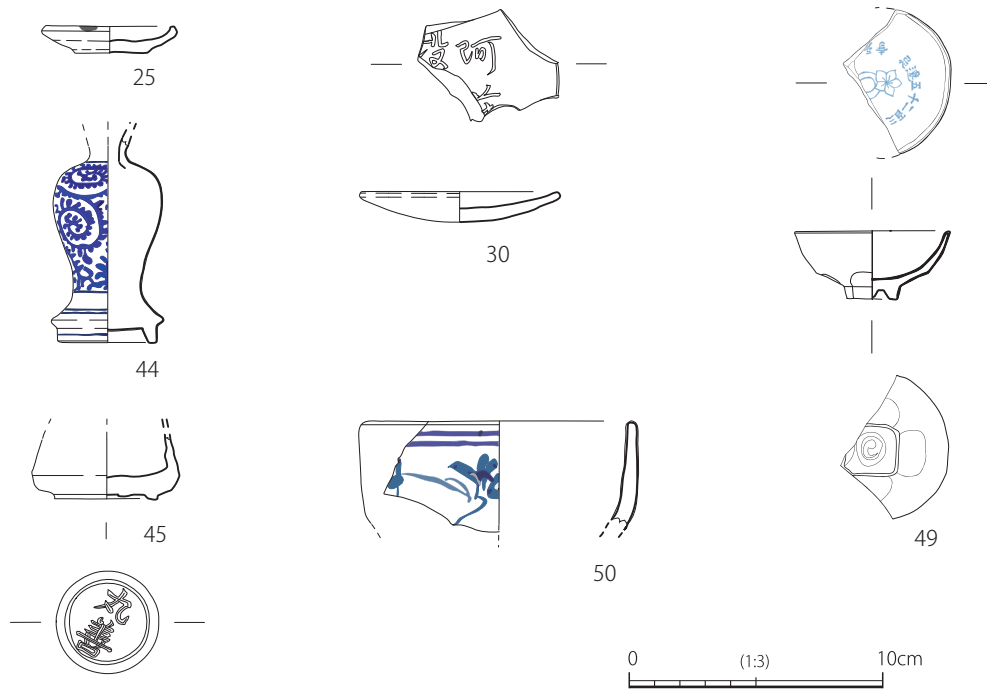


Fig.59 包含層出土遺物実測図(2) S=1/3
109のみ S=1/4

[A-1-S009]

この遺構は、No.3 トレンチで検出したもので、S008 の西側で確認し、その S008 を切っているようにも見える。トレンチを掘り下げる過程で検出したもので最初トレンチの中ほどで土層の違いから確認した。溝遺構であるが、検出する過程では一部トンネル状になっており、土中を掘りぬいたものか、自然の流水によって空けられたものに土砂が堆積したものかはっきりとさせることはできなかった。検出した当初は明らかに人為的に掘削され、遺構としたが、途中の状況を見ると自然による影響も考えらる。出土したのは土師器の小片のみであった。時期は中世の範囲と考える。

検出した範囲で、長さ 1.68 m、幅 0.55 m、深さ 31.7cmを測る。

[No.1 トレンチ及び No.2 トレンチの出土遺物]

この両トレンチは極く近接し、No.2 トレンチが東西方向に対し、No.1 トレンチは南北方向に設定している。この両トレンチから出土した遺物について概観すると、大きくトレンチ上層から最下層の岩盤上面までに集中する場合もあれば、まばらに出土した場合もあったが、集中部に明確な遺構があるかという点もそうでもなかった。しかも、深さは1 mあまりあるにも拘らず、時期差がさほどないようである。ただ、上層の20cm前後の深さには輸入陶磁器や大型の遺物がやや平面的に広がる傾向はあった。

次に主な出土遺物を見ていく。

輸入陶磁器としては、119の赤絵磁器がある。明末のもので、皿の底部であろう。わずかな小片であるが、緻密な胎土と乳白色がかった白磁面に赤色と緑色を使い、文様を描いている。色合いも鮮やかである。高台は、削り出しにより鋭角に作り出している。高台には砂目積みの痕跡が残る。器壁は薄く、1 mmほどである。時期的には明がやや衰えた時期で民間向けの磁器と考える。県内には貿易陶磁として持ち込まれたものと考えられる。

他に瓦質の土器が多く出土した。特に多いのは坏である。また、火鉢も一点集中して出土したが、何か土圧を受けたようにほぼ平らな分布を示した。他の破片で出土した土師器類にしても満遍なく散らばるように見えた。トレンチの中からの出土であるため、実際に遺構がなかったとは言い切れないが、周辺に何らかの施設があり、その廃棄物であったのかもしれない。

層中には上位で幅1 m前後の焼土というより火を使った後の灰や炭化物がまとまって出土する場合があった。層的にやや集中して居る状況であった。層を変えてさらに2箇所ほどで検出した。

一方、No.3 トレンチの北側からも多くの土師器の坏類が出土した。トレンチとしては狭い範囲であるが、トレンチの上位を中心に出土した。いずれも糸切り底のもので、灯明皿として使用されたものも多かった。ただ、出土状況としては、土坑などに集中して出土するのではなく、層中に広く散乱しながら出土している。ここでもわずかながら灰と炭化物が集中する部分があり、そこに若干遺物が集中することもあった。

このようにトレンチ調査した調査区東側では、中世に遡る包含層を確認した。出土遺物の中には、輸入磁器もあり、一定の勢力を持つ人々がこの近辺に存在した可能性は大きい。二本木遺跡群では中世の前期の遺構・遺物は多いが、中世後期になると中心地とは言えなくなる。中世後期の後を継ぐ集団の一つがこの驟雨へに存在してもおかしくはない。その証拠の一端を示すものであろう。

PL.23 新馬借 A-1 調査区遺構写真 (1)



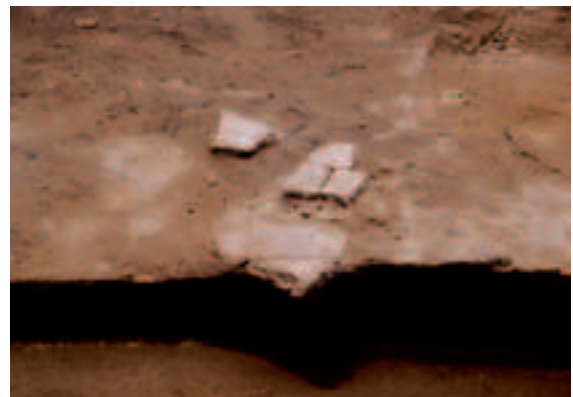
S002 完掘状況 (南より)



J-47 G遺物出土状況 (1) (西より)



No.1 トレンチ遺物出土状況



炭化物と遺物出土状況



No.1 トレンチ上層遺物出土状況



輸入赤絵磁器出土状況



I-46 G内確認ベルト状況 (南より)



I-48 G内確認ベルト状況 (北より)

PL.24 新馬借 A-1 調査区遺構写真 (2)



No.1 トレンチ東側壁状況 (1)



No.1 トレンチ東側壁状況 (2)



No.1 トレンチ東側壁状況 (3)



No.1 トレンチ東側壁状況 (4)



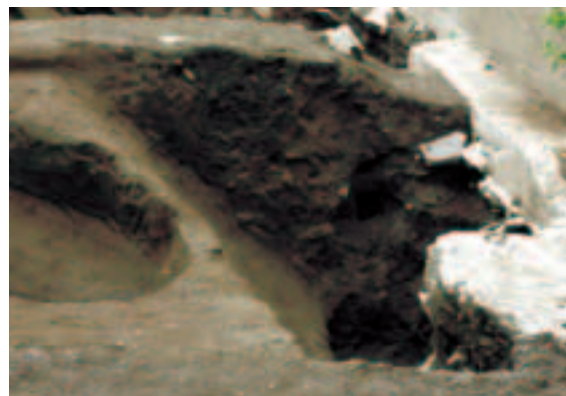
No.1 トレンチ南側壁状況



No.1 トレンチ北側壁状況



I-48 G 堀斜面検出状況

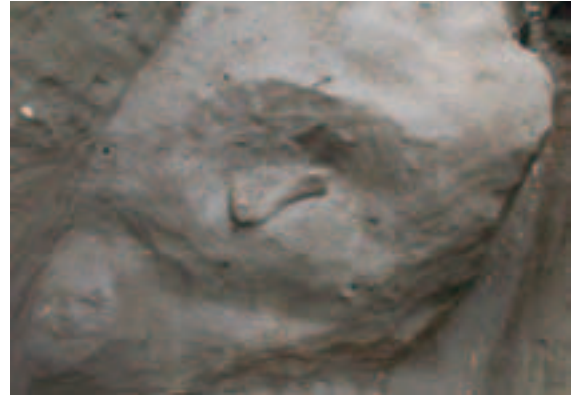


I-48 G 南側土層状況

PL.25 新馬借 A-1 調査区遺構写真 (3)



No.3 トレンチ南壁土層状況



No.3 トレンチ獣骨出土状況



No.3 トレンチ内 S007 底部焼土灰 等検出状況



A-1 調査区完掘状況 (南より)

PL.26 新馬借 A-1 調査区遺物写真 (1)



39 S006 S008 出土 (内器面)



112 I-45 深掘トレンチ出土 (凸面)



121 I-45 深掘トレンチ出土 (凸面)



39 S006 S008 出土 (外器面)



112 I-45 深掘トレンチ出土 (凹面)



121 I-45 深掘トレンチ出土 (凹面)



29 I-45 出土 (内器面)



47 I-45 出土 (内器面)



89 I-45 4トレンチ出土



29 I-45 出土 (外器面)



47 I-45 出土 (外器面)



20 I~J-45 4トレンチ出土



26 I~J-45 4トレンチ出土



27 I~J-45 4トレンチ出土



83 I-46 出土



86 I-46 出土



87 I-46 出土



102 I-46 出土

PL.27 新馬借 A-1 調査区遺物写真 (2)



69 I-46 出土 (凸面)



98 I-46 出土 (凸面)



103 I-46 出土 (凸面)



69 I-46 出土 (凹面)



98 I-46 出土 (凹面)



103 I-46 出土 (凹面)



108 I-46 出土 (凸面)



110 I-46 出土 (凸面)



115 I-46 出土 (凸面)



108 I-46 出土 (凹面)



110 I-46 出土 (凹面)



115 I-46 出土 (凹面)



114 I-46 出土 (凸面)



58 I-46 出土



100 I-46 出土 (凸面)



60 I-46 出土



61 I-46 出土



100 I-46 出土 (凹面)

PL.28 新馬借 A-1 調査区遺物写真 (3)



126 I-46 出土 (凹面)



111 I-46 出土 (表面)



122 I-46 出土 (表面)



126 I-46 出土 (凸面)



111 I-46 出土 (裏面)



122 I-46 出土 (裏面)



125 I-46 出土 (凸面)



70 I-46 出土 (表面)



71 I-46 出土 (表面)



125 I-46 出土 (凹面)



70 I-46 出土 (裏面)



71 I-46 出土 (裏面)



73 I-46 出土 (表面)



79 I-46 出土



64 I-46 出土



73 I-46 出土 (裏面)



63 I-46 出土



65 I-46 出土

PL.29 新馬借 A-1 調査区遺物写真 (4)



66 I-46 出土



101 I-46 出土



10 I-46 出土



36 I-46 出土 (内器面)



8 I-46 出土



81 I-46 カマシ出土 (外側面)



36 I-46 出土 (外器面)



6 I-46 出土



81 I-46 カマシ出土 (外底面)



3 I-46 出土



90 I-47 出土



94 I-47 出土



97 I-47 出土



105 I-47 出土 (表面)



88 I-47 出土



82 I-47 出土



105 I-47 出土 (裏面)



1 I-47 出土

PL.30 新馬借 A-1 調査区遺物写真 (5)



2 I-47 出土



9 I-47 出土



52 I-47 出土



7 I-47 出土



43 I-47 出土



35 I-47 出土



32 I-47 出土 (内器面)



5 I-47 出土 (内器面)



124 I-47 出土 (内器面)



32 I-47 出土 (外器面)



5 I-47 出土 (外器面)



124 I-47 出土 (外器面)



55 I-47 出土 (内器面)



72 I-47 出土 (内器面)



56・62 I-47 於西出土



55 I-47 出土 (外器面)



72 I-47 出土 (外底面)



4 I-47 出土

PL.31 新馬借 A-1 調査区遺物写真 (6)



76 I-47 出土 (内器面)



38 I-47 出土



28 I-48 カヲ西出土 (内器面)



76 I-47 出土 (外器面)



41 I-47 出土



28 I-48 カヲ西出土 (外器面)



77 I-47 出土



12 J-45 出土



13 J-45 出土



14 J-45 南東トレンチ出土



15 J-45 出土



16 J-45 出土



21 J-45 出土



23 J-45 出土



46 J-45 出土 (内器面)



24 J-45 出土



19 J-45 南東トレンチ出土



46 J-45 出土 (外器面)

PL.32 新馬借 A-1 調査区遺物写真 (7)



11 J-47 出土



104 J-47 出土 (内器面)



75 J-47 出土 (内器面)



17 J-48 出土



104 J-47 出土 (外器面)



75 J-47 出土 (外器面)



22 J-48 出土



80 J-48 出土 (内器面)



42 I~J-46 軌道下出土 (内器面)



31 J-45~49 枕木下出土 (内器面)



80 J-48 出土 (外器面)



42 I~J-46 軌道下出土 (外器面)



31 J-45~49 枕木下出土 (外器面)



40 I~J-47 軌道下出土



118 I-45~J-46 出土



123 No.1 トレンチ出土



116 No.1 トレンチ出土



18 中央東トレンチ出土

PL.33 新馬借 A-1 調査区遺物写真 (8)



119 中央東トレンチ出土 (内器面)



109 表土剥ぎ出土 (凸面)



25 表土剥ぎ出土



119 中央東トレンチ出土 (外底面)



109 表土剥ぎ出土 (凹面)



30 表土剥ぎ出土



49 表土剥ぎ出土 (内器面)



45 表土剥ぎ出土



50 調査区一括



49 表土剥ぎ出土 (外器面)



44 調査区一括



57 J-45 出土



512 S006 I-47 出土

PL.34 新馬借 A-1 調査区遺物写真 (9)



117 I-47 出土 (表面)



117 I-47 出土 (裏面)



113 I-47 出土



99 I-47 出土 (表面)



67 I-46 出土 (凸面)



67 I-46 出土 (凹面)



84 トレンチ出土



59 I-46 ~ 47 出土

Tab.16 新馬借A-1 調査区遺物観察表 (1)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	器高	内面	外面	内面	外面			
29	45	1	A-1	土師器	皿	I-47	2層	7.5	4.1	1.9	指押さえ、回転ナデ	ナデ	Hue7.5YR7/6 浅黄緑	Hue7.5YR8/6 浅黄緑	長石と金雲母を多く含む、直径1mm程度の石葉が目立つ。
30	45	2	A-1	土師器	皿	I-47	2層	6.2	4.4	1.0	指押さえ後ナデ	ナデ	Hue10YR7/6 黄緑	Hue10YR8/6 黄緑	内面見込み部中央が凸。
29	34	3	A-1	磁器	盃	I-46	2層	(7.1)	2.8	2.6	施釉(緑)	施釉(緑)	Hue10GY8/1 明緑灰	Hue10GY8/1 明緑灰	良好
30	44	4	A-1	磁器染付	手盃皿	I-47	2層	9.4	4.0	2.4	施釉(白)	施釉(白)	HueN8/0 灰白	HueN8/0 灰白	内面見込み部細軸ハギ、はなれ砂。内面に染付。
30	44	5	A-1	陶器	鉢	I-47	2層	(26.4)	—	—	施釉(透明、緑、白化)	施釉(透明、指押さえナデ、回転ナデ、回転ヘラカズ)	Hue2.5Y4/3 にぶい赤褐	Hue10R4/4 赤褐	1mm以下の長石、2mmの小礫を含む。
29	34	6	A-1	磁器染付	皿	I-46	2層	(14.0)	(7.8)	2.6	施釉(白)	施釉(白)	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	1mm以下の長石、2mmの小礫を含む。
30	45	7	A-1	陶器	耳付瓶	I-47	2層	(6.9)	—	—	回転ナデ	施釉(灰白)、ナデ	Hue10YR7/4 にぶい黄緑	Hue2.5Y8/2 灰白	1mm以下の長石、黒色粒を含む。
29	34	8	A-1	陶器	瓶	I-46	2層	(5.4)	6.5	—	施釉(透明)、ナデ、回転ナデ	ナデ後施釉(透明、ケズ)、ヘラカズ	Hue10YR8/4 浅黄緑	Hue2.5Y8/4 淡黄	良好
30	45	9	A-1	瓦質土器	鉢	I-47	2層	—	26.7	—	回転ナデ後不定方向	回転ナデ後不定方向	HueN2/0 黒	HueN2/0 黒	良好
29	34	10	A-1	瓦質土器	大皿	I-46	2層	(30.7)	(24.0)	3.6	指頭圧痕、回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5Y6/1 灰	Hue7.5Y7/1 灰白	1mm以下の長石、角閃石、石英を含む。
32	45	11	A-1	瓦質土器	環	J-47	—	—	—	(3.6)	指押さえ後ナデ	強い押さえナデ	HueN2/0 黒	Hue7.5YR7/2 明緑灰	1mm以下の角閃石、長石を含む。
31	52	12	A-1	土師器	皿	J-45	3層	7.8	5.6	2.2	指押さえ後ナデ	回転ナデ	Hue10YR7/4 にぶい黄緑	Hue10YR7/4 明緑灰	良好
31	52	13	A-1	土師器	皿	J-45	3層	6.6	5.2	1.8	指押さえ、回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR7/4 にぶい黄緑	Hue10YR7/4 にぶい黄緑	良好
31	52	14	A-1	土師器	皿	J-45 南東トレンチ	3層	8.2	5.9	1.9	指頭圧痕、不定方向	ナデ	Hue10YR7/4 にぶい黄緑	Hue10YR7/4 にぶい黄緑	良好
31	52	15	A-1	土師器	灯明皿	J-45	3層	(9.2)	(6.0)	(2.3)	ナデ	ナデ、回転ナデ	Hue10YR8/3 浅黄緑	Hue10YR8/4 浅黄緑	良好
31	52	16	A-1	土師器	灯明皿	J-45	3層	6.7	5.0	2.2	指押さえ後ナデ	ナデ、回転ナデ	Hue10YR7/4 にぶい黄緑	Hue10YR7/4 にぶい黄緑	良好
32	54	17	A-1	土師器	皿	J-48	3層	6.6	5.2	1.9	指押さえナデ	ナデ	Hue10YR7/3 にぶい黄緑	Hue10YR7/3 にぶい黄緑	良好
32	58	18	A-1	土師器	皿	中央東トレンチ	—	7.0	5.5	1.9	ナデ、指押さえ、不定方向	ナデ、回転ナデ	Hue10YR8/4 浅黄緑	Hue10YR8/4 浅黄緑	良好
31	52	19	A-1	土師器	皿	J-45 南東トレンチ	3層	(7.1)	(5.4)	1.9	ナデ、不定方向の指押さえ後ナデ	ナデ、回転ナデ	Hue10YR7/4 にぶい黄緑	Hue10YR7/3 にぶい黄緑	良好
26	52	20	A-1	土師器	灯明皿	J-45 1トレンチ 4トレンチ	3層	9.5	6.5	2.3	指押さえ後ナデ、回転ナデ	ナデ後不定方向のナデ	Hue10YR8/4 浅黄緑	Hue10YR8/4 浅黄緑	良好
31	52	21	A-1	土師器	灯明皿	J-45	3層	(8.5)	(6.5)	2.0	不定方向のナデ	ナデ、不定方向のナデ	Hue10YR8/4 浅黄緑	Hue10YR8/3 にぶい黄緑	良好
32	54	22	A-1	土師器	灯明皿	J-48	3層	(10.2)	(6.4)	2.0	指押さえ後ナデ、不定方向のナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	Hue10YR8/4 浅黄緑	Hue10YR8/4 浅黄緑	良好
31	52	23	A-1	土師器	皿	J-45	3層	(12.2)	(8.0)	2.9	指押さえ後ナデ、回転ナデ	ナデ後不定方向のナデ	Hue7.5YR7/6 黄緑	Hue10YR8/6 黄緑	良好
31	52	24	A-1	土師器	皿	J-45	3層	(10.0)	(7.4)	2.3	指押さえ後ナデ、回転ナデ	ナデ後不定方向のナデ	Hue7.5YR8/6 黄緑	Hue7.5YR8/6 黄緑	良好
33	59	25	A-1	土師器	灯明皿	表土ハギ	3層	5.1	2.7	1.1	ナデ	回転ヘラカズ後ナデ	Hue7.5YR8/3 浅黄緑	Hue7.5YR8/3 浅黄緑	良好
26	55	26	A-1	土師器	灯明皿	1トレンチ 4トレンチ	3層	9.5	6.5	2.5	ナデ、指押さえ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	Hue10YR6/2 灰黄褐	Hue10YR7/2 にぶい黄緑	良好
26	55	27	A-1	土師器	皿	1トレンチ 4トレンチ	3層	(9.7)	6.0	—	ナデ、回転ナデ	ナデ	Hue7.5YR7/4 にぶい黄緑	Hue7.5YR7/4 にぶい黄緑	良好
31	49	28	A-1	磁器	皿	I-48 カクラン西	—	10.5	6.2	2.0	施釉(透明)	施釉(透明)	HueN8/0 灰白	HueN8/0 灰白	内面に色絵。外面に黒色の小片付着。

Tab.17 新馬借 A-1 調査区遺物観察表 (2)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	器高	内面	外面	内面	外面			
26	33	A-1	陶器	皿	I-45		—	4.7	—	施釉(淡黄)	施釉(淡黄)、回転ナ デ、ナデ	Hue7.5YR6/3 オリーブ黄	Hue2.5YR8/3 淡黄	良好	砂目。
33	59	A-1	土師器	皿	表土ハギ		(7.5)	(2.8)	1.1	回転ナデ	回転ナデ、ケズリ後ナ デ	Hue10YR8/4 浅黄緑	Hue10YR8/4 浅黄緑	良好	内面に字が揃ってある。
32	58	A-1	陶器	播鉢	J-45~49 枕木下		—	(13.6)	—	施釉(灰)	ナデ	Hue5YR2/2 黒緑	Hue5YR4/2 灰緑	良好	18世紀後半~19世紀、砂目。播目20本。
30	45	A-1	陶器	土鍋	I-47	2層	—	(7.0)	—	施釉(黄緑)、回転ナ デ	回転ナデ、ナデ	Hue7.5YR8/8 黄緑	Hue7.5YR8/3 淡黄緑	良好	外面に煤付着。
57	33	A-1	磁器	仏飯器	S006 I-48	埋1層	(5.4)	3.9	5.8	施釉(透明)	施釉(透明)、ナデ	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	外面に色絵、底部釉ハギ。
57	34	A-1	陶器	碗	S006 I-48	埋1層	(12.4)	(9.1)	5.1	施釉(透明)、回転ナ デ	ナデ	Hue5YR7/8 緑	Hue5YR7/6 緑	良好	
30	45	A-1	陶器	碗	I-47 表土ハギ	1層	(12.1)	(5.5)	7.1	施釉(透明)、ケズリ、回 転ナデ	施釉(透明)、回転ナ デ、ナデ	Hue10YR8/8 黄緑	Hue10YR8/6 黄緑	良好	抹茶碗。
29	34	A-1	陶器	播鉢	I-46 瓦溜り	2層	—	(15.4)	—	施釉(緑)	ナデ、回転ヘラケズリ	Hue5YR3/6 暗赤褐	Hue5YR3/6 暗赤褐	良好	18世紀後半~19世紀中頃、内面見込み部重ね焼 き痕。播目17本。
57	37	A-1	陶器	碗	S006 I-48	埋1層	(12.2)	—	—	施釉(透明)、回転ナ デ、ナデ	施釉(透明)	Hue10YR8/6 黄緑	Hue10YR8/6 黄緑	良好	唐津焼抹茶碗。明治時代。
31	45	A-1	磁器	仏飯器	I-47	2層下	—	3.8	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y7/1 灰白	良好	1690~1780年代?
26	57	A-1	陶器	鉢	S006 I-48 S008 I-46	埋1層	(18.4)	—	—	施釉(灰)、回転ナ デ	施釉(灰)、ナデ	Hue5YR4/3 にぶい赤褐色	Hue7.5Y6/2 灰オリーブ	良好	1650~1690年代?
32	45	A-1	磁器染付	油壺	I~J-47 軌道下砂利層		2.2	—	—	回転ナデ	施釉(白)	Hue8/0 灰白	Hue2.5Y7/2 灰黄	良好	17世紀後半? 外面に染付。
31	45	A-1	磁器	仏飯器	I-47		—	—	3.6	施釉(灰白)、ナデ	施釉(灰白)、回転ナ デ	Hue2.5Y7/3 淡黄	Hue2.5Y7/3 淡黄	良好	底部腫れ砂。
32	34	A-1	陶器	土瓶	I~J-46 軌道下		—	(7.2)	—	施釉(淡黄)	ケズリ、ナデ	Hue2.5YR5/8 明赤褐	Hue7.5YR6/6 黄緑	良好	外面に「折尾」と彫ってある。
30	45	A-1	陶器	土瓶	I-47	2層	—	(7.3)	(9.0)	回転ナデ	施釉(透明)、ナデ	Hue10YR9/2 灰色	Hue2.5Y8/4 淡黄	良好	
33	59	A-1	磁器染付	瓶			—	3.9	—	施釉(灰白)	施釉(灰白)	Hue2.5G7/1 明オリーブ灰	Hue2.5G7/1 明オリーブ灰	良好	1780~1860年代、外面に染付、蜻蛉草文、肥面。
33	59	A-1	磁器	合子	表土ハギ		—	4.1	—	ナデ	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	底部「丸善」の文字。
31	52	A-1	陶器	皿	J-45	4層	(6.0)	—	—	粗いナデ	ナデ	Hue10YR5/2 灰黄褐	Hue10YR5/2 灰黄褐	良好	るっぽに転用。内面見込み部御付着。
26	33	A-1	陶器	大鉢	I-45 表土ハギ		(37.3)	(17.0)	16.6	施釉(白化粧、透明)	施釉(白化粧、透明)、 ヘラケズリ後ナデ	Hue7.5YR3/2 黒褐	Hue5YR3/3 暗赤褐	良好	内面見込み部砂目。
49	48	A-1	瓦質土器	煙炉	I-48 北トレンチ		(19.0)	—	—	横ナデ、ケズリ	ミガキ、沈線、ナデ	Hue7.5YR6/6 にぶい黄緑	Hue7.5YR4/4 褐	良好	口縁部煤付着。頸部直径9mmの穴が斜め下方向に あいている。
33	59	A-1	磁器染付	盃	表土ハギ		(6.0)	(2.0)	(2.7)	施釉(白)	施釉(白)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内面に染付。内面見込み部「砂永寺」の文字。
33	59	A-1	磁器染付	丸碗			—	—	—	施釉(灰白)	施釉(灰白)	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y7/1 灰白	良好	外面に陶胎染付。
54	51	A-1	瓦質土器	火鉢	J-48	3層	—	—	—	横ナデ	指押さへナデ、横ナ デ	HueN2/0 黒	HueN2/0 黒	良好	
30	44	A-1	瓦質土器	大甕	I-47	2層	—	—	—	ナデ	ナデ、回転ナデ、格子 タタキ	Hue10YR5/1 褐灰	Hue10YR3/1 黒褐	良好	1~2mm程の小礫、5mm程の長石 を含む。
53	53	A-1	瓦質土器	播鉢	J-47		(31.8)	—	7.4	ナデ、指押さへ	ナデ、不定方向のナ デ	Hue2.5Y5/2 暗灰黄	Hue2.5Y6/2 灰黄	良好	内面に播目の線が3本ある。
49	54	A-1	土師器	煙炉	I-48 カクア 北ト		—	—	—	ナデ	文様、ナデ	Hue5YR5/6 明赤褐	Hue5YR5/6 明赤褐	良好	内面に煤付着。
30	45	A-1	陶器	火入れ	I-47	2層	(10.8)	—	—	施釉(白化粧)、ナデ、 回転ナデ	白の化粧土、回転ヘ ラケズリ	Hue5YR4/4 にぶい赤褐色	Hue5YR4/4 にぶい赤褐	良好	口縁玉縁状。外面に波状文。

Tab.18 新馬借 A-1 調査区遺物観察表 (3)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	器高	内面	外面	内面	外面			
30	45	A-1	土師器	火鉢?	I-47 カクラン西		(13.8)	5.8	ナデ、回転ナデ	Hue7.5YR7/4 明赤褐	Hue5YR5/6 明赤褐	1mm以下の雲母、2mm大の石英、1 ~2mmの長石を多く含む。	良好	外面に赤色顔料。	
30	45	A-1	土師器	火鉢?	I-47		(14.0)	3.5	不定方向のナデ、横 ナデ、ナデ	Hue7.5YR7/4 明赤褐	Hue5YR5/6 明赤褐	1mm以下の雲母、2mm程度の石英、 1~2mmの長石を多く含む。	良好	内面の調整が粗い、外面に赤色顔料。	
30	45	A-1	陶器	皿	I-47	2層	—	—	施釉(緑灰)、ナデ	Hue10YR4/2 オリーブ灰	Hue10Y7/2 灰白	微細な黒い小礫を含む。褐色の砂 粒を含む。	良好	内面見込み部疵の目細ハギ。	
32	53	A-1	磁器染付	皿	J-47		—	—	施釉(明青灰)	Hue5B7/1 明青灰	Hue5B7/1 明青灰	1mm以下の黒色粒を多く含む。	良好	内外面に染付。	
31	44	A-1	磁器染付	碗	I-47	2層	—	—	施釉(灰白)	Hue5G7/1 明緑灰	Hue5G7/1 明緑灰	1mm以下の黒色粒を多く含む。	良好	内外面に染付。口縁の反りが大きい。	
31	45	A-1	磁器染付	瓶	I-47	2層	—	—	ナデ	Hue5B9/0 白	Hue7.5Y8/1 灰白	微細な小礫を多く含む。	良好	外面に染付。清田酒?明治~大正?	
28	43	A-1	瓦質土器	火鉢	I-46	上層	—	—	ナデ、横ナデ	Hue5G7/0 灰	Hue5G7/0 灰	1mm以下の白色粒を多く含む。2 mm大の長石を少量含む。	良好		
32	54	A-1	瓦質土器	甕	J-48	3層	—	—	ナデ、ハケ目	Hue10YR4/1 褐灰	Hue10YR4/1 褐灰	1~3mmの長石を多く含む。小礫 を少量含む。	良好	胴部全体に四角いスタンプが多数ある。	
29	34	A-1	磁器染付	盃	I-46 カクラン西		(5.3)	2.6	施釉(白)	Hue10Y8/1 灰白	Hue5N9/0 白	混入物なし。	良好	内面に金箔か金泥、白~褐色。外面に炭黒。底 部~胴部にかけて上方に穴。底部「新築登祿四 五口六三身」の文字、鶯籠口カ。	
29	44	A-1	土製品	埴埴	I-47	2層	(8.2)	—	調整不明	Hue5M4/0 灰	Hue10YR6/1 褐灰	1mm前後の長石を多く含む。	良好	播目9本。	
32	53	A-1	瓦質土器	播鉢	J-47		(34.0)	(13.6)	回転ナデ	Hue10YR7/1 灰白	Hue10YR6/1 褐灰	1mm以下の長石を多く含む。まれ に角閃石を含む。	良好		
32	52	A-1	土師器	皿	J-45 南東トレンチ	5層	—	6.0	回転ナデ、指押さエナ デ	Hue10YR6/3 にふい黄橙	Hue10YR6/3 にふい黄橙	微細な小礫を多く含む。	良好	糸切刃痕。	
32	58	A-1	瓦質土器	火鉢	No.1トレンチ	3層	(38.0)	—	ナデ、ハケ目	Hue5M4/0 灰	Hue5M4/0 灰	1mm以下の黒い小礫を含む。	良好	指頭圧痕。突帯2本。	
33	58	A-1	磁器	碗	中央東トレンチ		—	(7.0)	施釉(赤、緑)	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	1mm以下の黒い小礫を含む。	良好	内外面に色絵。明、五彩、民窯。はなれ砂。	
32	58	A-1	瓦質土器	播鉢	No.1トレンチ	3層	14.0	—	ナデ、横ナデ	Hue5M4/0 灰	Hue5M4/0 灰	1mm以下の黒い砂粒を多く含む。	良好	指頭圧痕。播目8本。片口。	
30	44	A-1	陶器	大鉢	I-47	2層	—	—	施釉(茶、緑)	Hue5YR3/1 黒褐	Hue5YR3/1 黒褐	微細な白礫を含む。	良好	内面に波状模様。	

Tab.19 新馬借 A-1 調査区遺物観察表 (4)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	出土地点	層位	寸法 (cm)				調整		色調		胎土	焼成	備考
						全長	玉縁長	高さ	瓦当径	瓦当厚	文線区径	内面	外面			
27	35	A-1	丸瓦	I-46	2層	—	4.1	8.8	—	—	—	Hue#5/0 灰	Hue#4/0 灰	微細な小礫を多く含む。	良好	外面に刻印。玉縁部指押さへ痕の。
26	35	A-1	軒丸瓦	I-46	2層	—	—	15.5	—	11.3	—	Hue#4/0 灰白	Hue#4/0 灰白	1mm程度の黒、白色粒を多く含む。	良好	九曜文。指紋がある。
34	58	A-1	軒丸瓦	トレンチ	—	—	—	8.3	—	6.3	—	Hue#7/0 灰白	Hue#6/0 灰	石英、黒雲母を含む。	良好	桔梗文。コビキB。
26	46	A-1	軒丸瓦	I-47	2層	—	—	4.1	—	3.0	—	Hue#10YR6/3 にさい、黄緑	Hue#10YR6/3 にさい、黄緑	黒、褐色粒を多く含む。	良好	巴文。コビキA。
26	35	A-1	軒丸瓦	I-46	2層上部	—	—	—	—	(9.6)	—	Hue#7.5Y6/1 灰	Hue#7.5Y6/1 灰	2mm以下の黒色粒を多く含む。	良好	九曜文。指紋がある。
26	35	A-1	軒丸瓦	I-46	2層	—	—	—	—	2.1	—	Hue#3/0 黒	Hue#2/0 黒	1mm以下の赤、黒、白色粒を多く含む。	良好	日足文。
27	38	A-1	丸瓦	I-46	2層下	—	3.9	—	—	—	—	Hue#7.5Y6/1 灰	Hue#7.5Y6/1 灰	1mm以下の黒色粒を多く含む。	良好	玉縁部刻印。三本の罫目がある。
26	35	A-1	軒丸瓦	I-46	2層下部	—	—	—	—	2.0	—	Hue#6/0 灰	Hue#4/0 灰	小礫、微細な白、黒色粒を含む。	良好	コビキA。日足文。
27	37	A-1	丸瓦	I-46	2層下部	—	4.0	—	—	—	—	Hue#3/0 灰	Hue#3/0 灰	微細な砂粒を含む。	良好	コビキA。
27	37	A-1	丸瓦	I-46	2層下部	32.4	4.4	7.6	—	—	—	Hue#6/0 灰	Hue#6/0 灰	1mm以下の白、黒色粒を多く含む。	良好	外面に刻印。コビキB。
27	38	A-1	丸瓦	I-46	2層下	—	(7.0)	(3.8)	—	—	—	Hue#10YR6/1 褐色	Hue#7.5Y6/1 灰	1mm以下の黒色粒、長石を多く含む。	良好	外面に刻印。コビキB。
34	46	A-1	軒丸瓦	I-47	2層下	51.2	3.5	15.2	2.1	—	6.6	Hue#7.5Y4/1 灰	Hue#4/0 灰	1mm以下の黒色粒を多く含む。	良好	外面に刻印。九曜文。
27	39	A-1	丸瓦	I-46	2層	—	3.7	(4.8)	—	—	—	Hue#3/0 褐色	Hue#3/0 褐色	2mm以下の黒色粒と0.5mm以下の白色粒を多く含む。	良好	外面に刻印。針付着。穿孔2ヶ所。
27	36	A-1	丸瓦	I-46	2層下	—	(3.5)	—	—	—	—	Hue#5/0 灰	Hue#5/0 灰	小礫を多く含む。	良好	外面に刻印。

Tab.20 新馬借 A-1 調査区遺物観察表 (5)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	出土地点	層位	寸法 (cm)				調整		色調		胎土	焼成	備考
						全長	幅	高さ	瓦当厚	文線区厚	内面	外面	内面			
27	39	A-1	軒平瓦	I-46	2層	—	—	4.3	1.4	2.5	—	Hue#2/0 黒	Hue#2/0 黒	角閃石、白色粒をまれに含む。	良好	天正十八年。
27	39	A-1	軒平瓦	I-46	2層	—	—	—	0.8	—	—	Hue#2/0 黒	Hue#4/0 灰	微細な長石、角閃石をわずかに含む。	良好	三葉文。
29	39	A-1	軒平瓦	I-46	2層	—	—	—	—	—	—	Hue#3/0 暗灰	Hue#4/0 灰	1~3mmほどの小礫、長石を含む。	良好	三葉文。
34	40	A-1	平瓦	I-46	2層	—	—	—	—	—	—	Hue#2.5Y5/1 黄灰	Hue#2.5Y4/1 黄灰	微細な小礫、角閃石を含む。	良好	コビキA。天正十八年か。
29	47	A-1	軒平瓦	I-47	2層	—	—	5.3	—	—	—	Hue#7.5Y5/1 灰	Hue#7.5Y7/1 灰白	1mm以下の長石を多く含む。1mm以下の黒色粒を含む。	良好	外面に刻印。内面に工具痕数ヶ所。
29	47	A-1	軒平瓦	I-47	2層	—	—	—	1.7	—	—	Hue#10YR7/3 にさい、黄緑	Hue#7/0 暗灰	1mm程度の赤、白色粒を含む。	良好	三葉文。
29	47	A-1	軒平瓦	I-47	2層	—	—	—	1.9	2.9	—	Hue#3/0 暗灰	Hue#3/0 暗灰	微細な小礫、黒色粒の少量を含む。	良好	唐草文。
29	47	A-1	軒平瓦	I-47	2層	—	—	5.7	1.9	1.9	—	Hue#3/0 暗灰	Hue#6/0 暗灰	1mm以下の小礫のみみられる。	良好	桔梗文。
27	40	A-1	平瓦	I-46	2層下	—	—	6.5	—	1.8	—	Hue#2.5Y7/4 黄灰	Hue#3/0 暗灰	3mm程度の黒、灰色の礫を含む。	良好	—
28	36	A-1	平瓦	I-46	2層	33.9	—	4.5	—	—	—	Hue#4/0 灰	Hue#4/0 灰	1~2mmの白、黒色の小礫を含む。	良好	外面に刻印。
												Hue#4/0 灰	Hue#4/0 灰	2mm以下の黒色粒を多く含む。1mm以下の白色粒を少し含む。	良好	外面に刻印。

Tab.2.1 新馬借遺跡 A-1 調査区遺物観察表 (6)

図版番号	挿入番号	調査区	種別	出土地点	層位	寸法			調整		色調			胎土	焼成	備考
						平部長	瓦当部高	瓦当部厚	瓦当部幅	内面	外面	内面	外面			
34	41	A-1	滴水瓦	I-46	2層	—	—	1.7	—	横ナデ、指押さへナデ	Hue10N4/0 灰	Hue7.5Y5/1 灰	1mm以下の黒、白色粒を多く含む。	良好		
				I-47	2・2層下	—	—	1.9	—	不定方向のナデ	Hue10YR4/1 褐灰	Hue10YR4/1 褐灰	1~3mm程の小礫、角閃石を含む。	良好	明和口年十月吉日。	
28	41	A-1	滴水瓦	I-46	2層	—	—	—	—	横ナデ	HueN3/0 灰	HueN3/0 暗灰	1mm以下の赤色粒、2mm以下の長石を多く含む。	良好	慶長四年八月口。	
28	41	A-1	滴水瓦	I-46	2層	—	—	—	—	横ナデ	HueN6/0 灰	HueN6/0 灰	1mm以下の黒、白色粒を多く含む。	良好		
29	47	A-1	滴水瓦	I-47	2層	—	—	2.1	—	横ナデ	HueN5/0 灰	HueN4/0 灰	1mm以下の白、黒色粒を多く含む。	良好		
29	41	A-1	滴水瓦	I-46	2層	—	—	2.2	—	ナデ	Hue4/0 灰	Hue3/0 暗灰	2mm以下の白、黒、灰色の小礫を含む。	良好	年号なし。	

Tab.2.2 新馬借遺跡 A-1 調査区遺物観察表 (7)

図版番号	挿入番号	調査区	種別	出土地点	層位	寸法(cm)			調整		色調			胎土	焼成	備考
						縦	横	高さ	幅	内面	外面	内面	外面			
28	43	A-1	鯉瓦	I-46	2層	—	—	—	—	横ナデ、不定方向のナデ	HueN3/0 暗灰	HueN4/0 灰	2mm以下の黒色粒を多く含む、白色粒を少量含む。	良好		
28	43	A-1	特殊瓦	I-46	2層	—	—	—	—	工具によるナデ	Hue5Y4/1 灰	Hue5Y6/1 灰	1~2mm程の小礫を多く含む。	良好	指頭圧痕。	
28	43	A-1	鯉瓦	I-46	2層	—	—	—	—	ナデ	Hue10YR4/1 褐灰	Hue5Y6/2 灰	1mm以下の黒色粒を多く含む。	良好		
26	33	A-1	鯉瓦	I-45 4トレンチ	最下層	—	—	—	—	工具によるナデ	HueN4/0 灰	HueN4/0 灰	1~2mmの黒色粒を多く含む、1mm以下の長石を少量含む。	良好		
56	91	A-1	特殊瓦	S002 I-47~48 カクラン		—	—	—	—	カキヤフリ、横ナデ後 横ナデ	Hue7.5Y6/1 灰	HueN4/0 灰	1~2mmの黒色粒を多く含む、1mm以下の長石を少量含む。	良好		
56	92	A-1	鯉瓦	S002 I-48		—	—	—	—	工具によるナデ	HueN6/0 灰	HueN2/0 暗灰	1~2mmの黒色粒を多く含む。	良好		
56	93	A-1	鯉瓦	I-48~49		—	—	—	—	ナデ	HueN5/0 灰	HueN4/0 暗灰	1~2mmの黒色粒を多く含む。	良好	一部に鉄粉付着。	
56	95	A-1	鯉瓦?	S002		—	—	—	—	ナデ、カキヤフリ	Hue7.5Y6/1 暗灰	HueN3/0 暗灰	1mm大の黒色粒を多く含む、1mm以下の長石を含む。	良好	型押しカ。	
34	47	A-1	陶木敷蓋瓦	I-47	2層	—	—	—	—	ナデ、工具によるナデ	HueN3/0 暗灰	HueN3/0 暗灰	1.5mm以下の長石、黒色粒を多く含む。	良好	穿孔2ヶ所。	
29	47	A-1	隅鬼瓦	I-47	2層	—	—	—	—	ナデ	Hue7.5Y6/1 灰	HueN2/0 黒	1mm以下の長石を多く含む、1mm大の黒色粒を含む。	良好		
56	106	A-1	特殊瓦	S002 I-48		—	—	—	—	面取り、指押さへナ デ、ナデ	HueN6/0 灰	HueN4/0 灰	1mm大の黒色粒を含む。	良好	鯉瓦の鱗カ。	
33	59	A-1	谷平瓦	表土ハギ		—	—	—	—	ナデ	Hue2.5Y5/1 黄灰	Hue2.5Y5/1 黄灰	3mm以下の小礫を含む。	良好	外面に刻印。瓦が重なっていた部分で色が変わっている。	
28	42	A-1	谷平瓦	I-46 ベノト	2層	—	—	—	—	ナデ	HueN3/0 暗灰	HueN3/0 暗灰	石英を少量含む、小礫を多く含む。	良好		
26	33	A-1	谷丸瓦	深掘トレンチ	上層	—	—	7.7	—	ナデ、工具によるナデ	HueN3/0 暗灰	HueN3/0 暗灰	1mm前後の砂粒を多く含む。	良好	布目。繊維痕。	
34	48	A-1	鯉瓦	I-47	上層	—	—	—	—	指押さへ後ナデ	HueN3/0 暗灰	HueN4/0 灰	0.5~2mmの黒色粒を多く含む。	良好		
26	33	A-1	谷丸瓦	I-45 深掘トレンチ		—	—	6.6	—	ナデ	HueN5/0 灰	HueN5/0 灰	1mm程の輝石、角閃石らしきものが散る。	良好	布目。	
28	42	A-1	鳥衾	I-46	2層上部	—	—	—	—	縦方向のナデ	HueN4/0 灰	HueN4/0 灰	微細な白色粒を少量含む。	良好		
28	42	A-1	谷丸瓦	I-46	2層	—	—	7.2	—	横ナデ、粗いナデ	HueN5/0 灰	HueN5/0 灰	褐色粒を多く含む。	良好	指頭圧痕。	

Tab.23 新馬借 A-1 調査区遺物観察表 (8)

図版 番号	挿載 番号	調査区	種類	器種	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			色調		焼成	備考
							全長	口径	脚径	内面	外面	内面	外面	内面		
32	55	A-1	土師器	輪	I-45~J-46		—	—	—	ナデ	ナデ	Hue5YR6/6 にぶい黄	Hue5YR7/4 にぶい橙	良好	羽口にスラグ付着。	
	56	A-1	土師器	輪	S002 I-46	埋1層	—	8.0	6.3	ナデ	縦方向へラケズリ	Hue7.5YR7/3 にぶい黄	Hue7.5YR7/3 にぶい橙	良好	全体に煤付着。	

Tab.24 新馬借 A-1 調査区遺物観察表 (9)

図版 番号	挿載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)			備考
							長さ	幅	厚さ	
33	52	A-1	浮石		J-45	3層	—	—	—	浮石。

Tab.25 新馬借 A-1 調査区遺物観察表 (10)

図版 番号	挿載 番号	調査区	種類	器種	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			備考
							直径	厚さ	高さ	内面	外面	調整不明	
33	512	A-1	銅金具	不明	S006 I-47	2層	4.3	0.2	たたいたよふなあと	調整不明	中央に穿孔(直径0.5)。		

Tab.26 新馬借 A-1 調査区遺物観察表 (11)

図版 番号	挿載 番号	調査区	種別	種類	出土地点	層位	寸法(cm)		色調		備考
							縦	横	縦	横	
96	601	A-1	泥面子	人形	S002 I-46	1層	3.4	2.1	Hue10YR7/3 にぶい黄橙		

第6節 花岡山・万日山 A-2 調査区

1 調査区概要

この調査区は、高麗門踏切のすぐ南側にあたり、橋脚 P181 の部分に当たる。調査区設定にあたり J R の現路線（新幹線橋脚直下）から安全距離を保つと同時に、踏切際の道路からの安全距離などを考慮して掘削範囲を設定した。設定に従い調査範囲となったのは、北側は高麗門踏切際道路から 2 m、西側は鉄道から 2 m 程離し、東西 7 m、面積約 100㎡程である。ここを花岡山・万日山 A-2 調査区とした。

調査区内の西側 1/2 は新幹線工事前には旧市道であった場所であり、アスファルトが残りその下は路盤として掘削され砂利敷き層となっていた。さらに道路下には下水管、水道管、ガス管が廃止されていたものの管はそのまま残され、攪乱も多かった。さらに調査区を中心付近は J R の敷地でしかも踏切近くということで、遮断機の基礎、電柱、配管などが多く残り前者の攪乱と輻輳している場合もあった。大部分は表土剥ぎに際し除去したが、遺構にかかる可能性のあるものは残した。

[層序]

この調査区は、地表面から 1 m 程は明治以降の攪乱で本来の層が失われていた。調査区の西側部分は市道だったため、表面は道路用の砂利が 50cm ほど堆積していた。また、道路下であったことから埋設管が多く埋められ、最も深いところでは地表面から 2 m 下に水道管の本線が南北に走っていた。また、水道をはじめガス管などの枝管が縦横に走っていた。

さらに後述する A-2-S001（暗渠施設）により調査区の 1/4 に本来の層序の確認はできなかった。ただ、部分的に確認できた部分から想定すると、調査区の西側には辛うじて暗褐色のシルト層が残り、下に下るにつれて砂質の割合がやや強くなり、再び褐色の粘性層や暗灰色の硬く締まる層へと遷移していく。上部の褐色のシルト層には弥生土器とともに近世の陶磁器が混じる場合があり、近世時期の層の形成があったと思われるが、明確に層を区画することはできなかった。

この層の上面では、近世末から近代にかけて形成されたと考えられるいくつかの遺構を確認した。

2 遺構と遺物

[A-2-S001]

この遺構は、調査区北東部に弧を描いて構築されており、その曲がり角の部分が検出された。当初は何の遺構か不明であったが、最終的に暗渠遺構であることが分かった。表土剥ぎ時には、裏込めの大き目の栗石と柱状になった天井の石材が出土したため、高麗門に関係する遺構の一部の可能性が考えられ、表土を粗く除去して留めた。天井石の上層は、近代以降の複数回に渡る攪乱の状況が見て取れたため、この遺構の時期が当初は不明であった。

調査では、上の柱状石は簡単には除去できないためその周囲に広がる礫の部分から調査を進めた。ある程度精査した状況で、この礫群は柱状石とその下の構築物の裏込めの石である可能性が出てきた。これらの礫石は、大きさが 20cm～30cm 大のやや大きめの川原石を中心として径 10cm 前後の川原石、打ち欠いた礫などが使用されていた。柱状石の上部は、新しい攪乱で乱されていたが、礫石部分の精査を進める中でこの構築物を作るために、本来の地山層と構築物を作るために掘削した掘り込みを確認した。礫石群の周囲の埋め込みを除去し、掘削された深さを確認していった。地表面から 2 m 以上まで埋め込まれていることまでは確認したものの、それ以上の下層まで掘るためには湧水が多いので水中ポンプが必要であり、併せて礫石の除去が必要であった。しかし、調査全体の作業工程上、完全に掘削の最深部までそこに人員を裂けず掘削を途

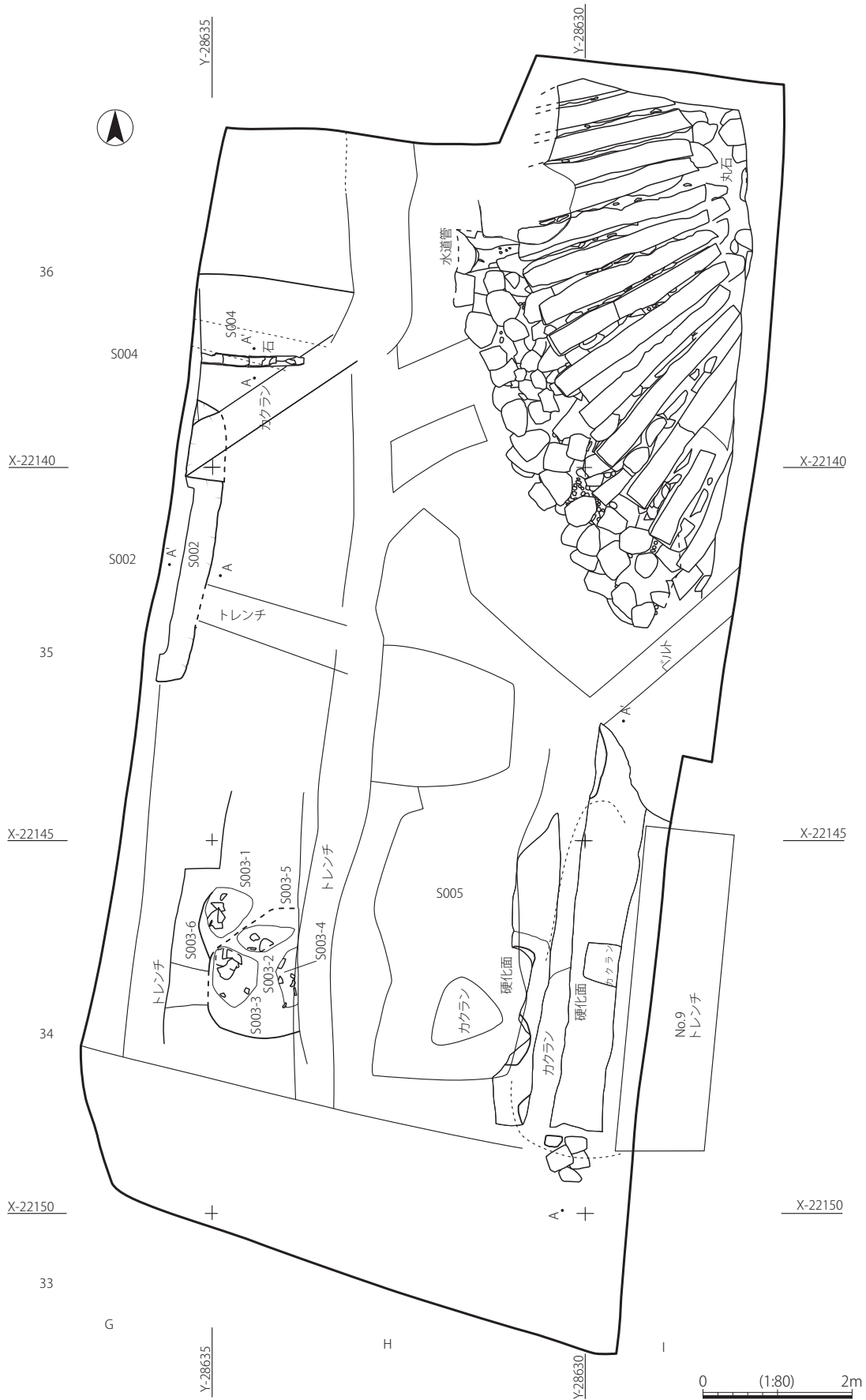


Fig.60 A-2 調査区遺構配置図 S=1/80

中で放棄したため、最下部は掘削できず不明である。

周囲の礫石の調査と平行して柱状石群を精査していたところ、石の隙間にコンクリートが流し込まれていること、その石の端には厚めのゴムチューブが渡されていることが分かった。その一方で柱状石には幅5cm～6cm程の矢穴がいくつも見られ、そのミスマッチに戸惑った。しかし、コンクリートが下に流されている以上、もともとは近世のものかもしれないが、近代になって何らかの再工事がなされているものと予想した。

この遺構については、調査検討委員会の議題の一つにあげ現地調査をお願いした。委員会では、構造的には弧状に構築されていることから近代以降のものと思われるが、柱状石の下部構造が不明であるので、一箇所でもかまわないので石をはずし下の構造を明らかにするようという指示であった。

検討結果を受けて、柱状石2本を取り外し下部を掘削することにした。当初、人力のみで小型削岩機を使いながら作業を行っていたが、効率が悪かったため、重機につけたブレーカーで掘削をした。その際柱石はすぐ外れたものの、下のコンクリートが深さ1mほど注入されていたため3日ほど要した。

コンクリートを除去するとその下は砂が厚く堆積し、少し掘り下げると湧水する状況にあった。ただ、角柱状の石材を組み合わせている天井石に残されている矢穴は、近世の石材割の特徴を示すことから単純に近世以降のものとも言い切れなかった。ちなみに矢穴の大きさは、約5cm幅であったので近世末ごろのものとしてもおかしくはない。矢穴はこのほか近くの桁橋の石材、高麗門踏切以南の調査区からも出土し、鉄道敷設に伴う石垣などにも見られ、大きさもほぼ同じである。このことから矢穴が必ずしもそのまま時期の判断には使えないことを示している。

遺構としては、調査区北東部に屈曲部分の一端が検出されたのみであるが、内面の石垣は両壁面ともに確認でき、石垣の石材は肉眼観察から在地産と見られる安山岩が主に使用される。両壁面とも谷積の石垣により壁面を構築し、裏込め石は人頭大以上の安山岩自然礫、あるいは粗割りしたものを利用する。

底面は固くしめる砂の地山を素掘りしたものである。底面の形状は平坦でなく、東側がやや深くなる。埋土の最下層より長辺20cm～30cmの安山岩割石が多く出土したことから、底面に敷石がなされていた可能性も考えられる。

蓋石は角柱状に調整され、矢穴が明確に残る。

検出時は、蓋石の直下をコンクリートにより閉塞され、内部は粘土に埋没した状態であった。埋土の上位は黄灰色～暗灰色粘土、中位～下位はグライ化の著しい黒色粘土で、きわめて軟弱である。黒色粘土にはコイ科の魚類とみられる骨や鱗が多量に含まれていた。

石垣の積み方は、両面とも谷積で捉えられると考えているが、東側と西側でやや異なる。西側壁面は、典型的な谷積で最上段の積石が三角形を呈するものを使用する。また、下面は最下段の積石が根石を兼ねると考えられる。東側壁面は主に長方形を呈する積石を用い、最下段のみ三角形を呈する石を使用する。上面2段は布積に近い外観である。また、最下段に角柱状の根石が置かれる。いずれも石垣の下部構造は未確認であるが、最下段の積石が底面より下にあることから石垣の部分は、地山を一段深く掘削した上に構築したと考えられる。

この遺構からの出土遺物は、遺構の一部しか内面を掘削できなかったからかもしれないが少ない。Fig.66に図化したものとPL.38に掲載したものである。いずれも近世末から近代にかけてのものである。水路として利用されているうちはそれほどの遺物は残らないと考えられ、泥炭が徐々に溜まったか不明であるが、少なくとも鉄道が複線化した時点でこの遺構の役割は完全に終わっていると考える。

この遺構については、明治10年以降の構築物として調査終了後に撤去されたが、道路下には残っている。撤去工事時に立会ったところの所見は当該箇所でも述べる。

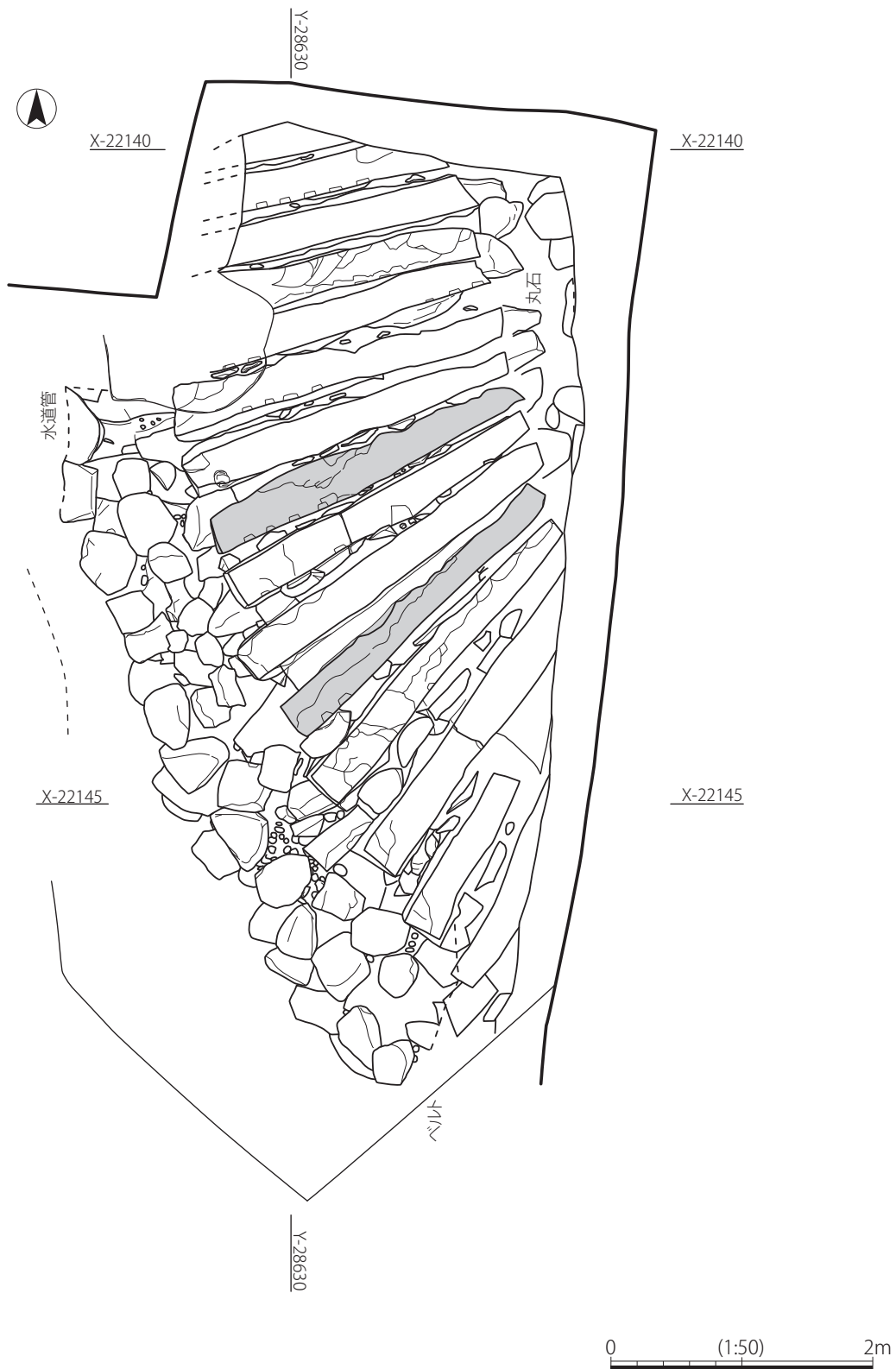


Fig.61 S001 (暗渠) 平面実測図 S=1/50

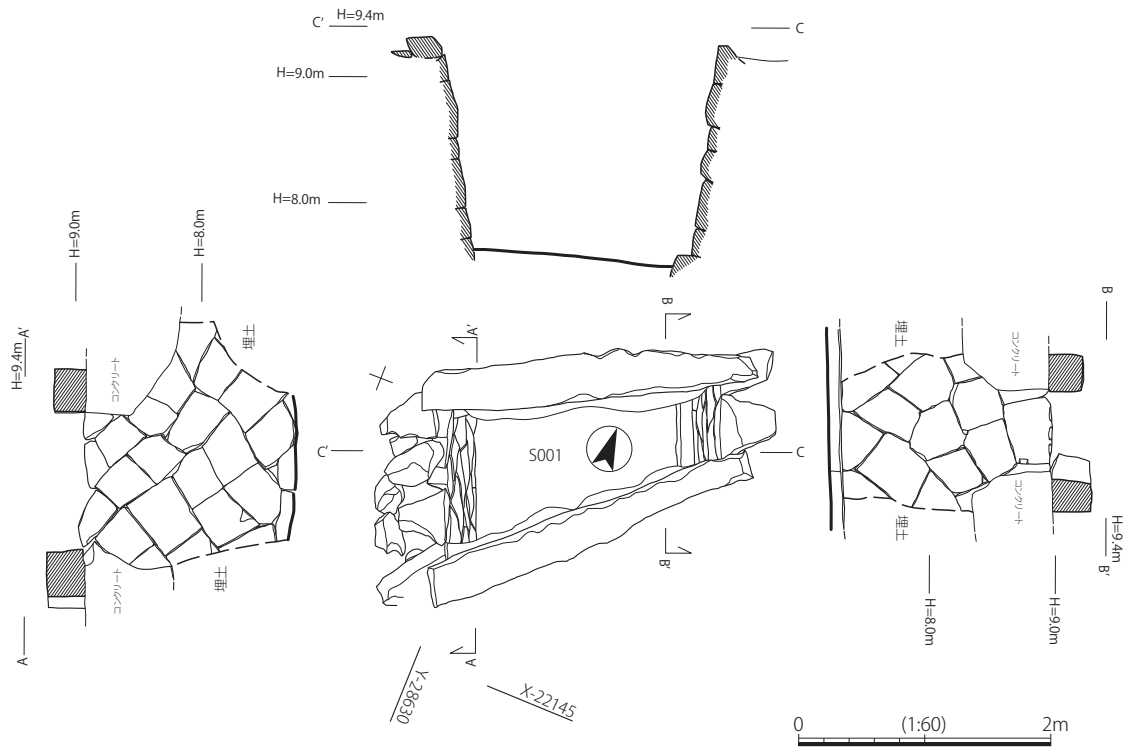
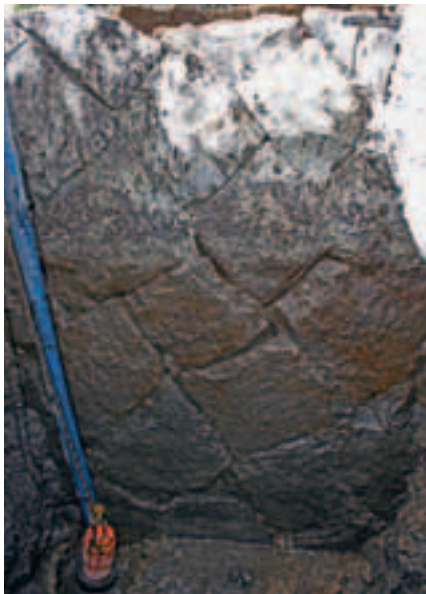


Fig.62 S001 部分掘削部平面・断面実測図 S=1/60



PL.35 S001 西側壁面



PL.36 S001 東側壁面

[A-2-S002]

この遺構は、調査区西側の G-35 グリッドに当たる壁際に係る場所で検出した遺構である。当初土坑の一部に係っているものと判断したが、この遺構にかけてトレンチを掘削して土層を確認したところ、埋土は明褐色を呈するあまり締まりのない土であった。この遺構自体の壁は、粘土らしき土を厚さ 3cm ほど面として貼った痕跡があった。さらに遺構の確認できた面は、上端から下方へ向けて狭くなっており、全ての面でそれが確認できた。そのことから検出できた範囲では逆台形を呈する土坑と分かった。残念ながら今回の調査区内で底は確認できず、全体のプランを捉えることはできなかったが、方形のものであろうことは予想できた。確認できた一辺の長さは、3 m 50cm ほどである。

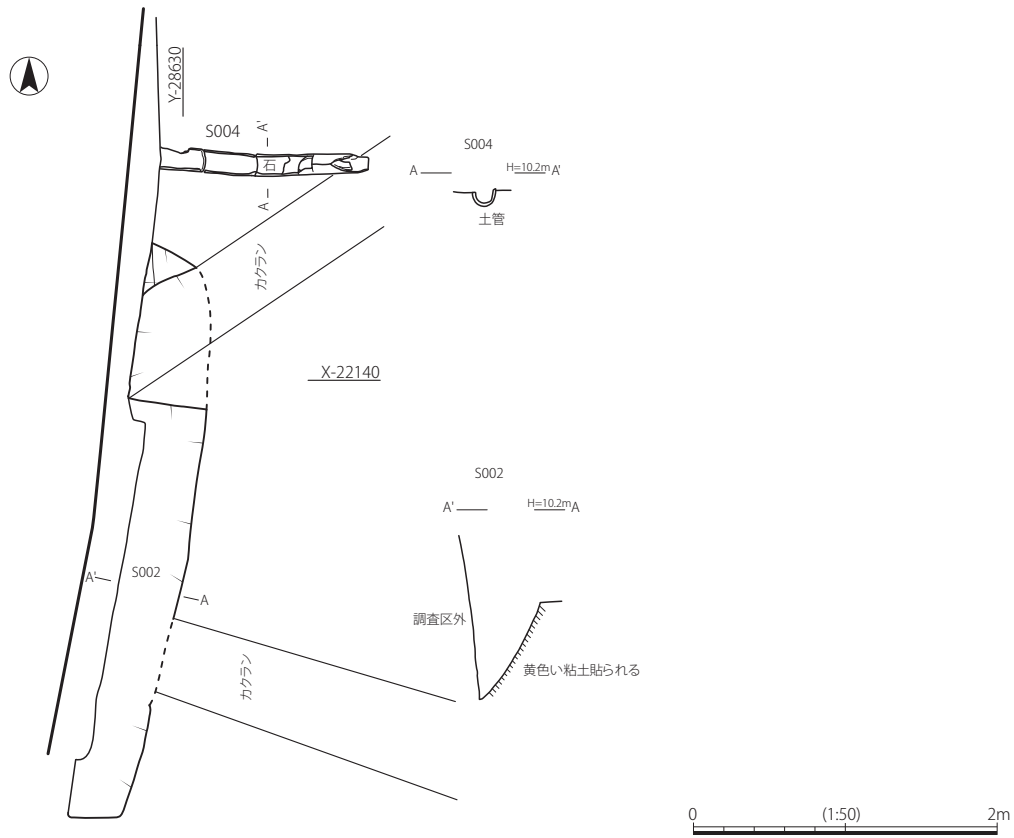


Fig.63 S002・S004 実測図 S=1/50



Fig.64 S003 遺物出土状況実測図 S=1/40

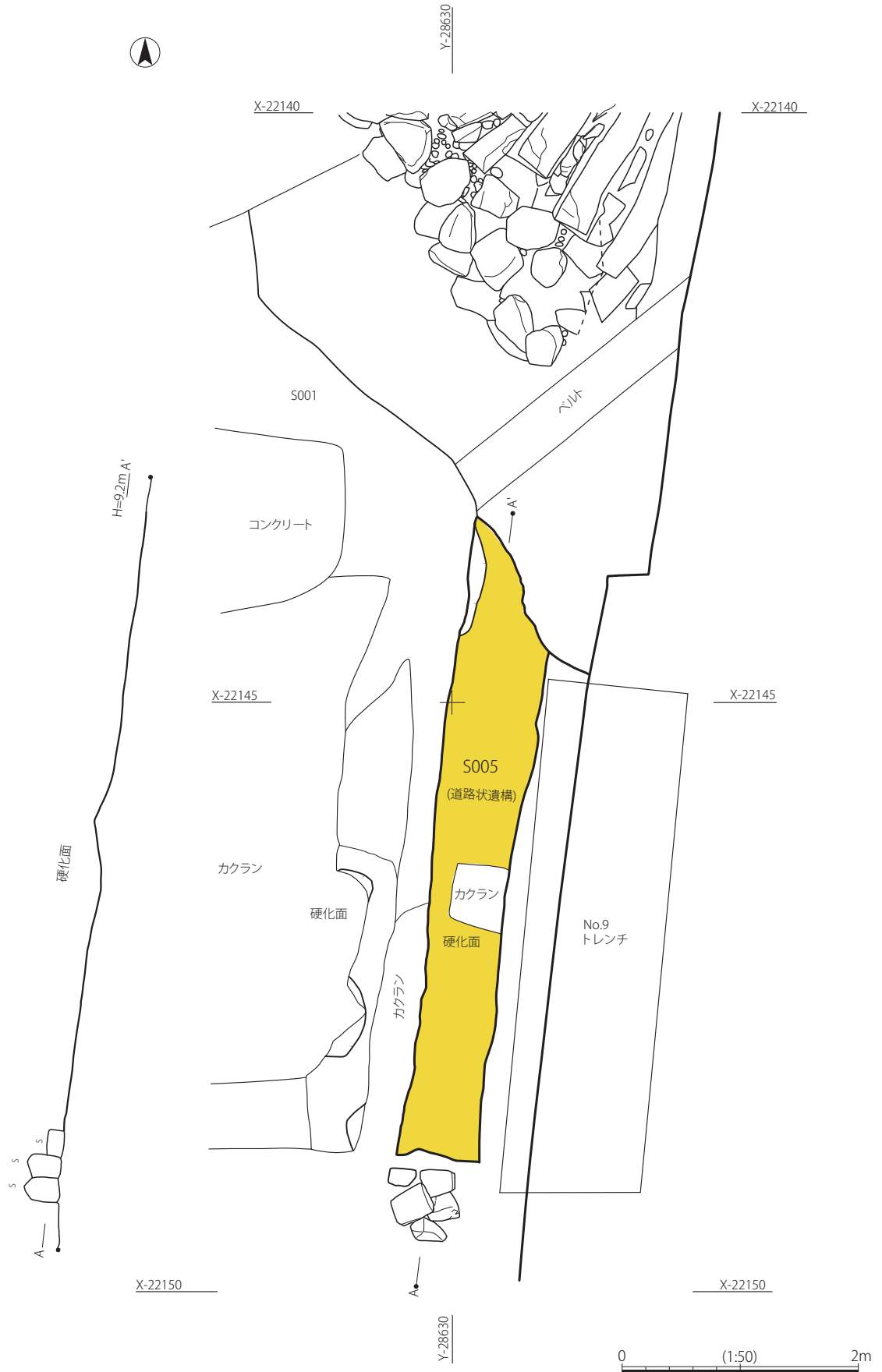


Fig.65 S005 実測図 S=1/50

このように壁面に粘土を貼っている構造物としては、内部に水性のものを溜める用途が推定できる。水溜、もしくは排泄物の貯蔵場所などが想定できる。ただ、壁面に残る物質の分析までは行っていないので確証はない。出土遺物はなかった。

[A-2-S003]

この遺構は土坑で、H-34 グリッドで検出した。遺構としては1つにしているが、最低2つの遺構の切り合った遺構と考える。非常に多くの破損した遺物が出土した。接合を試みたが、完全に一個体となるものはほとんどなく、破損した器物の廃棄土坑と考える。

出土した遺物は、近世の陶磁器、土師質土器、金属製品などである。一種のゴミ穴であろう。

[A-2-S004]

この遺構は、近世末から近代始め頃作られたと考える土管及びその埋設した溝遺構である。H-36 グリッドで検出した。

調査時には、掘り込みを確認できず、まわりの土層と共に掘り下げた。ある程度検出した段階で、土管が調査区西側壁から北東方向へ列状に並んでいるのを確認した。土管は、いずれも瓦のように表面をいぶして黒色にしたもので、造りも丸瓦を成形する要領に類似している。西壁を詳細に観察したところ、掘り込みを確認したが、上部では掘り込み線が不明瞭となり、その層から掘り込みがあったか明確にできなかった。

この土管の並びから推定すると、緩やかに下がりながら、S001 の暗渠排水の方向に向かっているように見える。直接この遺構と繋がっていたか確認はできていないが、この遺構の並びの方向の先に当たる S001 の一角に、この土管と同じものが一つ隙間に押し込まれていた。これらの土管が、S001 と関連するものと考えらるなら、S001 の設置後もしくはその後に汚水の排出に利用されていたものであろう。

[出土遺物]

217、300 は土管である。検出した長さが 1.2 m、幅が 20cmほど、深さは土管の径である。西壁で確認した掘り込みは、30cmほどまでは確認できた。内部に埋設された土管は瓦質で、一個体を計測すると、総長が 37.3cm、外径が 13.8cm、厚みが 1.9cm、接合部の長さ 0.8cm、外径が 9.5cm、土管が筒の厚み 0.5cmを測る円筒状のものである。器表面は近世瓦同様に、黒く炭素付着がなされている。上部の接続部の器表面より一段落とし、1 cmほどのホゾ状のでっぱりが巡る。この土管が4個体列となっていた。

器内には淡灰色の付着物が多く見られ、尿素分の付着と思われる。このことから汚水を流していたものであろう。

[A-2-S005]

この遺構は、調査区南側の調査区域外の部分から内部 S001 へ向けて1度の傾斜で落ちていく。確認した幅は約 70cmほどで、長さ 5 m強の長さを確認した。表面を粘土で貼り、硬くしまっていることから道路跡と考える。時期については、上部の出土遺物から近代の当初前後と考える。調査区の南端付近に一見階段状の石組みがあり、その下から北側に向かって緩やかに傾斜していく。先は、S001（暗渠排水遺構）の裏込め掘削によって切られている。道路面と考えられる面は、よくしまり、ほとんど石などを含まない粘土状の土で覆われている。この上面には、遺物がわずかに検出できたが、ほとんどこの遺構の上の攪乱から出土する明治以降の陶磁器類などに限られていた。

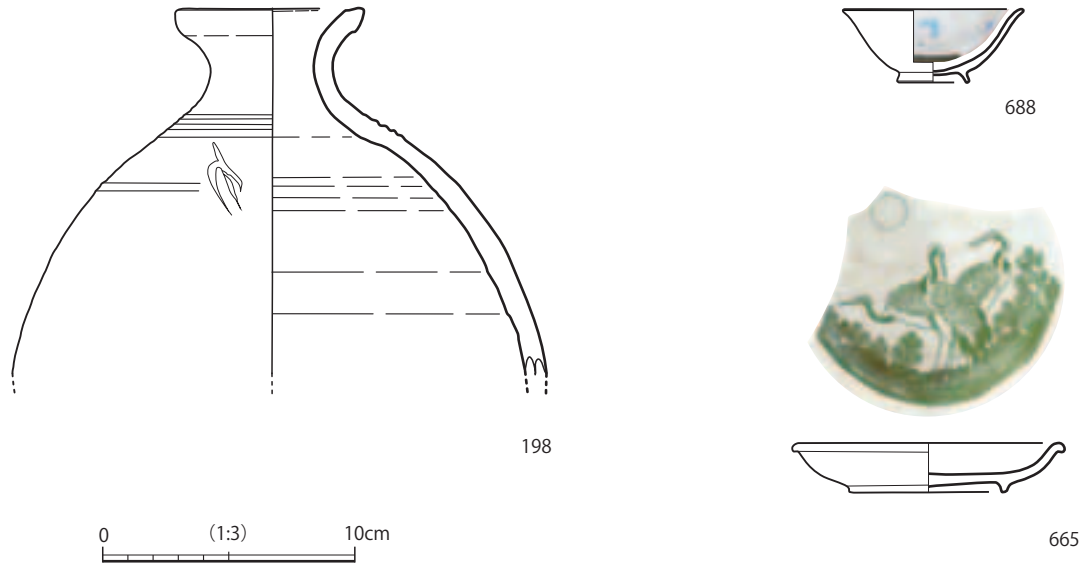


Fig.66 S001 (暗渠) 出土遺物実測図 S=1/3

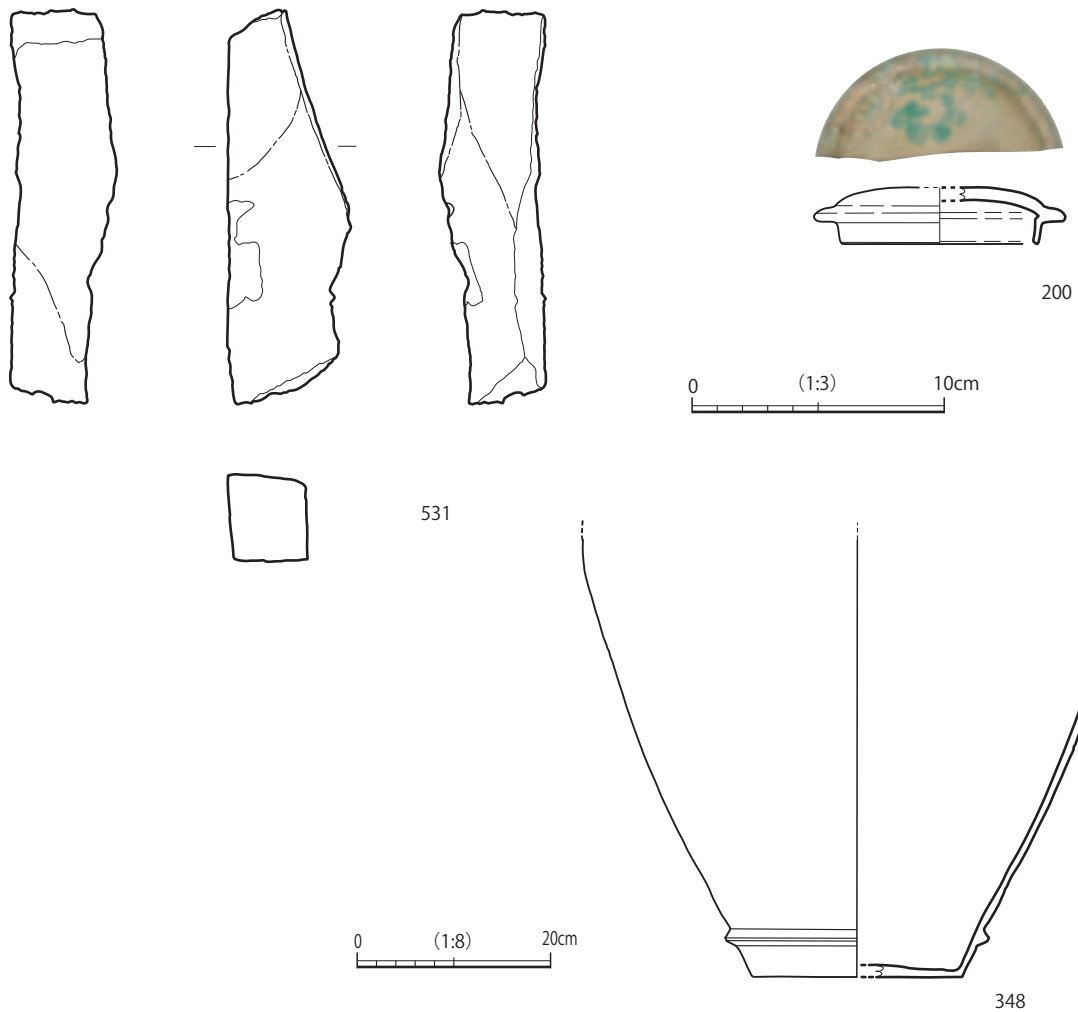
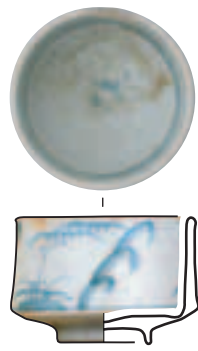
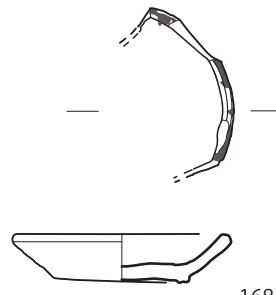


Fig.67 S003・石垣東裏込め出土遺物実測図



695



168

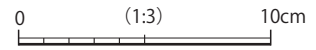
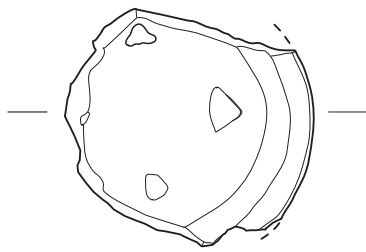
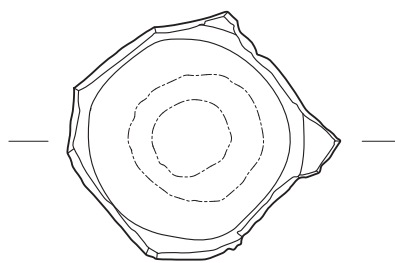


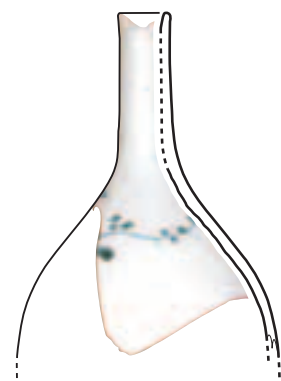
Fig.68 S005 出土遺物実測図 S=1/3



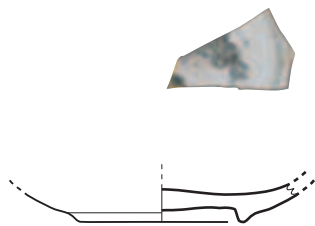
176



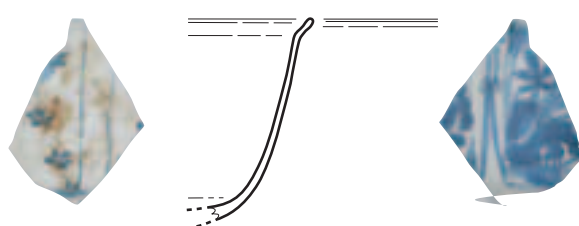
175



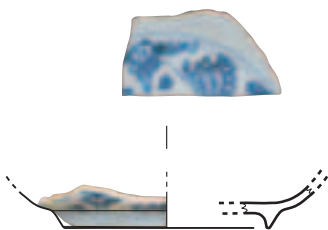
667



669



666



668

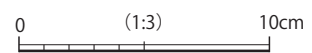


Fig.69 H-36G 出土遺物実測図 S=1/3

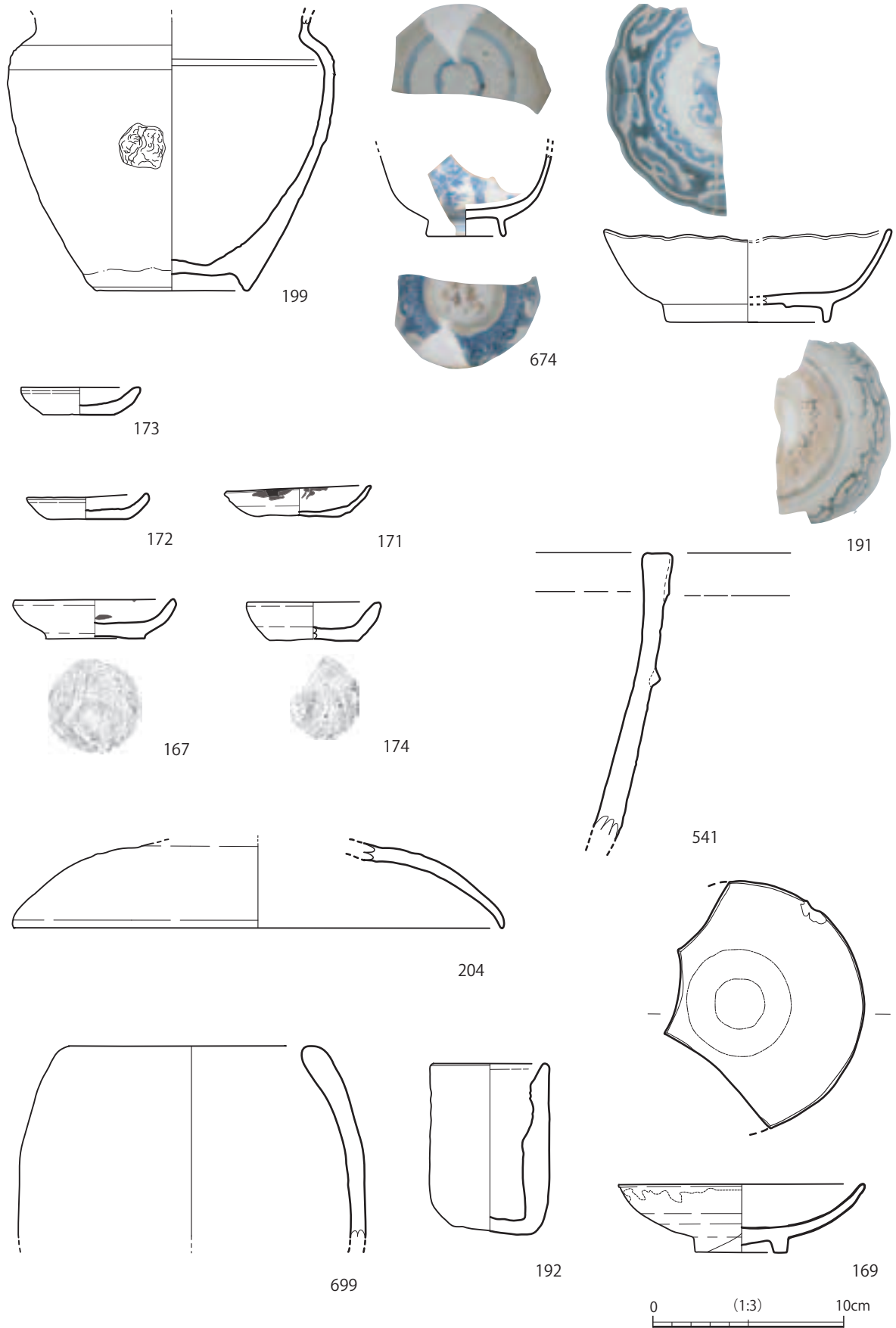


Fig.70 G・I-34・H-34~35G 出土遺物実測図 S=1/3

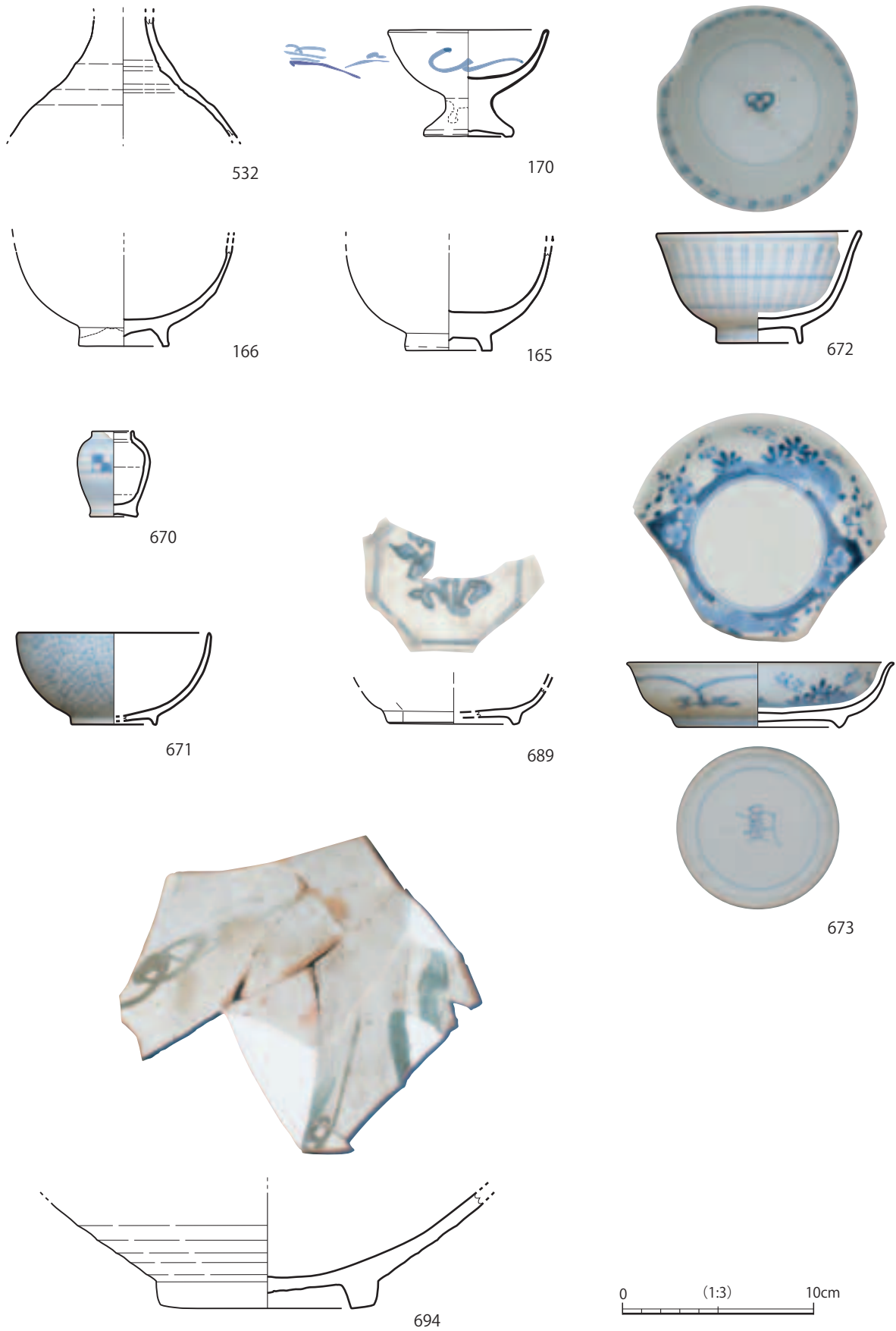


Fig.71 H-35G 出土遺物実測図 S=1/3

PL.37 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺構写真



S001 検出状況 (1)



S001 検出状況 (2)



S001 天井石小口に残る朱書き文字



S002 完掘状況



S003 遺物出土状況

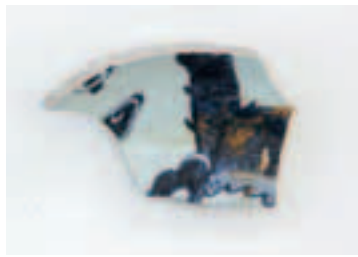


S004 検出状況

PL.38 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺物写真(1)



215 S001 出土



492 S001 出土 (内器面)



486 S001 出土



214 S001 出土



492 S001 出土 (外器面)



198 S001 出土



491 S002 出土 (内器面)



488 S002 出土 (内器面)



489 S002 出土 (内器面)



491 S002 出土 (外器面)



488 S002 出土 (外器面)



489 S002 出土 (外器面)



485 S002 出土 (内器面)



487 S002 出土



490 S002 出土



485 S002 出土 (外器面)



513 S002 出土



348 S003 出土

PL.39 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺物写真 (2)



300 S004 出土



217 S004 出土



216 S004 出土



168 S005 出土



171 H-35 出土



173 H-35 出土



167 H-35 出土



174 H-35 出土



172 H-35 出土



165 H-35 出土



166 H-35 出土



170 H-35 出土



169 H-35 出土 (内器面)



532 H-35 出土



192 H-35 出土



169 H-35 出土 (外器面)



204 H-35 出土



199 G-34 出土

PL.40 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺物写真 (3)



175 H-36 出土 (内器面)



176 H-36 出土 (内器面)



191 I-34 出土 (内器面)



175 H-36 出土 (外器面)



176 H-36 出土 (外器面)



191 I-34 出土 (外器面)



200 石垣東裏込め出土



531 S003 出土

Tab.27 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺物観察表 (1)

図版 番号	編年 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整	色調		胎土	焼成	備考	
							口径	底径		内面	外面				
39	70	165	A-2	陶器	碗	H-35	—	4.4	—	Hue5Y6/1 灰	Hue5Y6/1 灰	混入物なし。	良好	高台部砂目。	
39	70	166	A-2	陶器	丸碗	H-35	—	4.6	—	Hue7.5YR8/1 灰白	Hue7.5YR8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好		
39	69	167	A-2	土師器	灯明皿	H-35	8.2	5.0	2.0	Hue7.5YR7/6 黄	Hue7.5YR7/4 灰白	Hue7.5YR7/4 灰白	1mm以下の黒石、黒雲母、金雲母を含む。	良好	糸切の痕。内外面に煤附着。
39	68	168	A-2	土師器	灯明皿	S005	8.0	5.1	1.9	Hue5YR7/6 黄	Hue5YR7/6 黄	1mm以下の黒、褐色粒を含む。	良好	糸切の痕。口縁部煤附着。	
39	69	169	A-2	陶器	小皿	H-35	12.6	4.8	3.5	Hue7.5GY5/1 黄	Hue5Y6/2 灰白	Hue5Y6/2 灰白	1mm以下の黒色粒を含む。	良好	肥前。内面見込み部蛇の目跡ハズ。
39	70	170	A-2	磁器染付	仏齋器	H-35	(6.0)	4.4	5.5	Hue8/0 灰白 Hue10YR7/2 黄	Hue8/0 灰白 Hue10YR7/4 黄	Hue8/0 灰白 Hue10YR7/4 黄	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。
39	69	171	A-2	土師器	灯明皿	H-35 トンチ	7.5	4.0	1.4	Hue7.5YR8/3 黄	Hue7.5YR8/3 黄	Hue7.5YR8/3 黄	微細な黒、雲母、長石を含む。	良好	口縁部付近に煤附着。糸切の痕。
39	69	172	A-2	土師器	皿	H-35	6.0	4.0	1.3	Hue7.5YR8/4 黄	Hue7.5YR8/4 黄	Hue7.5YR8/4 黄	長石、石英、黒雲母、金雲母を含む。	良好	糸切の痕。
39	69	173	A-2	土師器	皿	H-35	5.8	3.7	1.4	Hue7.5YR8/4 黄	Hue7.5YR8/4 黄	Hue7.5YR8/4 黄	長石、石英、黒雲母、金雲母を含む。	良好	糸切の痕。
39	69	174	A-2	土師器	皿	H-35	6.9	4.6	2.0	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR6/6 黄	Hue7.5YR6/6 黄	長石、石英を含む。	良好	糸切の痕。外面に煤附着。
40	71	175	A-2	陶器	高台付折縁皿	H-36 カクテ	(11.9)	4.2	—	Hue10YR5/2 黄	Hue10YR5/2 黄	Hue10YR5/2 黄	1mm以下の黒色粒を含む。	良好	内面見込み部蛇の目跡ハズ。
40	71	176	A-2	陶器	溝線皿	H-36	(11.2)	3.9	3.1	Hue7.5YR6/4 黄	Hue7.5YR6/4 黄	Hue7.5YR6/4 黄	1mm以下の黒色粒を含む。	良好	内面見込み部胎土目(4ヶ所)
40	69	191	A-2	磁器染付	皿	I-34	(14.8)	(6.2)	4.9	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	混入物なし。	良好	修理痕。内外面に染付。外面見込み部文字。逆状口縁。
39	69	192	A-2	土師器	焼皿	H-35	5.8	4.1	8.8	Hue2.5YR6/8 黄	Hue2.5YR6/8 黄	Hue2.5YR6/8 黄	角閃石、長石、白、黒色粒、1.5mm以下の黒を含む。	良好	外面にへろ描き。
38	66	198	A-2	陶器	瓶	暗葉下位	6.9	—	—	Hue10YR3/3 黄	Hue10YR3/3 黄	Hue10YR3/3 黄	小礫を少量含む。	良好	外面に産前砂附着。
40	69	199	A-2	陶器	壺	G-34	—	7.8	—	Hue5YR2/2 黒	Hue5YR2/2 黒	Hue5YR2/2 黒	微細な白色粒を含む。	良好	外面に包縁。
38	67	200	A-2	陶器	壺	石垣真裏込め	(7.8)	—	—	Hue2.5Y7/3 黄	Hue2.5Y7/3 黄	Hue2.5Y7/3 黄	微細な黒、白色粒をわずかに含む。	良好	
39	69	204	A-2	陶器	壺	H-35	(9.0)	—	—	Hue2.5Y4/1 黄	Hue2.5Y4/1 黄	Hue2.5Y4/1 黄	微細な白色粒を含む。	良好	
38	214	A-2	磁器	盃	暗葉	—	(7.0)	2.6	2.5	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	
38	215	A-2	磁器	盃	暗葉下位	—	(3.5)	—	—	Hue6Y7/1 灰白	Hue6Y7/1 灰白	Hue6Y7/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に包縁。
38	67	348	A-2	瓦質土器	貯蔵器	S003	—	(22.2)	—	HueN1.5/0 黒	HueN1.5/0 黒	HueN1.5/0 黒	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に包縁。
39	485	A-2	陶器	鉢	S002 H-35	—	(27.0)	—	—	Hue5YR3/3 黄	Hue5YR3/3 黄	Hue5YR3/3 黄	微細な白、黒色粒を含む。	良好	内外面に包縁。
38	486	A-2	磁器染付	急須	暗葉	—	(7.0)	—	—	Hue9/0 黄	Hue9/0 黄	Hue9/0 黄	混入物なし。	良好	外面に染付。
38	487	A-2	磁器	小皿	S002	—	(11.0)	—	—	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	混入物なし。	良好	内面見込み部蛇の目跡ハズ。
38	488	A-2	磁器染付	皿	S002	—	(9.0)	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。
38	489	A-2	磁器染付	不明	S002	—	(8.0)	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	内外面に染付。
38	490	A-2	磁器染付	小鉢	S002	—	(15.0)	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	内面に染付。
38	491	A-2	磁器染付	皿	S002	—	(6.8)	—	—	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	混入物なし。	良好	外面見込み部蛇の目跡ハズ。内面に染付。
38	492	A-2	磁器染付	皿	暗葉	—	(18.0)	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。高台部輪ハズ。

Tab.28 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺物観察表 (2)

図版 番号	探検 番号	調査区 番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整			色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
39	70	532	A-2	陶器	瓶	H-35	2層	—	—	—	施釉(透明)、ヘケ目	施釉(透明)、ヘケ目	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	良好	外面に模様。
	69	541	A-2	瓦質土器	火鉢	H-35	1-2層	—	—	ナデ	ナデ	ナデ	Hue2.5Y4/1 黄灰	Hue2.5Y7/3 浅黄	良好	外面に染付、白色粒を含む。
	66	665	A-2	磁器	手皿	昨葉下位	黒色粘土層	(10.3)	(6.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	1mm以下の傷、白色粒を含む。
	71	666	A-2	磁器染付	鉢	H-36	—	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内面に色絵。	
	71	667	A-2	磁器染付	瓶	H-36	2層	2.1	—	施釉(透明)、回転ナ デ	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付(草花文)
	71	668	A-2	磁器染付	皿	H-36	3層	—	(8.2)	施釉(透明)	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付。
	71	669	A-2	磁器染付	皿	H-36	2層	—	(6.6)	施釉(灰白)	施釉(灰白)	施釉(灰白)	Hue2.5Y8/2 灰白	Hue2.5Y8/2 灰白	良好	内面見込み部輪染付。
	70	670	A-2	磁器染付	小壺	H-35	2層	(2.2)	2.4	4.5	回転ナデ	施釉(灰白)、回転ナ デ、ケズ刈	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	外面に染付。
	70	671	A-2	磁器染付	碗	H-35	2層	(10.0)	(4.4)	4.8	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	外面に染付(水梨文)
	70	672	A-2	磁器染付	碗	H-35	2-3層	10.6	4.3	5.9	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付。
	70	673	A-2	磁器染付	小皿	H-35	2層	(13.7)	8.4	3.4	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	良好	内外面に染付。
	69	674	A-2	磁器染付	碗	H-34	2層	—	(4.0)	—	施釉(灰白)、回転ナ デ	施釉(灰白)	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	良好	内外面に染付。外面見込み部文字。焼漏痕?
	66	688	A-2	磁器	小杯	昨葉下位	黒色粘土層	(7.0)	(1.7)	2.9	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内面に色絵。
	70	689	A-2	磁器染付	手皿	H-35	2-3層	—	6.6	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	八角皿。高台部砂付着。内面見込み部染付。
	70	694	A-2	陶器	鉢	H-35	2-3層	—	(11.2)	—	回転ナデ、ヘケ目、 回転ヘケズ刈	施釉(灰白)	Hue5YR6/8 黄	Hue5YR6/8 黄	良好	内面見込み部砂目(3分所)内面に輪(青緑灰、 灰ナリ)を用いて模様が描かれている。
	68	695	A-2	磁器染付	小碗	S005	—	6.8	3.5	5.0	施釉(明青灰)	施釉(明青灰)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付。
	69	699	A-2	土師器	短炉	H-35	2層	(12.6)	—	—	ナデ	ナデ	Hue10YR7/3 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	良好	微細な白色粒を含む。

Tab.29 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺物観察表 (3)

図版 番号	探検 番号	調査区 番号	種別	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			色調		胎土	焼成	備考
						全長	玉縁長	高さ	瓦当径	瓦当厚	文様区径	内面	外面			
38	513	A-2	丸瓦	S002	—	—	—	—	—	—	—	Hue10YR6/1 褐灰	Hue2.5Y5/1 黄灰	5mm以下の白、褐色粒を含む。	良好	側面全体に漆喰付着。

Tab.30 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺物観察表 (4)

図版 番号	探検 番号	調査区 番号	種別	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			色調		胎土	備考	
						全長	口径	高さ	内面	外面	内面	外面	内面			外面
38	216	A-2	瓦質	S004	—	—	—	14.2	9.2	—	ナデ	ナデ	Hue2.5Y2/1 黒	Hue2.5Y2/1 黒	良好	内面に付着物。
39	217	A-2	瓦質	S004	—	—	—	13.4	9.2	—	ナデ	ナデ	Hue2.5GY2/1 黒	Hue2.5GY2/1 黒	良好	内面に付着物。
39	300	A-2	瓦質	S004	—	—	—	13.8	8.8	—	ナデ	ナデ	Hue4/0 灰	Hue4/0 灰	良好	内面に付着物。

Tab.31 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺物観察表 (5)

図版 番号	探検 番号	調査区 番号	種別	出土地点	層位	寸法(cm)		備考
						長さ	幅	
40	67	A-2	石器	S003-5	—	3.7	4.5	

Tab.32 花岡山・万日山遺跡群 A-2 調査区遺物観察表 (6)

図版 番号	探検 番号	調査区 番号	種別	出土地点	層位	種類	寸法(cm)	色調	備考
96	602	A-2	泥面子	S003	人形	S003	2.1	2.2	Hue10YR6/4 におい黄緑 裏面に墨書。
96	603	A-2	泥面子	S003	人形	S003	2.8	1.9	Hue10YR7/3 におい黄緑
96	604	A-2	泥面子	S003-1	人形	S003-1	3.8	2.1	Hue7.5YR7/6 橙
96	605	A-2	泥面子	S003~006	人形	S003~006	3.2	1.9	Hue10YR7/3 におい黄緑
97	621	A-2	泥面子	H-35	1層	H-35	3.6	2.0	Hue7.5YR6/6 橙

第7節 花岡山・万日山 A-3 調査区

1 調査区概要

この調査区は、橋脚 P-183 の基礎が設置される部分に当たる。二次調査の際に調査した No.7 トレンチと No.6 トレンチをこの調査区内に含む。

掘削予定範囲の内、調査区として設定する部分は、西側は新幹線高架橋を走る J R 鹿児島本線への安全面を考慮して鉄道線路から 5 m ほど離れた。また、橋脚工事に伴う矢板打込を行う際に遮蔽物撤去のため地下を浚うので遺跡への影響が及ぶと考え、工事担当部局と協議し調査範囲を北側で 2 m、南側で 2 m、東側で 2 m 外側へ広げて表土剥ぎを行った。その結果、調査区は長軸方向で約 19 m、短軸方向で約 10 m 弱で、面積が約 180㎡となった。

調査地点は、世界測地系では、X=-22190、Y=-28636 を中心とした位置にあたる。調査区をグリッドで示せば、北端は、F・G・H・I-28 グリッドから南端は F・G・H-24 グリッドの範囲となる。

この調査区では、明治 24 年に熊本まで線路を敷設した九州鉄道によって築造されたと考えられる石垣列と、その間の鉄道敷きが調査区の半分を占めている。石垣は主に二列になっており、その間に参道跡が確認された。さらに、この石垣列の西側に、石垣から一段低い位置に側溝と考えられる別の石垣列が確認できた。この状況は、A-3 調査区の南側にある A-4 調査区、A-5 調査区でも確認できる。

その石垣を境として、東側には堀の名残である落ち込みがあり、二次調査の際に No.6 トレンチで土層を確認をしたところ、東側に落ち込んでいく状況が確認できた。また、中心の二列の石垣の間には、鉄道の基盤整地層の下に妙解寺まで続く参道の跡を確認した。さらにその参道には、近世から明治にかけての遺物を含む土坑が数多く検出できた。

A-3 調査区の一つの特徴であるが、基本層序として砂層が調査区の大部分に渡って検出されたことが挙げられる。この層の存在は、参道にも多くの影響を与えたと推定できる。その一方で、調査区西側には砂質ながら粘性を帯びた土層が存在し、そこからは弥生時代や古墳時代の遺物が混在した状態で出土した。これらの層の特徴は、この地が旧河川の影響で成立した広域の扇状地でそれが形成される中で成立していった地形であることを示している。

この地質上の特徴のため、土坑として検出した遺構の多くで何層にも薄く重なった層序が観察できた。これは、窪んだ道路面を何回にもわたり補修を行ったためと考えられる。

2 遺構と遺物

(1) 近世以降の遺構と遺物

近世以降の遺構の配置図は、Fig.72 に示す。先に述べたように鉄道に伴う石垣列とその間に挟まれた参道跡、土坑群、石垣西側の土坑などがある。

[鉄道石垣] (Fig.73)

この遺構は、本調査区の半分以上の場所を占め、南北方向に約 20 m の長さまで検出した遺構である。この石垣は北から東側に振れた方向 (N-15° -E) で築かれている。

この遺構が築かれた当時は、江戸期の堀がまだ残っていたものと思われる。この調査区では、他の調査区で見られない状況があったのでそれを記しておく。

石垣の積み方などは、大部分が他の調査区とさほど変わらないが、調査区北側に向かって、西側の石垣でやや変化が見られる。それは、他の場所では通常補修はほぼ同じ場所になされている。ところが、指摘した北側部分では、まず裏込め石の入る範囲が他の場所の倍近くになっている。仔細に観察すると一度構築され

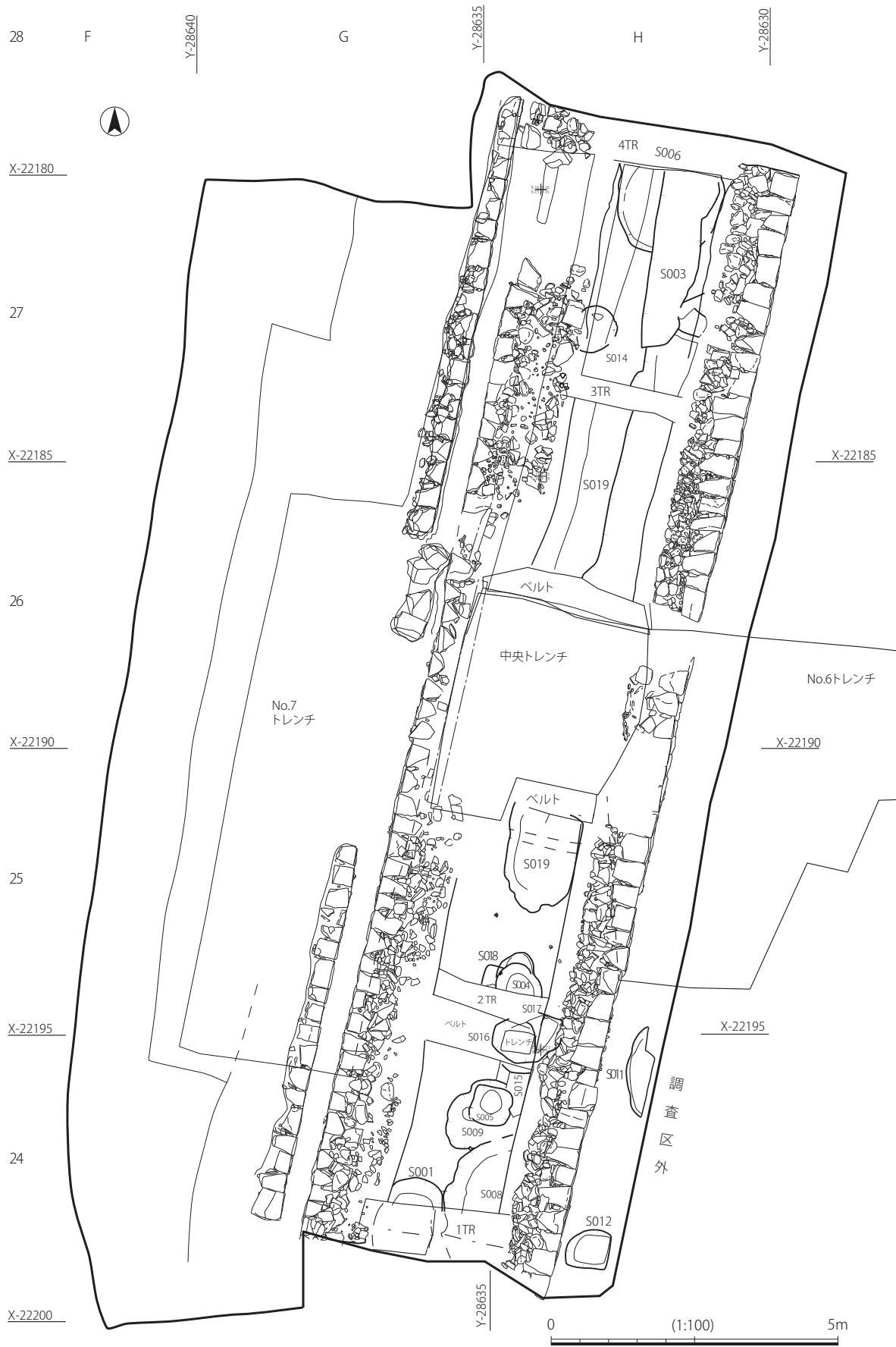


Fig.72 調査区内遺構配置図 S=1/100

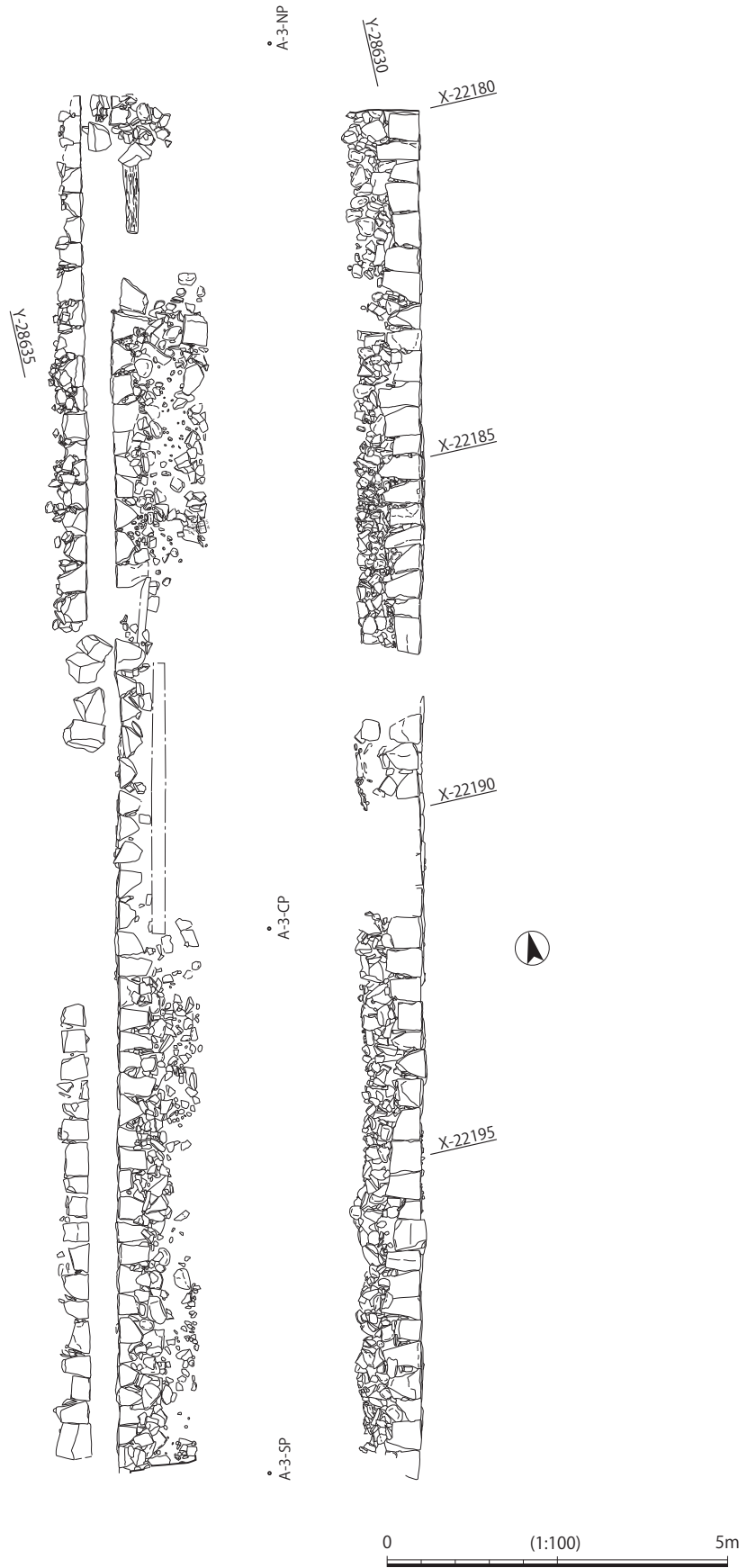


Fig73 石垣平面実測図 S=1/100

た後に再度石垣自体の位置をずらしたように見えることである。また、石垣そのものもなくなっているところもあるがそこには木材がはめ込まれている。裏込め中に石垣の石材らしきものも入る。さらにその南側には明らかに最近のコンクリートによる補強工事が行われた痕跡がある。微妙に方向の修正を行ったようでもある。これは、この付近から高麗門踏切付近にかけて線路が大きくカーブを描いていたため、徐々にカーブをつけるために修正した可能性がある。さらには、この調査区の基本層序として砂層があることを述べたが、その影響で機関車等の重量化や自然災害による地盤の緩みで4石垣の崩壊があったため、その補強があったことを示すものであろうか。今回の報告では、古い鉄道関係の資料まで当たっていないため推定のみでここはとどめておく。

[A-3-S001]

この遺構は、調査区南側のG-24グリッドで検出した土坑である。鉄道石垣と1トレンチにより掘削され、さらに一部S008によって切られているため、全体像は不明であるが、残存している状況で見れば、円形状を呈していた可能性がある。現状では南北長が0.53 m、東西長が0.93 mを測る。深さは確認面から58cmほどを測る。(Fig.76)

埋土は、遺構上部は薄く堆積した層が何層にも重なっている。下部は、厚い層が堆積している。そのため、上層部は、参道の窪みを補修した痕跡といえる。補修しては窪み、そこをまた補修する。という状況が、この土層断面で確認できたといえる。

出土遺物は、全体的に新しい時代のもが多く、幕末から明治にかけての陶磁器が多く出土している。その中でやや古めなのが、163の目板瓦である。128は陶器の小碗で、内面見込み部分に三足のハマが残るものであった。228は磁器染付の碗で、内面見込み部分に蛇の目釉剥ぎがみられた。17世紀前半のものかと思われる。

[A-3-S003]

この遺構は、H-27グリッドで検出した溝遺構である。S019によって切られ、S006を切る。また、4トレンチにより掘削されている。北側は調査区外にのびるようだが、今回確認できた全長は3.19 m、幅1.00 mを測る。深さは、掘りきることができなかったので正確には確認できなかったが、4トレンチ土層断面にかかる位置では深さは26cmであった。この4トレンチの断面で見ると、S003は薄い層の重なりではなく、参道の補修は確認できなかった。

この遺構からは、人頭大の大きな石が多く出土した。出土状況としては、埋土の中に含まれている状態で人為的に並べられたというような状況ではなかった。また、その石の間に陶磁器類が含まれていた。224の陶器播鉢や497の陶器甕などが出土している。134は見込み部に蛇の目釉剥ぎのある陶器の碗で、17世紀前半かと思われる。147は口縁部から胴部が僅かに残るぐらいだが、薄い透明の緑の釉に白化粧で円が描かれている。高田焼の水差しではないかと思われる。497は18世紀代のものかと思われる。この遺構からは、瓦が1点出土している。軒平瓦で、三葉文が描かれていた。

[A-3-S004]

この遺構は、H-25グリッドで検出した土坑である。この遺構は、S015とS018によって切られている。この遺構と両遺構との前後関係は不明である。また、2トレンチによっても掘削されている。残存しているのは、遺構全体のわずかな部分であり、遺構の全体の形状は不明である。残された範囲で計測すると、東西方向で70cm、南北方向で77cmほどが残り、掘削された深さは29.4cmほどである。

埋土の堆積状況は、きれいなレンズ状堆積が見られた。この遺構の土層断面は、2トレンチの断面で確認しているが、2トレンチの南北両断面でやや異なった土層になっている。2トレンチの南側断面では、S004の東側の立ち上がり部分は確認できなかった。

この遺構が極わずかの残存状況であるため出土遺物は少なく特定の時期は分からなかった。ただ、江戸期のものが出土している。

[A-3-S005]

この遺構は、G・H-24 グリッドに位置する土坑で、S009 及び S007 を切っている。規模は、南北 0.68 m、東西 0.68 m、深さ 39.15cmを測る。

出土遺物は少ないが、主に陶磁器類が僅かに出土している。土層断面の記録が不十分のため堆積状況はわからず、遺物も少なく時期が判断できず、用途不明の土坑である。

[A-3-S006]

この遺構は、H-27 グリッドに位置する土坑である。S003 に切られ、4 トレンチにより掘削されている。検出時の残存部は、東西 1.49 m、南北 1.70 m、深さ 24.05cmを測る。

この遺構についても、埋土は遺構上部では薄い層が重なっており、下部は厚い層で構成されている。そのため、S006 も参道の修復痕跡を残すものと思われる。

出土遺物は、陶磁器や瓦が出土している。瓦は 138 の巴紋の軒丸瓦が出土している。142 は磁器染付の徳利で、17 世紀後半かと思われる。

[A-3-S007]

この遺構は、H-24 グリッドで検出した土坑である。S005 の下で検出した。この遺構は、検出はしたものの掘削することができなかった。規模は確認面で、長径 0.77 m、短径 0.35 mを測る。

[A-3-S008]

この遺構は、G-24 グリッドで検出した土坑である。S001 に隣接し、一部 S001 を切っている。また、S009 を切っている。この遺構も 1 トレンチにより掘削されているので、正確な形状はつかめない。ただ、確認できた部分を見ると、土坑というよりも溝状遺構のような印象も受ける。規模は確認面で、長径 1.26 m、短径 0.89 m、深さ 32.7cmを測る。

土層の堆積状況を見ると、やはり上部は薄い層が何層も重なっており、下部はやや厚い層が重なっている。この遺構も参道の補修痕が顕著に見られた。

出土遺物は、やはり少ないのだが、底部に糸切り痕がみられる土師器が出土している。158 は陶器の挿鉢で、口縁部から胴部の一部が残りすり目も残っていた。17 世紀中頃のものかと思われる。149 は磁器染付の手塩皿で 18 世紀後半のものかと思われる。

[A-3-S009]

この遺構は、G-24 グリッドで検出した土坑である。S008 及び S005 に切られている。確認できた大きさは、南北 1.4 m、東西 0.52 mで深さは 46cmである。堆積状況は確認できていないが深さや大きさはほかの土坑とさほど変わらず、確認位置も参道の中なので上部には参道の補修痕があったのかもしれない。

出土遺物は、陶磁器が中心で 162 のような大きな唐津系の鉢の破片で、内外面に白化粧によるハケ目や茶の釉でダイナミックな絵の描かれたものもある。また、157 は磁器染付の碗片で 17 世紀のものかと思われる。

[A-3-S011]

この遺構は、H-24 グリッドで検出した土坑である。確認面での大きさは、南北 1.4 m、東西 0.4 m、深さ 0.1 mであった。他の土坑に比べるとやや浅めの土坑である。しかし遺構のほとんどは調査区外へと伸びるようで、遺構の全容は全くつかめなかった。

出土遺物は、新しい時期のものがほとんどで、近代の遺構であろうと考えられる。

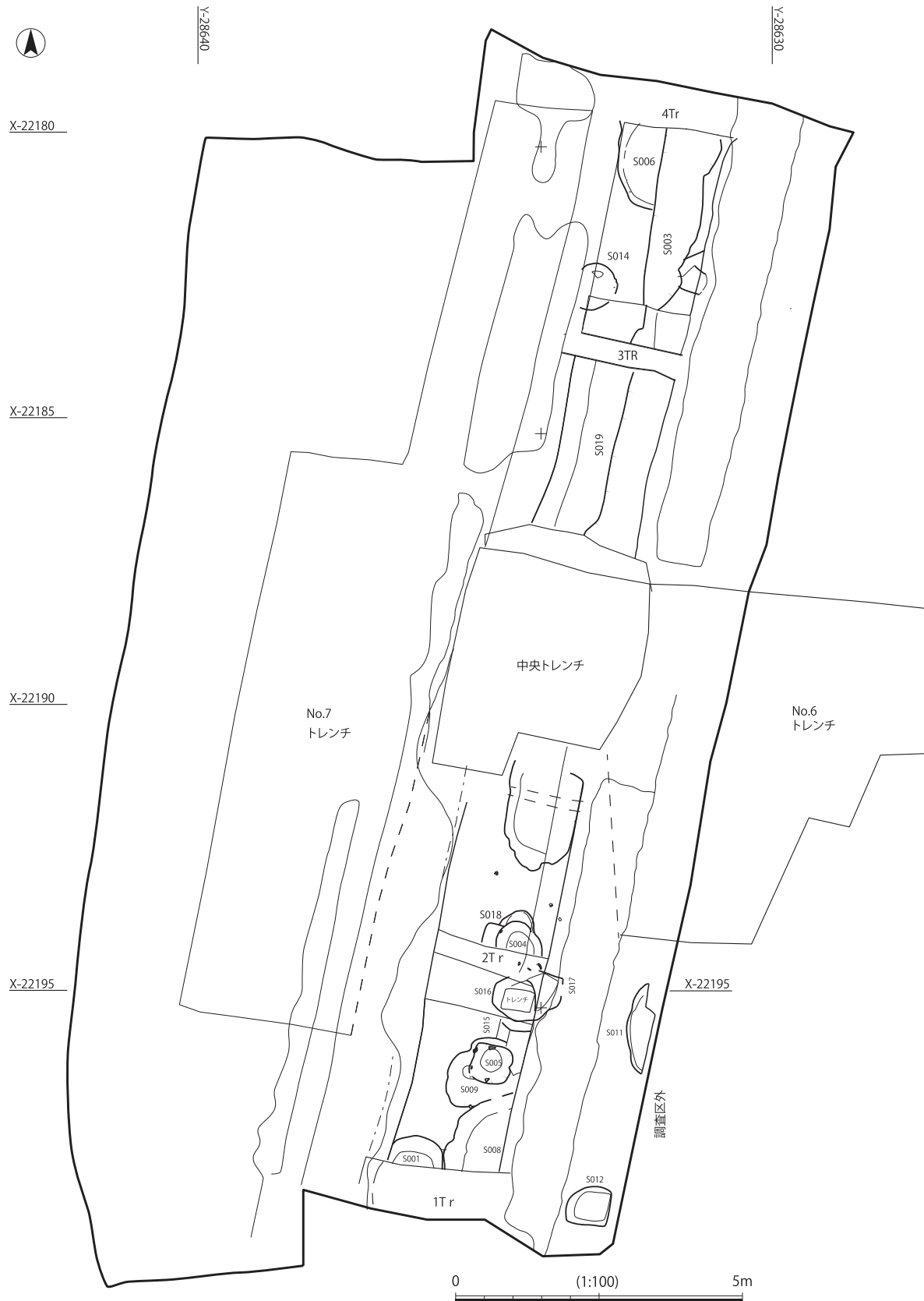
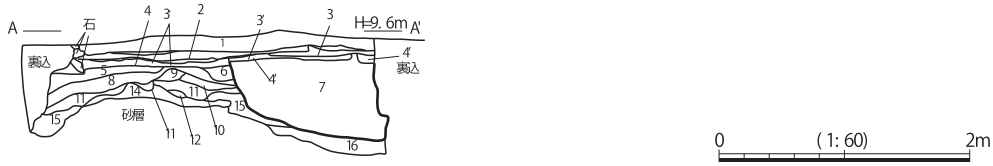


Fig.74 A-3 調査区遺構配置図 S=1/100

中央トレンチ北側壁面土層断面図



中央トレンチ土層註記

- 1層：Hue10YR3/4(暗褐色土);しまり、粘質有り。シルト質埋土に、礫、炭化物、土器、瓦片等が多く混ざる。
- 2層：Hue10YR3/3(暗褐色土);しまり有り、粘質弱い。シルト質埋土に砂、炭化物、礫、にぶい黄橙ブロックを含む硬くしまった埋土。道路の硬化面一層目。
- 3層：Hue10YR3/2(黒褐色土);しまり、粘質有り。シルトと細砂が混ざった埋土。炭化物、礫を含む。
- 3'層：Hue10YR3/1(黒褐色土);しまり、粘質有り。細砂の層で礫を含む。
- 4層：Hue10YR3/2(灰黄褐色土);しまり、粘質有り。シルト質の埋土で粘土塊、炭化物、砂を含む。硬くしまった埋土。道路の硬化面二層目。
- 4'層：Hue10YR3/4(暗褐色土);しまり、粘質有り。シルト質に細砂、粘土塊が混ざる硬くしまった埋土。4とセットで道路の硬化面。
- 5層：Hue10YR3/2(黒褐色土);しまり、粘質有り。シルト質に細砂が混ざる埋土。礫、土器片、炭化物、粘土塊、褐色シルトが含まれる。
- 6層：Hue2.5Y3/3(暗オリーブ土);しまり有り、粘質無し。細砂層に粘土塊が混ざる。
- 7層：Hue10YR3/2(黒褐色土);しまり、粘質有り。細砂、粘性シルトが混ざる埋土。礫、土器片、炭化物、粘土塊を含む。酸化鉄が全体的に混ざる。
- 8層：Hue10YR3/3(暗褐色土);しまり、粘質有り。シルト質の埋土で礫、炭化物、明褐色シルトが混ざる。酸化鉄を層全体に含み赤味がかっている。
- 9層：Hue10YR4/4(褐色土);しまり、粘質有り。シルト質の埋土で酸化鉄を含む。
- 10層：Hue10YR3/4(暗褐色土);しまり、粘質有り。シルト質埋土。礫、褐灰、明褐色シルト、炭化物が混ざる。
- 11層：Hue10YR3/3(暗褐色土);しまり、粘質有り。シルト質の埋土。粘土塊、礫、砂が混じる。
- 12層：Hue10YR3/4(暗褐色土);しまり有り、粘質無し。シルト質の土と砂が混ざった埋土。
- 13層：Hue2.5Y3/3(暗オリーブ土);しまり有り、粘質無し。14にシルト質の土と酸化鉄が混ざる埋土。
- 14層：Hue2.5Y3/3(暗オリーブ土);しまり有り、粘質無し。
- 15層：Hue5P2/1(紫黒土);しまり有り、粘質無し。マンガンが層全体に含まれる砂層。
- 16層：Hue10YR2/1(黒土);しまり有り、粘質無し。細砂層。7との境に酸化鉄を含む。

A-3 調査区参道西側断面図(北半分)

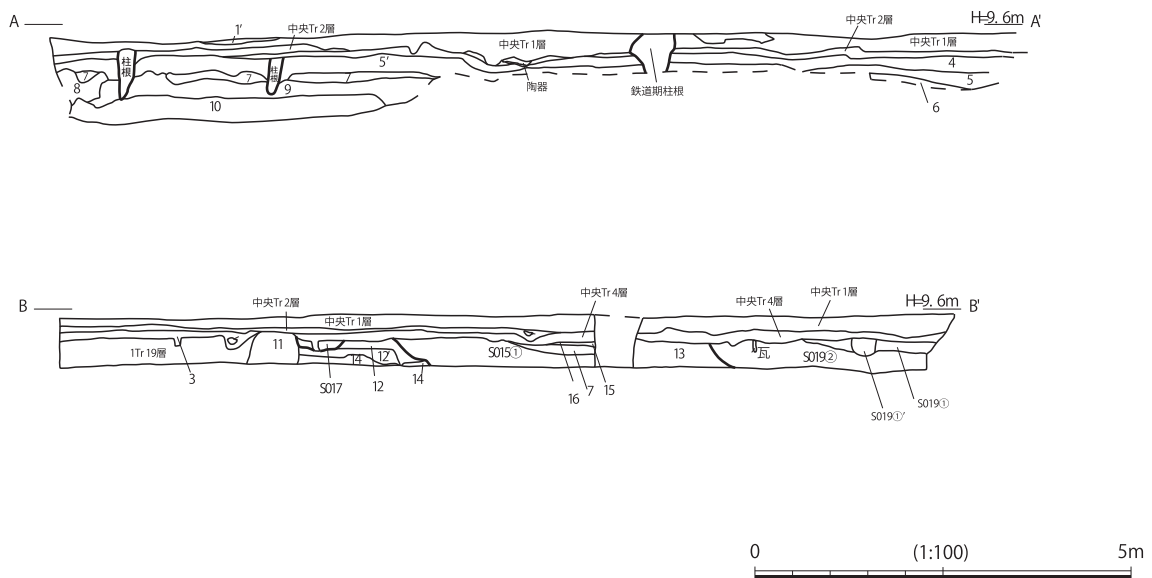


Fig.75 中央トレンチ土層断面図 S=1/60
参道土層断面図 S=1/100

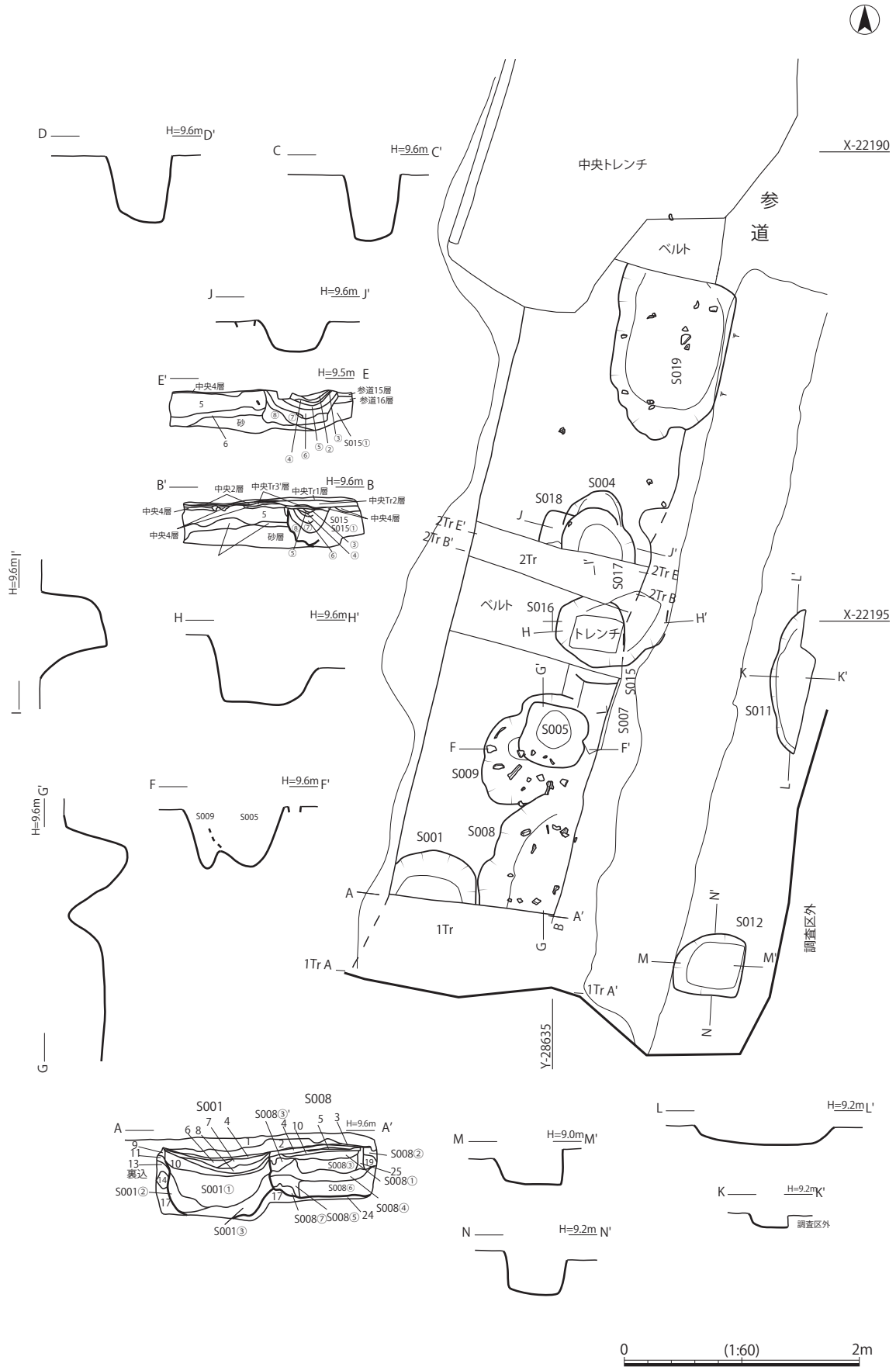


Fig.76 S001・004・005・007・008・009・010・011・012・015・016・017・018 平面・断面実測図及び参道遺物出土状況図 S=1/60

参道土層註記 (Fig.75 A-A' B-B')

- 1'層：1層より砂質が強く、礫、炭化物を含む。
- 3層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；しまりあり、粘性弱い。シルト質の土に粘土をブロック、炭化物、礫を含む硬くしまった土。道の硬化面の可能性有り。
- 4層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまりあり、粘性弱い。シルト質の土。粘土塊、炭化物、砂を含む。
Hue10YR4/2 灰黄褐色土
- 5層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土に砂、礫、粘土ブロックを含む。
- 6層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土に礫、粘土ブロック、瓦片が含まれる。
- 7層：Hue7.5YR4/6（褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土で、硬くしまった暗褐色シルト塊、礫を含み、明褐色の粘性の強いシルトが混ざる。
- 8層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。硬くしまったシルト質の土。礫、酸化鉄を含む。
- 9層：Hue10YR4/6（褐色土）；しまりあり、粘性弱い。シルト質の土に硬い暗褐色シルト塊が多く含まれる。
- 10層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ土）；しまり、粘性あり。細砂の硬くしまった土。礫、黄褐色の砂が混ざる。

参道東側註記

- 12層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。硬くしまり層に混ざりがない。
- 12'層：Hue10YR4/4（褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。褐色シルトに灰黄褐色シルトが混ざる。
- 13層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。硬くしまり黄褐、明褐シルトが混ざり、炭化物を含む。
- 14層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ土）しまりあり、粘性なし。暗オリーブの細砂に灰黄の細砂が混ざった層。
- 15,16層：註記なし。

S001 土層註記 (Fig.76 A-A')

- ①層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質に粘土塊が混ざる土。酸化鉄、炭化物、灰黄シルト、礫を含む。
- ②層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質に粘土と砂が混ざる土。礫、炭化物を含む。
- ③層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルトと粘土の土。炭化物、明褐色礫、酸化鉄を含む。

S004 土層註記 (Fig.76 B-B' E-E')

- ①層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。礫、炭化物を多く含む。
- ②層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。礫、砂、ブロック、粘土が混ざる。
- ③層：Hue10YR3/1（黒褐色土）；シルトと細砂の混じる土。礫、炭化物を含む。
- ④層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。細砂にシルトが混ざる土。黄褐色シルトを含む。
- ⑤層：Hue10YR2/1（黒土）；しまり、粘性あり。シルトと細砂の混ざる埋土。礫、炭化物、酸化鉄を含む。

- ⑥層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルトと細砂の混ざる埋土。炭化物、明褐色の礫、酸化鉄を含む。
- ⑦層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質と粘土の埋土。粘性が強い、炭化物、明褐色礫、酸化鉄を含む。

S008 土層註記 (Fig.76 A-A')

- ①層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；しまりあり。粘性弱い。シルト質の土に粘土ブロックが多く混ざり、炭化物、礫を含む。硬くしまった土。
- ②層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。粘土塊、酸化鉄を含む。
- ③層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質に砂が混じる土。礫、炭化物を含む。
- ③'層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルトに砂と粘土塊が混ざった土。
- ④層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質に砂が混ざる埋土。酸化鉄、礫を含む。
- ⑤層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ土）；しまりあり。粘性無し。細砂にシルトが混ざった土。
- ⑥層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土。酸化鉄、礫、黄褐色シルトを含む。
- ⑦層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまりあり。粘性なし。褐灰の粘土と砂シルトが混ざった土。

S015 土層註記

- ①層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土と砂が混ざった土。

1 トレンチ土層註記

- 1層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質に砂、黄褐色シルトブロック粘土塊が混ざり、礫、炭化物、土器片、瓦片等が含まれる。
- 2層：1層とほぼ同じ埋土だが、砂が多く土器片、瓦片がない。
- 3層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまりあり。粘質無し。細砂の層。西南戦争の際の水攻めで堆積したと考えられる。
- 4層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質の埋土に砂、炭化物、礫、にぶい黄橙ブロックを含む硬くしまった埋土。道路硬化面一層目。
- 5層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルトと細砂が混ざった埋土。
- 6層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質に細砂が混ざる埋土。礫、炭化物を含む。
- 7層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質の埋土。礫、酸化鉄、炭化物を含む。
- 8層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質に砂が多く混ざる埋土。酸化鉄を含む。
- 9層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；しまりあり。粘質あり。粘土塊とシルト質の土が混ざった埋土。
- 10層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質の埋土で、粘土塊、砂、炭化物を含む硬くしまった埋土。道路硬化面二層目。

- 11層：Hue10YR3/2（黒褐色土）しまり、粘性あり。シルト質の埋土で礫、酸化鉄、粘土を含む。
- 12層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質の埋土。粘土塊、礫、砂が混ざる。
- 13層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質に砂が混ざる埋土。
- 14層：Hue10YR2/1（黒土）；しまりあり。粘質無し。細砂の砂層。酸化鉄を含む。
- 15層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質に砂が混ざる埋土。酸化鉄、マンガン、礫を含む。
- 16層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質の埋土。礫、褐灰シルトを含む。
- 2トレンチ土層註記
- 1層：Hue10YR4/3（暗褐色土）；しまりあり。粘質あり。シルト質の埋土。赤土。
- 2層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；シルト質の土と砂が混ざった埋土。

[A-3-S012]

この遺構は H-24 グリッドで検出した土坑で、S011 の南側で検出された。確認した規模は、長径 0.73 m、短径 0.66 m、深さ 44.25cmを測る楕円形の土坑である。

S011 同様、遺物の出土は少なかったが新しいものも多く、近代の遺構であろうと考えられる。

[A-3-S013]

この遺構は H-26・27 グリッドで検出した土坑である。S019 を切っている。確認できた規模は、長径 0.40 m、短径 0.46 m、深さ 5.25cmの円型の土坑である。土層堆積状況は確認できていないが、この浅さから推測すると、参道の窪みであろう。たぶん補修をされていたと思われる。

出土遺物は、陶磁器類が多く出土し 153 は 19 世紀の陶器蓋と思われる。

[A-3-S014]

この遺構は H-27 グリッドで検出した土坑である。確認できた規模は、南北 0.83 m、東西 0.65 m 深さ 29.05cmを測る。しかし、遺構西側は、石垣に切られており遺構の全容はわからなかった。

出土遺物で、131 は陶器の鉢で 17 世紀前半のものかと思われる。

[A-3-S015]

この遺構は、H-24・25 グリッドで検出した土坑である。周辺には多くの土坑があり、激しい切り合いがある。S004 と S016 に切られている。確認できたのは、東西 0.58 m、南北 0.13 mを測るも底まで掘りきれていないので深さは確認できなかった。

[A-3-S016]

この遺構は、H-24・25 グリッドで検出した土坑で、切り合い関係は S015 を切り、この遺構の下に S017 が確認できている。周辺は遺構が多く確認できているが位置関係からみると、S004 との切り合い関係もありそうだが、間に 2 トレンチが設定されており切り合い関係は確認できなかった。確認できた規模は、長径 0.74 m、短径 0.59 mで深さは確認できなかった。

[A-3-S017]

この遺構は、H24・25 グリッドで検出した土坑である。切り合い関係は周囲の多くの土坑とあると思われるが、2 トレンチが設定されているため全く確認できなかった。ただ、上下関係にある S016 とは確実に切り合い関係があり、S016 に切られていると思われる。確認できた規模は、南北 0.54 m、東西 0.59 m、深さは 23.75cmを測る。

[A-3-S018]

この遺構は、G25・H25 グリッドで検出した土坑である。この遺構は、S004 に切られ、2 トレンチで掘削されている。確認できた規模は、南北 0.23 m、東西 0.37 mを測る。深さは確認できなかった。

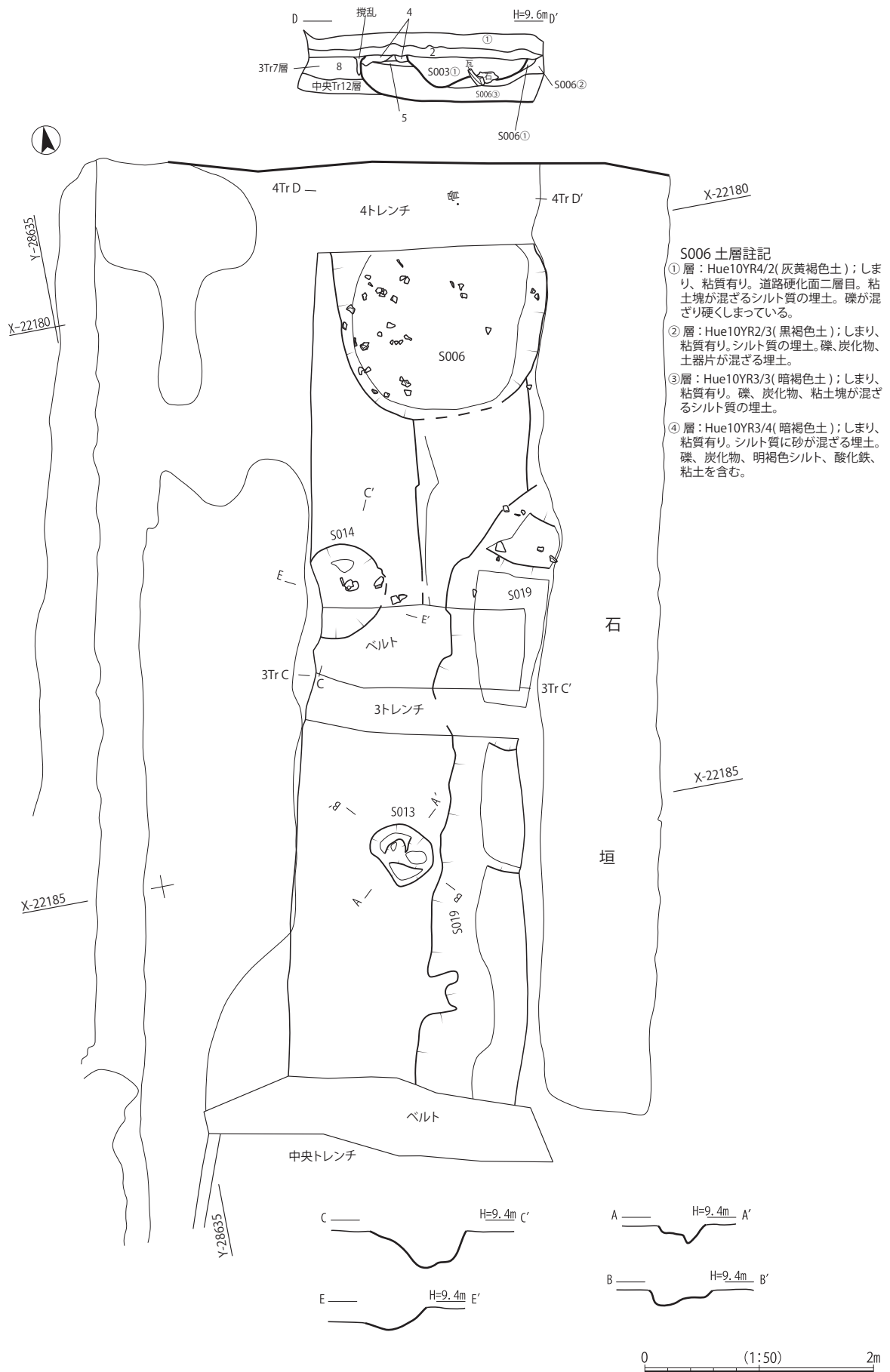
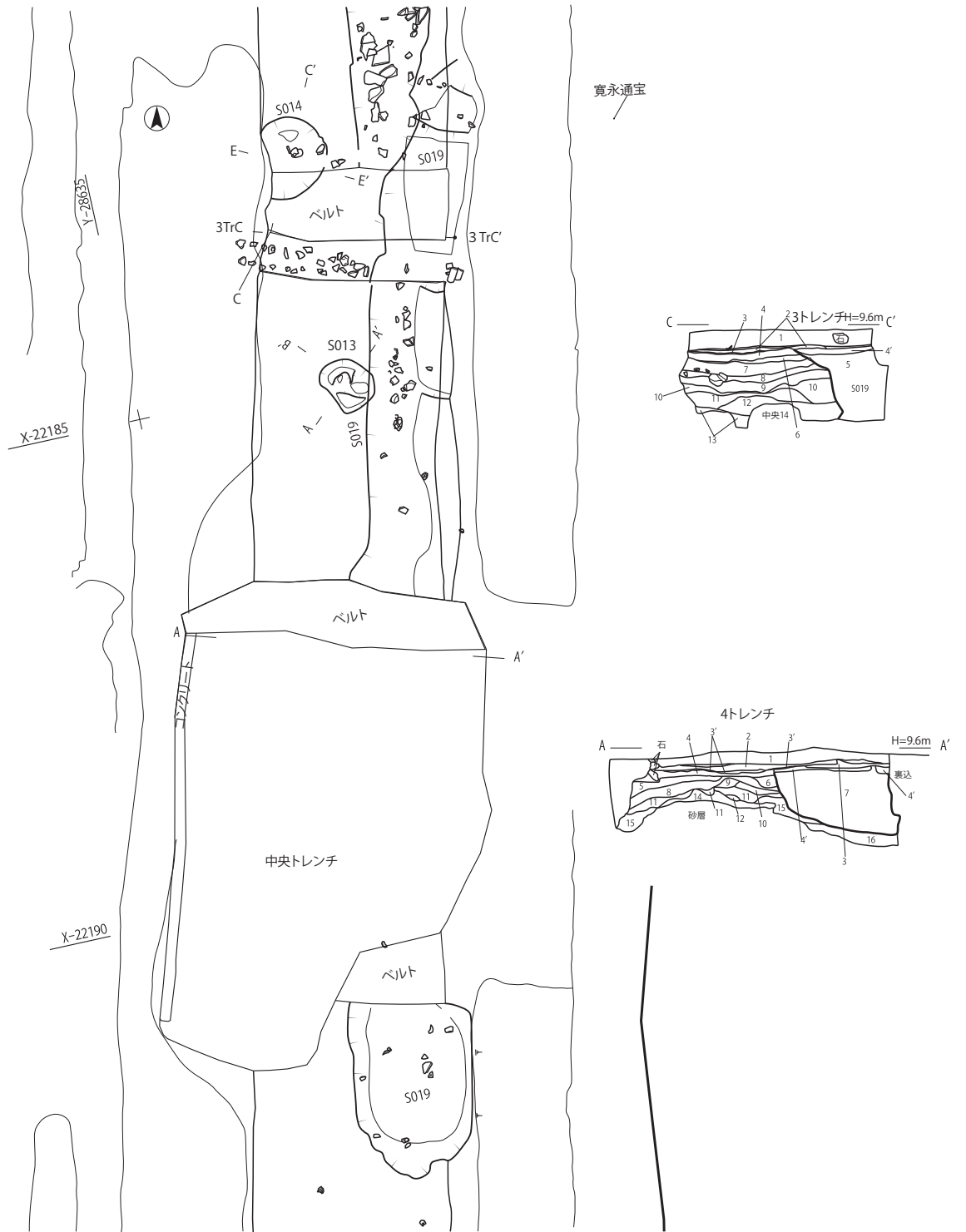


Fig.77 S006・013・014 平面・断面実測図 S=1/50



S019土層註記

- ①層: Hue10YR4/2 (灰黄褐色土) しまり、粘質有り。シルト質の埋土で、粘土塊、砂、炭化物を含む硬くしまった埋土。道路硬化面二層目。
- ②層: Hue10YR3/2 (黒褐色土) しまり、粘質有り。シルト質の土に細砂、粘性シルトが混ざる埋土。礫、土器片、炭化物、粘土塊を含み 酸化鉄が全体に混ざる。
- ③層: Hue10YR3/2 (黒褐色土) しまり、粘質有り。シルト質の土に細砂、粘性シルトが混ざる埋土。礫、土器片、炭化物、粘土塊を含み 酸化鉄が全体的に混ざる。

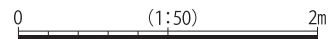


Fig.78 S019 平面・断面実測図 S=1/50

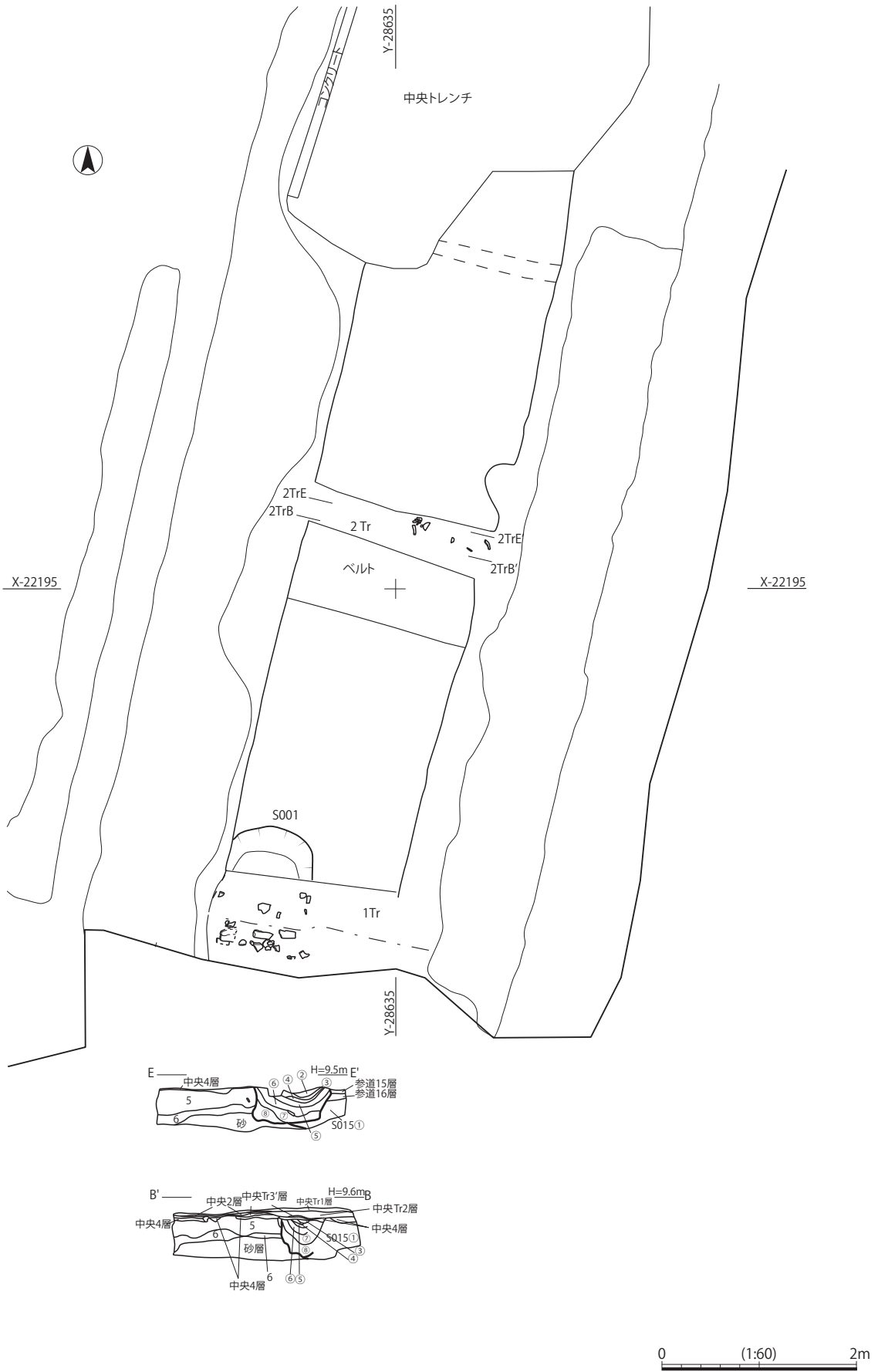


Fig.79 1・2トレンチ実測図 S=1/60

3 トレンチ土層註記

- 1層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質に砂、黄褐色シルトブロック、粘土塊が混ざり、礫、炭化物、土器片、瓦片等が含まれる。
- 2層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまりあり、粘性弱い。シルト質の埋土に砂、炭化物、礫、にぶい黄橙ブロックを含む硬くしまった埋土。道路硬化面1層目。
- 3層：Hue10YR3/1（黒褐色土）；しまり、粘性あり。細砂の層。礫等が少量含まれる。
- 4～5層：S019埋土。
- 6層：Hue10YR4/4（褐色土）；しまりあり、粘性なし。シルト質埋土で炭化物、礫、黄褐色シルトブロックを含む。
- 7層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまりあり、粘性なし。シルト質埋土で炭化物、礫、褐灰シルトブロックを含む。
- 8層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質埋土で礫、土器片、炭化物、明褐色シルトが混ざる。酸化鉄を層全体に含むので赤味がかっている。
- 9層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の埋土で炭化物、礫、土器片、瓦片を含む。
- 10層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の埋土で礫、炭化物を含む。

- 11層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の埋土で、明褐色シルト、礫、炭化物、褐灰色シルトブロックを含む。
- 12層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土に礫、黒色砂、酸化鉄混じりのシルト、褐灰色粘土塊を含む。
- 13層：Hue10YR4/1（褐灰色土）；しまり、粘性あり。粘土塊と砂の混ざった埋土。

4 トレンチ土層註記

- 1層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質に砂、黄褐色シルトブロック、粘土塊が混ざり、礫、炭化物、土器片、瓦片が含まれる。
- 2層：1層とほぼ同じ埋土だが砂が多く、土器片、瓦片を含まない。
- 3層：S003の埋土。
- 4～6層：S006の埋土。
- 7層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質に砂が混ざる埋土。礫、炭化物、明褐色シルト、酸化鉄、粘土を含む。
- 8層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまりあり、粘性弱い。シルト質の埋土で、硬くしまった暗褐色シルトの塊、礫を含む。赤色が強くぼそぼそしている。
- 9層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。シルト質の土と砂が混ざった埋土。

[A-3-S019]

この遺構は、H25～27グリッドで検出した溝遺構である。S003に切られ、2トレンチ、中央トレンチで掘削されている。また、遺構の東側は石垣で切られており全容はつかめていない。規模は確認できた部分で、長さ10.48m、幅0.92m、深さが32.25cmを測る。

出土遺物は多く、145は18世紀後半の磁器染付小碗と思われる。それ以外にも多くの陶磁器類が出土している。

[参道]

この遺構は、鉄道石垣の間で検出した遺構で、調査区の東側半分ほどという広範囲で確認した。鉄道敷き直下の粘土質の土は、石垣の内側全面に張られていたが、それを道路として使用していたようである。本調査区で確認した参道の長さは、南北19.4mである。また、石垣の間で確認した東西の幅は2.7mである。

出土遺物は、道路のためほとんどないが、硬化面の直上に陶磁器が数点出土した。

この調査区では、参道が調査区全体の半分近くを占め、その補修痕とみられる土坑が調査の対象となった。これらの土坑は、規模は様々であったが、共通するのは土層である。深さも、まちまちではあったが、土層の下部は厚い層が堆積し、上部は薄い層が何層にも重ねられていた。道路が窪めばそこに、粘土や砂を敷き押し固め、また道路として使用する。それを繰り返していた痕跡が、今回の調査で確認できたといえる。

出土遺物については、東側の堀跡への落ち込みの層中、鉄道石垣に挟まれた鉄道下層と参道中、12箇所の土坑中を主なものとする。他に攪乱を受けていた西側部分には、弥生時代の遺物がわずかながら含まれていた。遺物を含むこの層は、暗褐色の砂質土で時期幅の広い遺物を含むことから、この包含層が自然災害、もしくは造成などにより持ち込まれたものとする。参道や土坑から出土した遺物は、大部分は土師器、陶器、磁器などであった。数点の瓦も出土はしていたが、棧瓦や目板棧瓦が多くを占める。時期的には新しいものが多いといえる。土師器は、火鉢や焔炉など近代のものに混じって糸切り底部を持つ皿も出土していた。陶磁器は、18世紀から19世紀にかけてのものが多く出土している。

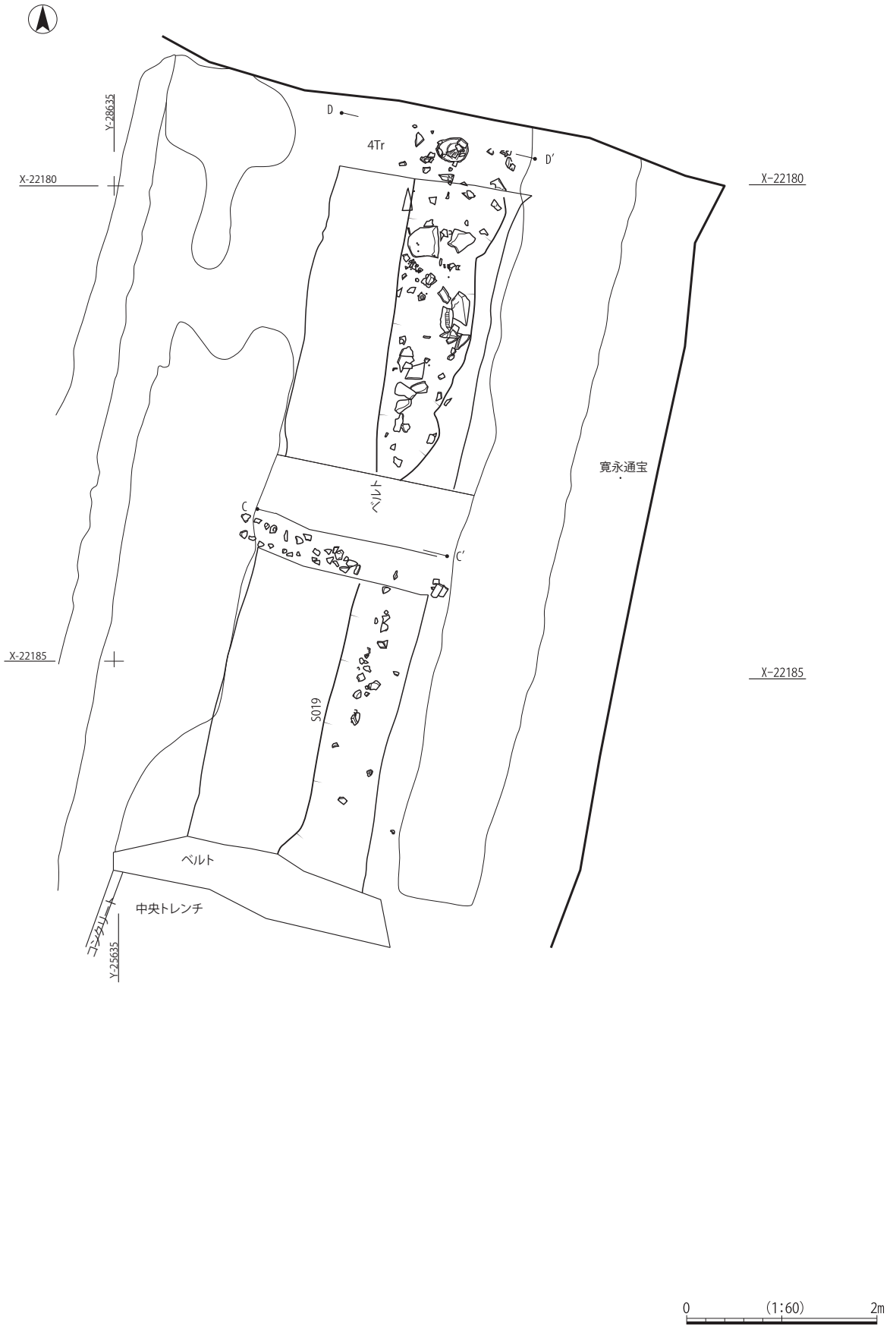


Fig.80 3・4トレンチ実測図 S=1/60

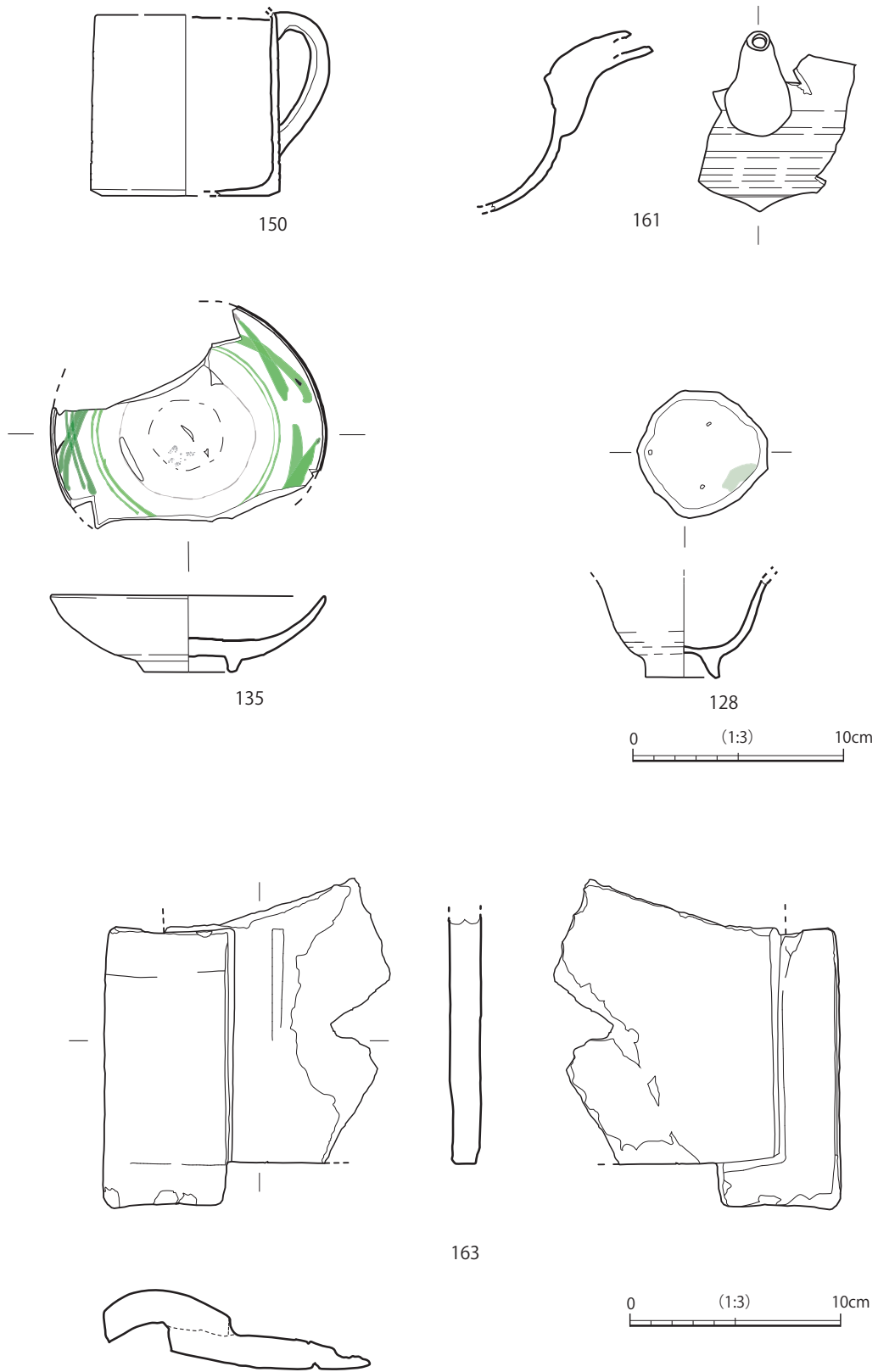


Fig.81 S001 出土遺物実測図 S=1/3

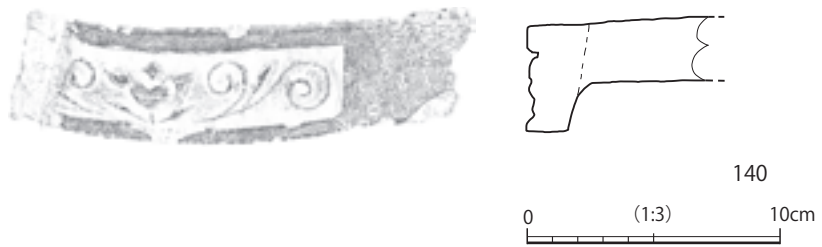
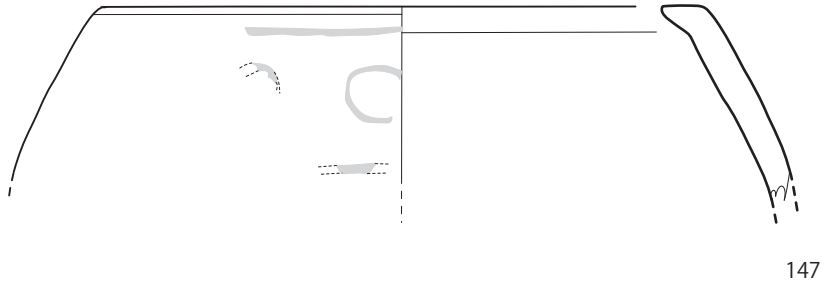
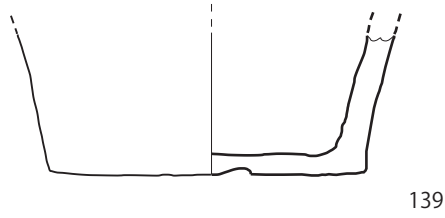
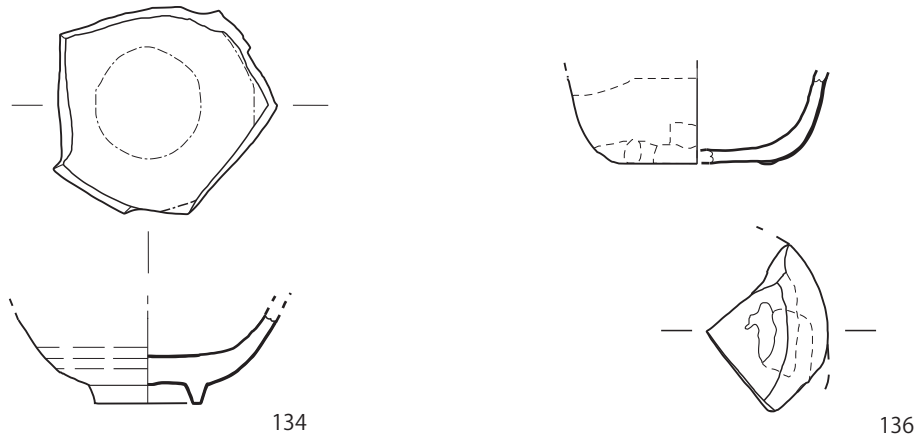


Fig.82 S003 出土遺物実測図 S=1/3

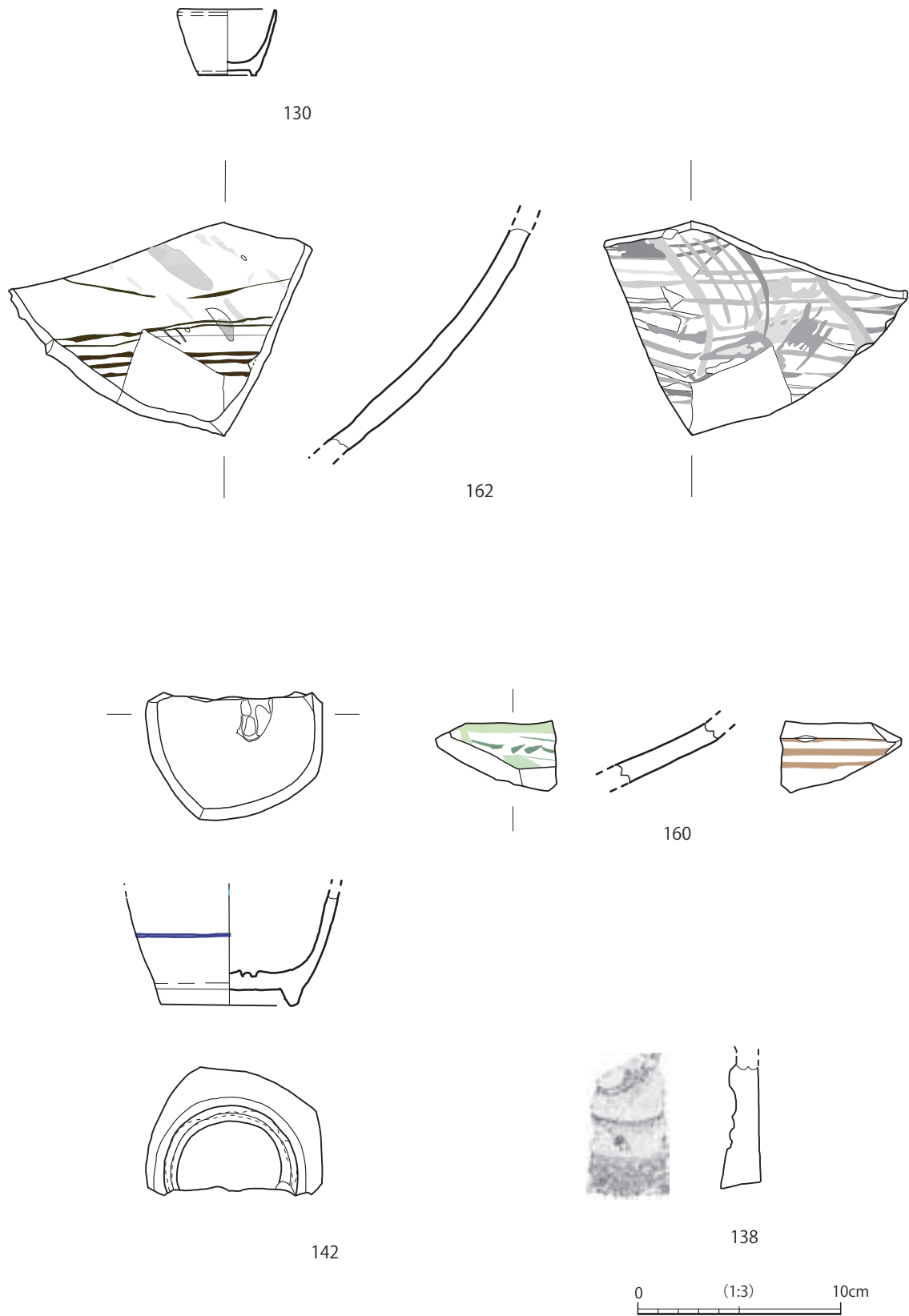


Fig.83 S005・S006 出土遺物実測図 S=1/3

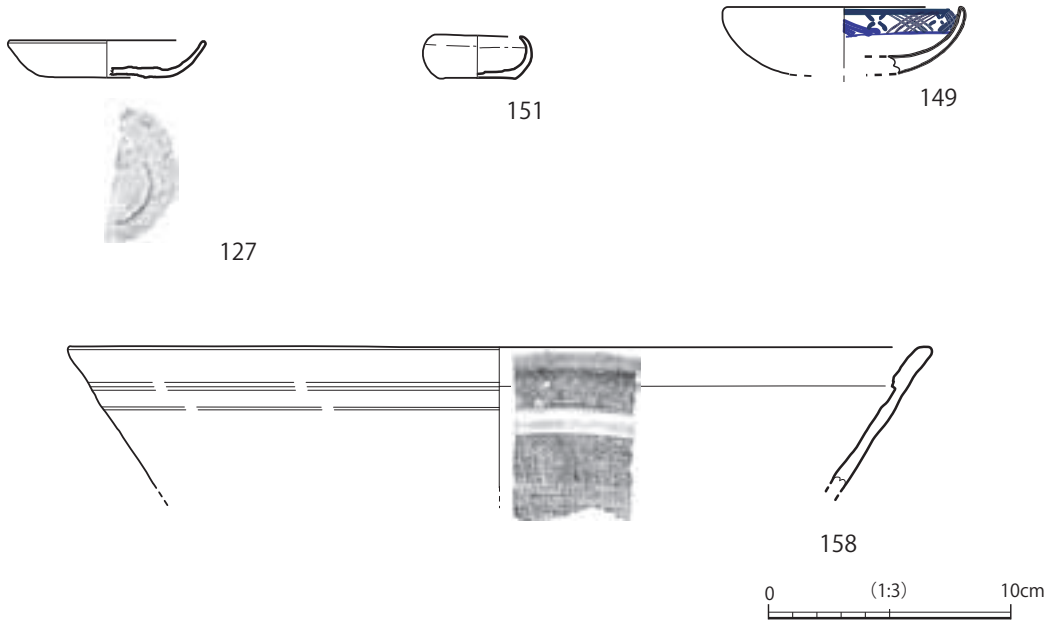


Fig.84 S008 出土遺物実測図

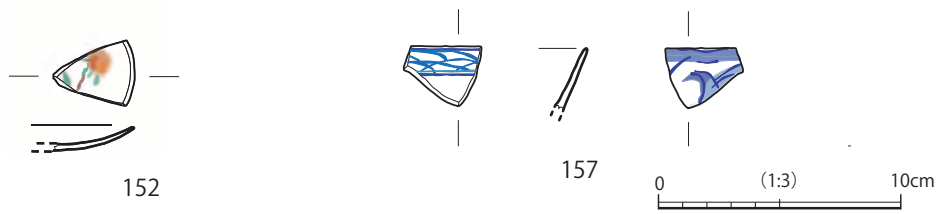


Fig.85 S009 出土遺物実測図

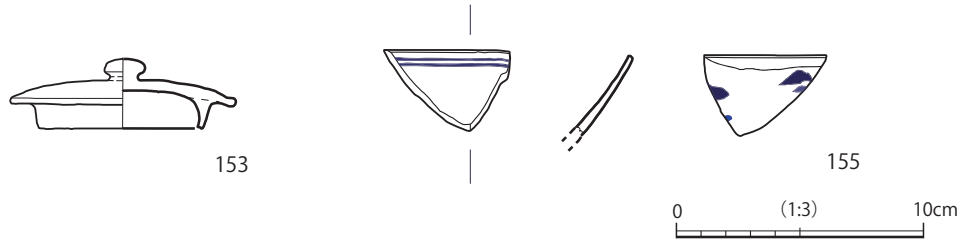


Fig.86 S013 出土遺物実測図 S=1/3

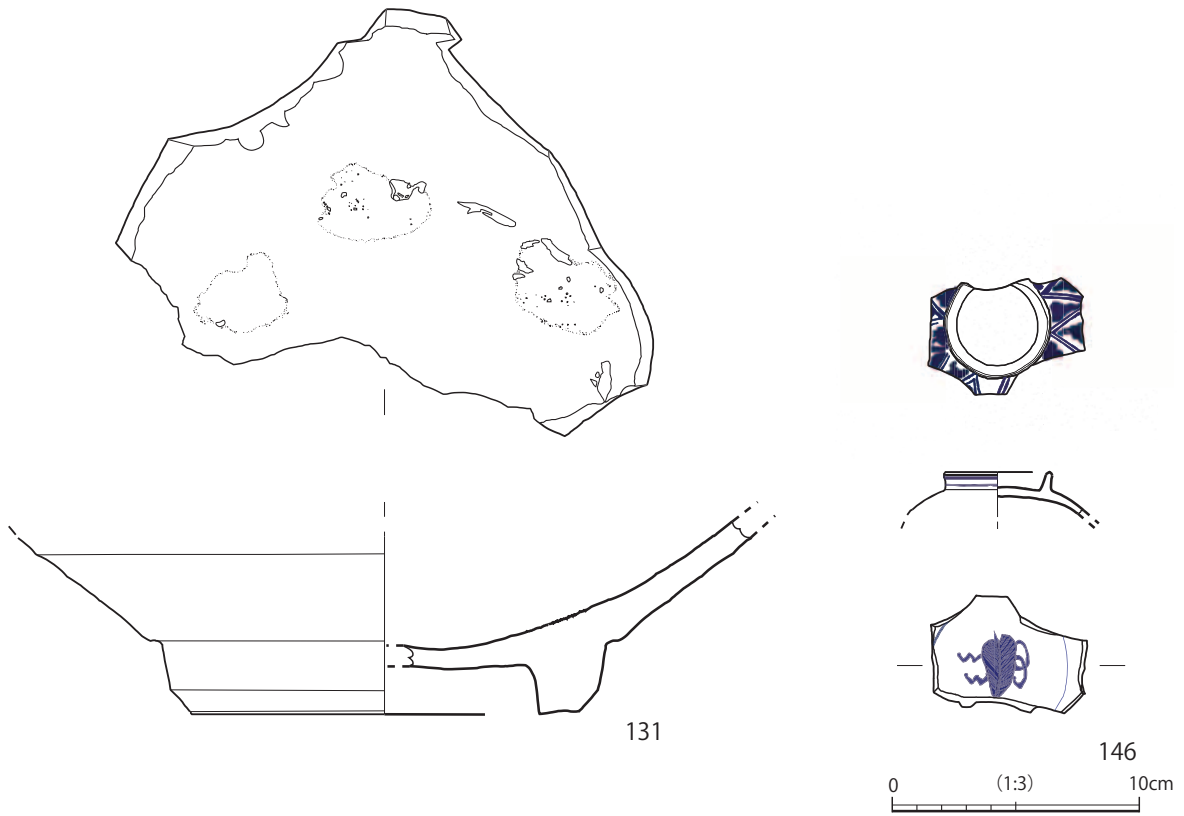


Fig.87 S014 出土遺物実測図 S=1/3



Fig.88 S016 出土遺物実測図 S=1/3

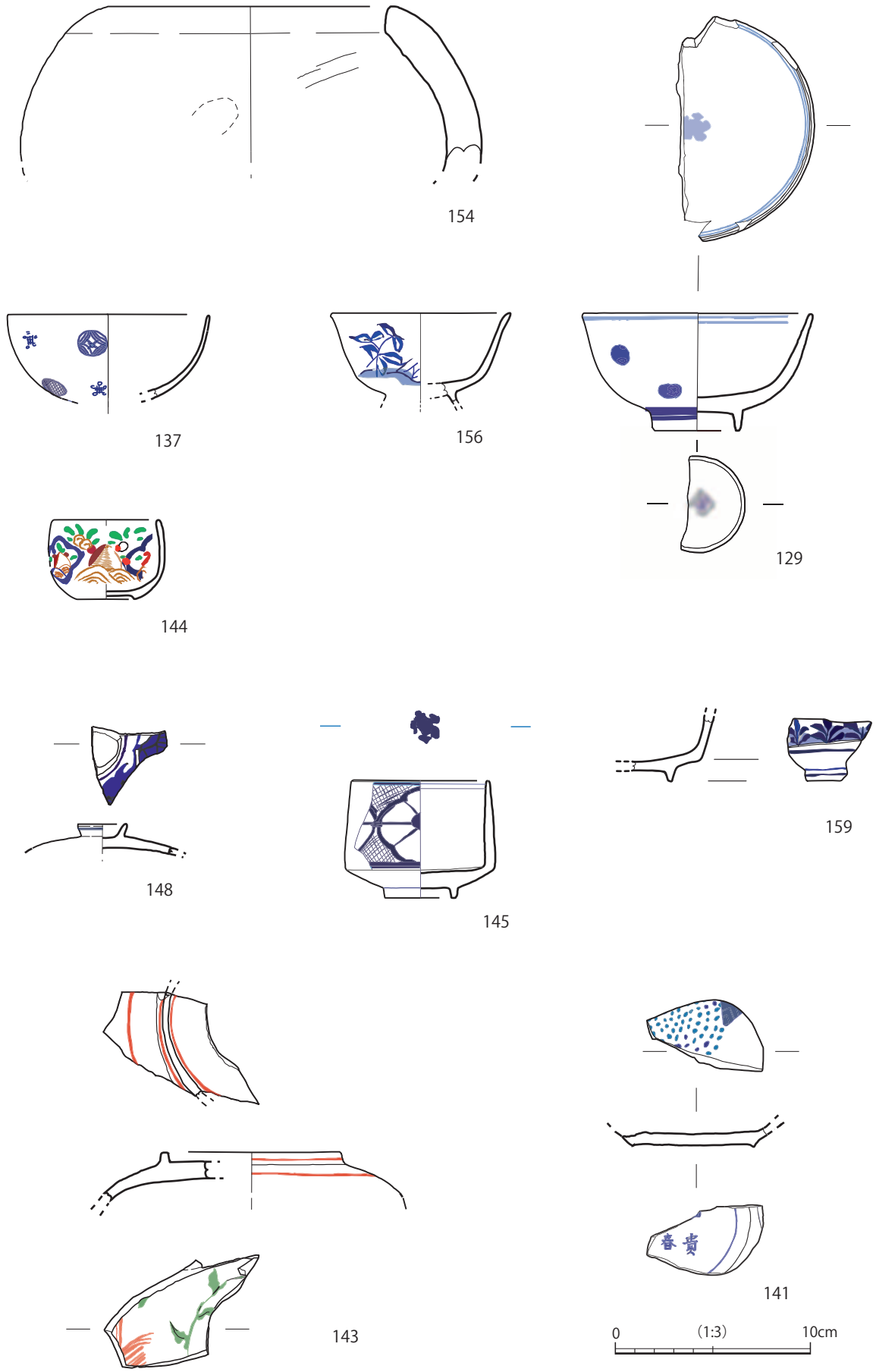


Fig.89 S019 出土遺物実測図 S=1/3

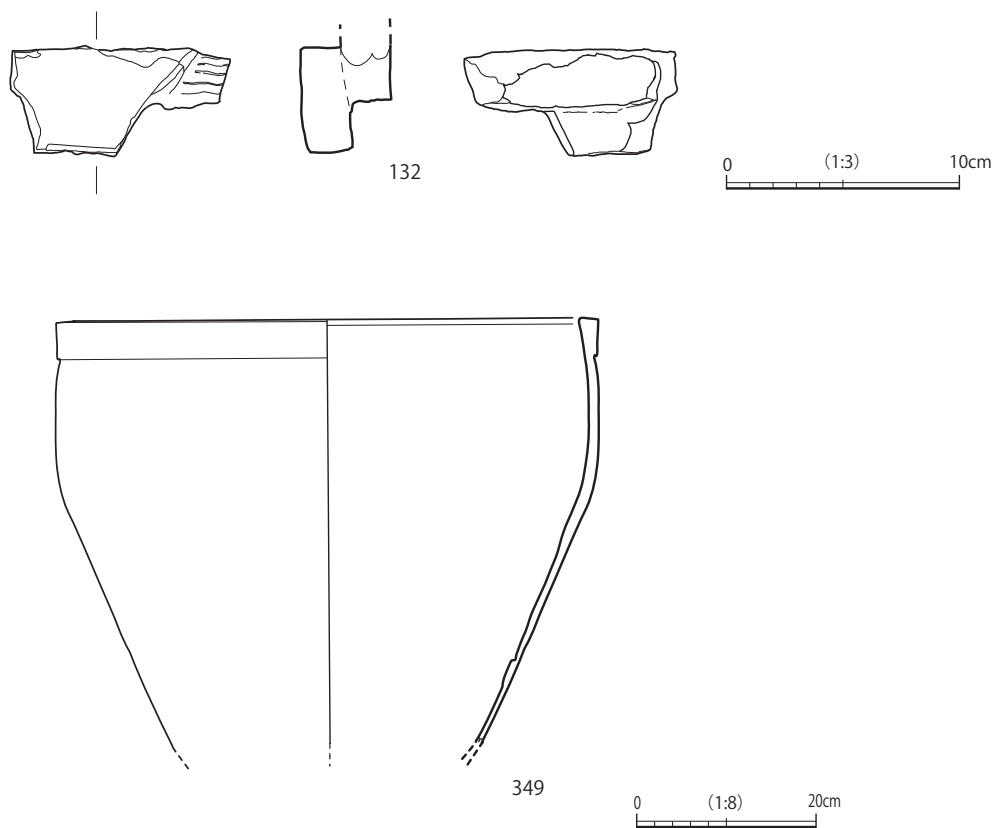


Fig.90 A-3 調査区出土遺物実測図 132 : S=1/3 349 : S=1/8

PL.41 花岡山・万日山 A-3 調査区遺構写真 (1)



1 トレンチ土層断面



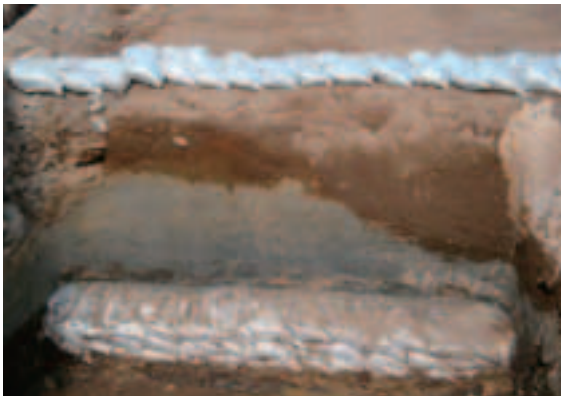
2 トレンチ土層断面



3 トレンチ土層断面



4 トレンチ土層断面



中央トレンチ土層断面



S001 完掘状況



S003 検出状況



S003 遺物出土状況

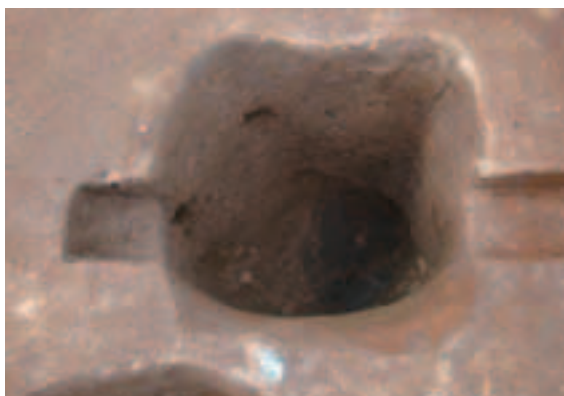
PL.42 花岡山・万日山 A-3 調査区遺構写真 (2)



S003 完掘状況



S004 検出状況



S005 完掘状況



S006 完掘状況



S008 完掘状況



S009 完掘状況



S010 検出状況



S010 完掘状況

PL.43 花岡山・万日山 A-3 調査区遺構写真 (3)



S013 完掘状況



S014 完掘状況



S015・016・017 完掘状況



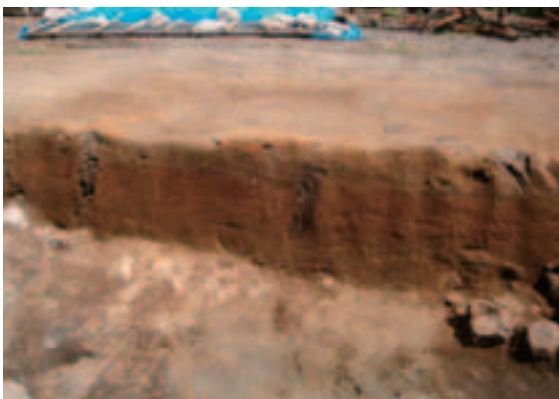
S019 完掘状況 1



S019 完掘状況 2



参道硬化面検出状況



参道土層断面 1



参道土層断面 2

PL.44 花岡山・万日山 A-3 調査区遺構写真 (4)



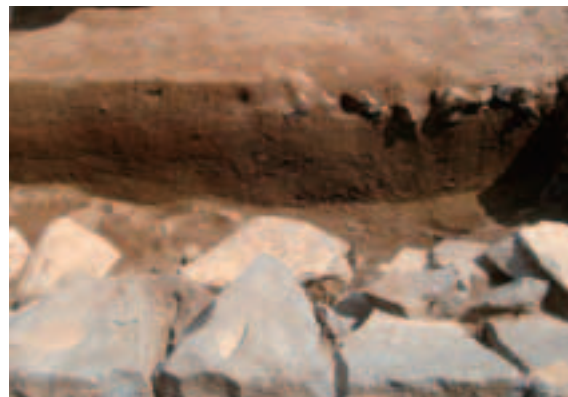
参道土層断面3



参道土層断面4



参道土層断面5



参道土層断面6



寛永通宝出土状況



文久通宝出土状況



A-3 調査区完掘状況

PL.45 花岡山・万日山 A-3 調査区出土遺物写真 (1)



222 2 Tr 出土



221 3 Tr 出土



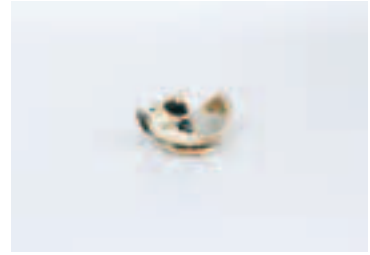
220 3 Tr 出土



218 4 Tr 出土



498 4 Tr 出土 (内器面)



219 4 Tr 出土



349 4 Tr 出土



498 4 Tr 出土 (外器面)



163 S001 出土



223 S001 出土



128 S001 出土



161 S001 出土



225 S001 出土 (内器面)



514 S001 出土 (内器面)



150 S001 出土



225 S001 出土 (側面)



514 S001 出土 (外器面)



227 S001 出土

PL.46 花岡山・万日山 A-3 調査区出土遺物写真 (2)



493 S001 出土 (内器面)



494 S001 出土 (内器面)



495 S001 出土 (内器面)



493 S001 出土 (外器面)



494 S001 出土 (外器面)



495 S001 出土 (外器面)



226 S001 出土



228 S001 出土



135 S001・003 出土



140 S003 出土



139 S003 出土



136 S003 出土



497 S003 出土 (内器面)



147 S003 出土



224 S003 出土



497 S003 出土 (外器面)



134 S003 出土



496 S003 出土

PL.47 花岡山・万日山 A-3 調査区出土遺物写真 (3)



501 S005 出土



160 S006 出土 (内器面)



499 S006 出土 (内器面)



138 S006 出土



160 S006 出土 (外器面)



499 S006 出土 (外器面)



142 S006 出土



127 S008 出土



151 S008 出土



158 S008 出土



149 S008 出土



152 S009 出土



162 S005・009 出土 (内器面)



157 S009 出土 (内器面)



500 S013 出土 (内器面)



162 S005・009 出土 (外器面)



157 S009 出土 (外器面)



500 S013 出土 (外器面)

PL.48 花岡山・万日山 A-3 調査区出土遺物写真 (4)



155 S013 出土 (内器面)



153 S013 出土



146 S014 出土 (内器面)



155 S013 出土 (外器面)



133 S016 出土



146 S014 出土 (外器面)



131 S014 出土 (内器面)



154 S019 出土



141 S019 出土 (内器面)



131 S014 出土 (外器面)



156 S019 出土



141 S019 出土 (外器面)



143 S019 出土 (内器面)



145 S019 出土 (内器面)



148 S019 出土 (内器面)



143 S019 出土 (外器面)



145 S019 出土 (外器面)



148 S019 出土 (外器面)

PL.49 花岡山・万日山 A-3 調査区出土遺物写真 (5)



144 S019 出土



159 S019 出土



137 S019 出土



129 S019 出土 (側面)



129 S019 出土 (外器面)



129 S019 出土 (内器面)

Tab.33 花岡山・万日山遺跡群 A-3 調査区遺物観察表 (1)

図版番号	相図番号	掲載番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
								口径	底径	器高	内面	外面	内面			
47	84	127	A-3	土師器	皿	S008	1層	7.8	5.4	1.9	Hue7.5YR6/6 焼	Hue7.5YR6/6 焼	Hue7.5YR6/6 焼	良好	良好	来切り痕。
45	81	128	A-3	陶器	小碗	S001		8.3	3.5	4.3	Hue2.5Y6/4 にぶい黄	Hue2.5Y6/4 にぶい黄	Hue2.5Y6/4 にぶい黄	良好	良好	見込み部三足ハマの支え痕。貫入。高台部細ハギ。
49	89	129	A-3	磁器染付	碗	S019 S019 H-24+25	1層	(11.4)	4.3	5.9	Hue7/0 灰白	Hue7/0 灰白	Hue7/0 灰白	良好	良好	波佐見焼18世紀後半。内外面に染付。
	83	130	A-3	磁器	小杯	S005		4.2	2.8	3.2	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	良好	高台部細ハギ。
48	87	131	A-3	陶器	鉢	S014		—	(15.4)	—	Hue2.5YR7/3 にぶい黄	Hue2.5YR7/3 赤褐	Hue2.5YR4/6 1mm以下の長石を含む。1mm以下の石英をまれに含む。	良好	良好	内面ニ3分厚。砂目。胎土目。化粧土。
48	88	133	A-3	磁器	小碗	S016		—	3.5	—	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	良好	良好	底部細ハギ。
46	82	134	A-3	磁器	碗	S003		—	4.1	—	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	良好	良好	17世紀前半?見込み部底の目細ハギ。
46	81	135	A-3	磁器染付	小皿	S001 003		12.8	4.3	3.5	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y7/1 灰白	良好	良好	見込み部底の目細ハギ。砂目。
46	82	136	A-3	陶器	鉢	S003 H-27		—	(6.2)	—	Hue7.5R4/1 暗赤灰	Hue7.5R5/3 にぶい赤褐	Hue7.5R5/3 にぶい赤褐	良好	良好	外面に細ハギ。底部粘土付着。
49	89	137	A-3	磁器染付	碗	S019		(10.2)	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	良好	外面に染付。
46	82	139	A-3	陶器	鉢	S003		—	12.0	—	Hue5Y6/3 灰白	Hue5Y7/3 浅黄	Hue5Y7/3 浅黄	良好	良好	微細な小礫を含む。長石を含む。灰白。
48	89	141	A-3	磁器染付	皿	S019		—	—	—	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	良好	良好	貫入。内外面に染付。
47	83	142	A-3	磁器染付	徳利	S006		—	6.6	—	Hue2.5Y7/4 浅黄	Hue2.5Y7/4 灰白	Hue2.5Y7/4 灰白	良好	良好	見込み部細ハギ。高台部砂目。細ハギ。17世紀後半。外面に染付。
48	89	143	A-3	磁器	皿	S019		—	9.0	—	Hue2.5Y7/1 灰白	Hue2.5Y7/1 灰白	Hue2.5Y7/1 灰白	良好	良好	外面見込み部色絵。高台部細ハギ。
49	89	144	A-3	磁器	小杯	S019 H-26+27		5.2	2.8	4.0	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	良好	高台部細ハギ。外面に色絵。
48	89	145	A-3	磁器染付	小碗	S019		(6.8)	3.6	—	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	良好	良好	1780~1810年代。見込みに五弁花。高台部細ハギ。内外面に染付。
48	87	146	A-3	磁器染付	蓋	S014		—	4.3	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	良好	高台部細ハギ。内外面に染付。
46	82	147	A-3	陶器	壺	S003 H-27		20.0	—	—	Hue7.5Y4/2 灰白	Hue7.5Y4/2 灰白	Hue7.5Y4/2 灰白	良好	良好	口縁部細ハギ。
48	89	148	A-3	磁器染付	蓋	S019 H-25		2.4	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	良好	つまみ部細ハギ。内外面に染付。
47	84	149	A-3	磁器染付	手皿	S008		(9.4)	—	—	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	良好	良好	1760~1780年代。内面に染付。
45	81	150	A-3	陶器	瓶	S001	20.22層	—	(8.7)	—	Hue10YR7/3 にぶい黄緑	Hue10YR7/3 にぶい黄緑	Hue10YR7/3 にぶい黄緑	良好	良好	
47	84	151	A-3	土師器	皿	S008		3.4	3.0	1.7	Hue7.5Y7/6 にぶい黄	Hue7.5Y7/6 にぶい黄	Hue7.5Y7/6 にぶい黄	良好	良好	来切り痕。
47	85	152	A-3	磁器	皿	S009		—	—	—	Hue7.5Y7/4 にぶい黄	Hue7.5Y7/4 にぶい黄	Hue7.5Y7/4 にぶい黄	良好	良好	内面に色絵。
48	86	153	A-3	陶器	蓋	S013		6.4	—	2.7	Hue7.5Y3/2 にぶい黄	Hue7.5Y3/2 にぶい黄	Hue7.5Y3/2 にぶい黄	良好	良好	
48	89	154	A-3	瓦土器	火鉢	S019		14.0	—	—	HueN4/0 灰	HueN4/0 灰	HueN4/0 灰	良好	良好	指頭圧痕。
48	86	155	A-3	磁器染付	碗	S013		—	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	良好	内外面に染付。
48	89	156	A-3	磁器染付	小碗	S019		(9.0)	—	—	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	良好	良好	外面に染付。
47	85	157	A-3	磁器染付	碗	S009		—	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	良好	1610~1630年代?内外面に染付。

Tab.34 花岡山・万日山遺跡群 A-3 調査区遺物観察表 (2)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	内面	外面	内面			
47	84	A-3	陶器	擂鉢	S008	—	(34.0)	—	Hue2.5YR3/2 暗赤褐	Hue2.5YR3/2 暗赤褐	粒子をほとんど含まない。	良好			
49	89	A-3	磁器染付	鉢	S019 H-25	—	—	—	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	微細な砂粒を含む。	良好	外面に染付。高台部軸ハギ。圓縁。		
47	83	A-3	陶器	鉢	S006	—	—	—	Hue5YR7/2 明褐色	Hue5YR6/2 灰褐	混入物なし。	良好	唐津系。内面に墨書。内外面に白化粧。		
45	81	A-3	陶器	土瓶	S001	22層	—	8.4	Hue2.5YR6/6 明褐色	Hue2.5YR5/6 明赤褐	微細な黒色粒をまれに含む。	良好			
47	83	A-3	陶器	壺	S005・S009	—	—	—	Hue10Y8/3 黄褐	Hue10Y8/3 明赤褐	微細な砂粒、角閃石を含む。	良好	内外面に施釉(灰白、黒)を用いて模様が描かれている。		
45	218	A-3	瓦質土器	火鉢	4トレンチ	—	—	11.4	HueN2/0 黒	HueN3/0 暗灰	微細な白色粒をわずかに含む。	良好	平面方形。脚部1ヶ所残存。		
45	219	A-3	陶器	小碗	4トレンチ	—	—	3.5	Hue7.5Y8/2 灰白	Hue7.5Y8/2 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	19世紀?外面に色絵。		
45	220	A-3	磁器染付	碗	3トレンチ	—	—	(3.7)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。外面見込み部文字。		
45	221	A-3	青磁	碗	3トレンチ	—	—	3.8	Hue7.5Y7/1 灰白	Hue7.5Y7/1 灰白	混入物なし。	良好			
45	222	A-3	磁器	碗	2トレンチ	—	—	5.1	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を多く含む。	良好	内面見込み部蛇の目軸ハギ。内面に色絵。 鉄付着。		
45	223	A-3	土師器	皿	S001	—	(5.4)	3.5	Hue7.5YR7/6 黄褐	Hue7.5YR7/6 黄褐	微細な黒、白色粒をわずかに含む。	良好	糸切刃直。		
46	224	A-3	陶器	擂鉢	S003	—	—	13.0	Hue2.5YR4/4 赤褐	Hue2.5YR4/4 赤褐	1~2mmの白色粒を含む。	良好	高台部砂目。楕円20本。		
45	225	A-3	陶器	小鉢	S001	20.22層	—	5.5	Hue5YR6/6 黄褐	Hue5YR6/6 黄褐	微細な黒、白色粒を含む。	良好	見込み部赤色顔料。		
46	226	A-3	磁器染付	小碗	S001	—	—	3.0	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。		
45	227	A-3	磁器	仏花器	S001	2層	—	—	Hue10YR5/8 黄褐	Hue5Y8/1 灰白	混入物なし。	良好	18世紀?脚部に飾り。		
46	228	A-3	磁器染付	碗	S001	2層	(12.2)	—	Hue2.5Y7/1 灰白	Hue2.5Y7/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。1610~1630年代。 内面見込み部蛇の目軸ハギ。		
45	90	A-3	瓦質土器	貯蔵甕	4トレンチ	—	61.8	—	Hue10Y2/1 黒	Hue10Y2/1 黒	微細な黒色粒を含む。	良好	内面に白い付着物。		
46	493	A-3	磁器染付	碗	S001	2層	—	(4.6)	HueN8/0 灰白	HueN8/0 灰白	混入物なし。	良好	内外面に染付。高台部軸ハギ。伊万里?		
46	494	A-3	磁器染付	鉢	S001	2層	—	—	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	混入物なし。	良好	内外面に染付。外面に源氏香の珠縁。		
46	495	A-3	磁器染付	鉢	S001	—	—	—	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	混入物なし。	良好	内外面に染付。口縁部八角形?		
46	496	A-3	磁器染付	瓶	S003 H-27	—	—	—	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	微細な白色粒を含む。	良好	外面に染付。		
46	497	A-3	陶器	甕	S003	—	—	—	Hue5YR4/3 赤褐	Hue5YR4/3 赤褐	微細な黒色粒を少量含む。	良好	18世紀前~中頃。		
45	498	A-3	磁器染付	皿	4トレンチ	—	—	(8.2)	Hue2.5GY8/1 灰白	Hue2.5GY8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	底部に砂付着。内外面に染付。		
47	499	A-3	陶器	小碗	S006	—	—	—	Hue5YR3/2 暗赤褐	Hue5YR3/2 暗赤褐	混入物なし。	良好			

Tab.35 花岡山・万日山遺跡群 A-3 調査区遺物観察表 (3)

図版番号	掲載番号	掲載番号	掲載番号	種別	器種	出土地点	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	内面	外面	調整	内面	外面	内面			
47		500		陶器	播鉢	S013	—	—	—	ナデ	回転ナデ	Hue10YR4/6	Hue10YR4/6	Hue10YR4/6	褐色	微細な白、黒色粒を含む。	良好	播目12本。
47		501		磁器架付	瓶	S005	—	—	—	施種(透明)	施種(透明)	Hue2.5GY8/1	Hue2.5GY8/1	Hue2.5GY8/1	灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付。
45		514		須恵器?	不明	S001	—	—	—	回転ナデ	施種(二げ茶)	Hue7.5Y5/1	Hue7.5Y5/1	Hue7.5Y5/1	黄灰	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に麻球(文字?)

Tab.36 花岡山・万日山遺跡群 A-3 調査区遺物観察表 (4)

図版番号	掲載番号	掲載番号	掲載番号	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考	
							全長	玉縁長	高さ	文様区径	内面	外面	調整	内面	外面				内面
47	83	138		軒丸瓦	S006	—	—	—	(6.0)	(4.1)	ナデ	ナデ	Hue4/0	Hue4/0	Hue3/0	暗灰	1mm程度の角閃石を多く含む。	良好	巴文。

Tab.37 花岡山・万日山遺跡群 A-3 調査区遺物観察表 (5)

図版番号	掲載番号	掲載番号	掲載番号	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考		
							全長	幅	高さ	文様区厚	内面	外面	調整	内面	外面				内面	外面
46	82	140		軒平瓦	S003 H-27	—	—	—	4.1	1.6	2.5	横ナデ	ナデ	Hue4/0	Hue4/0	Hue4/0	灰	2mm以下の黒い砂粒を含む。	良好	三葉文。

Tab.38 花岡山・万日山遺跡群 A-3 調査区遺物観察表 (6)

図版番号	掲載番号	掲載番号	掲載番号	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考		
							全長	幅	高さ	平部全長	平部幅	目板幅	目板幅	内面	外面				調整	内面
45	81	163		目板棧瓦	S001	—	—	—	—	—	—	17.4	7.8	ナデ、ケズリ	ナデ、ケズリ	Hue2.5Y6/1	Hue4/0	灰	1mm以下の黒色粒を多く含む。3mm以下の白色粒を多く含む。	良好

Tab.39 花岡山・万日山遺跡群 A-3 調査区遺物観察表 (7)

図版番号	掲載番号	掲載番号	掲載番号	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考
							全長	幅	高さ	内面	外面	調整	内面	外面	調整			
90	132			雁版瓦	道路	2層	—	—	—	ナデ	ナデ	Hue3/0	Hue3/0	Hue3/0	暗灰	2mm以下の黒色粒、橙色粒を含む。	良好	

Tab.40 花岡山・万日山遺跡群 A-3 調査区遺物観察表 (8)

図版番号	掲載番号	掲載番号	掲載番号	種類	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考
							縦	横	高さ	内面	外面	調整	内面	外面	調整			
96		606		泥面子	人形	H-25	—	—	—	1.6	Hue10YR8/4	Hue10YR8/4	Hue10YR8/4	浅黄橙				
96		607		泥面子	人形	道路	—	—	—	2.2	Hue10YR8/4	Hue10YR8/4	Hue10YR8/4	浅黄橙				
96		608		泥面子	人形		—	—	—	1.9	Hue10YR7/3	Hue10YR7/3	Hue10YR7/3	にぶい黄橙				
97		622		泥面子	モノ	H-25 道路	—	—	—	0.9	Hue7.5YR7/6	Hue7.5YR7/6	Hue7.5YR7/6	橙				

第8節 花岡山・万日山 A-4 調査区

1 調査区概要

この調査区は、橋脚 P184 に当たる範囲を調査区としたものである。先に他の調査区で述べたように、JR 線路から 8 m 離して掘削している。また、矢板を打ち込む際に矢板の前後 1 m 程の範囲で地表・地下の障害物を除去するため掘削されるので、その範囲も調査区の範囲に含めた。したがって、西側は調査範囲からはずしたものの、工事影響範囲として東・南北については広めに調査区を設定している。調査区の面積は、約 180m²である。

次に調査区の層序について述べる。

この調査区には、二次調査の No.3 トレンチを調査区中心部に含み、そのトレンチの層序を今回の調査でも基準層序とした。ただし、重機による表土剥ぎの際に、石垣東側部分を掘削しすぎたため、No.3 トレンチ調査時と石垣東側土層状況が一部異なる。以下は両石垣内部の鉄道敷設箇所の下部における基本層序である。

I 層：鉄道関係の砂利層。

II 層：鉄道敷設時整地層。

III 層：江戸期～明治初期の参道跡で、主に細川期のもの。厚さは 10～15cm ほどでかなり硬くしまる。

詳細に土層を観察すると、さらに細分できるが、つながりがはっきりしない場所もあり、ここでは一層とした。土層中には砂粒が層状に現れる部分もあり、A-5 調査区でも同様の状況があることから、明治 10 年の西南戦争時の薩軍による水攻めの跡ということも検討された。

IV 層：整地層。上層の細川期の参道面の土に似るがしまり少ない。

V 層：明黄灰色粘質土。上下 2 層に分けられる。どちらも硬化面。この層を加藤期の道路跡とする。2 層となる理由は不明。

VI 層：整地層。加藤期の道路のための整地層

VII 層：自然堆積層。大きくは硬くしまるが、クラックの入る暗緑灰色砂層とその間の砂質層が交互に堆積した状態の層と、その下の硬くしまる暗灰色砂質層に分けられ、この調査区の基盤層として位置づけた。新馬借 A-1 調査区で見られた基盤層に似る。

次に、東側石垣の東側の堀に懸かる層序についてまとめる。

最下層とした VII 層のうち最下層とした基盤層は同じである。その上層の自然堆積層はなく暗褐色の客土層がある。調査区の範囲では 5 層以上は確認できた。その上面に堀の斜面部が形成されているようである。その斜面には、二次調査で確認していた淡灰黄色の粘質土層がある。PL.51 は本調査区の南壁の状況であるが、



PL.50 中央トレンチ土層状況



PL.51 調査区南側壁(堀部)土層堆積状況

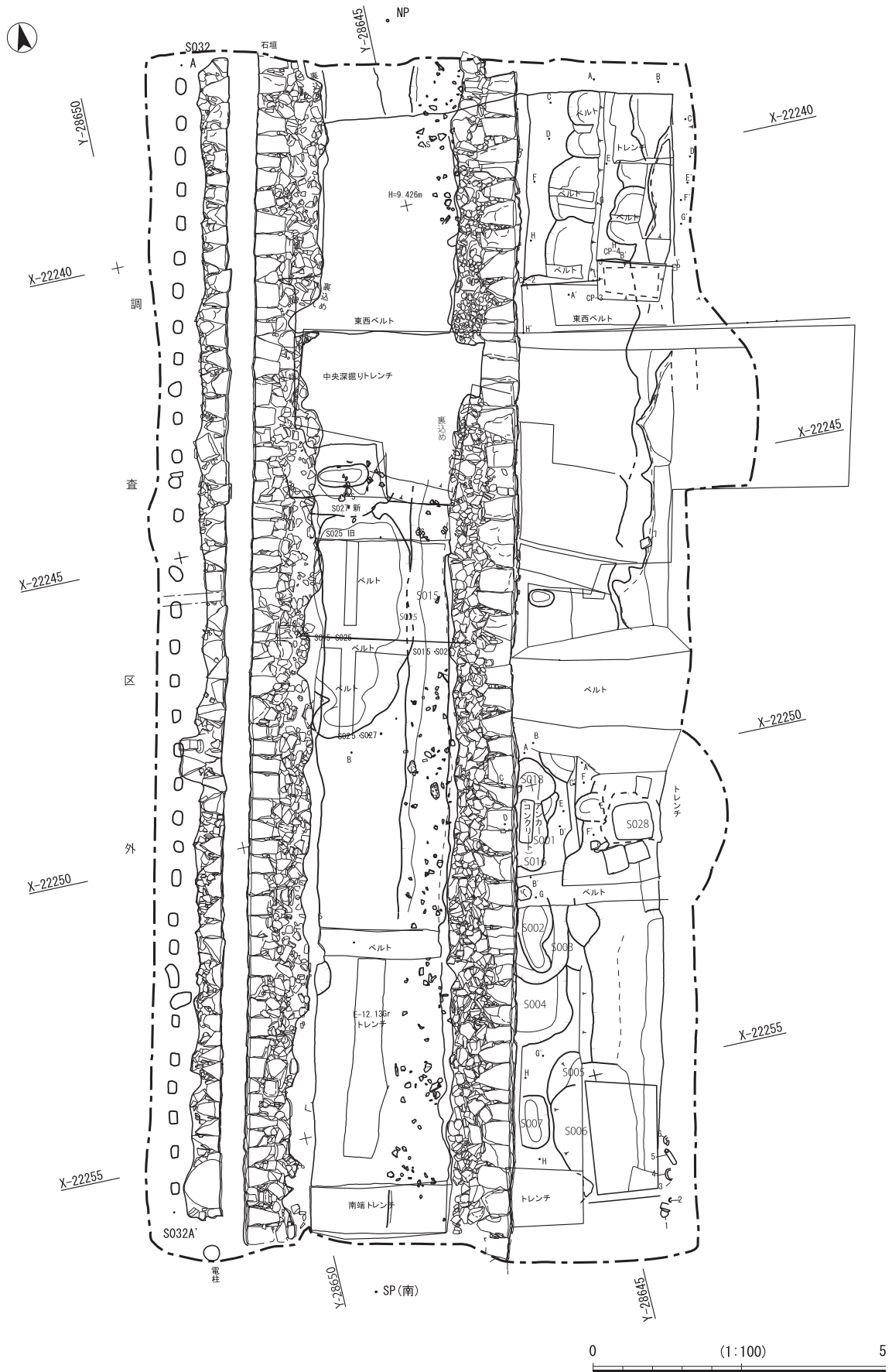


Fig.91 A-4 調査区遺構配置図 S=1/100

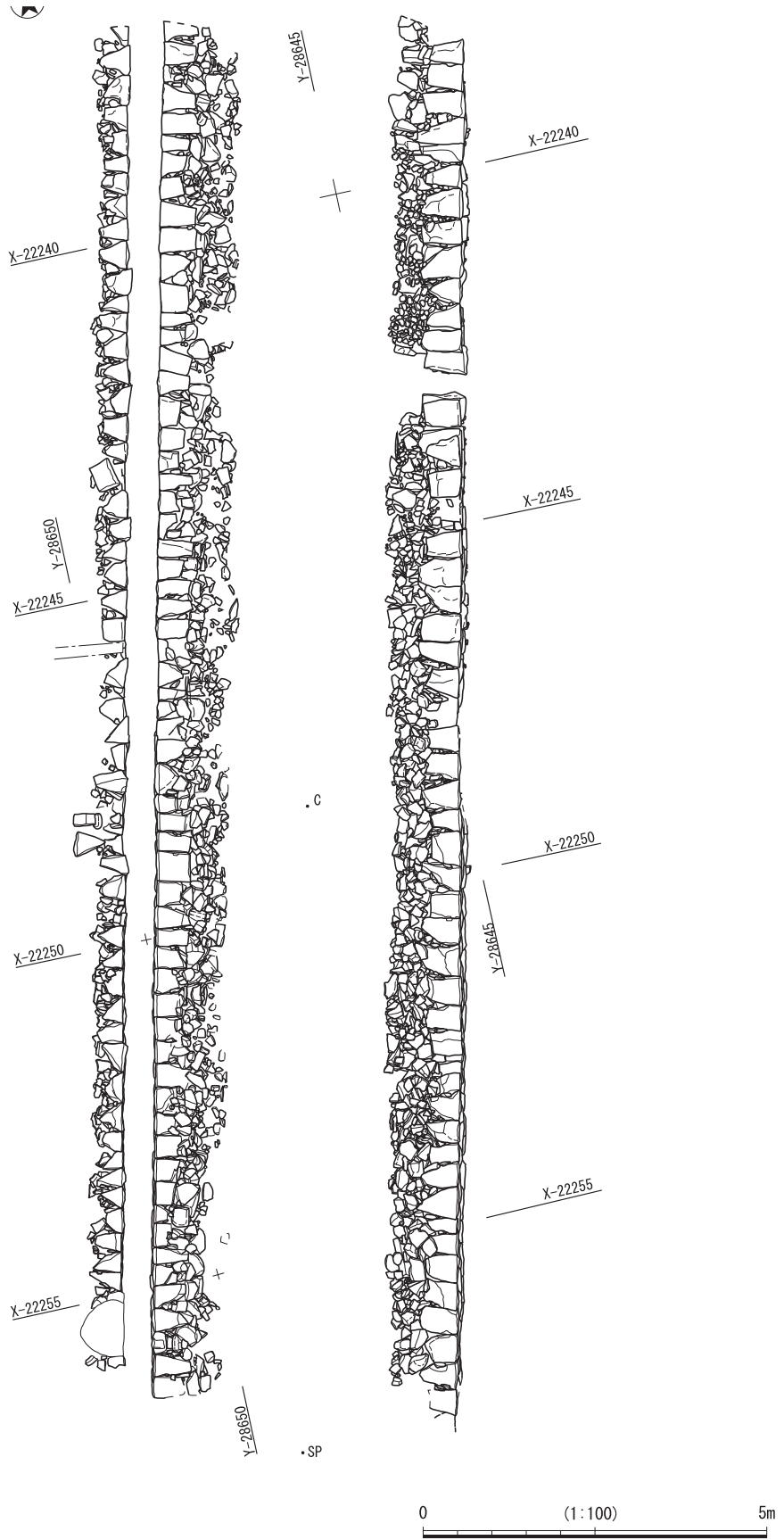


Fig.92 鉄道石垣平面実測図 S=1/100

下位に堀の傾斜面に配されたと考えられる土層が見られる。

調査に当たって、二次調査の No.3 トレンチをまず精査し、先の調査との整合性を取った。No.3 トレンチは A-4 調査区ではほぼ中央部に位置するため、中央トレンチと名称を決めた。その後、層序の統一を図るため、調査区の南北の壁際にもトレンチを設定し、それぞれ南側トレンチ、北側トレンチと名称をつけた。また、各遺構には、必要に応じて土層確認ベルトを設けて調査を進めた。

2 遺構と遺物

本調査区で確認した遺構は、鉄道に伴う石垣、細川期と加藤期の参道跡、種々の土坑、溝、鉄道関係のピットなどがある。この調査区では、当初石垣と参道に遺構番号を付しておらず、他の調査区と異なることを予め断っておく。ここでは石垣遺構、参道遺構については、遺構番号を付けずそのまま記し、A-4- 石垣、A-4- 参道（道）跡とした。その他の遺構は、遺構番号を S001 より付して記載した。

〔A-4- 石垣〕

この遺構は、他の調査区と同様に鉄道単線路の左右に配置されていたものである。調査区の中心部からやや西側に寄って確認した。さらに西側石垣の外側の一段低い位置に側溝を形成する石垣列が走っている。この調査区では、南北 19 m に渡って石垣列を確認した。両石垣の表面間は約 4.5 m を測る。また西側側溝の幅は約 40cm ほどである。

石垣の石材は他の調査区同様安山岩である。東側石垣の表面は三段築成の布積みで、頭は同じレベルにそろえている。表面は、簡単に整形して揃えてはいるが、石自体の大きさはあまり揃っていない。石材の裏込め部も長さはまちまちで、形態も方形のままのものから、三角形に近い形に整形してあるものまでと、一様ではない。石材の中には他の調査区でも確認した矢穴の残るものがある。

石垣の裏にはいずれも裏込めがなされている。平面的には東側石垣部で石垣表面から 1 m ほど、西側石垣表面から 1.2 m ほどそれぞれ裏込めのために掘削されている。掘削された深さは 1.2 m ほどである。最下部には石材の座りを調整するため、砂利を置いている。

西側の石垣は二段築成である。頭は東側と同じレベルになっているので、石垣を掘り込む深さは浅くなっている。

側溝は西側石垣より一段低くレベルを下げて構築しており、小振りの石材を使い、二段築成となっている。側溝は単線が続いていた第二次世界大戦後まで利用されていたようで、溝を埋めた土砂の中には戦後のものも多かった。側溝の底はこの調査区では硬くしまっていた。

〔A-4- 参道（道）跡〕

道路遺構であるこの遺構は、石垣の間で確認した。また、調査区西側壁際で道路跡と考えられる硬化面を確認した。

先に基準土層で記したように大きく 2 面の道跡を確認している。上位のものを細川期、下位のものを加藤期とした。ここでは、細川期を参道 1 とし、加藤期を参道 2 とする。なお、この二つの道遺構は二次調査の際に断面観察で推定したもので、今回の調査で面的な確認をすることとなった。

まず、参道 1 について記す。

今回の調査では、二次調査で確認した土層をまず精査し、層の状況から調査区全体の遺構の出土状況を予想した。その後、確認ベルトを東西方向でさらに二箇所、南北方向に通して一箇所設定して徐々に掘り下げていった。

鉄道のための硬くしまった整地層を掘り下げ精査したところ、二次調査で土層断面から道跡と判断していた硬化面のある整地層が現れた。また、鉄道敷きの西側端に調査区の南北長と共通する落ち込みのラインも

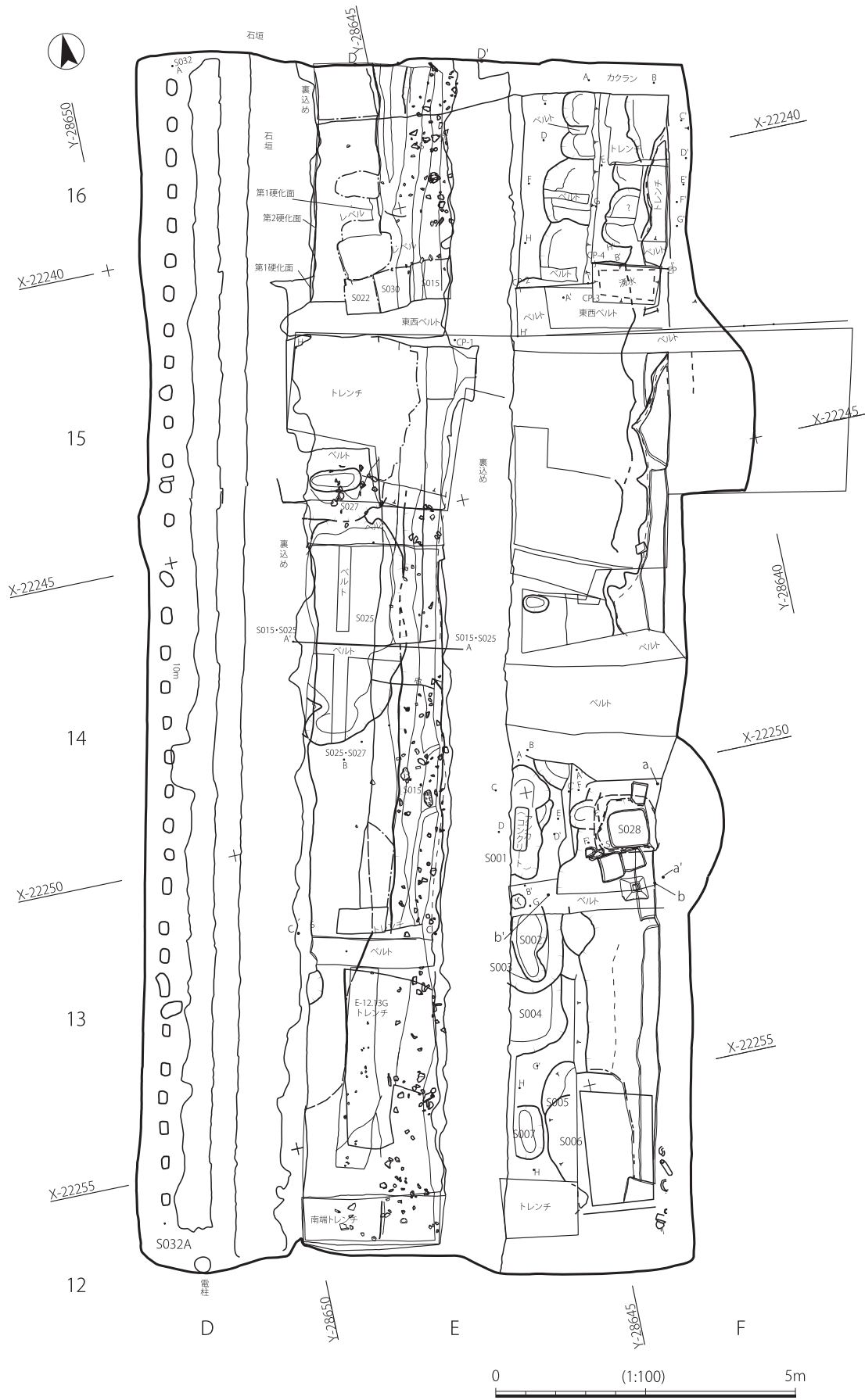


Fig.93 A-4 調査区近世・近代初頭遺構配置図 S=1/100



PL.52 S031 第1硬化面（北から）



PL.53 S031 第2硬化面（北から）

検出した。これも二次調査で確認しており、面的に押さえたことで参道の側溝ではないかという仮説がでてきた。他にもいくつかの土坑が点々と検出できた。この状況はA-3調査区、A-5調査区でも同様に検出された。

土坑については鉄道の整地層に先んじていたので、単純に江戸期の道を補修した跡と当初考えていた。しかし、それらの遺構を掘り下げていくにつれ、どの調査区でも出土した遺物の中には明治初頭のものも含まれることが分かった。しかも、貝殻等の残滓と思われるものが出土し、明らかにごみ穴と考えられるもあった。したがって、これらの土坑は、多くが参道としてきちんと整備されていた江戸期というより道管理が疎かになってくる幕末から明治に掘られたものと判断した。

参道1は、硬化面が層状に薄くはがれる場合があった。途中で細かい遺物が出土する場合もあったが、時期特定はかなり困難であった。その一方で先に記した土坑の中には江戸期中で納まるものもあり、その土坑が道跡を切っているところから明治以前の道として支障はないと考える。さらにその道跡の遺物があまり含まれないことは、かえってきちんと管理されていたことを示している。層と層の間に時折薄い砂層が含まれることは、江戸期の記録に参道に砂を撒いたということに関係する可能性もある。

次に加藤期の道とした参道2は、上記の参道1の下に間層を挟んで硬化面を形成していることから確認できた。ただ、面的に調査を進めると、硬化面が確認できたのは中央トレンチより北側の範囲に限られた。中央トレンチ南側で丁度硬化面の延長があると推定できる部分には土坑のS025・S027があり、さらにその南側では全く確認できなかった。したがって、硬化面は中央トレンチの付近で途絶えると考えた。

道跡が途絶えている理由として、1) この道がもともとこの付近までしかなかった。2) 道があったが、造成などの要因でなくなってしまった。3) 災害により失われた。などが考えられる。この道が加藤期とするなら、加藤家縁の寺で、この付近まであったのは、安国寺であろうか。ただ、位置的にはふさわしくない。まだ、南へ伸ばそうとして忠広の改易により作れなかった可能性もある。今後の課題である。2) の場合、この後に記載するS030という溝遺構の存在とそれに関係する造成工事が行われた痕跡からなくなったことが想定できる。3) の災害については今回の調査では確認できていない。

先に記したように、加藤期の道と考える遺構はA-3調査区でも辛うじて認められる。少なくともA-3調査区からA-4調査区の北側付近までは存在していたものとする。

なお、参道2については、S031として他の遺構との関係で改めて記述する。

[A-4-S001～S004]

これらの遺構は、東側石垣の東側にある。参道から堀の落ち際に残された遺構である。これらの遺構は、当初S001として周囲の遺構を一つの遺構と考え、S001が鉄道関係の遺構として認識したものの、S001の範囲を掴んだ後に次々と遺構が現れてきた。当初S001の範囲を大きく設定し、遺物の収集も1遺構として

まとめていたため、S001～S004として取上げている。調査を進める中で最終的に遺構の前後関係、大まかな形状を掴め、4つの遺構に分離した。分離する前に取上げた遺物には、関西系の行平鍋の身と蓋が6点ほどあり明らかに遺構の一部は明治に入っている。その一方で江戸末期の陶磁器や土師器等も含まれている。

S001は、埋土中にコンクリートの錘石とそれに繋がるワイヤーがあることから電柱を牽引して支えるために設けられたものである。長さ70cm、幅30cm、深さはコンクリートのすぐ下を底とすれば、確認面から20cmほどを測る。この遺構は、鉄道敷設後の遺構で、内部にコンクリート・アンカーが埋められていたものである。鉄道関係の電柱などのアンカーを引っ張っておくための錘石である棒状のコンクリートを埋め込んだ遺構である。その錘石を取り除き、この土坑を精査中に2つの別遺構が切られていることをつかんだ。それが、S018とS016である。

S002は、S001に近接した遺構で、近世・近代の遺物が多く出土した。長径は、残存長1.1m、短径は60cmほどを測る。やや不整形な楕円形を呈する。深さは30cmほどと推定できる。

S003は、S002に切られていた。当初はS002と同じものと考えていたが、埋土の違いから別遺構とした。この遺構は明らかに石垣遺構の掘り方によって切られていることから、明治24年以前の遺構と考えられる。形状ははっきりしないが、少なくとも長径が1.5m以上、短径が90cm以上を測る。深さは80cmほどである。出土遺物には186の軒瓦ながら丸瓦のようでもあり、ここでは特殊瓦としておく。丸瓦にしては中心の文様が花模様のように縁の幅も一様ではない。焼きや文様からこの瓦は、近代以降に作られた瓦としておく。

S004はS003の下層で確認した。上の2遺構に先行するが、遺構の南側のみが出土し、形状も楕円的であるが確実に押さえられなかった。少なくとも長さは2.5m以上はありそうである。この遺構からの出土遺物として、269の緑釉をかけた土瓶、476の口縁に錆び釉を配し、コバルト青による染付磁器の小皿がある。これらのことからS002～S004は、近代以降の遺構と考える。

[A-4-S005・006]

この遺構はE-12・13グリッドで検出した遺構である。検出した場所が堀の落ち際付近に当たっているため、埋土が炭化物や石炭殻のような堆積物で、近現代のものとしてそれほど重要視していなかった。その付近は、堀の深さを確認する目的もあって重機で深掘りを試みたところでもあり、検出した遺構の半分以上は掘削されていた。

当初はS005として掘り下げをしていた。ところが、掘り下げていくと一部が深くなることが分かった。そこで重機で掘り下げたトレンチの壁を精査して遺構の状況を確認していたところ、かなりS005の下に別遺構がかかっているのを確認した。それをS006とした。ただ、S005を掘り下げているつもりですすでにS006の深さまで掘削しており、出土遺物の一部はS005の遺物として取上げていた。確認後は、S006の遺物として取上げた。

S006の遺構は、掘削されて残りがわずかで、本来の形状は不明であったが、遺構自体は確認した面から深さが1mほどあり、埋土である炭やコークス状の灰などに混じって鞆の羽口や金属を溶かした際の残滓、坩堝と考えられる溶解した金属が付着した器類が多量に出土した。205・206はその坩堝とみられるものである。いずれも陶器の丸碗を転用したもので、熱のために形状がゆがみ破損している。転用品ばかりでなく、専用品として石綿類似の耐熱素材で作られている容器もあり、断面観察では薄い繊維質のものがみられる。器表面に付着した金属の融解した物質を福岡市埋蔵文化財センターの蛍光X線分析機で分析したところ、銅と亜鉛でピークを示し、他の数点も同様であった。金銅製品を作るためなのか、鋳直しをしたものであろう。

鞆の羽口は335で、他にもS001～004や堀の堆積土中でも同じ形態のものが出土している。これらの羽口は直径が7～8cmほど、孔径が3cm前後、長さが20cmほどを測る。片方の口には炉に繋がっていたた

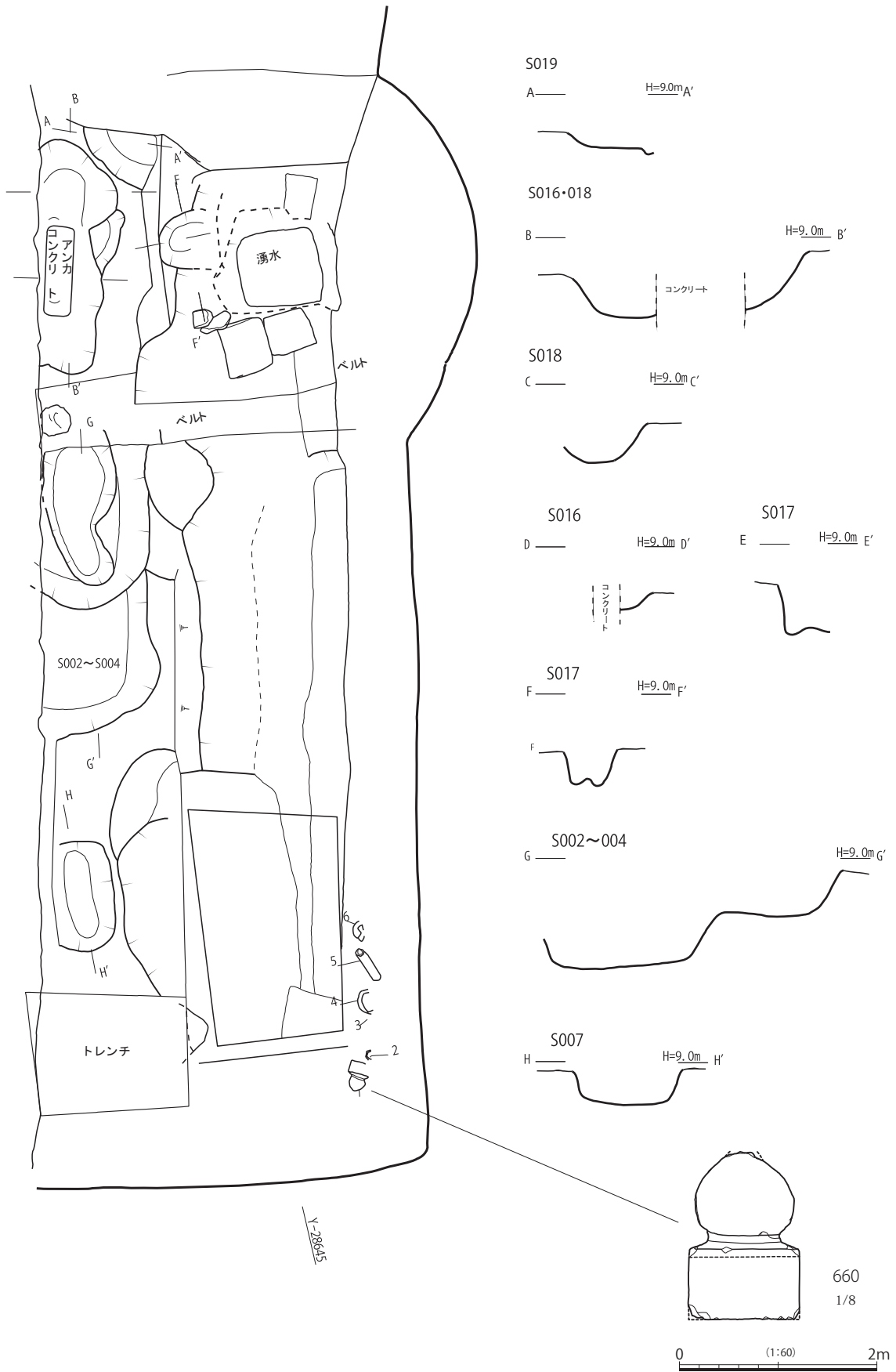
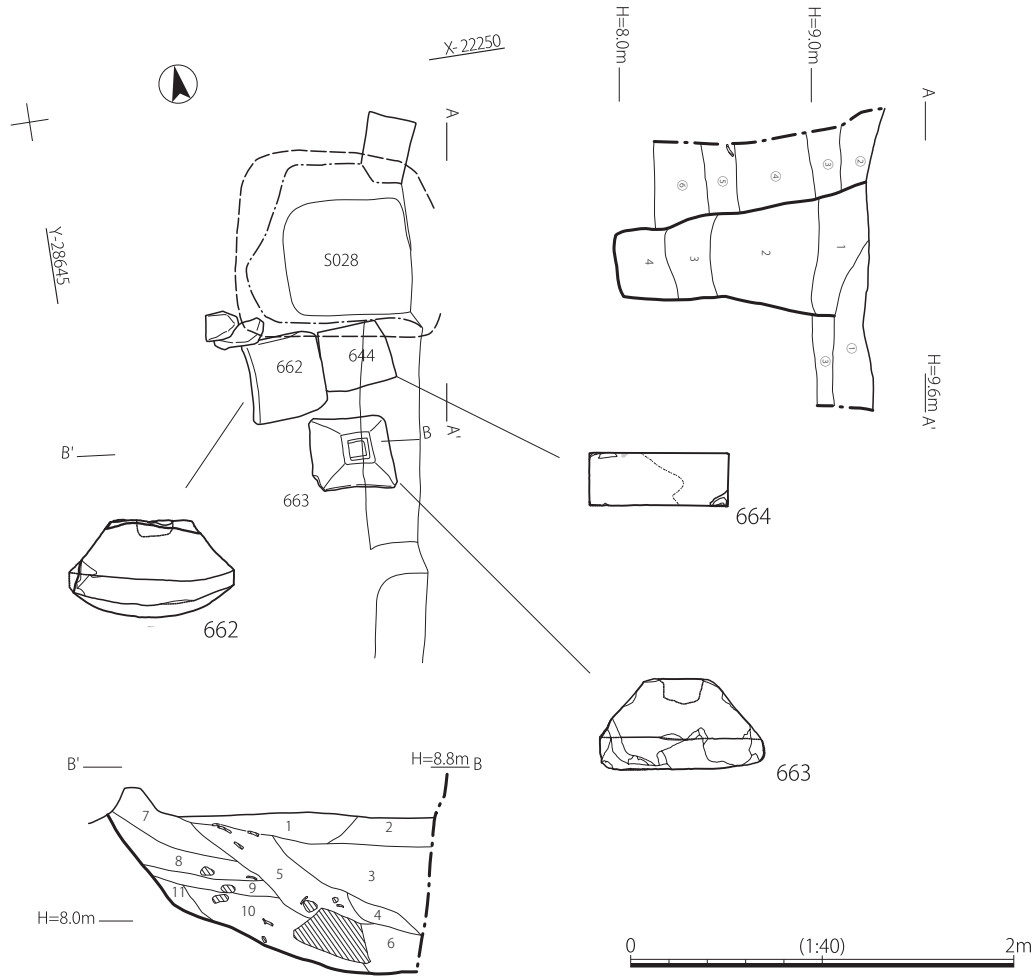


Fig.94 S001 ~ 004・S005・S006・S007・S016・S017・S018・S019 実測図 S=1/60
掘出土遺物実測図 S=1/8



S028 A-A'

- 1層: Hue10YR7/4(にぶい黄褐色粘土);しまり・粘性大。0.5~7.0mmの礫、炭化物が多量に混じる。鉄分の沈着著しい。
- 2層: Hue5PB4/1(暗青灰色粘土);しまり小、粘性大。グライ化層。砂粒、3cm前後の礫混じる。
- 3層: HueN4/(灰色粘土);しまり小、粘性大。グライ化層。炭化物及び粗い藁とみられる植物片が混じる。
- 4層: HueN3/(暗灰色砂);しまり・粘性小。グライ化層。粗い藁とみられる植物片混じる。

堀 A-A'

- ①層: Hue10YR4/1(褐灰色砂質土);しまり・粘性中。1~3cmの赤褐色土のブロック0.5~5.0cmの礫混じる。炭化物含む。
- ②層: Hue10YR3/3(暗褐色粘土);しまり・粘性大。1~2cmの褐色粘土のブロック混じる。炭化物を含み、鉄分沈着著しい。
- ③層: Hue10YR6/4(にぶい黄褐色粘土);しまり中、粘性大。1~2cmの礫褐灰色砂質土混じる。
- ④層: Hue10YR3/3(暗褐色粘土);しまり中、粘性大。炭化物少量含み下部に鉄分が沈着する。
- ⑤層: Hue6YR4/1(暗緑灰色粘土);しまり小、粘性大。グライ化層。炭化物少量混じる。
- ⑥層: Hue7.5GY4/1(暗緑灰色砂);しまり・粘性中。同質の粘質土混じる。

堀 B-B'

- 1層: Hue2.5Y3/1(黒褐色粘性土);しまり・粘性中。0.5~5.0cmの礫多量に混じる。炭化物漆喰を含む。
- 2層: Hue2.5Y3/1(黒褐色粘性土);しまり弱い、粘性中。2~3cmの黄褐色砂のブロック0.5~5.0cmの礫を多量に含む。焼土粒子、炭化物含む。
- 3層: Hue2.5Y4/2(暗灰黄色粘質土);しまり・粘性やや大。3cm前後の黒褐色土のブロック0.5~7.0cmの礫が混入する。焼土粒子・炭化物若干含む。鉄分沈着する。
- 4層: Hue10YR3/4(暗滑翔粘質土);しまり小、粘性大。0.5~3.0cmの礫多量に混入する。焼土粒子・炭化物多量に含む。
- 5層: Hue10YR4/3(にぶい黄褐色土);しまりやや大、粘性やや大。0.5~2.0cmの礫少量混じる。炭化物が多量に混入する。
- 6層: Hue10YR3/3(暗褐色土);しまりやや小、粘性大。焼土粒子、炭化物含む。
- 7層: Hue10YR4/2(灰黄褐色土);しまり・粘性中。5mm前後の黄褐色ブロック少量混じる。炭化物少量含む。
- 8層: Hue10YR5/2(灰黄褐色土);しまり・粘性中。灰色砂粒多量に含む。焼土粒子・炭化物を多量に含む。
- 9層: Hue10YR6/2(灰黄褐色土);しまり・粘性大。鉄分著しく沈着する。
- 10層: Hue10YR6/2(灰黄褐色土);しまり中、粘性大。灰色細砂を多量に含む。
- 11層: Hue10YR6/2(灰黄褐色土);しまり・粘性大。炭化物少量含む。マンガン沈着する。

Fig.95 S028 平面・断面実測図 S=1/40

出土遺物実測図 S=1/20

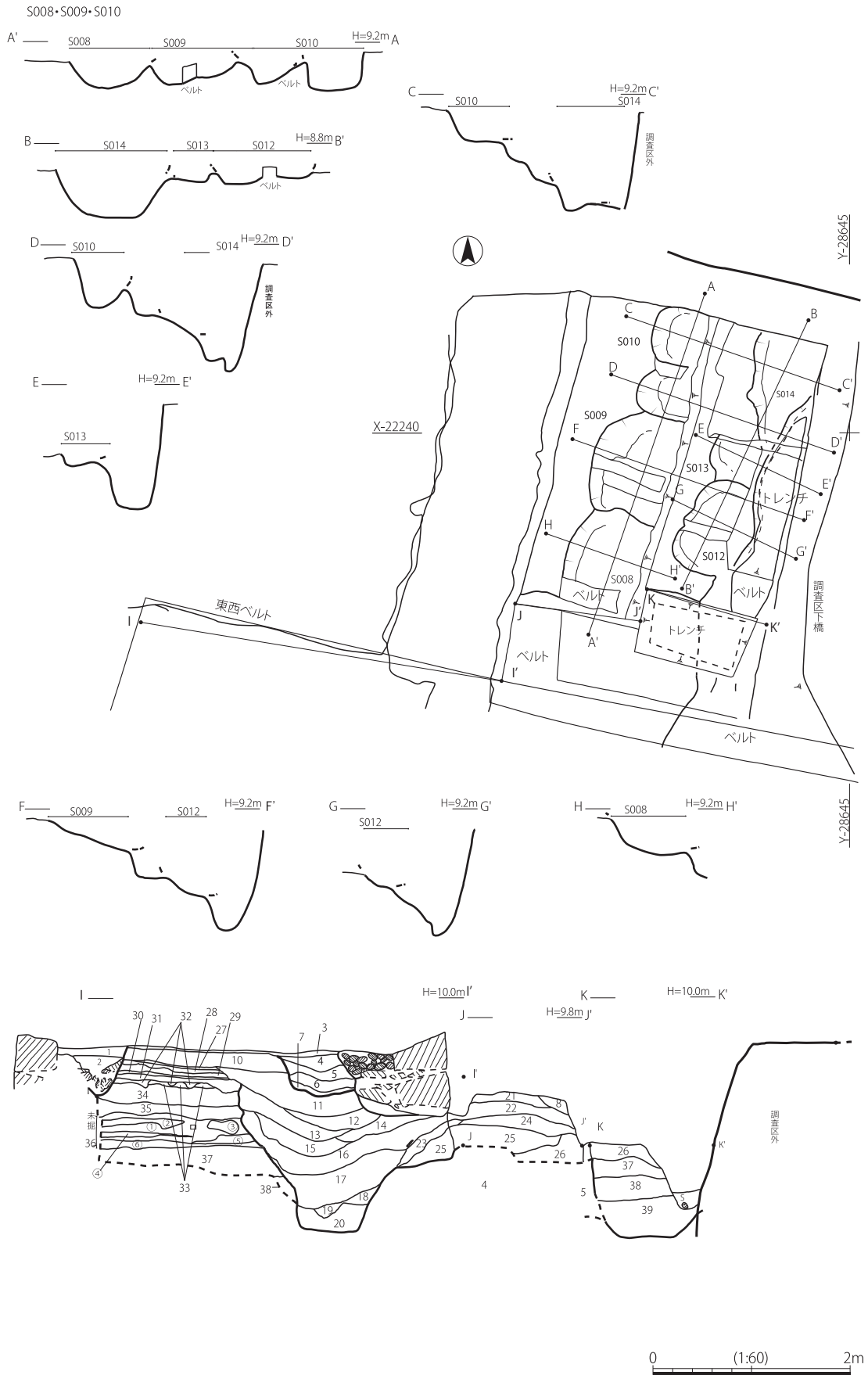


Fig.96 S008・S009・S010・S012・S013・S014 実測図
及び調査区土層断面図 S=1/60

南壁土層註記 E-E'、J-J'、K-K'

1層: Hue10 YR3/2 (黒褐色土); しまり強く、粘性中。敷石とみられる円礫混じる。焼土粒子、炭化物含む。

2層: Hue10YR3/2 (黒褐色土); しまり強く、粘性中。0.5～7.0mmの明黄褐色砂のブロックが多量に混じる。焼土粒子、炭化物含む。鉄分沈着する。

3層: Hue10YR3/4 (暗褐色土); しまり強く、粘性中。1.0～2.0cmの黄褐色砂のブロックが少量混じる。焼土粒子、炭化物含む。

4～7層: S015の埋土

8層: Hue2.5YR5/2 (暗黄灰色砂); しまり、粘性やや弱い。1.0cm前後の黄褐色粘土のブロックが少量混じる。鉄分沈着著しい。

9層: Hue2.5YR4/1 (黄灰色粘土); しまり弱く、粘性強い。炭化物を含む。鉄分沈着する。

10層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); しまり強く、粘性やや弱い。0.5～3.0cmの黄褐色砂のブロック少量混じる。焼土粒子、炭化物含む。

11層: Hue10YR3/2 (黒褐色土); しまり中、粘性やや弱い。やや砂質。0.5～7.0cmの黄褐色～青灰色砂のブロックが混じり部分的にしまりが弱い。炭化物、焼土粒子少量含む。

12層: Hue10YR3/2 (黒褐色砂質土); しまり中、粘性やや弱い。0.5～5.0cmの黄褐色～青灰色砂のブロックが混じる。炭化物少量含む。

13層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); しまり、粘性中。0.5～5.0cmの黄褐色～青灰色砂のブロックが混じり、褐色土が多量に混じる。

14層: Hue2.5YR6/4 (にぶい黄褐色土); しまり、粘性強い。1.0～2.0cm前後の青灰色粘土のブロック少量混じる。鉄分付着著しい。

15層: Hue10YR4/2 (灰黄褐色粘質土); しまり中、粘性やや強い。0.5～5.0cmの黄褐色～青灰色砂のブロックが多量に混じる。

16層: Hue10YR4/3 (にぶい黄褐色粘土); しまり中、粘性強い。1.0～2.0cmの褐色粘土、青灰色砂のブロックが少量混じる。焼土粒子、炭化物を少量含む。

17層: Hue10YR4/2 (灰黄褐色土); しまり強、粘性中。2.0cm前後の青灰色砂のブロックが少量混じる。焼土粒子、炭化物少量含む。下部に鉄分沈着し、マンガンが著しく沈着する。

18層: Hue10YR5/2 (灰黄褐色土); しまりやや弱く、粘性強い。1.0～2.0cm程の黄褐色粘土ブロック少量混じる。

19層: Hue7.5GY4/1 (緑灰色砂); しまり強く、粘性弱い。地山となる下部砂層の拳大のブロックが集中した。黒褐色土混じる。

20層: Hue2.5YR4/1 (灰黄色粘土); しまりやや弱く、粘性強い。1.0～3.0cmの青灰色砂のブロック少量混じる。細い管状鉄分沈着著しい。

21層: Hue2.5YR5/2 (暗灰黄褐色粘土); しまり、粘性強い。0.5～1.0cmの黄褐色砂ブロック混じる。鉄分沈着著しい。

22層: Hue10YR3/4 (暗褐色土); しまり強く、粘性中。1.0cm前後の黄褐色粘土のブロック少量混じる。焼土粒子、炭化物少量含む。

23層: Hue10YR3/4 (暗褐色土); しまりやや強く、粘性中。1.0～2.0cmの黄褐色砂のブロック少量混じる。焼土粒子、炭化物少量含む。鉄分若干沈着する。

24層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); しまり強く、粘性やや強い。0.5～3.0cmの黄褐色粘土、砂のブロック多量に混じる。焼土粒子、炭化物若干含む。

25層: Hue2.5YR6/3 (にぶい黄色粘土); しまり、粘性強い。緑灰色砂と黒褐色土のブロックが混じり合う。

26層: Hue10YR3/4 (暗褐色土); しまりやや強く、粘性中。1.0～2.0cmの黄褐色砂のブロック少量混じる。焼土粒子、炭化物含む。鉄分若干沈着する。

27層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); しまり強く、粘性中。0.5～1.0cmの黄褐色粘土のブロックが少量混じる。

28層: Hue10YR3/3 (暗褐色粘質土); しまり強く、粘性やや強い。0.5～1.0cmの黄褐色粘土のブロック多量に混じり土器片を含む。上位硬化面に相当する。

29層: Hue2.5YR6/6 (明黄灰色粘土); しまり、粘性強い。1.0～5.0cmの暗褐色粘土のブロック混じる。マンガンが沈着する。下位硬化面に相当する。

30層: Hue2.5YR7/4 (浅黄色砂); しまり強く、粘性中。1.0～3.0cmの暗褐色粘土のブロックを多量に含む。鉄分沈着する。

31層: Hue7.5YR3/1 (黒褐色土); しまり強く、粘性やや弱い。0.5～3.0cmの黄褐色砂のブロックを多量に含む。鉄分沈着する。

32層: Hue10YR3/2 (黒褐色土); しまり強く、粘性やや弱い。下位の黄褐色砂のブロックを多量に含む。鉄分若干沈着する。

33層: Hue2.5YR6/6 (明黄褐色砂); しまり、粘性弱い。きわめてしまりの弱い砂層。

34層: Hue7.5YR6/3 (オリーブ黄色砂); しまり強く、粘性弱い。クラックが発達し上位の土が貫入する。

35層: Hue7.5GY4/1 (暗緑灰色砂); しまり強く、粘性弱い。硬くしまる。

36層: ① Hue10BG4/1 (暗緑灰色砂); しまり、粘性弱い。目の粗い砂でしまりが無い。
②層: Hue2.5YR6/2 (灰黄色粘土); しまり、粘性強い。上部に鉄分が沈着し、硬くしまる。
③層: Hue10YR5/1 (灰色粘土); しまり、粘性強い。青灰色粗砂が混じり上部に鉄分が沈着、硬くしまる。
④層: Hue5B4/1 (暗青灰色細砂); しまり強く、粘性弱い。灰色粘土が混じり上部に鉄分が沈着、硬くしまる。
⑤層: Hue10BG4/1 (青灰色細砂); しまり中、粘性弱い。
⑥層: Hue10BG3/1 (暗青灰色粗砂); しまり、粘性弱い。

37層: Hue5B4/1 (青灰色細砂); しまり強く、粘性弱い。上部に灰色粘土 (Hue10Y6/1) の水平ラミナがみられる。きわめて硬くしまる。

38層: (Hue2.5Y5/4 [黄褐色粘土]; しまり、粘性強い。) と (Hue5B4/1 [暗青灰色細砂]; しまり強く、粘性弱い) の水平ラミナ層。前者の厚さ約5.0cmに対して後者は約1.0cmの厚さである。体的に硬くしまる。

39層: Hue2.5YR4/1 (灰黄色粘土); しまり、粘性強い。マンガンが沈着する。きわめて硬くしまる。

S026 土層註記

①層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); ややしまり、粘性あり。褐色～黄褐色土ブロック (1.0cm大) を多く含む。

- ②層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；①層に似るがやや暗く、ややしまりが弱く、粘性が増す。
- ③層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；褐色土ブロックを多く含み、ややしまり、粘性がある。
- ④層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；シルト～砂質土。しまり弱い。
- ⑤層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；褐色土ブロックを多く含み、ややしまり、粘性がある。陶器片を含む。
- ⑥層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；褐色土ブロックを多く含む。⑤層よりしまりが弱まる。砂質土。
- ⑦層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；砂質土。しまりは弱く、混入物も少ない。
- ⑧層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；黒褐色砂質土（Hue2.5Y3/1）ブロック（2～3cm大）が混在ししまり、粘性はない。

め溶解しており、一方の口は口唇部から5cmほどのところで段を持ち、外側にラッパ状に屈曲して開いている。これらの羽口の中には体部に丸に「甚七」の印が押しあてられている。この羽口に関しては『熊本県文化財調査報告第38集 生産遺跡基本調査報告書 I』1979の中に「土製複式羽口」という名称で、「甚七」の刻銘についても紹介されている。報告書によれば、松橋焼きの可能性があるとされている。その当時の出土分布域は宇城・八代地域に限られている。現在の出土分布は確認していないが、中心地より北に位置するのは確かである。松橋焼きは、幕末に始まり明治40年代に最盛期を向かえ、素焼き窯では羽口のほか、七輪・火消壺・焙烙・こたつ火鉢・植木鉢などを焼いていたという。今回この調査地でこの松橋焼きの羽口が出土したということはこれまで以上に松橋焼きの流通が広範囲に渡ることを示している。さらに、他の生活雑器類も松橋焼きのものが使用されていた可能性も考えられる。

[A-4-S007] (Fig.94)

この遺構は、E-12グリッドで検出した土坑である。S005の西側に近接する。長径が90cm、短径は一部欠けるも48cmを測り、形状はやや縦長の楕円状を呈する。深さは、確認面から22cmを測る。現状ではこの深さであるが、堀の肩か斜面付近から掘り込まれたとすれば、50cmほどの深さあった可能性がある。遺構として残存度が悪く、出土遺物はわずかであった。

[A-4-S008, 009, 010, 012, 013] (Fig.96 上)

これらの遺構は、F-15グリッドで検出した土坑群である。検出した場所は調査区の北東部に位置し、鉄道の東側石垣の裾部付近で、堀にかかっているものもある。

S008、S009、S010は横並びで検出した一連の土坑群である。出土した場所は、調査区東側の壁下付近に当たる。いずれも小規模のもので直径が50cm～1mほどで、掘り込みも確認面から10cm～15cmほどであった。各遺構は若干の時期差があり、S010が古く、順にS009、S080に切られていた。出土遺物は少なく、時期の確定には至らないものの明治初頭においてよいかと考える。

次にS008～S010のすぐ東側の段落ちした場所で検出したのが、S012及びS013の土坑である。これらの土坑はS013をS012が切る形で検出した。S013は確認トレンチでも掘削されているため、成果な形状は不明である。深さが5cmほどを測る。S012は長径が1m、短径が70cmほどの楕円形を呈する。深さは確認面から20cmを測る。

両土坑とも出土遺物が少なく時期は不明である。明治以降の可能性が高い。

[A-4-S015] (fig.91、93、99)

この遺構は、E-13グリッドからE-16グリッドにかけて検出した溝ととらえた遺構で、調査区をほぼ南北に走る。この遺構は、東側石垣の裏込めの掘削ラインに一部かかっている。遺構は、堀S030に切られ、S022・020・023の各遺構を切っている。

埋土は、全体的には淡灰色の粘質土であった。さらにいくつかの層に分層できるが、埋土が一様の状況のためほぼ同じ時期に埋められたことを示している。埋土は、確認した当初この溝は江戸期の参道の側溝と判断していた。しかし、埋土の直下に溝を示すような水性堆積層を確認することができなかつたため、その

説は怪しくなった。他の調査区でも同じような遺構が見られたが、実際に掘削すると、複数の土坑の集合体である場合が多かった。ただ、この調査区では、精査したものの明確に複数の土坑として分離することは困難であった。そのため、溝状の遺構として扱うこととする。

堀 S030 に切られ、S022・020・023 の各遺構を切っている。

この遺構からは、粘質土中から多くの遺物が出土している。時期幅もあるようである。

出土遺物は、287 が磁器の染付瓶、288・289 は陶器である。290 は褐釉のかかる陶器で、463 は肥前の磁器碗で二重網目文を内外器面に描く。外底面に渦福が書かれる。464 は磁器染付の皿で、外底面に蛇の目釉剥ぎが施される。465 は、磁器染付碗で、536 は青磁の壺である。590 は藁灰釉をかけた陶器の鉢で、小代焼きであろう。

[A-4-S016] (fig.94)

この遺構は、E・F-13 グリッドで検出した土坑である。S001 によって切られており、S001 が鉄道に係る遺構であることは前述したとおりである。また、この遺構は S018 を切っており、明らかに石垣の下に潜り込んでいるため、鉄道の敷設以前の遺構であった。そこからは近世末から明治初頭と考える陶磁器、面子などが出土した。

[A-4-S017] (fig.94)

この遺構は、F-13 グリッドで検出した土坑である。S019 に近接し、S028 によって切られている。径が 40cm ほどのやや楕円気味の遺構で、深さは確認面から 26cm 程である。ほとんど、遺物は出土していないため時期は不明である。他の遺構と埋土は似ており、幕末から明治初頭頃の遺構であろう。

[A-4-S018] (fig.94)

この遺構は、E・F-13・14 グリッドで検出した土坑である。S001 のコンクリートを除去し、清掃中に検出した遺構である。同時に S016 も確認した。精査したところ、S018 は、S016 に切られていた。小振りの土坑で残存している範囲では径は 70cm ほどである。深さは 29cm ほどである。この遺構からも少量の遺物が出土した。幕末から明治初頭にかけての遺物であった。

[A-4-S019] (fig.94)

この遺構は、F-14 グリッドで検出した土坑である。調査区東側堀部に設けた中央ベルトの下で確認している。S018 に近接し、堀の落ち込みによって切られている。遺構としては、全体の 1/4 ほどを検出したのみである。出土遺物はわずかで、近世以降のものに限られる。検出した範囲では、残存長は 1.0 m から短い方で 40cm ほどを図る。円形状を呈する。確認面からの深さは 15cm ほどであった。ここからの出土遺物はほとんどなかった。

[A-4-S020] (Fig.97)

この遺構は、E-15 グリッドで検出した土坑である。当初 S026 と一つのものとして調査を行っていた。土層観察と再度面的に精査したところ、別遺構としてきり合っていることが分かった。

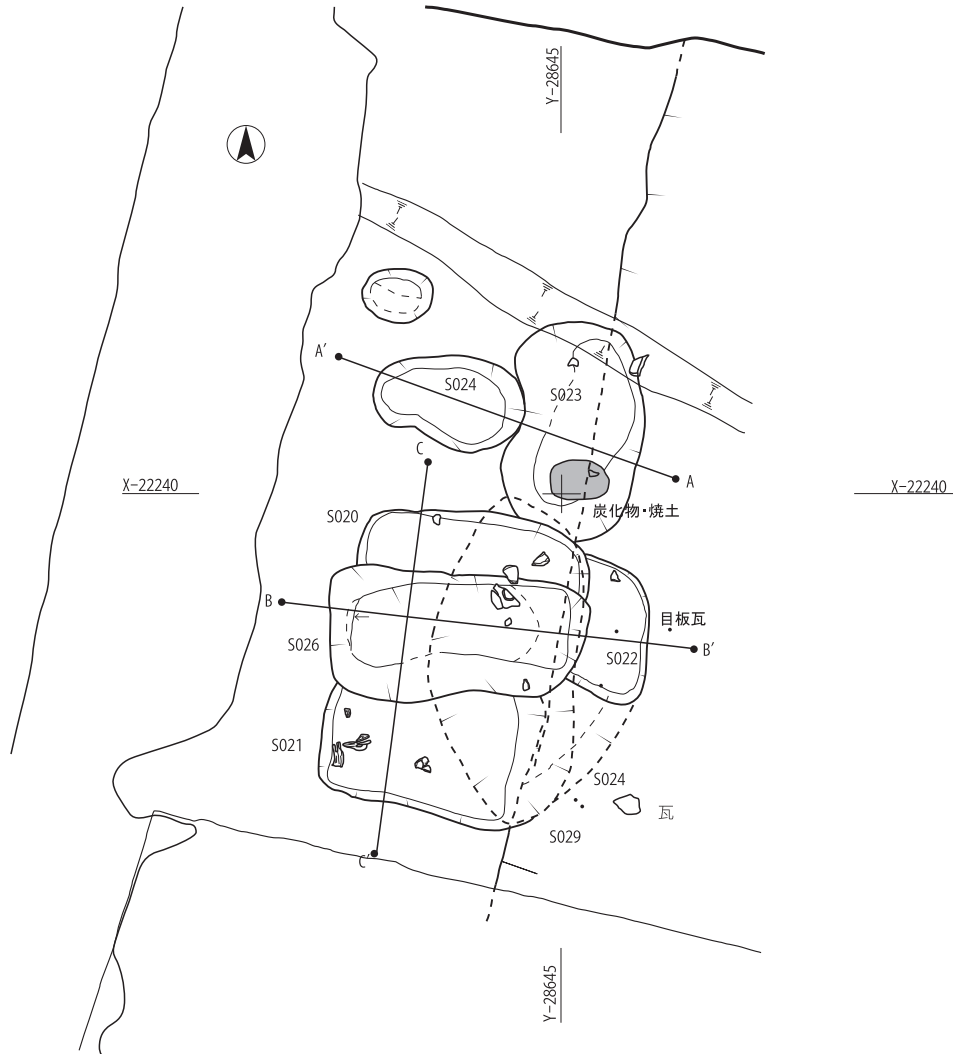
長径が 1.22 m、残存している短径が 0.34 m、深さ 12cm を測る楕円形を呈する。埋土は暗褐色土でしまりはさほどない。

[A-4-S021] (Fig.97)

この遺構は、E-15 グリッドで検出した遺構である。S026 によって切られている。一方 S022 を切っている。

西側の遺構範囲がやや不明瞭で正確な形状が出せないが、隅丸方形気味の浅い土坑である。推定で長径が 1.3 m ほど、短径が 66cm 強、深さは 15.5cm ほどである。

西側の部分で輪郭が不明瞭になったのは、この部分が砂質になっていたため、意図的に砂を入れたものようである。



S020

1層: Hue10YR4/3(にぶい黄褐色土); 5mm~1cm大の褐色土粒が混在。
かたくしまる。シルト~砂質。
2層: Hue10YR4/3(にぶい黄褐色土); 1層よりもしまり弱まる。やや粘性有。

S021

a層: Hue10YR3/3(暗褐色土)にぶい黄褐色土ブロック(3cm大)混在。
ややしまる。シルト~砂質。
b層: Hue10YR3/3(暗褐色土); 褐色土粒(2mm大)を多く含み、
ややしまり、粘性有。
c層: Hue10YR3/3(暗褐色土); a層、b層よりもやや暗く、
しまり弱、粘性無。
d層: Hue10YR3/3(暗褐色土); 土色はb層に似るが、しまり弱い。

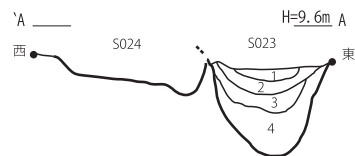
S022

1層: Hue10YR3/4(暗褐色土)シルト~砂質。かたくしまる。
褐色土粒(5mm大)をわずかに含む。

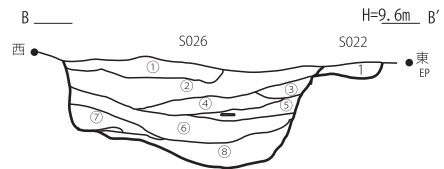
S023

1層: Hue10YR2/3(黒褐色土)シルト~砂質。やや粘性、しまり有。
1cm大の小礫をわずかに含む。
2層: Hue10YR3/4(暗褐色土)ややしまり有。粘性有。
5mm大の焼土(土器?)粒をわずかに含む。
3層: Hue10YR3/4(暗褐色土)黄褐色土ブロック(1cm前後)を多く含み、
きめが粗くややしまる。
4層: Hue10YR2/3(黒褐色土)褐色~黄褐色土ブロック(2~3cm大)が混在。
きめが粗く、ややしまりがある。

S023, 024



S022, S026



S020, S026, S021

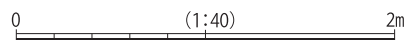
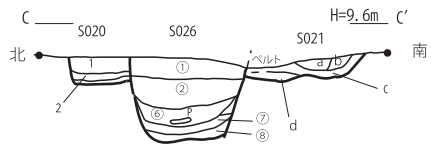


Fig.97 S020・021・022・023・024・026・029 実測図 S=1/40

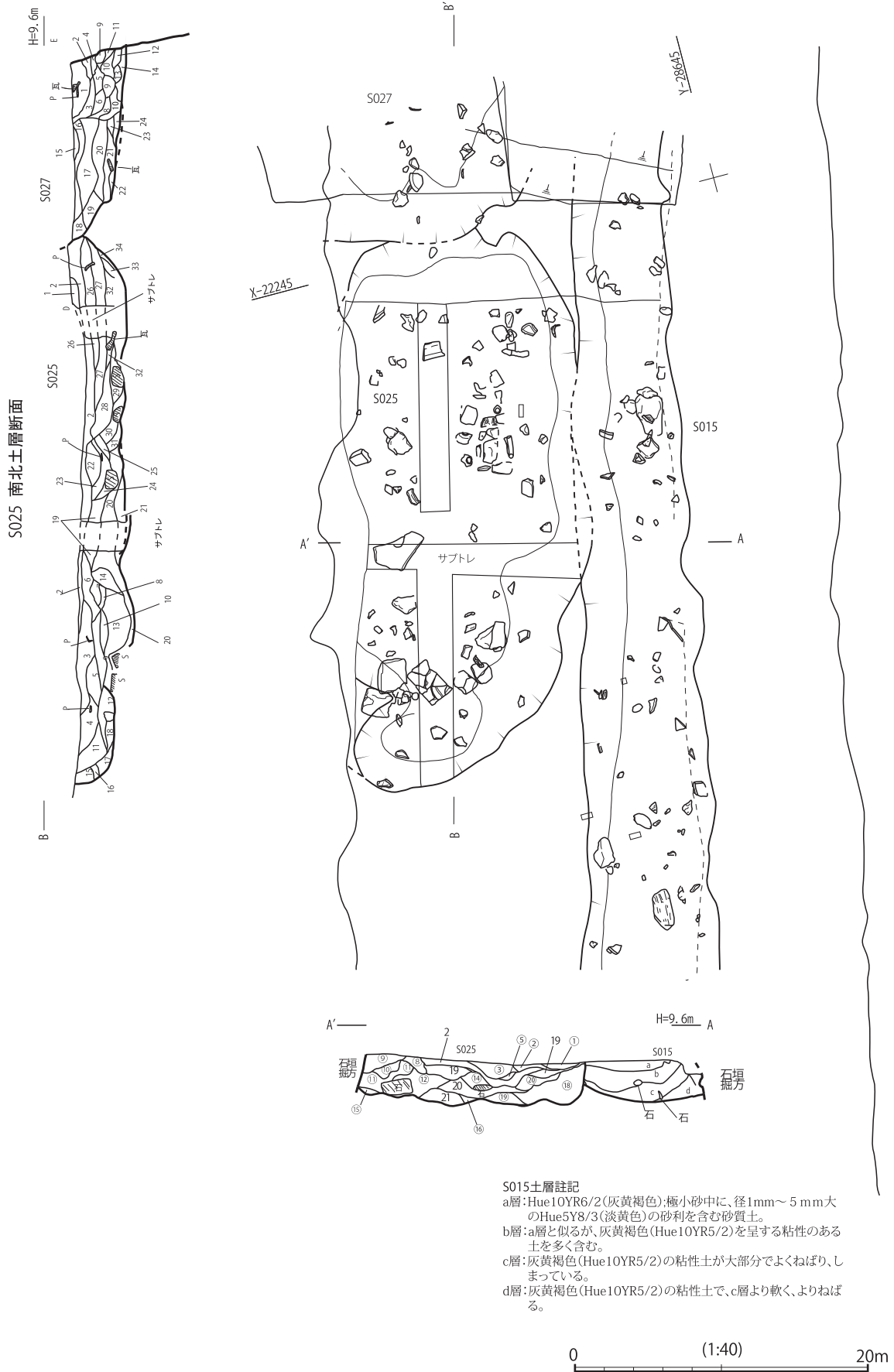


Fig.98 S015・S025・027 遺物出土状況及び土層断面実測図 S=1/40

S025 南北土層註記 (Fig.98 B-B')

- 1層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 粘質土。よくしまる。5mm大の炭化物をわずかに含む。
- 2層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); ③層とほぼ同じ。やや砂粒を含む。
- 3層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 粘質土。よくしまる。2~3mm大の黄褐色砂質土粒 (Hue2.5YR5/3) を少量含み、陶器、磁器細片が混入する。
- 4層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 粘性が強い。近世~近代?の播鉢を含む。
- 5層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 4層に似るが、きめが細かく、しまりも強まる。
- 6層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 4層に似る。
- 7層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); しまり弱く、2~3mm大の黄褐色砂質土 (Hue2.5YR5/3) をわずかに含む。
- 8層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 7層に似るがしまり弱く、炭化物がわずかに混入する。
- 9層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 5層に似るが、さらに粘性強まる。 10層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 8層に似る。
- 11層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); ややしまり、粘性は強い。2~3cm大の黄褐色粘質土ブロックを多く含む。
- 12層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); しまり、粘性弱い。黄褐色土ブロック (1cm大) を多く含む。
- 13層: Hue10YR4/4 (褐色土); 3~5cm大の粘質土ブロックと砂質土が混入。
- 14層: Hue10YR4/4 (褐色土); 土色は13層に似るが、きめ細かく、粘性が強い。
- 15層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); しまり弱い。粘質土。
- 16層: Hue10YR4/4 (褐色土); ややしまる。凝灰岩片を含む。
- 17層: Hue7.5YR4/4 (褐色土) S015 a層に似る。
- 18層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 17層に似るが、しまり、粘性弱い。
- 19層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); ①層と同じだがややしまる。
- 20層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 1~3cmの黄褐色 (Hue10YR6/8) の砂粒子を含み、ややしまりがない。
- 21層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); ⑥層に似るが2~3mm大の砂質粘土を多く含む。しまり弱い。
- 22層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 5~6層に似る。
- 23層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 5~6層に似るが、きめが粗くしまりも強い。土師器細片?を含む。
- 24層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 径15cm大の礫を含み、しまり強い。
- 25層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 24層に似る。
- 26層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 2層に似るが、ややきめ粗く炭化物をわずかに含む。
- 27層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 2層に似るが、黄褐色粘質土ブロック (2cm大) をわずかに含み、やや粘性強まる。
- 28層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 2層に似るが、しまり強まる。
- 29層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 2層に似るが、粘性強まる。

- 30層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 5~6層に似る。10cm大の礫を下位 (床直) に含む。
- 31層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 5~6層に似る。
- 32層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 下位に瓦、陶器、磁器が多量に堆積。
- 33層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 27層に似る。
- 34層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 粘性強く、混入物少。

S025 東西土層註記 (Fig.98 A-A')

- ①層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 粘質土。かなりしまる。10mm大の淡黄色 (Hue2.5Y7/4) の硬い砂質土塊を含む。
- ②層: 0.5~1.0mm大の砂利を多く含み、5mm大の明黄褐色 (Hue2.5Y7/6) の砂質土塊を含む。
- ③層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 粘質土。よくしまる。
- ④層: ①層と②層が入る。
- ⑤層: ①層と同じであるが、ややしまる。
- ⑥層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 粘質土でよくしまる。
- ⑦層: Hue7.5YR4/4 (褐色土); 粒子が粗いため、しまりが弱い。0.5~1.5cm大の土塊や小砂利を多く含む。
- ⑧層: Hue10YR4/4 (褐色土); よくしまる。1mm大の粒子をわずかに含む。
- ⑨層: 註記なし
- ⑩層: ⑧層に似るが、やや砂粒が多く、2mm大のものも含む。
- ⑪層: Hue10YR6/8 (明黄褐色土); ややしまりない。1~3mm大の砂粒を含む。
- ⑫層: Hue10YR4/6 (褐色土); 凝灰岩とやや砂粒を含む。5mm大の塊を多く含み、全体として粘質土。
- ⑬層: Hue10YR3/4 (暗褐色土); 粘性土。
- ⑭層: Hue10YR2/3 (黒褐色土); しまりなし。0.1mm以下の砂粒を含む。
- ⑮層: Hue10YR4/2 (灰黄褐色土); よくしまる。5mmほどの砂粒を含む。粘質土。
- ⑯層: Hue10YR4/2 (灰黄褐色土); よく締まり、5mmほどの砂礫粒を含む粘質土。
- ⑰層: ⑩層と似るが、やや軟い。

S027 南北土層註記 (Fig.98 B-B')

- 1層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); ややしまり、粘性弱。5mm大の炭化物を少量含む。播鉢片も含む。
- 2層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); 1層よりややしまり、粘性とも弱い。黄褐色砂質土ブロックを少量含む。
- 3層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); 2層に似る。炭化物を少量含む。
- 4層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); 粘性強く、黄褐色粘質土ブロックを多く含む。
- 5層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); 粘性弱く、やや暗い。
- 6層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); 4層に似る。土師細片を含む。
- 7層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); 締まり、粘性強い。黄褐色粘質ブロック含む。
- 8層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); 3層に似る。
- 9層: Hue10YR3/3 (暗褐色土); 4層に似る。

- 10層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり弱く、やや粘性あり。5 mm大の焼土粒をわずかに含む。
- 11層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性弱い。
- 12層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性弱い。
- 13層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性弱くやや暗い。
- 14層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；ややしまり強まる。砂質土。1 cm大の小礫をわずかに、鉄分、マンガンを含む。
- 15層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；シルト質で硬くしまる。参道硬化面か。
- 16層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；にぶい黄褐色土ブロックと小礫が混在。
- 17層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；硬くしまり、粘性も強い。にぶい黄褐色土ブロックをわずかに含む。
- 18層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；ややしまり、粘性あり。にぶい黄褐色土ブロックを多く含む。
- 19層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり弱く、粘性あり。凝灰岩小片を含む。
- 20層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；にぶい黄褐色土ブロック5 mm大の小礫を多く含み、きめが粗い。
- 21層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；ややしまり、粘性あり。火鉢片を含む。
- 22層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；5層に似る。
- 23層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；21層に似るが、しまり弱い。凝灰岩小片を含む。
- 24層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；14層に似る。

[A-4-S022・S026] (Fig.97)

F-15 グリッドで検出した土坑である。この二つの遺構についてまとめてここで記述する。

当初は、S022としてS020、S021などとの切り合い関係を想定していた。土層断面を残し掘り下げていく過程でS022としていた遺構はS026によって切られていることが分かった。さらにS020、S021、S024、S029なども切っていると分かった。

S022は遺構の一部を検出ただけであったが、S026は確認できた状態で長径が1.36 m、短径が0.62 m、深さが48.5cmを測るやや隅丸方形気味の形状を呈していた。

このS026からの出土遺物は、458は肥前系の磁器染付蓋、外器面に草木の染付がある。内面に茶色の付着物がある。462は肥前の陶器製播鉢で、焼成は良好、播目は13本である。茶褐色の薄い釉がほぼ全面にかかる。461は小型の青磁碗である。小片のため全体の形状は不明であるが、外器面に縦方向に櫛描き文が入る。輸入磁器か。

S026の時期は、出土遺物から幕末までに収まるであろう。S022はそれに先行するが、明確な時期は不明である。

[A-4-S023] (Fig.97)

この遺構は、E・F-15・16グリッドで検出した土坑である。S020によって切られ、S024にも切られている。長径が1.1 m以上、短径が0.7 mを測る楕円形を呈する。深さは確認面から42cmを測る。

埋土中に炭化物と焼土を含むが、道の上ということを考えると火を焚いたとも思えない。何かの都合で周辺で火を使い、その始末のために埋めたのであろうか。

[A-4-S024] (Fig.97)

この遺構は、E-16グリッドで検出した土坑である。

S023の西側に接する。長径80cm、短径50cm測り、やや変形した楕円形である。深さは確認面から12cmを測る。浅い遺構で出土遺物も少ない。時期は不明である。

[A-4-S025] (Fig.98)

この遺構は、E-14グリッドで検出した土坑である。S027に切られている。また、S015を切っている。

この遺構は、検出時にはS027までを一つのものとして考えていたが、調査過程で別遺構であることが分かった。

完掘時では、長径3.8 m、短径1.5 mほどの楕円状を呈する。深さは確認面から30cmほどを測る。遺構の一部は石垣の裏込めとS015でも切られている。当初一つの遺構としたが、掘り下げて床面まで確認する

と深さの違いが現れ、土層観察によれば少なくとも4つの土坑の切り合いが分かった。平面観察では個々の遺構を確認できなかったため、ここでは一つの遺構とした。

出土遺物は、Fig.104 及び PL.62、PL.63 に掲載した。

533 は白磁の紅皿、537 は陶器の小型甕、542 と 677 は陶器の瓶で徳利である。291・593 は陶器の播鉢である。292 は磁器染付碗。293 は磁器の盃 294、磁器染付碗。295 は磁器染付小碗。296 は、磁器染付の鉢。298 は磁器染付鉢。299 は磁器染付盃。297 は磁器染付碗で、黒色粒を少量含み内外面ともに染付。455 は磁器染付小碗、内外面に染付。456 は磁器染付鉢、内外面に染付。457 は関西系の陶器の瓶で、器面は型押し成形である。外器面に布袋を型で作っている。102 は陶器の播鉢で、播目は 29 本。陶磁器類は肥前もしくはその系統のものである。

194 は、土師質土器の乗燭である。この他に銅線や「天草四郎」と記された土師質の小破片なども出土している。

遺構の時期は、小土坑の集まりとしても遺物に若干の時期差があり、同時期にこの範囲が掘られてはいないと考えられる。幕末から明治初頭にかけての範囲に入ると考える。

[A-4-S027]

この遺構は、E-15 グリッドで検出した土坑である。当初は S025 として調査を進めていたが、先に記したように掘り下げていく過程で、別遺構であることが分かった。土層観察によれば、S025 を切っている。

この遺構の形状は、北側が中央トレンチにより切られ、西側は石垣の裏込めのための掘削で失われ、東側は中央トレンチのための掘り下げによりなくなっている。現状では南北に 1.30 m、東西で 1.18 m の範囲が残る。深さは 21.3cm を測る。全体の形状は掘めない。

出土遺物としては、以下のものがある。

185 は、藁灰釉を使った陶器の小碗である。小岱焼きであろうか。193 は、片口を持つ陶器の鉢である。暗褐色の釉が高台部分を残り全面にかかる。内器面底部に重ね焼きの跡が残る。446 は、肥前の磁器染付皿である。外器面に唐草、内器面に草文が入る。447 は外器面に縦方向の文様が入る磁器染付の小碗である。448 は、外耳を持つ陶器の鉢で、内器面に褐色の釉、外器面は胴部途中まで施釉される。449 はコバルト系の釉薬を使った磁器染付の小杯である。450 は、白磁の紅皿である。451 は色絵磁器の碗と考えられる破片である。452 は磁器染付の小碗である。453 は青磁の瓶であろう。454 は陶器の播鉢で薄く内外器面ともに施釉され茶褐色を呈し播目は 10 本である。459 は磁器染付の皿であろうか。高台部は釉剥ぎされる。

460 は土師質の火鉢の底部で、1 脚の一部が残る。内外面に煤が付着する。534 は瓦質の焔炉である焼成は良好で、内器面に煤が付着している。

535 は陶器の植木鉢で、外器面は褐色釉薬に加え黄色や緑色に発色させている。底部には直径 1 cm の穿孔がある。676 は磁器染付の鉢である。678 は磁器染付の皿である。

[A-4-S028] (Fig.95)

F-13 グリッドにおいて検出した。東側傾斜（堀）に掘り込まれている。検出面からの深さは約 1 m、東側壁面土層断面の観察から約 1.3 m の深さであったことが分かった。東側傾斜（堀）埋土の中位より立ち上がっており、出土遺物に碁子や盤線が見られることから、電柱もしくはアンカーの埋設坑と考えられる。埋土中には鉄道敷きの礫が混じり、廃油が湧水した水に浮き上がってくる。

ここでこの遺構とは時期が異なるが、この遺構を確認する過程で検出した遺物についてふれる。

堀の上部から傾斜面に沿って、この付近に遺棄されたと考えられる石塔を 3 個体検出した。石塔はいずれも中世のものと考えられた。火輪が 2 個体と地輪が 1 個体である。火輪は形態的に時期差が認められ、662 が笠の下部がそり気味でやや古手であるのに対し、663 は平坦で新しいようである。地輪は非常に薄く地

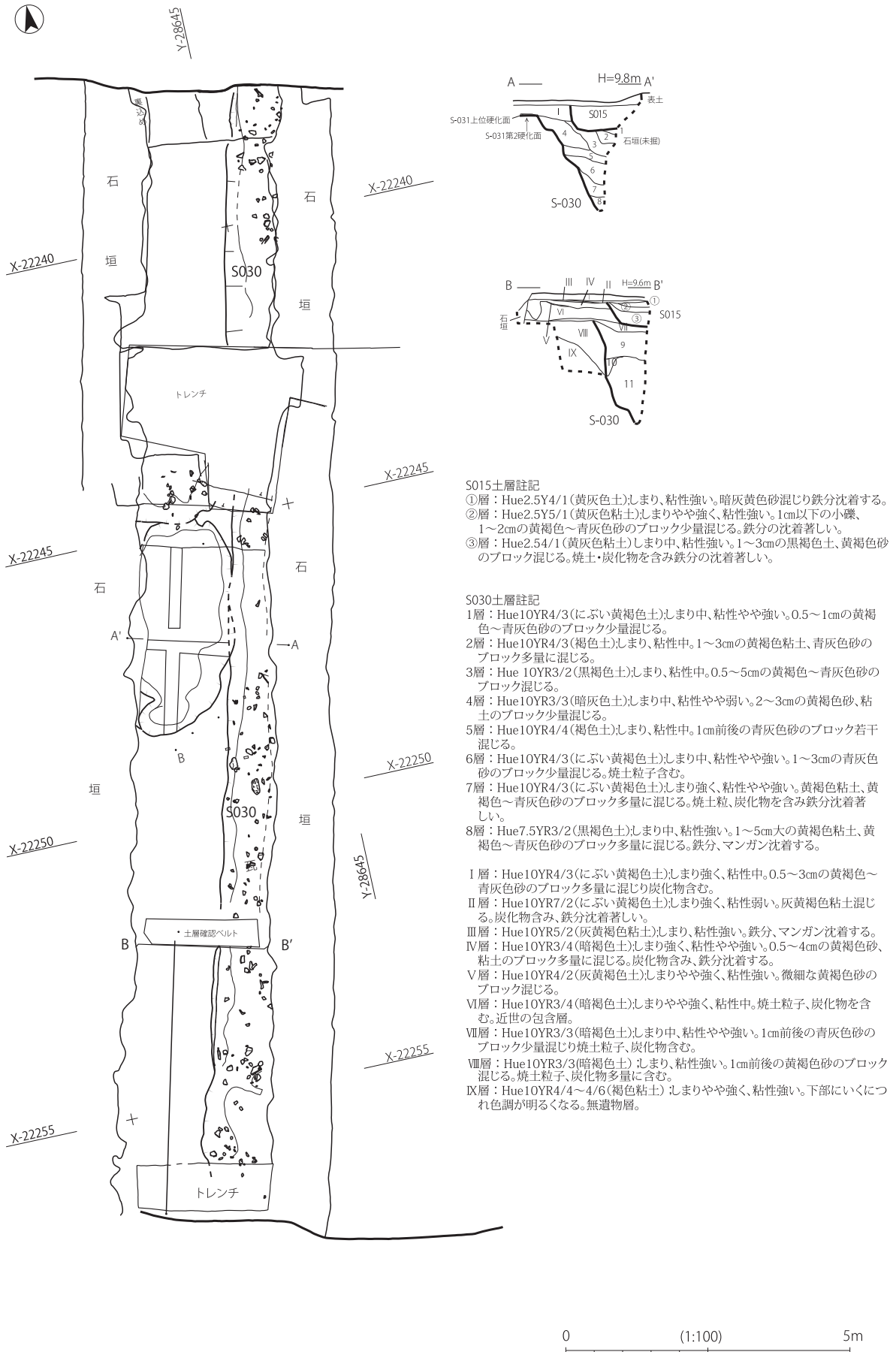


Fig.99 S030 平面及び S015・030 土層断面実測図 S=1/100

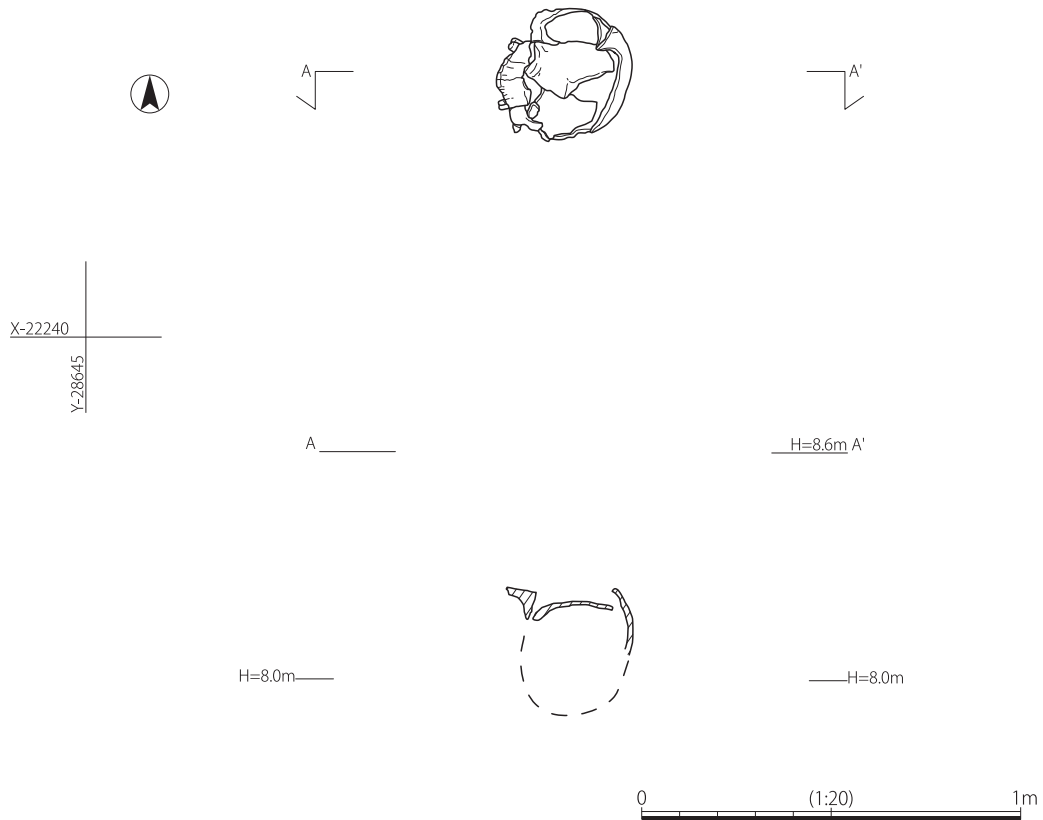


Fig.100 S030 出土頭蓋骨実測図 S=1/20

輪ではなく、他の種類の石塔の土台かもしれない。火輪はいずれも凝灰岩製で地輪は安山岩製であった。この場所は二次調査に際し、No.3 トレンチで宝塔か宝篋印塔の相輪が出土した場所の近くで、今回も別に宝珠も出土しており、近世初頭に古い墓標などを遺棄することが行われた可能性を示唆する。

[A-4-S029]

この遺構は、E-15 グリッドで検出した土坑である。遺構の確認は不十分で掘りすぎてから気づいた遺構であるため、土層断面等から遺構の形状を復元した。長さは 1.72 m、残存幅 0.76 mを測る。深さは不明である。

[A-4-S030] (fig.19)

この遺構はE-13～16 グリッドで検出した溝遺構である。参道2 (S031) を切っている。上面の一部をS015で切られ、鉄道敷設時には石垣によって切られている。その石垣がこの遺構の上に築かれているため、今回の調査では時間的制約もあり、石垣を撤去しての調査は時間的に困難であった。ただ、多少危険ではあったが、この溝遺構の西側半分は完掘できた。

土層の埋土は黒褐色～暗褐色土を主体とし、地山の砂や粘土のブロックが少量混じる (Fig.99)。

土層断面とみると上部幅が約 2 m、深さが 1.2mを測る。確認できた長さは調査区の南北長である 19 m ほどである。

中央トレンチの東西方向の土層断面をみると、この遺構はほぼ逆台形状に掘削され、最下部は岩盤状の硬くしまった砂質土まで掘られていた。調査では上部から掘削を進めた。土層の堆積は大きく 4 層ほどに分層できた。

出土遺物は上部から底部まで出土した。掘削深度によって出土遺物の種類は変化した。上層では近世の

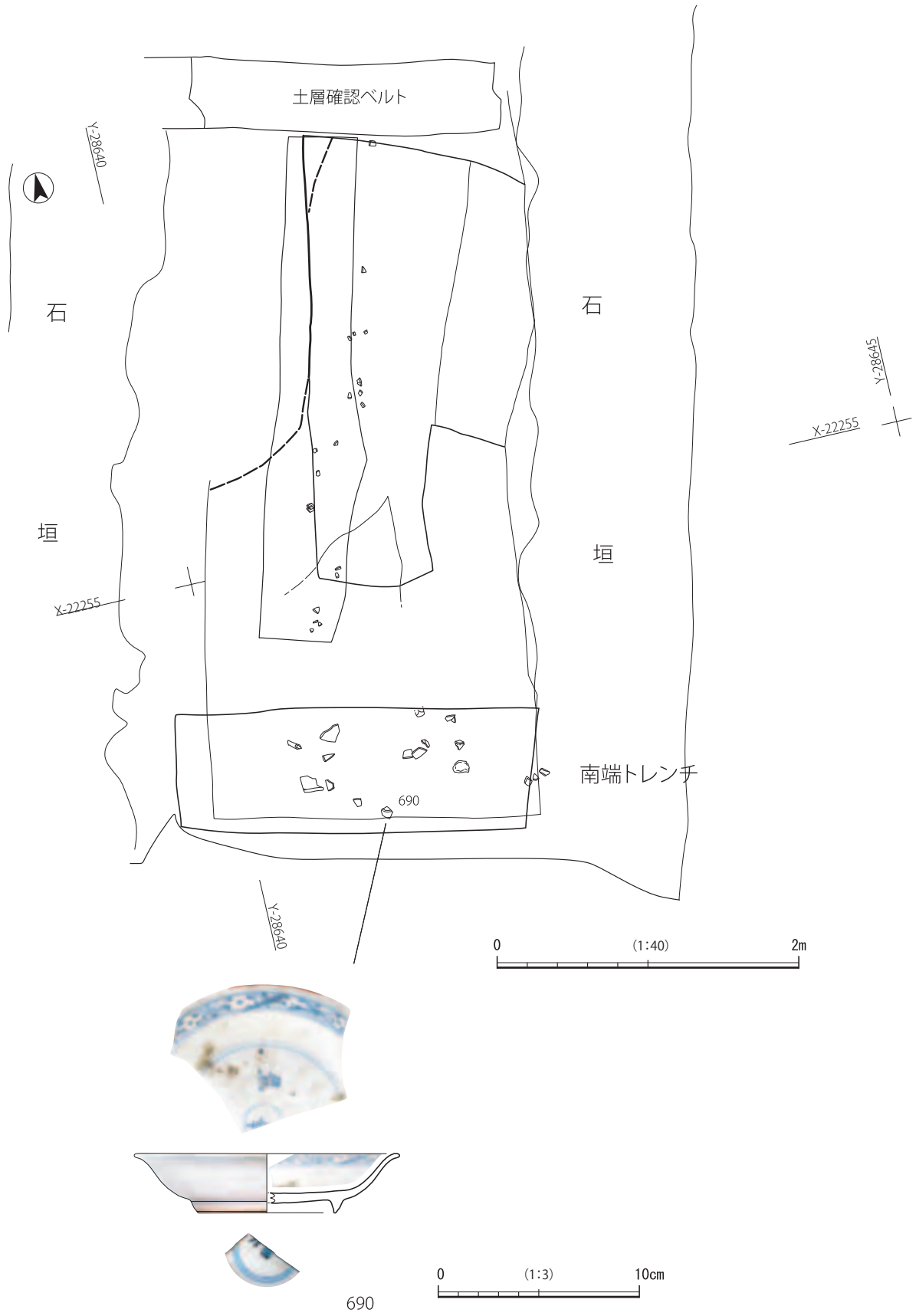


Fig.101 E-12・13G 南端トレンチ遺物出土状況及び出土遺物実測図

17世紀代半ばの陶磁器が出土したが、中位より下になると最古は425のように弥生前期の壺型土器の口縁部や305・420・434などの弥生土器が、次いで303・305・421のような古墳から古代にかけて須恵器の杯蓋や甕などまで出土した。ただ、中心となる時期は中世から江戸初期にかけての遺物である。306・307は土師器、423・424・436などの瓦質の火鉢、438の瓦質の播鉢などの土器、427・428・440・443・444などの青花や白磁の碗・皿類などの輸入磁器が下層から出土した。さらに注目すべきは、多くの獣骨に混じって人の頭骸骨のみが出土したことである。この人骨は、溝の注意よりもやや下層にかかるレベルで出土した。顔面は陥没し、前頭部は頭蓋内に落ち込んでいる。歯の多くが脱落し、奥歯のみ確認できた。右側頭部は掘削時に破損した。この人骨を下関市の人類学研究機構の松下氏に鑑定を依頼したところ、この頭骸骨は女性骨で、多くの刀創が後頭部に残っていることが分かった。溝に獣骨や人骨が遺棄されたように出土するのは中世的な雰囲気を示し、この溝の他の出土遺物と合わせると中世末から近世初頭のものとして推定できる。

ただ、その時期は古い時期の遺物が中位よりやや上の部分に入ることや、上位には近世初頭の遺物が混入することから、この時期にこの溝を埋め上部を造成して参道1を造成した時期とも考えられる。

次に溝の調査を進めると、ほぼ石垣ラインと概ね並行していたが、調査区南端近くまで掘削を進めると、溝の壁の状況がやや軟らかく変化した。これまで溝の壁は地山の硬い層によってしっかりと維持されてきたが、調査区の南端から3mほど手前の付近で壁の硬さが変わったのが分かった。

そこで、その土層の変わり目に簡易的にトレンチを設け掘り進めると、溝の向かう方向に直行するような落ち込みが確認できた。そこで本格的に掘削を開始すると、これまで中央トレンチで確認していた地山の暗灰色を呈する硬くしまった砂質層がなくなっていた。そこで、意図的に削り取られたようになって層の時代が代わっていたのである。そして、その層の代わりに暗褐色の粘性土が地山のあった部分を埋めていた。その深さは南側に行くにつれて上部の確認面から1.4～1.8mほどの深さであった。しかし、この状況を確認したのが、調査期間の終了間際であったため、南端部までの埋められた層を除去し、完掘することはできなかった。ただ、それ以前に南端に設けていたトレンチでも土層の変化は予想できており、埋土に含まれている遺物からその時期が中世末から江戸初期ではないかと考えていた。

[A-4-S031] (Fig.91)

先に参道2とした遺構で、本調査区の中央とトレンチの北側、両石垣の間のさらに西側でのみ検出した。加藤期の道跡として、近世初期と考えた硬化面である。S030によって切られているので、S030よりは古いと考える。

上面には参道1との間に別層が20cmほど入り、その下にS031の面的な広がりを確認できた。硬化面は詳細に土層観察をすると2面あり、第1面は暗褐色粘質土、第2面は黄褐色粘土を主体とする。

第2面は素材となる土の性質のためか、第1面より固くしまっていた。調査では第1面を確認した後、第2面を出した。途中で遺物は含まれず、時期の特定はできなかった。少なくとも一回は整備したものと考える。

[A-4-S032]

この遺構は、調査区西側の側溝石垣のさらに西側にあるピット群である。長さ19.2mに渡り確認した。ピット間の間隔は66cmを測る。鉄道敷設後の「柵列」と考えられる。杭が腐食したか、抜かれたためその痕跡だけが残ってピット群になったものである。A-5調査区でも確認され、鉄道と一般道路との境に設置されたものであり、近年まで同様の配置で柵が設けられていた。

遺構の時期は鉄道敷設以降、新幹線工事によるJR鉄道の移動までと考える。

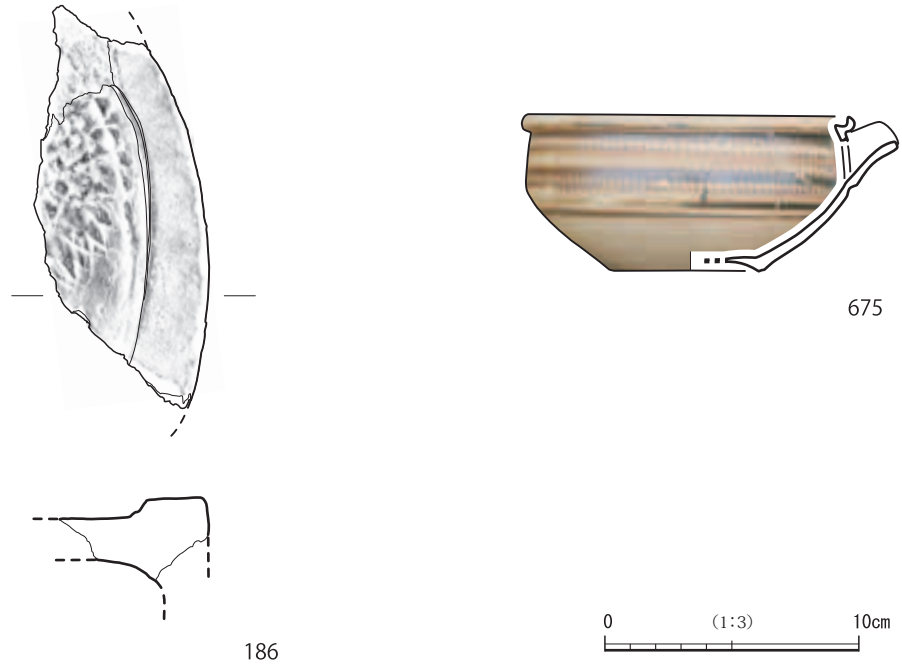


Fig.102 S003・S007 出土遺物実測図 S=1/3

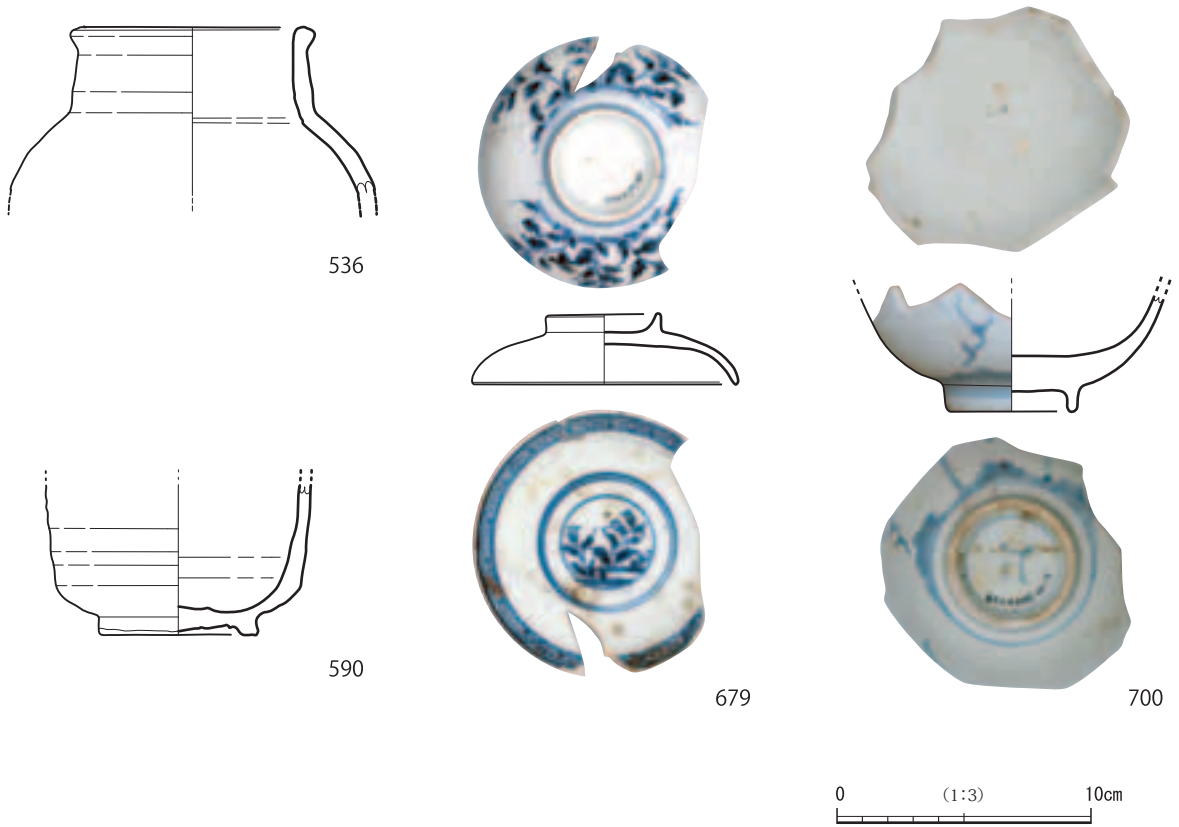


Fig.103 S015・S017 出土遺物実測図 S=1/3

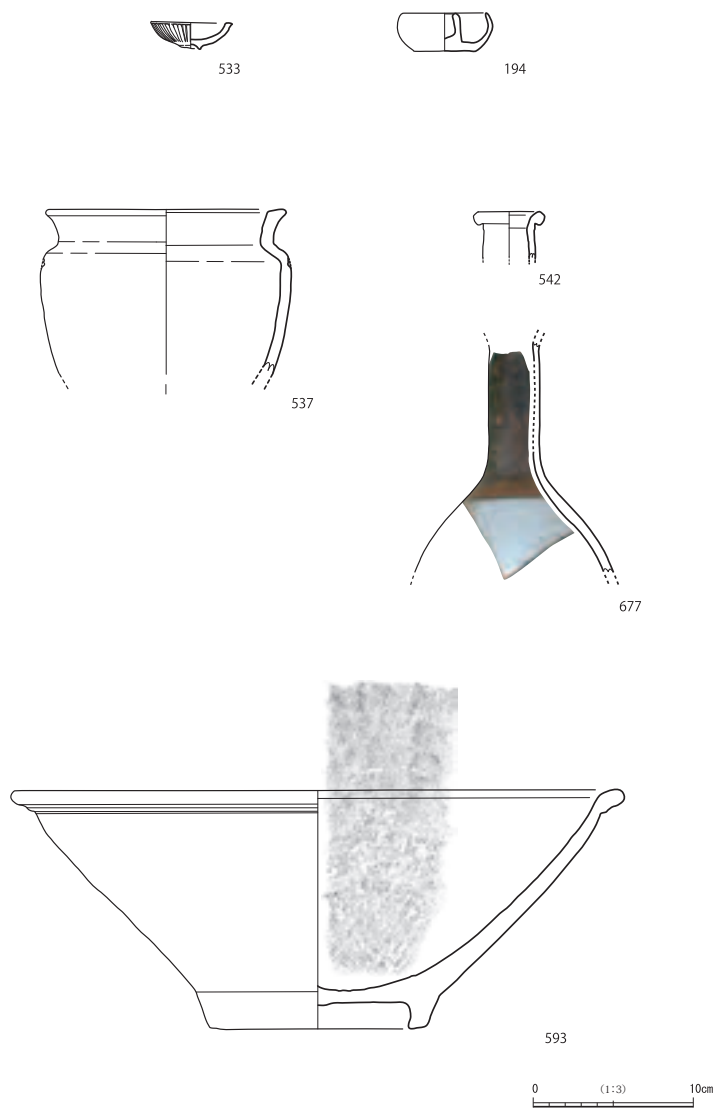


Fig.104 S025 出土遺物実測図 S=1/3



Fig.105 S027 出土遺物実測図 S=1/3

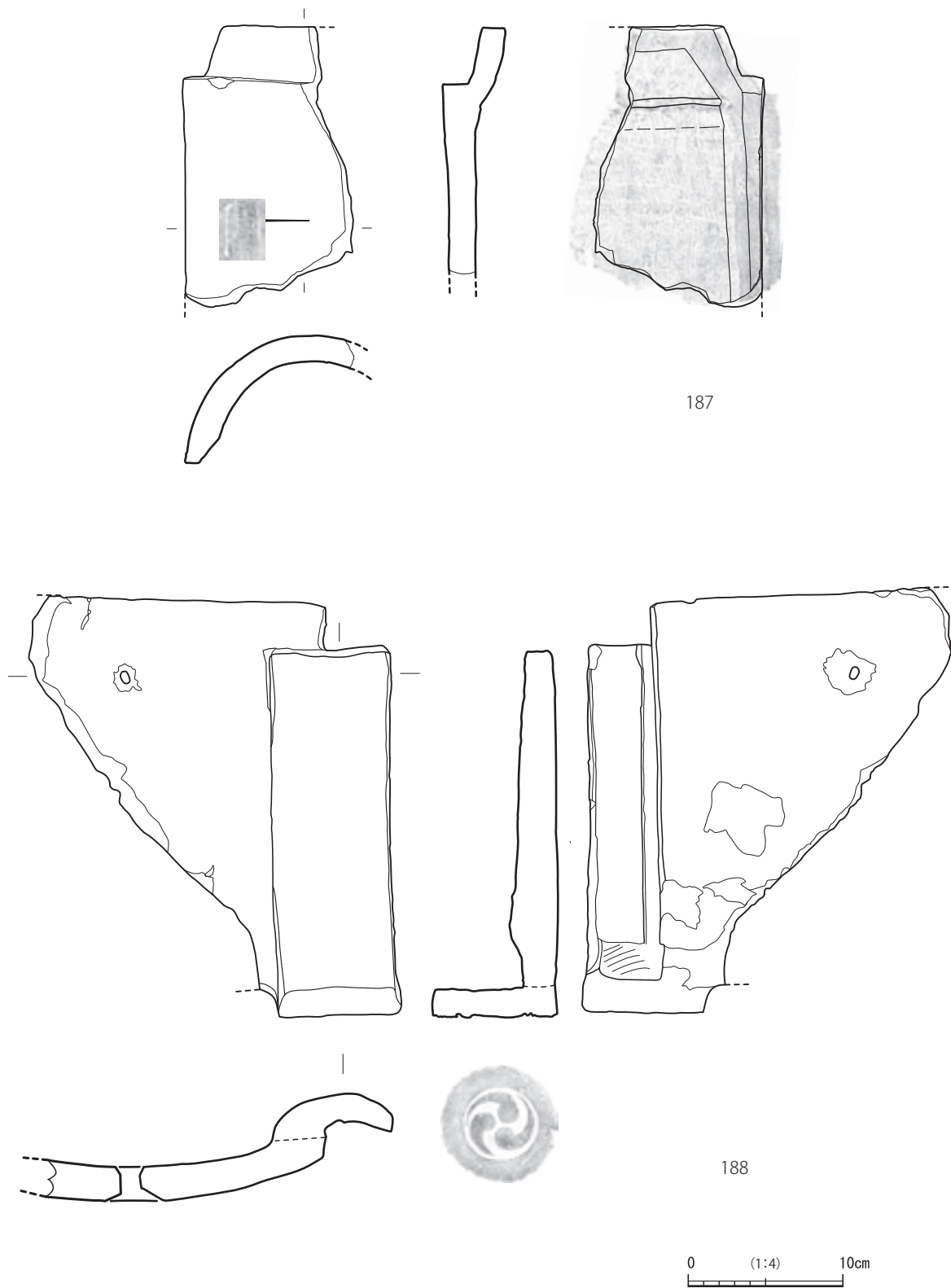


Fig.106 F-14・15G 出土遺物実測図 S=1/4

PL.55 花岡山・万日山 A-4 調査区遺構写真 (1)



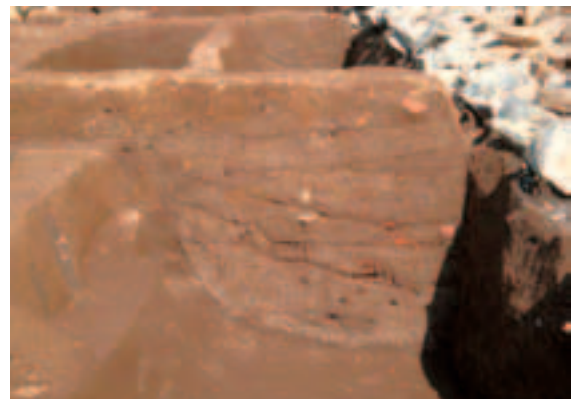
参道検出状況



S008 ~ 010・012 ~ 014 完掘状況



S015 遺物出土状況



S015 南側ベルト土層断面



S015 完掘状況



S023 東西ベルト土層断面

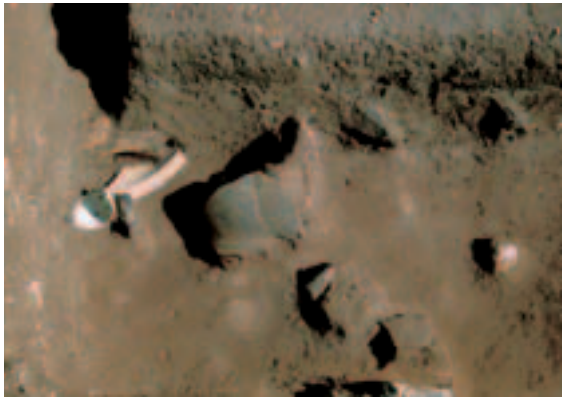


S025 遺物出土状況 (1)



S025 遺物出土状況 (2)

PL.56 花岡山・万日山 A-4 調査区遺構写真 (2)



S025 遺物出土状況 (3)



S025・027 土層断面 (1)



S025・027 土層断面 (2)



S025・027 土層断面 (3)



S028 周辺 石塔出土状況



石塔出土状況 (1)



石塔出土状況



掘埋土中 宝珠・鞆の羽口等出土状況

PL.57 花岡山・万日山 A-4 調査区遺構写真 (3)



堀部分完堀状況 (北より)



S005・S006 完掘状況 (東より)



堀完堀状況 (東より) (1)



堀完掘状況 (2)



S030 頭骸骨出土状況 (南より)



S015・S030 土層状況 (南より)

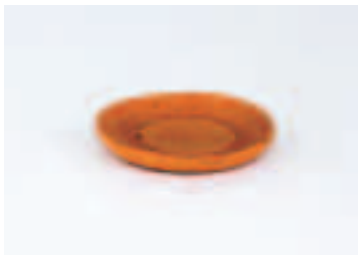


S030 完掘状況 (北より)



S030 完掘状況 (南より)

PL.58 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (1)



263 S001～004 出土



262 S001～004 出土



482 S001～004 出土



483 S001～004 出土



276 S001～004F-12～13 出土



264-1 S001～004 出土



236 S001～004 出土



235 S001～004 出土



258 S001～004 出土 (内器面)



237 S001～004 出土



244 S001～004 出土



258 S001～004 出土 (外器面)



239 S001～004 出土



242 S001～004 出土



257 S001～004 出土



260 S001～004 出土



261 S001～004 出土



265 S001～004 出土

PL.59 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (2)



266 S001～004 出土



268 S001～004 出土



269 S004 出土



270 S001～004 出土



275 S001～004 出土



475 S001～004 出土



484 S001～004・S006 (内器面)



479 S001～004 出土 (内器面)



478 S001～004 出土 (内器面)



484 S001～004・S006 (外器面)



479 S001～004 出土 (外器面)



478 S001～004 出土 (外器面)



254 S001～004 出土 (外器面)



264 S001～004 出土 (側面)



255 S001～004 出土 (側面)



254 S001～004 出土 (内器面)



264 S001～004 出土 (外底面)



255 S001～004 出土 (外器面)

PL.60 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (3)



480 S001～004 出土



481 S001～004 出土



233 S001～004 出土



234 S001～004 出土



253 S001～004 出土



256 S001～004 出土



259 S001～004 出土



267 S001～004 出土



477 S001～004 出土



271 S002 出土



273 S003 出土



476 S004 出土 (内器面)



186 S003 出土



274 S003 出土



476 S004 出土 (外器面)



272 S005・008・019 F-12 出土



205 S006 出土



206 S006 出土

PL.61 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (4)



279 S006 出土 (内器面)



277 S006 出土



278 S006 出土



279 S006 出土 (外器面)



282 S006 出土



474 S006 出土



280 S006 出土



281 S006 出土



472 S006 出土



473 S006 出土



286 S007 西側溝ベルト出土



288 S015 出土



466 S007 西側溝 ベルト出土 (外器面)



467 西側溝 東石垣トレンチ出土 (外器面)



590 S015 出土 (側面)



466 S007 西側溝 ベルト出土 (内器面)



467 西側溝 東石垣トレンチ出土 (内器面)



590 S015 出土 (外底面)

PL.62 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (5)



289 S015 E-14 出土



290 S015 出土



287 S015 出土



464 S015 出土



463 S015 出土 (内器面)



465 S015 出土 (内器面)



536 S015 出土



463 S015 出土 (外器面)



465 S015 出土 (外器面)



194 S025 出土



457 S025 出土



537 S025 出土



291 S025 出土 (内器面)



593 S025 出土



542 S025 出土



291 S025 出土 (外器面)



293 S025 出土



294 S025 出土

PL.63 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (6)



299 S025 出土



455 S025 出土



533 S025 出土



292 S025 出土 (内器面)



295 S025 出土 (内器面)



296 S025 出土 (内器面)



292 S025 出土 (外器面)



295 S025 出土 (外器面)



296 S025 出土 (外器面)



297 S025 (内器面)



298 S025 出土 (側面)



456 S025 出土 (内器面)



297 S025 出土 (外器面)



298 S025 出土 (外底面)



456 S025 出土 (外器面)



462 S026 出土



458 S026 出土



460 S027 出土

PL.64 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (7)



534 S027 出土



454 S027 028 出土 (内器面)



448 S027 出土 (内器面)



535 S027 出土



454 S027 028 出土 (外器面)



448 S027 出土 (外器面)



193 S027 出土 (内器面)



185 S027 出土



446 S027 出土 (内器面)



193 S027 出土 (外器面)



447 S027 出土



446 S027 出土 (外器面)



449 S027 出土 (内器面)



452 S027 出土 (内器面)



450 S027 出土



449 S027 出土 (外器面)



452 S027 出土 (外器面)



451 S027 出土

PL.65 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (8)



453 S027 出土



459 S027 出土



425 S030 出土



434 S030 E-13 出土



306 S030 E-13 出土



307 S030 出土



433 S030 出土



432 S030 出土



420 S030 出土



426 S030F-14 出土



438 S030 出土 (内器面)



421 S030 出土 (内器面)



435 S030 出土



438 S030 出土 (外器面)



421 S030 出土 (外器面)



437 S030E-13 出土



441 S030E-13 出土



436 S030 出土

PL.66 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (9)



445 S030 出土 (内器面)



423 S030 出土



303 S030 出土



445 S030 出土 (外器面)



424 S030 出土



304 S030 出土



305 S030 出土



422 S030 出土



444 S030 E-14 出土



419 S030 E-13 (内器面)



443 S030 E-14 出土 (内器面)



428・429・430・431 S030 出土



419 S030 E-13 (外器面)



443 S030 E-14 出土 (外器面)



442 S030 E-14 出土



427 S030 F-15 ~ 16 出土



439 S030 E-13 出土



302 S031 出土

PL.67 花岡山・万日山 A-4 調査区出土遺物写真 (10)



470 E-13 出土 (内器面)



469 E-13 出土 (内器面)



440 E-13 出土 (内器面)



470 E-13 出土 (外器面)



469 E-13 出土 (外器面)



440 E-13 出土 (外器面)



471 E-13 出土 (内器面)



285 E-13 出土



468 E-13 出土



471 E-13 出土 (外器面)



188 F-14 出土



187 F-15 東傾斜出土



207 表土剥ぎ



208 東カクラン出土



187 F-15 東傾斜出土 (刻印部分)



283 調査区一括



284 調査区一括



337 S001~004 出土・338 S003 出土
339 S006 出土・340 調査区一括

Tab.41 花岡山・万日山遺跡群A-4 調査区遺物観察表 (1)

図版 番号	種別 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
64	105	A-4	陶器	小碗	S027		7.5	3.7	5.4	施釉(茶)	施釉(水色)、回転(ヘラクレス)	Hue7.5Y8/2 灰褐	Hue7.5Y8/2 灰褐	微細な白色粒を少し含む。	良好	
64	105	A-4	陶器	鉢	S027		23.8	10.3	11.5	施釉(暗緑)	施釉(暗緑、暗赤緑)、ナデ、ヘラクレス	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	微細な白色粒を含む。	良好	
62	104	A-4	土師器	承碗	S025		5.1	3.7	2.3	回転(ナデ)	回転(ナデ)	Hue7.5Y8/6 浅黄緑	Hue7.5Y8/6 浅黄緑	微細な白色粒を少量含む。	良好	承碗の底、内面に焼付着。
60	205	A-4	陶器	小碗	S006		(9.2)	4.2	7.5	調整(不明)	調整(不明)	Hue8/0 灰	Hue8/0 灰	微細な白色粒を少量含む。	良好	なるべく平に転用。底径2cmの付着物。
60	206	A-4	陶器	小碗	S006		(8.0)	4.5	6.2	調整(不明)	調整(不明)	Hue2.5Y6/3 に近い黄	Hue2.5Y6/3 に近い黄	微細な白色粒を少量含む。	良好	なるべく平に転用。
67	207	A-4	陶器	小碗	表土(ハギ)		7.6	4.2	5.8	調整(不明)	調整(不明)	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	微細な白色粒を少量含む。	良好	なるべく平に転用。内面に赤色顔料。底面付着物。
67	208	A-4	陶器	小碗	東カケテ	上層	—	4.0	—	調整(不明)	調整(不明)	Hue2.5Y7/1 灰白	Hue2.5Y7/1 灰白	微細な白色粒を少量含む。	良好	なるべく平に転用。
60	209	A-4	陶器	小碗	S001~004		8.0	4.4	6.3	調整(不明)	調整(不明)	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	微細な白色粒を少量含む。	良好	なるべく平に転用。
60	210	A-4	陶器	小碗	S006		—	—	—	調整(不明)	調整(不明)	Hue8/0 灰	Hue8/0 灰	1mm以下の白色粒を少量含む。	良好	なるべく平に転用。
60	211	A-4	陶器	鉢	S001~004		7.4	—	—	施釉(透明)、ヘラクレス	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	外面に焼付。
60	212	A-4	陶器	鉢	S001~004		17.5	—	—	施釉(白、オリーブ)	施釉(白、オリーブ)	Hue2.5Y6/1 黄灰	Hue2.5Y6/1 黄灰	外面に付着物。	良好	外面見込み部重ね焼き痕。
60	213	A-4	陶器	鉢	S001~004		28.7	13.3	12.2	施釉(白、オリーブ)	施釉(白、オリーブ)	Hue5Y8/2 暗赤褐	Hue5Y8/2 暗赤褐	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に焼付。
60	214	A-4	陶器	鉢	S001~004		16.2	—	4.1	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に焼付。
58	217	A-4	陶器	土皿	街道軌道敷下	1層	7.4	8.6	12.3	回転(ナデ)	施釉(白)、回転(ナデ)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な白色粒を少量含む。	良好	内外面に焼付。
58	218	A-4	土師器	簡易埴輪	S001~004		—	—	—	ナデ	ナデ	Hue7.5Y8/8 橙	Hue7.5Y8/8 橙	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面にスタンプ。脚部八角形。
58	219	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		19.0	9.0	9.0	施釉(ナデ)	施釉(茶)、回転(ナデ)	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	混入物なし。	良好	
58	220	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		(19.0)	9.6	9.9	施釉(ナデ)	施釉(茶)、ナデ	Hue10Y8/6 褐	Hue10Y8/6 褐	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に焼付着。
58	221	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		14.3	6.6	8.9	施釉(ナデ)	施釉(黒)、ナデ、ヘラクレス	Hue10Y8/4 に近い黄緑	Hue10Y8/4 に近い黄緑	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に焼付着。
58	222	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		16.0	6.6	10.6	施釉(ナデ)	施釉(茶)、回転(ナデ)	Hue2.5Y8/4 淡黄	Hue2.5Y8/4 淡黄	混入物なし。	良好	外面に焼付着。
58	223	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		15.4	—	7.7	施釉(ナデ)	施釉(茶)、回転(ナデ)	Hue2.5Y7/3 淡黄	Hue2.5Y7/3 淡黄	微細な白色粒を少量含む。	良好	
58	224	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		(18.0)	—	5.7	施釉(ナデ)	施釉(茶)、回転(ナデ)	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に焼付着。
58	225	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		(18.2)	—	5.2	施釉(ナデ)	施釉(茶)、回転(ナデ)	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に焼付着。
58	226	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		—	—	—	施釉(茶)	施釉(茶)	Hue5Y6/1 灰	Hue5Y6/1 灰	混入物なし。	良好	外面に焼付着。
58	227	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		(18.0)	—	5.7	施釉(ナデ)	施釉(茶)	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	混入物なし。	良好	外面に焼付着。
58	228	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		(13.6)	—	4.0	施釉(茶)	施釉(茶)、文様	Hue7.5Y8/3 に近い黄	Hue7.5Y8/3 に近い黄	混入物なし。	良好	外面に焼付着。
58	229	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		20.7	—	8.7	施釉(透明)、回転(ナデ)	施釉(透明)、回転(ナデ)	Hue10Y8/2 灰白	Hue10Y8/2 灰白	混入物なし。	良好	外面に焼付着。
60	252	A-4	陶器	行平蓋	S001~004		(16.4)	—	—	施釉(透明)	回転(ナデ)	Hue10Y8/2 灰白	Hue10Y8/2 灰白	混入物なし。	良好	外面に焼付着。
59	254	A-4	陶器	火入れ	S001~004		9.9	9.8	7.8	施釉(白)	施釉(白)	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に焼付着。底面文字有り。黒蓋。内面に力力の文。
60	255	A-4	陶器	油皿	S001~004		(12.0)	5.8	5.3	施釉(白)	施釉(白)	Hue10Y8/3 に近い黄緑	Hue10Y8/3 に近い黄緑	微細な白色粒を少量含む。	良好	文様。内面見込み部焼付。
58	257	A-4	陶器	火入れ	S001~004		9.4	4.9	5.6	施釉(白)	施釉(白)	Hue5Y8/3 暗赤褐	Hue5Y8/3 暗赤褐	微細な白色粒を含む。	良好	文様。内面見込み部焼付。
58	258	A-4	陶器	小碗	S001~004		8.2	4.4	6.1	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue10Y8/4 に近い黄緑	Hue10Y8/4 に近い黄緑	混入物なし。	良好	外面に黒色の付着物。
58	259	A-4	陶器	乗碗	S001~004		(10.6)	5.2	3.2	施釉(ナデ)	回転(ナデ)	Hue2.5Y8/6 赤褐	Hue2.5Y8/6 赤褐	白色粒を少量含む。	良好	外面に黒色の付着物。
58	261	A-4	陶器	承碗	S001~004		3.5	3.6	5.5	回転(ナデ)	回転(ナデ)	Hue2.5Y8/2 灰白	Hue2.5Y8/2 灰白	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に焼付。高台部焼ハズ。
58	262	A-4	土師器	皿	S001~004		5.9	4.2	1.0	回転(ナデ)	回転(ナデ)	Hue7.5Y8/6 橙	Hue7.5Y8/6 橙	微細な白色粒を少量含む。	良好	
58	263	A-4	土師器	皿	S001~004		7.6	6.0	1.3	回転(ナデ)	回転(ナデ)	Hue2.5Y8/3 に近い黄緑	Hue2.5Y8/3 に近い黄緑	小碗を含む。	良好	外面に焼付着。手取成形の把手口本有。
58	264-1	A-4	土師器	埴輪	S001~004		(15.8)	(14.4)	2.4	回転(ナデ)	回転(ナデ)	Hue10Y8/4 浅黄緑	Hue10Y8/4 浅黄緑	1mm以下の白色粒を少量含む。	良好	外面に焼付。底面黒色物質付着。外面底面付着に面取り(六面)。
59	264-2	A-4	陶器	蓋	S001~004		6.0	2.7	4.4	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	

Tab.42 花岡山・万日山遺跡群A-4調査区遺物観察表(2)

図版番号	相図番号	棟敷番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)			調整			色調		胎土	焼成	備考
								口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面				
58	265	A-4	陶器	蓋	S001~004	—	—	—	Hue0Y65/3 に近い黄褐色	Hue0Y68/2 灰黒褐色	黒、褐色を含む。	良好	つまみ付。					
59	266	A-4	陶器	蓋	S001~004	8.6	2.0	—	Hue7.5Y7/1 灰白	Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色	混入物なし。	良好	角形つまみ付。					
60	267	A-4	磁器染付	鉢	S001~004	19.2	3.7	5.6	Hue0/0 白	Hue0/0 白	混入物なし。	良好	内外面に染付。					
59	268	A-4	陶器	合子	S001~004	—	4.8	—	Hue5Y8/2 灰白	Hue5Y8/2 灰白	混入物なし。	良好	—					
59	269	A-4	陶器	土瓶	S004	8.3	—	—	Hue2.5Y65/3 に近い赤褐色	Hue2.5Y65/3 に近い赤褐色	白色粒をわずかに含む。	良好	—					
60	270	A-4	陶器	小瓶	S001~004	(10.2)	6.6	8.6	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。					
60	271	A-4	磁器染付	小瓶	S002	7.0	3.0	5.1	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。					
60	272	A-4	陶器	鉢	S005 S008 019	—	(2.2)	11.4	Hue0Y8/3 浅黄褐色	Hue0Y8/3 浅黄褐色	黒色粒を少量含む。	良好	—					
60	273	A-4	土師器	皿	S003	7.4	5.0	1.3	Hue7.5Y8/8 黄褐色	Hue7.5Y8/8 黄褐色	混入物なし。	良好	糸切刃痕。					
60	274	A-4	陶器	手取皿	S003	9.0	3.9	2.7	Hue5Y8/2 灰褐色	Hue5Y8/2 灰褐色	混入物なし。	良好	内面見込み筋三足ハテ。					
59	275	A-4	陶器	蓋	S001~004	17.4	11.3	15.1	Hue2.5Y8/6 黄	Hue2.5Y8/6 黄	微細な白色粒を少量含む。	良好	内面見込み筋重ね地赤褐色。					
58	276	A-4	土師器	炬戸	S001~004	(10.0)	15.0	16.6	Hue7.5Y8/8 黄	Hue7.5Y8/8 赤褐色	微細な黒色粒を少量含む。	良好	三脚、口縁部赤色顔料、外面に文様。					
61	277	A-4	陶器	高台付鉢	S006	16.2	11.0	12.4	Hue5Y65/3 に近い赤褐色	Hue5Y65/3 に近い赤褐色	混入物なし。	良好	—					
61	278	A-4	陶器	指鉢	S006	(40.0)	(16.6)	15.5	Hue5Y8/8 赤褐色	Hue5Y8/8 赤褐色	混入物なし。	良好	指口2本。					
61	279	A-4	陶器	大鉢	S006	(38.0)	12.5	24.5	Hue2.5Y65/3 に近い赤褐色	Hue2.5Y65/3 に近い赤褐色	微細な白色粒を含む。	良好	—					
61	280	A-4	磁器染付	徳利	S006	—	5.8	—	Hue0/0 白	Hue0/0 白	混入物なし。	良好	外面に染付。					
61	281	A-4	磁器染付	皿	S006	20.0	4.3	2.5	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	混入物なし。	良好	内面に染付、底の目軸ハテ。					
61	282	A-4	陶器	小瓶	S006	(8.4)	3.8	5.6	Hue5Y8/6 暗赤褐色	Hue5Y8/6 暗赤褐色	白色粒を含む。	良好	—					
67	283	A-4	陶器	脚付土瓶	S006	8.5	—	—	Hue2.5Y8/3 に近い赤褐色	Hue2.5Y8/3 に近い赤褐色	微細な白色粒を含む。	良好	内面に染付、底の目軸ハテ。					
67	284	A-4	磁器染付	皿	E-13	(24.0)	(6.0)	2.2	Hue0/0 白	Hue0/0 白	混入物なし。	良好	内面に染付。口唇部に筋彫、波状口形。					
67	285	A-4	陶器	乗駒	E-13	9.6	2.0	2.6	Hue0Y68/2 灰白	Hue0Y68/2 灰白	混入物なし。	良好	—					
61	286	A-4	陶器	瓶	S007 西側溝内へルト	3.5	—	—	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y7/2 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	腹入、外面に筋彫を用いて模様が描かれている。					
62	287	A-4	磁器染付	瓶	S015	—	4.8	—	Hue0/0 白	Hue5Y8/1 灰白	黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付。					
61	288	A-4	陶器	蓋	S015	(20.0)	—	—	Hue0Y8/1 灰白	Hue2.5Y7/3 浅黄	微細な黒色粒を少量含む。	良好	—					
62	289	A-4	陶器	鉢	S015	—	(5.0)	—	Hue7.5Y8/2 灰黄	Hue7.5Y8/2 灰黄	微細な黒色粒を含む。	良好	—					
62	290	A-4	陶器	鉢	S015	—	(3.7)	—	Hue2.5Y8/3 淡黄	Hue2.5Y8/3 淡黄	混入物なし。	良好	—					
61	291	A-4	陶器	指鉢	S025	(36.0)	(11.3)	12.1	Hue2.5Y8/6 明赤褐色	Hue2.5Y8/6 明赤褐色	1mm以下の白色粒を少量含む。	良好	内面見込み筋重ね地赤褐色、指口3本。					
63	292	A-4	磁器染付	碗	S025	(10.2)	(5.0)	6.1	Hue0/0 白	Hue0/0 白	微細な黒色粒を含む。	良好	内面に染付。					
62	293	A-4	磁器	盃	S025	(6.4)	(2.8)	3.0	Hue0/0 白	Hue0/0 白	混入物なし。	良好	内面に色絵。					
62	294	A-4	磁器染付	碗	S025	(11.2)	(4.0)	6.0	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。					
62	295	A-4	磁器染付	小鉢	S025	(13.4)	(4.0)	6.1	Hue0/0 白	Hue0/0 白	混入物なし。	良好	内外面に染付。					
63	296	A-4	磁器染付	鉢	S025	(13.4)	(5.2)	6.1	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。					
63	297	A-4	磁器染付	碗	S025	(12.0)	5.2	6.0	Hue0/0 白	Hue0/0 白	混入物なし。	良好	内外面に染付。					
63	298	A-4	磁器染付	碗	S025	(8.0)	(5.9)	—	Hue0/0 白	Hue0/0 白	混入物なし。	良好	内外面に染付。					
63	299	A-4	磁器染付	盃	S025	(8.0)	(3.0)	4.0	Hue2.5Y8/3 淡赤褐色	Hue2.5Y8/3 淡赤褐色	混入物なし。	良好	内面に色絵、内面見込み筋重ね地赤褐色。					
66	302	A-4	陶器	小皿	S031	(14.0)	5.8	3.4	Hue0Y8/2 灰赤	Hue0Y8/2 灰赤	微細な黒、白色粒を含む。	良好	—					
66	303	A-4	陶器	蓋	S030	(15.0)	—	1.5	Hue0Y8/2 灰赤	Hue0Y8/2 灰赤	微細な黒、白色粒を含む。	良好	—					
66	304	A-4	氣懸器	蓋	S030	(10.0)	—	—	Hue5Y4/2 灰赤	Hue5Y4/2 オリーブ黒	微細な白色粒を含む。	良好	—					
66	305	A-4	弥生土器	甕	S030	—	(11.0)	—	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y7/2 灰白	白色粒を多く含む。	不良	—					
65	306	A-4	土師器	皿	S030	7.0	4.4	2.1	Hue0Y8/3 に近い黄褐色	Hue0Y8/3 に近い黄褐色	長石、石英、褐色粒を含む。	良好	糸切刃痕。					
65	307	A-4	土師器	皿	S030	(10.0)	5.8	2.0	Hue0Y8/3 に近い黄褐色	Hue0Y8/3 に近い黄褐色	長石、石英、褐色粒を含む。	良好	糸切刃痕。					
66	419	A-4	磁器染付	小瓶	S030 E-13	—	—	—	Hue7.5Y6/1 灰	Hue7.5Y6/1 灰	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。					

Tab.43 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (3)

図版番号	相図番号	掲載区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調				胎土	焼成	備考
							口径	底径	内面	外面	内面	外面	内面	外面			
65	420	A-4	陶器	瓶	S030	埋1層	—	—	—	—	Hue2.5Y8/4 淡黄	Hue2.5Y8/4 淡黄	1~2mm大の小礫を含む。	良好			
65	421	A-4	須臾器	甕	S030	埋2層	—	—	—	—	Hue7.5Y5/1 灰	Hue7.5Y5/1 灰	1mm大の黒色粒をまじれを含む。	良好			
66	422	A-4	陶器	壺	S030	上~中層	(15.0)	—	ナテ	ナテ	Hue2.5Y8/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	1~2mm大の小礫を含む。	良好			
66	423	A-4	瓦質土器	火鉢	S030	中層	—	—	ナテ	ナテ	Hue7.5Y2/1 オリーブ黒	Hue7.5Y2/1 オリーブ黒	1cm程度の小礫を多く含む。	良好	外面に印花。		
66	424	A-4	瓦質土器	火鉢	S030	上~中層	(34.0)	—	回転ナテ	回転ナテ	Hue5Y8/2 暗灰黄	Hue5Y8/2 暗灰黄	微細な黒色粒を多く含む。	良好			
65	425	A-4	弥生土器	壺	S030	埋2層	—	—	ナテ、ヘラナテ	ナテ、ヘラナテ	Hue5Y8/6 暗赤褐	Hue5Y8/6 暗赤褐	1.5mm以下の白色粒を多く含む。	良好			
65	426	A-4	須臾器	鉢	S030 F-14	埋2層	—	—	回転ナテ	回転ナテ	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好			
66	427	A-4	磁器染付	小瓶	S030 E-15・16	埋5~6層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付。		
66	428	A-4	磁器	不明	S030 F-15・16	埋5~6層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	裏が黒く器種不明。		
66	429	A-4	青磁	不明	S030 E-15	埋5層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	裏が黒く器種不明。		
66	431	A-4	陶器	不明	S030 E-15	埋5層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	粗人物紋。	良好	裏が黒く器種不明。		
65	432	A-4	須臾器	底器	S030	最下層	—	—	ナテ	ナテ	Hue0Y8/1 灰	Hue0Y8/1 灰	白色粒を含む。	良好	裏が黒く器種不明。		
65	433	A-4	須臾器	蓋	S030	埋2~3層	—	—	回転ナテ	回転ナテ	Hue7.5Y5/1 灰	Hue7.5Y5/1 灰	小礫を多く含む。	良好			
65	434	A-4	土師器	甕	S030 E-13	埋2~3層	—	—	回転ナテ	回転ナテ	Hue7.5Y8/6 黄赤褐	Hue7.5Y8/6 黄赤褐	1mm以下の褐色粒を含む、微細な黒色粒を少量含む。	良好			
65	435	A-4	磁器	小瓶	S030	上~中層	(12.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に印花。		
65	436	A-4	瓦質土器	火鉢	S030 E-13	埋2~3層	—	—	回転ナテ	回転ナテ	Hue8/0 灰	Hue8/0 灰	小礫を含む。	良好	外面に印花。		
65	437	A-4	須臾器	蓋	S030 E-13	埋2~3層	(15.0)	—	回転ナテ	回転ナテ	Hue5Y7/1 灰白	Hue5Y7/1 灰白	2mm黒色粒を少量含む。	良好			
65	438	A-4	瓦質土器	摺鉢	S030	埋2~3層	—	—	ナテ	ナテ	Hue7.5Y4/1 灰	Hue7.5Y4/1 灰	小礫を多く含む。	良好	埋目6本。		
66	439	A-4	磁器染付	皿	S030 E-13	埋2~3層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	高台部砂目、内外面に染付。		
67	440	A-4	磁器染付	皿	S030 E-13	埋2~3層	(7.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue5Y8/2 灰白	Hue5Y8/2 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	高台部砂目、内外面に染付。		
65	441	A-4	陶器	不明	S030 E-13	埋2~3層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐	Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐	粘土混入。	良好	裏が黒く器種不明。		
66	442	A-4	磁器染付	碗	S030 E-14	埋5層	(24.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5Y8/3 淡黄	Hue2.5Y8/3 淡黄	微細な黒色粒をわずかに含む。	良好	内外面に染付。		
66	443	A-4	磁器染付	皿	S030 E-14	埋2層	(9.2)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒をわずかに含む。	良好	内外面に染付。		
66	444	A-4	青磁	小瓶	S030 E-14	埋5層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	微細な黒色粒をわずかに含む。	良好	外面に印花。		
66	445	A-4	瓦質土器	火鉢	S030	埋5層	—	—	ハケ目	ハケ目	Hue8/0 黒	Hue8/0 黒	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。		
64	446	A-4	磁器染付	小皿	S027	埋2層	(7.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。		
64	447	A-4	磁器染付	小瓶	S027	埋2層	(7.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue0Y8/1 灰	Hue0Y8/1 灰	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。		
64	448	A-4	陶器	鉢	S027	埋2層	(8.0)	—	施釉(朱)	施釉(朱)	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を多く含む。	良好	裏付。		
64	449	A-4	磁器染付	小杯	S027	埋2層	(8.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	微細な黒色粒をわずかに含む。	良好	内外面に染付。		
64	450	A-4	磁器	合子	S027	埋2層	(6.0)	(2.0)	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。		
64	451	A-4	磁器	不明	S027	埋2層	(2.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に色絵、裏が黒く器種不明。		
64	452	A-4	磁器染付	小瓶	S027	埋2層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。		
65	453	A-4	青磁	瓶	S027	埋2層	—	—	施釉(青)	施釉(青)	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	埋目10本。		
64	454	A-4	陶器	摺鉢	S027	埋2層	—	—	施釉(青)	施釉(青)	Hue0Y8/1 灰白	Hue0Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。		
63	455	A-4	磁器染付	小瓶	S025	埋2層	—	—	施釉(青)	施釉(青)	Hue5Y8/6 赤褐	Hue5Y8/6 赤褐	微細な黒色粒を少量含む。	良好	埋目10本。		
63	456	A-4	磁器染付	小瓶	S025	埋2層	(20.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	粗人物紋。	良好	内外面に染付。		
62	457	A-4	陶器	鉢	S025	埋2層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。		
63	458	A-4	磁器染付	皿	S026	埋2層	(2.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に茶色の付着物。		
65	459	A-4	磁器染付	皿	S027	埋2層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	高台部染付。		
63	460	A-4	土師器	火鉢	S027	埋2層	—	—	回転ナテ	回転ナテ	Hue0Y8/3 黄赤褐	Hue0Y8/3 黄赤褐	白、黒、褐色粒を含む。	良好	内外面に染付。		
63	462	A-4	陶器	摺鉢	S026	埋2層	—	—	施釉(青)	施釉(青)	Hue2.5Y8/3 暗赤褐	Hue2.5Y8/3 暗赤褐	1mm以下の白色粒を少量含む。	良好	埋目13本。		
62	463	A-4	磁器染付	碗	S015	埋2層	(4.0)	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。		
62	464	A-4	磁器染付	皿	S015	埋2層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	高台部底の目輪ハズ、内外面に染付。		

Tab.44 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (4)

図版 番号	調査区 番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
						口径	底径	高さ	内面	外面	内面	外面			
62	A-4	磁器	碗	S015 E-14	上層	—	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	黄緑色の黒色粒を含む。	良好	内外面に色絵。	
61	466	A-4	陶器	S007	—	19.0	—	—	Hue5Y8/4 赤褐	Hue5Y8/4 赤褐	Hue5Y8/4 赤褐	黄緑色を用いて文様が彫られている。黒基。	良好	黄緑を用いて文様が彫られている。	
61	467	A-4	陶器	S007	—	19.0	—	—	Hue10Y8/4 浅黄緑	Hue10Y8/4 浅黄緑	Hue10Y8/4 浅黄緑	黄緑色の黒色粒を含む。	良好	黄緑を用いて文様が彫られている。	
67	468	A-4	磁器染付	E-13	1層	(9.4)	(3.6)	2.6	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	黄緑色の黒色粒を多く含む。	良好	内外面に色絵。	
67	469	A-4	磁器染付	E-13	近現代包含 層下位	—	(9.8)	—	Hue2.5Y8/2 灰白	Hue2.5Y8/2 灰白	Hue2.5Y8/2 灰白	混入物なし。	良好	内外面に色絵。	
67	470	A-4	磁器染付	E-13	1層	—	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	内外面に色絵。	
67	471	A-4	磁器染付	E-13	近現代包含 層下位	—	—	—	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	黄緑色の黒色粒を含む。	良好	内外面に色絵。	
61	472	A-4	磁器	S006	—	(4.8)	—	—	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	注口。外面に色絵。	
61	473	A-4	磁器	S006	—	10.0	5.2	1.7	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	黄緑色の黒色粒を含む。	良好	内面見込赤文字(中国系)。	
61	474	A-4	陶器	S006 表上ハキ	—	(16.2)	—	—	Hue5Y65/3 赤赤	Hue5Y65/3 赤赤	Hue5Y65/3 赤赤	混入物なし。	良好	—	
59	475	A-4	陶器	S001~004	—	(28.0)	—	—	Hue2.5Y8/4 赤赤	Hue2.5Y8/4 赤赤	Hue2.5Y8/4 赤赤	黄緑色の黒色粒を含む。	良好	赤排系。	
60	476	A-4	磁器染付	S004	—	11.4	6.9	2.8	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	黄緑色の黒色粒を少量含む。	良好	内外面に色絵。内面に付着物。	
60	477	A-4	磁器	S001~004	合子	6.1	2.8	1.1	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	黄緑色の黒色粒を多く含む。	良好	外面に文様。	
59	478	A-4	磁器染付	S001~004	小皿	10.4	6.0	2.0	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	黄緑色の黒色粒を少量含む。	良好	内外面に色絵。	
59	479	A-4	磁器染付	S001~004	手皿皿	8.0	4.6	1.4	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	黄緑色の黒色粒を少量含む。	良好	内外面に色絵。	
60	480	A-4	磁器	S001~004	手皿皿	9.4	5.1	1.8	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	内面見込赤文字(中国系)。	
60	481	A-4	磁器	S001~004	盃	7.8	2.8	3.0	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	内面に色絵。	
58	482	A-4	土師器	S001~004	小皿	(11.2)	4.3	2.3	Hue5Y8/4 赤赤	Hue5Y8/4 赤赤	Hue5Y8/4 赤赤	黄緑色の黒色粒を少量含む。	良好	内外面に色絵。内面見込赤文字。	
58	483	A-4	土師器	S001~004	小皿	12.6	4.2	3.2	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	黄緑色の黒色粒を少量含む。	良好	内面見込赤文字。	
59	484	A-4	磁器染付	S001~004 S006 表上ハキ	皿	29.6	(29.6)	3.8	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	黄緑色の黒色粒を含む。	良好	内外面に色絵。八角形。	
63	104	533	A-4	磁器	S025	4.8	1.4	1.5	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	18世紀後～19世紀初。型押し成形。肥田。	
64	105	534	A-4	土師器	S027	(24.0)	—	—	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	混入物なし。	良好	内面に色絵。	
64	105	535	A-4	陶器	S027	—	(6.4)	—	Hue10Y8/2 黒赤	Hue10Y8/2 黒赤	Hue10Y8/2 黒赤	黄緑色の黒色粒を少量含む。	良好	内面に色絵。	
62	103	536	A-4	陶器	S015	(9.0)	—	—	Hue2.5Y8/2 黒褐	Hue2.5Y8/2 黒褐	Hue2.5Y8/2 黒褐	黒色粒を多く含む。主に角四角を含む。	良好	—	
62	104	537	A-4	陶器	S025	(15.0)	—	—	Hue7.5Y8/4 褐	Hue7.5Y8/4 褐	Hue7.5Y8/4 褐	黒色粒を多く含む。主に角四角を含む。	良好	—	
62	104	542	A-4	陶器	S025	(4.6)	—	—	Hue7.5Y8/2 黒褐	Hue7.5Y8/2 黒褐	Hue7.5Y8/2 黒褐	黒色粒を多く含む。	良好	—	
61	103	590	A-4	陶器	S015	—	6.0	—	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	混入物なし。	良好	小片焼。	
62	104	593	A-4	陶器	S025	38.0	13.2	14.8	Hue2.5Y5/2 暗黄	Hue2.5Y5/2 暗黄	Hue2.5Y5/2 暗黄	黄緑色の黒色粒を少量含む。	良好	口縁2cm。	
102	675	A-4	陶器	S007 西側溝	行平鍋	12.4	6.0	6.0	Hue2.5Y7/4 浅黄	Hue2.5Y7/4 浅黄	Hue2.5Y7/4 浅黄	黄緑色の黒色粒を多く含む。	良好	—	
105	676	A-4	磁器染付	S027	鉢	(15.0)	—	(6.9)	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	黄緑色の黒色粒を多く含む。	良好	内外面に色絵。	
104	677	A-4	陶器	S015 E-14 S025	上層	—	—	—	Hue2.5Y8/4 黄褐	Hue2.5Y8/4 黄褐	Hue2.5Y8/4 黄褐	黄緑色の黒色粒を多く含む。	良好	内外面に色絵。	
105	678	A-4	磁器染付	S027	皿	20.8	13.6	3.5	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	黄緑色の黒色粒を多く含む。	良好	内外面に色絵。	
103	679	A-4	磁器染付	S015	皿	10.3	4.4	2.8	Hue9/0 白	Hue9/0 白	Hue9/0 白	黄緑色の黒色粒を多く含む。	良好	内外面に色絵。	
101	690	A-4	磁器染付	南端ハキ	小皿	(13.0)	(6.8)	2.9	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	Hue10Y8/1 灰白	黄緑色の黒色粒を含む。	良好	内外面に色絵。	
103	700	A-4	磁器染付	S015	鉢	—	4.8	4.9	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	黄緑色の黒色粒を含む。	良好	内面に三見六寸。外面に色絵。	

Tab.45 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (5)

図版 番号	調査区 番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
						全径	口径(幅)	内面	外面	内面	外面			
67	337	A-4	土師器	S001~004	—	—	8.2	6.6	回転ナデ	回転ナデ	Hue5Y8/8 褐	Hue10Y8/4 赤赤	良好	外面に色絵。刻印(某七)。
67	338	A-4	土師器	S003	—	—	8.1	6.5	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5Y8/6 褐	Hue7.5Y8/6 褐	良好	外面に色絵。刻印(某七)。
67	339	A-4	土師器	S006	—	—	7.5	6.1	回転ナデ	回転ナデ	Hue10Y8/4 浅黄緑	Hue10Y8/4 浅黄緑	良好	外面に色絵。付着物。刻印(某七)。
67	340	A-4	土師器	5層	—	—	—	6.7	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5Y8/6 浅黄緑	Hue7.5Y8/6 浅黄緑	良好	外面に色絵。刻印(某七)。
58	235	A-4	土師器	S001~004	—	16.8	12.4	6.7	ナデ。指押し文	ナデ	Hue7.5Y8/4 赤赤	Hue7.5Y8/4 赤赤	良好	胎土を多く含む。黄緑色の黒色粒を含む。
58	236	A-4	土師器	S001~004	—	22.8	15.8	16.8	ナデ。ハキ	ナデ	Hue7.5Y8/4 赤赤	Hue7.5Y8/4 赤赤	良好	胎土を多く含む。

Tab.46 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (6)

図版 番号	相図 番号	掲載 番号	調査区 番号	種類	出土地点	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考
						高さ	直径	厚さ	内面	外面	ナデ	内面	外面	Hue			
67	106	187	A-4	丸瓦	F-15 東縁斜	4.0	3.7	3.6	ナデ	ナデ	ナデ	Hue10YR5/1 焼灰	HueM4/0 灰	0.5~1.5mmの黒色粒、微細な白色粒を多く含む。	良好	外面に刻目。	

Tab.47 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (7)

図版 番号	相図 番号	掲載 番号	調査区 番号	種類	出土地点	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考
						高さ	直径	厚さ	内面	外面	ナデ <th>内面</th> <th>外面</th> <th>Hue</th> <th>調整</th> <th>胎土</th> <th>焼成</th> <th>備考</th>	内面	外面	Hue			
67	106	188	A-4	軒瓦	F-14 5層	23.5	8.0	—	ナデ	ナデ	ナデ	Hue10YR5/1 焼灰	HueM4/0 灰	1~3mm程の小礫を含む。	良好	巴文、表面の一部被漆。	

Tab.48 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (8)

図版 番号	相図 番号	掲載 番号	調査区 番号	種類	出土地点	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考
						高さ	直径	厚さ	内面	外面	ナデ <th>内面</th> <th>外面</th> <th>Hue</th> <th>調整</th> <th>胎土</th> <th>焼成</th> <th>備考</th>	内面	外面	Hue			
60	102	186	A-4	軒瓦	S003	15.6	6.7	—	ナデ、文様	ナデ	ナデ	HueN7/0 灰	HueY5/1 灰	3mm以下の黒色粒、1~6mmの白色粒を多く含む。	良好		

Tab.49 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (9)

図版 番号	相図 番号	掲載 番号	調査区 番号	種類	出土地点	寸法(cm)			調整			色調			胎土	焼成	備考
						高さ	直径	厚さ	内面	外面	ナデ <th>内面</th> <th>外面</th> <th>Hue</th> <th>調整</th> <th>胎土</th> <th>焼成</th> <th>備考</th>	内面	外面	Hue			
94	660	—	A-4	石塔	東縁斜	—	2.2	9.5	22.7	9.9	13.4	15.0	安山岩、下部に滑らかな面がある。他の部分の面に刻み込まれている。底部は7層が粗く残る。				

Tab.50 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (10)

図版 番号	相図 番号	掲載 番号	調査区 番号	種類	出土地点	寸法(cm)											備考
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	
95	682	—	A-4	五輪塔	火輪	12.5	4.3	8.6	21.2	9.5	41.5	4.3	25.5	4.9	6.3	焼灰岩。	
95	663	—	A-4	五輪塔	火輪	21.2	5.3	2.0	17.0	10.5	42.2	6.0	23.7	6.0	1.9	焼灰岩。	

Tab.51 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (11)

図版 番号	相図 番号	掲載 番号	調査区 番号	種類	出土地点	寸法(cm)			調整			備考	
						高さ	直径	厚さ	内面	外面	ナデ		
96	609	—	A-4	泥面子	人形	S001~004	3.6	2.1	—	—	—	Hue7.5YR6/4 に近い黄	
96	610	—	A-4	泥面子	人形	東側	3.5	2.0	—	—	—	Hue7.5YR7/4 に近い黄	
96	611	—	A-4	泥面子	人形	F-13 <左> 東縁斜	3.4	2.1	—	—	—	Hue7.5YR6/4 に近い黄	
97	623	—	A-4	泥面子	動物	S001~004	3.0	3.4	—	—	—	Hue7.5YR7/4 に近い黄	
97	624	—	A-4	泥面子	毛ノ	S001~004	3.1	2.1	—	—	—	Hue10YR8/6 黄緑	
97	625	—	A-4	泥面子	毛ノ	S001~004	3.1	2.9	—	—	—	Hue10YR8/6 黄緑	
97	626	—	A-4	泥面子	毛ノ	S001~004	4.0	2.6	—	—	—	Hue10YR8/3 黄緑	
97	627	—	A-4	泥面子	毛ノ	S001~004	3.0	2.7	—	—	—	Hue10YR8/3 黄緑	
97	628	—	A-4	泥面子	人形	S001~004	3.1	2.6	—	—	—	Hue7.5YR7/4 に近い黄	
97	630	—	A-4	泥面子	毛ノ	S006	2.7	2.9	—	—	—	Hue10YR6/4 に近い黄緑	
97	631	—	A-4	泥面子	動物(魚)	F-12~13 東縁斜	3~4層	3.6	2.0	—	—	Hue5YR6/6 黄	
97	632	—	A-4	泥面子	人形	東側	上層	4.3	1.8	—	—	Hue10YR7/6 明黄緑	赤色顔料。
97	633	—	A-4	泥面子	毛ノ	F-13 東縁斜	2.0	2.0	—	—	—	Hue5YR6/8 黄	上部に白色顔料。
97	634	—	A-4	泥面子	毛ノ	東側	上層	3.2	2.3	—	—	Hue10YR7/3 に近い黄緑	
97	635	—	A-4	泥面子	毛ノ	東縁斜道下	1層	2.3	1.2	—	—	Hue7.5YR7/6 黄	
97	636	—	A-4	泥面子	毛ノ	F-12~13 東縁斜	3層	2.6	1.0	—	—	Hue7.5YR5/8 明黄	全体に黄緑。
97	637	—	A-4	泥面子	動物	F-13 東縁斜	5層	2.2	2.0	—	—	Hue10YR7/3 に近い黄緑	

Tab.52 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区遺物観察表 (12)

図版 番号	相図 番号	掲載 番号	調査区 番号	種類	出土地点	寸法(cm)			備考	
						x	y	z		
95	664	—	A-4	五輪塔	地輪	F-13 東側縁斜	36.4	32.5	13.9	安山岩。

第9節 花岡山・万日山 A-5 調査区

1 調査区概要

この調査区は橋脚P 6に当たり、下馬天神踏切のすぐ北側になる。現況の排水路と新幹線橋脚との間がかなり狭小になる部分で、今回の調査区も、他の調査区に比べて東西の幅は狭くなった。基本的に調査区の設定は、他の調査区同様工事で掘削される部分、矢板打ち込みで影響を受ける部分を範囲とした。ただ、狭小であることから、西側のJR鉄道線路に面した部分は、許容内とはなるものかなり接近した形にならざるを得なかった。ただ、西側はA-4調査区と同じく旧市道のアスファルト道路部まで外すと、鉄道に非常に接近してしまう。そのため、その端までの調査にとどめた。調査区の南北の長さは約20m、東西の幅は約10m、面積は200㎡ほどとなった。

次にこの調査区の基本的な層序についてふれる。

花岡山・万日山遺跡群 A-5 区は、近世の堀・道路及び明治期の石垣により、自然堆積層の残存は良好ではなく、調査区の全面が人為的な改変を受けている。調査区南壁の土層観察からも分かるように、近世の道路及び堀を経て、明治期に概ね道路のラインに沿って石垣が構築された。調査の石垣掘削時に、堀の肩及び道路を掘削していることが理解できた。

2 遺構と遺物

[A-5-S001]

この遺構は、鉄道路盤及び参道跡に当たる。遺構の規模は、南北19.5m、幅2.3mを確認できた。他の調査区の参道、鉄道跡遺構と同様に東側と西側に石垣があり、西側石垣のさらに西側には水路として利用されていた石垣もある。これらの石垣は、明治20年代頃までの技法で積み上げられたもので、横手側に側溝を伴い、道床直上面には枕木痕が確認できた。九州鉄道株式会社による九州初の近代鉄道路線として、昭和43年の鹿児島本線複線化まで継続的に利用されていたようだ。参道の土層断面を観察すると、明治10年～23年（西南戦争から鉄道開設まで）の間、西南戦争時の熊本城下水攻めの際に堆積したと思われる砂層に粘土を被せて再舗装したとみられる。この砂層が、路盤の石垣の間にはほとんど遺存しなかったのは、路盤造成前に硬化面まで削平された可能性が高いためと考えられる。この砂層は2層に分かれ、上層は灰・焼土・炭を多量に含み、下層はしまりが強い傾向があった。また、S012、013、014周辺の硬化面に、マーブル状に土が固められた箇所があり、S006・S012・S013・S014に切られる形で分布していたが、その下層から部分的に硬化面らしき面を検出した。同様のマーブル状硬化面は、S021周辺にも存在し、かつ同プランに切られていたことから、これらに先行する補修痕の可能性が高いとみられるが、基本的には周辺の硬化面と同レベルで部分的なものであると考えられる。

出土遺物は、硬化面の直上、もしくはやや埋まった状態での出土が多く、陶磁器がほとんどであった。696は、陶器の蓋で近世のものと思われる。ちょうど、井の蓋のようである。

[A-5-S002]

この遺構は、JR線路の柵列であり複線化以後に作られていたものである。調査区の西側で検出したもので、南北19.4m、東西0.825mの間に29個のピットが確認できた。一つのピットの大きさは、長径20cm、短径15cmほどで、柵の間は10～20cmでほぼ一列に並ぶ。形状から丸杭と思われる。一部のピットには、部材の残るものもあった。また、柱穴を観察すると、柱の抜き取りに複数のパターンがあったことが推測される。出土遺物はほとんど無かった。

[A-5-S003]

この遺構は、近代以降の水路で鉄道との関連の深いものである。調査区の東半分ほどを占め、北壁から南壁まで、南北 19.6 m、東西 1.3 m、深さ 41.5cm という規模であった。

この遺構を観察すると、近世堀の法面に粘土を貼り付けて造成し直してあった。粘土は、一部根石の下にも敷かれており、かつ根石の手前は人がひとり通れるほどの広さまで貼り足していたようである。また、上面は硬化しており、根石の補強と保守管理用の通路を兼ねていたものとみられる。この遺構に至るまでの埋土から、1931 年と染付された鉄道関係の特殊製品とみられる磁器片を出土している。

出土遺物はとても多く、588 のような土師質の焜炉はよく出土した。また、591 のような土師質の焙烙も多く出土した。

[A-5-S004]

この遺構は、近世堀で S003 とほぼ同じ位置で検出した。規模も、S003 とほぼ同じで南北 19.6 m、東西 1.45 m、深さ 44cm であった。

遺構埋土は、近代の遺物を伴う炭混じりの粘土層の下から検出された、よりきめ細かくしまった粘土であった。法肩は鉄道路盤造成時に削平されているが、硬化面東端に砂層の堆積が確認出来たことから、法肩と硬化面の間に土盛りが存在していた可能性が高い。法尻は、グライ化した土のため不明瞭であった。

出土遺物も、S003 と似たようなものが出土している。ただ、ややこの遺構出土の遺物のほうが古手ではあった。法面の D-6 グリッド内から、316 が出土した。これは、九曜文の象嵌の入った小椀でほぼ完形である。内面の広範囲に黒い物質が付着しており、埴塙として転用された可能性が高い。

[A-5-S005]

この遺構は、調査区西側で検出され南北の長さ 19.4 m、東西の幅 1.9 m であった。ほぼ、S002 と同じ位置で確認した。近世から明治までの道路面と思われ、硬くしまっている。

遺物は、道路の硬化面ということではほとんど出土していない。

[A-5-S006]

この遺構は溝状遺構で、S019 に切られている。確認したのは C-3 グリッドから C-7 グリッドまでで調査区を南北走り、南北 19.4 m、東西 1.3 m、深さ 40cm であった。後述する土坑群はこの遺構の上位に位置している。A-4 調査区で見られた S015・S030 と同一遺構ではないかと思われる。当初は、細川期道路の側溝ではないかと考えていたが、C-5 グリッドでいったん途切れていること、埋土上面に硬化面（2層目）が広がっていること、遺構内に水の流れた痕跡がないことから、少なくとも排水路としての側溝ではないと見受けられる。しかし、途中の断絶部分が砂防ダムの役割を担っていたと考えれば、排水路としてもいいかもしれない。

出土遺物は、非常に多く 18 世紀後半から 19 世紀にかけてのものが多く出土している。408 は、青磁の碗で口縁部から一部胴部まで残り花卉が僅かに確認できる。539 は、陶器の火入れだが、表面は光沢のある茶色で細かい線で絵が描かれている。近世のものと思われる。

[A-5-S007]

この遺構は、土坑で C-5 グリッドで確認した。S006 を切り、半分ほど中央トレンチで掘削されている。規模は、長径 0.9 m、短径 0.8 m、深さ 80cm である。

出土遺物は、18世紀中～後期の陶磁器片、食物残滓とみられる貝殻（シジミか？）を伴う。上面には硬化面が2層あり、1層目の硬化面はS001も硬化面（1層目）のレベルで形成されているが、いずれの硬化面も上面に砂層を伴っている。土層断面を観察すると、下層は厚く堆積しているが上層は薄く何層も重なるように堆積している。道路の補修痕かと思われる。

出土遺物は多く、土師器や陶磁器が出土している。680は陶器の土瓶である。イッチンで描かれており明治以降のものと考えられる。

[A-5-S008]

この遺構は、土坑でC-3グリッドで確認し、S006を切っている。長径1.75m、短径1.0m、深さ50.5mである。埋土上面には、硬化面を伴いS007同様に、上層は薄く何層にも重ねられている。この土坑も道路の補修痕と考えられる。この遺構のプラン南側には、複数の土坑が存在したとみられるが、掘り過ぎのため詳細は把握は出来なかった。

出土遺物は、陶磁器が多く出土している。

[A-5-S009]

この遺構は、道路の補修痕と思われる土坑である。C-4グリッドで確認し、長径1.2m、短径0.9m、深さ20cmの楕円形の土坑であった。埋土は確認出来ず、硬化面の凹みとして見えたため補修痕として扱った。

[A-5-S010]

この遺構は、道路の補修痕と思われる土坑でC-5・6グリッドで確認した。長径2.8m、短径1.3m、深さ10cmの南北に長い楕円形であった。この遺構についても、S009同様に土層は確認できなかったが、硬化面の凹みとして見えたため補修痕として扱った。

[A-5-S011]

この遺構は、土坑でC-5・6グリッドで確認した。長径3.2m、短径0.9m、深さ20cmでS013を切り、S010と一部重なりそれを切る。

埋土上面に硬化面が確認できたが、あまりしまっていなかった。

遺物は、土師器や陶磁器が多く出土した。195は土師器の火鉢につけてある飾りの花と思われる。出土遺物は幕末期の物が多かった。

[A-5-S012]

この遺構は、土坑でC-5グリッドで検出した。S013とS014と3つの土坑が連なって検出され、調査中には三連土坑と呼んでいた。切り合い関係は、S013を切り、東側はS011に切られている。規模は、長径1.6m、短径0.9m、深さ40cmであった。埋土上には硬化面が確認でき、よくしまっていた。

遺物は少ないが、プラン中央付近から獣骨と思われる骨片を検出した。それ以外には、磁器染付が多く出土している。

[A-5-S013]

この遺構は、土坑でC-5グリッドで検出した。S012に切られ、S014を切る。東側はS011に切られている。規模は、長径1.2m、短径0.7m、深さ45cmであった。

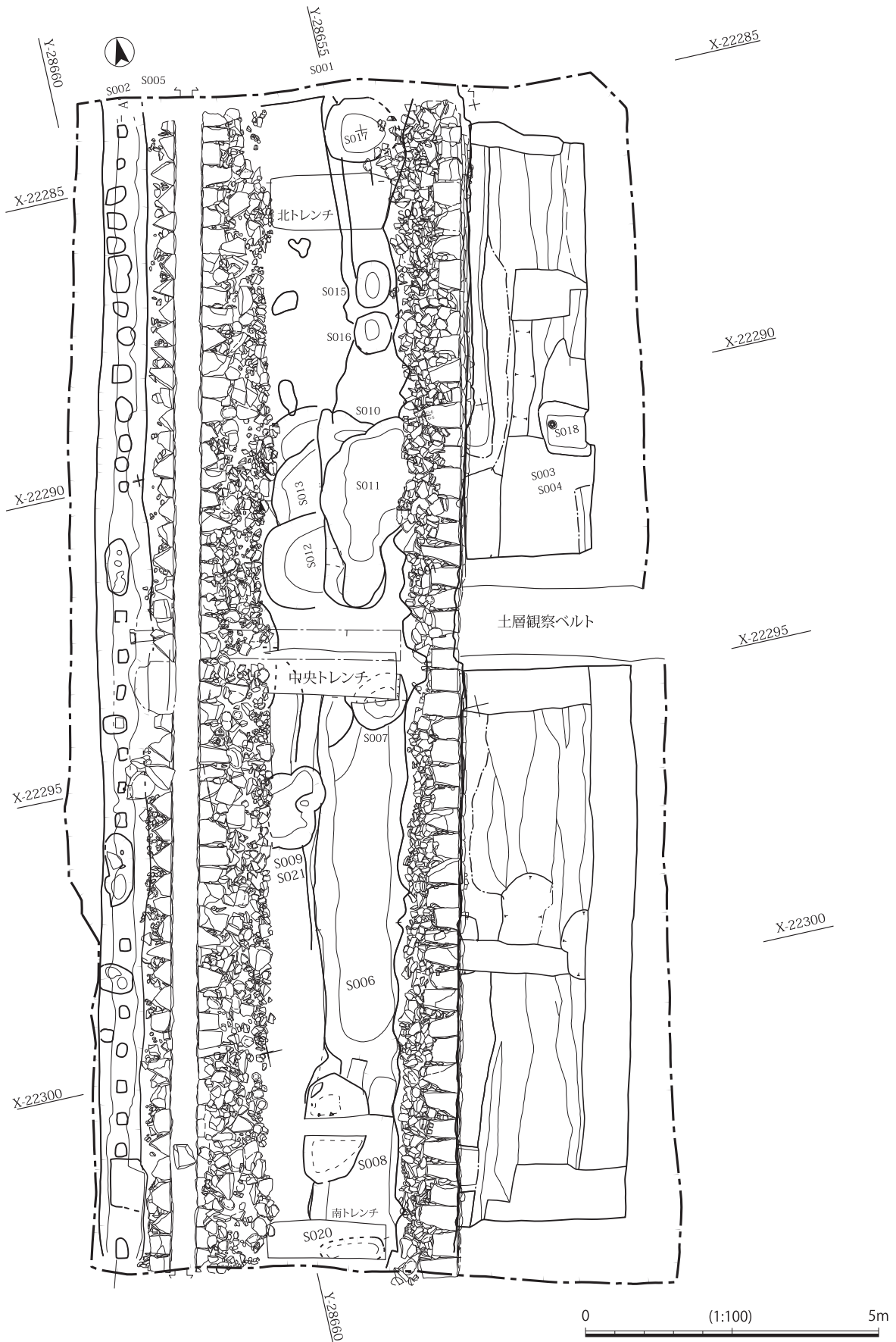


Fig.107 A-5 調査区遺構配置図 S=1/100

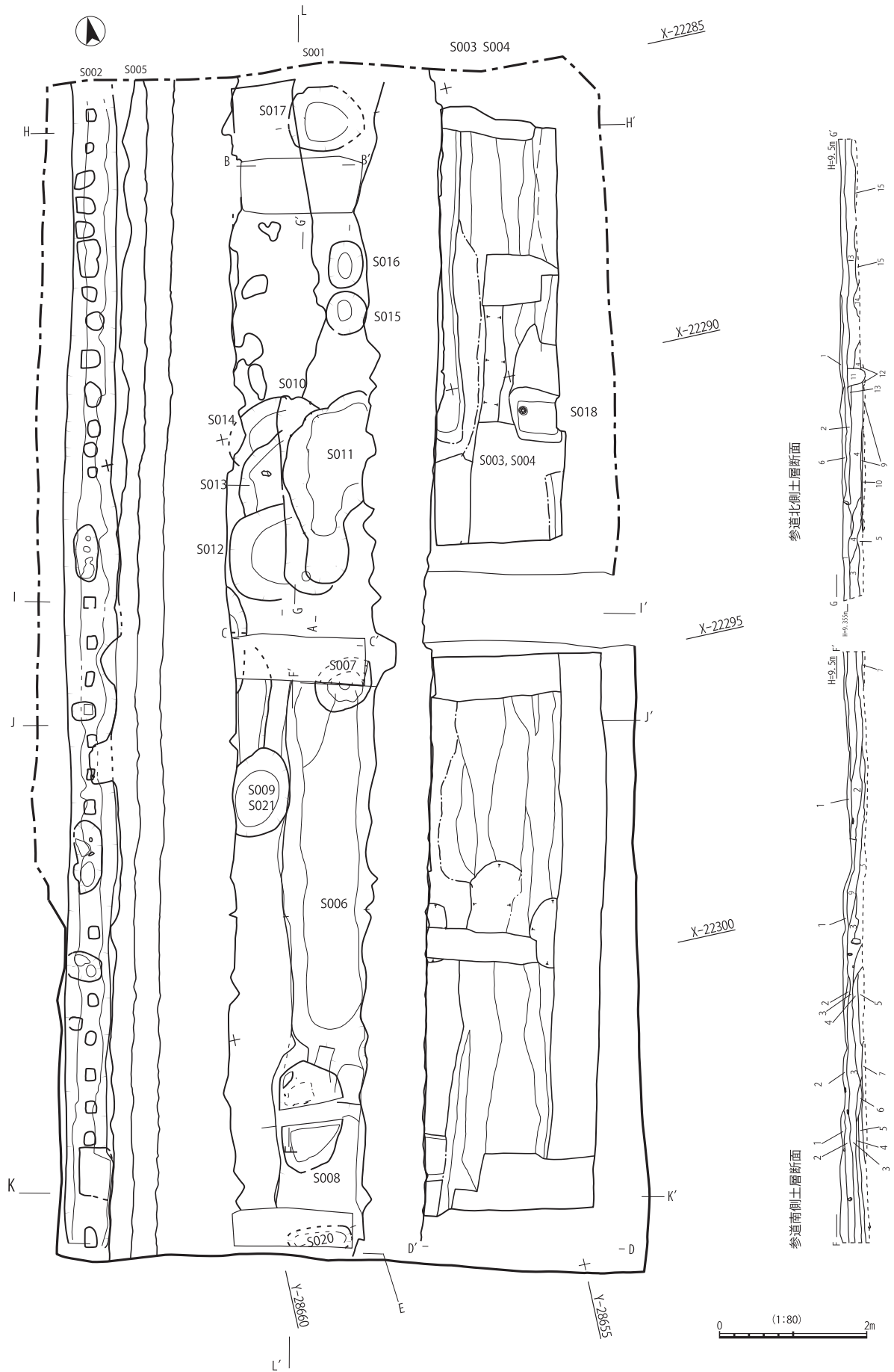


Fig.108 A-5 調査区遺構配置図 (S=1/100) 及び 参道土層図 (S=1/80)

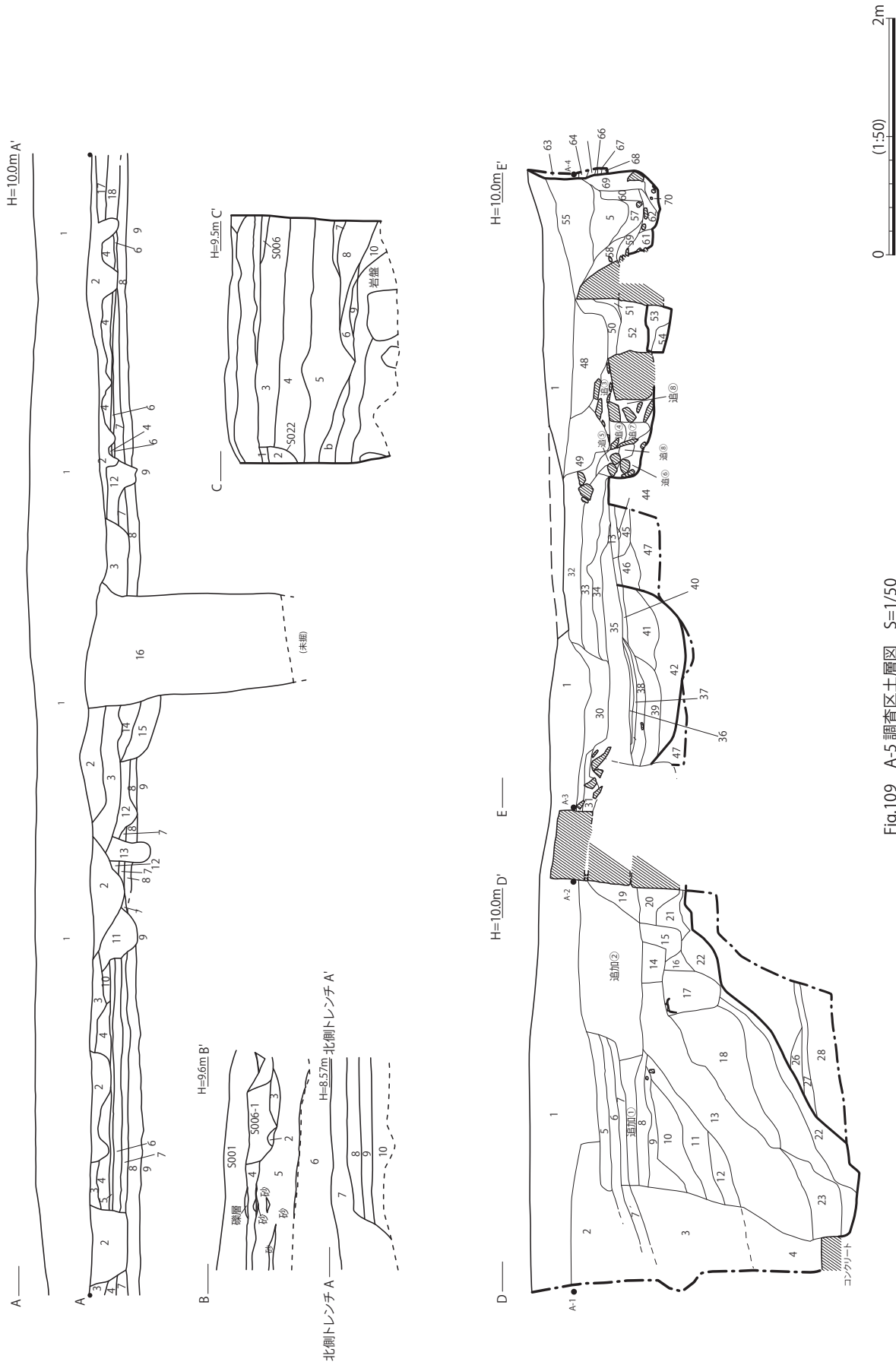


Fig.109 A-5 調査区土層図 S=1/50

中央西側（トレンチより北）

- 1層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；よくしまり、粘性ややあり。粘質土。塊状砂質土。粗砂～礫を含み不均質な土。
- 2層：Hue10YR3/4（褐色土）；よくしまり、粘性ややあり。粘質土。塊状砂質土。粗砂～礫を含み不均質な土。
- 3層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；よくしまり、粘性ややあり。粘質土。塊状砂質土。粗砂～礫を含み不均質な土。
- 4層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；よくしまり、粘性ややあり。粘質土。塊状砂質土。粗砂～礫を含み不均質な土。
- 5層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；よくしまり、粘性あり。きめは細かいが不均質な土質。
- 6層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；よくしまり、粘質あり。シルト土。
- 9層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；きわめてよくしまり、粘性なし。砂質土。
- 10層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；よくしまり、粘性なし。砂質土。全体として薄い層状を示す。
- 11層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；しまりあり、やや粘性あり。粘質土。不均質。
- 12層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ褐色土）；よくしまり、粘性あり。シルト土。層序下位に酸化鉄の発色あり。
- 13層：2層と4層の混土層。しまる。
- 14層：13層と同一だがよりしまる。
- 15層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；よくしまり、粘性あり。砂質土と粘質土の混土層。炭化物、礫（2cm大）を僅かに含む。層序の下位にはごくうすい砂質土が層状に拡がる。
- 16層：註記なし

中央西側（トレンチより南）

- 1層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；よくしまり、粘性なし。シルト土。礫、塊状砂質土を含む。表面には枕木痕をとどめる。
- 2層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；よくしまり、僅かに粘性あり。遺物、礫（2%）、塊状砂質土を含む（5%）。
- 3層：Hue10YR4/4（褐色土）；よくしまりやや粘性あり。砂質を帯びた粘質土。礫、塊状砂質土を含む（3%）。
- 4層：Hue10YR4/4（褐色土）；きわめてよくしまり、やや粘性あり。砂質を帯びた粘質土。炭化物を僅かに含む。
- 5層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；よくしまり、やや粘性あり。砂質を帯びた粘質土。砂を多く含む。
- 6層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；よくしまり、粘性なし。砂質土。粘質土を塊状に含む。炭化物、焼土粒（1mm以下）をごく僅かに含む。
- 7層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；よくしまり、粘性あり。砂質土と粘質土の混土層。砂の粒子はきわめて細かい。粒砂～礫をごく僅かに含む。
- 8層：3層に準じるが、しまりはやや弱い。
- 9層：4層に準じるが礫・砂をやや多く含む。
- 10層：2層と基本は同一。僅かに硬さに差がある。

北側トレンチ

- ①層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；硬くしまり、粘性あり。小礫、炭化物、灰白色粘土を塊で多量に含み酸化鉄の発色がある。
- ②層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性なし。細粒子だが、硬くしまり粘土を含み、酸化鉄の発色がある。
- ③層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；ブロック状に2～3cm大の白色粘土をマーブル状に含む。
- ④層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；粘土を含み、暗褐色土で全体に酸化鉄の発色がある。上面は硬化している。
- ⑤層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性弱い。砂が帯状または部分的に堆積している。
- ⑥層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまりのある土。炭化物や焼土を多く含む。中世の包含層？
- ⑦層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；炭化物を含む。層全体に酸化鉄の発色がある。
- ⑧層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；シルト質で粘性が強い。層全体に酸化鉄の発色がある。
- ⑨層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；炭化物を含む。シルト質。
- ⑩層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；炭化物を含む。シルト質だが、ザラザラ感が残る。

中央トレンチ土層断面

- ①層：しまり、粘性あり。シルト質。白色粘土に酸化鉄の発色があり炭化物を含む。土坑の一部（S022）。
- ②層：しまり、粘性あり。白色粘土に酸化鉄の発色があり①層よりもしまっている。土坑の一部（S022）
- ③層：層全体のしまり、粘性はやや弱い。版築の様相？きめ細かな砂の層に黒色の粘土がブロックで帯状に入る。ところどころに酸化鉄の発色がある。上面は硬化している。
- ④層：きめの粗い砂と、きめの細かい砂の混合層。部分的に粘土ブロックが入る。
- ⑤層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。層全体に炭化物、焼土を含み粘土ブロックを部分的に含む。
- ⑥層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。⑤層よりもしまっており、炭化物などの含みが少ない。
- ⑦層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；⑤層と⑥層の混合層。粘性あり、しまりあり。炭化物、焼土を多く含む。
- ⑧層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。炭化物、焼土を多量に含み粘土ブロックを含む。
- ⑨層：⑥層ときめの細かな砂の混合層。
- ⑩層：しまり、粘性あり。粘土層で酸化鉄の発色がある。

西側壁面

- 1層：バラス層。近現代の客土。
- 2層：バラス、粘質混土層。近現代の客土。
- 3層：Hue10YR4/6（褐色土）；しまる粘質土。バラスを含む（5%）近現代の客土。
- 4層：Hue10YR3/1（黒褐色土）；しまりあり、僅かに粘性あり。シルト土。粗砂～礫（1%）、炭化物を含む（1%）。粘土粒（2mm 大）を僅かに含む。西南戦争後の覆土？
- 5層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；きわめてよくしまり、粘性なし。シルト土、粗砂、炭化物粒をごく僅かに含む。西南戦争後の道路復旧面？
- 6層：Hue2.5Y3/2（黒褐色土）；よくしまり、粘性なし。砂質土、炭化物を塊状に含む（5%）。層序下位に灰を層状に含む所あり。西南戦争の影響による堆積か？
- 7層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ褐色土）；よくしまり、粘性なし。砂質土。礫（2%）、炭化物粒を含む（1%）。西南戦争の影響による堆積か？
- 8層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；きわめてよくしまり、粘性なし。シルト土。やや不均質な土質。主たる硬化面。
- 9層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；ややしまり、粘性なし。シルト土。8層と同じだがきめは揃っている。地山か。
- 10層：2層と3層の混土層。
- 11層：2層と9層の混土層。
- 12層：2層と6層の混土層。層序下位に礫（5cm大）を1個伴う。
- 13層：11層と同一だがしまりはない。
- 14層：3層と9層の混土層。ややしまる。近現代の埋土。
- 15層：13層と同一だがややしまる。近現代の埋土。
- 16層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；ややしまり、粘性あり。層序下位には細砂を伴う近現代の埋土。
- 17層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；ややしまり、粘性あり。遺物から昭和初期の掘り方と判明。
- 18層：11層と17層の混土層。ややしまる。遺物から昭和初期の掘り方と判明。

南側壁面

- 1層：バラス層。石垣と石垣の間に拳大の丸礫を使う。
- 2層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；よくしまり粘性あり。粘質と砂質の混土層。礫、瓦、コンクリート、ガラス、炭を含む。
- 3層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；2層と同質だがしまりは少なく粒子も細かい。
- 4層：Hue2.5Y3/1（黒褐色土）；しまり、粘性あり。粘質土と礫の混土層。礫、木片、コンクリ塊、瓦片を伴う。
- 5層：礫、コンクリート、瓦の層状堆積。
- 6層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。粘質と砂質の混土層。層序下位に砂～礫が目立つ。
- 7層：漆喰、陶磁器、レンガ片、貝殻の堆積層。
- 7'層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ褐色土）；よくしまり、粘性あり。不均質で礫を伴う。
- 8層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ褐色土）；ややしまり、粘性あり。やや不均質で礫はわずか（1%未満）
- 9層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；ややしまり、粘性あり。塊状粘質土。礫、炭化物を僅かに含む。
- 10層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまり、粘性あり。粘質土（塊状）。軽石（1cm大）をごく僅かに含む。

- 11層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。礫は極めて少ない。（5cm大が1点）軽石様の塊をごく僅かに含む。酸化鉄の発色がみられる。
- 12層：Hue10YR4/4（褐色）と Hue10YR3/4（暗褐色）の中間；ややしまり、粘性あり。
- 13層：Hue10YR2/2（黒褐色土）；しまりあり、やや粘性あり。砂質土。瓦、丸砂利、陶磁器片を多量に伴う。
- 14層：13層と同質だがしまりなし。金属被覆された配線を伴う。
- 15層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまりなし、粘性あり。砂質土。
- 16層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；ややしまり、粘性あり。砂質を帯びた粘質土。
- 17層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；しまる。粒状の粘質と砂質の混土層。礫を多量に含み炭もやや含む。層序下位にくる酸化鉄の層がある。
- 18層：16層と同質だが礫を多く含み、しまりが強い。
- 19～21層：註記なし
- 22層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、粘性あり。酸化鉄含む。
- 23層：註記なし
- 24層：Hue10YR3/2（黒褐色土）しまり、粘性あり。
- 25層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ褐色土）；しまり、粘性あり。
- 26層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；しまり、粘性あり。
- 27層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ褐色土）；しまり、粘性あり。砂質を帯びる粘質土。酸化鉄多い。
- 28層：Hue2.5Y3/6（暗赤褐色土）；しまり、粘性あり。マンガン発色あり。
- 29層：Hue10YR2/3（黒褐色土）；しまり、粘性あり。
- 30層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；きわめてよくしまり、粘性あり。シルト土とバラスの混土層。
- 31層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；きわめてよくしまり、粘性なし。礫、砂利を伴う。
- 32層：Hue10YR3/4（暗褐色土）；よくしまり、粘性なし。シルト土。
- 33層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；よくしまり、粘性なし。シルト土。粒状粘質土（0.7～1cm）を僅かに含む。
- 34層：Hue10YR5/2（灰黄褐色土）；よくしまり、粘性あり。粘質と砂質の塊状混土層。遺物片を僅かに伴う。
- 35層：Hue10YR5/2（灰黄褐色土）；34層と同一だが、酸化鉄の発色がみられる。
- 36層：Hue10YR3/2（黒褐色土）；よくしまり、粘性なし。砂質土。
- 37層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；きわめてよくしまり、やや粘性あり。炭化物、焼土粒を僅かに含む。
- 38層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）；よくしまり、やや粘性あり。砂質を帯びた粘質土。粒砂～礫、瓦片、土器を伴う。酸化鉄の発色あり。
- 39層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；ややしまり、粘性あり。粘質土。炭、土器片を伴う。
- 40層：Hue10YR4/3（にぶい黄褐色土）；しまり、粘性あり。砂質を帯びた粘質土（粒状でやや不均一）。粒砂～礫、凝灰岩塊を伴う。酸化鉄の発色がみられる。
- 41層：Hue2.5Y3/3（暗オリーブ褐色土）；ややしまり、粘性あり。粘質土（塊状でやや不均一）。酸化鉄の発色が多くみられる。
- 42層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまりあり、粘性なし。砂質土
- 43層：Hue10YR3/3（暗褐色土）；しまり、やや粘性あり。砂質を帯びた粘質土。酸化鉄の発色がみられる。
- 44層：Hue10YR4/2（灰黄褐色土）と Hue10YR 4/3（にぶい黄褐色土）の中間；しまり、やや粘質あり。粘性を帯びた砂質土（塊

- 状でやや不均一)。
- 45 層：Hue10YR4/3 (にぶい黄褐色土)；しまり、やや粘性あり。砂質土。
- 46 層：Hue10YR2/2 (黒褐色土)；ややしまり、粘性あり。砂質土。瓦、プラスチック、ビニールを伴う。(混バラス土)。炭がやや目立つ。
- 47 層：Hue10YR2/2 (黒褐色土)；よくしまり、やや粘性あり。シルト土。砂利を伴う。
- 48 層：追加②と同一だがしまりなし。プラスチック、ビニールを多量に含む。
- 49 層：Hue10YR3/2 (黒褐色土)；しまりなし、粘性あり。粘質土層序下位に粗砂～礫を伴う。
- 50 層：Hue10YR2/1 (黒色土)；しまり、粘性なし。砂質土と粘質土の混合層。
- 51 層：Hue10YR3/2 (黒褐色土)；ややしまり、粘性あり。シルト質。
- 52 層：53 層と同一だが、ややしまりが強い。
- 53 層：Hue10YR2/2 (黒褐色土)；ややしまり、粘性あり。粘質土。粗砂～礫、ローム系粘質土塊、炭化物を含む。
- 54 層：56 層と同一だがややしまり強い。
- 55 層：Hue10YR2/3 (黒褐色土)；ややしまり、粘性あり。粘質を帯びた砂質土。粗砂～礫を伴う。
- 56 層：58 層と同一だがややしまり弱い。
- 57 層：Hue10YR3/3 (暗褐色土)；よくしまり、粘性あり。砂質を帯びた粘質土。炭化物を僅かに含む。
- 58 層：58 層に粗砂～礫を伴う。
- 59 層：Hue10YR3/2 (黒褐色土)；しまり、やや粘性あり。シルト質。
- 60 層：再生クラッシュラン混土層。
- 61 層：Hue7.5YR5/6 (明褐色土)；しまり、粘性あり。ローム系粘質土、粗砂～礫を伴い不均一。
- 62 層：Hue10YR3/3 (暗褐色土)；ややしまり、粘性あり。シルト質。粗砂～礫、ローム系粘質土を伴う。
- 63 層：Hue10YR2/3 (黒褐色土)；しまり、やや粘性あり。砂質土。粗砂～礫、炭化物を大量に含む。
- 64 層：Hue10YR4/2 (灰黄褐色土) と Hue10YR4/3 (にぶい黄褐色土) の間；よくしまる砂質土。
- 65 層：Hue10YR3/3 (暗褐色土)；きわめてよくしまり、粘性あり。粘質土。酸化鉄の発色あり。
- 66 層：Hue10YR3/3 (暗褐色土)；よくしまり、粘性あり。粘質土。粗砂～礫、焼土、炭化物粒を伴う。
- 67 層：ローム系粘質土塊、砂質土、粘質土の混合層。礫を多く含みよくしまる。
- 68 層：Hue2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色土)；しまりなし、粘性あり。粘質土。礫を含む (1%)。
- 69 層：Hue10YR2/2 (黒褐色土)；しまり、粘性なし。粘質土。49 層に似るが土質は均質。
- 70 層：Hue10YR2/2 (灰黄褐色土)；粘質土と砂質土の混合層。
- 71 層：Hue10YR5/2 (灰黄褐色土)；粘質土と礫の混合層。追加④層と比べて礫が少ない。
- 72 層：Hue10YR5/2 (灰黄褐色土)；しまり、粘性あり。粘質土。酸化鉄の発色がみられる。
- 73 層：70 層と同一だが、しまり弱い。
- 74 層：Hue10YR2/1 (黒褐色土)；しまり、粘性なし。シルト質。
- 75 層：35 層と 42 層の混土層。

埋土上に硬化面が確認できたが、よくしまっていた。この遺構からも獣骨と思われる骨が出土した。遺物の出土の仕方も S012 とよく似ており、時期的な差はあまりないようである。

[A-5-S014]

この遺構は、土坑で C-5 グリッドで検出した。S013 に切られ、東側を S010 に切られている。規模は、長径 1 m、短径 0.8m、深さ 40cm であった。三連土坑と呼んでいた S012・S013・S014 を比べてみると、大きさ、深さともにあまり変わらない。やや S012 が大きく、S013 がやや深い。とてもよく似た三つ子である。

埋土上に硬化面が確認でき、よくしまっていた。遺物はやや多く、磁器染付がよく出土している。

[A-5-S015]

この遺構は、C-6 グリッドで検出した土坑である。S006 を切り、すぐ南側には切り合いはないが S016 がある。規模は、長径 0.7m、短径 0.7m、深さ 35cm の円形であった。

埋土上面にはよくしまる硬化面が確認でき、上層からは炭化物や小礫が出土した。下層はきめの細かい砂で貝殻を含んでいた。この遺構では、上層に薄く重なるような層は確認できなかった。

出土遺物は、684、682 のような非常に薄い作りで内面に金泥で文字の書かれた盃が出土した。時期は、新しく近代のものと思われる。

[A-5-S016]

この遺構は、C-6 グリッドで検出した土坑で S006 を切り、すぐ北側には S015 が検出されている。規模は、長径 0.8m、短径 0.6m、深さ 45cm であった。規模は S015 と変わらないが、やや S016 のほうが深い。

埋土は、砂質土が主体で、上面には硬化面が確認できた。しかし、その下には薄い層の重なりは確認できず、道路の補修痕ではなさそうである。

出土遺物は、2層から 18 世紀代の大きな染付皿（685）が出土した。割れて破片での出土だったものの残りは良かった。301 は時期の皿だが、内面見込み部には染付がなされ、壁面は薄い緑色に仕上げられている。形は、円ではなく方形になる。

[A-5-S017]

この遺構は、C・D-6・7 で検出した土坑である。調査区の北壁のすぐ脇での検出でプラン東側は石垣に切られていた。長径 1.5m、短径 1.2m、深さは 45cm であった。

埋土上面には、硬化面が確認でき、上層部は薄い層が積み重ねられている。道路の補修痕であろう。

出土遺物には金泥？で「鉄の音」と書かれた盃（683）が出土している。これは、S015 で出土した 684、682 とよく似ており、近代の遺物と思われる。

[A-5-S019]

この遺構は、C-4 グリッドで検出した土坑で、S006 を切っている。S006 の土層断面確認のためにトレンチを設定した際にかかり存在に気付いたので、半分近くをトレンチで掘削してしまった。検出できたのは、長径 1.5m、短径 1.2m、深さ 45cm のみであった。

上面に粘土を貼った砂質土主体の埋土であった。中からは板ガラス片が数枚出土しており、検出レベルは道路の硬化面（2層目）で、時期はやや古くなるかと思っていたが、中からは板ガラス片が数枚出土したため、近代の土坑である可能性が高い。

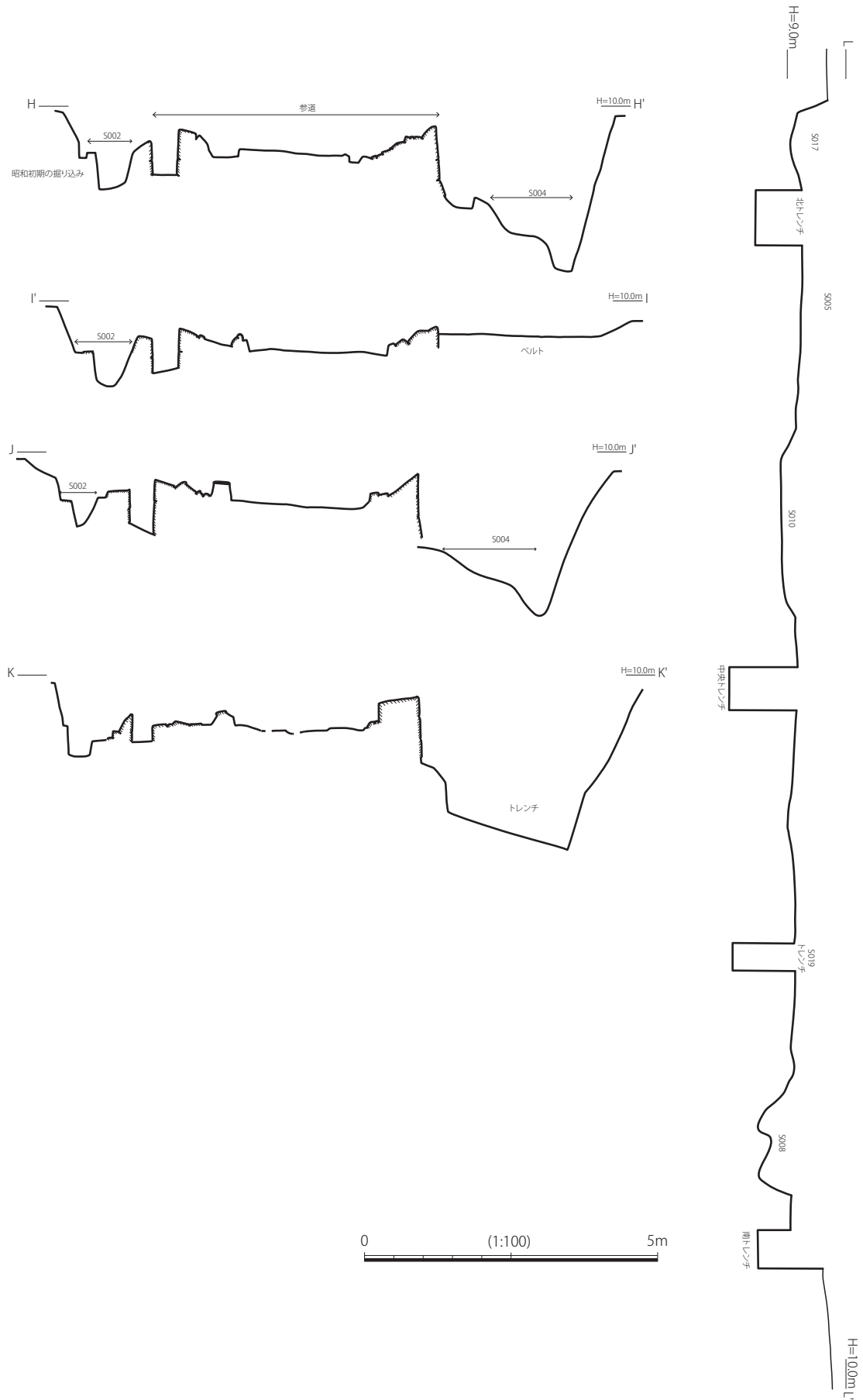


Fig.110 A-5 調査区エレベーション S=1/100

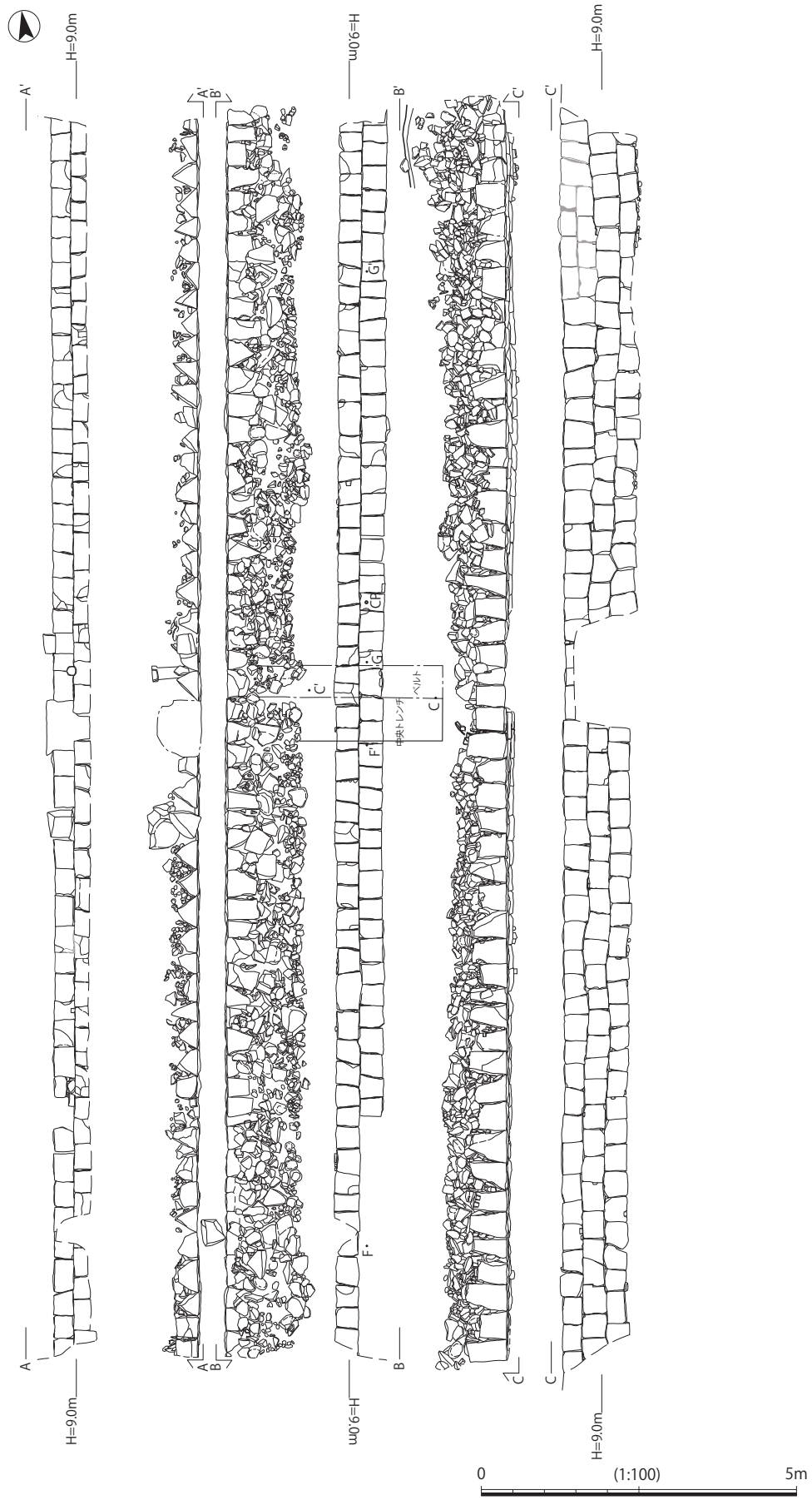


Fig.111 S001 (石垣) 実測図 S=1/100

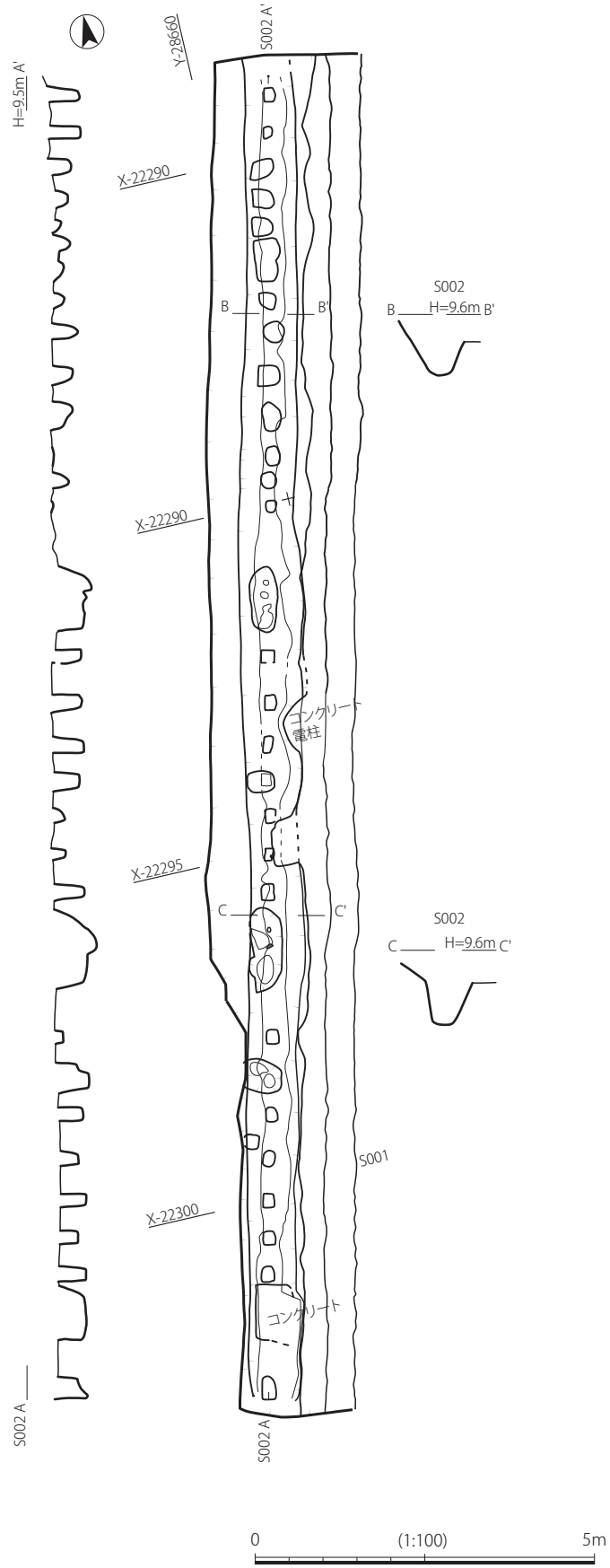


Fig.112 S002 (杭列) 実測図 S=1/100

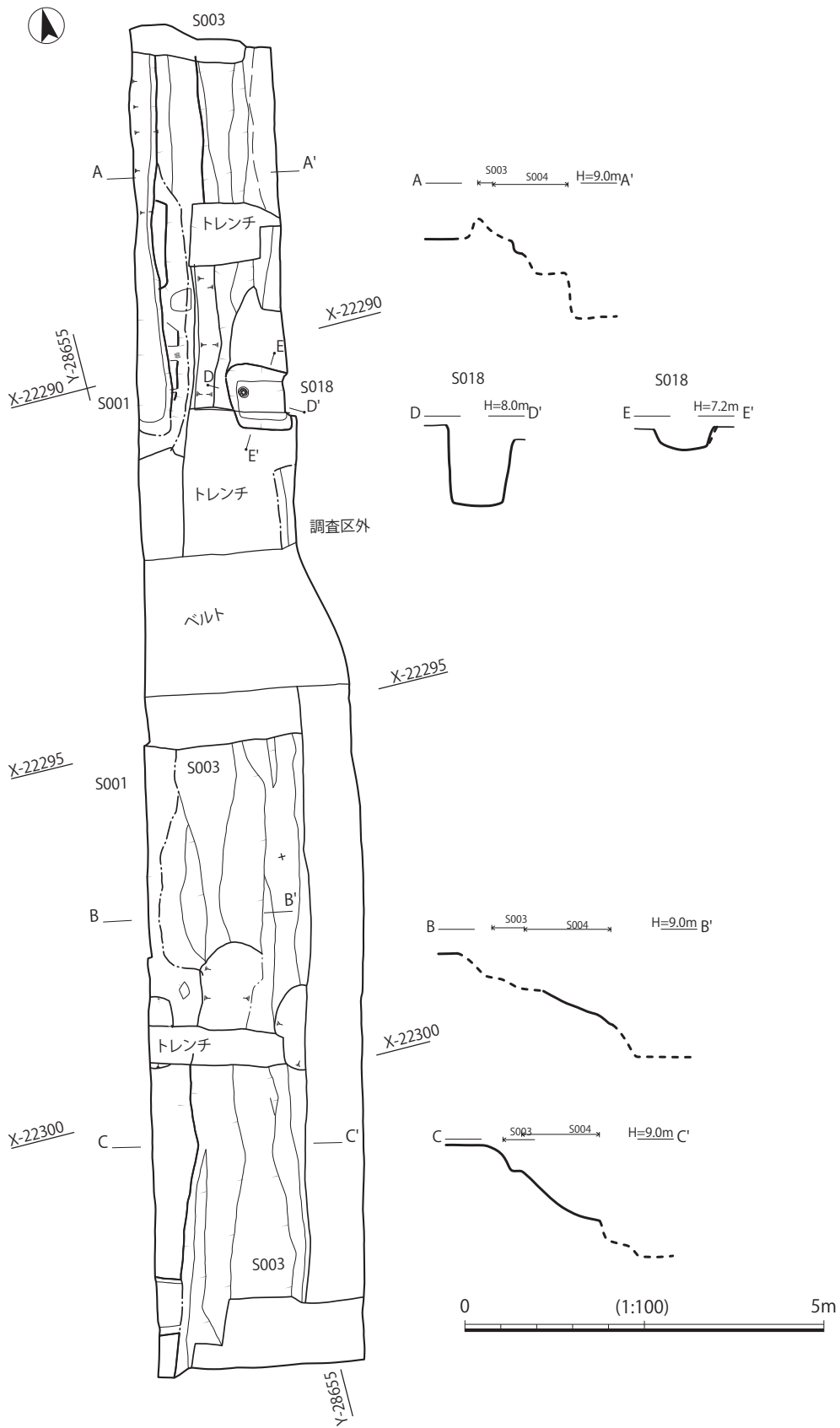


Fig.113 S003・004・018 実測図 S=1/100

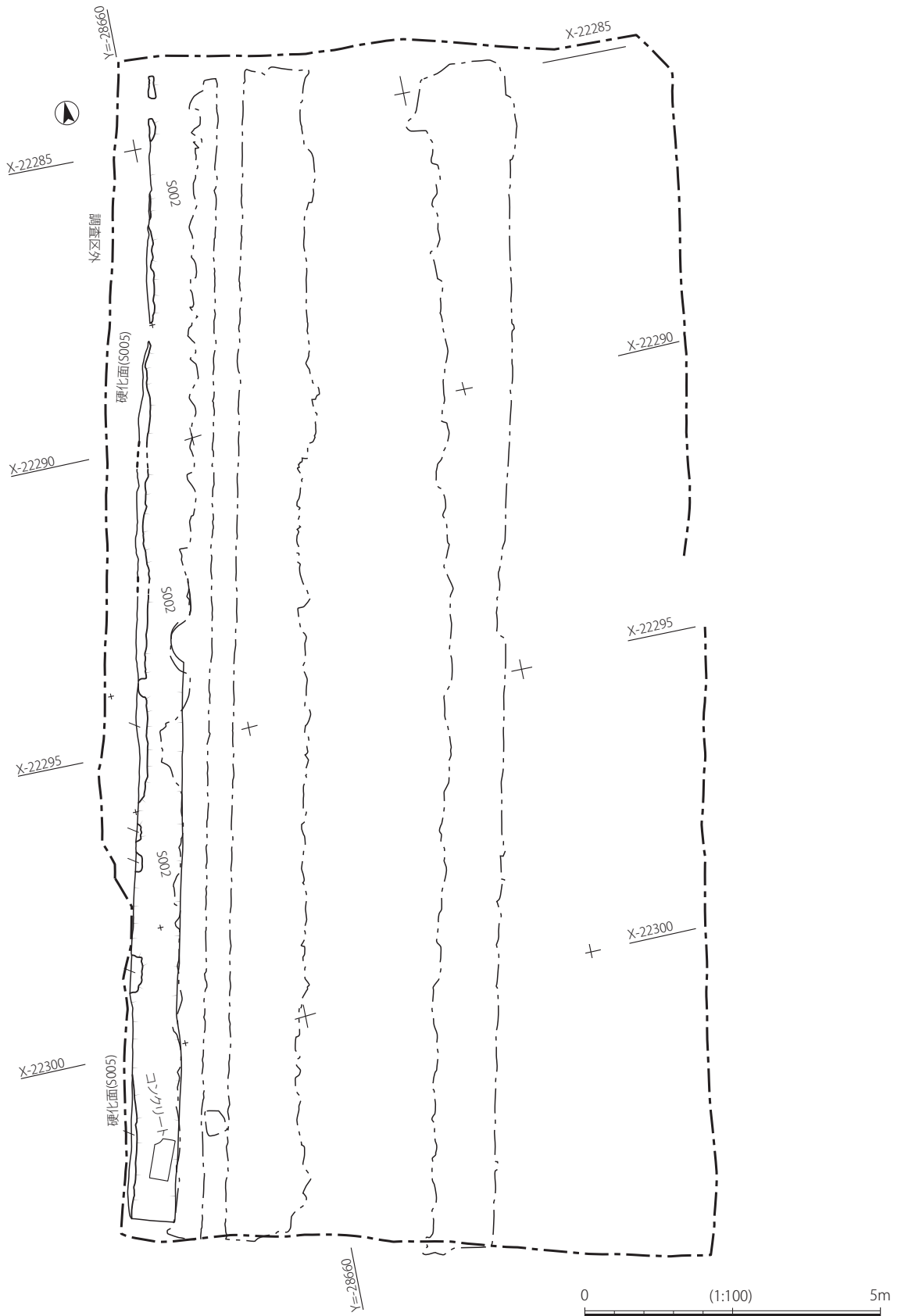


Fig.114 S005 (道路硬化面) 実測図 S=1/100

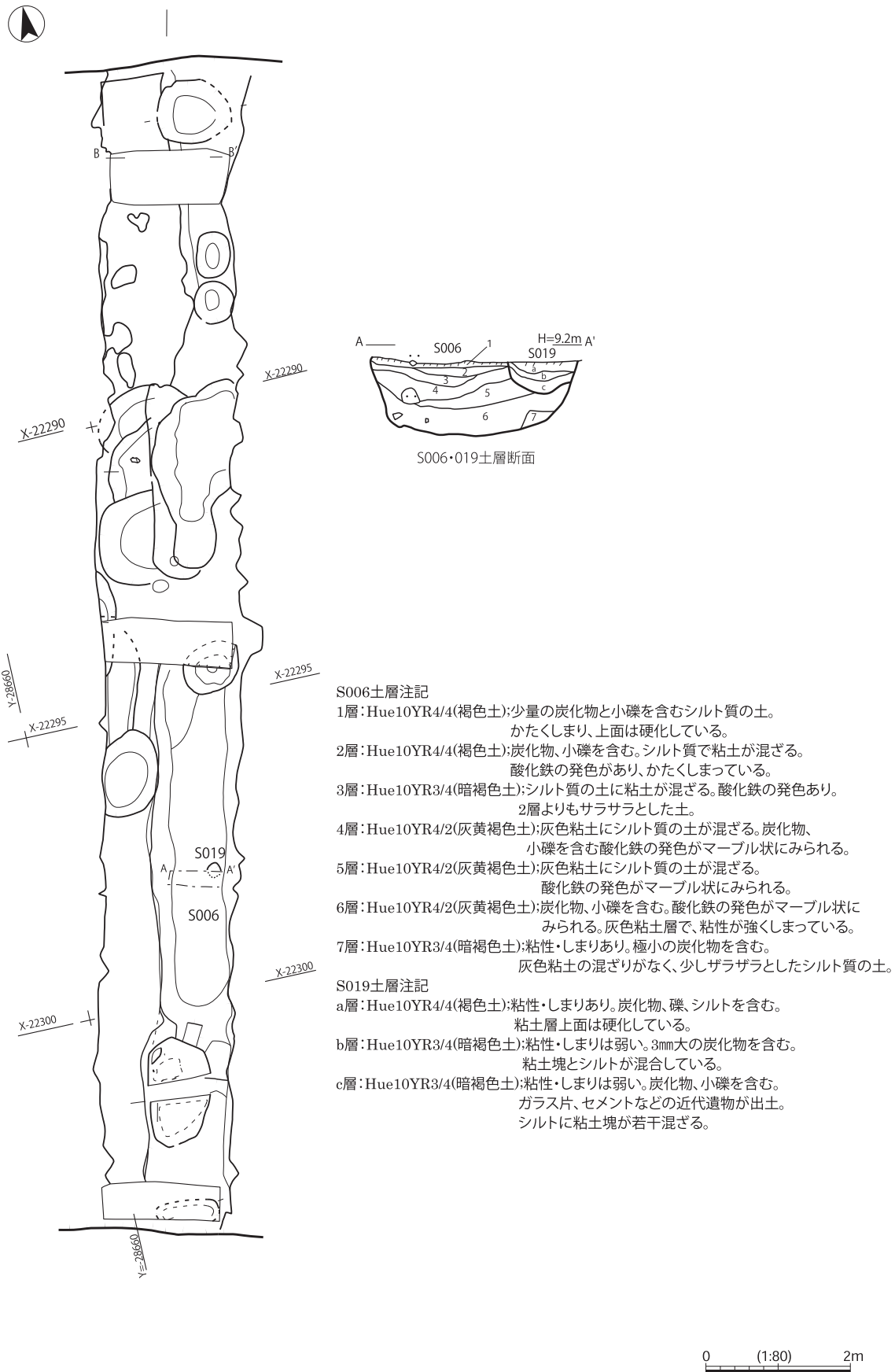


Fig.115 S006・S019 実測図 S=1/80

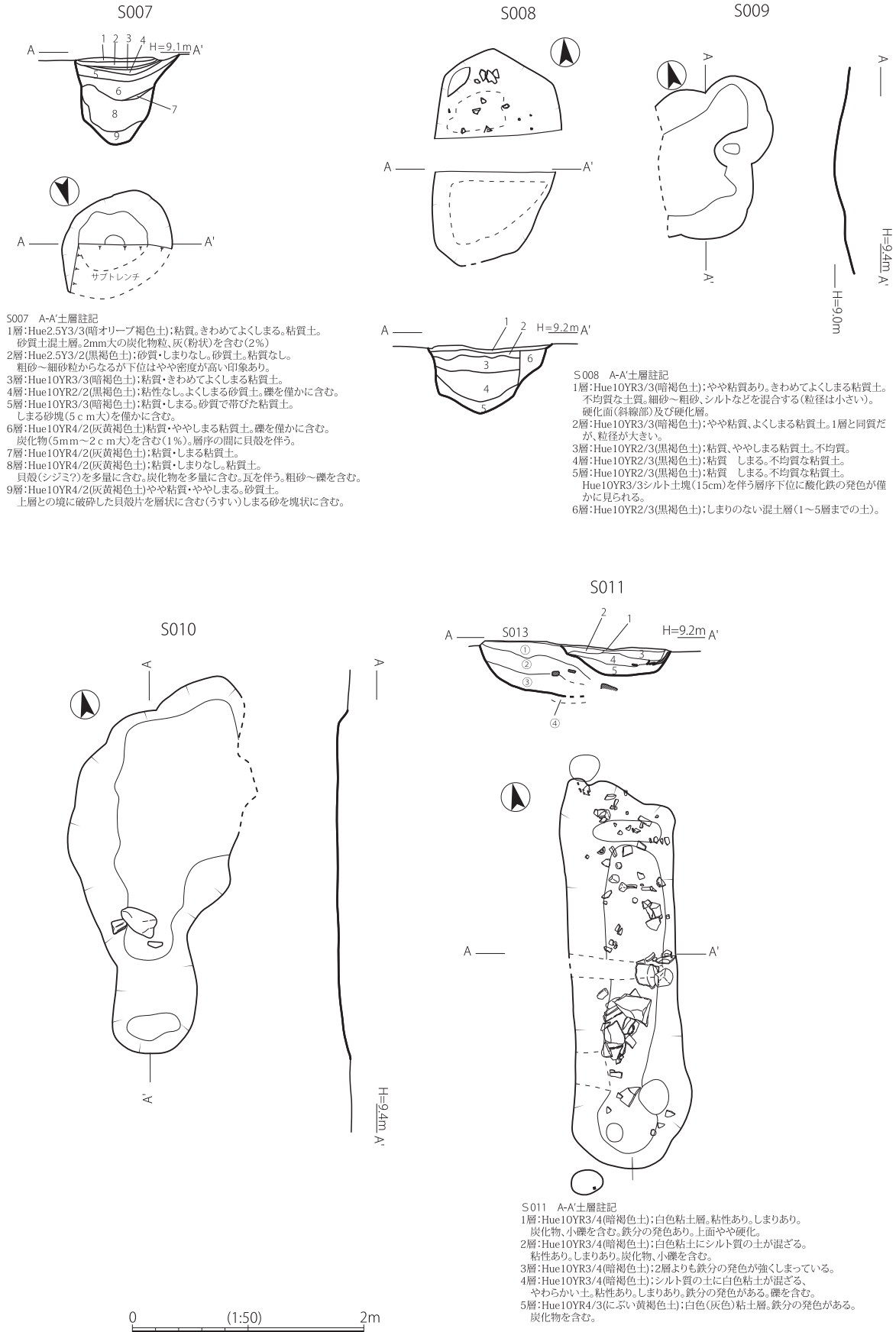
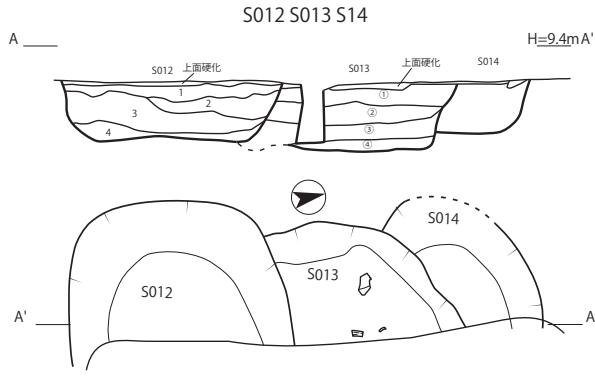
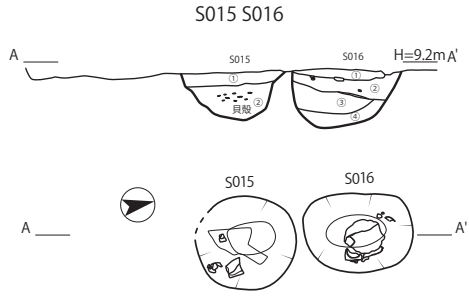


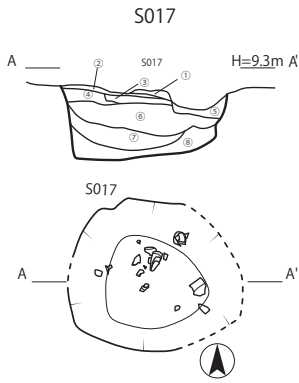
Fig.116 S007・S008・S009・S010・S011 実測図 S=1/50



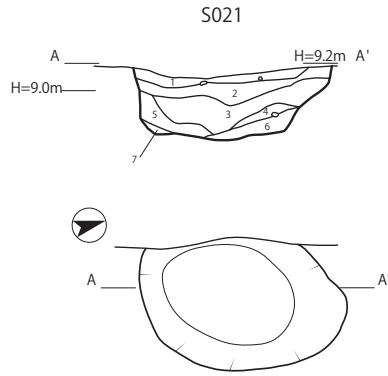
S012・S013・S014 土層註記
 ①層:炭化物、粘土、黄褐色土を含む。酸化鉄の発色がある。砂を多く含む。
 ②層:①層と似る。白色粘土に酸化鉄の発色がある。
 ③層:炭化物や黄褐色土を少量含む。酸化鉄の発色がある。粘性が強く、しまりがある。下層にいくほど砂が多くなる。上面にて骨が出土。
 ④層:炭化物などは少なく、砂が多い。粘性は強い。底に酸化鉄の塊あり。



S015 土層註記
 ①層:炭化物、粘土を含む。黒褐色土層。砂、小礫を含む。
 ②層:貝殻を多く含む。黒褐色土層。きめの細かな砂層。
 S016 土層註記
 ①層:Hue10YR3/3(暗褐色土)白灰色の粘土が混ざる。きめの細かな砂層、炭化物を含む。粘性、しまりは弱い。
 ②層:炭化物を多く含む黒褐色土層。貝殻を多く含む。粘性、しまりは弱い。サラサラとしたきめの細かな砂層。
 ③層:黒褐色土層。②よりも褐色。粘土を含む。シルト質で、粘性としまりがある。
 ④層:③層の土に砂が混ざる。



S017 A-A'土層註記
 ①層:Hue10YR3/4(暗褐色土); 上面硬化。粘性、しまりは弱い。白色粘土が多く入る。
 ②層:Hue10YR3/4(暗褐色土); 上面硬化。白色粘土が入る。
 ③層:Hue10YR3/3(暗褐色土); 砂が固まりガチガチしている。粘性としまりは弱い。
 ④層:Hue10YR3/4(暗褐色土); 白色粘土を含み、しまっている。
 ⑤層:白色粘土をブロック状に含む。黒褐色土層、炭化物を含む
 ⑥層:Hue10YR3/3(暗褐色土); 1mm大の炭化物を含む。
 ⑦層:Hue10YR2/3(黒褐色土)
 ⑧層:より炭化物を多く含む。黄色土粒子を多く含む。
 ⑨層:酸化鉄(マンガン?)の発色があり、かたくしまる。振り方面に粘土を貼っている様である。



S021 A-A'土層註記
 1層:Hue10YR3/3(暗褐色土); やや粘質で、きわめてよくしまる。塊状粘質土。
 2層:Hue10YR3/4(暗褐色土); 粘質あり、しまる。塊状粘質土。
 3層:Hue10YR2/3(黒褐色土); 粘質、ややしまる。塊状粘質土。礫、焼土粒、炭化物粒、骨片(植物残渣か?)を僅かに含む。酸化鉄の発色が僅かにみられる。
 4層:Hue10YR3/2(黒褐色土); 粘質、ややしまる。塊状粘質土。酸化鉄の発色がみられる。
 5層:3層と同質だがよりしまる。
 6層:Hue10YR2/3(黒褐色土); やや粘質、しまりなし。シルト土。塊状粘質土を僅かに含む。
 7層:4層と同質だが、しまりはより少ない。植物残渣と思しき骨片?をごく僅かに含む。

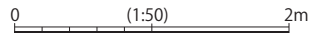
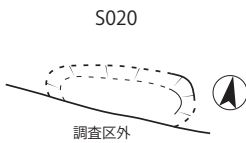


Fig.117 S012・013・014・015・016・017・020・021 実測図 S=1/50

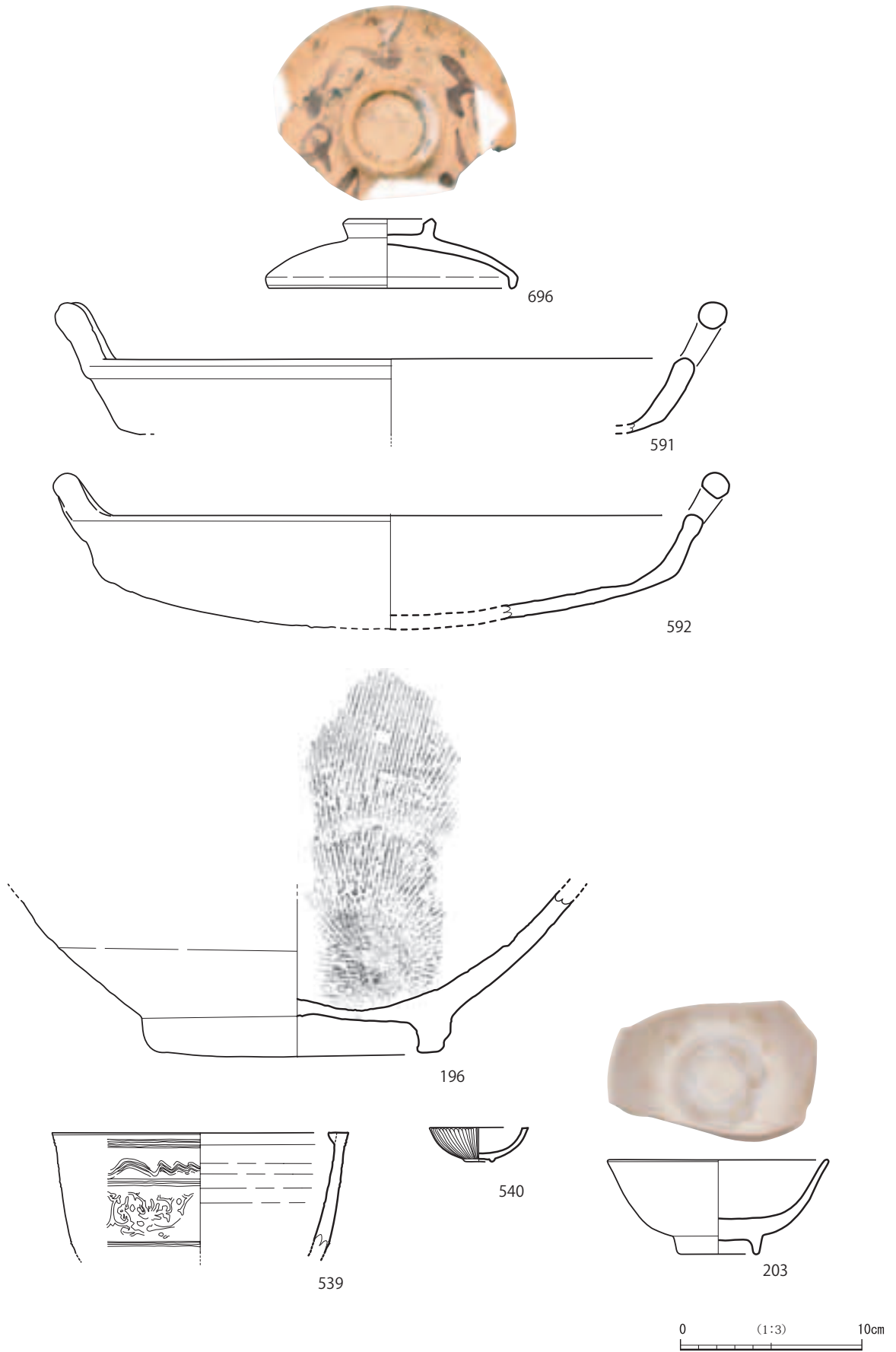


Fig.118 S001・003・004・005・006 出土遺物実測図 S=1/3

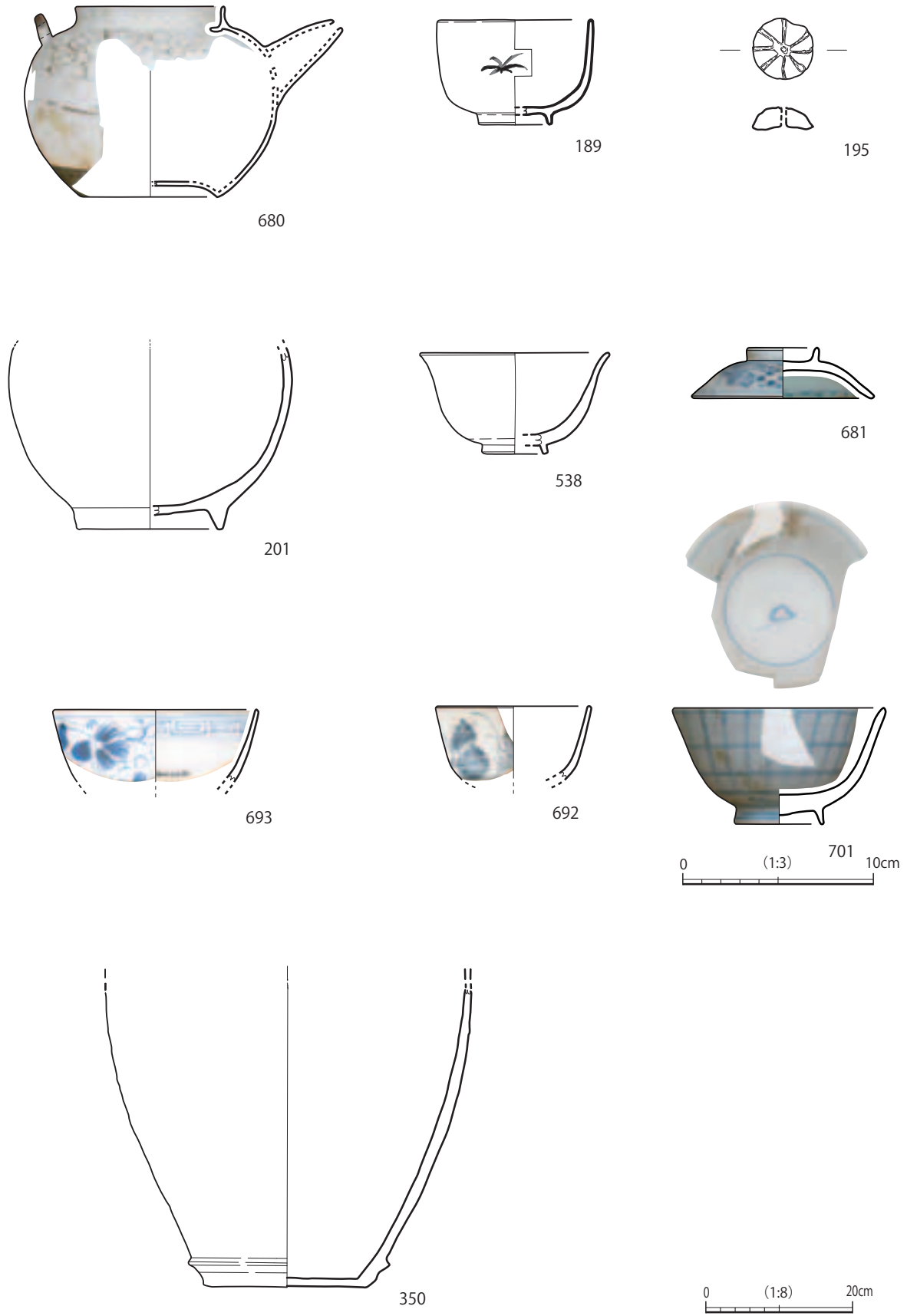


Fig.119 S007・S011 出土遺物実測図 S=1/3 350のみ S=1/8

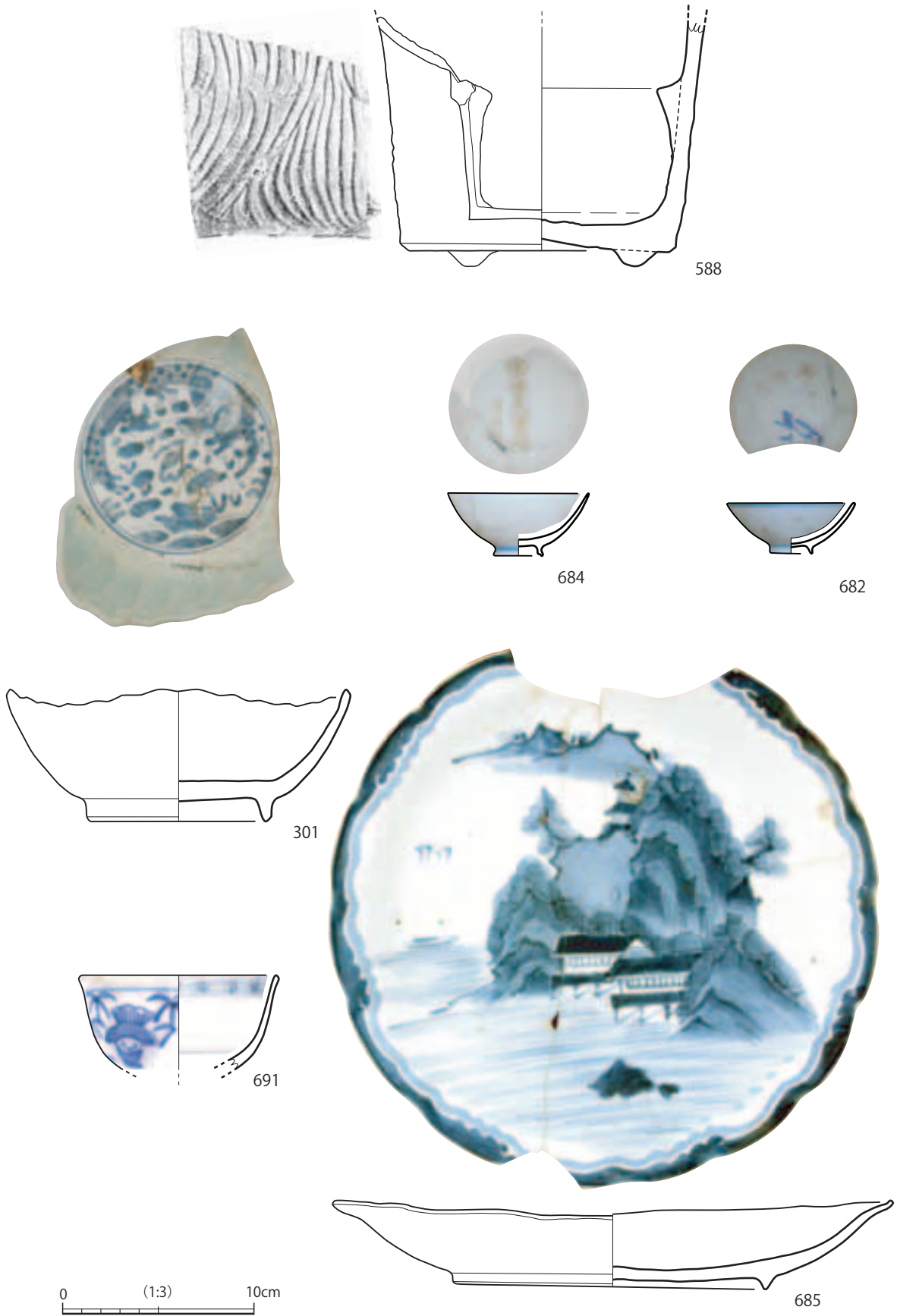


Fig.120 S003・015・016 出土遺物実測図 S=1/3



Fig.121 S017 出土遺物実測図 S=1/3

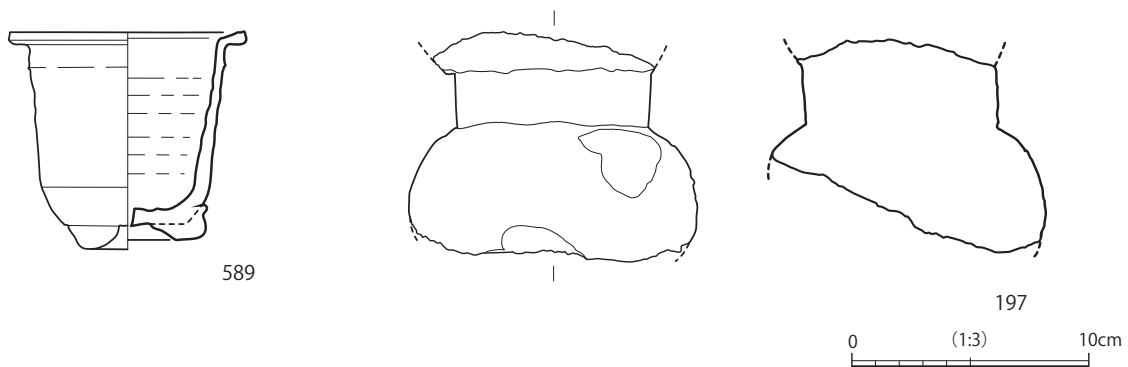


Fig.122 包含層出土遺物実測図 S=1/3

[A-5- S020]

この遺構は、C-3 グリッドで検出した土坑である。検出したというものの、東側は石垣に切られ、さらに南トレンチで大部分を掘削してしまい、プランは南壁土層断面より推定するしかなく、その数値は長径 1 m、短径 38cm で、深さは 50cm ほどであった。

土層断面は調査区南壁で確認でき、埋土上面に硬化面が 1 面確認できた。さらに埋土上面と鉄道路盤盛土の間に砂層が確認でき、幕末から明治初頭期の遺物が出土するため西南戦争時の堆積砂層ではないかと考えられる。

[A-5- S021]

この遺構は、C-4 グリッドで検出した土坑である。S009 とほぼ同じ位置で検出した。規模は、長径 1.5m、短径 0.8m、深さ 51.4cm であった。

土層を観察すると、上面は硬くしまっではいるが硬化面とは言いきれなかった。全体的に、粘土が塊状で入り、しまりがある埋土であった。上層は、やや薄い層となるが何層にも重なるわけではなかった。道路の補修痕ではなさそうである。

[A-5-S022]

この遺構は、C-4 グリッドで検出したが、S023 を切り西側の大半は石垣裏込掘り方に切られ、僅かしか確認できなかった。土層断面も確認できず、遺構の性格は全く分からなかった。

[A-5-S023]

この遺構は、C-4 グリッドで検出したが、中央トレンチで掘削し、石垣に切られてほとんど検出することができなかった。石垣の東側に遺構の弧の部分が僅かに確認できたのみである。土層断面も確認はできなかった。ただ調査中に、食物残滓と思しき骨片が多量に出土した。

PL.68 花岡山・万日山 A-5 調査区遺構写真 (1)



硬化面検出状況 (北から)



調査区西側壁道路路面検出状況 (南東から)



S002 完掘状況 (南から)



S003 検出状況 (南から)



S003 完掘状況 (南から)



S005 検出状況 (南から)

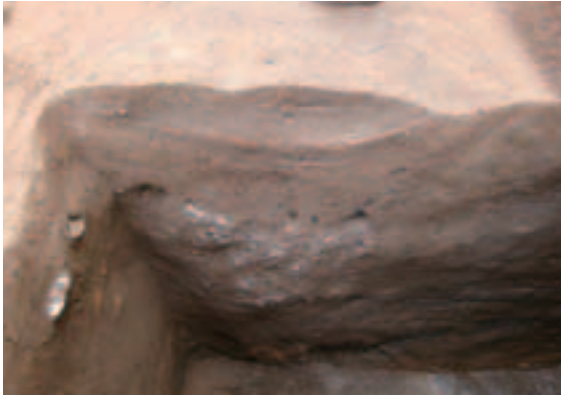


S006 完掘状況 (1) (南から)

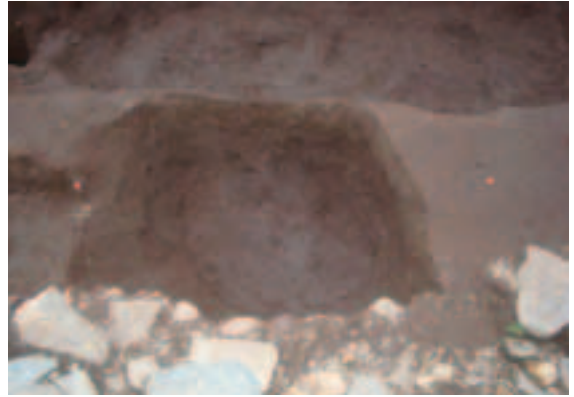


S006 完掘状況 (2) (南から)

PL.69 花岡山・万日山 A-5 調査区遺構写真 (2)



S007 土層断面 (北から)



S007 完掘状況 (西から)



S008 土層断面 (南から)



S008 完掘状況 (南から)



S009 検出状況 (南から)



S011 遺物出土状況 (北から)



S011 土層断面 (北から)



S011 完掘状況 (北から)

PL.70 花岡山・万日山 A-5 調査区遺構写真 (3)



S012・013・014 土層断面 (西から)



S012・013・014 完掘状況 (西から)



S015・016 検出状況 (西から)



S015 土層断面 (西から)



S015・016 遺物出土状況 (西から)



S015 遺物出土状況 (南から)



S016 完掘状況 (南から)



S019 完掘状況 (北から)

PL.71 花岡山・万日山 A-5 調査区遺構写真（4）



A-5 調査区（調査途中空撮）



A-5 調査区（調査終了時空撮）

PL.72 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物写真 (1)



416 S001 出土



317 S001 出土



417 S001 出土



318 S001 出土 (内器面)



518 S001 出土 (内器面)



515 S001 出土



318 S001 出土 (外器面)



518 S001 出土 (外器面)



516 S001 出土



517 S001 出土



519 S001 出土



588 S003 出土



589 S003・007 出土



591 S003・004 出土



592 S004 出土



316 S004 出土



313 S006 出土

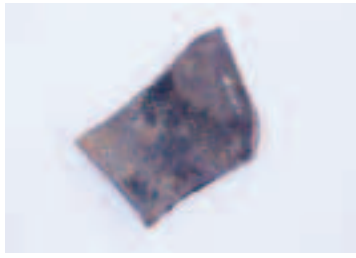


540 S006 出土

PL.73 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物写真 (2)



523 S006 出土



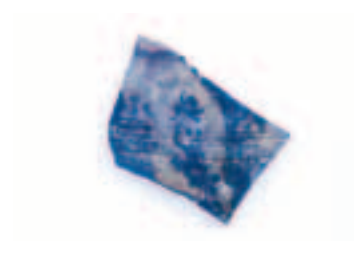
522 S006 出土 (内器面)



409 S006 出土



408 S006 出土



522 S006 出土 (外器面)



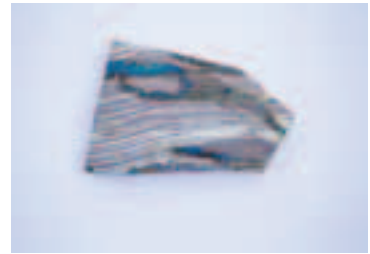
311 S006 出土



539 S006 出土 (内器面)



196 S006 出土 (内器面)



521 S006 出土



539 S006 出土 (外器面)



196 S006 出土 (外器面)



203 S006 出土 (内器面)



314 S006 出土 (内器面)



315 S006 出土 (内器面)



203 S006 出土 (外器面)



314 S006 出土 (外器面)



315 S006 出土 (外器面)



310 S007・015 出土

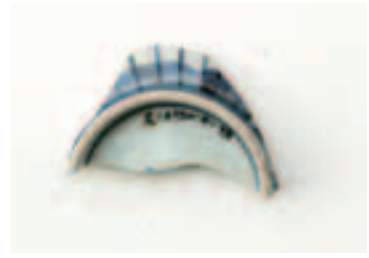
PL.74 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物写真 (3)



312 S007 出土



414 S007 出土



407 S007 出土



405 S007 出土



403 S007 出土



402 S007 出土



404 S007 出土



406 S007 出土



308 S007・021・023 出土



412 S008 出土



413 S008 出土



309 S008 出土 (内器面)



411 S008 出土



410 S008 出土



309 S008 出土 (外器面)



415 S009 出土



195 S011 出土



350 S011 出土

PL.75 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物写真 (4)



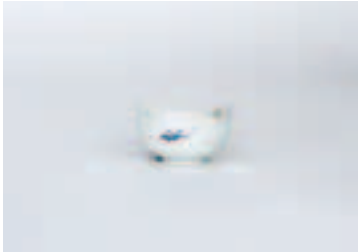
201 S011 出土



418 S011 出土 (内器面)



538 S011 出土



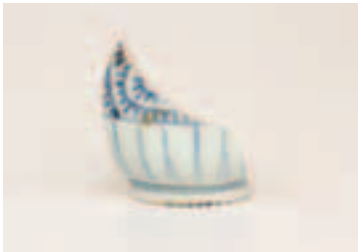
189 S011 出土



418 S011 出土 (外器面)



394 S012 出土



327 S012 出土



397 S012 出土



396 S012 出土



395 S012 出土



401 S013 出土



400 S013 出土



392 S013 出土 (内器面)



326 S013 出土



389 S013 出土



392 S013 出土 (外器面)



393 S013 出土



390 S013 出土

PL.76 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物写真 (5)



324 S013 出土



386 S014 出土



387 S014 (内器面)



384 S014 出土



385 S014 出土



387 S014 (外器面)



322 S014 出土



321 S014 出土



301 S016 出土



190 S017 出土



320 S017 出土



202 S017 出土



388 S017 出土



399 S018 出土 (内器面)



398 S018 出土



319 S018 出土



399 S018 出土 (外器面)



197 北側石垣間出土

Tab.53 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物観察表 (1)

図版 番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考		
					口径	底径	器高	内面	外面	内面				外面	
75	119	A-5	磁器染付 小碗	S011	下層	(8.0)	(3.7)	5.4	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。 1mm以下の赤褐色、黒色粒を多く含む。	良好	
76	121	A-5	土師器 灯明皿	S017	下層	6.1	3.9	1.5	回転ナデ、横ナデ	横ナデ	Hue5YR7/6 黄	Hue5YR7/6 黄	糸切り痕。口縁部張付着。	良好	
73	118	A-5	陶器 挿鉢	S006	下層	—	15.5	—	施軸(赤褐色)、ナデ、 回転ナデ	施軸(赤褐色)、ナデ、 回転ナデ	Hue2.5YR1.7/1 赤黒	Hue2.5YR1.7/1 赤黒	微細な白色粒を含む。	良好	
75	119	A-5	陶器 壺	S011	—	—	(7.2)	—	回転ナデ	回転ナデ	Hue2.5Y5/3 にぶい赤褐色	Hue2.5Y5/3 にぶい赤褐色	微細な白色粒を多く含む。	良好	
76	121	A-5	陶器 鉢	S017	上面	(22.2)	(15.4)	—	ハケ目、ナデ	施軸(青褐色)、回転ナ デ、回転(ヘラギリ)	Hue10YR6/4 にぶい黄褐色	Hue10YR6/4 にぶい黄褐色	0.5mm以下の白色粒を少量含む。	良好	脚部残存2ヶ所(本来は3~4足か?)
73	118	A-5	白磁 碗	S006	上層	(12.0)	4.1	5.2	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue2.5Y7/1 灰白	Hue2.5Y7/1 灰白	混入物なし。	良好	内面見込み彫施の目印入り。高台部砂付 着。
76	120	A-5	磁器染付 鉢	S016	—	(17.6)	9.2	6.9	施軸(白、青磁)	施軸(青磁)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	内面見込み彫施付。修理痕。稜花方形。
74	308	A-5	陶器 瓶	S007 S023	2~下層	—	(4.9)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue7.5Y7/1 灰白	Hue10YR8/3 浅黄緑	混入物なし。	良好	外面に文様。
74	309	A-5	磁器染付 小碗	S008	埋5層	—	(4.2)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。
73	310	A-5	陶器 行平鍋	S007 S015 東西トレンチ	7・8層 2層	13.5	—	—	施軸(透明)、回転ナデ 目	施軸(赤褐色)、キザミ 目	Hue10YR8/4 浅黄緑	Hue10YR8/4 浅黄緑	微細な褐色粒を含む。	良好	外面に染付着。注口。
73	311	A-5	陶器 小碗	S006	埋1層	9.6	3.0	5.4	施軸(透明)	施軸(透明)、回転ナ デ	Hue10YR8/1 灰白	Hue7.5YR8/1 灰白	混入物なし。	良好	外面に文様。
74	312	A-5	土師器 焙烙	S007	埋8層	18.0	—	15.5	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR8/2 灰白	Hue10YR8/2 灰白	褐色粒を含む。	良好	把手。外面に張付着。
72	313	A-5	土師器 皿	S006	上・中層	(9.5)	6.8	2.5	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR6/3 にぶい黄	Hue7.5YR6/2 灰黄	褐色粒を含む。	良好	
73	314	A-5	磁器染付 小碗	S006	埋1層	(10.0)	(4.2)	5.2	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue2.5Y7/1 灰白	Hue2.5Y7/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付(伊万里?)
73	315	A-5	磁器染付 碗	S006	—	—	4.3	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。
72	316	A-5	陶器 小碗	S004	17層	(8.0)	3.3	4.6	調整不明	施軸(青磁)	Hue2.5YR3/5 にぶい赤褐色	Hue2.5YR3/5 にぶい赤褐色	混入物なし。	良好	るつぽに彫付。九曜文(2ヶ所)
72	317	A-5	陶器 小碗	S001	1層	—	(3.4)	—	施軸(白)	施軸(白)	Hue10YR8/2 灰白	Hue10YR8/2 灰白	混入物なし。	良好	内外面に文様。
72	318	A-5	磁器染付 碗	S001	1層	—	(3.6)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	内外面に染付。
76	319	A-5	磁器染付 小碗	S018	—	(7.4)	(3.8)	3.8	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な白、黒色粒を含む。	良好	
76	320	A-5	土師器 灯明皿	S017	—	6.1	3.8	1.1	回転ナデ	回転ナデ	Hue5YR7/6 黄	Hue5YR7/6 黄	微細な黒、白色粒を含む。	良好	糸切り痕。口縁部張付着(2ヶ所)
76	321	A-5	磁器 皿	S014	—	(11.0)	(8.0)	3.8	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue10YR7/2 にぶい黄褐色	Hue10YR7/2 にぶい黄褐色	微細な白、黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。高台部砂目。
76	322	A-5	磁器染付 碗	S014	—	(9.8)	6.0	6.4	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を含む。	良好	内外面に染付。
76	323	A-5	磁器 盃	S016	—	(6.0)	(2.4)	2.5	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内面に色絵(布袋さん)
76	324	A-5	磁器 仏飯器	S013	—	(7.2)	3.8	5.0	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue7.5YR/1 灰白	Hue7.5YR/1 灰白	微細な褐色粒を含む。	良好	
76	325	A-5	磁器染付 仏飯器	S013	—	(8.0)	—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。
75	326	A-5	磁器染付 碗	S013	下層	(11.0)	(4.5)	6.5	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。
75	327	A-5	磁器染付 小碗	S012	上層	—	(5.6)	—	回転ナデ	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付(タコ唐草)
74	119	A-5	瓦葺土器 貯蔵甕	S011	—	—	22.0	—	ナデ、ハケ目	ナデ	Hue5Y3/1 黒	Hue5Y3/1 黒	微細な白色粒を少量含む。	良好	外面に突群。
76	384	A-5	磁器染付 皿	S014	—	(14.0)	—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。

Tab.54 花岡山・万山A-5 調査区遺物観察表 (2)

図版番号	挿入番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	器高	内面	外面	内面	外面			
76	385	A-5	磁器染付	湯呑	S014		(7.0)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。
76	386	A-5	磁器染付	蕎麦猪口	S014		(7.0)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付。
76	387	A-5	磁器	皿	S014		—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue2.5Y7/1 灰白	Hue2.5Y7/1 灰白	微細な黒色粒をわずかに含む。	良好	内外面に染付。
76	388	A-5	磁器	小皿	S017	下層	(10.0)	2.7	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内面に色絵。波状口縁。口唇部に鱗軸。
75	389	A-5	磁器染付	盃	S013	上層	—	3.5	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付。
75	390	A-5	磁器染付	碗	S013		—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。
	391	A-5	磁器染付	瓶	S016		(3.0)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付。
75	392	A-5	磁器染付	小碗	S013		—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。
75	393	A-5	磁器染付	小碗	S013	上層	—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内面に染付。
75	394	A-5	磁器染付	小碗	S012	上層	(14.0)	—	施軸(透明)、 回転ナズ	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な褐色粒を多く含む。	良好	外面に染付。
75	395	A-5	磁器染付	小杯	S012		—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付。
75	396	A-5	磁器染付	蓋	S012	下層	(12.0)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。
75	397	A-5	磁器染付	重鉢	S012	下層	(9.0)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な褐色粒を少量含む。	良好	外面に染付。
76	398	A-5	磁器	皿	S018		—	(12.0)	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内面に染付。
76	399	A-5	磁器染付	皿	S018		—	(5.0)	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。外面見込み部に朱書。 内面に付着物。
75	400	A-5	陶器	土瓶	S013	下層	(6.0)	—	回転ナズ	回転ナズ	Hue5YR7/6 白	Hue5YR7/6 白	混入物なし。	良好	外面に色絵。
75	401	A-5	陶器	鉢	S013	下層	—	—	ナズ	ナズ	Hue2.5YR4/3 たふい赤褐	Hue2.5YR4/3 たふい赤褐	混入物なし。	良好	外面に波状文。
74	402	A-5	磁器染付	皿	S007	埋2~下層	(14.0)	2.9	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。底部蛇の目軸ハギ。
74	403	A-5	磁器染付	皿	S007	埋2~下層	(14.0)	3.7	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。底部蛇の目軸ハギ。
74	404	A-5	磁器染付	皿	S007 東西トレン子	3層	(13.0)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	内面に染付。
74	405	A-5	磁器染付	小杯	S007	埋2~下層	(8.3)	3.0	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	外面に染付。
74	406	A-5	磁器染付	皿	S007 東西トレン子	埋8層	(13.0)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue7.5Y8/1 灰白	Hue7.5Y8/1 灰白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内面に染付。
74	407	A-5	磁器染付	皿	S007	埋2~3層	—	(6.2)	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	微細な黒色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。
73	408	A-5	青磁	碗	S006	上層	—	—	施軸(オリープ黄)	施軸(オリープ黄)	Hue5Y6/2 灰白	Hue5Y6/2 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に花びら文様。
73	409	A-5	陶器	小碗	S006	上層	(10.0)	3.2	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	混入物なし。	良好	外面に色絵。
74	410	A-5	磁器	碗	S008	埋1層	—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue7.5YR8/3 浅黄褐	Hue7.5YR8/3 浅黄褐	微細な褐色粒を少量含む。	良好	内外面に染付。
74	411	A-5	陶器	碗	S008	埋3層	—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	微細な褐色粒を少量含む。	良好	内面に模様。
74	412	A-5	陶器	行平蓋	S008	埋3層	(14.0)	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	微細な褐色粒を多く含む。	良好	
74	413	A-5	陶器	重鉢	S008	埋2層	—	—	回転ナズ	回転ナズ	Hue2.5YR3/4 明赤褐	Hue2.5YR3/4 明赤褐	混入物なし。	良好	

Tab.55 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物観察表 (3)

図版 番号	挿取 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	内面	外面	内面			
74	414	A-5	陶器	土瓶	S007	埋8層	—	—	施釉(褐)、回転ナデ	施釉(透明、白)	Hue2.5Y6/3 にぶい黄	Hue2.5Y6/3 にぶい黄	良好	外面に文様。	
74	415	A-5	陶器		S009	埋6層	—	—	施釉(暗褐)、回転 ナデ	施釉(オリーブ)	Hue10YR8/2 灰白	Hue10YR8/3 浅黄橙	良好	外面に竜の模様。残りが悪く器種不明。	
72	416	A-5	陶器	鉢	S001		(34.0)	—	施釉(白)	施釉(白)	Hue10YR5/1 褐灰	Hue10YR5/1 褐灰	良好	外面に模様。	
72	417	A-5	磁器染付	瓶	S001		—	—	回転ナデ	施釉(透明)	Hue5Y8/1 灰白	Hue5Y8/1 灰白	良好	外面に染付。	
75	418	A-5	磁器染付	皿	S011 東西ベルト	上層	—	(9.0)	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付。	
72	515	A-5	磁器染付	蓋	S001 カクラン	1層	(10.0)	4.0	2.7	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付。	
72	516	A-5	磁器	重鉢	S001	1層	—	—	施釉(透明)、 ハケ目	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好		
72	517	A-5	磁器染付	小碗	S001	1層	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付。	
72	518	A-5	磁器染付	小碗	S001	直上	—	—	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付。	
72	519	A-5	磁器染付	小碗	S001 B・C-5・6	直上	—	—	施釉(透明)	ナデ	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	外面に染付。	
73	521	A-5	陶器	不明	S006	中層	—	—	回転ナデ	施釉(白、オリーブ) ハケ目	Hue5YR5/4 にぶい赤褐	Hue5YR4/1 褐灰	良好		
73	522	A-5	陶器	鉢	S006		—	—	横ナデ、格子タキ	横ナデ	Hue5Y5/1 黒褐	Hue5YR3/2 暗赤褐	良好		
73	523	A-5	瓦質土器	火入れ?	S006		—	—	回転ナデ	回転ナデ	Hue2.5Y5/2 暗灰黄	Hue2.5Y5/2 暗灰黄	良好	外面に押文、突帯文。	
75	538	A-5	陶器	小碗	S011		(9.0)	—	5.2	施釉(透明)	Hue2.5Y8/3 淡黄	Hue2.5Y8/3 淡黄	良好		
73	539	A-5	陶器	火入れ?	S006		(16.0)	—	—	施釉(赤褐)、 回転ナデ	Hue2.5Y6/3 にぶい黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	良好	外面に波状文。	
72	540	A-5	磁器	合子	S006		5.2	1.8	1.9	施釉(透明)	Hue2.5Y8/1 灰白	Hue2.5Y8/1 灰白	良好		
72	588	A-5	土師器	燈炉	S003	24層	—	14.0	—	回転ナデ	Hue7.5YR7/4 にぶい橙	Hue7.5YR7/6 橙	良好	外面に模様。	
72	589	A-5	陶器	榎木鉢	S003 S007	10層 埋8層	(9.6)	5.3	8.8	回転ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ	Hue5YR4/6 赤褐	Hue5YR4/6 赤褐	良好	糸切り痕。水の平焼。穿孔。三脚(手こ ね)。
72	591	A-5	土師器	燈格	S003	10層	31.3	28.7	6.8	回転ナデ	回転ヘラケズリ	Hue7.5YR7/4 にぶい橙	Hue7.5YR7/4 にぶい橙	良好	外面に煤付着。吊り手状の把手。
72	592	A-5	土師器	燈格	S004	近代層	(33.0)	(31.0)	8.7	回転ナデ	回転ヘラケズリ	Hue7.5YR7/4 にぶい橙	Hue7.5YR7/4 にぶい橙	良好	外面に煤付着。吊り手状の把手。
119	680	A-5	陶器	土瓶	S007 S014 S015	埋3・埋6・7層 2層	7.7	(7.0)	10.0	施釉(透明)、 回転ナデ	施釉(灰白)、 回転ナデ	Hue2.5Y7/2 灰黄	Hue2.5Y7/2 灰黄	良好	外面にイッチン、釉薬を用いて模様 が描かれている。底部付近に煤付着。
119	681	A-5	磁器染付	蓋	S011		(9.3)	(3.5)	2.6	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に被熱。
120	682	A-5	磁器染付	小碗	S015		6.5	2.1	2.6	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内面に文字。内外面に染付。
121	683	A-5	磁器染付	小碗	S017	1・2層	7.5	2.3	2.8	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内面に文字。外面に染付。
120	684	A-5	磁器染付	小碗	S015		7.4	2.5	3.3	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内面に文字。外面に染付。
120	685	A-5	磁器染付	大皿	S016		29.0	16.1	4.6	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	志田焼。外面見込み部ハリ痕(6ヶ所) 内面に染付。
121	686	A-5	磁器染付	瓶	S017	3~6・下層	2.7	5.8	17.8	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	外面に染付。
121	687	A-5	磁器染付	碗	S017		10.0	4.0	5.8	施釉(透明)	施釉(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	良好	内外面に染付。

Tab.56 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物観察表 (4)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
120	691	A-5	磁器染付	碗	S016		(10.1)	—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	内外面に染付。
119	692	A-5	磁器染付	小碗	S011		(8.0)	—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue9/0 白	Hue9/0 白	混入物なし。	良好	外面に染付。
119	693	A-5	磁器染付	碗	S011		(10.6)	—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue10YR8/2 灰白	Hue10YR8/2 灰白	混入物なし。	良好	内外面に染付。
118	696	A-5	陶器	蓋	S001 S004	17層 23層	(13.4)	4.6	3.8	施軸(透明)、回転子 デ、ナデ	施軸(透明)、回転子 デ、ナデ	Hue7.5YR8/4 浅黄橙	Hue7.5YR8/4 黄橙	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に軸(釉)を用いて模様が描かれてい る。
121	697	A-5	磁器染付	鉢	S017	下層	(12.3)	(8.5)	6.1	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue7.5YR8/1 灰白	Hue7.5YR8/1 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。実測番号698とセット。
121	698	A-5	磁器染付	蓋	S017	下層	(10.7)	—	—	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue7.5YR8/1 灰白	Hue8/0 灰白	微細な黒色粒を含む。	良好	外面に染付。実測番号697とセット。
119	701	A-5	磁器染付	碗	S011		(11.0)	(4.6)	6.1	施軸(透明)	施軸(透明)	Hue8/0 灰白	Hue8/0 灰白	微細な黒色粒を多く含む。	良好	内外面に染付。

Tab.57 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物観察表 (5)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		色調	備考
							縦	横		
74	119	A-5	土師器	火鉢の飾切	S011		1.1	3.0	Hue10YR8/6 黄橙	

Tab.58 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物観察表 (6)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)			備考
							a	b	c	
76	122	A-5	五輪塔	空輪	北側石垣間	1・2層	—	1.3	—	

Tab.59 花岡山・万日山 A-5 調査区遺物観察表 (7)

図版 番号	掲載 番号	調査区	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm)		色調	備考
							縦	横		
96	612	A-5	泥面子	人形	S001	直上	2.8	1.8	Hue10YR7/3 にぶい黄橙	
96	613	A-5	泥面子	人形	S004	24層	3.8	2.1	Hue10YR8/4 浅黄橙	
96	614	A-5	泥面子	人形	S007	埋8層	3.3	1.9	Hue10YR7/3 にぶい黄橙	
96	615	A-5	泥面子	人形	東御砂利土		3.5	2.5	Hue10YR8/6 黄橙	
96	616	A-5	泥面子	人形	東石垣	3層	4.5	2.4	Hue5YR6/6 橙	
96	617	A-5	泥面子	人形	東石垣	3層	4.6	1.7	Hue7.5YR7/3 にぶい橙	
97	638	A-5	泥面子	モノ	S004	17層	4.3	1.8	Hue10YR7/4 にぶい黄橙	
97	639	A-5	泥面子	モノ	S004	17層	3.8	1.8	Hue10YR7/3 にぶい黄橙	

第10節 工事立会

1 概要

本調査とは別に、調査区に隣接する場所で付帯工事がいくつか並行して行われた。

大きなものとしては、新町地区周辺の排水処理を可能にするための暗渠排水路新設工事がある。それに前後して電気配管付替え工事も行われた。それらの工事に対して、調査区の隣接地であり重要な遺構の存在も予想されたので、本調査以外であっても工事立会の対象として立会いを実施した。

工事立会は夜間の立会いも含めて、平成24年8月下旬から平成25年1月半ばまでの期間、断続的に続けた。

2 排水路工事の立会結果

工事業者2社が区間を分けて受注しており、排水路という性格からほぼ流れの上流側から下流に向かって工事をしていくため、掘削の行われるたびに立会った。

工事は、排水路予定地に幅8m、深さ3m以上の掘削を行い、順にボックスカルバートを埋設していく作業である。今回工事立会としたのは、当該地がすでに過去の側溝工事で破壊されていると判断したためであった。今回立会ったのは、ほぼ高麗門踏切から一新踏切の間で、今回の調査区内である一新踏切から高麗門踏切の区間では以前から新町方面の排水を集めて、一新小西側から坪井川方向に向けて用水路を経て流し込むために設けられていた排水路を工事によって変えざるを得ない状況があったため、鉄道高架化事業に合わせて流路を変更する工事を行うことになっていた。

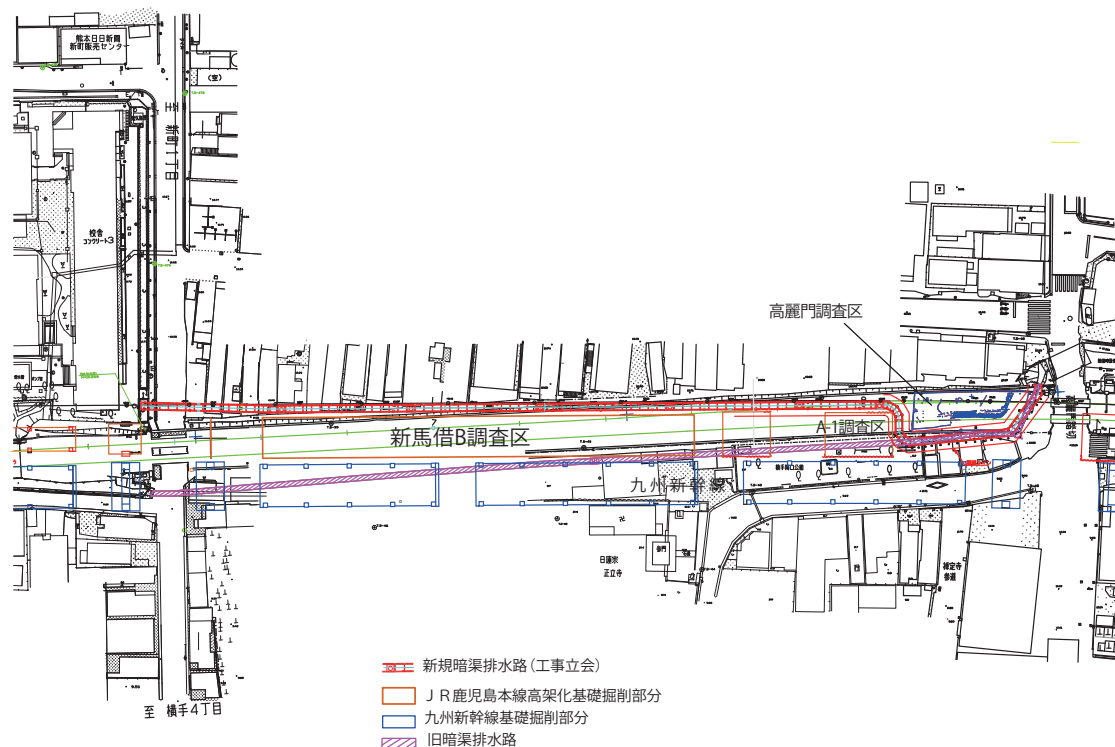


Fig.123 工事立会対象工事図

一新小側から工事が入ってきたが、一新踏切の南側で土塁の存在を確認できるのではないかと考え、立会いに望んだが、土塁はかなりの攪乱のためか確認できなかった。



PL.77 夜間工事立会



PL.78 配石遺構検出状況



PL.79 人骨及び墓壙検出状況



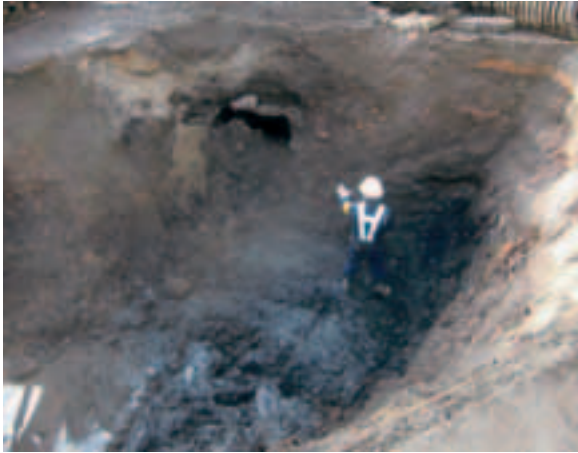
PL.80 掘削状況

その後、徐々に南下しながら立会いを進めていったが、新馬借B調査区の中ほどで確認した石敷遺構をやはり同じ位置付近で確認した。こちらの状況も同様であった。粘土層中から布目の平瓦が2点出土した。

その後、立会いが進む中で、高麗門踏切から北へ60mほど行った工事計画地の掘削場所においてその東壁から人骨が出土した。ちょうど頭部をわずかに重機で削るような状況で検出した。壁面を詳細に観察したところ、墓壙らしき掘り込みを確認できた。この確認したものが重機で大部分削られたのか、奥に埋もれているのか不明であったが、工事によって影響も有るかと思い頭骨だけを取り上げることとした。残念ながら頭蓋骨のうち顔面は削られていたが、大部分は残っていた。頭蓋骨を取上げた後に奥まで精査したところ、胸骨や供献された土師器も出土した。また、墓壙と考えられる掘り込みも確認した。これらのことから、この人骨はきちんと墓に埋葬されたものであることが分かった。なお、人骨については後日下関市の人類学研究機構へ分析を依頼した。

さらに工事が高麗門調査区周辺に至って、高麗門調査区を回避するためA-1調査区の南側付近で水路方向を西側にまわした部分では、掘削する際に高麗門に関係する瓦片などが多く出土した。

西側には旧暗渠排水として使用されていた3面～4面張りの排水路が現れた。外壁のコンクリートの中に補強のため土管もあったが、併せてそれらを撤去した。そして、さらに安定した地盤まで掘削した。底部の掘削を進める途中で、高麗門から北側土塁の西側にあった堀の痕跡を確認した。旧排水路を除去した後の埋土の状況を見ると、しまりがなく出土遺物も明らかに近代の遺物を含み埋土も粗く埋め込まれていることから、近代のある時期に一気に埋め込まれたような状況であった。傍証として明治、大正、昭和7年までの絵地図には、堀ははっきりと描かれているが、昭和15年のものにはなく、戦後の米軍撮影の空中撮影写真に



PL.81 排水路工事掘削確認状況



PL.82 高麗門南側橋台検出状況（右側に別石垣）



PL.83 出土した石



PL.84 石に残る矢穴の状況



PL.85 堀跡埋土状況



PL.86 橋台・水路・桁橋の配置状況

は堀のあった部分に建物が建っている。これらのことから戦時中に改変があったと考える。完全に消失するのはその時期であろうが、堀の底近くはヘドロ状のものが堆積し、明治初期のトイレタイルなどは出土しているものの、あまり遺物が入らないところをみると、まだ堀もしくは排水路としての機能は有していたであろう。また、底付近からは、高麗門の石垣の一部と考えられる径1mを超える岩が3点ほど出土した。この岩に幅10cmを超える矢穴も残されていた。この付近で底部と考えた部分の現地盤との比高差は3mをいくらか越えており、堀の外側では江戸期もその程度の差があったと想定できよう。

さらに現鉄道踏切に近い部分では、高麗門調査区で確認した鉄道の橋台に対応する石垣及びコンクリートの橋台が出土した。さらに、橋台の石垣の背後にも別の時期の石垣が見えた。この石垣は、次に述べる電気配管付替え工事の際にも出土していたものである。鉄道敷設以前に遡る可能性のある背後に見える石垣については、堀本来のものか、明治以降の高麗門、堀などの改変後作られたものか議論のわかれるところである。ここでは、高麗門西側の堀と参道東側の堀を繋いだ際の護岸として築かれたものとしておく。高麗門調査区の西側に見られた石垣は谷積で、堀の南側で確認した石垣はやや粗い布積で石材も凝灰岩が多い。なお、石垣遺構は現状としては排水路工事によって影響が及ばない範囲として現地に埋め戻してある。

3 電気配管付替え工事立会結果

この工事は、「高麗門跡」想定地の南側に新たに電気配管のボックスと配管をひき電気関係を地下に埋め込む工事である。5 m×10 mほどの広さで深さ3 mまでの掘削である。

立会いは工事工程に合わせて平成25年12月半ばに2回に渡って行った。最初はボックス設置のための掘削に立会った。立会いは交通量を勘案して夜間に行った。

掘削は表土付近は鉄道関係の工事によりすでに攪乱されていた。ところが、砂利層と攪乱層を除去していたところ、踏切に向かう道路に南側の壁付近に安山岩の柱状の石材が出土した。これは、A-2調査区で調査した際に出土した石組暗渠遺構の天井石であった。そこで詳細に周囲を確認したところ、天井石はそのひとつだけであったが、両側面の石垣はまだ残ったままであった。とりあえず略測し、できるだけ本体を壊さないよう要請したが、南側壁はよいとしても東側の暗渠壁は撤去しないと工事に支障があるとのことであったので掘削撤去を見守った。徐々に掘削していくと白く硬い物質が出土したが、新幹線工事の際の土壌改良剤が浸透してきたものと判断された。工事に必要な掘削深度で止まったが、暗渠の最下層までは到達しなかった。ただ、暗渠施設の東側壁の裏込めの状況は観察できた。5 cm大の栗石が詰め込まれていた。

その後、掘削を進めて行くと、今度はやや南側よりのところで、石垣の石らしきものが出土しだした。最初、石垣の裏方向から掘削していたため、攪乱に混じった石垣の石という認識であったが、掘削の西側端となり、掘削を南北にしだしたところで石垣であることがはっきりした。石垣は、確認できたのは上から6段ほどで、まだ下層へ続いていた。写真右側には自然堆積層がみられ、それを斜めに掘削し裏込め石はほとんど入れずに小振りの切石を乱雑に積み上げた状況が見られた。裏込めの土砂の中に近世磁器が含まれていたことから、近世以降のものと考えられる。この石垣は後に他の遺構との位置関係から先に排水路工事出土した鉄道の橋台に先行する石垣と連なるものであろう。



PL.87 天井石出土状況



PL.88 左壁の石垣出土状況



PL.89 道路側石垣の断面状況

4 A-2 調査区暗渠排水遺構の撤去工事立会結果

この工事立会は、平成25年3月上旬に行ったもので、A-2調査区で検出した石組暗渠排水遺構が工事にかかる分の撤去工事立会である。この暗渠遺構は、遺構の検討を経た結果、明治10年以降の構造物ということで、保存の対象とならず工事の支障物であるため撤去となった。

花岡山・万日山A-2調査区で調査した石組暗渠遺構を、工事にかかる範囲から除去していったところ、単線時に鉄道が敷設されていた場所付近で、A-2調査区で見られたものとは異なる構造に変えられていた。石垣は、きちんと成形された石を布積で積んでいる。また、これまでなかった水路中央付近に石垣壁による仕切りが設けられ水路が二分割されていた。天井石はそのまま同じ柱状石を横方向に並べて配置していた。これは鉄道を敷くに当たって、暗渠として利用されている水路の流れを確保しつつ、重量物が通過しても耐える構造としたためと推定できる。明治24年の開通以前に工事された可能性がある。

なお、この遺構も原位置に埋設して残したが、工事の際に崩壊しないように空間に土砂と硬化剤を注入されている。



PL.90 A-2 調査区 S001 (暗渠) 天井部石材



PL.91 A-2 調査区 S001 (暗渠) 構造変化状況



PL.92 A-2 調査区 S001 (暗渠) 内部状況 (1)



PL.93 A-2 調査区 S001 (暗渠) 内部状況 (2)

第11節 追加調査

・花岡山・万日山遺跡群 A-6 調査区

下馬天神踏切より南側については、一次・二次調査で、試掘トレンチを入れて調査範囲を絞り込んでいる経緯はあった。しかし、花岡山・万日山 A-3 調査区、A-4 調査区、A-5 調査区で確認した参道跡の状況をつかむ前であったため、その遺構を認識できていない可能性があった。二次調査での確認は、下馬天神踏切の南側で、どのようになっているのか直接確認はできていなかった。しかも、A-5 調査区、A-4 調査区などの状況から見れば、南側にも参道が続いている可能性は大いにあった。江戸期の絵図を見ると、下馬天神付近で西側に大きく曲がって描かれるものと、単純に直線的に描かれるものの2種類が大きく存在する。

下馬天神の南側では試掘調査は行われたが、明確な遺構がなく、攪乱された状態が多く、もし存在していたとしても壊されているのではないかと考えられた。ただ、試掘調査の写真をみると、A-4 調査区や A-5 調査区で確認された側溝状の落ち込みに似た土層が存在しているのが見て取れた。当該地はすでに工事着工可の通知を出し工事に入る状況であったが、J R の工事担当者、工事の受注業者のご好意により、トレンチ調査ではあるが、追加調査をすることができた。

以下に概要と結果を述べる。

1 概要

当該地では、2 箇所の橋脚工事が未施工であったため、橋脚に打ち込む矢板の一角にトレンチを入れることで協議がまとまった。ただし、調査できる期間は工事の合間を縫った数日であった。トレンチは、方形に組む矢板の南側に設定し、長さ 10 m、幅 1.2 m、深さ 1.5 m 掘削した。土層観察と遺構の有無を確認した。

2 調査結果

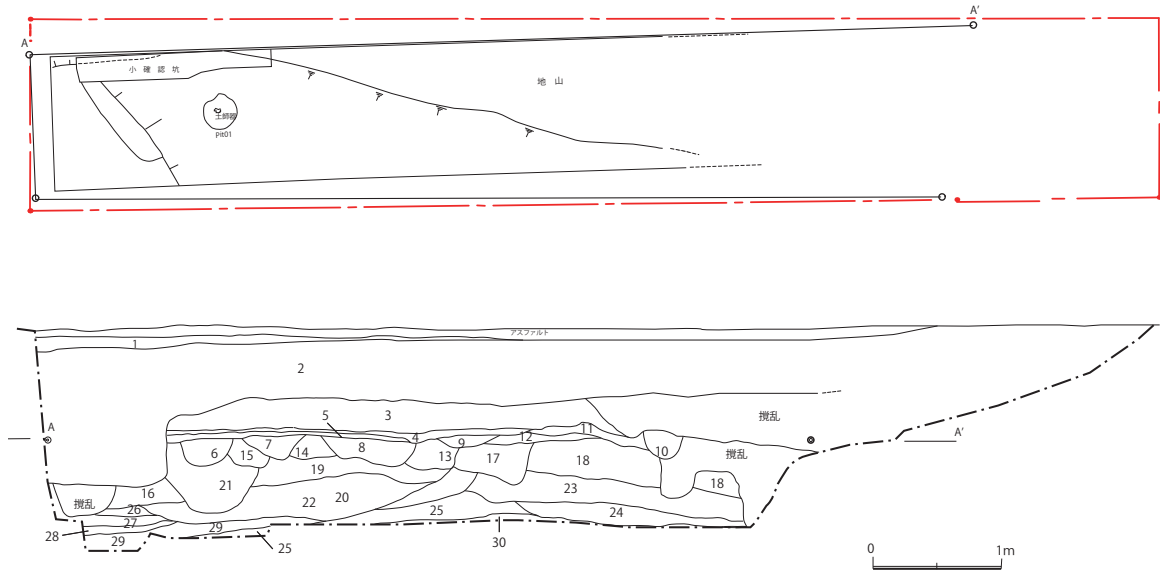
2 箇所のトレンチのうち北側の No.1 トレンチでは、表土下 20cm に A-4 調査区、A-5 調査区に見られた道路相当層の硬化面と間に砂層が薄く層を形成していた。ただ土層断面を精査中に江戸中期以降の肥前陶磁が出土し、トレンチの西側の平面清掃中に「新寛永通宝」が出土した。このことは、上部の硬化面は少なくとも江戸中期以降の造成の可能性を示唆する。

No.2 トレンチでは、参道と想定した層はなく、下層は全体的に砂質の層で No.1 トレンチと様相が異なっていた。土層の観察を続けていくと、南側の断面に人骨の一部がかかっていることが分かった。さらに観察すると掘り込みも確認できた。この人骨については、これ以上工事に支障がなければ保存してもらおうよう J R 側と交渉したが、J R 側は人骨を取り上げてほしいとのことであった。そこで急遽ある程度の掘削までは行うものの、取り上げ自体は J R 側で古人骨の専門家を招来して行うこととなった。人骨の調査結果は、第 4 章に譲る。

以上の 2 箇所のトレンチ調査でも、「参道」が妙解寺までどのように繋がっていくのか明確にすることはできなかった。

現在判明しているところでまとめれば、No.1 トレンチ付近までは参道が延びている。しかし、この参道は、参道の下に客土中に少なくとも江戸中期以後の遺物が混入していることから、その頃以降に造成された可能性が高い。

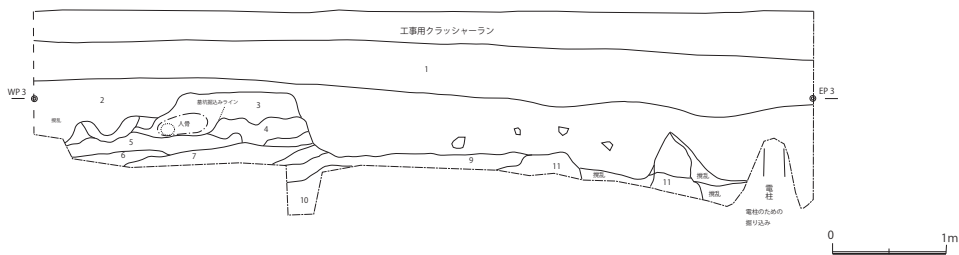
No.2 トレンチでは、硬化面など道路であった根拠はないものの、完全になかったとすることもできない。ただ、下層から埋葬された人骨が出土したことから、少なくとも人骨が埋葬された時期には道でなかった可能性はある。さらに、この人骨が埋葬されていることから、この場所が何であったかという新たな疑問が生じた。



No.1 トレンチ土層註記

- | | | |
|-----------------------------|--|-----------------------------|
| 1層：淡青灰色砂層；客土 | 12層：淡黄褐色硬化面 | 21層：暗褐色土 |
| 2層：砂利層 | 13層：白色粘質土；炭化物含む。 | 22層：周囲の層よりやや粒子の混じり少なく、やや砂質。 |
| 3層：鉄道用客土 | 14層：淡暗灰褐色土 | 23層：暗褐色土；上層よりやや砂質強い。 |
| 4層：淡黄色砂質土 | 15層：淡暗灰色土 | 24層：暗褐色土；ほとんど混じりなし。 |
| 5層：淡黄褐色粘質土；参道の硬化面。 | 16層：暗褐色土 | 25層：暗褐色土；やや明るい。地山。 |
| 6層：淡黄色土；やや灰色を帯びる。 | 17層：暗褐色土 | 26層：明褐色土 |
| 7層：淡黄褐色土 | 18層：暗褐色土；0.1～0.5cm大の粒子含む。 | 27層：暗褐色土；1～3cmの粗い粒子を含む。 |
| 8層：白色粘質土；A-4調査区のS030の埋土に似る。 | 19層：淡灰色土；1～2cm大の粗粒子、2cm大の白色粒子を含む。下層よりやや硬い。 | 28層：やや灰色。 |
| 9層：淡黄褐色砂質土 | 20層：淡灰褐色土；上層よりややしまる。粗い粒子を多く含む。 | 29層：暗褐色土；よくしまり、鉄分、マンガン粒含む。 |
| 10層：粘質土；焼土含む。 | | 30層：淡黄褐色土；マンガン粒含む。よくしまる。 |
| 11層：白色粘土 | | |

Fig.124 No.1 トレンチ北壁土層断面図



No.2 トレンチ土層註記

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1層：礫・セメント混じり。鉄道敷設後の攪乱か。 | 7層：Hue10YR3/3 (暗褐色砂質土)；純砂質土。 |
| 2層：黒色土ベースに礫混在 | 8層：註記なし |
| 3層：Hue10YR2/2 (黒褐色砂質土)；きめ細かく硬く締まる | 9層：Hue10YR3/3 (暗褐色砂質土)；灰色ブロック入りきめ細かい。 |
| 4層：Hue10YR2/2 (黒褐色土)；2～10cm大の灰色ブロック含む。 | 10層：Hue10YR3/3 (暗褐色砂)；純砂層 |
| 5層：Hue10YR3/2 (黒褐色砂質土)；きめ細かくしまる。 | 11層：砂層 |
| 6層：Hue10YR2/2 (黒褐色砂)；灰色砂ブロック多い。所々に灰色ブロック入る。 | |

Fig.125 No.2 トレンチ南壁土層断面図



PL.94 墓壇検出状況



PL.95 人骨検出状況

第12節 発掘調査のまとめ

調査は、JR鹿兒島本線の一新踏切北側から下馬天神踏切南側までの約700mに渡る区間を、一次調査から三次調査、工事立会等を通して、鉄道敷きやその周辺に残された埋蔵文化財に関するさまざまな情報を得ることができた。以下に主に時代的な変遷を追いながら検出した遺構・遺物についてまとめる。

1 遺構

(1) 旧石器時代・縄文時代

この時代の遺構・遺物は検出していない。

(2) 弥生時代

この時代の遺構を確認したのは、新馬借B調査区である。ここでは、本調査前の一次調査の際に竪穴遺構が存在すると確認していた場所である。三次調査の際には、調査区の北側で、弥生時代の土坑、焼土などを確認した。調査担当者は黒褐色の土壌を水気が多く軟質であったため、水田もしくは泥炭層ではないかと考えた。しかし、遺物の出土状況を考えると何らかの低湿地の遺構の埋土である可能性もあり、詳細に調査した。調査区が縦に長く狭小であったため、正確に遺構としての確認は困難であった。

今回調査した場所は、浅い焼土坑は炉の可能性が高く、竪穴遺構（建物）の可能性が高いと考える。

遺構を確認した場所は、標高8～9mほどで、現在の地形から考えればかなり低地に位置するが、山間の谷部から平野へと地形が開けていく場所に当たり、遺跡の立地条件としては有利な場所であり集落が営まれていてもよい場所と考える。遺跡の本中心となる場所ではなかったにしても、遺構や遺物の出土状況から考えると、ごく近くに集落があった可能性が高い。

この調査区で確認した遺物の中には、脚台付き甕、免田式土器、ジョッキ型土器など熊本平野では集落の遺物としては特徴的であり、弥生時代後期後半の様相を示す。

この他の調査区では、遺構は確認できなかったが、花岡山・万日山A-3調査区の西側の土層中からもわずかながら弥生時代後期の遺物が出土している。ただ、この層には古代の遺物も混じることから何らかの造成が行われた際に近辺から運ばれてきた土砂に混入していたと考える。また、遺物だけであれば、A-4調査区の溝遺構中の埋土に弥生時代前期の壺の破片が混じり、この近辺に弥生時代のさらに古い時期の遺跡が存在するのであろう。

(3) 古墳時代

続く古墳時代の遺構は確認しなかったが、遺物は出土している。遺物は、高麗門調査区付近から南側の花岡山・万日山A-4調査区までで確認し、中世の溝遺構の埋土中からの出土である。出土した調査区の状況を考えると、この溝を埋めて道を造成する際に、周辺地から持ち込まれた土に混じっていた可能性が高い。古墳時代の遺跡は北岡神社横穴群や花岡山の頂上古墳など近辺にあり、それに伴う集落も当然あったと考える。その集落から由来するのであろう。

(4) 古代

この時代の遺構も確認していないが、溝遺構や整地層中にはこの時代と考えられる遺物が混入している。中でも新馬借B調査区の配石遺構を伴った版築遺構の中から瓦片が出土しており、この遺構がその時期なのか、混じりこんだものか判断に苦慮したところである。この版築遺構は近世の土塁の一部であると結論付けたものである。遺物は土塁を築く際に周辺の土とともに紛れ込んだと判断している。

その他にも他の時代の遺物と混じる形で遺物が出土していることから、二本木遺跡群にも近く、古代の遺構がこの周辺に存在する可能性は高い。

(5) 中世

この時代の遺構は、主に A-1 調査区、A-4 調査区などで検出した。

A-1 調査区では、鉄道敷きの下層で溝遺構を 3 本以上検出した。ほぼ南北方向に走るもの、それと直行して東西に走るものがある。その一角では灰や炭化物などが集中して出土してもいる。その上層には中世の土師器、瓦質土器などを含む包含層が 1 m ほど堆積している。当初、調査担当者は土塁を築くための客土ではないかと考えた。調査成果のなかでは客土の可能性も示唆している。しかし、調査区で確認した土の堆積状況を客土によるものと判断すると、もっと容易に幾層にも分層できたはずであるが、実際には明確な分層が難しい状況であった。この場所が周辺の土地と比較してもかなり低地の部類に入ることとを考慮すれば、洪水等自然災害などによっても土の堆積がありえるし、自然災害の規模次第では 1 m ほどの堆積は一度の災害でも起こりうる。ただ、上部になるにつれ、火を使ったことに伴う灰の広がりや遺物が部分的に集中したように分布している状況を見ると、中世の末から近世の初め頃には自然災害を有る程度生活の場として利用されるようになってきたのではなかろうか。トレンチ調査で部分的に確認したのみであるので、調査区全体をみればもっと明確になるであろう。自然的・環境的な要因も含めて今後検討する必要がある。出土遺物の中には、輸入陶磁も存在し、一定の力を有する領主階層の存在をうかがわせる。

A-4 調査区では、加藤期の道路跡の東側で検出した溝状遺構の中位層～下位層付近に、16 世紀から 17 世紀代初頭にかけての輸入陶磁や瓦質土器などの遺物が多く出土した。この溝が埋まる際に混入したものと考える。中位以下には、17 世紀後半以降の陶磁器類が混入しないことから、少なくとも 16 世紀～17 世紀初頭頃には存在し、それが埋まったものと考えられる。この溝状遺構は A-5 調査区では確認できていない。ただ、二次調査時にこの調査区の南側に設定された No.1 トレンチの土層断面に、埋土が類似した浅い溝状遺構が確認され、そのトレンチの付近まで遺構が続いている可能性はある。

(6) 近世

この時期の遺構は、各調査区で確認した。ここでは確認した遺構ごとに調査区を越えてまとめる。

・高麗門及び関連遺構

本調査では、高麗門調査区及び新馬借 A-1 調査区、暗渠排水路工事立会において、「高麗門」に関係する遺構・遺物を確認した。土台となる石垣の石の可能性のある石材を確認した。

確認した遺構としては、高麗門調査区では江戸後期に造成された版築、礎石跡などを確認した。一方、高麗門が取り壊された際、その後に廃棄された多量の瓦類の残骸が堀跡と考えられる西側の落ち込みに落とし込まれたように出土している。

新馬借 A-1 調査区では、瓦類の落ち込む状況と堀の斜面の一部を確認した。斜面はかなり急であり、当時もその角度であったかは西側にあった暗渠排水の工事によって確認できなかったため不明である。

・堀跡

高麗門の西側にあった堀跡は、現在は完全に埋め込まれて新幹線や鉄道敷きの下に隠されてしまっていた。その堀跡の名残として出土したのが、近代のある時期に形を変えてその場所に残されていた暗渠排水路である。この排水路がいつ頃建設されたかは不明であるが、明治以降の地図を見ていくと、大正末から昭和 20 年代、もしくは第二次世界大戦後すぐの頃に堀跡だった場所は埋め込まれようである。その後は倉庫などの建物が立ち並んでいる。これは戦後すぐの昭和 20 年代の米軍の空撮写真でその状況が確認できる。戦後はその跡に建物や公園が作られていたようである。この埋め立ての頃に排水路の暗渠化がなされたようである。コンクリートによるものであるが、その撤去工事に立ち会ったところではコンクリートの厚さが 15cm ほどで内面幅 1.2 m、深さ 2 m ほどの規模で現在でも排水路として使用されていた。調査時には、新幹線工事にかかる部分はずでに変更され、今回の工事にあたっては、一新小から別の暗渠排水路を設置し、そのまま埋

め殺しになる予定であった。本調査の際は、堀跡としての調査はできなかったが、一部のこの排水路の撤去の際に立ち会うことができ、それが堀の痕跡を残すものであることを確認した。立会時に確認したところでは、堀の深さは現地表面から3mを超えるほどであった。全体幅は残念ながら確認できなかった。

高麗門はその基礎に石垣があったことが絵図、古写真によって想定されていた。当初、高麗門調査区に残されていた石垣がその痕跡と考えたが、石垣の積み方を検討した結果、近代以降のものとは分かった。ただ、高麗門踏切以南で確認した鉄道の敷設に伴う石垣は、その石材を再利用したものではないかと考えられた。石垣の中には、矢穴が残るものがある。ただ、矢穴の幅は8cm程度で時期的には近世の終わりごろのものである。そう考えると、必ずしも高麗門の石垣ともいえない。近世末から近代の時期に大きな動きがあったのであろう。

一方、高麗門の南側で、参道の東側に沿って掘られていた堀については、花岡山・万日山A-3調査区～A-5調査区でその肩部分に当たるところから落ち際にかけて検出した。

・土塁

土塁の一部を遺構として確認したのは、新馬借B調査区においてである。調査区の間付近で配石遺構を検出した際に、その周囲に版築がなされている状況を土層で確認した。この調査区では、土塁が築かれた当時、地形的に低く低湿地帯であったと考えられる。そのため、版築をかなり下層から行ったため確認できたと考える。土塁の最下面には敷き粗朶が確認され、土塁の沈下を抑えていたのかもしれない。

A-1調査区では、位置的には土塁があったと考えられるが、版築などの遺構は検出できなかった。ただ、中世の項で記した上位で確認している16世紀～17世紀初頭の遺物の入る層が、土塁の構築に先行するか、その構築時期の基礎部分と考えるか判断の難しいところである。

・参道

この遺構は、二次調査のNo.1トレンチ、No.3トレンチ、No.6トレンチ、花岡山・万日山A-3調査区・A-4調査区・A-5調査区で検出した。いずれのトレンチ及び調査区でも細川期及び明治期までの道路跡を確認している。参道としては細川期のものを指す。確認できたのは、鉄道が単線時代の鉄道跡の場所に限られる。鉄道の硬化面を除去した後に検出した。江戸期と明治期の境を明確に分けることは困難であった。道路面には溝状に伸びる遺構(A-4調査区)、大小様々な土坑(A-3・A-4・A-5調査区)が掘られ、最初道路の側溝跡や補修孔と考えたが、近世から近代にかけてのごみ穴も含まれていることが分かった。A-3調査区のもののように凹んだ面に土を入れた痕跡のものもあり、明確に区別はできていない。参道はA-5調査区では、調査区西側の壁近くでも土層断面から見つけることができた。少なくともその範囲までは参道は広がっていたと推定できる。

二次調査No.3トレンチを調査区内に含む花岡山・万日山A-4調査区では、加藤期に当たる道路跡を検出した。検出した範囲は調査区の北側の一部に限られたが、かなりしっかりした硬化面である。A-3調査区でもかなり崩れた状態ではあったが、同様の硬化面の一部を確認した。一部しか確認できなかったのは、A-4調査区までしかなかったという説、細川期の参道造成の際に削られた説などがあげられるが、今回の調査では確認できなかった。

なお、下馬天神以南の参道の状況は追加調査により確認を試みた。結果的には、一箇所のトレンチで確認したものの、その延長が存在するかどうかはつかめていない。

・桁橋

この遺構については、今回の調査で直接扱ってはいないが、関連施設として一部調査を行った。発掘調査ではないため、表面上の調査であるが、建築技法や石材の取り方から江戸期に遡る可能性のある構築物である可能性がでてきた。詳細は第5章の各論に譲るが、もし江戸期に遡る場合、高麗門・堀・土塁などとの関

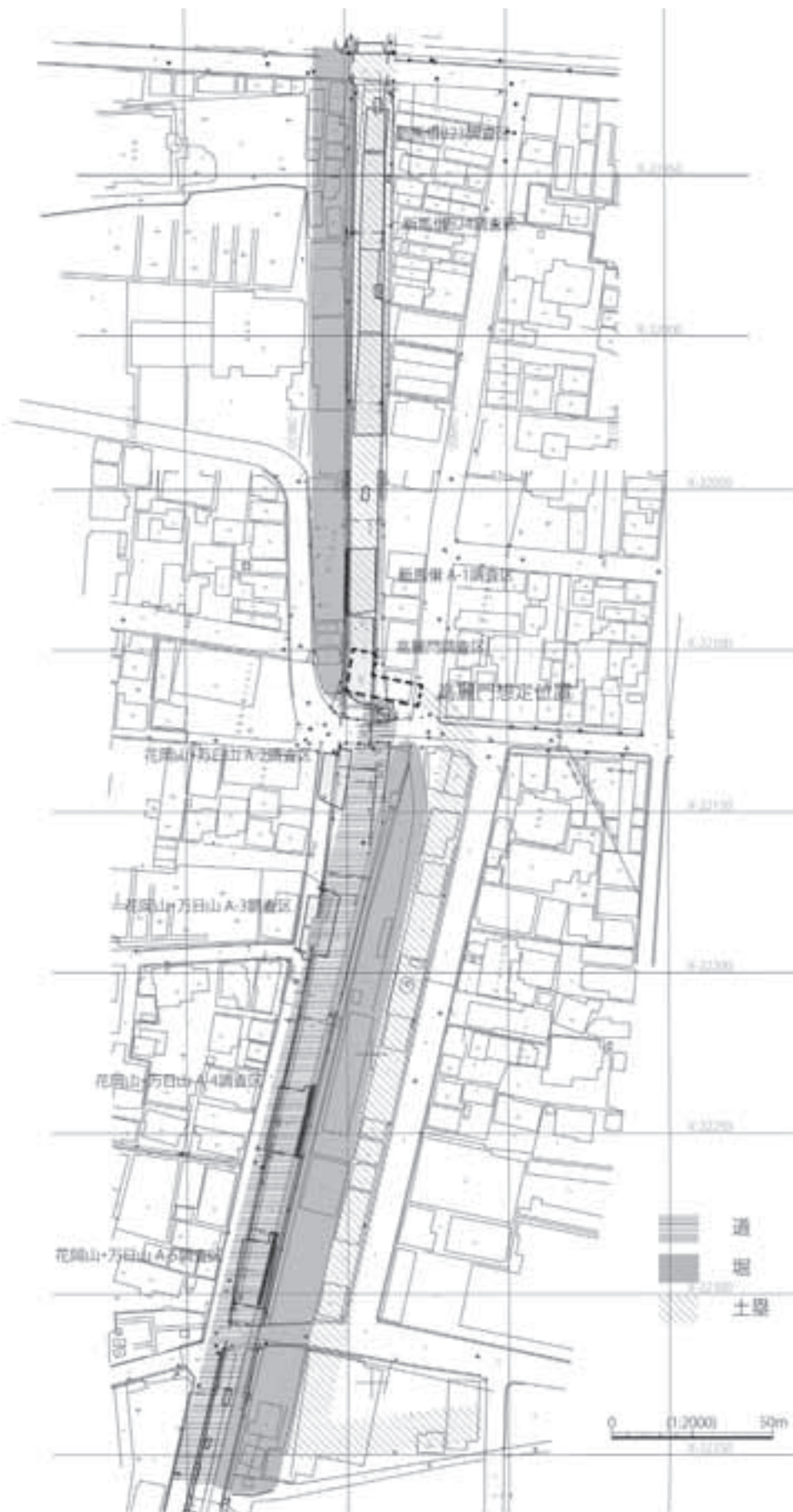


Fig.126 高麗門・土塁・堀・参道推定図 S=1/2000

係が今後課題となろう。

最後に以上の成果を踏まえて、調査範囲における高麗門・土塁・堀・参道の想定図を Fig.126 に提示しておく。

(7) 近世以降

今回の調査では、江戸期以降の遺構もかなり検出した。以下にその主なものを記しておく。

・石組暗渠排水路

花岡山・万日山 A-2 調査区で検出した遺構である。石材や石組みの状況から当初、江戸期に遡るかと思定したが、石組みの仕方や石垣の仕方により明治に入ってからのものであることが判明した。レーダー探査や工事立会などを通じてこの遺構が江戸期の高麗門を挟む南北の堀跡の流水を流す為であることが分かった。この暗渠によって地下で南北の堀が繋がっていたようである。この暗渠は鉄道が敷かれた頃にも機能していたようで、この遺構の撤去工事の際に、鉄道敷設時に暗渠の強化工事が行われていたことを確認した。その後機能しなくなったようであるが、複線化の際には構造そのものは崩さないようにして内部にコンクリートを流し込んで補強していた。

・石垣

この石垣は、九州鉄道敷設時に線路の両側を補強するためか、高麗門踏切から下馬天神踏切の間に築いていた。何度か補修されながら複線化されるまで存続していたようである。石材は硬質の安山岩で、高麗門の石垣を再利用したのではないかと考えられる。

・鉄道及び周辺土地利用

この他に先の暗渠とは別に、南北の堀を繋ぐ工事が行われている。工事立会ではっきりしたが、高麗門踏切付近に鉄橋が渡されたのは、南北の堀が掘削により一つの川に近い流路となっていたためである。工事時期は不明であるが、明治初期から鉄道敷設までの間であろう。繋いだ堀の両護岸には石垣で補強されていたことも確認できた。

2 遺物

遺構で記したものと重複する部分もあるが、主に出土した遺物について概要を以下に述べる。

・弥生時代

今回調査した中で弥生時代の最古のものは、A-4 調査区で出土した前期の壺型土器である。単独の出土で他に同時期のものはなかったため、流れ込みであろう。

弥生時代の遺物が遺構を伴って出土したのは、新馬借遺跡 B 調査区である。熊本平野の後期の弥生土器としては特徴的な土器群が出土している。二重口縁壺、タタキのある長胴甕、大型の甕、長脚付き甕、粗い刷毛目の脚台付き甕、丹塗りの短頸甕、丹塗りの高坏、鉢、免田式土器、ジョッキ型土器などが出土した。時期的には後期後半であろう。

・中世

中世の出土遺物としては、中心時期は 16 世紀代から 17 世紀初頭ぐらいである。新馬借 B 調査区、新馬借 A-1 調査区、花岡山・万日山 A-4 調査区・A-5 調査区などから瓦質の火鉢や土師質土器の坏、灯明皿などが出土している。数量は少ないが、明の青花、赤絵なども出土している。A-1 調査区では、層的に時期が限定される状況で出土している。新馬借 B 調査区では溝遺構の埋土から出土している。

遺構でも記したが、戦国時代の末から近世初頭にこの付近に有力者の存在があったことを示す資料である。

・近世・近代

今回の調査では中心となる時期であり、遺物の出土量も多かった。そこで、A. 陶磁器、B. 土器・土製品、C. 瓦、D. その他に分けて述べる。

A. 陶磁器

陶磁器は、今回の調査では非常に時期幅の広い出方をしている。まず、近世初頭もしくは中世末のものとして輸入陶磁器がある。明からもたらされた青花磁器・赤絵磁器がある。また、白磁・青磁もわずかに見られる。いずれも小片であるが、碗・皿類が中心である。小片のため特徴は掴みにくいが、胴部に唐草文、見込みに花文様のあるものなどがある。これらは、中世に入れるか、近世初頭に入れるか迷うが、両方に入れておく。時代の変化に遅れるか、相前後してモノの変化が現れるが、まだ、中世的な要素がありながらも近世の加藤氏支配の時代へと変わっていく様子が遺構の変化とモノの変化に現れてきている。

輸入陶磁器の減少に伴い、肥前を中心とした陶磁器の生産が高まり、肥後にもその使用が広まってくる。今回の調査区でも初期の肥前産の陶器類がわずかながら出土している。A-3 調査区 131 の鉢、A-1 調査区の 29 などは胎土目を内器面に残す 17 世紀初期頃のものである。その後は 17 世紀～18 世紀の時代に応じた陶器・磁器とも使用されていく。肥前系統のものが中心であるが、在地窯の産も徐々に使用されるようになってくる。小岱焼き、八代焼きなども広まってくる。幕末～明治になると、関西系の陶磁器も入ってくる。

初期には釉がしっかりとしていなかったが、徐々に釉薬も安定し染付磁器はかなり普及し、色絵磁器も出土量が徐々に増加してきている。技法面でも重ね焼きの胎土目、砂目、蛇の目釉剥ぎなど大量生産に向けた動きが強くなっている。生活雑器としての陶磁器が、新町界隈の人々の間に広がっていく過程がそこから見えてくる。調理具や食膳具、暖房具・照明具・化粧道具などに種々の陶磁器が使用されていく状況が、出土した遺物の変化として大まかに捉えることができた。喫茶の風俗が民間に普及するにつれて土瓶や茶器も普及している。

調査で出土した陶磁器類は、廃棄されたもので破損している場合がほとんどである。その中で、陶磁器が貴重で大事にしたのか、補修された磁器類が多く出土している。いわゆる焼継技法によるものと思われる。A-2 調査区出土の 191 にはその痕跡が残っており、断面と少しずれた位置に白色接着剤らしきものが残る。表面にはみ出ているところを見ると上手な職人ではなかったのかもしれない。焼継技法は 18 世紀末以降に普及したとされるが、この遺物も 19 世紀代前半の蛇の目凹型高台の皿であり時代的にもあう。注目すべきは高台見込みの釉剥ぎされた箇所に残る墨書（やや赤みがかかる。）で「高麗門角□□□」と文字が書かれていることである。これは、発注者識別のため焼継師が書いたものという。この例の他にも数点同様の事例があり、赤色顔料で文字が書かれている。住所を示しているものが多いようである。当時この新町界隈にもこのような職人が商売をしていたことをうかがわせる資料として重要であろう。また、文字の解釈から、これを発注した人物の特定なども可能かもしれない。

次に、陶器では、播鉢や甕などの出土も多い。やはり肥前産のものが多いようである。特に播鉢は早い時期から入ってきているようである。また、捏ね鉢や甕の中には唐津系の窯で生産されたような外器面に白化粧土を刷毛かけし、さらに緑色や茶、黒色で絵や文様を描いたものが出土している。一種の芸術的な趣がある。唐津系統でも武雄窯で盛んに生産されている。

近代に入ると、肥前陶磁器が後退し、関西系のものや在地のものが進出してくる。行平鍋や井などにその特徴が見られる。

B. 土器類

次に、上記のように陶磁器が普及する一方で、土器類の生産・使用も続いている。近世初期には、中世からの伝統を引き継ぐ瓦質土器の火鉢、大甕、鍋がまだ使用されている。しかし、火鉢は形態も素材も変化していく。火鉢は陶磁器や木製のものなどが普及してくる。一方で土器も形態は変化しながらも使用されてい

たようである。A-3 調査区出土の 218 は丈の低い方形のものであるが、他に円形のものもある。また、焜炉七輪なども土器・土製品である。A-5 調査区の 588 のように型によって作るもの出てきている。A-4 調査区の 534 のような焜炉類は調査区からもかなり出土している。特に時代が新しくなるにつれて種類が増加しているようである。

調理具にも A-4 調査区出土の 264 の柄付き鍋、A-5 調査区出土の 591 や 592 の土鍋などが広く普及してくる。調理具ではないが、A-2 調査区の 192 の塩壺なども出土した。

灯火具としての灯明皿は中世から引き続き使用され、出土量も多い。

C. 瓦類

1) 出土瓦について

今回の調査では多くの瓦が出土している。平瓦、丸瓦、棧瓦など種類のはっきりとわかるものから、種類も、どこの部位なのかもわからないようなものまでさまざまな瓦が出土した。各調査区の瓦の出土数は下記の通りである。

Tab.60 各調査区の出土瓦数

	B 区	A-1 区	高麗門区	A-2 区	A-3 区	A-4 区	A-5 区
総 数	29	15234	4327	966	753	1195	963
軒平瓦	2	45	22	4	2	5	3
平 瓦	18	11630	2898	649	426	800	672
軒丸瓦	3	139	45	6	9	8	3
丸 瓦	2	2513	629	145	112	103	84
軒棧瓦	3	15	22	5	2	7	4
棧 瓦	1	302	283	63	39	91	113
目板瓦	0	58	129	13	30	88	48
滴水瓦	0	75	32	2	0	0	0
谷平瓦	0	1	2	0	0	0	0
谷丸瓦	0	6	0	0	0	0	0
鯪 瓦	0	11	1	1	0	0	0
雁振瓦	0	3	10	4	3	6	5
鳥 衾	0	0	2	0	0	0	0
隅木鼻蓋瓦	0	1	0	0	0	0	0
特 殊 瓦	0	30	13	3	0	3	1
不 明 瓦	0	405	239	71	130	84	30

今回の調査範囲での出土瓦の総数は、23467 点であった。調査区ごとの総数は、A-1 調査区で 15234 点、高麗門調査区で 4327 点と多くの瓦が出土している。A-1 調査区では全体の 7 割近くが出土したことになる。それ以外の調査区からの出土量は少なくなる。

① 軒平瓦・平瓦

軒平瓦の総数は、各調査区ともそれほど多くはないが注目すべきものが出土している。一つは年号の刻まれたものである。瓦当部に、「天正十八年」と書かれた瓦が 2 点出土している。それ以外にも「戊戌」と記されたものも 1 点出土している。このように年号の記された瓦は今回の調査で 3 点出土し、そのすべてが A-1 調査区で出土している。そのほかにも数種類の文様の軒平瓦が出土しているが、佐賀県の名護屋城や芦北町の佐敷城の瓦と類似したものが出土している。

平瓦には、厚みのあるものとなないものがあり時期的な違いを反映していると思われる。大きさは、残りがよいものが少なく正確とはいえないが、ほぼ同じような大きさであったと思われる。

② 軒丸瓦・丸瓦

軒丸瓦は九曜文、巴文、日足文、桔梗文が出土している。総数は、九曜文が多く出土し、巴文、日足文、桔梗文の順になる。文様の違いで瓦の作りにも違いが生じているようである。各調査区とも、軒平瓦よりも軒丸瓦のほうが多く出土する傾向がみられた。

丸瓦は、古い時期の遺構からは多く出土しているが、棧瓦の出現した後の新しい時代の遺構からは出土量が減る。また、丸瓦ではコビキ痕の確認できるものがあり、多くはコビキBであった。中にはコビキAも見られた。また、大きさに違いがあり、全長が特に長いものや、全長も幅もとても小さくミニチュア瓦のようなものもあった。

③ 軒棧瓦・棧瓦・目板棧瓦

軒棧瓦の出土量は少なく残りもあまり良くなく、軒丸部か軒平部のみが残るものがほとんどであった。また、他の種類の瓦のようにA-1調査区、高麗門調査区で突出して多く出土するのではなく、どの調査区でも変わらないような数が出土している。逆にA-2～A-5調査区や新馬借B調査区で瓦の出土量における軒棧瓦の割合が高くなっているといえる。

棧瓦の多くは燻瓦だった。棧瓦は平瓦に比べやや薄い作りになっているようである。

また、棧瓦の範疇にはいる目板棧瓦も出土している。棧瓦は、ほとんどが燻瓦だったが、目板棧瓦は平瓦と焼成の仕方が類似している。

この目板棧瓦については、時期的な位置づけがはっきりしないが、棧瓦が、近代以降も使用されるのに対し、目板棧瓦は近代になるとほとんど見なくなる。新町界限では、西南戦争時に焼け残った寺にはまだ使用されていたが、建て直した家は棧瓦に変わっているようである。瓦が江戸の後半にこれまでの重い丸瓦、平瓦に変わり「棧瓦」が発明され、町屋にも普及し始めたという。その時の「棧瓦」が今で言う「目板棧瓦」ではないかと考える。平瓦、丸瓦と製作技法の類似は「目板棧瓦」がより古い形態を残し、棧瓦として完全に新しく生まれ変わっていくのであろう。

④ 滴水瓦

滴水瓦は、高麗門踏切近くのA-1、A-2、高麗門、参道調査区では出土しているが、それ以外の調査区では出土していない。特別な建物にしか使われていない滴水瓦の出土範囲は限られているようである。特にA-1調査区からの出土が飛び抜けて多い。模様としては、上部の両側の「梵字」類似文様、下に両側に向かい合わせになった雲行文が通常のもので、そのバリエーションがある。分類を試みるだけの完形品がなかったので分類までは行っていない。将来的には熊本城全体の中で分類が必要であろう。

また、滴水瓦の多くは、中央に年号が刻まれており、その年号は「慶長四年」「明德〇年」「文政十三年」があった。中には文様だけで文字は刻まれていないものもあった。特に「慶長四年」の年号の瓦が多く出土している。ただ、同じ「慶長四年」でも文字の形状や造りが異なるものもあり、差し替えが行われたのかもしれない。

⑤ 特殊瓦

特殊瓦には、谷平瓦、谷丸瓦、鯪瓦、雁振瓦、鳥衾、隅木鼻蓋瓦などが出土している。他の瓦に比べるとそれぞれの出土数は少なく、A-1、高麗門調査区から多くは出土している。これらの特殊瓦以外にも特殊瓦と思われる破片は多く出土しているが種類を特定できないものが多かった。鯪瓦と分類したものは、鯪の一部であろうという判断はしたが、ほとんど接合できなかったこともあり全体像はつかめなかった。ただ、鱗の部分に関しては、鱗を別個に作り貼り付ける形ではなくへうで描かれている。鱗の簡略化か、古手の様相なのか不明である。鳥衾は、高麗門調査区のみで出土している。そのうちの1点は残りがよく桔梗のような花が中央に描かれている。やや小ぶりで、隅軒先におかれたものであろう。隅木鼻蓋瓦はA-1調査区で、1点のみ出土した。残りはあまり良くないが九曜文が描かれている。

Tab.61 文様のある瓦の分類

軒平瓦：中心の文様で分ける

	文字	桔梗	九曜	三葉	巴	花	葉のみ	不明
A-1	3	2	4	3	0	0	5	28
A-2	0	0	0	0	1	0	2	1
A-3	0	0	0	1	0	0	0	1
A-4	0	0	0	0	3	0	1	2
A-5	0	0	2	0	0	0	0	1
高麗門	0	0	2	0	0	0	1	12
新馬借B	0	0	0	0	1	0	0	0

軒丸瓦：文様で分ける

	九曜 径～7.5cm以下	九曜 径7.6～8cm	九曜 径8.1以上	九曜 径不明	日足 周縁幅～1.9cm	日足 周縁幅2.0cm以上	日足 周縁幅不明	巴	桔梗	不明
A-1	3	11	6	23	3	3	6	19	2	63
A-2	0	0	0	1	0	0	0	2	0	3
A-3	0	0	0	0	0	0	0	5	0	4
A-4	0	0	0	4	0	0	0	2	0	2
A-5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
高麗門	1	2	0	5	4	1	1	1	5	11
新馬借B	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2

軒棧瓦：軒丸部もしくは軒平部の文様で分ける

	軒丸部 巴	軒丸部 九曜	軒丸部 無紋	軒平部 花	軒平部 葉のみ	不明
A-1	5	0	0	2	4	1
A-2	1	0	0	1	2	1
A-3	1	0	0	0	0	1
A-4	3	0	0	3	1	0
A-5	0	0	0	0	4	0
高麗門	1	0	0	2	5	4
新馬借B	0	0	1	1	1	0

滴水瓦：中央の銘で分ける

	慶長四年	明和〇年	文政十三年	〇〇二年	銘なし	雲、梵字のみ	不明
A-1	10	1	1	1	3	24	35
A-2	0	0	0	0	0	2	0
高麗門	2	0	1	0	0	14	12

2) 文様のある瓦について

軒瓦についてはそれぞれ分類をおこなった。基本的には文様で分類し、補足的に計測値によって細分を行った。ただ、瓦の残りがあまり良くないので分類できるものは限られた。

① 軒平瓦

軒平瓦は、文字のあるものと文様の種類で7つに分類した。文様については中央の文様で分類し、周囲の唐草文のみ残るものは「葉のみ」と分類した。その中で、九曜文が一番多かった。九曜文よりも古手と思われる桔梗文は2点のみの出土で、巴文は5点の出土であった。軒平瓦の中で桔梗に分類したものは、佐賀県名護屋城や芦北町佐敷城に類似瓦が見られる。

② 軒丸瓦

軒丸瓦は、文字のあるものと文様の種類で基本的に分類したが、その中でも九曜文と日足文については細分を行った。九曜文は瓦当径を、日足文については周縁幅を計測しその大きさに細分を行った。文様で多く出土したのは九曜文で、ついで巴文である。巴文は、点数は多く出土したが、残りが悪いものがほとんどで細分を行うことができなかった。九曜文は、調査区ごとで量の差はあるがほとんどの調査区で出土している。大きさは見た目でも、大・中・小と分けられそうなくらい、大きさは、はっきりと異なっていた。ただ、計測を行うとその差がはっきりと表れずだんだん大きくなるような数値になった。その中でも径が7.6～8.0cmのもの（中くらいのもの）が多く出土している。日足文は周縁幅が狭いものがやや多く出土している。

桔梗文も7点出土しているがA-1、高麗門調査区のみから出土している。また、軒丸瓦については、瓦のつくりも観察した。しかし、観察できた点数が少ないため推測はできても証明するまでには至らなかった。まず一つめは、瓦当部の貼り付け方に2通りの方法があったようである。もう一つは、文様の違いで周縁部分のつくりの違いがみられるようである。周縁部の角、文様区側の角に違いが表れるようである。九曜文は、比較的周縁の角をきれいに作り角張っており、高さは低くなっている。日足文は、周縁の角を面取りしてあり高さがあるものが多い。桔梗文と巴文は、周縁の角がきれいに作られておらず丸みを持った感じになっている。これらの特徴もすべてのものに当てはまることではなかった。時期の違いの影響もあるだろうし、工人集団の違いによるかもしれない。これもデータ不足で推測程度のことしかできなかった。今後の調査でデータ数を増やして何らかの結果が得られればと考えている。

③ 軒棧瓦

軒棧瓦は、軒丸部と軒平部の両方が残るものは少なく、どちらか一方のみが残るものがほとんどだった。そのため、分類は軒丸部の文様、軒平部の文様という形で分類した。軒丸部の文様は軒丸瓦を小さくしたような感じで、巴文か九曜文で多くは巴文であった。新馬借B調査区から1点のみ軒丸部の無文のものが出土している。現在の棧瓦と同じようなものだった。軒平部の文様は独特で、軒平瓦の文様とは異なり、ダイナミックな模様でモダンな感じのする文様になる。軒平部の花は、2種類あり軒丸部との組み合わせがあるようだが今回の調査でははっきりとわからなかった。

④ 滴水瓦

滴水瓦は若干の違いがあるものの、ほぼ同じような文様になるようである。そのため、中央の銘が残るものは銘で分類し、銘の残らないものについては、雲と梵字という形で分類を行なった雲と梵字も細かくみると違いがあるが瓦の残りが悪く細分することはできなかった。中央の文字には「慶長四年」「明和〇年」「文政十三年」「〇〇二年」があった。また、銘の部分は作られているが文字が入らないものもあった。この年号の違いにより周囲の文様も異なってくるようである。一番古い年号になる慶長のものから明和、文政と時代が新しくなるにつれて周囲の文様が簡素になっていくようである。「慶長」のものが一番多く出土しており、文様も微妙に異なるようだが遺物の残りが悪く細分できなかった。また、瓦当部の傾斜角度の違いにも意味があるといわれるが、今回の出土資料では確認できなかった。

3) 刻印について

今回の出土瓦の中には、刻印が施されたものが含まれていた。刻印のあるものは473点で、そのうちの59点が屋号であった。さまざまな模様や文字、大きさがあったが、大きく銘、刻印、屋号と分類した。屋号については棧瓦にのみ押されている。棧瓦の多くは、県外で作られていたようで、筑後、山門といった地名がほとんどであった。この屋号と同じマークの刻印がいくつか見られ組み合わせがあるようである。銘では、製作者のわかるものがいくつかあり、土山瓦の棟梁のものであった。それ以外にも、文字は読めるがだれのものか分からないというものが多かった。また、一文字のものと「土山少太夫」「桂平次」のようにフルネームと思われるものが施されたものがあった。年号の入るものも多くみられ、「元禄四年」「元禄五年」「元禄七年」「元禄八年」というものがあった。年号と製作者の名が施されているようである。刻印については、九曜文を施したものが多くみられ、3種類の九曜文に分けることができた。また、桔梗のような花をかたどったものも多くみられた。それ以外は、十字や丸、菱形などさまざまな形のものがあった。また、文字を施したものも多くみられた。これらは屋号との組み合わせがあると思われる。

① 刻印の分類

これらの刻印については種類を分けると共に瓦の種類をも分け、さらに刻印の施されている場所の分類も行った。その結果、以下のことが分かった。

Tab.62 刻印の分類1

銘拓本	調査区	種類	個数	銘拓本	調査区	種類	個数	銘拓本	調査区	種類	個数		
 二部太	A-1	平瓦	5	 二部太	A-2	平瓦	1	 二部太	A-1	平瓦	10		
	A-1	丸瓦	2			A-1	丸瓦		2		A-1	丸瓦	2
	高麗門	平瓦	2			高麗門	平瓦		3		高麗門	平瓦	3
 源四郎	A-1	平瓦	1	 源四郎	A-1	平瓦	8	 源四郎	高麗門	平瓦	1		
					A-1	丸瓦	2						
					高麗門	平瓦	2						
 (福田)五右衛門	A-1	平瓦	6	 (北村)茂兵衛	A-1	平瓦	1	 勘七 土山	A-1	平瓦	4		
	A-1	丸瓦	1			高麗門	平瓦		1				
	A-1	谷平瓦	1										
	高麗門	平瓦	2										
 弥右衛門	A-1	平瓦	2	 (福田)勘(二郎)	高麗門	平瓦	1	 勘七	A-1	平瓦	1		
	A-1	丸瓦	1							A-1	丸瓦	1	
	高麗門	平瓦	2							高麗門	平瓦	2	
 半	A-1	平瓦	1	 半	A-1	平瓦	1	 半	A-1	軒丸瓦	1		
	A-1	丸瓦	2			A-1	丸瓦		2				
 力	高麗門	平瓦	1	 ト	高麗門	平瓦	1	 力	A-1	丸瓦	1		
 吉	A-2	丸瓦	1	 吉	高麗門	平瓦	5	 吉	高麗門	軒平	1		
	A-2	平瓦	1		高麗門	丸瓦	1			高麗門	丸瓦	1	
	A-4	平瓦	1										
	高麗門	丸瓦	1										
 泰	高麗門	平瓦	1	 泰	高麗門	平瓦	1	 泰	A-4	平瓦	1		
 元禄四年	A-1	丸瓦	1	 元禄五年	A-1	丸瓦	1	 元禄七年	A-1	平瓦	3		
	高麗門	平瓦	1		A-1	平瓦	1		A-1	丸瓦	2		
					高麗門	丸瓦	1						
					高麗門	平瓦	2		高麗門	平瓦	3		
 元禄八年	A-1	丸瓦	2	 元禄八年	A-1	丸瓦	3	 元禄八年	高麗門	平瓦	2		
					A-1	平瓦	2						
 土山少次夫	A-1	丸瓦	1	 土山(福田)五右衛門	A-1	平瓦	2	 土山弥右衛門	A-1	平瓦	2		
	A-1	平瓦	1		高麗門	平瓦	2						
					高麗門	丸瓦	1						
					A-1	丸瓦	1						
 土山少次夫	A-1	平瓦	4	 土山少次夫	A-4	平瓦	1	 土山少次夫	高麗門	平瓦	3		
	高麗門	丸瓦	2						A-1	平瓦	1		
 土山少次夫	A-2	平瓦	2	 土山少次夫	A-1	平瓦	1	 土山少次夫	A-1	平瓦	1		
	高麗門	平瓦				丸瓦	2						
 土山少次夫	高麗門	目板瓦	1	 (福田)五右衛門	A-1	平瓦	1	その他	A-1	平瓦	23		
					高麗門	平瓦	3			A-1	丸瓦	9	
その他	A-2	平瓦	10	その他	A-4	平瓦	7	その他	A-5	平瓦	5		
	A-2	丸瓦	1			丸瓦	2			棟瓦	1		
	A-2	棟瓦	1			棟瓦	1			高麗門	平瓦	23	
	A-3	平瓦	1							高麗門	丸瓦	5	

Tab.63 刻印の分類2

銘拓本	調査区	種別	個数	銘拓本	調査区	種別	個数	銘拓本	調査区	種別	個数
	A-1	平瓦	4		A-1	丸瓦	1		A-1	丸瓦	7
	A-1	丸瓦	1						A-1	平瓦	18
	A-1	平瓦	1		A-4	横瓦	1		A-4	平瓦	1
										高麗門	平瓦
	A-1	平瓦	1		A-1	丸瓦	3		A-1	丸瓦	3
										高麗門	丸瓦
	A-1	平瓦	6		A-1	平瓦	7		A-3	横瓦	1
	A-1	横瓦	2		A-1	横瓦	1				
	A-1	軒横瓦	1		A-5	平瓦	1				
	A-5	平瓦	1		高麗門	平瓦	1				
	高麗門	平瓦	4		高麗門	横瓦	1				
	A-2	横瓦	2		A-1	丸瓦	3		高麗門	平瓦	1
	A-5	横瓦	1		A-1	平瓦	2				
	高麗門	横瓦	2		A-1	横瓦	1				
	高麗門	平瓦	2		A-1	平瓦	1		A-1	平瓦	3
	A-5	平瓦	1							A-1	丸瓦
	A-1	平瓦	1		A-1	丸瓦	1		高麗門	平瓦	1
					A-1	平瓦	6				
	A-1	平瓦	2		A-2	平瓦	1				
	高麗門	平瓦	1		高麗門	丸瓦	1				
	高麗門	丸瓦	1		高麗門	平瓦	1		A-1	平瓦	3
					A-1	丸瓦	1		A-1	丸瓦	1
	A-1	平瓦	9		A-1	平瓦	6		A-2	平瓦	1
	A-1	丸瓦	5		A-2	丸瓦	1		高麗門	横瓦	1
	高麗門	平瓦	2		A-1	平瓦	1		高麗門	平瓦	1
	A-1	平瓦	1								
	A-1	平瓦	6		A-1	平瓦	2		A-1	平瓦	2
	A-1	丸瓦	1		A-1	平瓦			A-1	横瓦	1
	高麗門	平瓦	1		高麗門	平瓦	1		A-1	平瓦	1
	A-1	横瓦	2		A-1	平瓦	2		高麗門	平瓦	1
	A-1	平瓦	2		高麗門	平瓦	1		A-1	横瓦	1
	A-1	横瓦	1		高麗門	平瓦	1		A-1	平瓦	1
	A-1	横瓦	1		A-1	平瓦	1		高麗門	平瓦	1
					高麗門	横瓦	1				
	高麗門	平瓦	1		A-1	横瓦	1		高麗門	平瓦	1
	高麗門	横瓦	1								
	立会	横瓦	1		A-1	平瓦	1		A-1	平瓦	1
	A-2	平瓦	1		高麗門	平瓦	2		A-1	平瓦	1
					A-1	横瓦	1				
					高麗門	横瓦	1				
	A-2	平瓦	1		高麗門	平瓦	1				

まず、丸瓦、平瓦などの種類によって刻印の形が変わることはないようである。偏りはあるものの、一つの刻印が平瓦のみに見られる、丸瓦のみに見られるなどということはなく、平瓦も、丸瓦も含むというのがほとんどであった。

次に、平瓦と丸瓦では多くみられる刻印も棧瓦ではほとんど見られなかった。棧瓦には屋号が多く平瓦と丸瓦との共通の刻印は少ないようである。刻印の文字のものは、棧瓦と平瓦のみで見られた。しかし、文字の刻印と屋号の組み合わせがあるならばすべて棧瓦に施されていたのかもしれない。今回の分類で平瓦となっているものは破片のため、棧瓦の平部を平瓦として分類した可能性がある。

さらに、刻印の施されている場所については、瓦の裏か表か、側面なのかというように分けてみた。すると、平瓦、丸瓦では表に施されており、小さな刻印は平瓦であれば側面に、丸瓦であれば玉縁上の側面に施されるのが多かった。棧瓦は、裏面に施されていた。

D. 泥面子と土人形

今回の調査で多数の泥面子が出土している。一言で泥面子といっても種類はさまざまで、人物、動物、野菜や扇子など多彩である。特に、人物の顔をかたどったものは表情も豊かで見ていて飽きないものばかりである。大きさも、特別大きいものや小さいものなどもあるがある程度の規格はあったようだ。「面子」と聞くと子供のおもちゃの印象が大きい博打の道具として使われたものもある。

調査区ごとに見ていくと、今回の調査範囲の北側に位置する新馬借B調査区とA-1調査区からの出土が少なくなっている。A-1調査区のすぐ南側の高麗門調査区からはほかの調査区と変わらないだけの数が出土しているがここを境に北と南で数字の差が大きくなる。多くの泥面子は、遺構に伴うものではなく、表土剥ぎやカクランなどから出土している。時期としてはかなり新しいものだろうと思われる。また、各調査区ともに人物をかたどったものが一番多く出土している。一つ一つの残りはよく、ほとんどのものが形の推測できるものであった。

① 人物

人物を表したものでは、顔だけをかたどったものと体まであるものがあつた。数としてはほとんどが顔のみのものであつた。その中でも、兜を被った武士が多く出土している。武士の中でも多くみられるのが、蛇の目紋を兜につけた加藤清正である。肥後のヒーローといったところだろうか、大小様々な大きさで、表情も様々であつた。

Tab.64 各調査区の泥面子総数

	人物	生物	モノ	その他	合計
新馬借B	0	1	0	0	1
A-1	4	1	0	0	5
A-2	29	6	1	2	38
A-3	24	3	3	2	32
A-4	65	16	9	13	103
A-5	53	9	7	6	75
高麗門	56	11	6	9	82

他にも家紋のついた武士があり種類は多かつた。また烏帽子をかぶつた人、ひげを生やした人の形が多くみられた。ほとんどは、男性をかたどっていたが、数点だけ女性をかたどつたものもあつた。また、ひよっこ、おかめさん、七福神の恵比須さん、大黒さん、毘沙門天なども多くみられ縁起物が多く作られていたのかもしれない。また、武士の中には、兜の上に将棋の駒がついているものが2点出土した。面子ではなく将棋の駒として使われていたのかもしれない。

② 生物

「生物」と一つに分けたがここには多くの種類のもものが含まれている。たとえば、サル、キツネ、獅子などの動物や大根、カブのような野菜、そして花、エビ、魚、かたつむりなどさまざまである。キツネはかわいらしい動物というよりもお稲荷さんのキツネのようなやや怖い顔つきである。獅子も神社の狛犬のよう

ある。七福神同様、お守りのような役名を担っていたのかもしれない。野菜や魚などは、とてもかわいらしくおままごとの道具のように思える。魚やエビはお祝い時の料理のようでとても豪華な形で作られていた。花は、大きく一つの花だったり、小さな花が二つ並ぶ形だったりした。

③ モノ

「モノ」という分類もかなり大きなくりで人物と生物に入らなかったもののほとんどがここに分類されている。たとえば、鳥居、傘、火消しの道具、刀、扇などさまざまである。鳥居や扇は多く出土しており大きさもさまざまであった。扇には中心に模様があり、その模様もバラエティーに富むものばかりである。

また、泥面子と一緒に面子の型も数点出土している。しかし、型に合う面子は出土していなかった。

そして、泥面子とともに今回の調査では箱庭の部品と思われるものも出土している。船や灯籠、お城をかたどったものが出土している。どれも立体的で彩色が施され、表面にも光沢があった。とても小さいが、精巧に作られており、お城は熊本城のようであった。

④ 土人形と型

今回の調査では多くの土人形の破片も出土し、その人形の型と思われるものも多く出土している。出土した地点は、新馬借B調査区とその西側の排水路工事立会の際に出土した。ごみ穴など廃棄された状態で出土したものも多い。時期的には、他の出土遺物から見て、幕末から明治にかけてであろう。

小人形はある程度の形が残っており、子守の人形やキリストなどわかりやすいものもあった。しかし、大きなものになると、すべて破片で接合できるものもなく、どのような形の人形でどのくらいの大きさになるのかわからないものがほとんどであった。一部、力士をかたどっているものかと思われるような破片があった。また、人形の方も同様で、型ということまではわかってもそれ以上のことがわかるような資料は出土しなかった。

今回調査した場所の位置する新町には、江戸後期から大正期にかけて人形町といわれるほど人形師が住んでいた場所であり、今回の出土遺物はその人形師たちの生業の証拠であろう。

新馬借遺跡、花岡山・万日山遺跡群の瓦と泥面子、土人形の分類を行ったが、データ数が少ないことと十分に分析する時間が足りず、他の事例や文献等の史料にも当たれず不十分なまとめになった。ほとんど類推を重ねたもので確実な結果を得られなかった。あくまでも課題を提示したことで今後の調査に期待したい。

PL.96 出土泥面子（1）



PL.97 出土泥面子（2）



PL.98 出土銭（表）



PL.99 出土銭（裏）



Tab.65 古銭観察表

図版番号	写真番号	年度	調査区	黄No.	赤No.	種別	銭貨名	初鋳年・鋳造年(西暦)	種類	グリッド	遺構	層位	取上番号			法量 (cm・g)			背文	材質	備考
													外径	穿孔	厚さ	重量	外径	穿孔			
98.99	640	H23年度	A-4	10		古銭	開元通宝?				S029	最下層	No.4	2.21	0.59	0.10	1.88		銅		
98.99	641	H23年度	A-5	14		古銭	開元通宝				表土ハギ			2.44	0.67	0.14	3.22		銅		
98.99	642	H23年度	A-1	16		古銭	洪武通宝			J-48		3層	No.329	2.06	0.55	0.21	3.50		銅		
98.99	643	H23年度	A-4	12		古銭	同治通宝	同治元年(1862)			東側カクラン			2.28	0.64	0.11	2.28	バスハ文字、當十	銅		
98.99	644	H23年度	A-2	3		古銭	寛永通宝		新	G-34		2層		2.35	0.54	0.11	2.60		銅		
98.99	645	H23年度	A-2	4		古銭	寛永通宝		古	G-34		2層		2.46	0.55	0.13	3.40		銅		
98.99	646	H23年度	A-2	20		古銭				H-35		1層		2.44	0.53	0.12	2.65		銅		
98.99	647	H23年度	A-2	19		古銭	寛永通宝			H-35		中央部ガス管束側		2.49	0.59	0.14	2.85		銅		
98.99	648	H23年度	A-2	1		古銭	寛永通宝			H-25		東側溝		2.80	0.62	0.11	4.23	波	銅		
98.99	649	H23年度	A-2	2		古銭	寛永通宝		新	H-26		東側石垣外側		2.36	0.59	0.09	1.98		銅		
98.99	650	H23年度	A-3	22		古銭	寛永通宝		新	H-27		水路側掘削		2.34	0.58	0.10	2.15		銅		
98.99	651	H23年度	A-3	15		古銭	寛永通宝		新	E-15 サブトレ		2トレンチ	No.1	2.28	0.60	0.11	2.40		銅		
98.99	652	H23年度	A-4	7		古銭	寛永通宝			S015		中層		2.35	0.62	0.10	2.12		銅		
98.99	653	H23年度	A-4	9		古銭	寛永通宝			S029			No.3	2.41	0.64	0.10	2.00		銅		
98.99	654	H23年度	A-4	11		古銭	寛永通宝		新			東側掘削地		2.24	0.67	0.09	1.82		銅		
98.99	655	H23年度	A-4	13		古銭	寛永通宝					東側カクラン		2.41	0.63	0.12	2.42		銅		
98.99	656	H23年度	A-5		117	古銭	寛永通宝		新			直上		2.52	0.62	0.16	3.15		銅		
98.99	657	H23年度	A-3	6		古銭	文久永宝	文久三年(1863)			S008			2.67	0.68	0.11	3.28	波	銅		

Tab.66 銭貨観察表

図版番号	写真番号	年度	調査区	黄No.	赤No.	種別	銭貨名	初鋳年・鋳造年(西暦)	種類	グリッド	遺構	層位	取上番号			法量 (cm・g)			背文	材質	備考	貨幣No.
													外径	穿孔	厚さ	重量	外径	穿孔				
98.99	658	H23年度	A-2	5		近代	竜一銭銅貨	明治八年(1875)		H-35		1層		2.79	—	0.15	6.76		銅			
98.99	659	H23年度	A-3	8		近代	半銭銅貨	明治〇年				南部石垣間		2.22	—	0.14	3.42		銅			
	—	H23年度	A-4		57	現代	十円青銅貨	昭和二十六年(1951)			S032			2.37	—	0.15	4.30	平等院鳳凰堂	青銅		半亨有り。	

第 4 章

自然科学分析

第1節 花岡山・万日山遺跡群埋蔵文化財発掘調査に伴う 地中レーダー探査（抄）※

応用地質株式会社

1. はじめに

本報告書は、熊本県教育庁のご依頼により、応用地質株式会社が実施した「花岡山・万日山遺跡群埋蔵文化財発掘調査に伴う地中レーダー探査業務」の調査結果をとりまとめたものである。

以下、調査の概要を示す。

- 【調査件名】 花岡山・万日山遺跡群埋蔵文化財発掘調査に伴う地中レーダー探査業務
- 【調査場所】 熊本県熊本市中央区新町4丁目地内（Fig.127 参照）
- 【調査期間】 平成24年（2012年）11月8日～平成24年（2012年）12月8日
（現地測定：平成24年11月9日）
- 【調査目的】 J R熊本駅の北側に所在する「高麗門踏切」付近において、在来線の高架化工事に伴う発掘調査によって石造による暗渠状遺構の一部が確認された。発掘範囲は限定的であり、また発掘箇所の北には車道が存在するため、発掘による確認作業を行うことはできない。そのため、非破壊探査手法である地中レーダー探査を用いて遺構の分布状況を探査し、今後の考古学的調査を立案する上での基礎資料を得ることを目的とする。
- 【調査内容】 地中レーダー探査 総測線長：623 m
探査装置：〔本体〕 SIR-3000/G.S.S.I 社製
〔アンテナ〕 400MHz アンテナ /G.S.S.I 社製
- 【調査担当】 応用地質株式会社
（技術担当） 主任技術者 岡田聡（技術士：応用理学部門）
業務担当者 高瀬尚人
東日本統轄支社 ジオテクニカルセンター
〒331-8688 埼玉県さいたま市北区土呂町2-61-5 Tel：048-652-3942
（営業担当） 安東敬吾
九州支社 サービス開発部
〒811-1302 福岡県福岡市南区井尻2-21-36 Tel：092-591-1840
藤崎俊彦
九州支社 熊本支店
〒861-2101 熊本県熊本市東区桜木二丁目7-14 Tel：096-369-8891

※探査結果は多岐に渡るため、今回の調査にかかる部分を最小限に抜粋した。

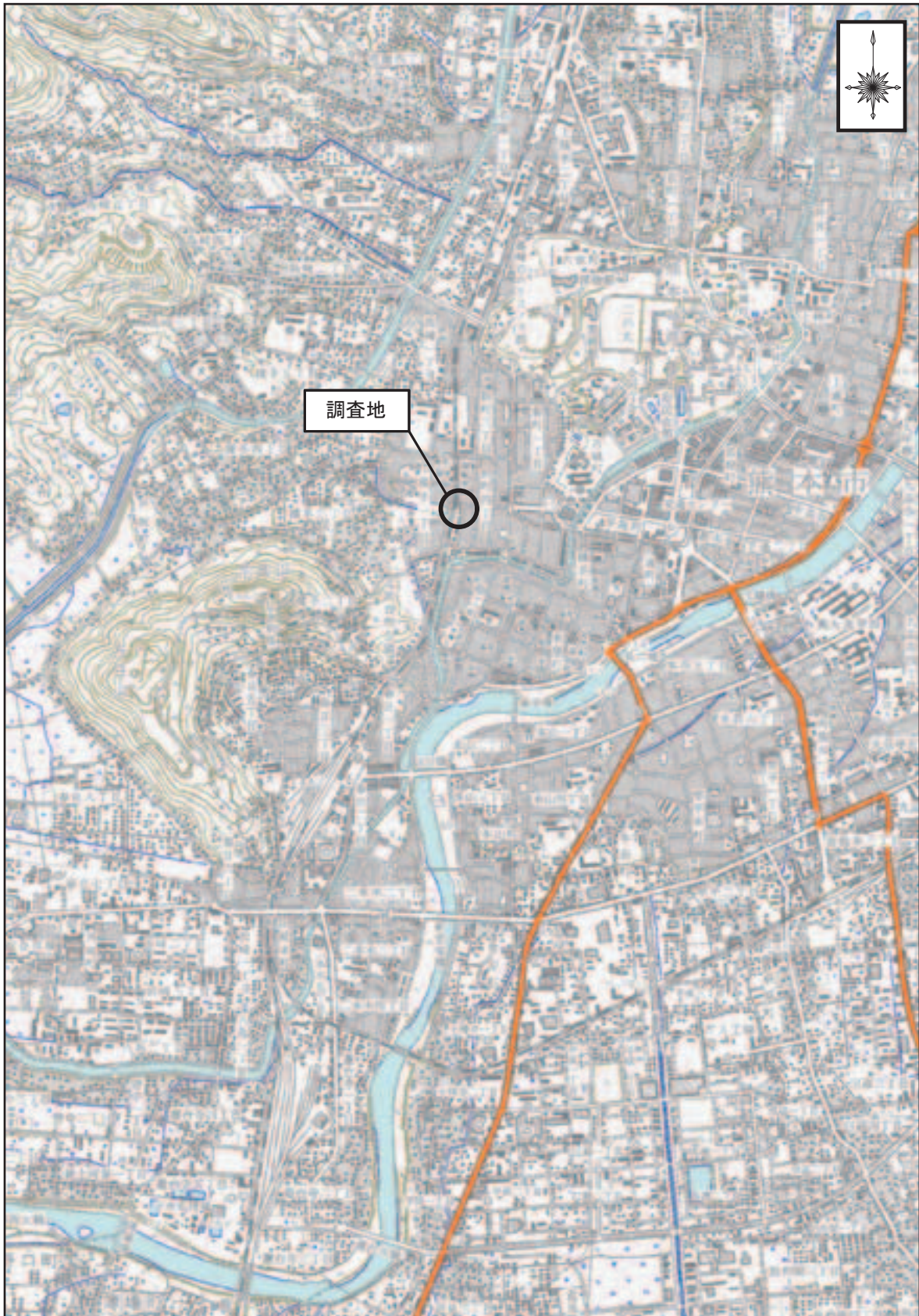


Fig.127 調査位置図
(国土地理院数値地図より作成)

2. 調査方針

2-1 調査地の現況

本調査地は、J R 鹿児島本線の線路脇に位置しており、高架化工事が進められている。現在の地表面は裸地であり、探査範囲の中央付近には車道が存在している。発掘箇所は探査範囲の南側に位置しており、現地表面から約 1.1 m の深度で石造の暗渠状遺構が確認された。

この暗渠状遺構は発掘範囲外にも連続するとみられるが、これまでに本調査地で実施された発掘範囲は限定的であり、また車道部では発掘による確認作業を行うことはできない。そのため、遺構の実態は明らかにされていない。

遺物を探査する場合、対象遺構の物理的特徴、地盤状況、地表状況等の現況条件により、調査目的に応じた探査手法を選定する。

現況条件を以下に挙げる。

- ・ 現地表面は、ほぼ平坦である。
- ・ 探査範囲中央の車道部は 2 車線の舗装道路であり、この車道の南側範囲及び北側範囲は裸地となっている。北側範囲の大部分は工事に関連する鉄板が敷かれていたため、探査は実施できなかった。
- ・ 車道部の中央沿いには、下水管が敷設されている。
- ・ 主対象遺構である暗渠状遺構は、現地表面から約 1.1 m の深度に位置する。この暗渠状遺構の周辺には、埋設管やコンクリートブロック等、近現代の構造物や地盤の攪乱がみられる。
- ・ 探査範囲の北東端には、桁橋状遺構の一部が確認されている。



PL.100 暗渠状遺構の発掘状況

2-2 調査の基本方針

保存対象の遺跡における物理探査の利用は、掘削を伴わない非破壊調査である特長を最大限活用するものである。物理探査には、大きく以下の3つの役割がある。

- ① 発掘調査の事前調査として遺構の状況を把握し、発掘範囲を特定する。
- ② 発掘を行わず現状保存する範囲において、遺構の埋蔵状況を反映する唯一の情報となる。
- ③ 範囲が限定される発掘調査結果と対比させ、発掘を行わない広範囲における遺構の埋蔵状況を推定する。

①の場合、対象とする遺構と現地状況に応じて、最も効果的な探査計画（手法選択、測線配置）が必要となる。②の場合、最も詳細で高精度な探査計画が必要となる。また、③の場合は発掘調査の実施が必要となる。当該地では、これまで考古学的調査が行われておらず、遺構分布等の地下情報は未確認のままである。今後、探査結果を反映して発掘調査が行われる可能性もあることから、実施すべき物理探査は①に該当する。

2-3 探査手法の選択

石積遺構等を対象とする探査手法として、地中レーダー探査や電気探査等が挙げられる。地中レーダー探査は、電磁波を地中に発信してその反射を捉える手法である。探査深度は約2m～3m、分解能は数10cmであり、遺跡探査で最も利用されている手法である。

電気探査は、地中に微弱な電流を流し、地質の違いを把握する手法である。遺跡を対象とした場合、探査深度10mで分解能は1m～2mとなる。城郭の埋没石垣や大型古墳の石室のような大規模な構造物であれば検出できるが、当該地で想定される石積遺構の検出は困難と考えられる。地中レーダー探査は分解能が高く、測定効率が高いため高密度の測線が設定できるなどの特性があるため、遺構の埋蔵深度や分布範囲（平面形状）の把握に適している。したがって、探査手法としては地中レーダー探査を選択する。



PL.101 地中レーダー探査測定状況

3. 地中レーダー探査および測線配置

3-1 地中レーダー探査の概要

(1) 測定方法

地下浅部に埋蔵される遺構を調査する手法として、掘削を伴わない調査手法を考えた場合、最も適用性の高いものは『地中レーダー探査』である。

地中レーダー探査とは、地表を走査するアンテナから地中にむけて電磁波を放射し、地下の“反射体（アノマリー）”からの反射波を捉えることにより、地中の状況を非破壊で調査する物理探査手法である。均質な地盤中に埋蔵物や空洞などがある場合、それらが電磁波を反射する“反射体”となり、地表で得られたデータ（地中レーダー探査記録）から、地下の埋蔵物や空洞などを推定する。

本探査手法の測定概念を Fig.128 に示す。埋蔵文化財を対象とした場合、地層境界面、締め固め状態の急変面、石材・礫など遺構やその周囲の地盤状況が反射面となる。

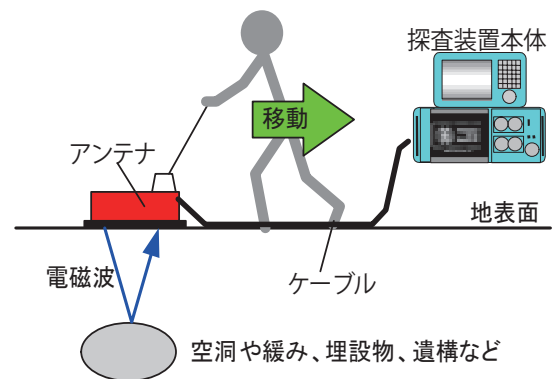


Fig.128 地中レーダー探査測定概念図

地中レーダー探査では、電磁波の反射を“波形記録”として捉えるが、Fig.129 に示すように、振幅に応じた色を割り当てた“濃淡記録”とすることによって視認し易いように表現される。記録上の色と振幅（反射の大きさ）の関係は、以下のとおりである。

- 白 ⇒ 振幅が大きい
- 緑や青 ⇒ 振幅がやや大きい
- 赤～橙 ⇒ 振幅がそれほど大きくない
- 黒 ⇒ 反射波が捉えられていない

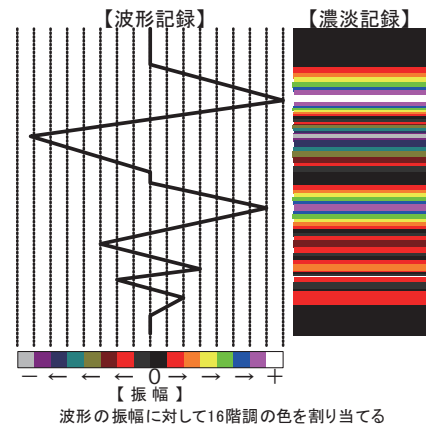


Fig.129 波形記録の表現方法

地中レーダー探査では、反射波の往復伝播時間に地中の電磁波伝播速度を乗じることによって換算深度が得られることから、測定記録は深度方向に対する断面記録として可視化される。

地中レーダー探査装置の主な仕様を Tab.67 に示す。本調査で使用した探査装置は、SIRSystem3000（米国・G.S.S.I.社製）である。この装置は、パーソナルコンピュータ上で稼動し、電磁波を放射・受信するための送・受信アンテナ、アンテナでの送受信を制御し受信信号の増幅やフィルター処理などをおこなうコントローラ、受信信号を可視記録として表示するモニター、および受信信号をデジタル記録として収録する

ハードディスクで構成されている。

また、測定に用いたアンテナの中心周波数は 400MHz である。

Tab.67 地中レーダー探査装置の仕様

名称	仕様	
探査装置 SIR-3000 (米国・G.S.S.I.社製)	プロセッサ	: 32ビット
	チャンネル	: 1ch 送受信
	時間レンジ	: 0～80,000ns
	スキャンレート	: 150 スキャン/秒
	A/D 分解能	: 8ビット/16ビット
	データ保存	: 内蔵ハードディスク
	モニター	: 8.4インチ TFT800x600 カラーディスプレイ
	電源	: 内蔵 DC10.8V バッテリー
	外形寸法	: 31.5 × 22.0 × 10.5cm
	重量	: 4.1kg (バッテリー含む)
アンテナ Model 5103 (米国・G.S.S.I.社製)	中心周波数	: 400MHz
	アンテナ形式	: 2アンテナ一体型 電磁シールドタイプ
	外形寸法	: 30 × 30 × 17cm
	重量	: 約 5 kg

(2) 解析方法

地中レーダー探査の測定は、アンテナの操作方法によって「プロファイル測定」と「ワイドアングル測定」の2種類がある。このうち、地下の断面構造を把握する目的で行なわれる測定はプロファイル測定であり、本文中で示す地中レーダー探査記録はこの測定方法によって得られたものである。通常、記録の整理段階において各種の処理を行なった上で記録の判読および解釈を実施する。以下に、解釈までの流れを示す。

① 等間隔処理

記録の横軸はアンテナの移動距離であり、測定時に測線の1m毎に目印（マーカ）を入れている。このマーカ間隔は、そのままでは不定の間隔であるため、これを等間隔に補正する処理を施した。

② 深度換算処理

記録の縦軸は時間軸（往復伝播時間）であり、時間に地盤の電磁波伝播速度を乗ずることによって深度に換算する。本調査では、発掘箇所を確認された暗渠状遺構の埋没深度から算出した速度値である 8.0cm/ns（比誘電率換算：14.06）を用いた。

③ タイムスライス解析

タイムスライス解析とは、高密度に設定した測線の測定記録をコンピュータ上で統合し、任意の時間（深度に相当）における反射波を平面的に切り出し、その振幅の強弱を平面分布として図化する解析法である。タイムスライスでは数値（反射振幅の値）によって表現されるため、目視判読による解釈に比べて客観的に表現することができる。

④ 解釈

遺構分布の推定では、以下の項目に着目した。

- ・暗渠状遺構の分布状況及び残存状況
- ・桁橋状遺構の分布状況及び残存状況
- ・その他の遺構の有無

3-2 測線配置

測線の配置は、車道部南縁を基準としてローカルな直交座標を設定した。このローカル座標系の原点(0,0)は南西隅に置き、東-西方向を“X軸”、南-北方向を“Y軸”とした。以後、測線の位置等はこの座標系によるものとする。

測線間隔は、1 mの格子状で測線を配置しており、ローカル座標系で表現する。測線名は、

- ・ Y軸方向（南北方向）に沿ったもの：X**測線
- ・ X軸方向（東西方向）に沿ったもの：Y**測線

とする。**の数字は、座標上での位置（単位は1 m）を示している。たとえば、X12 測線は、X=12 mの線上にとった測線であり、Y05 測線は、Y=5 mの線上にとった測線であることを示している。

本調査の測線配置を Fig.130 に示す。

Fig.130 において、赤色線が測線を表しており、それぞれ測線の矢印は測定方向を指している。測線一覧・数量を Tab.68 に示す。測線の総延長は 623 mとなった。



Fig.130 測線配置図 縮尺 1:200

Tab.68 測線一覧・数量表

測線名	始点 (m)		終点 (m)		測線長 (m)	測線名	始点 (m)		終点 (m)		測線長 (m)
	StartX	StartY	EndX	EndY			StartX	StartY	EndX	EndY	
南-北方向 (Y方向)						西-東方向 (X方向)					
南側範囲											
X00	0	0	0	14	14	Y00	10	0	18	0	8
X01	1	0	1	14	14	Y01	10	1	18	1	8
X11	11	0	11	15	15	Y02	10	2	18	2	8
X12	12	0	12	15	15	Y03	10	3	19	3	9
X13	13	0	13	15	15	Y04	10	4	19	4	9
X14	14	0	14	15	15	Y05	10	5	19	5	9
X15	15	0	15	15	15	Y06	10	6	19	6	9
X16	16	0	16	15	15	Y07	10	7	19	7	9
X17	17	0	17	15	15	Y08	10	8	19	8	9
X18	18	0	18	15	15	Y09	10	9	19	9	9
						Y10	10	10	19	10	9
						Y11	10	11	19	11	9
						Y12	10	12	19	12	9
						Y13	10	13	19	13	9
						Y14	10	14	19	14	9
車道部											
X00	0	15	0	21	6	Y15	0	15	20	15	20
X01	1	15	1	21	6	Y16	0	16	20	16	20
X02	2	15	2	21	6	Y17	0	17	20	17	20
X03	3	15	3	21	6	Y18	0	18	20	18	20
X04	4	15	4	21	6	Y19	0	19	20	19	20
X05	5	15	5	21	6	Y20	0	20	20	20	20
X06	6	15	6	21	6	Y21	0	21	20	21	20
X07	7	15	7	21	6						
X08	8	15	8	21	6						
X09	9	15	9	21	6						
X10	10	15	10	21	6						
X11	11	15	11	21	6						
X12	12	15	12	21	6						
X13	13	15	13	21	6						
X14	14	15	14	21	6						
X15	15	15	15	21	6						
X16	16	15	16	21	6						
X17	17	15	17	21	6						
X18	18	15	18	21	6						
X19	19	15	19	21	6						
X20	20	15	20	21	6						
北側範囲											
X00	0	21	0	28	7	Y22	0	22	5	22	5
X01	1	21	1	28	7	Y23	0	23	5	23	5
X02	2	21	2	28	7	Y24	0	24	5	24	5
X03	3	21	3	28	7	Y25	0	25	5	25	5
X04	4	21	4	28	7	Y26	0	26	5	26	5
X05	5	21	5	28	7	Y27	0	27	5	27	5
				0		Y28	0	28	5	28	5
小計 (m)					316	小計 (m)					307
										合計 (m)	623

4. 調査結果

4-1 代表的な記録例

本調査地における代表的な記録例の位置を Fig.131 に示す。各測線の記録を Fig.132 ~ Fig.135 に示し、その解釈を以下に記す。



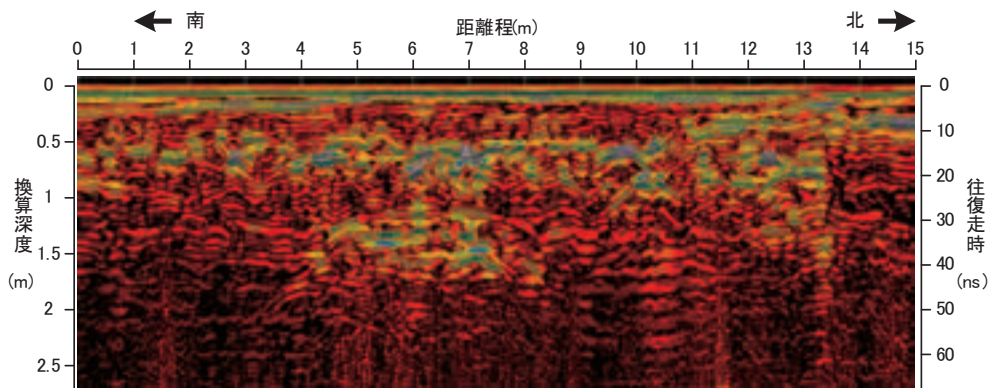
Fig.131 記録例の測線位置 縮尺 1 : 300

【記録例①：X12 測線】 Fig.132 参照

当該測線は、南側範囲に位置する発掘箇所の2 m東側において、南→北方向に設定した測線である。この発掘箇所では、現地表面からの深度約 1.1 mにおいて石造の暗渠状遺構が確認されている。

- ・ 換算深度約 0.6 mにおいて、比較的明瞭な反射面が検出された。異なる土層境界とみられ、上位層は近現代の埋土・堆積土と推定される。距離程約 9.7 mおよび 12.5 m付近では土層境界付近に局所的な反射体が検出されており、埋設管等の近現代の構造物が存在すると考えられる。
- ・ 距離程約 5 m～約 7.5 mにおいて、乱れた反射像が検出された。検出深度は上面が約 1.1 mである。発掘調査区で確認された暗渠状遺構と連続する位置および深度であることから、当該反射パターンが暗渠状遺構を捉えた記録と考えられる。

《 X12 測線 の測定記録 》



《 解釈結果 》

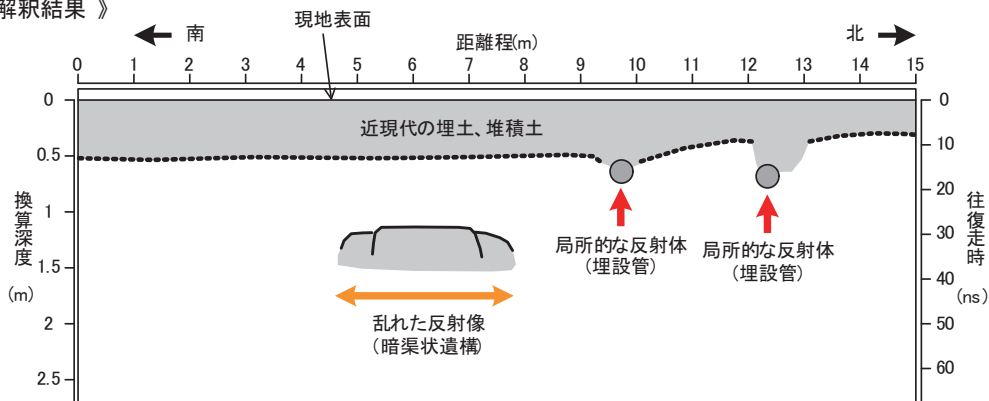


Fig.132 記録例① (X12 測線)

【記録例②：Y16 測線】 Fig.133 参照

当該測線は、車道部の南側において、西→東方向に設定した測線である。

- ・距離程約 6 m～8 mにおいて、乱れた反射像が検出された。検出深度は上面が約 1.1 mである。検出深度および位置から勘案すると、当該反射パターンは暗渠状遺構を捉えた記録と考えられる。
- ・距離程約 7 m～約 8 m、約 10 m～約 11.5 m、約 13.5 m～約 16 mにおいて、乱れた反射像および局所的な反射体が検出された。検出深度は上面がいずれも約 0.5 m前後であり、路盤層直下と比較的浅部であることから、遺構ではなく近現代の攪乱あるいは構造物の可能性が高い。
- ・距離程約 18 m～19.7 mにおいて、乱れた反射像が検出された。検出深度は約 0.9 mである。検出位置から勘案すると、桁橋状遺構の一部と推定される。

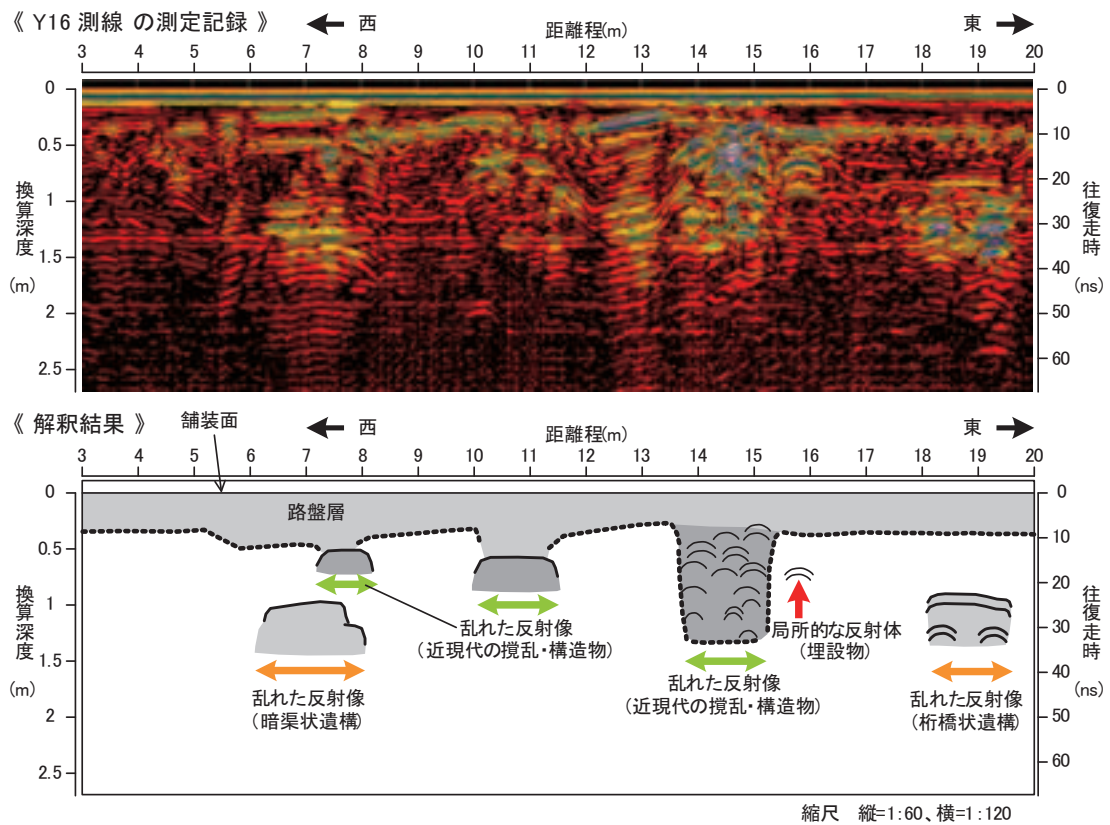


Fig.133 記録例② (Y16 測線)

4-2 遺構分布の推定

本調査では、記録例に示した暗渠状遺構や桁橋状遺構の反射面等の分布状況を平面的に把握するため、タイムスライス解析を実施した。スライス深度は上面を0.5 mとし、0.25 m毎にずらしながら0.5 mの層厚で切り出して合計6層の平面図を作成した。スライス深度の模式図を Fig.134 に示す。

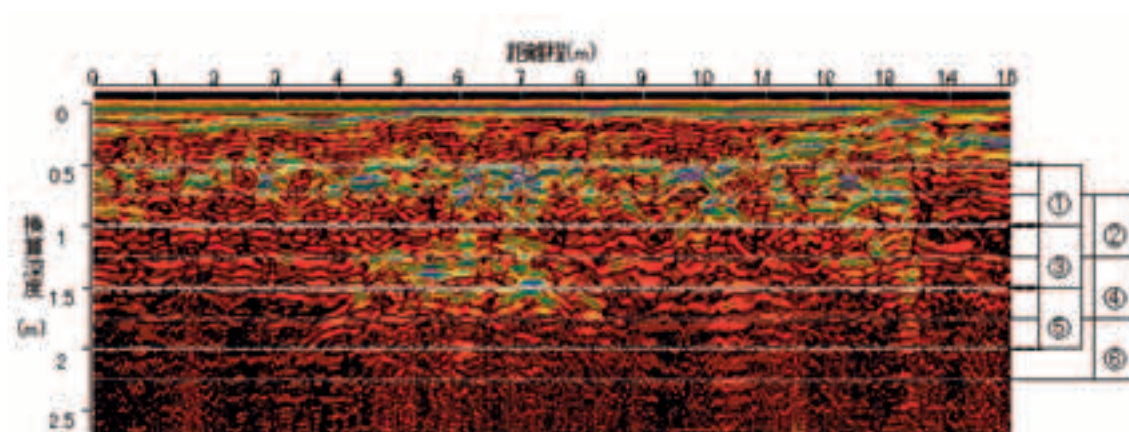


Fig.134 スライス深度の模式図

タイムスライス結果では暖色系（赤色）は反射振幅が強い範囲を表し、寒色系（青色）は反射振幅が弱い範囲を表している。反射振幅が強い範囲（以下、アノマリーと呼称する）は、主に石材や掘り込み等の不均質な部分の分布範囲であり、暗渠状遺構や桁橋状遺構等の分布範囲が推定できる。また、寒色系（青色）の部分は相対的に均質な土質と推定できる。本調査地におけるタイムスライス結果を Fig.135 に示す。

以下に、遺構分布の推定結果を記す。

【スライス深度：0.50 m～1.00 m】 Fig.135 の上段左側

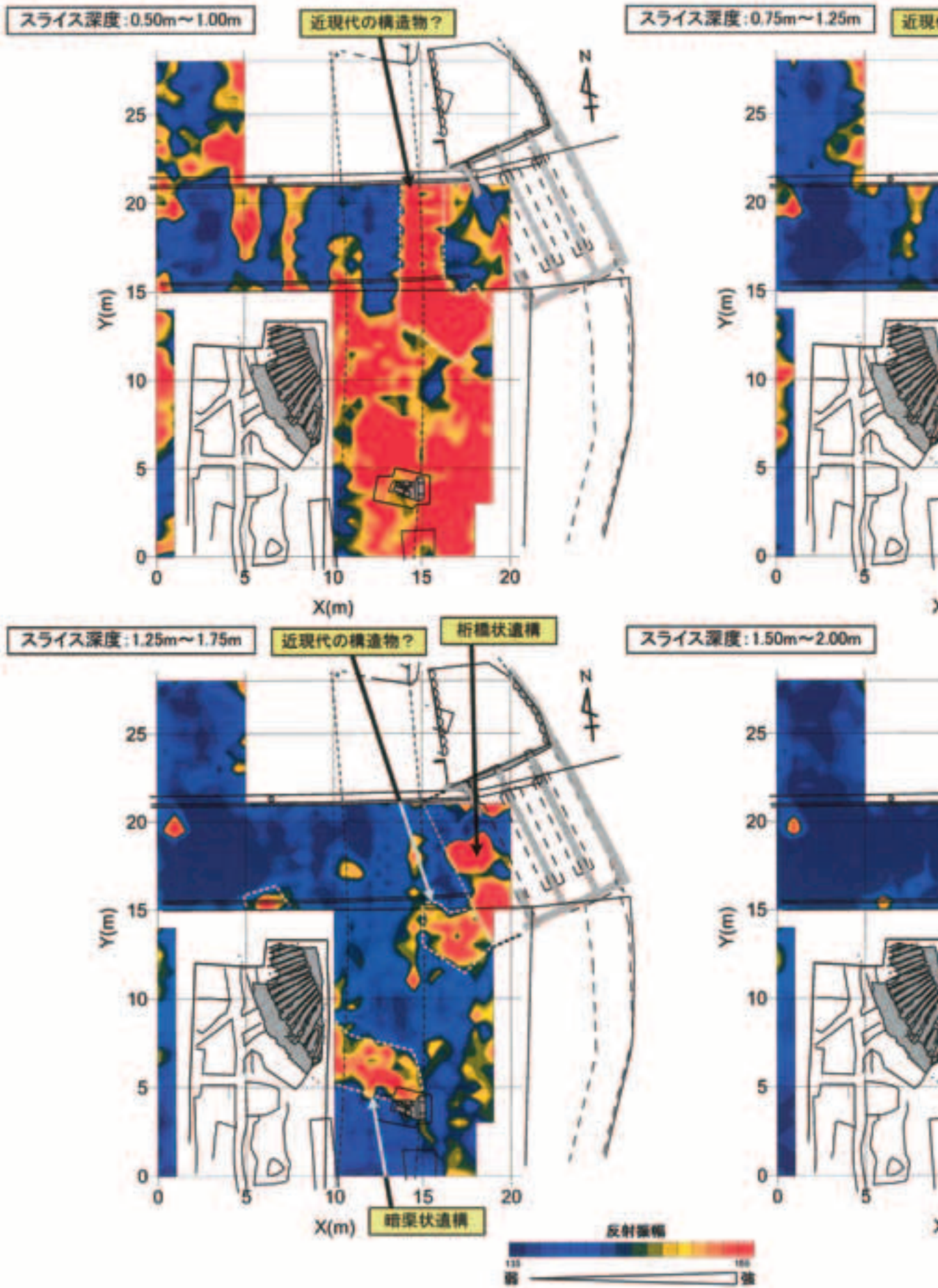
- ・ 探査範囲のほぼ全面にわたって、反射振幅の強いアノマリーが検出された。検出深度および広がりから勘案すると、記録例①で示した「土質境界」によるアノマリーといえる。このうち、探査範囲北東側の X= 約 14 m～19 m、Y= 約 11 m～21 m 付近のアノマリーは記録例②で示した「近現代の攪乱・構造物」の分布形状である。明瞭かつ直線的であることから、近現代の構造物が存在する可能性が高い。

【スライス深度：0.75 m～1.25 m】 Fig.135 の上段中央

- ・ 探査範囲の北東隅では、上位深度と同様、近現代の構造物の可能性のあるアノマリーが検出された。
- ・ 上述の近現代の構造物と推定されるアノマリーの北東側（X= 約 16 m～20 m、Y= 約 14 m～21 m）において、反射振幅の強いアノマリーが検出された。検出位置から勘案すると、桁橋状遺構の分布範囲と推定される。

【スライス深度：1.00 m～1.50 m】 Fig.135 の上段右側

- ・ 探査範囲の北東側では、上位深度と同様、近現代の構造物の可能性のあるアノマリーが検出された。上位深度に比べて、車道部でのアノマリーの分布範囲は狭まっている。
- ・ 探査範囲の北東隅では、上位深度と同様、桁橋状遺構と推定されるアノマリーが検出された。
- ・ 探査範囲の中央付近（X=10 m～約 15 m、Y= 約 4 m～約 9 m）において、アノマリーが帯状に検出され



た。検出位置および深度から勘案すると、暗渠状遺構の分布範囲と推定される。この暗渠状遺構の東側の連続状況は、X=15 mよりも東側では不明瞭となっており、近現代の攪乱等で失われている可能性が高い。また北側の連続状況については、Y=16 mよりも北側では検出されていないことから、車道部中央に敷設されている下水道の施工等によって滅失されている可能性が高い。

【スライス深度：1.25 m～1.75 m】 Fig.135 の下段左側

- ・探査範囲の北東側では、上位深度と同様、近現代の構造物の可能性のあるアノマリーが検出された。上位深度に比べて、車道部でのアノマリーの分布範囲は狭まっている。
- ・探査範囲の北東隅では、上位深度と同様、桁橋状遺構と推定されるアノマリーが検出された。
- ・探査範囲の中央付近では、上位深度と同様、暗渠状遺構と推定されるアノマリーが検出された。

【スライス深度：1.50 m～2.00 m】 Fig.135 の下段中央

- ・特徴的なアノマリーは検出されなかった。

【スライス深度：1.75 m～2.25 m】 Fig.135 の下段右側

- ・特徴的なアノマリーは検出されなかった。

5. まとめ

本調査では、J R鹿児島本線の高架化工事現場において地中レーダー探査を実施し、発掘調査によって確認された暗渠状遺構等の分布状況を推定した。

本調査地において、暗渠状遺構および桁橋状遺構の可能性のある反射像が検出されたスライス深度 1.00 m ～ 1.50 m および 1.25 m ～ 1.75 m の結果を合成し、Fig.136 に示す。

以下に、遺構分布の推定結果を記す。

- ・発掘調査によって一部確認された暗渠状遺構は、出土箇所の東端から更に約 5 m 程度東に連続していると推定される。しかしながら、それより東では暗渠状遺構は検出されなかったことから、近現代の攪乱等によって滅失している可能性がある。
- ・発掘箇所の北側に位置する車道部では、車道部南端から更に約 1 m 程度北に連続していると推定される。しかしながら、車道部の中央付近から北側では暗渠状遺構は検出されなかった。車道の中央に位置する下水管等の敷設により滅失している可能性が高い。
- ・北側範囲では、明瞭な反射は検出されなかった。しかしながら敷鉄板の脇にわずかに反射振幅の強い範囲がみられることから、鉄板の下には暗渠状遺構が残存している可能性がある。
- ・探査範囲の北東隅（車道部の範囲内）では、桁橋状遺構と推定される反射像が検出された。既知の分布範囲を含めると、約 9 m × 9 m の規模とみられる。
- ・近現代の攪乱あるいは構造物の可能性のある反射像が多数検出された。地下浅部から多くの攪乱があるとみられ、遺構も部分的に失われている可能性が高い。

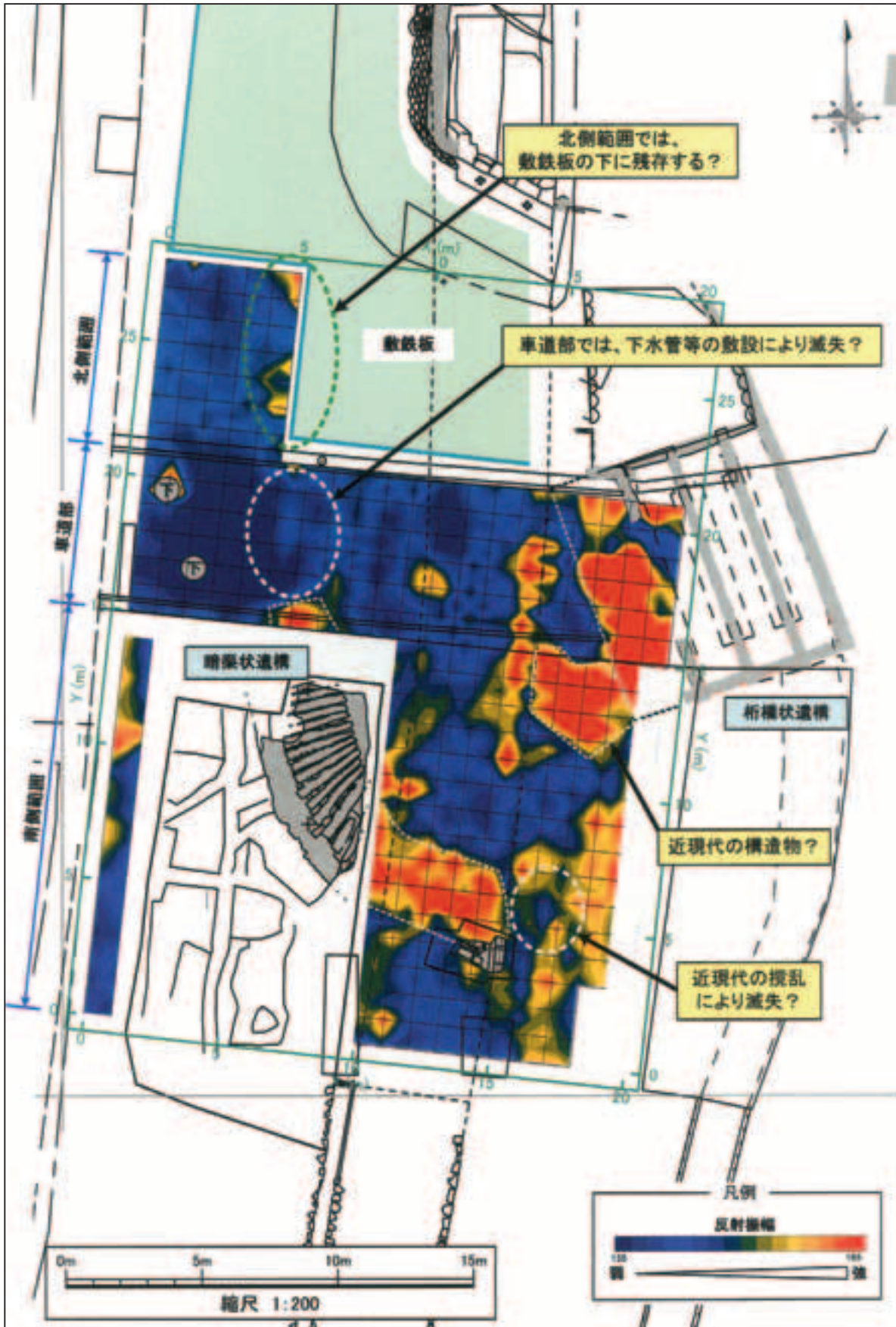


Fig.136 遺構分布推定図 縮尺 = 1 : 200

第2節 熊本市花岡山・万日山遺跡群および新馬借遺跡出土の中世人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：熊本県、中世人骨、刀創、散乱骨、扁平上腕骨

はじめに

2012（平成24）年度に実施された熊本県熊本市中央区横手3丁目に所在する花岡山・万日山遺跡群の発掘調査と同市中央区新町1丁目に所在する新馬借遺跡の水路工事立会でそれぞれ中世人骨などが出土した。前者はJR鹿児島本線の高架化工事に伴う発掘調査で、人骨は中世末の溝から検出された。後者は埋葬遺構（墓）からみつまっているが、工事立会のために検出された頭蓋のみが取り上げられた。

熊本県での中世人骨の報告例は、荒尾市浄業寺（永井、1965）、宇土市緑川（故松野・他、1970）、熊本市の城南町尾窪中世墳墓群（内藤、1973）と塚原中世墳墓（内藤、1975）、荒尾市杉谷遺跡（内藤・他、1978）、八代市興善寺町馬場遺跡（松下、1980）、あさぎり町（旧深田村）灰塚遺跡（松下、2001）、合志市（旧西合志町）船入遺跡（松下、2004）などがある。尾窪から出土した中世人骨は比較的保存状態も良好で、神奈川県鎌倉市の材木座遺跡でみられた中世人骨の特徴である、長頭性、鼻根部の扁平性、齒槽性突顎がみられることがわかり、長頭性、鼻根部の扁平性、齒槽性突顎は関東地方だけにみられる地域的特徴ではなく、汎日本的な中世人の時代的特徴であることを示した貴重な例である。

近年、二本木遺跡群から相次いで中世人骨が出土している。二本木遺跡群第8次調査区、第13次調査区（松下、2007a）、第14次調査区、第26次調査区（松下、2007b）、第27次調査区（松下、2007c）、第28次調査区（松下・他、2008a）、第31次調査区、第40次調査区E地点（松下真実・他、2012a）、第56次調査区および熊本県教育委員会が調査した二本木遺跡群（市電敷地）（松下真実・他、2012b）からも中世人骨が出土している。

熊本市内からは上記の二本木遺跡群の他に、大江遺跡群第111次調査区（松下、2009）、神水遺跡第41次調査区（松下・他、2008b）、上高橋遺跡、南新宮遺跡、植木町の松山遺跡からも中世人骨が出土している。

また、玉名市の玉名平野条里跡、大津町の中島宝満鶴・岩坂葉柳遺跡、芦北町の花岡古町遺跡と花岡木崎遺跡からも中世人骨が出土している。花岡古町遺跡では4体、花岡木崎遺跡からは7体、合計11体の中世人骨が出土した。2006年に花岡古町遺跡から出土した中世人は中世としては非常に珍しい坐位の姿勢で埋葬されていた。2005年におこなわれた花岡木崎遺跡の発掘調査では5体の中世人骨が出土したが、男性は高・狭顔、高身長という注目すべき所見が得られている。

今回、花岡山・万日山遺跡群では溝から頭蓋が出土している。溝跡から出土した人骨の例としては、2003年度に実施された二本木遺跡群第18次調査区の例があるが、これは古代に属する四肢骨片に過ぎなかった（松下、2005）。中世人骨の例としては二本木遺跡群第32次調査区R地点の溝から出土した頭蓋（壮年・女性）の例がある。

今回、両遺跡から出土した中世人骨の保存状態は必ずしも良好なものではないが、性別を推測することができるものや計測ができるものもあり、溝から検出された頭蓋には多数の刀創がみられるなど興味ある所見も得られたので、その結果を報告しておきたい。

*Masami MATSUSHITA、**Takayuki MATSUSHITA

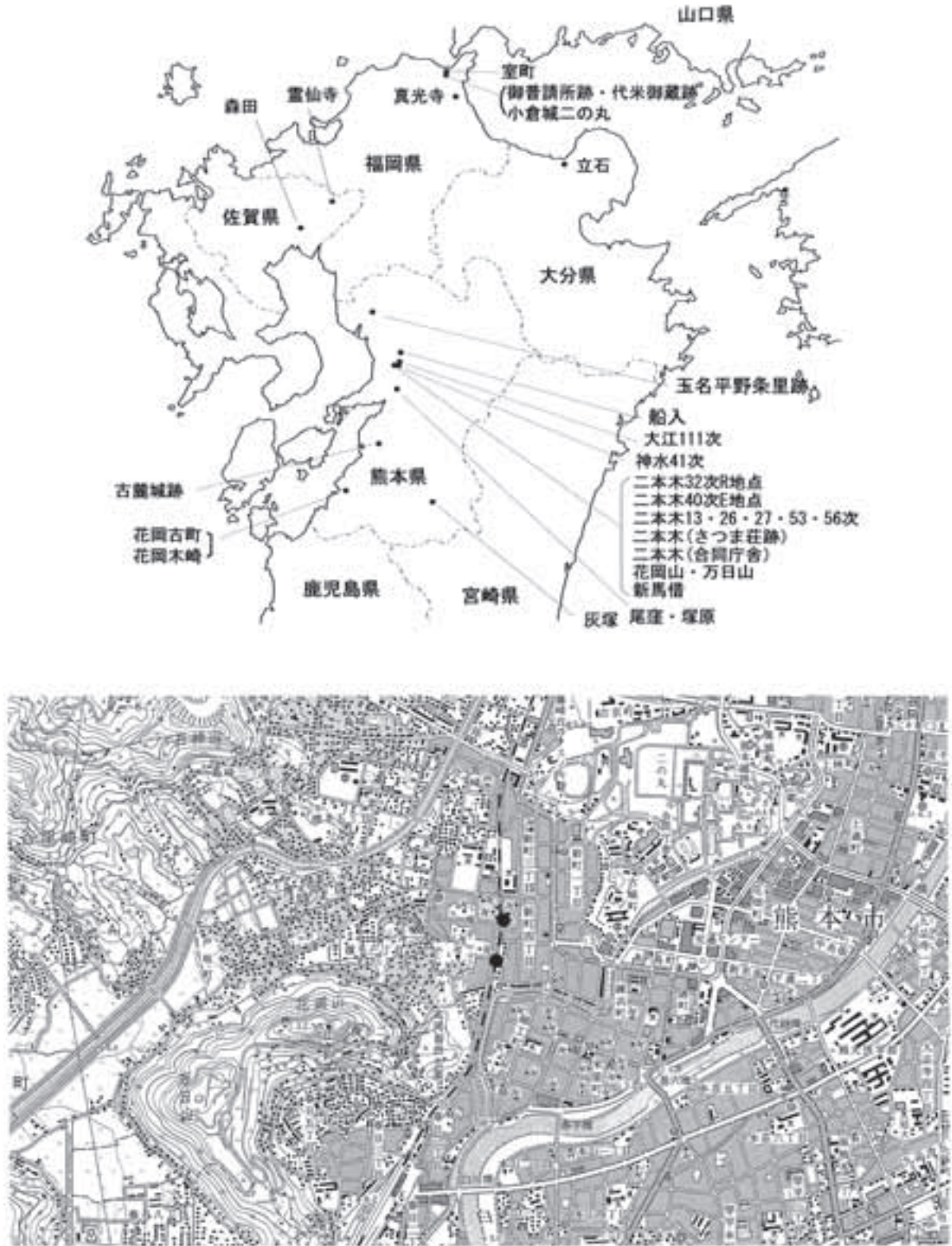


Fig.137 遺跡の位置図 (1/25,000)

(Fig.138 Location of the place of the Hanaokayama・Mannichiyama sites and Shinbasyaku site, Kumamoto City, Kumamoto Prefecture)

資料および所見

花岡山・万日山遺跡群からは2体分の人骨が検出された (Tab.69)。1体は溝 (S030) から、もう1体はD-13 グリッド内の石垣の下から検出されているが、両者とも中世末に属する人骨と推測されている。溝から検出された頭蓋は女性頭蓋と思われるが、後述しているように多数の刀創が認められる。石垣の下から検出された人骨は四肢骨のみで、残存量は少ない。

新馬借遺跡からも2体分の人骨が出土している (Tab.69)。1体 (ST-01; 新馬借遺跡範囲内) は埋葬遺構から検出されているが、工事立会のために工事範囲内で検出された頭蓋のみが取り上げられている。所属時代は副葬品の考古学的所見から中世 (室町) と推測されている。もう1体 (A-1 調査区) は溝 (S006) から出土した頭蓋の破片のみであるが、これは近代以降の人骨と推測されている。各人骨の性別・年齢などは Tab.70 に示すとおりである。また、年齢区分を Tab.71 に示した。計測方法は、Martin-Saller (1957) によった。

Tab.69 資料数 (Table.69 Number of materials)

	成人		幼小児	合計
	男性	女性		
花岡山・万日山遺跡群	0	2	0	2
新馬借遺跡	0	1	1	2
合計	0	3	1	4

Tab.70 出土人骨一覧 (Table.70 List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考 (時代など)		
《花岡山・万日山遺跡群》					
S030 (溝)	女性	壮年	中世	頭蓋のみ	刀創 溝出土
D-13 (グリッド)	女性	不明	中世	上腕骨のみ	
《新馬借遺跡》					
ST-01 (墓壇)	女性	壮年	中世 (室町)	頭蓋のみ	
S006 (溝)	不明	壮年	近代以降	溝出土、頭蓋片のみ	

Tab.71 年齢区分 (Table.71 Division of age)

年齢区分		年齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については上井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書 (1996) を参照されたい。

所見

I 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区出土人骨

1. S030 人骨 (女性・壮年)

(1) 人骨の形質

A-4 調査区の溝 (S030) から 2012 年 11 月 21 日に検出された。人骨は頭蓋のみで、残存部分は Fig.138 に示す部分である。顔面骨は鼻骨と上顎骨のみで、顔面頭蓋を復元することはできないが、脳頭蓋は復元が可能であった。外後頭隆起の発達は悪いようである。乳様突起は破壊されており大きさは不明である。眉上弓の隆起はやや強く、前頭結節はよく発達している。また前頭鱗は垂直に立ち上がっており、額は狭い。三主縫合の観察ができた。これらは内外両板とも開離している。両側の外耳道の観察ができたが、左右とも外耳道骨腫は存在しない。上顎骨歯槽突起部が残存しているが、歯槽性突顎は認められない。

脳頭蓋の計測が一部できた。頭蓋最大長は (180) mm、頭蓋最大幅は (137) mm で、頭蓋長幅示数は (76.11) となり、頭型は中頭型 (mesokran) に属している。また、頭蓋の径はやや小さい。

上顎骨歯槽突起には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

⑧ 7 6 ⑤ ④ ③ ② ① | ① ② ③ ④ 5 6 7 8

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 /：不明 ▽：先天性欠損、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 1 度 (咬耗がエナメル質のみ) で、咬耗は弱い。また、歯の径はかなり小さい。

眉上弓の隆起はやや強いが、頭蓋の全体の径が小さく、前頭結節はよく発達し、前頭鱗も垂直に立ち上がっている。頭蓋には女性の特徴の方が多いので、性別は女性としておきたい。年齢は三主縫合の内外両板がまだ開離していることから壮年と思われる。

(2) 頭蓋に残る刀創

頭蓋には明らかな刀創が複数箇所認められる。観察したところ鋭利な刀で切られた跡は 7 箇所存在する。PL.102 にその傷跡を示した。7 箇所とも後頭部であるが、6 箇所は左側に集中している。①は頸を刎ねようとして刀を振り下ろしたが、刀が頸からそれて後頭部 (後頭骨) に入った際の刀創であろう。②も頸を狙ったようであるが、③～⑦は頸を狙ったとは考えがたい。とにかく後頭部をメッタ斬りしたようである。

このような刀創は鎌倉市の由比ヶ浜南遺跡や材木座遺跡から出土した人骨に多数認められているが、それ以外の地域からの明らかな刀創例はきわめて珍しい。筆者らは鎌倉市以外で頭蓋に刀創のある中世人骨をこれまで実見したことがない。

2. D-13 人骨 (女性・年齢不明)

検出されたのは左側上腕骨体のみである。

上腕骨体の径は小さいが、三角筋粗面の発達は良好で、骨体は扁平である。

計測値は、中央最大径が 22mm (左)、中央最小径は 15mm (左) で、骨体断面示数は 68.18 (左) となり、骨体はかなり扁平である。中央周は 62mm (左) で、骨体が著しく扁平であるため計測値が大きくなっているが、骨体は太いものではない。

性別は、上腕骨体と大腿骨体の径がやや小さいことから、女性と推定したが、年齢は不明である。

II 新馬借遺跡 A-1 調査区出土人骨

1. ST-01 人骨 (女性・壮年)

工事立会で取り上げられたのは頭蓋のみであるが、顔面骨は下顎骨以外は存在しない。頭蓋壁は薄い。外後頭隆起の発達は弱く、乳様突起も小さい。三主縫合の観察ができたが、いずれも内外両板は開離している。両側の外耳道には骨腫は認められない。下顎骨は左側部分が残っていた。その径は小さく、高径も低い。下顎枝はやや後傾している。

下顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/ / / / / ③ 2 ① | ① ② ③ / ⑤ 6 7 ⑧

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 /：不明 ▽：先天性欠損、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

第三大臼歯の歯槽は閉鎖状態であるが、まだ未萌出なのか、それとも脱落后の閉鎖状態を示しているのかは肉眼観察では判断できない。咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）で、咬耗は弱い。

性別は、下顎骨の径がかなり小さいことから、女性と推定した。年齢は、頭蓋壁が薄いことと三主縫合が開離し外れてしまうことから、未成人ではないかと疑ったが、エナメル質がかなり咬耗していることから未成人ではなく、壮年と考えられる。

2. S006 人骨 (性別不明・壮年)

I-48 グリッドの溝 (S006) から検出された頭蓋の破片のみである。頭蓋は左側頭頂骨のうしろ部分の破片に過ぎない。骨壁は厚い。矢状縫合の約半分とラムダ縫合のごく一部の観察が可能であるが、この部分はいずれも内外両板とも開離している。

性別は不明であるが、観察できた縫合の内外両板が開離していることから、年齢は壮年と思われる。

考 察

計測ができた女性上腕骨について、熊本県内の中世人と比較してみた。Tab.72 は上腕骨の比較表である。本例の中央周は 62mm で、Tab.72 では最大値を示しているが、二本木 13 次と大差ない。骨体断面示数は 68.18 で、二本木 13 次と同値で、花岡木崎よりは小さく、本例の骨体は著しく扁平である。骨体の大きさとその形態は、本遺跡と近い距離にある二本木遺跡群第 13 次調査区出土の上腕骨 (1 号人骨) にもっとも近い。

Tab.72 上腕骨計測値 (女性、左、mm) (Table.72 Comparison of measurements and indices of female right humeri)

		花岡木崎 中世人 熊本県 芦北町 (松下・他)	二本木 13 次 中世人 熊本県 熊本市 (松下)	花岡山・万日山 中世人 熊本県 熊本市 (松下・他)
		S-21	1 号人骨	D-13
5.	中央最大径	20 (左)	22 (左)	22 (左)
6.	中央最小径	14 (左)	15 (左)	15 (左)
7.	骨体最小周	51 (左)	55 (左)	— (左)
7 (a)	中央周	57 (左)	59 (左)	62 (左)
6/5	骨体断面示数	70.00 (左)	68.18 (左)	68.18 (左)
7/1	長厚示数	—	—	—

要 約

熊本市中央区横手3丁目に所在する花岡山・万日山遺跡群の発掘調査と、同市中央区新町1丁目に所在する新馬借遺跡の水路工事立会でそれぞれ中世人骨などが出土した。残存量はいずれも少なかったが、人類学的観察や計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 花岡山・万日山遺跡群からは2体分の中世人骨が出土した。溝跡からは頭蓋のみが、石垣の下からは少量の上腕骨が検出されたが、両者とも散乱状態であった。前者は女性骨で、後者も女性骨と思われる。
2. 新馬借遺跡では中世の埋葬遺構が検出されたが、取り上げられたのは女性頭蓋のみである。その他にこの遺跡からは近代以降の頭蓋片（性別不明）が検出されている。
3. 花岡山・万日山遺跡群出土の頭蓋（S030）は中頭型に属している。また、左側後頭部を中心に7箇所の刀創が認められた。
4. 花岡山・万日山遺跡群出土の女性上腕骨は三角筋粗面の発達が良好で、骨体は著しく扁平である。
5. 新馬借遺跡出土の女性頭蓋は前頭骨の保存状態が悪く、頭型は不明であるが、頭蓋の径はやや小さい。
6. 花岡山・万日山遺跡群出土の頭蓋には多数の刀創が認められた。この頭蓋の特徴は、①全体の径が小さく、②眉上弓の隆起がやや強く、③前頭結節が発達しており、④額が狭く、⑤前頭鱗は垂直に立ち上がっており、⑥頬骨も小さい、ことである。②は男性頭蓋を思わせるが、その他の特徴は、女性の特徴である。従って本頭蓋を女性頭蓋としたが、この頭蓋はけっして典型的な女性頭蓋ではない。額が狭く、前頭鱗が垂直に立ち上がる男性骨もないわけではないが、女性的特徴が多いので、女性頭蓋とした。

この多数の刀創が認められる頭蓋が溝から出土している。頭蓋以外の骨はみつかっていない。鎌倉の中世遺跡からは刀創など殺傷痕のある人骨が多数みつまっているが、これらはやや規模の大きな戦乱の際の犠牲者と思われる。刀創が複数存在する人骨もあるが、本例のように頭蓋にこれほど、多数の傷があるものは珍しい。

頭蓋が溝から出土したということはこの被葬者は埋葬されなかったということを意味している。殺傷された理由はわからないが、死体は放置され、やがて溝に捨てられたものと推測される。

謝辞

攷筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会文化課の皆様へ感謝致します。

《参考文献》

1. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart: 429-597.
2. 松下孝幸、1980: 熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺 I (熊本県文化財調査報告第 45 集): 145-159.
3. 松下孝幸、2001: 熊本県深田村灰塚遺跡出土の中世人骨。灰塚遺跡 (II) (熊本県文化財調査報告第 197 集): 239-245.
4. 松下孝幸、2004: 熊本県西合志町船入遺跡出土の中世人骨。船入遺跡 一般国道 3 号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の調査 (熊本県文化財発掘調査報告第 217 集): 91-97.
5. 松下孝幸、2007a: 熊本市二本木遺跡群第 13 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群 II (二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書): 381-393.
6. 松下孝幸、2007b: 熊本市二本木遺跡群第 26 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群 III (二本木遺跡群第 26 次調査区発掘調査報告書): 126-129.

7. 松下孝幸、2007c：熊本市二本木遺跡群第 27 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群Ⅳ（二本木遺跡群第 27 次調査区発掘調査報告書）：79-84.
8. 松下孝幸・他、2008a：熊本市二本木遺跡群第 28 次調査区出土の古代・中世以降人骨。二本木遺跡群Ⅴ〔二本木遺跡群第 28 次調査区（E～I・K・L・P 地点）発掘調査報告書〕〔熊本駅西土地区画整理事業にともなう発掘調査報告（2）〕：178-183.
9. 松下孝幸・他、2008b：熊本市神水遺跡群第 41 次調査区出土の中世人骨（歯）。神水遺跡Ⅹ（第 41 次調査区発掘調査報告書）（都市計画道路船場・神水線建設に伴う埋蔵文化財調査報告 9）：103-105.
10. 松下孝幸・他、2009：熊本市大江遺跡群第 111 次調査区出土の中世人骨。熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成 20 年度—：117-124.
11. 松下孝幸・他、2010：熊本市二本木遺跡群第 40 次調査区 F 地点出土の古代・中世人骨。二本木遺跡群Ⅺ（熊本駅西土地区画整理事業にともなう発掘調査報告 5）：197-201.
12. 松下孝幸・他、2012：熊本市二本木遺跡群（さつま荘跡）出土の古代・中世人骨。二本木遺跡群 6（春日地区第 9・10 次調査）（熊本県文化財調査報告第 274 集）：424-435.
13. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区出土の古代・中世人骨。（投稿中）
14. 松下孝幸・他、熊本県芦北町花岡木崎遺跡出土の中世人骨。（投稿中）
15. 松下孝幸・他、熊本県芦北町花岡古町遺跡出土の中世人骨。（投稿中）
16. 松下孝幸・他、熊本県大津町中島宝満鶴・岩坂葉柳遺跡出土の弥生・中世人骨。（投稿中）
17. 松下真実・他、2012a：熊本市二本木遺跡群第 40 次調査区 E 地点出土の中世人骨。二本木遺跡群 18（熊本市の文化財第 18 集）：91-96.
18. 松下真実・他、2012b：熊本市二本木遺跡群（市電敷地）出土の古代・中世人骨。二本木遺跡群 6（春日地区第 9・10 次調査）（熊本県文化財調査報告第 274 集）：411-423.
19. 松下真実・他、熊本市二本木遺跡群第 56 次調査区出土の中世人骨。（投稿中）
20. 松下真実・他、熊本市二本木遺跡群 32 次調査区 R 地点調査区出土の中世人骨。（投稿中）
21. 故松野茂・他、1970：熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌 44：999-1016.
22. 永井昌文、1965：荒尾市浄業寺中世人骨について。浄業寺と小代氏（荒尾市文化財報告第 1 集）：51-53.
23. 内藤芳篤、1973：人骨。尾窪 - 熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査（熊本県文化財調査報告 12）：62-78.
24. 内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾 5 号墳出土の人骨について。（熊本県文化財調査報告第 16 集）：317-322.
25. 内藤芳篤・他、1978：杉谷遺跡出土の中世人骨。大園山・杉谷遺跡（熊本県荒尾市文化財調査報告第 3 集）：116-122.

Tab.73 脳頭蓋 (mm) (Calvaria)

花岡山・万日山		新馬借	
5030	女性	5T-01	女性
1.	頭蓋最大長	(180)	—
8.	頭蓋最大幅	(137)	135
17.	バジオン・プレグマ高	—	—
8/1	頭蓋長幅示数	(76.11)	—
17/1	頭蓋長高示数	—	—
17/8	頭蓋幅高示数	—	—
1+8+17/3	頭蓋モズルス	—	—
5.	頭蓋底長	—	—
9.	最小前頭幅	98	—
10.	最大前頭幅	124	—
11.	両耳幅	—	—
12.	最大後頭幅	—	—
13.	乳突幅	—	112
7.	大後頭孔長	—	—
16.	大後頭孔幅	—	—
16/7	大後頭示数	—	—
23.	頭蓋水平周	—	—
24.	横弧長	—	—
25.	正中矢状弧長	—	—
26.	正中矢状前頭弧長	—	—
27.	正中矢状後頭弧長	—	—
28.	正中矢状前頭弦長	—	—
29.	正中矢状後頭弦長	—	—
30.	正中矢状頭頂弦長	—	—
31.	正中矢状後頭弦長	—	—
29/26	矢状前頭示数	—	—
30/27	矢状頭頂示数	—	—
31/28	矢状後頭示数	—	—

Tab.74 顔面頭蓋 (mm, 度) (Facial skeleton)

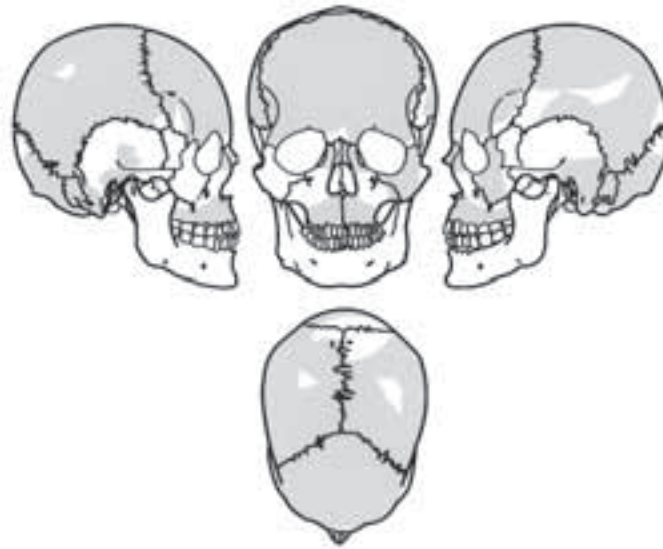
花岡山・万日山		新馬借	
5030	女性	5T-01	女性
40.	顔長	—	—
41.	側顔長	—	—
42.	下顔長	—	—
43.	上顔幅	—	—
45.	頬骨弓幅	—	—
46.	中顔幅	—	—
47.	顔高	—	—
48.	上顔高	—	—
47/45	顔示数 (K)	—	—
48/45	上顔示数 (K)	—	—
47/46	上顔示数 (V)	—	—
48/46	上顔示数 (V)	—	—
40+45+47/3	顔面モズルス	—	—
50.	前眼窩間幅	—	—
44.	両眼窩間幅	—	—
50/44	眼窩間示数	—	—
51.	眼窩幅 (右)	—	—
	(左)	—	—
52.	眼窩高 (右)	—	—
	(左)	—	—
52/51	眼窩示数 (右)	—	—
	(左)	—	—
54.	鼻幅	—	—
55.	鼻高	—	—
54/55	鼻示数	—	—
55(1).	梨状口高	—	—
56.	鼻骨長	—	—
57.	鼻骨最小幅	—	—
57(1).	鼻骨最大幅	—	—
60.	上顎歯槽長	—	—
61.	上顎歯槽幅	63	—
62.	口蓋長	—	—
63.	口蓋幅	40	—
64.	口蓋高	13	—
61/60	上顎歯槽示数	—	—
63/62	口蓋示数	—	—
64/63	口蓋高示数	—	—
72.	全側面角	32.50	—
73.	鼻側面角	—	—
74.	齒槽側面角	—	—

Tab.75 下顎骨 (mm, 度) (Mandibula)

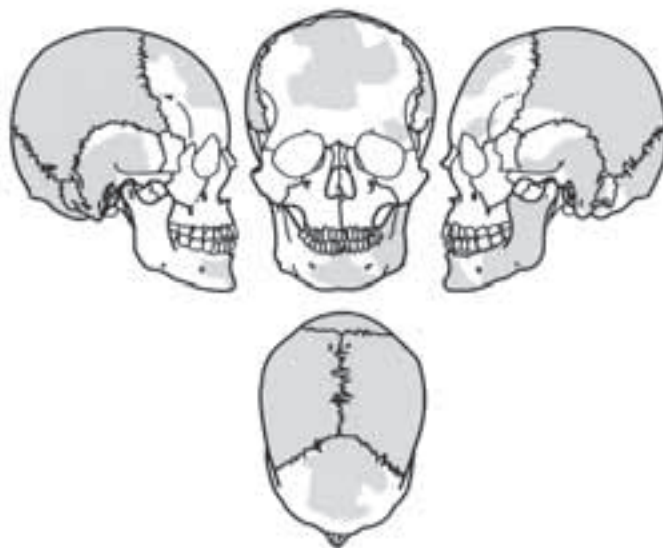
花岡山・万日山		新馬借	
D-13	女性	5T-01	女性
65	下顎関節突起幅	—	—
65(1).	下顎筋突起幅	—	—
66	下顎角幅	—	—
67	前下顎幅	—	—
68	下顎長	—	—
68(1).	下顎長	—	—
69	オトガイ高	30	—
69(1).	下顎体高 (右)	—	—
	(左)	—	—
69(2).	下顎体高 (右)	—	—
	(左)	—	—
70	枝高 (右)	24	—
	(左)	—	—
70(1).	前枝高 (右)	—	—
	(左)	—	—
70(2).	最小枝高 (右)	50	—
	(左)	—	—
70(3).	下顎切痕高 (右)	41	—
	(左)	—	—
71(1).	下顎切痕幅 (右)	—	—
	(左)	—	—
71	枝幅 (右)	—	—
	(左)	34	—
71a.	最小枝幅 (右)	—	—
	(左)	34	—
79	下顎枝角 (右)	—	—
	(左)	—	—
66/65	下顎幅示数	—	—
68/65	幅長示数	—	—
68(1)/65	幅長示数 (右)	—	—
69(2)/69	下顎高示数 (右)	—	—
	(左)	—	—
71/70	下顎枝示数 (右)	—	—
	(左)	—	—
71a/70(2)	下顎枝示数 (右)	—	—
	(左)	—	—
70(3)/71(1)	下顎切痕示数 (右)	—	—
	(左)	—	—

Tab.76 上腕骨 (mm) (Humerus)

花岡山・万日山		新馬借	
D-13	女性	5T-01	女性
1.	上腕骨最大長	—	—
2.	上腕骨全長	—	—
3.	上端幅	—	—
3(1).	横上径	—	—
4.	下端幅	—	—
5.	中央最大径	22	—
6.	中央最小径	15	—
7.	骨体最小周	—	—
7(a).	中央周	62	—
8.	頭周	—	—
9.	頭最大横径	—	—
10.	頭最大矢状径	—	—
11.	消車幅	—	—
12.	小頭幅	—	—
12(a).	消車幅および小頭幅	—	—
13.	消車深	—	—
14.	肘頭窩幅	—	—
15.	肘頭窩深	—	—
6/5	骨体断面示数	68.18	—
7/1	長厚示数	—	—

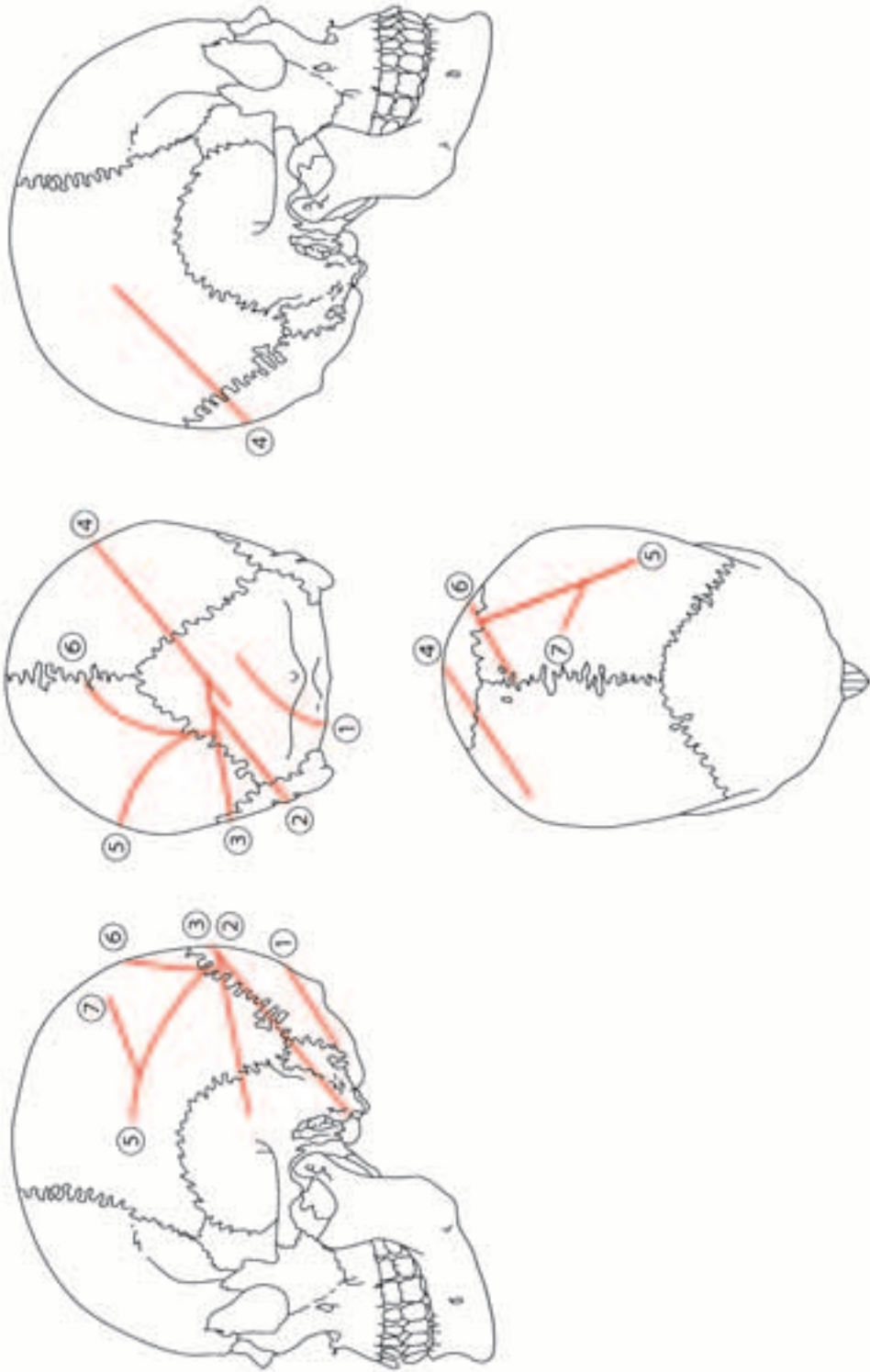


花岡山・万日山 A-4 調査区 S030 (女性・壮年)



新馬借遺跡工事立会 ST-01 (女性・壮年)

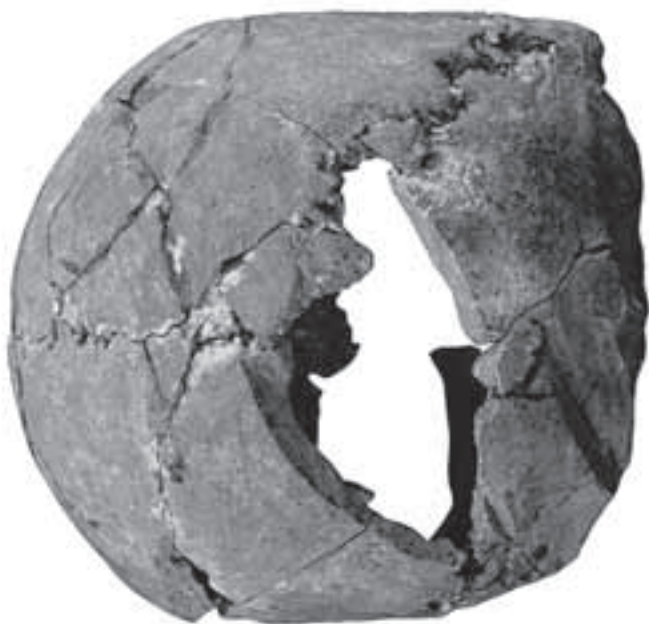
Fig.138 人骨の残存図 (アミかけ部分)
(Fig.138 Regions of preservation of the skeleton . Shaded areas are preserved.)



PL.102 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区 S030 (女性・壮年)
(The skeleton S030, from the Hanaokayama・Mannichiyama sites, young adult female)



頭蓋上面 (Superior view of the skull)



頭蓋後面 (Rear view of the skull)

PL.103 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区 S030 (女性・壮年)
(The skelton S030, from the Hanaokayama・Mannichiyama sites, young adult female)



刀創 (Skull injured by swords)

PL.104 花岡山・万日山遺跡群 A-4 調査区 S030 (女性・壮年)
(The skelton S030, from the Hanaokayama・Mannichiyama sites, young adult female)



上腕骨 (Humeri)

PL.105 花岡山・万日山遺跡群 D-13 グリッド (女性・年齢不明)
(The skelton D-13G, from the Hanaokayama・Mannichiyama sites, female unknown age)



頭蓋上面 (Superior view of the skull)



頭蓋側面 (Lateral view of the skull)



下顎骨 (The mandible)

PL.106 新馬借遺跡工事立会 (ST-01) (女性・壮年)
(The skelton ST-01, from the Shinbashaku site, young adult female)

第3節 花岡山・万日山遺跡群 (P-193) 出土の近世人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：熊本県、近世人骨、伏臥、女性

はじめに

熊本市中央区新町4丁目で、在来線高架工事に伴う橋脚部分のトレンチ調査中に人骨が出土した。遺跡名と地点名は花岡山・万日山遺跡群 P-193 北側トレンチである。調査は2013(平成25)年7月から8月にかけておこなわれ、人骨の調査は8月5日に実施した。この人骨は後述しているように近世末から明治初めの頃に所属すると推測され、保存状態は良好である。

近世人骨の出土数は地域によって偏りが大きく、関東地方は出土数が比較的多い地域である。また、福岡県北九州市では近世墓の発掘調査が積極的におこなわれ、近世人骨の出土量も増えており、当時の都市部に住む人々や、武家層の形質的特徴が明らかになってきている。近年では山口県の東部、中部、西部で比較的保存状態が良好な近世人骨の資料が揃いつつあり、山口県全体での近世人の形質的研究が可能になった(松下真実、2013)。

熊本県内での近世人骨については、熊本市の花岡山・万日山遺跡群(第1次調査智照院細川家墓所)(松下・他、2008)、国分寺跡19次調査区(松下・他、2010)、飛田遺跡群から出土している。その他、八代市川田京坪遺跡(松下・他、1980a)、興善寺町四郎丸遺跡(松下・他、1980b)、五木村頭地B遺跡(松下、1999a)、錦町蔵城遺跡(松下、1999b)、南関町鷹ノ原城跡(松下、2003)、相良村野原遺跡(松下、2006)、天草市(旧牛深市)の桑島遺跡(立志、1970、脇、1970)から近世人骨が出土している。野原遺跡からは近世人骨の他に、近代、現代人骨も出土しており、熊本市の大江遺跡群第68次調査区(松下、2002)、出水国府跡(松下・他、2008)、本庄遺跡1104調査地点(松下・他、2013)からは近代人骨が出土している。なお、本庄遺跡1104調査地点からは、300体を超える人骨が出土しており、近代の資料としてはきわめて貴重である。

本遺跡から出土した近世人骨は、トレンチ掘削時に下半身が破壊されているものの比較的保存状態は良好で、熊本県の近世人の形質的特徴を知るうえで貴重な資料となるものである。人類学的観察や計測をおこない、周辺地域の例と比較をおこない、興味ある所見を得たので、その結果を報告しておきたい。

資料

今回出土した1体の近世人骨(ST-01)は、トレンチ掘削で下肢骨が破壊されており、上半身のみ残存していた。本人骨は下記の所見のとおり熟年の女性骨である(Tab.77、78)。

本人骨は、明治24年の鉄道敷設以前の層から出土していることから、近世末から明治初め頃に所属すると推測される(生年は江戸時代末頃であろう)。各骨の残存状態はFig.140に示すとおりで、保存状態は比較的良好であった。

残存していたのは上半身の骨のみで、下半身はトレンチ掘削時に破壊された。掘りあげた土砂を丁寧に掘り起こしてみたが、骨片を数点見いだしたにすぎない。大部分は埋め戻した土の中に埋もれてしまった可能性が高い。残存していたのは、頭蓋、鎖骨(左)、上腕骨(左右)、橈骨(左右)、尺骨(左右)および手の

* Masami MATSUSHITA、** Takayuki MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

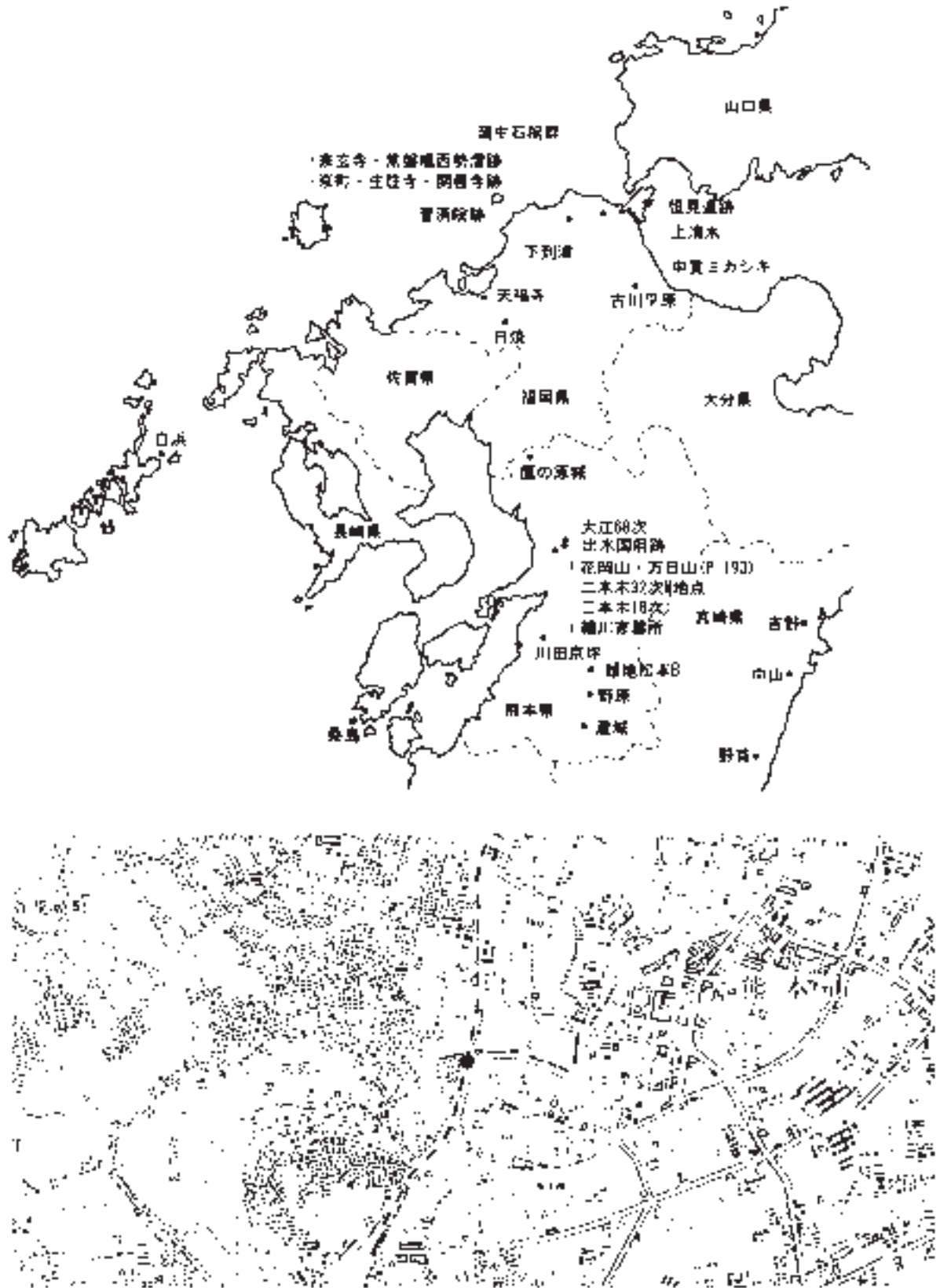


Fig.139 人骨出土位置図

骨（左）、肋骨、椎骨であるが、肋骨と椎骨の保存状態はかなり悪い。

計測方法は、Martin-Saller（1957）によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。なお、年齢区分に関しては Tab.79 の基準のとおりである。

Tab.77 資料数 (Table.77 Number of materials)

成人	合計
男性	女性
0	1

Tab.78 人骨一覧 (Table.78 List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	埋葬姿勢
ST-01	女性	熟年	伏臥

Tab.79 年齢区分 (Table.79 Division of age)

年齢区分	年	齢
未成人	乳児	1 歳 未満
	幼児	1 歳 ~ 5 歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6 歳 ~ 15 歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16 歳 ~ 20 歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21 歳 ~ 39 歳 (40 歳未満)
	熟年	40 歳 ~ 59 歳 (60 歳未満)
	老年	60 歳 以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次調査報告書 (1996) を参照されたい。

所 見

1. 埋葬姿勢

埋葬遺構は土壙墓である。墓坑の半分は下半身の骨とともにトレンチ掘削の際に破壊されているので、墓坑全景を観察することはできないが、残っている部分から推測して、墓坑の形態は長方形と考えられている。埋葬姿勢は、本来寛骨の姿勢によって決定すべきであるが、本例は下半身が工事中の掘削によって失われており、寛骨の状態を知ることはできなかった。しかし、上半身は伏臥状態であったことから、本例の埋葬姿勢を伏臥と推測した。頭位は北東。肘関節は、右側は強屈状態、左側も強く曲げられていた。顔は左側を下にして東に向けられていた。右側前腕部から玉（大：1、小：数点）が検出された。

2. 人骨の形質

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

ST-01 (女性・熟年)

トレンチ掘削により下肢骨が破壊されており、上肢骨のみ残存していた。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

ほぼ完全である。前頭結節の発達は良好で、外後頭隆起はやや隆起している。乳様突起は小さい。外耳道は両側とも観察できたが、左右とも骨種は認められない。縫合は、三種縫合の内板は癒合している。外板は三主縫合とも明瞭でまだ開離している。

計測値は、頭蓋最大長が187mm、頭蓋最大幅は133mm、バジオン・プレグマ高は133mmである。頭蓋長幅示数は71.12、頭蓋長高示数は71.12、頭蓋幅高示数は100.00となり、頭型はdolicho-,ortho-,akrocran(長、中、尖頭型)に属している。また、頭蓋水平周は516mm、横弧長は310mm、正中矢状弧長は380mmである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は、右側上顎骨が欠損している。眉上弓や鼻骨の隆起は弱く、鼻骨はやや狭い。

顔面頭蓋の計測値は、中顔幅は $51\text{mm} \times 2 = [102]$ mm、上顔高は(69) mmで、上顔示数は[67.65] (V) となり、顔面には広顔傾向が認められる。

眼窩幅は45mm(左)、眼窩高は33mm(左)で、眼窩示数は73.33(左)となり、左側は低眼窩(chamaekonch)に属している。鼻高は51mmである。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が14mm、鼻根横弧長は15mm、鼻根彎曲示数は93.33となり、鼻根部は扁平である。両眼窩幅は $51\text{mm} \times 2 = [102]$ mmで、眼窩間示数は[13.73]となり、顔の幅に対して、眼窩間幅は狭い。側面角は、鼻側面角が72度である。

下顎骨の保存状態は良好で、ほぼ完全である。下顎体は高い。

2. 歯

下顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/ / / / 4 3 2 1	1 2 3 ④ ⑤ ⑥ / /
⑧ 7 6 ⑤ ④ 3 2 ①	① ② 3 4 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

〔○：歯槽開存●：歯槽閉鎖 /：不明〕

(1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小白歯、5：第二小白歯、6：第一大白歯、7：第二大白歯、8：第三大白歯)
 咬耗度はBrocaの2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨と鎖骨、上腕骨、橈骨と尺骨が残存していた。

①上腕骨

両側上腕骨の骨体が残存していた。骨体は短くて細く、三角筋粗面の発達が悪いが、骨体は扁平で、前面は稜を形成しており、骨体の断面形は三角形である。

計測値は、中央周が53mm(右)、54mm(左)で、骨体は細い。中央最大径は19mm(左右)、中央最小径が14mm(左右)で、骨体断面示数は73.68(左右)となり、両側とも骨体は扁平である。

②橈骨

両側の骨体が残存していた。骨体は短くてかなり細い。骨間縁はやや突出している。

③尺骨

両側の骨体が残存していた。骨体は短くてかなり細い。右側骨間縁は左側よりもやや発達している。

4. 性別・年齢

性別は、前頭結節の発達は良好で、鼻上弓の発達は弱く、乳様突起は小さく、上肢骨が細いことから女性と推定した。年齢は、三主縫合の内板は癒合し、外板は三主縫合とも開離していることから熟年と推定した。

考 察

近世人女性の頭型は、福岡県北九州市などの都市部の甕棺から出土する武家層は短頭傾向が強く、一方、都市部以外から出土する近世人は短頭傾向が弱いことが明らかになっており、都市部と地方では形質（頭型や顔面のプロポーシオンなど）に違いがあることが知られている。山口県では近年、近世墓の発掘調査がおこなわれ、下関市大乘寺遺跡の甕棺から出土した女性人骨や山口市朝田墳墓群第Ⅵ地区、柳井市吉毛遺跡から出土した女性人骨は、北九州市出土の甕棺人骨よりも短頭傾向が強いことが明らかになっている（松下真実、2013）。熊本県の近世人骨の出土数はまだ少なく、本県内での地域差や階層差を明らかにできる状況ではない。今回出土した人骨は1体のみであるが、その形質的特徴を明らかにするために、県内および北九州市の近世人骨と比較してみた。

1. 脳頭蓋

Tab.80は脳頭蓋の比較表である。頭蓋長幅示数は71.12で、Tab.80では最も小さく、頭型は長頭型を示している。一方、頭蓋水平周は516mmで、Tab.80では最も大きく、頭蓋は大きい。脳頭蓋は中世的特徴を色濃く残している。

2. 顔面頭蓋

Tab.81は顔面頭蓋の比較表である。顔の幅を表す中顔幅は〔102〕mmで、Tab.81では最も大きく、顔の幅は広い。一方、顔の高径を表す上顔高は（69）mmで、桑島に次いで大きく、高径は高い。顔のプロポーシオンを表す上顔示数は〔67.65〕（V）で、大江68次よりは大きい、その他の資料よりも小さく、顔面には広顔傾向が認められ、北九州市の甕棺から出土する人骨とは異なった往路ポーシオンを示す。

Tab.82は鼻根部の比較表である。鼻根彎曲示数は93.33で、Tab.82では最も大きく、鼻根部は著しく扁平である。鼻根部も中世的特徴が強い。

3. 上腕骨

Tab.83は女性の右側上腕骨の比較表である。中央周は55mmで、熊本県内では細川家墓所ST-3と同値で、野原より大きい、その他の熊本県内近世人より小さい。北九州市近世人と比較すると、開善寺より大きい、その他の北九州市近世人より小さく、骨体は細い。骨体断面示数は73.68で、熊本県では蔵城、細川家墓所ST-3より大きい、その他の資料より小さく、また北九州市近世人よりも小さく、骨体は扁平である。

Tab.82 鼻根部 (女性、mm、度) (Table.82 Comparison of female nasal root measurements and indices)

	花岡山		桑島		蔵城		鷹ノ原		野・原		大江68次		細川家墓所		宗玄寺		京町		京町第3		開善寺				
	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世・現代	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	
50. 前眼窩幅	14	17.95	3	17.33	1	17	1	15.00	4	16.00	15	16.12	15	16.53	10	16.60	1	14	10	16.60	1	14	1	14	
50A 鼻根横弧長	15	—	3	20.67	1	21	2	17.00	4	19.00	18	19.20	13	18.85	10	19.50	1	17	10	19.50	1	17	1	17	
50/50A 鼻根彎曲示数	93.33	—	3	83.81	1	80.95	2	88.19	4	84.19	83.33	84.69	13	87.26	10	85.97	1	82.35	10	85.97	1	82.35	—	—	
57. 鼻骨鼻小幅	6	2	4	8.50	1	8	2	8.50	4	6.50	9	24	7.29	13	7.08	10	7.30	—	—	—	—	—	—	—	
44. 両眼窩幅	[102]	2	93.05	2	95.50	—	—	—	3	93.33	91	94.21	10	92.30	10	92.90	1	93	10	92.90	1	93	—	—	
50/44 眼窩示数	[13.73]	2	19.15	2	19.38	—	—	—	3	16.41	16.48	24	17.01	10	18.19	10	17.89	1	15.05	10	17.89	1	15.05	—	
a. 前頭突起上幅 (右)	18	—	2	9.00	1	9	2	9.50	4	9.00	8	9.23	14	9.07	11	9.45	1	13	11	9.45	1	13	—	—	
(左)	19	—	3	8.67	1	9	2	11.00	4	8.75	10	12.65	14	9.64	10	8.80	1	12	10	9.64	1	12	—	—	
b. 前頭突起水平傾斜角	112	—	2	92.00	—	—	1	90	2	99.50	78	88.48	7	93.14	10	92.80	1	114	10	92.80	1	114	—	—	
c. G-N投影距離	3	—	2	1.00	—	—	1	1	2	1.00	1	1.28	7	1.86	10	1.20	2	2.00	10	1.20	2	2.00	—	—	
d. 鼻根角	138	—	2	156.50	—	—	1	153	3	145.67	141	144.79	5	145.00	8	148.13	—	—	8	148.13	—	—	—	—	
e. G-R距離	36	—	2	34.00	—	—	1	31	3	30.33	30	35.08	5	32.40	8	33.38	—	—	5	32.40	8	33.38	—	—	
f. 垂線高	6	—	2	3.50	—	—	1	3	3	3.67	5	4.54	5	4.80	8	4.38	—	—	5	4.80	8	4.38	—	—	
f/e 鼻根陷凹示数	16.67	—	2	10.26	—	—	1	9.68	3	12.09	16.67	13	13.01	5	14.91	8	13.22	—	—	5	14.91	8	13.22	—	—
77. 鼻頰骨角	155	—	2	144.50	—	—	—	—	2	138.50	152	147.32	9	146.33	10	145.50	3	137.67	10	145.50	3	137.67	—	—	
Fa fmo間距離	90	—	2	95.00	—	—	—	—	2	91.00	92	—	9	91.67	10	92.50	3	90.67	10	92.50	3	90.67	—	—	
Fh 垂線高	10	—	2	15.00	—	—	—	—	2	14.00	11	—	9	12.89	10	13.60	3	14.00	10	13.60	3	14.00	—	—	
Fh/Fa 顔面扁平示数	11.11	—	2	15.79	—	—	—	—	2	15.37	11.96	22	13.98	9	14.06	10	14.72	—	—	9	14.06	10	14.72	—	—

花岡山 = 花岡山・万日山 (P-193)

Tab.83 上腕骨計測値 (女性、右、mm) (Table.83 Comparison of measurements and indices of female right humeri)

	花岡山		桑島		蔵城		野原		大江68次		細川家墓所		宗玄寺		京町		京町3		開善寺					
	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世・現代	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市	近世人	熊本市		
1. 上腕骨最大長	—	6	274.9	—	—	—	1	283	—	12	269.83	5	268.20	9	260.26	1	242	—	—	9	260.26	1	242	
2. 上腕骨全長	—	6	272.9	—	—	—	1	282	—	10	265.20	5	263.60	8	259.13	1	239	—	—	8	259.13	1	239	
5. 中央最大径	19	6	18.5	2	19.50	4	18.50	8	19.75	13	19.80	46	19.43	17	19.76	7	18.57	—	—	17	19.76	7	18.57	
6. 中央最小径	14	6	14.4	2	13.50	4	13.75	8	15.00	19	14.66	46	14.65	17	15.18	7	13.86	—	—	17	15.18	7	13.86	
7. 骨体最小周	53	6	57.7	5	53.00	1	54	7	55.57	51	53.62	37	53.62	16	54.50	7	50.43	—	—	16	54.50	7	50.43	
7 (a) 中央周	55	6	60.9	2	56.50	4	52.50	8	57.63	55	57.64	46	56.65	17	58.12	7	53.86	—	—	17	58.12	7	53.86	
6/5 骨体断面示数	73.68	6	78.27	3	69.56	4	74.41	8	76.04	68.42	44	74.27	6	75.71	17	77.09	7	74.81	—	—	17	77.09	7	74.81
7/1 長厚示数	—	6	21.00	—	—	—	1	21.55	—	9	20.20	5	19.87	9	20.34	1	19.01	—	—	9	19.87	1	19.01	

花岡山 = 花岡山・万日山 (P-193)

要 約

熊本市中央区新町4丁目にある花岡山・万日山遺跡群（P-193）から近世人骨が出土した。人骨の保存状態は比較的良好であったが、トレンチ掘削時に下半身が破壊されており、下肢骨は残存していなかった。本遺跡出土人骨の人類学的観察と計測をおこない、以下の結果を得た。

1. トレンチ溝より1体の人骨が出土した。埋葬姿勢は、上半身が伏臥状態であったことから、伏臥と思われる。本人骨は熟年の女性骨である。
2. 本人骨の所属時期は、出土状況から、近世末から明治初めの頃に所属すると推測されている。
3. 脳頭蓋は、頭蓋長幅示数は71.12で、頭型は長頭型に属している。
4. 顔面頭蓋は、中顔幅は〔102〕mm、上顔高は（69）mm、上顔示数は〔67.65〕（V）で、顔面には上広顔傾向が認められる。鼻骨彎曲示数は93.33で、鼻根部は著しく扁平である。
5. 上腕骨は、骨体中央周が53mm、骨体断面示数は73.68で、骨体は細く、骨体は扁平であるが、三角筋粗面の発達が悪い。骨体前面は稜を形成し、断面形は三角形で、特異な形態を呈している。
6. 本遺跡から出土した女性骨は、頭型が長頭型で、顔面には広顔傾向が認められ、鼻根部は著しく扁平であることなど、中世人的特徴を色濃く残していた。一方で、上腕骨は細いが、骨体は扁平で、前面には一稜が形成され、その断面形は三角形を呈しており、かなり特異な上腕骨である。上肢筋の使い方が通常とは違っていたのかもしれない。埋葬姿勢も伏臥という、通常ではあり得ない埋葬姿勢であり、出土した場所もお堀と河川とが合流する地点であることから、人骨の形質にも注目して観察などをおこなった。人骨の形態的特徴から、被葬者は武家層ではない可能性が強いが、上腕、骨体の形態が気になる。埋葬場所の立地と埋葬姿勢および人骨の形質との関連などについては、もう少し時間をかけて考察・検討したい。

謝辞

《擧筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会の皆様に感謝致します。》

《参考文献》

1. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart: 429-597.
2. 松下孝幸・他、1980a: 熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨。車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小筑遺跡・塩塚古墳（熊本県文化財調査報告46）付：1-17.
3. 松下孝幸・他、1980b: 熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨。興善寺I（熊本県文化財調査報告45）：61-68.
4. 松下孝幸、1999a: 熊本県五木村頭地松本B遺跡出土の近世人骨。頭地松本B遺跡（2）（熊本県文化財調査報告第173集）：83-97.
5. 松下孝幸、1999b: 熊本県球磨郡錦町蔵城遺跡出土の近世人骨。蔵城遺跡（熊本県文化財調査報告第172集）：96-123.
6. 松下孝幸、2002: 熊本市大江遺跡群第68次調査区出土の近代人骨。大江遺跡群IV - 大江遺跡群第68次調査区発掘調査報告書一：62-97.
7. 松下孝幸、2003: 熊本県南関町鷹ノ原城跡出土の近世人骨。鷹ノ原城跡・今古閑城跡（熊本県文化財調査報告第212集）：45-69.
8. 松下孝幸、2005: 熊本市二本木遺跡群第18次調査出土の古代・近世人骨。二本木遺跡群I - 第18次調査区発掘調査報告書一：41-46.

9. 松下孝幸、2006：熊本県相良村野原遺跡出土の近世・近代・現代人骨。野原遺跡Ⅱ（川辺川ダム建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告）（相良村文化財調査報告第5集）：112-159.
10. 松下孝幸・他、2008：熊本市花岡山・万日山遺跡群第1次調査智照院細川家墓所出土の人骨。智照院細川家墓所－花岡山・万日山遺跡群第1次調査区発掘調査報告書－：90-123.
11. 松下孝幸・他、2010：熊本市国分寺跡第19次調査区出土の人骨。国分寺跡Ⅰ（国分寺跡第19次調査区発掘調査報告書）：26-31.
12. 松下孝幸・他、2012：熊本市二本木遺跡群第49次調査区出土の古代・近世人骨。二本木遺跡群19－二本木遺跡群第49次調査区発掘調査報告書－（熊本市の文化財第19集）：77-84.
13. 松下孝幸・他、2013：熊本市本庄1104調査地点出土の近代人骨。熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅸ（熊本大学埋蔵文化財調査報告書第9集）：116-122.
14. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群第32次調査区M地点出土の近世人骨。（投稿中）
15. 松下真実・他、2008：熊本県熊本市出水国府跡出土の近代人骨。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第3号：1-17.
16. 松下真実、2013：山口県近世人の地域差。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第8号：13-36.
17. 松下真実・他、熊本市飛田遺跡群出土の近世人骨。（投稿中）
18. 立志悟朗、1970b：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究、第1大腿骨について。熊本医学会雑誌44：1092-1115.
19. 脇達也、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究。熊本医学会雑誌44：1031-1091.

Tab.84 脳頭蓋 (mm) (Calvaria)

花岡山・万日山 (P-193) ST-01 女性	
1.	頭蓋最大長 187
8.	頭蓋最大幅 133
17.	ハジオン・プレグマ高 133
8/1	頭蓋長幅示数 71.12
17/1	頭蓋長高示数 71.12
17/8	頭蓋幅高示数 100.00
1+8+17/3	頭蓋モズルス 151.00
5.	頭蓋底長 102
9.	最小前頭幅 89
10.	最大前頭幅 114
11.	両耳幅 120
12.	最大後頭幅 103
13.	乳突幅 93
7.	大後頭孔長 26
16.	大後頭孔幅 —
16/7	大後頭示数 —
23.	頭蓋水平周 516
24.	横弧長 310
25.	正中矢状弧長 380
26.	正中矢状前頭弧長 130
27.	正中矢状頭頂弧長 129
28.	正中矢状後頭弧長 121
29.	正中矢状前頭弦長 115
30.	正中矢状頭頂弦長 117
31.	正中矢状後頭弦長 101
29/26	矢状前頭示数 88.46
30/27	矢状頭頂示数 90.70
31/28	矢状後頭示数 82.79

Tab.85 顔面頭蓋 (mm, 度) (Facial skeleton)

花岡山・万日山 (P-193) ST-01 女性	
40.	額長 —
41.	側頭長 77
42.	下顔長 —
43.	上顔幅 98
45.	頬骨弓幅 (102)
46.	中顔幅 —
47.	顔高 (69)
48.	上顔高 —
47/45	顔示数 (K) —
48/45	上顔示数 (K) —
47/46	顔示数 (V) —
40+45+47/3	顔面モズルス (67.65)
50.	前眼窩間幅 14
44.	同眼窩幅 (102)
50/44	眼窩間示数 (13.73)
51.	眼窩幅 (左) 45
52.	眼窩高 (右) —
52/51	眼窩示数 (左) 33
54.	鼻幅 —
55.	鼻高 51
54/55	鼻示数 —
55 (1)	梨状口高 30
56.	鼻骨長 25
57 (1)	鼻骨最小幅 —
60.	鼻骨最大幅 —
61.	上顎齒槽長 —
62.	口蓋長 —
63.	口蓋幅 —
64.	口蓋高 —
61/60	上顎齒槽示数 —
63/62	口蓋示数 —
64/63	口蓋高示数 —
72.	全側面角 —
73.	鼻側面角 72
74.	齒槽側面角 —

Tab.86 鼻根部 (mm, 度) (Nasal root)

花岡山・万日山 (P-193) ST-01 女性	
50.	前眼窩間幅 14
50A.	鼻根橋弧長 15
50/50A	鼻根彎曲示数 93.33
57.	鼻骨最小幅 6
44.	同眼窩幅 (102)
50/44	眼窩間示数 (13.73)
a.	前頭突起上幅 (左) 18
b.	前頭突起水平傾斜角 (右) 19
c.	G-N 投影距離 112
d.	鼻根角 3
e.	G-R 距離 138
f.	垂線高 36
f/e	鼻根陷凹示数 16.67
77.	鼻根骨角 155
Fa	fmo 間距離 90
Fh	垂線高 10
Fh/Fa	顔面扁平示数 11.11

Tab.87 下顎骨 (mm, 度) (Mandibula)

花岡山・万日山 (P-193) ST-01 女性	
65	下顎關節突起幅 —
65 (1)	下顎筋突起幅 91
66	下顎角幅 94
67	前下顎幅 45
68	下顎長 66
68 (1)	下顎長 102
69	オトガイ高 —
69 (1)	下顎体高 (右) (23)
69 (2)	下顎体高 (左) —
70	下顎体高 (右) 24
70 (1)	下顎体高 (左) —
70 (2)	枝高 (右) 62
70 (3)	枝高 (左) 58
70 (1)	前枝高 (右) 58
70 (2)	前枝高 (左) 55
70 (3)	最小枝高 (右) 48
70 (4)	最小枝高 (左) 47
71 (1)	下顎切痕高 (右) 15
71 (2)	下顎切痕高 (左) 14
71 (3)	下顎切痕幅 (右) 34
71 (4)	下顎切痕幅 (左) 35
71	枝幅 (右) 33
71a.	枝幅 (左) 34
71a.	最小枝幅 (右) 33
71a.	最小枝幅 (左) 34
79	下顎枝角 (右) 123
79	下顎枝角 (左) 125
66/65	下顎幅示数 —
68/65	幅長示数 —
68 (1) /65	幅長示数 (右) —
69 (2) /69	下顎高示数 (右) —
71/70	下顎枝示数 (右) (左) —
71a/70 (2)	下顎枝示数 (右) (左) 53.23
70 (3)/71 (1)	下顎切痕示数 (右) (左) 58.62
70 (3)/71 (1)	下顎切痕示数 (右) (左) 68.75
70 (3)/71 (1)	下顎切痕示数 (右) (左) 70.83
70 (3)/71 (1)	下顎切痕示数 (右) (左) 44.12
70 (3)/71 (1)	下顎切痕示数 (右) (左) 41.18

Tab.88 上腕骨 (mm) (Humerus)

		花岡山・万日山 (P-193) ST-01 女性
1.	上腕骨最大長 (右) (左)	—
2.	上腕骨全長 (右) (左)	—
3.	上端幅 (右) (左)	—
3 (1)	横上径 (右) (左)	—
4.	下端幅 (右) (左)	—
5.	中央最大径 (右) (左)	19
6.	中央最小径 (右) (左)	14
7.	骨体最小周 (右) (左)	53
7 (a)	中央周 (右) (左)	55
8.	頭周 (右) (左)	54
9.	頭最大横径 (右) (左)	—
10.	頭最大矢状径 (右) (左)	—
11.	滑車幅 (右) (左)	—
12.	小頭幅 (右) (左)	—
12 (a)	滑車幅および小頭幅 (右) (左)	—
13.	滑車深 (右) (左)	—
14.	肘頭窩幅 (右) (左)	—
15.	肘頭窩深 (右) (左)	—
6/5	骨体断面示数 (右) (左)	73.68
7/1	長厚示数 (右) (左)	73.68

Tab.89 橈骨 (mm) (Radius)

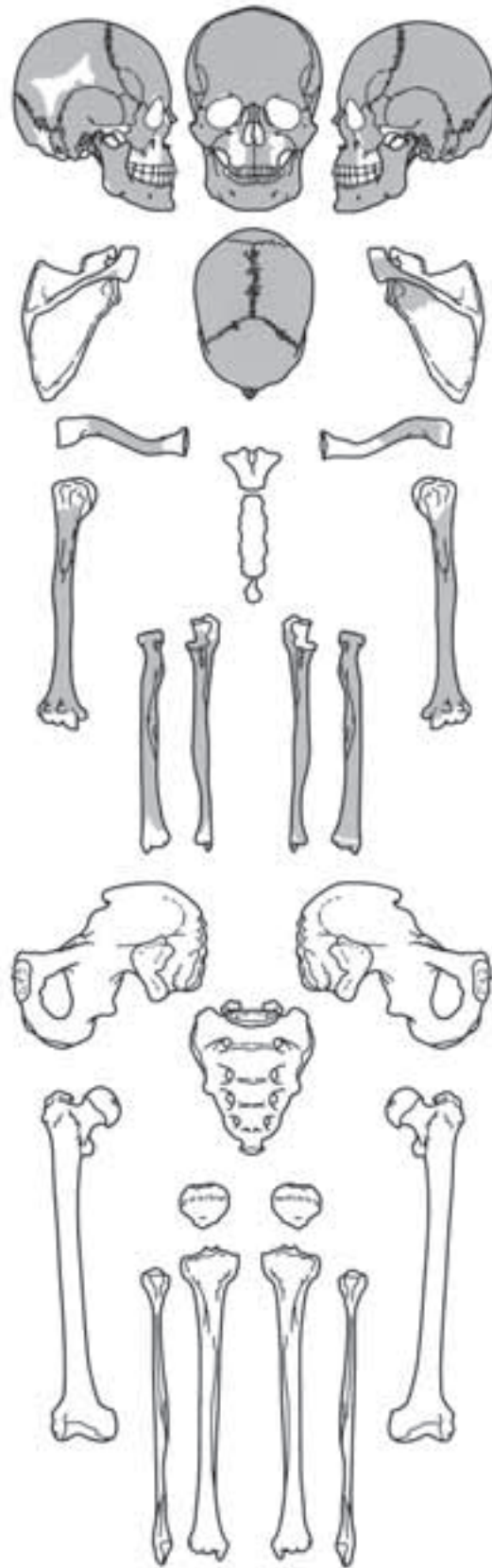
		花岡山・万日山 (P-193) ST-01 女性
1.	最大長 (右) (左)	—
1b.	平行長 (右) (左)	—
2.	機能長 (右) (左)	—
3.	最小周 (右) (左)	33
4.	骨体横径 (右) (左)	32
4a.	骨体中央横径 (右) (左)	14
4 (1)	小頭横径 (右) (左)	14
4 (2)	頸横径 (右) (左)	13
5.	骨体矢状径 (右) (左)	10
5a.	骨体中央矢状径 (右) (左)	10
5 (1)	小頭矢状径 (右) (左)	10
5 (2)	頸矢状径 (右) (左)	13
5 (3)	小頭周 (右) (左)	12
5 (4)	頸周 (右) (左)	—
5 (5)	骨体中央周 (右) (左)	39
5 (6)	骨下端幅 (右) (左)	38
3/2	長厚示数 (右) (左)	39
5/4	骨体断面示数 (右) (左)	37
5a/4a	中央断面示数 (右) (左)	—
		71.43
		71.43
		76.92

Tab.90 尺骨 (mm) (Ulna)

		花岡山・万日山 (P-193) ST-01 女性
1.	最大長 (右) (左)	—
2.	機能長 (右) (左)	—
2 (1)	肘頭尺骨頭長 (右) (左)	—
3.	最小周 (右) (左)	31
6.	肘頭幅 (右) (左)	30
6 (1)	上幅 (右) (左)	—
7.	肘頭深 (右) (左)	—
8.	肘頭高 (右) (左)	—
11.	尺骨矢状径 (右) (左)	10
12.	尺骨横径 (右) (左)	10
S	中央最小径 (右) (左)	13
L	中央最大径 (右) (左)	10
C	中央周 (右) (左)	14
3/2	長厚示数 (右) (左)	41
11/12	骨体断面示数 (右) (左)	39
S/L	中央断面示数 (右) (左)	—
		71.43
		76.92
		71.43
		76.92

Tab.91 形態小変異の出現頻度 (Non-metoric crania variants)

項 目	花岡山・万日山 (P-193) ST-01 女性	
	右	左
1. Medial palatine canal	-	-
2. Pterygospinous foramen	/	/
3. Hypoglossal canal bridging	/	/
4. Clinoid bridging	/	/
5. Condylar canal absent	/	/
6. Tympanic dehiscence; Foramen of Huschke (>1mm)	-	-
7. Jugular foramen bridging	/	-
8. Precondylar tubercle	/	-
9. Supra-orbital foramen (incl. frontal foramen)	/	-
10. Accessory infraorbital foramen	+	+
11. Zygofacial foramen absent	/	/
12. Aural exostosis	-	-
13. Metopism	-	-
14. Os incae	-	-
15. Ossicle at the lambda	-	-
16. Parietal notch bone	-	-
17. Transverse zygomatic suture (>5mm)	/	-
18. Asterionic ossicle	-	+
19. Occipitomastoid ossicle	-	-
20. Epipteric ossicle	-	-
21. Frontotemporal articulation	-	-
22. Bisternionic suture (>10mm)	/	-
23. Mylohyoid bridging	-	-
24. Accessory mental foramen	-	-
25. Mandibular torus	-	-
26. 滑車上孔 (上腕骨)	/	/



花岡山・万日山遺跡群 A-6 調査区 P-193 ST-01 (女性・熟年)

Fig.140 人骨の残存図
(Fig.140 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



頭蓋上面（Superior view of the skull）



頭蓋正面（Frontal view of the skull）



頭蓋側面（Lateral view of the skull）

PL.107 花岡山・万日山遺跡群 A-6 調査区 P-193 ST-01（女性・熟年）
（The skeleton ST-01, from the Hanaokayama・Mannichiyama sites A-6 area P-193, mature female）



上肢骨 (Bones of the limb)

PL.108 花岡山・万日山遺跡群 A-6 調査区 P-193 ST-01 (女性・熟年)
(The skeleton ST-01, from the Hanaokayama・Mannichiyama sites A-6 area P-193, mature female)

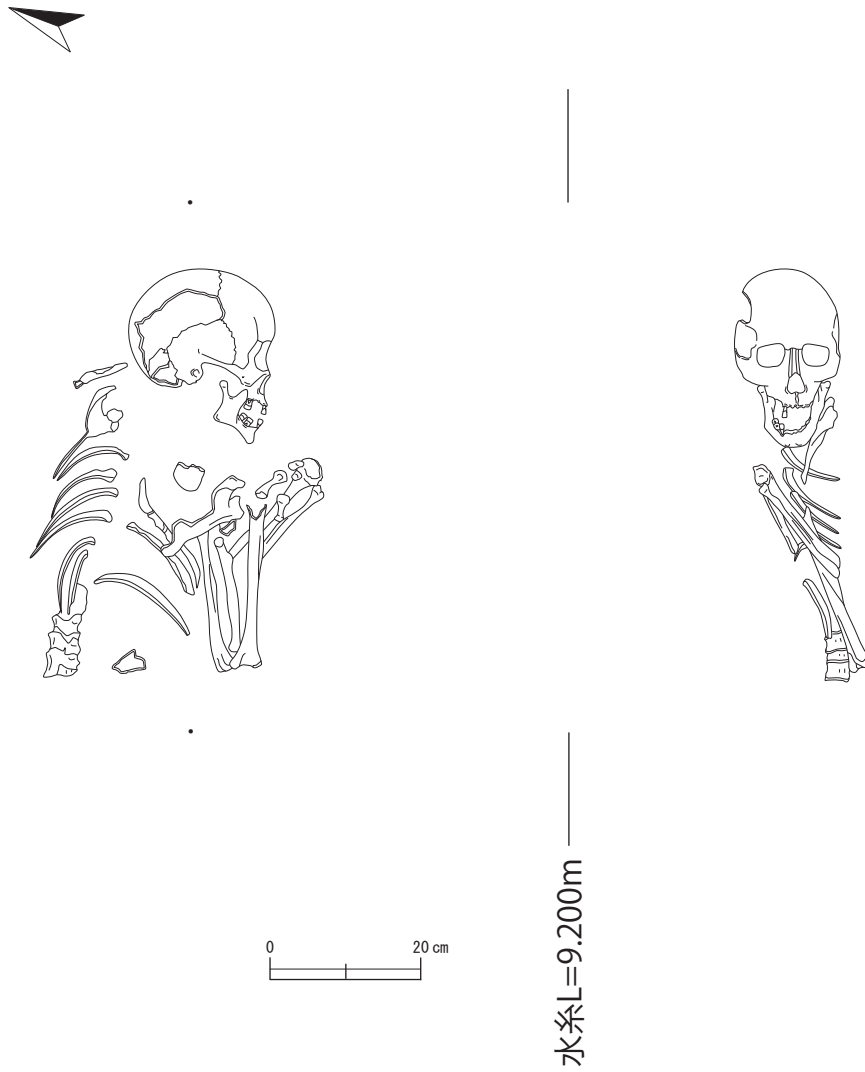


Fig.141 花岡山・万日山遺跡群 A-6 調査区 P-193 ST-01（女性・熟年）出土状況実測図
(The skeleton ST-01, from the Hanaokayama・Mannichiyama sites A-6 area P-193, mature female)

第 5 章
各 論

第1節 熊本城関連遺跡

甲元 眞之

はじめに

高麗門は親柱の内側に控柱を作り、扉を納めるために切妻の屋根を付した門の構造の一種で、関ヶ原の戦い前後に城の構造物として建設が始まったとされる（三浦 1999）。熊本県立図書館蔵の寛永6から8年にかけての頃の作品『熊本屋舗割下絵図』（PL.109）によると、切妻の屋根の下に石垣が表現されていて「かうらい門」という書き込みがみられる（平井・北野 1993）。この他に、この地図には13件の櫓門と冠木門が描かれていて、門の構造形式が区別されて記されていることが知られる。高麗門自体の構造とこの絵図に描かれた建物に関する整合的解釈からもたらされるのは、大阪城大手門や名古屋城本丸東二の門の高麗門形式のような、控柱の両側面に石垣を積んだ構造のものとなろう。

17世紀後半以降に描かれた熊本城の城下町の絵図では高麗門は「L」字形建物であるとされ（新熊本市史編纂委員会 1993、熊本大学文学部附属永青文庫研究センター 2011）、18世紀後半期に製作された『新町絵図』には、L字に連なる櫓門が大きく描かれていることからすると（平井・北野 1993）、細川忠利が死去して妙解寺に葬られ、そこが細川家の菩提寺となって「参道」（仮称御成道）が整備された時に併せ、高麗門形式から櫓門形式の門構造に変更されたと考えるのが最も可能性が高いと言えよう。「菩提寺」と「参道」そして「城下に入出入する門」は密接に関連した文化財とすることができる。

しかし妙解寺以外の現状はすべて平坦地となって、その面影は現時点では確認できない。熊本県文化課の調査によっても、西南戦争の折の焼土層下部には建物の基礎が発見されただけで、西南戦争後この一帯はすっかり変貌を遂げたことを物語っている（Fig.142）。ところが、熊本の城下町を区画する土塁の位置は濠に隣接することから、土塁の位置関係は現状でもある程度類推することが可能である。それは高麗門踏切すぐ脇の新町通りが微かに濠に向かって傾斜することを勘案することでなされる。前述した『熊本屋舗割下絵図』を初めとして、細川時代に製作された城下町の絵図にも土塁は記録されている。そこでここでは濠と濠の内側に構築された土塁や参道を検討対象として、惣構としての熊本城を考える必要を見ていきたい。また発掘により明らかにされた砂の堆積層を、西南戦争に係わるものとの解釈の基に、憶測を述べることにする。

土塁

武士が生活する城郭ばかりではなく、住民が居住する城下町をも土塁・濠で囲んで一体化する惣構の施設の始まりは、戦国時代後期にまで遡上する。加藤時代の熊本は、城下の大部分は土塁・濠と石垣により外部と区画され、大分県中津城のように土塁・濠で全体を囲うものではない。この点では細川時代も基本的に変わることはない。近世に造られた土塁は、通称「御土居」もしくは「御囲い山」、またはただ単に「おやま」、「やま」と称されている。肥後古歌に「せんばやま」と詠われているのは良く知られている。「御土居」として有名なのは、秀吉が平安京を囲ったそれであり、極めて大規模なものであった。

熊本城の城下町は土塁・濠と石垣で区画されていることは数多くの絵図に記されている。寛文



PL.109 寛永年間製作 熊本屋舗割下絵図 (平井・北野 1993)

12年から延宝3年にかけて製作されたと推定される『平山城肥後国熊本城廻絵図』には船場橋（洗馬橋）付近の書き入れとして「土手高一間半長三町貳拾六間」とある。これは船場橋から西廻りに藤崎宮の下にある侍屋敷まで続くもので、崖によりいったん途切れた北側には「高貳間長拾壹間」と短い土塁があり、再び途切れて濠と石垣が熊本城北方の空堀まで続く。その空堀をへて坪井川沿いの右岸から土塁が始まり、その続きが厩橋まで延びて、厩橋から船場橋までは石垣が構築されている。推定延宝2年以前の作である『肥後国熊本城廻之絵図』でも土塁の廻る範囲は変わらないし、この状況は各種絵図に示される限りは幕末までは継承されている。

肥後古歌の「あんたがたどこさ」に歌われた「せんばやまにはたぬきがおってさ」は船場橋が城下への出入り口にあたり、ここに土塁が築かれていたことを物語る。またこのことは、江戸時代後期には土塁上には塀などの構築物が無かったことを示唆している。実際永青文庫所蔵の地図の土塁の上には樹木が茂り、薄が伸びている状況が描かれているのを通例とする（熊本大学文学部附属永青文庫研究センター 2011）。船場橋が架かる濠の上手は江戸時代には船溜まりがあり、ここが城内に補給する物資の集積場であった。賑わい豊かな、人の出入りの多い場所に「たぬき」が出没する様をおかしく詠ったものであろう。

現在新町の通りが高麗門のかつての所在地と接するあたりは、やや道路の高まりが窺える（PL.110、PL.111）。この微かな高まりは10mほどで、写真でみる郵便ポストあたりから急速に降って濠に落ち込んでいる。『平山城肥後国熊本城廻絵図』によると段山口では濠はやや広がって幅拾間と記されているので、この付近では幅が20m弱に達していたことが知られるが、高麗門付近ではその広さが各種の絵図では段山口外濠の1/2ほどに表現されていて、これが事実だとすると濠の幅は10m余りとなり、参道の肩からの距離とほぼ見合う数字が導き出せる。すると濠の内側に作られた土塁の始まりも、この順徳寺前をほぼ南北に走る小さな通りから新町通りの東側にかけてが、土塁の基底部分が存在した地点と想定できる。

江戸時代細川忠興により大規模な構築がなされた中津城は、城下町の外周を土塁が巡り、土塁の外側は濠で区画されていたが（PL.112、PL.113）、その惣構を構成する土塁（おかこい山）の一部と外の世界に通じる門址を今日なお実見することができる（PL.127）。中津市教育委員会の調査によると、土塁の西隅にあたる自性寺付近では、土塁の高さは内側で4.1m、外側で5.3mに達し、基底部分の幅16m、頂の幅4.8mを測る（中津市教育委員会 1990、2006）。熊本城下町外側の土塁の高さが1間半（3m弱）であるので、中津城の高さの約2/3ほどにあたることとなる。それを基準として、土塁の勾配が同じであったとして熊本の土塁にあてはめると、基底部分の幅はおよそ10mほどになり、現状の微かな道路の盛り上がりに近い数値となる。高麗門にしる、城下町を外周と画する土塁にしる、慶長の役から帰国して城下町の防御体制を急ぎ構築したことが想定され、中津城のような高さにまでは築造できなかったのであろう。慶長4年当時九州で徳川方についた勢力は加藤、細川、黒田のみであり、周囲を石田勢力に囲われそれに対抗するために、城下の門も土塁も慶長4年頃には急拵らえで構築されていたことが考えられる。慶長4年銘の滴水瓦は天守にも葺かれていたことを考慮すると、熊本県文化課による高麗門跡の発掘調査で出土した慶長4年銘の滴水瓦の出土した意味は極めて大きいと言える（稲葉 2013）。即ち、慶長4年頃には、熊本城郭だけでなく、城下町一帯の重要箇所も整備されていたことを知りうるからである。



PL.110 新町通り



PL.111 新町通り



PL.113 中津城（寛文3年以前）（個人蔵）

PL.112 中津城（幕末）（中津市歴史民族資料館蔵）
（PL.112 及び PL.113 は、中津市教育委員会 2011 より）

参道跡

高麗門を出て妙解寺へ参詣する道は、細川忠利が妙解寺に葬られ、後に妙解寺が細川藩主の菩提寺に格付けされたときに造成されたことは言うまでもない。加藤忠広時代を表したと想定されている『加藤氏代熊本ノ図』には濠と土塁の外側は描かれていないが(PL.114)、加藤時代(寛永6から8年)に作成された絵図では(PL.115)、高麗門を出て門幅と同じ広さの道が、濠沿いを南下して右折して安国寺(弘眞寺)の門に至ることが表現されている。またその途中で禅定寺と慶長7年に清正が母の菩提のために設立した妙永寺への参道がそれぞれ伸びているが、祇園山(北岡)は描かれるも妙解寺は見られない。このことから細川忠利が死亡する以前には、祇園山界限までは参道は開通していなかったことが分かる。すなわち忠利時代の参道は加藤時代のままであったことが分かる。

寛文12年から延宝3年の間にできた『平山城肥後国熊本城廻絵図』では(PL.116)安国寺の位置が少し前者とはずれているが、安国寺参道入り口から1町ばかり南に道が伸びて坪井川に接する地点で、左折して川沿いに少し道が続いているように変化している。祇園山の麓には御霊屋と寺の書き入れがあるが寺名は特定されていない。妙解寺が建立されたのは寛永19年であるので、それ以降の作品と推定される。延宝2年以前の作とされる『肥後国熊本城廻之絵図』(PL.117)では参道は描かれていない。妙解寺への参道が完成した姿を見せるのは文化2年作の『熊本之図』(PL.118)で、下馬天神を過ぎ「妙解寺役人」との書き入れがある地点から南西方向に道が伸び、妙解寺の山門に向かって西に折れた道が描かれている。妙立寺が創建された寛文3年以降、文政2年以前に描かれた『熊本城下絵図』(PL.119)では、高麗門から南下する濠沿いの道が妙解寺山門と直角に折れて繋がる様に改編された様子が表されている。ところが天保14年から文久2年にかけての『熊本惣絵図』(PL.120)では、高麗門からやや斜めに濠を渡り(これは道幅を高麗門の石垣の幅に拡大したことを示すものであろう)、濠沿いに南下するも、西側の濠と南側の濠が接するところからやや南の地点から南西方向に道が折れ、妙解寺の山門の前、坪井川に架かる橋に結ばれるように描かれている。PL.119とPL.120では描かれた時期が逆転している。これは『熊本惣絵図』は模写されたことを示すのであろうか。安政4年以降に描かれたとされる『熊本府の絵図』(PL.121)では高麗門から斜めに濠を横切る点では『熊本惣絵図』と同様であるが、妙解寺やそこに至る道は描かれていない。

一方明暦2年から寛文末年にかけての作である『高麗門・塩屋町之絵図』(PL.122)では「L」字形に造られた高麗門から濠に沿って妙解寺の山門に直角に結ばれる道があり、元禄11年から元禄14年の『高麗門・塩屋町絵図』(PL.123)でも同様に参道が描かれている。ところが宝暦5年から宝暦11年に製作されたと推定される『高麗門・塩屋町絵図』(PL.124)では、高麗門前の道が拡大して、高麗門の櫓の石垣の幅まで及び、道の南端は西側の濠と南側の濠の接する地点からやや南寄りの地点で、西南方向に道が反れ、妙解寺の山門の少し手前で妙解寺の山門に直線で繋がっている。南西に折れ曲がる地点では冠木門とも想定される門柱が道の両脇に建ち、そこからは道幅を減じている。文化8年から文政7年にかけての作品と想定される『高麗門・塩屋町之絵図』(PL.125)でもこれと殆ど変わりなく参道が表現されている。ところが安政4年作の『熊本所分絵図』では高麗門の門幅と同じ道幅となって、やや斜めに濠を越えるように記されている。安政年間以降の絵図とされる『熊本府の絵図』もこれと同様に表現されている。



PL.114 加藤氏代熊本ノ図 (個人蔵)



PL.115 熊本屋舗割下絵図 (熊本県立図書館蔵)



PL.116 平山城肥後国熊本城廻絵図 (熊本県立図書館蔵)



PL.117 肥後国熊本城廻之絵図 (熊本県立図書館蔵)



PL.118 熊本之図 (熊本博物館蔵)



PL.119 熊本城下絵図 (熊本城顕彰会蔵)



PL.120 熊本惣絵図 (熊本県立図書館蔵)



PL.121 熊本府の絵図 (熊本県立図書館蔵)



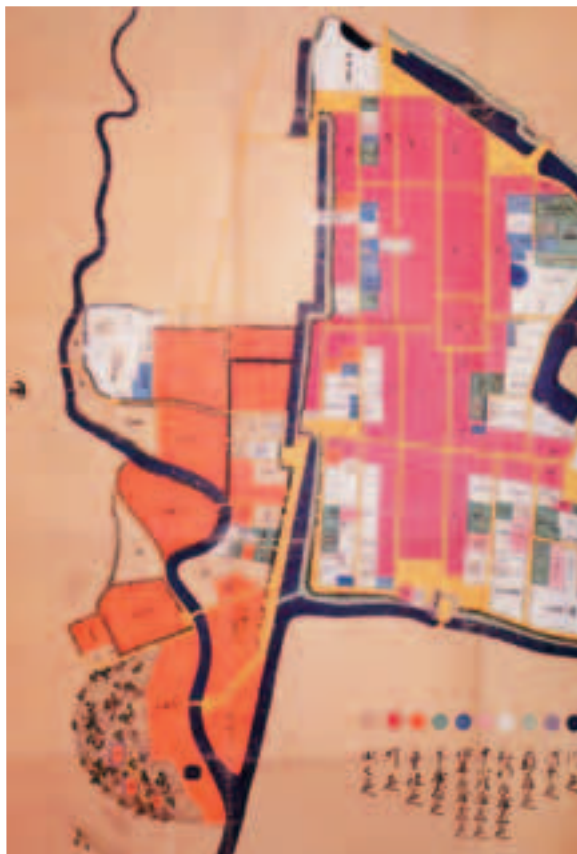
PL.122 高麗門 塩屋町之絵図 (熊本県立図書館蔵)



PL.123 高麗門 塩屋町絵図 (熊本県立図書館蔵)



PL.124 高麗門 塩屋町絵図 (熊本県立図書館蔵)



PL.125 高麗門 塩屋町之絵図 (熊本県立図書館蔵)

以上のように絵図の制作年代を考慮して見てくると、元禄年間に作成された絵図と文化年間から宝暦年間に描かれた絵図、安政年間以降にできた絵図では参道が異なっていたことが分かる。さらに寛永年間に作成された『熊本屋舗割下絵図』では、門幅と同じ道幅がそのまま続いて「馬揃え」となり、参道は濠沿いに小さく描かれているが、寛文から延宝年間にかけて作成された『平山城肥後国熊本城廻絵図』では高麗門から濠を渡った南に「馬揃え」があったとされる。文政2年の『熊本城下絵図』には「馬揃え」は描かれていないが、その前後の時期に作られた絵図には「馬揃え」が表現されていることから、描き間違いと思われる。

加藤から忠利時期には安国寺（弘眞寺）まで参道があり、妙解寺が細川家の菩提寺となった時期には濠沿いの参道が南に延長されて妙解寺の山門と直角に折れて続いていた。ところが宝暦年間以降に描かれた絵図では城下町を区画する西端と南端の濠が接する辺りからやや南下した地点で、南西方向に道が折れ、妙解寺山門の少し前で、まっすぐに道が折れていたことが、絵図の分析から窺うことができる。道幅のことを念頭に置くとさらに参道の修繕が数えられるが、忠尚期以降には基本的には3時期にわたる変遷が想定できる。

水攻めの証跡

攻城の手段としての水攻めの手法は、中国では孫子が行った紀南城をはじめとする「楚の三都」水攻めや、その50年後、春秋の終焉をもたらした「晋の陽城」での事例があり、日本でも秀吉による1582年の「備中高松城」の例が有名である。熊本県文化課によるこのたびの調査において特筆すべき調査成果の中に、参道の上面に砂の堆積がみられることの指摘がある。その堆積は厚さ1cmにも満たないが、やや粘質を帯びて均質であり、緩やかに積もった状況が読み取れ、急激に襲う洪水により形成されたものとは異なった堆積の仕方を示す。西南戦争時薩摩軍が熊本城下を水攻めにしたことは一般には余り知られていない。明治20年刊行の『征西戦記稿』には3月19日の記録として「賊其守備を厳にせんが為、花岡山下井芹川坪井川の合流を堰す。段山及び野砲営全面の田圃皆浸す所と為り、淼漫一大湖水の如し、而して坪井川の水は適さに寺原の田圃に注ぎ、返って我が守線を利せり」とある（参謀本部1887）。

薩摩軍関係者の記録としては、佐々友房『戦袍日記』の情報源の一つとなった中島典五の「彪皮一班録」が最も早い（中島1996）。それには「石塘を堰き留め壺井井芹両川の水を引き城の西方に灌げば、城西の守兵は減ずとも可ならんか。（中略）不日成功、満水してにわかに一の湖水をなす」とある。『西南記伝』や『血史西南役』は『征西戦記稿』を踏まえて薩摩軍による水攻めを記す。また『薩南血涙史』には弓削新が池辺吉十郎に建築し、池辺が桐野に相談して堰を造ったと具体的に述べ、「水流逆行城西の田圃数万頃を浸し、淼漫たる一大湖水をなすに至れり」（加治木1988）とし、それは26日のこととしていて、政府軍側の記録とは日時が異なる。橋本昌樹は『征西戦記稿』を基に薩摩軍は3月19日頃一駄橋と新橋（祇園橋）の中間あたりに水攻めの堰を造ったとしている（橋本1976）。3月19日は政府軍が日奈久に上陸して薩摩軍を分断する作戦に出た日であり、それへの対抗として攻城軍の勢力を割いてこれにあたる必要があったことを考えると、橋本の指摘が正しく、水没効果が表れ出したのが26日頃と薩摩軍の関係者は見ていたということであろう。

橋本によると堰が設けられた新橋上流は井芹川と坪井川が合流する地点の下手であり、西側は春日山の裾が伸びている場所にあたる。熊本城下町の外側一帯が26日頃から水浸したと言い、石堰

の位置とその水没範囲が略図として記されている (Fig.143) (橋本 1976)。それによると高麗門外西側の低湿地は広範囲に亘って水が溢れ、坪井川一帯も寺原地区や手取地区が一部冠水したことが知られる。4月14日の熊本城開城後、翌日に工兵により堰が切れ、三方を囲んでいた溢水は徐々に水位を下げたとされる。従って惣構の外側が水没していたのはおよそ20日間の出来事であったと推定できる。なお4月8日城内から出た奥保鞆の率いる一隊が政府の衝背軍と合流しようと試みた時、白川左岸の城下から荷車で収納した物資を城内へ運びこんだこともあることから、城の東側下馬橋から安巳橋までは完全には水没せず、荷車が通れる路が残されていたことが想定できる。従って薩摩軍による水攻めで多くの効果をもたらされたのは、城下町西側や北方の水田地帯であったとすることができる。しかし、これにより城西の祇園山などの高台を防御していた薩摩軍を八代方面に移動することが可能となったが、一方手薄になった薩摩軍の間隙を衝かれる素因ともなった。この水攻めに関してはなお「白川上流の瀬田に堰を設けて水を大津に落として坪井川上流の堀川に注いで」、効果を高めたとの説もある (宇野 1927)。何日にこれがなされたのか今のところ確証は得られていない。上井手は江戸時代に白川右岸に開削された3件の灌漑用水路の一つで、白川上流の瀬田に堰を設けて水を引き、大津町と菊陽町の境界辺りで堀川に注いでやがて坪井川に流れ込む。これは瀬田の堰に石を積み増すだけの簡単な作業でよく、実際行われていたとすると、熊本城周囲が湖水になるのにはさほどの日時を要しなかったであろうことは十分に想定できる。

熊本県文化課による今回の高麗門関係遺跡の発掘調査は、今後の城下町の調査に於いても、熊本城郭と密接に関連して歴史の歩みが辿れることを明らかにした点で、頗る貴重な調査であったといえることができる。



Fig.142 熊本城下罹災範囲 (橋本 1976)

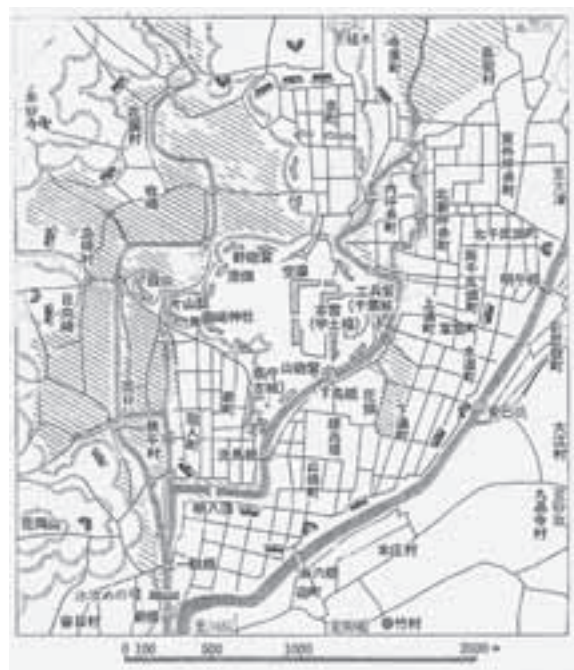


Fig.143 熊本城下水没範囲 (橋本 1976)

絵図の作成年代の認定に於いては、新熊本市史編纂委員会編の『新熊本市史 別編』第一巻に依拠したことを記して、取り組まれた各位に篤く感謝したい。執筆にあたっては、熊本県文化課の調査担当者各位の他に、熊本大学附属永青文庫研究センターの北野先生や高濱、稲葉、藤本各氏の御教授に与ることが多く、中津城の土塁については、中津市教育委員会の高崎氏に教えを受けることができた。これら関係諸氏に深く謝意を表したい。

なお、PL.114 から PL.125 までは『新熊本市史 別編』第一巻より撮ったものである。

引用文献

- 稲葉継陽 2013 『熊本日日新聞』 2月8日記事
宇野東風 1927 『丁丑感旧録』 丁丑感旧録刊行會
加治木常樹 1988 『薩南血涙史』 新潮社
熊本大学文学部附属永青文庫研究センター 2011 『細川家文書 絵図・地図・指図編 I』 吉川
弘文館
参謀本部 1887 『征西戦記稿』
新熊本市史編纂委員会 1993 『新熊本市史 別編』 第一巻
中津市教育委員会 1990 『おかこい山』
2006 『2005年度中津地区遺跡発掘調査概報』
2011 『中津城跡2』
中島典五 1996 「彪皮一班録」 『西南戦争資料集』 新潮社
橋本昌樹 1976 『田原坂』 中公文庫
平井聖・北野隆 1993 『城郭・侍屋敷古地図集成 熊本城』 至文堂
三浦正幸 1999 『城の鑑賞基礎知識』 至文堂



PL.126 中津城土塁



PL.127 中津城土塁 (通称「御囲い山」)

第2節 建築学的に見た高麗門

熊本大学名誉教授 北野 隆

1. 加藤時代の高麗門について

熊本城の高麗門が絵図に現れる最も早いものは、慶長17年（1612）の「熊本城略図」（山口県文書館蔵）である。

その後、寛永9年（1632）、細川忠利・肥後入国直前（加藤忠広代）の「熊本屋舗割之下絵図」（熊本県立図書館蔵）である。（PL.128）

PL.128に見られる熊本城の高麗門は、門の両脇に石垣が描かれ、その内に設けられていた。PL.128に描かれる門は略図であり、控柱は見られないが高麗門の形式になっていたと思われる。

高麗門形式の門とは「二本の本柱の上に切妻造の屋根をのせ、本柱のうしろ（内側）にそれぞれ控柱を立て、対となる本柱と控柱の間にも切妻の屋根をのせたもの」である。江戸時代初期、各地の城郭に高麗門形式の門が設けられるが、その名称、由来については不明なところも多い。（PL.129）

熊本城の高麗門の建築年代については、『御大工棟梁・善蔵覚書』（『熊本城今昔記』）によると、「善蔵は、清正公の高麗出陣にお供し、帰朝後、公の命によって彼の地（高麗）の門と同じ形容に造作した。」と記される。今回の発掘調査でも「慶長四年八月吉日」の滴水瓦が出土した。



PL.128 加藤時代の高麗門
「熊本屋舗割之下絵図」
(熊本県立図書館蔵)



PL.129 高麗門
(名古屋城 二ノ丸東二之門)
(甲元真之氏撮影)

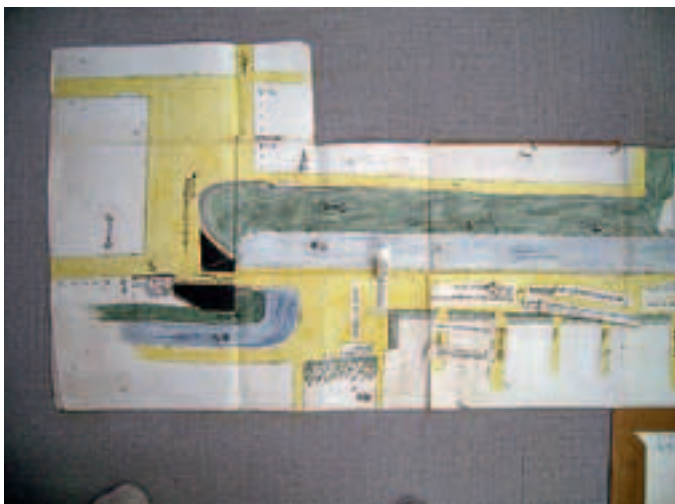
高麗門形式の門は、加藤時代の熊本城の高麗門から察して、文禄・慶長期（1592～1597）の豊臣秀吉による「朝鮮出兵」後に高麗（朝鮮国）の門の形式を模して作られたことが察せられる。



PL.130 細川時代の高麗門（L字形の櫓門であった。）
（熊本県立図書館蔵）

江戸時代末期の熊本城下町の絵図を見ると、高麗門は高麗門形式の門ではなく、L字形の櫓門に描かれている。このL字形の櫓門に描かれた絵図は、宝永6年（1709）10月の江戸時代中頃まで遡ることが出来る。（PL.130）

L字形の櫓門に改造された年代については、細川家菩提寺である妙解寺の建立と関係していると思われる。熊本藩主初代・細川忠利は寛永18年3月に逝去した。寛永19年（1642）4月には、妙解院（忠利法名）の菩提寺が、高麗門の南・祇園山の東麓に建立されることになった。そして、妙解寺が寛永20年（1643）2月に完成した。寛永20年2月13日から17日まで、大徳寺・天祐和尚を迎えて、妙解院法要が行われた。以後、熊本藩主2代光尚・熊本藩主3代綱利などが妙解寺に葬られている。



PL.131 高麗門から妙解寺までの御参道
（細川家永青文庫蔵）

寛永20年2月の妙解寺建立以後、藩主・他藩主などの妙解寺参拝が行われるようになり、高麗門から妙解寺門迄は御参道になった。（PL.131）

以上のことを考慮すると、高麗門形式の門からL字形の櫓門に改造されたのは、寛永20年（1643）2月の妙解寺完成直後と思われる。櫓門の規模については「高麗門二階 三間半十四間」（『隈本御城之事』）であった。

2. 絵図から見た高麗門の遺構について

細川時代の高麗門は、明治4年の廃藩置県まで残っていた。(PL.132)しかし、明治10年の「西南ノ役」で焼失した。その後、明治24年(1891)の九州鉄道の開設にあたり、高麗門の位置に線路が架設され、石垣なども整備された。

今回、発掘された遺構は、細川時代の櫓門時代の西側部に相当する。(PL.133)

高麗門は、加藤清正により熊本城築城と同時に高麗門形式の門が作られ、新町のこの通りは「高麗門町」とよばれた。その後、細川時代には高麗門形式の門でなく、L字形の櫓門に変わるが、町名から「高麗門」と呼ばれ、重要な門であった。



PL.132 「西南ノ役」前の高麗門
(富重写真所蔵)



PL.133 江戸時代末期の高麗門
(熊本県立図書館蔵)

第3節 絵図に見る熊本城惣構

松本 寿三郎

一、熊本城の形成

熊本府と熊本城の位置関係について、「肥後国志草稿」は「飽田郡ノ内五町手永坪井村・池田手永宮内村・京町村・岩立村、横手手永横手村・筒口村・古町村、託摩郡ノ内本庄手永本庄村・本山村ナトノ地方粗府中小路ノ内ニ懸レリ」とあり、ついで「当国ノ府中ハ古モ飽田郡ノ内ニ有之タルト見ヘタリ、今横手手永田崎村・宮寺村辺古ノ府中ト云傳ヘタリ、其節ノ在庁屋敷ナドノ迹トテ今ニアリ、其外古迹多シ、其後熊本城ニ菊池氏ノ一族出田秀信と云者始テ在城シ、大永享禄ノ比ニハ鹿子木三河守親員居之、後城氏等相続テ当城ニ在居セリ、夫ヨリ次第ニ熊本辺繁栄ノ地ト成リ、寺院宮社モ多ハ此地ニ引移ス、漸々ニ国府ト成レリト見ヘタリ、熊本ト名付ル事往古ノ村名カカリノ称カ未考之、前方ハ隈本ト書リトモ今ハ熊本ト書セリ」とある。

城氏時代の熊本城を「家久公御上京日記」は「(天正三年)一、二十六日辰の剋に打立、しゃう殿の城一見、未の剋に鹿子木といへる町に出廻よふ・・・」と簡潔に記すが、「長谷場越前自記」は「天正八年庚辰六月・・・肥州隈本之内高橋の津に着岸也、翌日ハ城内の宮内にそ被籠、城越前守父子を初ニメ地下之巧者ニ蜜談」とある。「古今肥後見聞雜記」に「城越前守茶之水とて古城二の丸之下屋敷ニ井有、至て清水也」といい、また熊本町の市日(高麗門の初市)は、友枝氏の先祖らが城氏の子息の慰みのために始めたとの伝承も古城時代のことで、わずかながら隈本の城と城下の模様を垣間見ることができる。

熊本城(古城)の名は、天正十五年熊本に入った豊臣秀吉によって日本全国に喧伝される。

天正十五年卯月十五日連戦連勝の勢いで高瀬についた秀吉は、小早川隆景に次のように九州で勝利を報じ、「当表之儀、最前岩酌城責崩、悉刎首候儀聞傳、筑前国大熊・秋月・間寺・寶万・山下、筑後国高良山、肥後国三池・小代・南関・山鹿・合志・高瀬津・熊本・宇土其・外城々、或聞北、或命之御侘言申、明渡候、然間、明日殿下至熊本被移御座候、八代ニ敵有之由候間、取巻悉可討果候、」肥後平均ののちは大隈か薩摩に向かうことを告げている。

薩摩平定を終えた秀吉は、五月二十八日佐敷から徳川中納言に宛てて薩摩を平定したこと、九州の国分の大要と九州を五畿内同前の取扱い、高麗への拠点とするなどを述べ、肥後国はよほど気にいったと見え、豊前・筑前・筑後と比して詳細に述べる。

「 肥後国、一段能国候間、羽柴陸奥ニ被下、熊本名城候条、為居城普請丈夫ニ被仰付候事、
一豊後国、黒田勘解由被下候事
一筑前・筑後、小早川被下候、—————」

秀吉は大勝利に気をよくしていたのであろう。肥後および熊本城を手放しで褒めており、この時点では何よりも熊本と表現しているのが特長だ。のちに見られるように肥後を難治の国とする考えは微塵も見られない、よき国だから羽柴陸奥に与え、居城普請を命じたと得意気に報じたのであった。

秀吉が熊本を隈本と表現するのは、同年八月肥後の国衆一揆が報ぜられてからである。九州を統一し、さらに高麗への進出を目論む秀吉は一揆に腹を立て、成政を罵倒する、以後の秀吉状では、羽柴侍従から陸奥守へ貶斥され、熊本も専ら隈本と称されるようになった。

秀吉の九州進出の史料としてよく使われる「九州御動座記」には、「(四月)十六日 一同

国隈本迄 六里 但、此所は肥後国の府中也、城十郎太郎と云者相踏候、数年相拵たる名城也、五千計の大將、・・・」とある。内容は五月二十八日付徳川中納言宛書状と同一であるが、隈本の表現は貶斥以後

のものと考えたい。

秀吉が自ら一日休息した上で、数年相拵えたる名城なりと云っているから、かなりの規模をもっていたとみていい。成政は同年八月に起きた肥後国衆一揆の責任を取らされて改易となり、十六年閏五月、肥後は加藤清正に与えられ、古城に入城した。以来熊本城は加藤清正・忠広二代の居城となる。清正は朝鮮出兵を挟んで熊本城の整備に取り掛かり慶長十二年新城の竣工を見、隈本城を熊本城と改めたと云う。

加藤氏完成期の熊本城下町を物語る好資料は寛永6～8年と推定される「熊本屋敷割下絵図」・「加藤氏代熊本城之図」（「熊本市史別巻Ⅰ」）である。熊本屋敷割下図は熊本城本丸・二の丸を中心に、東は白川から西は井芹川まで、北は出京町から南は石塘口までを含んでいる。この絵図は題箋に「先公加藤氏屋敷割之図」とあって、寛永九年入国した細川氏が加藤氏の家臣の屋敷割図を入手したもので、細川氏家臣団の屋敷割の参考にしたものであろう。城下町全域に町家は町名が記され、武家屋敷はおおよその区画が示されている。最も詳細なのは二の丸の重臣の屋敷地でここには屋敷ごとの区画と屋敷主の名のほかには○や●△、上々、上中、なかには中の下、の記載がある。この絵図によって寛永期の加藤氏の屋敷割を細川氏も踏襲しようとしているのが分かる。

この絵図を手がかりに熊本城下町の特徴を挙げてみよう。東は白川まで描いているが、詳細なのは東は坪井川・坪井の水堀・白川大蛇行あとの田（追廻田端）を結ぶラインから西側、西は京町の台地の崖脚から熊本城の西森本櫓から段山の土手・段山の水堀・高麗門の水堀・古町西側の坪井川・井芹川・石塘まで、北は京町台地東北の崖脚から京町北端の土居・空堀のライン、南は白川を限るラインである。実はこれが熊本城下町の初期の姿に近いのではないかとと思われるのである。

まず坪井の水堀の東側一帯は北から坪井村（城下町が形成されるまでは坪井川を用水とし、京町台下まで耕地とする農村であった。内坪井が城下町に編入されると、坪井村の百姓は耕地を収公されたともえ、郷帳1573石の坪井村は840石に半減している）。

江戸期にはこの一帯は湿田を坪井田端という。この絵図で坪井水堀の東千段畑に短冊形の貼紙10枚ほどは、佐渡・右馬助などの名があり細川氏の屋敷割りのようであるが、地目ははたけとなっており、新開地である。千反畑・手取・高田原も大雑把な区画、高田原中・手取中・御中間・歩之御小姓・御鷹師・御犬引の表示で新屋敷を予定しているものようである（細川氏によって開発される）。

西側の井芹川流域は田の表示があるが、この一帯は俗に本妙寺田端と称する湿田で軍馬の乗り入れがたい地帯であった。

以上、熊本屋敷割下絵図は加藤氏時代の熊本城下町の姿である。北は出京町、南は白川石塘口、東は白川、西は段山～高麗門の水堀まで描かれている。これを細川時代の城下町絵図と対比してみると、城郭・主要街道・町割りには既に加藤氏時代に出来あがっており、細川氏は加藤氏の熊本城下町を踏襲し、不足する分についてだけ外に新たに町を拡張していった。迎町・外坪井・新出町の商家、新屋敷・本山の屋敷町はこうして形成されていった。

熊本城下町のいくつかの特長を挙げてみよう。

- ① 古城の水堀により、城郭部分と城下町を分けし、城郭部分は、高石垣と堀で防備、天守閣を始めとする櫓群を配置、政庁・上級家臣の邸宅、武家屋敷を配置した。街道筋に町人の町を設定した。
- ② 城下町と在は水堀または空堀、もしくは構え口で分けする。東部は坪井の水堀で内坪井（武家屋敷）と区分し、慶長四年坪井町（町家）に城下の市店を設けたという。立田口の構口により在（坪井村）を区分、百姓地は徐々に軽輩・小者の長屋・屋敷となり、周辺は寺社用地となる、城北部は城郭と京町を空堀（新堀）で区分、古京町の町人を移して街道筋に町人町周辺に屋敷地、端に寺院地が設けられる。京町本丁をはさんで宇土小路・柳川丁が形成されるのは関ヶ原役で小西・立花氏が改易され、その家臣が召抱え



PL.134 熊本屋舗割下絵図 (熊本県立図書館所蔵)

られたからである。西部は段山～高麗門の水堀・土手で新町と区分し、高麗門によって区分する。

高麗門遺跡出土の慶長四年紀の滴水瓦により水堀・土手・門が清正が朝鮮から帰還して間もない時期の普請と分かる。

- ③ 白川の蛇行部分をカットして、城下に編入、詫麻郡山崎村の百姓を坪井村に移す。河川敷の痕跡は田地となり追廻田畑と呼ばれて、飽田郡坪井村に属した。
- ④ 坪井川を引き回して井芹川と合流し、清正は天正十六年古町村の旧国府の町人・寺社を移住させて形成したという。古町は中核に寺院を擁する方一丁の街区が碁盤状に整然と区画された町で、坪井川の舟運を利用した。相当に繁昌したとみえ、天正十九年には細工町の住人を末町に移し、大商人十八人を招聘し、間口五～十間の店を割渡したという。
- ⑤ 出京町は加藤氏時代家臣団の増大による屋敷地不足解消のため、京町の町人を移動させて新規に作成されたものと見え、京町の北辺を区画する空堀・土居・構口の外に造成されており、在とのさかいは構口だけの簡単なものである。

二、熊本城下町の拡大

細川氏は入国後、熊本城を修復したのをはじめ、熊本城周辺の侍小路を整備した、寛永十年八月五日付の「肥後国隈本城廻り普請仕度所目録」には普請ヶ所として、京町口土橋より東西の空堀、古坪井出口新門、段山口門、のほか、塩屋町口門わき、長六橋南北橋口、三町目門わきなどをあげている。

細川氏は侍屋敷の不足を補うため新しい侍屋敷を東部及び東南部に求めた。東部の坪井地区は加藤氏時代から新しく開発されたところである。坪井村は京町台地の東部に広がる坪井田畑と呼ばれる氾濫原（低湿地）であるが、熊本城に隣接するところから開発されたらしく内坪井が開かれ、加藤清正は慶長四年坪井村の住民を竹部に移して、市店を造成したという。豊後街道に沿って町屋が造られたのであろう。細川氏は寛永十三年から十五年にかけて、本坪井町の東南の田地を開発して、御長柄小路・持筒小路・弓丁などの下級武士の屋敷を造成した。寛永十五年にはそれまで坪井村百姓地であった長岡監物下屋敷六反一畝余・長岡勘解由下屋敷四反九畝余が引き渡された。子飼の春光院（享保十七年松雲院と改め、境内の売店のはち松雲院町を形成）も寛永十五年府中に繰り込まれた。また子飼では極楽寺丁が下級武士の屋敷とされたほか、寛永十九年六月立田口杉馬場の北に、一町一反二畝の侍屋敷が造成された。

寛文十二年二月坪井村の百姓に家立料を与えて他へ移し、その屋敷地を家中侍屋敷とした。子飼之極楽寺丁近辺の白川端に細川形部・沼田勘解由下屋敷が出来、宝暦期には春光寺おくに長岡右門屋敷が出来、南東にかけて下級武士の屋敷ができた。

高田原・手取りの白川端に下級武士の屋敷が造成された。追廻田端は古くは坪井村の田地であったが、其周辺にも侍屋敷の造成が見られた。

一方、侍屋敷の山崎の続きにあった町屋の宝町・新大工町は寛永二十年長六橋の先に町ごと移され、あとは侍小路となった。

三、熊本城惣構について

「公私便覧」は熊本曲輪内道規之事として、東西壱里・南北壱里余、櫓十八ヶ所・櫓門六ヶ所・冠木門七ヶ所、橋十三、坂三十一を上げている。

「肥藩叢録」は東西を立田口より石塘口まで一里七町十間五尺、南北を出町口より御船口まで一里九町十八間四尺とし、在との境界を次のように云う。

東	長六橋より立田口まで	二十四口
北	立田松雲院より活亀口まで	五口
西	井芹口より高麗門まで	十口
南	一駄橋口より古町金屋町口まで	五口

時代により曲輪の拡大が見られることは前述の通りで、たとえばおなじく立田口といっても、近世初頭は本坪井町の構え、現立田口太神宮を指し、町絵図の杉並木はここから始まるのに対して、後期には立田松雲院あたりを差し杉並木もここから始まっている。城下町の北端にしても、初期には出京町の構口が北辺であったのに、宝暦期以後は新出町まで曲輪に取り込んでいる。こうして古くは二里余とされた惣曲輪は後期には三里三町十七間に拡大された。

右の四四口は城下町と在を区分するものであるが、詳細があきらかでない。別の記録によってみると、高田原井手口より立田大江渡七口、井芹口より新堀口六口、陣橋より高麗門四口、一駄橋より石塘口桶屋町口二口、長六橋より井手口西岸寺前三口、京町・池亀二口、西寺原口・隈府口二口、米屋町口・金屋町口二口は侍大将の担当する処であった。

曲輪内の警備のため、構口・須戸口の要所々々には辻番所が置かれた。

昼一人・夜二人・有明燈	流長院構口・新堀門・出京町構口・長岡監物屋敷下 住江甚右衛門・一丁目・長六橋構口
辻番三人・昼夜一人・有明燈	高麗門・慶宅坂上門・新三丁目御門・長岡図書屋敷・ 坊安坂上・大木弥助屋敷・帯刀屋敷下
辻番四人・昼一人・夜二人・有明燈	山崎口・下馬橋・同所辻・同南辻・追廻田畑木戸口 全辻二ヶ所・どう北辻

熊本曲輪内外は構口・須戸口と辻番所によって昼となく夜となく警衛されており、他国の六十六部・虚無僧・巡礼・猿回し・諸芸人などは街道のほか小道へ入ることも禁ぜられたという。

参考文献

- 「新熊本市史」通史編第三巻 近世1
- 「熊本古城史」
- 「フィールド・ミュージアム熊本城」
- 「秀吉が八代にやって来た」
- 「肥藩叢録」
- 「御城外御櫓冠木門須戸御番所」

第4節 文献史料からみた熊本城の惣構と高麗門

稲葉 継陽

1、16世紀における惣構の成立

16世紀末に織豊政権が普及させた石垣と天守を伴う近世城郭のルーツは、中世後期における在地領主の地域支配の拠点城郭に求められる。わけても、戦国期に領域支配を実現した国人領主の本拠城郭は、織豊期城郭の前提となるものである。それは、

- (1) 山上の詰の城
- (2) 麓の領主館と家臣団集住地
- (3) 商工業者の町場

という三つの要素によって構成されていた。

(1)は、城攻め合戦に際して籠城するための施設であり、城を攻める側は詰の城から敵を放逐させて自軍を入れることで、その城と周辺の領域の実効支配（「当知行」）を実現することができた。戦国時代の詰の城は、在地領主による領域支配のシンボルであった。

(2)は、日常における領主及び家臣団（「家中」）の居住・儀礼空間であるが、この武家町と密接な関係のもとに形成されたのが、(3)の商工業者の町場であった。戦国期名和氏の本拠宇土城（宇土市西岡台）、同じく阿蘇氏の益城郡における拠点であった堅志田城（美里町）などでは、城から一定の距離を隔てた交通路上に町場が形成されていた。町場が領主権力によって保護されるとともに、家臣団の城下集住を町場が経済的に支える関係が形成されていたとみられる。そして、城の廃絶の後も、これらの町場は近世の宇土町、堅志田在町として発展していく。

16世紀末期に戦争が大規模化し、大名の軍隊に大量に入り込んだ雑兵（武家奉公人）による物資・人身にわたる掠奪行為が南蛮貿易と結びついて激化してくると、城下町民衆の保護の必要性が増大したことから、上記の(1)(2)(3)の関係はより緊密化する。例えば1580年代、島津氏の肥後国への侵攻過程で、国人領主山鹿氏の本拠城郭の(1)部分もが城周辺の女性や子どもを含む民衆の避難所となっていたことは（『上井覚兼日記』）、これを象徴する事実として注目されている。

こうした動向を前提にして現れるのが「惣構」である。戦国期の惣構遺構や文献史料上の「惣構」文言はいくつか確認されているが、熊本県地域における織豊城郭以前の惣構の代表例は、国人領主合志氏の本拠であったと推測される竹迫城跡（現合志市）である。

文政8年(1825)に竹迫の住人によって描かれた竹迫城跡絵図(永青文庫所蔵)によれば、惣構の「カラホリ」が、菊池往還沿いに形成されていた竹迫の町場や城周辺の村をも囲い込むかたちで設けられており、それは現地でも遺構として確認されている（『熊本県合志市文化財調査報告第1集陣ノ内遺跡』合志市教育委員会、2007年）。麓の(2)武家町のみならず、(3)町人町をも城郭内に取り込むことで、戦火・掠奪から領内住民を保護することが、戦国時代の国人領主が行使する領域支配権の究極の根拠となったものと推察される。

こうして戦国期に成立した惣構は、近世城郭にも引き継がれた。

2、近世熊本城西側惣構と高麗門

九州地区の織豊系城郭のうち、史料や遺構によって惣構がよく観察されるのは、細川忠興が整備した豊前中津城である。『中津市文化財調査報告書第53集中津城跡2』（中津市教育委員会、2011年）に集成された中津城絵図には、武家町・町人町・寺町を取り込んで構築された土塁と水堀が明瞭に描かれており、土塁の遺構も確認されている。

これを踏まえて近世後期の「熊本城惣絵図」（永青文庫蔵）をみれば、熊本城下町には東の白川、坪井川、西側には新町西側の堀と井芹川がそれぞれ配され、幾重もの防御ラインをなしていたことがわかる。そして、高麗門付近を詳細に描いた「高麗門・塩屋町絵図」（同前、同時期）によれば、新町と高麗門外横手寺町とを区画する堀の東側には土塁が構築されていたことがわかり、これらが中津城と共通する惣構の施設であったことは明らかである。以下、これを「熊本城西側惣構」と称して、惣構の出入口となっていた高麗門と併せて捉え、注目すべき点を指摘しておこう。

（1）西側惣構の構築年代

第一に、発掘の結果明らかとなった加藤期高麗門の建築年代である。発掘された滴水瓦の「慶長四年八月吉日」銘は、熊本城内から出土した同種の瓦の銘と一致する。これは、前年までの朝鮮出兵が終了した直後に加藤清正が進めた熊本城普請の一環として、高麗門が構築された事実を示す発掘成果とみてよい。すなわち、「熊本城西側惣構」と高麗門は、加藤清正によって構築された熊本城の重要な構成要素だったのであり、国特別史跡に指定されている熊本城跡と本来一体の重要遺跡であるということが確認されたわけである。

（2）横手寺町と高麗門・参道

第二に、高麗門が「熊本城西側惣構」上に設けられた唯一の出入口として重要な防御施設であっただけでなく、高麗門外横手寺町に立ち並ぶ寺院への参道の起点であったことである。永青文庫の諸史料や『肥後国誌』によれば、このうち禅定寺・妙立寺・妙永寺・本覚寺などは、すでに加藤家治世期から藩主一族・重臣の菩提寺として現在位置に存在していたことが知られる。したがって加藤期の参道は、これら寺院に藩主やその一族そして重臣層が参詣する場合に利用されたものとみられる。

さらに寛永9年（1632）に小倉から熊本に入部した細川忠利は、加藤期の寺町の南側に安国寺を移し、次いで寛永19年（1642）には安国寺の南側に細川忠利菩提寺の妙解寺が建立される。この段階で、参道は細川藩主が先祖供養の参詣のために使用する道として、格段に整備されたものと推察される。

今次の発掘調査によって確認された、参道上の段階的な通路の整備面が、高麗門外横手寺町の加藤期から細川期への整備・発展段階に照応する遺構であることを確認しておこう。

なお、近世後期における参道の利用形態については、史料に基づいて後述しよう。

（3）境界領域としての高麗門

第三に、高麗門及びその周辺が熊本城下の都市世界と外界との境界領域として、特異な性格を有していたことが注目される。すでに17世紀半ばには、高麗門付近に「町牢」が設けられており（『奉行所日帳』永青文庫所蔵）、高麗門「勢溜」は刑場としても使用されていた。市中引き回し刑の行列は高麗門から出発し、「長六河原」に着いて処刑執行された（鎌田浩『肥後藩の庶民事件録』熊日新書）。

また高麗門に隣接する禅定寺では、細川家の有力家臣で不退転のキリスト教徒として著名な小笠原玄也・みや夫婦ら合わせて95人が、寛永12年（1635）12月23日に「誅伐」された（『綿考輯録』）。

さらに、甲佐手永早川神社神主の日記『拾集物語』の万治3年（1660）条には、「此年江戸一のあやつり太夫喜太夫といふ者熊本かうらい門にて太平記をあやつりにいたし候」とあり、高麗門付近が江戸から来た傀儡一座による太平記興行の場ともなっていたことが分かる。

以上のように、わが国の城郭史上、戦国時代に形成された惣構は、加藤期の熊本城にも取り入れられていた。加藤清正による熊本城普請の一環として、西側の惣構上の要衝に設置された高麗門及び参道は、都市世界と外界との境界、現世と来世の境界を画する重要な施設だったのであり、近世城郭熊本城と近世都市熊本を理解する上で不可欠な要素であるといわねばならない。

3、近世後期における高麗門参道の利用形態

近世後期の作成にかかると推定される「妙解寺御門外図」（永青文庫所蔵）には、当該期の参道の利用形態を記した書き込みや付箋が15箇所もみられる。これらは、細川藩主一族の葬儀・法事を担当する奉行が職務内容を把握するための情報だと推察される。記載内容を解読することで、参道の利用形態を復元することができる。

①「●町受之境より御滞棺所迄新規砂敷候事」

高麗門内側のスペース部分の書き込みである。ここから参道上妙永寺馬場入り口近くの「御滞棺所」（付箋⑧の箇所）までは、新しい砂を敷きつめる。「御滞棺所」とは、遺体をおさめた棺桶をいったん置いて、儀式を行う場所であろう。その儀式とは、死者がさとりを開くよう導師の僧侶が説き聞かせる、「引導を渡す」儀式であったとみられる。

②「外様足軽より御警固有之藁蕙三枚敷候事」

高麗門前に貼られた付箋である。ここには、葬列警護の外様足軽がひかえるが、そのための藁蕙二枚を敷く。

③「御供之内軽キ面々服改所」

参道入り口の通称「勢溜」に、御供衆のうちで必要な者（身分の低い者）の身体検査をする「服改所」が設置されていたことを示す記述である。

④「白張提灯二つ朝より燈候事」

「勢溜」の中心箇所に貼られた付箋である。葬儀等に際しては、ここに白提灯二つを朝から燈す。

⑤「御物頭御警固夜二入候へハ御紋付大丸二つ燈候様ニ被仰付置候事」

「勢溜」から参道への入り口地点に貼られた付箋である。ここには物頭クラスの警固衆がひかえ、夜になると、家紋付の大提灯二つを燈すよう達しがあるのが通例だという。

⑥「土席以上服改所半切桶二水を入かいけ三本添居り置候事」

⑦「御燈籠類御道具入被置候事」

これらは「妙永寺馬場」入り口に、土席以上の家臣を対象とする「服改所」と、燈籠等の道具を入れ置く場所が設置されたことを示す付箋である。

⑧「御滞棺所式間ニ三間妙永寺江入口より式間余南ノ方ニ建 御前後ハ白張提灯四つ燈候事」

妙永寺入り口から二間余り南の地点に、二間×三間の「御滞棺所」が設置されることを示す付箋である。

①にあるように、高麗門内側からこの地点までには、新しい砂が敷きつめられる。御滞棺所の前後には白張りの提灯四つを燈すという。ここで葬列をいったん止め、引導を渡す儀式が行われたのであろう。

⑨「御滞棺所より本門迄藁蕙三枚並ニ敷候事」

御滞棺所から細川家菩提寺・妙解寺の本門までは、藁蕙が三枚並びで延々と敷かれる。引導を渡された死者と葬列は、参道上に敷かれた蕙の上を通過して、妙解寺に入っていったのであった。

⑩「妙永寺入口より安国寺馬場入口角迄並木之外通ニ御幕二而張切ニ相成其内通り道ニ相成候事」

これ以降の付箋等は、「御滞棺所」から妙解寺までの利用形態を示している。妙永寺入り口から安国寺馬場入り口の角まで、参道両側に幕を張り、葬列はその中を通過するという。

⑪「下場口外左右御紋付大丸御提灯朝より左右ニ燈候事」

「下場口」の箇所、現在の下馬天神社付近に比定される箇所に貼られた付箋である。下場口外の左右に、細川家家紋入りの大丸提灯を朝から燈すという。

⑫「御物頭衆御警固所夜二入候得ハ御紋付大丸御提灯二つ燈候筈之事」

同じく下場口付近に物頭衆の警固所が設置され、夜にはやはり家紋付の大丸提灯を燈すことを示す付箋である。

⑬「下場口より橋際迄左右ニ白張提灯四拾張燈候事」

下場口から妙解寺本門前の橋際までの参道左右には、白張提灯が40も並べて燈されるという。

⑭「御家老衆提灯燈方詰小屋」

⑮「両御末家御一門衆提灯燈方詰小屋」

下場口から妙解寺本門までの参道には、家老衆や一門衆らの提灯燈方の詰小屋が設置された。

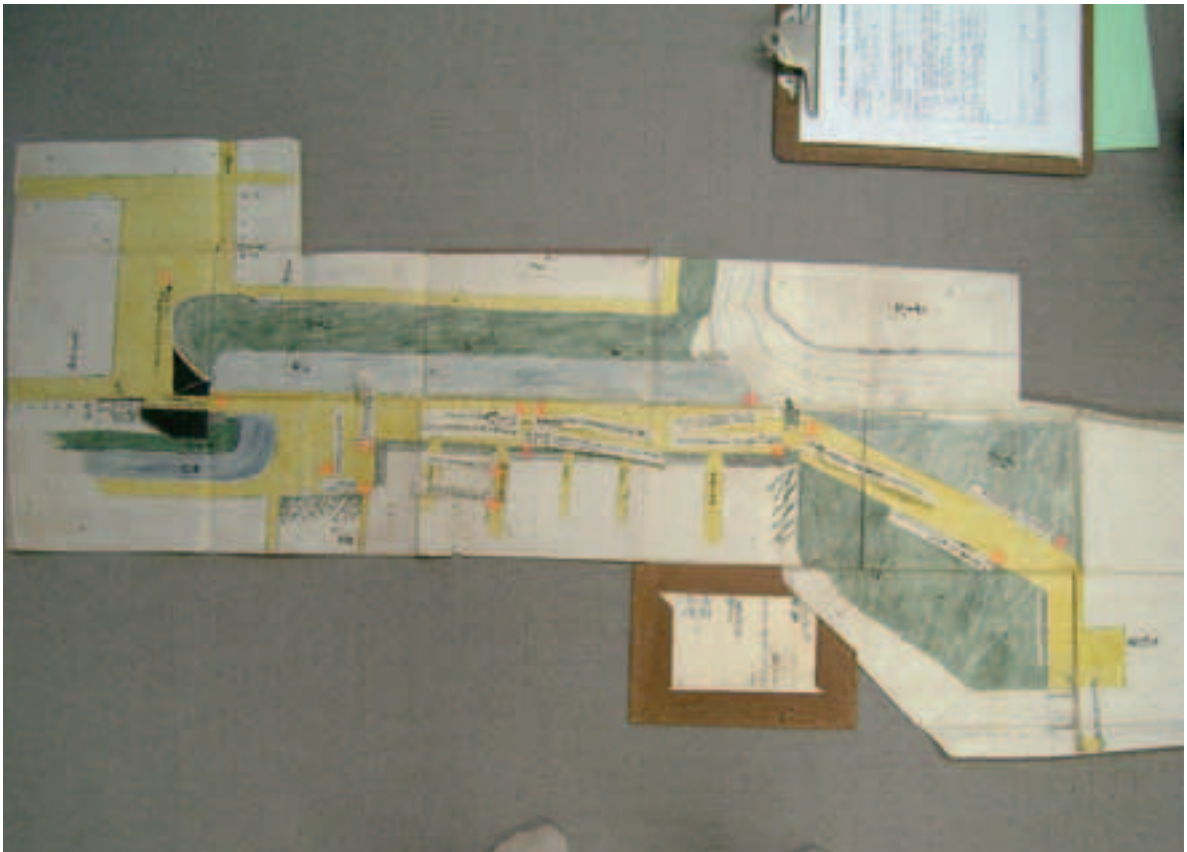
以上のように、細川家の葬儀等の参道利用について「勢溜」、妙永寺入り口南側の御滞棺所、下馬口という参道上の三つのポイントが注目される。また、ここで検討した「妙解寺御門外図」そのものも、藩主らの葬儀に際しての菩提寺参道の利用形態を具体的に伝える稀有の史料として、本遺跡の整備に活用されるべきものであろう。

(附記) 妙解寺御門外図の撮影と解説には、熊本大学文学部附属永青文庫研究センター技術補佐員の藤本豊治・後藤典子両氏の協力を得た。

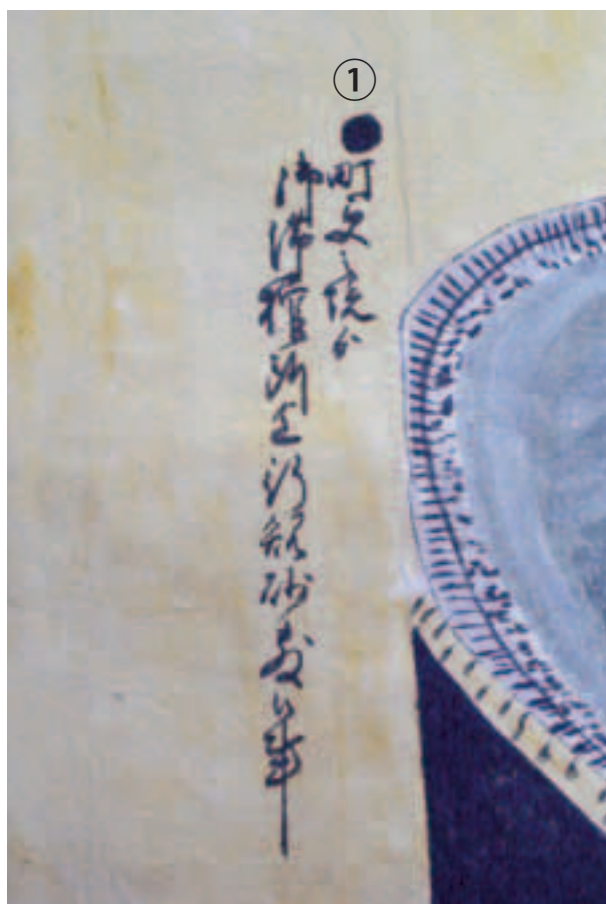


PL.135

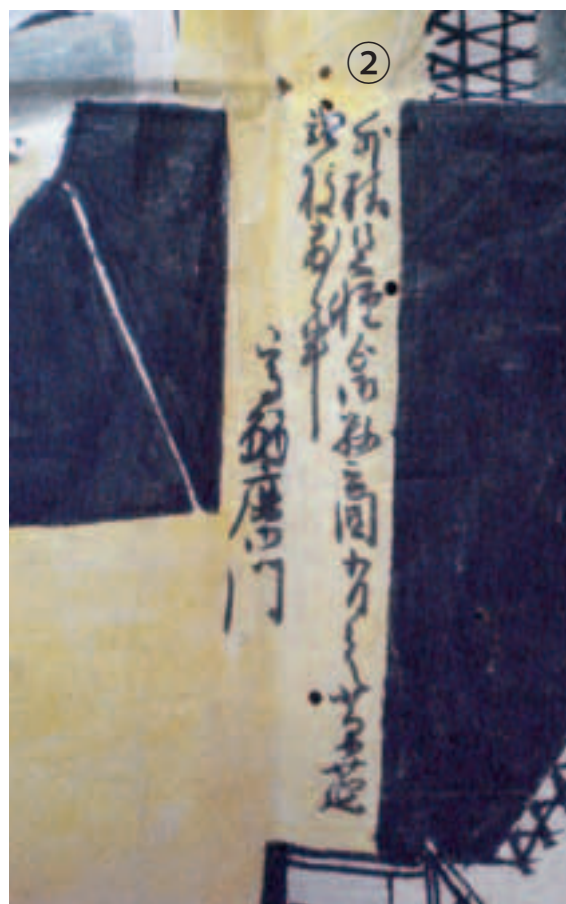
○ 「妙解寺御門外畷」 (題箋)



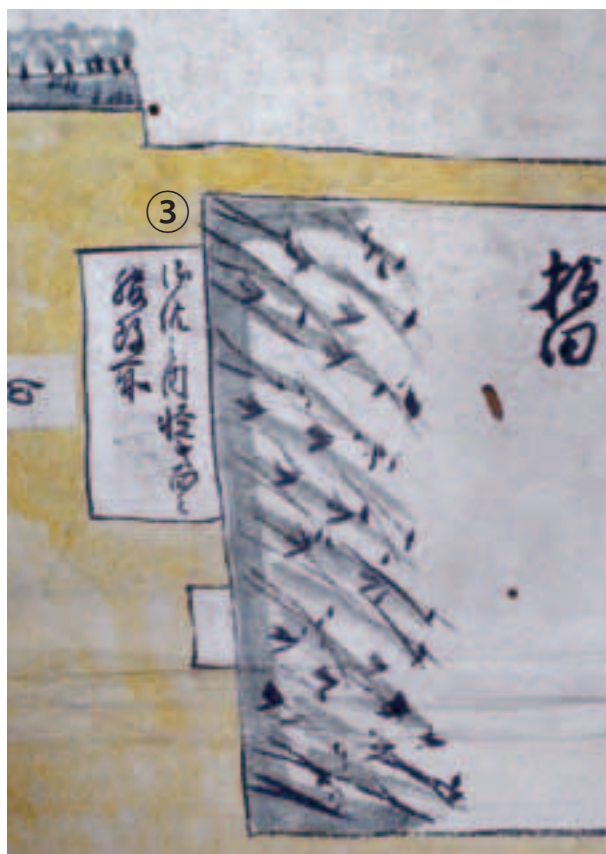
PL.136



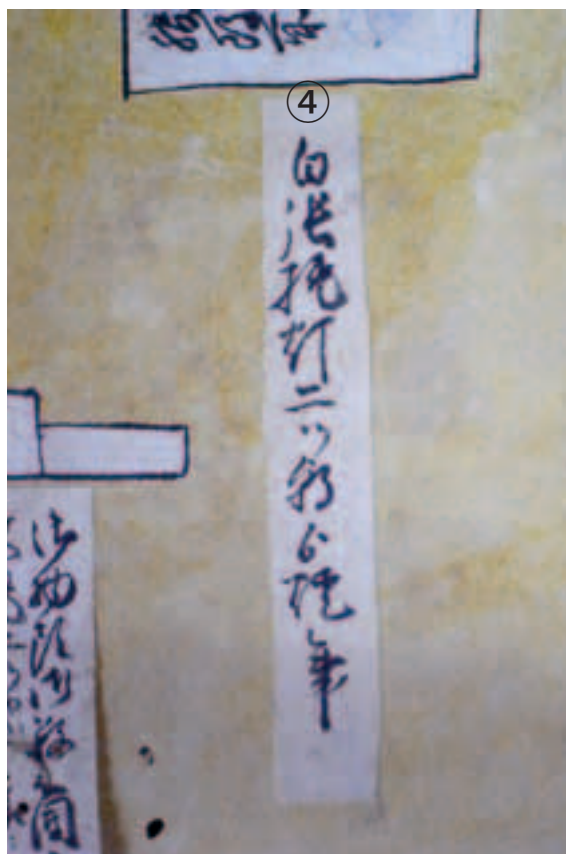
PL.137



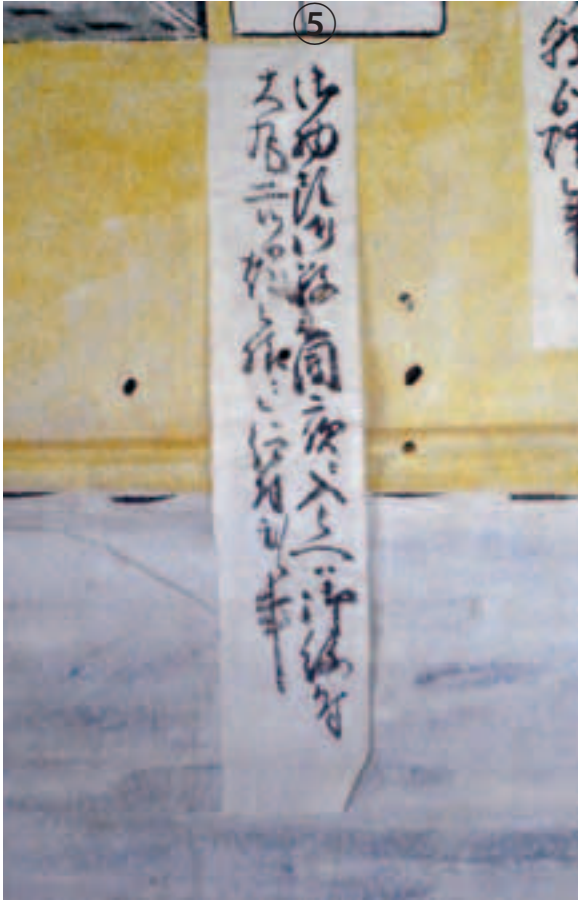
PL.138



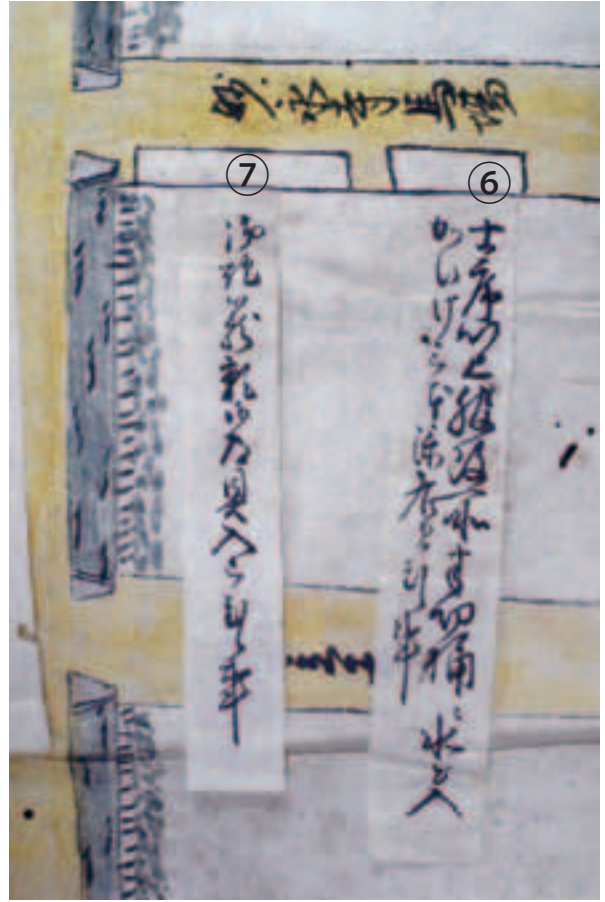
PL.139



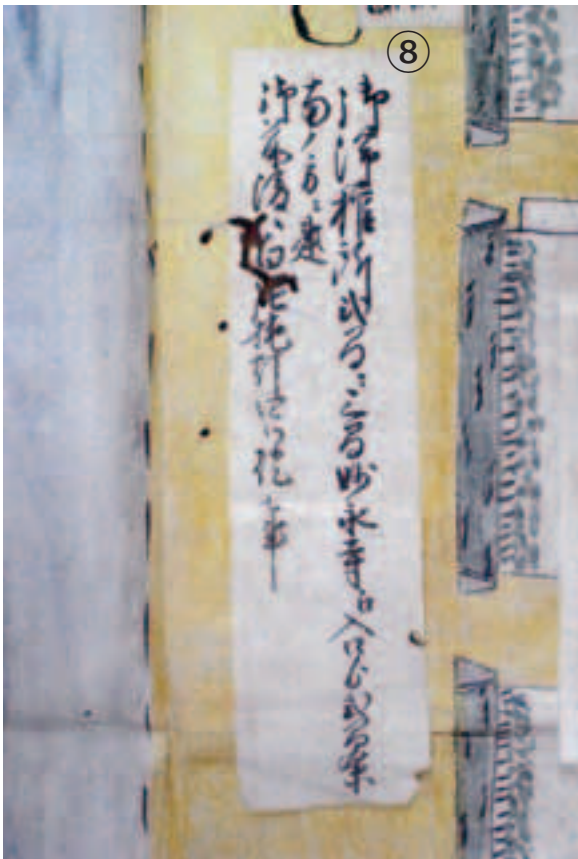
PL.140



PL.141



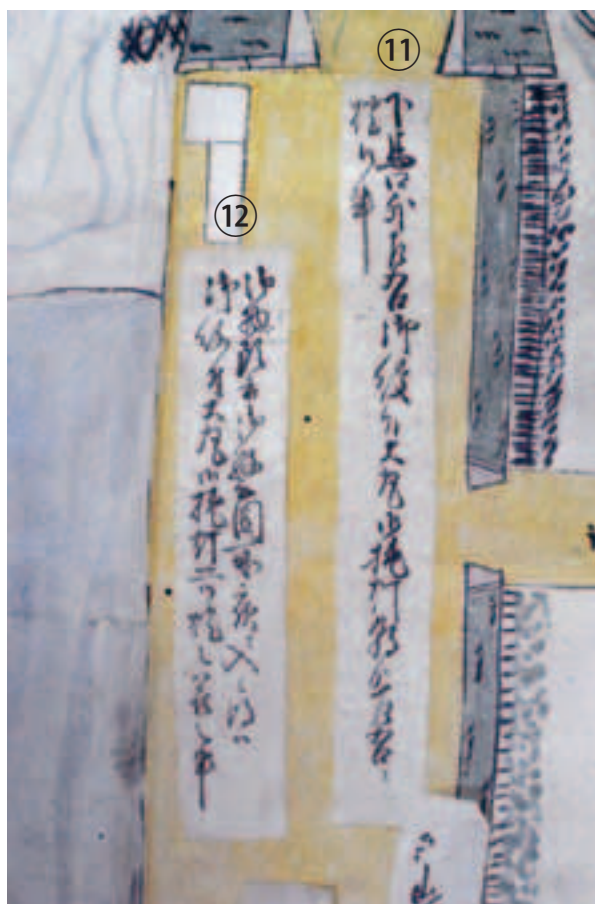
PL.142



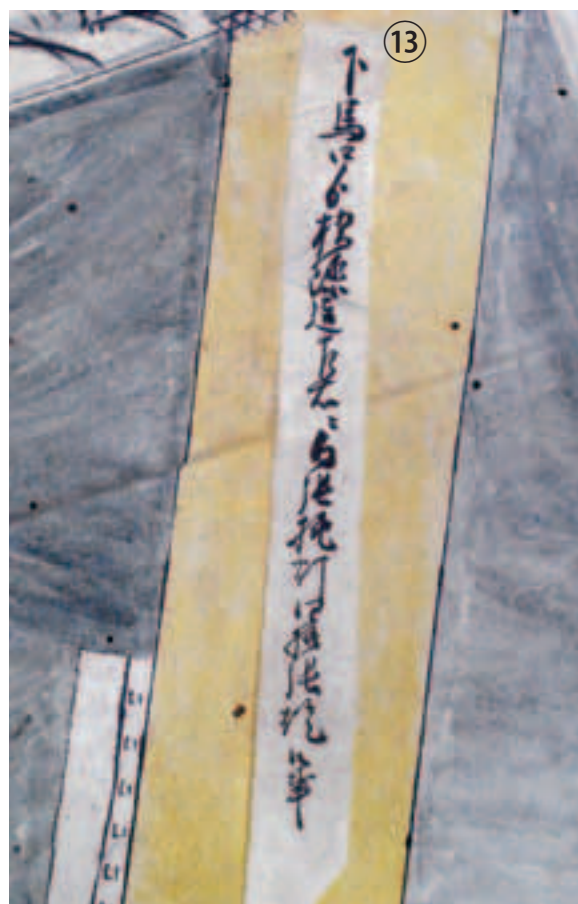
PL.143



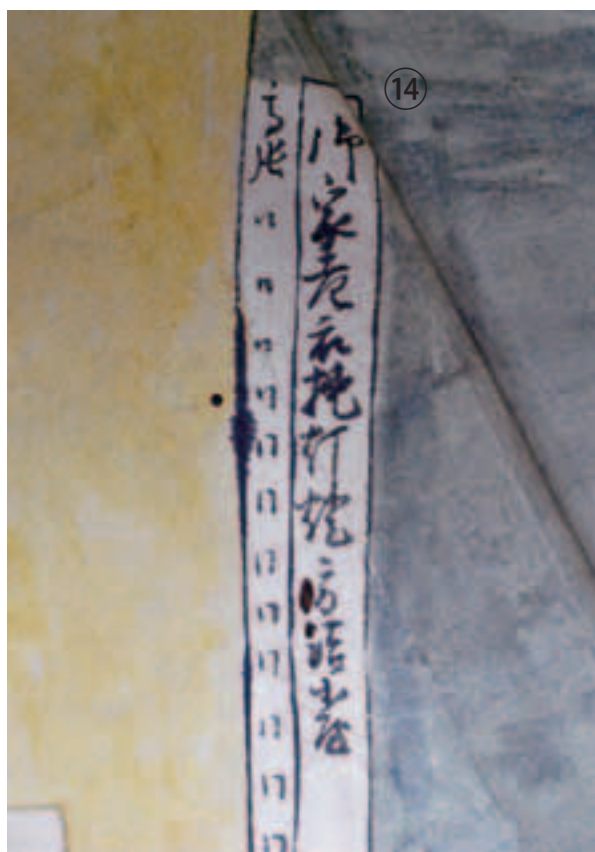
PL.144



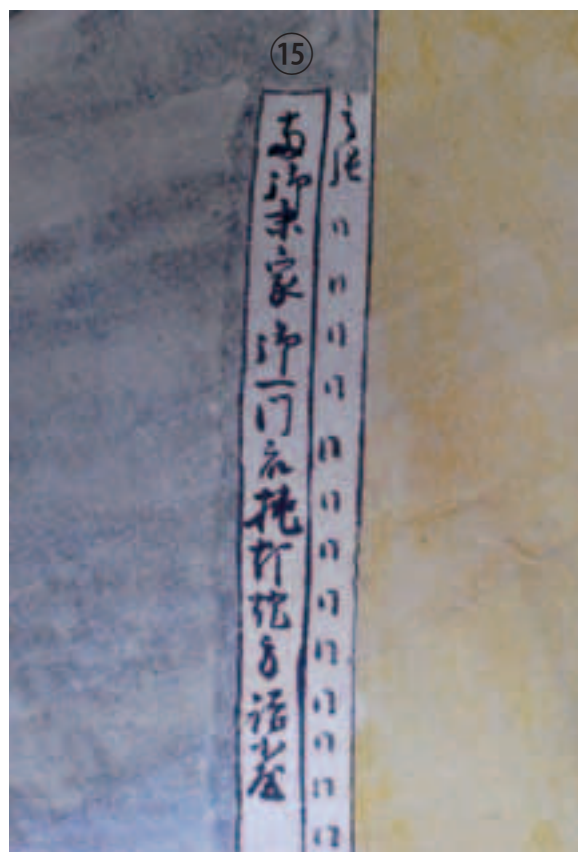
PL.145



PL.146



PL.147



PL.148



PL.149 高麗門付近



PL.150 妙立寺参道



PL.151 妙永寺馬場



PL.152 安国寺馬場

「妙解寺御門外図」(題箋)

- ① ●町受之境より
御滞棺所迄新規砂敷候事
- ② 外様足輕より御警固有之藁蕙
式枚敷候事
- ③ 御供之内輕キ面々
服改所
- ④ 白張提灯二つ朝より燈候事
- ⑤ 御物頭御警固夜ニ入候へハ御紋付
大丸二つ燈候様ニ被仰付置候事
- ⑥ 土席以上服改所半切桶ニ水を入
かいけ三本添居り置候事
- ⑦ 御燈籠類御道具入被置候事
- ⑧ 御滞棺所式間ニ三間妙永寺江入口より式間余
南ノ方ニ建
御前後ハ白張提灯四つ燈候事

- ⑨ 御滞棺所より本門迄藁蕙三枚並ニ敷候事
- ⑩ 妙永寺入口より安国寺馬場入口角迄並木之外通ニ御幕
ニ而
張切ニ相成其内通り道ニ相成候事
- ⑪ 下馬口外左右御紋付大丸御提灯朝より左右ニ
燈候事
- ⑫ 御物頭衆御警固所夜ニ入候得ハ
御紋付大丸御提灯二つ燈候筈之事
- ⑬ 下馬口より橋際迄左右ニ白張提灯四拾張燈候事
- ⑭ 御家老衆提灯燈方詰小屋
- ⑮ 両御末家御一門衆提灯燈方詰小屋

第5節 高麗門一帯の石造遺構について

石垣技術研究機構 高瀬哲郎

今回、鹿児島本線高架化に伴い、熊本城域の南西部を限る要衝地「高麗門」跡周辺に於いて、それら防御施設を主な対象とする事前発掘調査が実施された。この一帯は、いくつかの熊本城下絵図（永青文庫所蔵史料など）で確認してみると、城下・城内へのひとつの関門となる「高麗門」とその南側周辺に建立された「安国寺・禅定院（禅定寺）・智雄院（妙永寺）」などの寺院、それに高麗門からこれらの寺院或いは細川家菩提の妙解寺へと至る「参道」などの変遷が窺えるのであり、地域の人々には、特に「高麗門」の存在が今も強く伝承されている。

さて、その係る発掘調査では、高麗門に関連する貴重な遺構群はもちろんのこと、その他に石造の橋・石垣・石組み排水溝・堀跡も発見されており、熊本城存立時期に留まらず、明治期以降の一帯の変遷をも窺い知れる成果が得られている。本論では、これらの石造りの遺構に関する評価について、ひとつ提示することとしたい。

1) 調査区域に於ける確認

〈石垣〉

調査対象となった鹿児島本線の線路敷の区域に於いては、高麗門推定地点の西側とそこから鉤形に折れて南側へ下る延長区域（約 180 m）で、次のような石垣遺構が発掘されている。この一帯の状況として、線路敷の基礎部が当該期の堀・参道とおよそ重複した位置で設定されていることから、消滅した箇所があるものの、遺構群の多くは現地表下に埋没したままで残されていた。

【高麗門西側の石垣】

歴史的にみると、高麗門区域の外側（西側）は北から南へ流れる熊本城外堀で囲まれていたようである。現地でも、その流れを元とした水路の東側護岸に石垣が配置されている状況を確認し得ている。

（構築技術の特徴）

「石垣配置が出角を造って屈曲するのではなく、南西隅部を中心に曲線を描いて積み上げられている点」と「用いた石材がほぼ規格化された方形の間知石・割石であり、それらをいわゆる谷落とし積み（矢羽積み）

とし、互いの合わせに際しても隙間なく精加工を施している点」に、その技術的な特徴が窺える。つまり、これらの構築技術を鑑みると、江戸期のいわゆる伝統的な様相はまったく見受けられないのであり、おそらくは、近現代に下った或る時期に為された工事のものであろう。

そこで、ひとつの課題となるのは、絵図によれば、この区域の東隣りには高麗門を構成する檣台石垣とその西側の堀、そして門前で屈曲して南側へ真直ぐに流れ下る堀がそれぞれ描写され



PL.153 高麗門西側の石垣と堀

ている点、また、発掘の成果としても「高麗門」に関連する多くの遺構・遺物が一帯で発見されている点にある。つまり、当然、ここでも係る石垣・土塁などの存在が推測されるのであるが、今回の調査では、何故か前述した近現代の石垣しか確認されていない。或いは、調査区域外となる東側周辺にも何らかの遺構が埋没しているのか、後に、鉄道線路などによって何らかの構造的な改変を受けたのか、今後、それらの検証もひとつは必要となろう。

【高麗門南側の石垣】

調査区南側では、線路敷の東側で2～3段(高さ0.7～1m)に積み上げられた低い石垣が確認されている。現状では、それらは南側に延びる線路敷の路肩を補強する石垣となっている。その作業内容をみると、石材には矢による粗割りのままのもの、それにさらなるハツリの加工(ゲンノウで石材の表面を荒割りする技術)を施して石面を調整しているものもあるが、全体的には粗割りのほぼ方形を為している。但し、据え方自体は一樣ではなく、上段のものは石材を横長に並べていく布積みであるのに対し、下段の基礎では石材を縦方向に据え置いており、上下段ではやや違っている。単なる上下段配置の工法・構造上の違いに依るものか、ひとつの検討課題ともなる。

(石垣根切りと江戸期遺構)

今回の発掘調査に於ける貴重な成果として、一帯を南北方向に走る江戸期の新旧通路面(旧は加藤期・新は細川期)が新たに確認されているが、この通路遺構とこれら上下段石垣との関連性はどうかという点についても留意すべきであろう。

まず、係る通路一帯の整地土層(No.1・3・6土層図)をみると、これらの石垣は加藤期の路面と直接的には係わっていないことから、確かに加藤期の石垣ではない。しかし、その後に整備・拡張された細川期の通路面に対しては、その路面を切り込み、石垣を据え付けるための地盤掘削作業「石垣基礎の根切り」を行っていることから、少なくとも、石垣の構築時期上限は細川期であることが窺える。さらに、その裏込め状況を詳細にみると、この掘削・構築作業が一度に為されたものではなく、「作業の前後関係」或いは「新旧の積み足し過程」とも思われるまったく異なる工程を経ていることも確認し得るのである。

(上・下段の在り様)

以上のような「積み方の違い」「出土遺物」、そして「裏込め作業の在り様」などの諸点から捉え直してみると、上段石垣の「間知石とする石材加工」「石材のハツリ」「裏土の根切り及び裏込め石(粗割石を使用)」の様相はまったく新規



PL.154 東側石垣の構築状況



PL.155 同石垣の構築状況



PL.156 No.1 トレンチの土層断面



PL.157 No.1 トレンチの根切り状況



PL.158 No.3 トレンチの土層断面



PL.159 同トレンチの根切り状況

の程を呈していることから、細川期のものではなく、明治期以降に新たに構築されたものと推定される。

さらに、留意すべきは、下段の根切り作業とそれに係わる基礎石垣である。調査成果として、その下段石垣には「上段の新段階の根切り・裏込め作業がここまで及んでいないこと」「石材の縦積みの在り方」「根石据え付けの安定を図る為の玉石敷き」「玉石に依る裏込め」などの特徴をも有することを確認し得ている。つまり、この下段石垣は明確に当初段階に構築されたままの



PL.160 No.6 トレンチ土層断面と根切り状況

ものであり、或る時期、石垣は下段のみで構成されていた可能性も残されている。但し、下段と同じところに新段階の石垣が上部に積まれていたことを鑑みると、旧段階である下段の存在を認識し得た近接の時期に上段部も為されたものと思われ、その幾度かの改修を繰り返してきた状況として推定される。そのような係ることを考慮すると、本鉄道線路を敷設した初期段階の明治期前後であろうか。

要するに、それらの変遷の概略としては、当初の加藤期の通路→細川期の通路改修・整備→鉄道線路の敷設に伴う石垣の構築→近代の積み足し、という過程が推定されるのではないだろうか。

【南側通路の西側石垣】

高麗門から南側へ下る通路には、前述の石垣が東側に、そしてこの石組みの排水側溝が西側に配置されている。

その石組みの排水側溝であるが、東側壁は二段に組んでいるのに対し、西側壁は一段としており、路面よりも西側を低くすることで排水機能をより高めているようである。これらの構築に際しては、ほぼ方形に規格化された石材を用い、それらを整然とした布積みで据えており、先の通路東側の上・下段石垣とほぼ同様の技術を駆使している。特に、その西側壁の基礎石材の在り様をみると、石材の形状は角錐状の間知石という新たな加工技術のものではなく、粗割りの不定形なままに留まっており、やや古式の様相を呈している。東側石垣と同様に積み直しを受けている箇所がみられるものの、基本的には、やはり明治期を前後する頃に構築されたのであろう。



PL.161 通路西側の石組み排水溝

2) 調査区域外に於ける確認

今回の調査対象とされた線路敷区域だけではなく、その周辺に於いても石造りの施設をみる事ができる。

【石造の橋】

高麗門地点の南側に構築された石橋であり、現在も線路の踏切の一部として使用されている。その路面は新たな舗装で覆われているが、隠された下部構造をみると、いわゆる桁橋構造を為す石橋となっている。

(石橋の構造)

基礎の石組みとしては、まず、数本の角材を立てて橋脚（現状の橋長・径間は3間）とし、それに梁材を乗せ、さらに、その上に床石となる石材を並べ置いて通路面を造る簡素な構造である。しかし、橋脚の上流（北）側では、橋脚石材を広い面ではなく、角部を流れの方向へ向けた配置を採って水切り（水制工）としていること、下流（南）側では、橋脚の下部を補強する支保構造を採るなど、桁橋の構築としてはかなり整然と計画的に為されていることをそれぞれ確認できる。

(石材の加工技術など)

高麗門側と堀を超えた城外（寺院区域側）を連絡するため、当然、そこには何らかの橋（通路）が当初か



PL.162 現在の桁橋



PL.163 桁橋の詳細と水制（水切り）



PL.164 桁橋下部の石組み（床石）



PL.165 桁橋の橋脚・梁材に残る矢穴



PL.166 高麗門の檜石垣（黒塗り）と堀
（永青文庫蔵『妙解寺御門外図』）



PL.167 明治期頃の桁橋と堀
（『熊本県大百科事典』古写真）

ら掛けられていたと推定されるのであるが、絵図及び文献史料には、その通路下の橋のことなどは記されていない（絵図は平面図であり、路面の真下を描いていない）。しかし、明治期後半の古写真には、堀を渡る桁橋（径間は6間か）の様子をはっきりと写し出しており、その存置がそれほど新しくないことを明確に示している。そこで、石橋の構築年代を探るに於いて、ひとつの参考となるのがこれらに用いられた石材自体の「加工技術」・「線刻の印（文様）」の実態である。まず、石材であるが、その細長い橋脚・梁材・床石を構成する角柱には、各面に多数の矢穴（楔状）が残されている。このことから、用材の調達に際しては、ノミで矢穴を穿ち、その矢穴に矢を打ち込んで粗割りするという伝統的な石工技術が用いられていることが分かる。現段階に於いて、この「矢穴」というものは時期判定の標準資料とまでは成り得ていないが、係る石材に対して「時代が下るにつれて幅・深さともに小さくなる」という一般的な時代的傾向・変遷は凡そ窺い知ることができる。その「矢穴の大きさ」でみると、出現当初の桃山期後半段階では幅12～15×深さ10cmほどであったものが、明治期には幅3×深さ3cm程にまで縮小してしまうようである。本例では幅8×深さ6cm程で、熊本城に残る築城当初の矢穴（10×8cm）や近隣の妙解寺参道の石橋（10×6～7cm）と比べると、やや小さなサイズに至っている。また、「矢穴の形状」についても、当初段階は



PL.168 石橋石材に刻まれた刻印

幅広の台形状を為していたものが、やがて、江戸期前半には長方形状、そして江戸期後半（明治期以降も）は方形状へという変化の在り様が凡そ見て取れるが、本例は、江戸期前半の熊本城や妙解寺と同様に台形状を呈しているのである。

次に、その角柱のひとつには、ノミによって彫られた「L」字形の刻印が残されている。刻印は、桃山期後半～江戸期の時期を示すひとつの証ともされており、熊本城の石垣にもかなり多種・多様なものが刻まれている。現在、本例とまったく同じものは発見されていないが、同様のものとしては長堀・馬具櫓・本妙寺参道・古城地区などの江戸期石垣に「鉤形」の刻印として確認することができる。

(石橋の構築時期)

以上のような諸々の実態を鑑みると、この桁橋は江戸期前半に構築されたものであることが多分に類推される。つまり、現状をどのように見直そうとも江戸期後半には至らない時期を推定せざるを得ないのである。そのうえで、本遺構を高麗門と密接に関わる主要な通路の可能性を有するものとして、その価値を再検討する必要がある。

但し、そこで課題となるのは、明治期の古写真と比較すると、現況の状況が桁橋の東側半分程度に留まっており、その西側部分の残存或いは改修の可能性なども含めて不詳な点と、橋そのものの主軸方向が高麗門遺構と同じくするのかどうかという点にある。

※石橋・石垣に関する参考事例

諸事例の参考に、妙解寺参道橋・天草市祇園橋（国重要文化財、1833年構築）・人吉城御館御門橋（県重要文化財、1766年構築）・熊本城・本妙寺などを、以下に紹介する。

〈周辺各地に於ける桁石橋〉



PL.169 細川家菩提所・妙解寺参道橋



PL.170 同左・石橋の梁石材に残る矢穴



PL.171 天草市祇園橋



PL.172 同左・祇園橋の四角柱橋脚



PL.173 人吉城御館御門



PL.174 同左・御館御門橋の八角柱橋脚

〈熊本城の矢穴〉



PL.175 熊本城の西埋門



PL.176 同左 . 西埋門内部の角材と矢穴

〈本妙寺・熊本城の鉤形刻印〉



PL.177 本妙寺参道の鉤形文



PL.178 熊本城桜橋の鉤形文

第 6 章

総 括

第1節 調査成果のまとめ

今回の一次調査から三次調査までの一連の調査、工事立会、さらに専門調査員の各論考などによって、多くの重要な情報が得られた。ここではまず、それらの情報を特に今回の調査の主眼であった熊本城惣構の西端の門である「高麗門」、「土塁」、「堀」、さらにその総構の外にある加藤氏、細川氏の墓所とそこへ至る「参道」について以下にまとめる。

1 「高麗門跡」

(1) 発掘調査等の成果

この遺構は、一次調査及び二次調査によって検出した遺構である。本報告では「高麗門調査区」としてまとめている。さらに、高麗門調査区のすぐ北側に設けた「新馬借 A-1 調査区」における遺物の出土状況、暗渠排水工事の際の工事立会の際の石垣らしき石材の出土等、「高麗門」に関係するような知見が得られた。それらを基にさらにまとめることとする。

一次・二次調査で得られた調査成果について検討委員会での結論を以下に要約する。

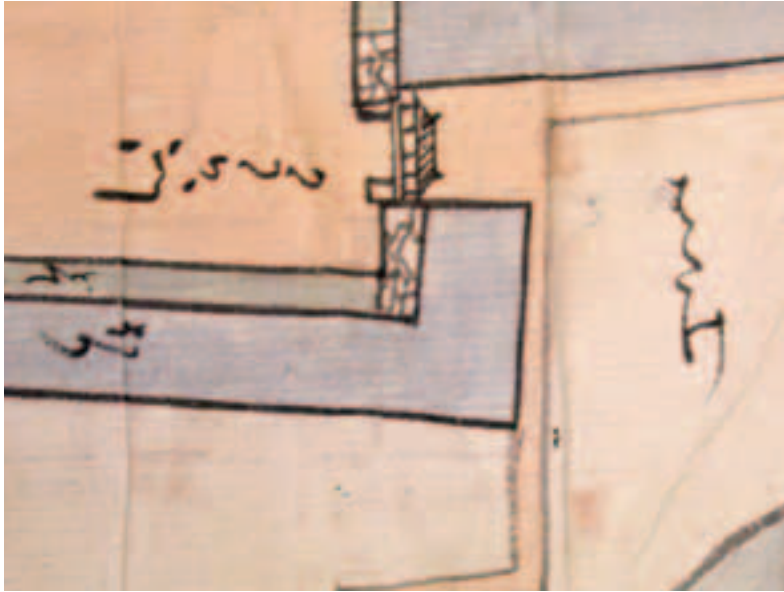
- ・西南戦争で消失したと考えられる高麗門の土台の範囲を確認した。その時の焼土で覆われた状況を確認した。その規模は、南北4 m以上。東西3 m以上である。
- ・調査範囲で確認した範囲は、古地図から推定される、L字状に配置された高麗門（細川期の櫓門）の範囲に該当する。
- ・柱を載せる礎石を固定するために、礎石の下部に構築された直径80cmの根固めがあり、角礫や瓦片を敷き詰めている。その根固めの規模から、礎石の大きさとその上に立つ相当大規模な柱の存在とそれを必要とする構造物が存在したことが分かる。
- ・焼失した門の下部にも細川期の堆積層があり、高麗門が連綿と設置されていた場所といえる。
- ・出土した瓦は、加藤期から細川期までのものがあつた。取り上げたでも1,000点以上となる。特に、櫓台部分と推定する北側と北西側に集中して出土した。これは、瓦が葺かれる建物の存在を傍証するもので、まさに高麗門の存在を窺わせる。
- ・今回確認したのは、細川期の高麗門の遺構で、L字状に屈曲した櫓門及びそれに関連する土地造成の一部である。土台部分の版築もしくは盛り土等の状況から何度かの建て替えが考慮され、あくまでも最終期の遺構の状況と考える。

次に、三次調査で分かったことをまとめる。高麗門調査区のすぐ北で調査した新馬借 A-1 調査区では、調査当初、瓦溜遺構と考えた遺構がある。調査区西側で、現代の側溝工事によって攪乱された埋土や、近現代の遺構を除去してみると、瓦を多く出土する層を確認した。この層は、西側に急激に落ち込むことから「高麗門」及び「土塁」の西側にあった堀の落ち際に、「高麗門」が破却された際に落とし込まれたものと推定した。

「高麗門調査区」でも二次調査の際、調査区北側でも同様の状況があることを把握していたが、A-1 調査区の状況は、瓦類の出土はさらに多かった。出土する瓦は、高麗門調査区で出土したものとほとんど同じであった。また、土砂に混じって漆喰なども含まれていた。調査を進めると、他の遺物も混じることから屋根瓦をそのまま落とし込んだのではなく近くで落としした後、さらに堀に向かって落とし込んだと推定している。時期的には江戸末期から明治初期の陶磁器などが含まれる所から明治初めの頃かと考える。

また、暗渠排水工事の立会の際には高麗門調査区の南西側付近で、高麗門の石垣の一つではないかという直径1 mを超える矢穴のある石が出土している。矢穴は幅が10cmを超えていた。

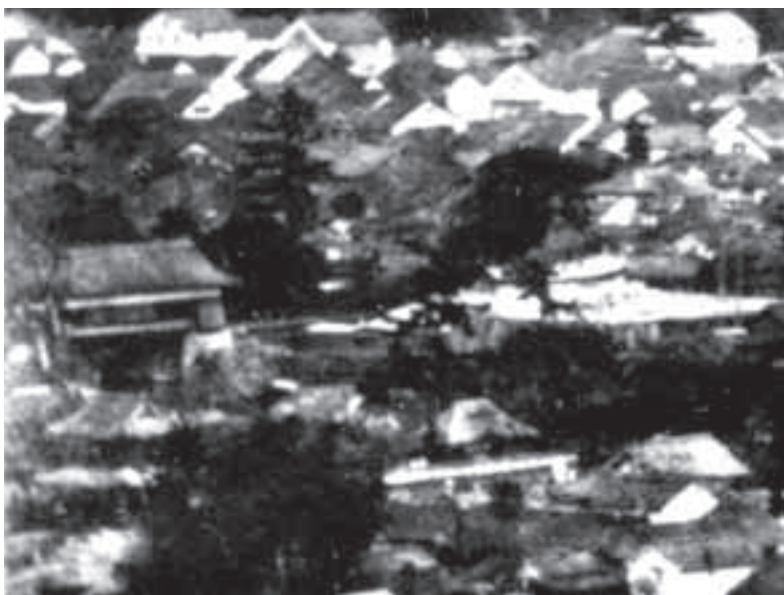
この他、整理した瓦の中に谷丸瓦や谷平瓦が数点含まれていた。これは、屋根が直角に屈曲する際に谷部



PL.179 熊本屋舗割下絵図（部分）
（熊本県立図書館所蔵）



PL.180 絵図中の高麗門
（熊本県立図書館所蔵）
（300 高麗門土居の絵図）



PL.181 古写真に見る高麗門
（富重寫眞所蔵）

が形成されるため、その部分に瓦を葺くために軒平瓦や軒丸瓦を斜めに切ったような瓦で合わせる必要があって作られたものである。そのような瓦が出土するところからも高麗門が絵図のように屋根がL字形に屈曲していたと考えられる。

(2) 「高麗門」の変遷

次に文献や絵図史料などを参考にしながら、「高麗門」の形式変化についてまとめる。

「高麗門」は北野専門調査員の論考によれば、築かれたときは正しくその名のとおり高麗門形式の門であったと推定されている。寛永6～8年(1629～31)頃の描かれたと推定されている『熊本屋舗割之下絵図』(熊本県立図書館蔵)(PL.179)にはL字状に屈曲していない門として描かれている。この絵図には、この門の傍に「かうらい門」という名称をわざわざ書き込んでいるところを見ると、何か重要な門であった可能性がある。この絵図は、寛永9年に細川忠利が肥後に入国した際に、家臣の屋敷割に使用されたと伝えられている。絵図自体はその前に描かれていたようで上記の年代が推定されている。この史料の他にも、明暦(1655～58)前後のものとしてされている県立図書館蔵の「295 高麗門の絵図」(番号は目録番号。以下同じ)にも、『熊本屋舗割之下絵図』とよく似た高麗門が描かれている。ところが、制作が明暦2年(1656)～寛文末期(1672)と推定されている「278 高麗門 塩屋町之絵図」では、L字形に描かれている。ほぼ同じ頃の絵図の違いは何を示すのか今後の課題である。

明暦頃を境として、完全に「高麗門」はL字状に屈曲した櫓門として絵図に描かれている(PL.180)。ただ、県立図書館蔵の「各絵図を比較すると櫓門の形や土台の石垣の状況、場合によっては絵図における門の相対的な位置が微妙に異なっている。これが絵図の描き手による表現の違いなのか、実際の形態変化があったのかは文献等での検討も必要であろう。

「高麗門」の実際の最後の姿を捉えているのは、古写真(PL.181)である。富重利平氏によるもので、明治初期のものと考えられる。写真では左端に辛うじて写っている。明治の初め頃のものでこの後取り壊されたものであろう。かなり小さく分かりにくいですが確かに櫓門であり、奥に土塁らしきものも見える。L字形かどうかは不明である。さらにこの写真は後述するが、熊本城惣構の南門である三丁目御門の姿も捉えている。

この後、この場所の一部は九州鉄道の一部となり、国鉄、J Rの用地となり現在に至っている。

2 土塁

(1) 発掘調査の成果

次に惣構の外郭としての役割を担う土塁についてまとめる。今回の調査では、新馬借B調査区で辛うじてその一部を確認した。

江戸期の絵図によれば、高麗門より北側では高麗門からやや西側に逸れながら、北方向に延びていくように描かれている(甲元氏論考絵図参照)。現在の場所に当てはめて追っていけば、土塁は高麗門踏切から一新踏切付近まではJ Rの線路部分とほぼ重なっていくものとする。一新踏切を越えた付近で、絵図によって表現は異なるが、堀が一新小の西側付近で東側に曲がるの合わせて一旦東側に逸れ、一新小のグラウンドの中央付近で、再び北上するように描かれており、そのようなコースを取ると推定されている。実際、熊本市の調査等でも、この推定地付近で堀跡と考えられる遺構を確認している。

今回県が調査したのは、一新踏切南側のJ Rの路線内で土塁線に沿った場所である。明らかに土塁の一部として確認したのは、新馬借B調査区の24年度に調査した部分で、一新踏切の南80m付近である。中世の溝遺構の埋土や配石遺構の上層で版築された層を確認した新馬借B調査区付近から北側は旧地形で見ると地形的に低くなって行き、一新踏切越えるとほぼ湿地帯になっていくようである。そのような地形的条件もあって南側よりも強度を高める必要があつてに作るためにか、入念な版築が施されたのであろう。

一方、A-1 調査区は高麗門調査区の北側隣接地であり、高麗門に隣接する土塁が存在するものという想定で調査を行った。ところが、明確な土塁の盛り土と考える層は確認できなかった。ただ、16世紀後半から17世紀初期の遺物を含む層が出土することを考慮すれば、加藤氏が高麗門や土塁を築く時代に近く、何らかの関係がある可能性もある。

また、暗渠排水工事の立会いの際に、新馬借遺跡にかかる箇所ですら土塁が検出できないか観察を続けたところ新馬借B調査区で配石遺構が出土した箇所に東側に同じ遺構が伸びており、その上部に版築跡を確認した。その他では、掘削した場所が土塁層よりレベル的に下であったためか、全く確認できなかった。

(2) 絵図・古写真等からの土塁推定

新馬借B調査区からは明確な版築を確認し、土塁があったのは確かである。しかし、A-1 調査区は可能性はあるが確実ではない。そこで、絵図から土塁線の検討をしてみる。

加藤期にすでに土塁は築かれていたと考える。先の『熊本屋舗割之下絵図』には加藤期に遡る土塁の形状が描かれている。それによれば、この調査区付近のほぼ江戸期全時期に渡る土塁線がほとんど変化していないことが分かる（甲元氏論考参照）。多少一新小付近の堀の流れに合わせてように絵図によって異なりがある。「高麗門」より北側は一新踏切まではほぼ鉄道線に重なり、一新小付近で東へやや屈曲し、さらに北上する。「高麗門」の南側は今回の調査区の東側を堀に沿って南へ伸び、坪井川が南へ屈曲する付近で大きく東側へ曲がり、それが今度は坪井川沿いに延びていく。基本的にはこの線上である。現在、高麗門踏切の南側では土塁があったとされる場所は、ほとんど削平されてしまい、当時の土塁幅も高さも不明である。

明治初期の古写真には、わずかながら推定できる材料はある。甲元氏の論考にあったようにかなりの大きさがあり、船場山といわれる小山状の高まりがあったと推定される。高麗門の写った写真のすぐ右横の奥に人家の屋根を隠すように右側に続く線を土塁とすれば、普通の民家の軒先が隠れるほどの高さ程度はあるようである。高さは民家の軒の高さが3m程度とすれば、3～4mほどはあった類推できよう。さらに幅については、高麗門南側各調査区の東に、現況の排水路を挟んでやや低い土地が南へ長く伸びている。その東側は、その土地よりも1mほど高くなり帯状に南側へと伸びる土地がある。現状は、民家・駐車場などとなっているが、絵図等から考えると土塁跡と推定するのが妥当であろう。現在は、東側にある道路が車道となって広がっている可能性を勘案し、最下部の幅を約10m程度と推定できる。これは甲元氏の論考にあった中津城の土塁とのあり方から推定した数値に近いものである。

3 「堀跡」

(1) 発掘調査等の成果

高麗門踏切より北側では、高麗門調査区、新馬借A-1調査区、排水路工事立会などで確認した。

高麗門調査区では鉄道の工事等により堀の肩部分は失われていたが、3mを超える深さあることが分かった。また、A-1調査区では、先に述べた「高麗門」の遺物の落ち込みから堀の肩付近に当たると考える。さらに暗渠排水路工事の立会いでは、掘削深度が3mを超え、底に溜まる黒色の腐植土層を抜くと硬く締まる層が出現することからそのやや上部が堀の底と判断した。

さらに暗渠排水路工事及び電気埋設工事の際に、堀の改変にかかる遺構を確認した。平成23年度の高麗門調査区の調査の際から本来「高麗門」から惣構の外である妙解寺参道へ出る際の土橋が確認できなかったが、その状況はどうなったのかということ考えられる道（通路）があったはずである。ところが、調査区の南側は鉄道のための橋台が作られ間には土管が埋め込まれていた。この土管を撤去し、今回新しくボックスを入れる範囲を掘削中に「高麗門調査区」にあった橋台が出土した。さらにその奥に橋台の石垣とは異なる積み方の石垣を確認した。以前の電気のボックス工事でも出土していた石垣であり、明治以降ではあるが、

鉄道敷設以前のものである。電気工事立会の際には A-2 調査区出土の S001（暗渠排水）の続きを高麗門調査区側でも確認し、さらに石垣の裏込めと石垣を確認した。石垣は切石を粗く布積み状に積んだもので、護岸的な役割を担ったものである。裏込めには明治以降の陶磁器類が混じり近代以降のものと考えた。それが桁橋の方まで続くことから高麗門踏切の北側で「高麗門」の南北の堀が一つにつながられ、その時期は明治になると考える。

高麗門踏切より南側で堀の一端を確認したのは、予備調査では1トレンチ、3トレンチ、6トレンチで、本調査では A-4 調査区、A-5 調査区である。このうち3トレンチと A-4 調査区は重なる。これらの調査区では、鉄道が単線時に設けられた石垣があるが、その東側に落ち込みを確認した。調査区の制限から掘削できたのは現在の地表面から2 m程度までであった。

また、堀の落ち際部分と法面であった。肩部分は鉄道石垣の構築部分に重なっており掘削されているか、石垣上面とほぼ重なると考えられた。A-4、A-5 調査区では法面に白色の粘土状の土が地山を掘削した後に貼られていることが確認できた。これが当初からのものかまでは確認できなかったが、護岸のために行われたものであろうか。

高麗門より南側の堀の埋土状況は北側の状況とかなり異なる。北側は土層を観察すると上から下までさほど違いのない埋土で、ある時期に一気に埋め込みが行われたようである。それに対し南側ではいくつかの層に確実に分層ができ、自然堆積と客土が行われた状況を確認した。

(2) 調査、絵図・古写真等から推定する堀の変遷

絵図では、「高麗門」の南北の堀は独立したように描かれている。特に、甲元氏論考の PL.122、PL.123 に見られる高麗門南北の堀内部の色が堀の溜まった水を示すとすれば、「高麗門」の南北で色分けがなされ、南側のより「高麗門」に近い部分では色が薄く細くなっているのに対し、北側堀の部分では青黒く強く塗られている状況がわかる。これは堀が高麗門を挟んで繋がっていないことを示しているのではなかろうか。

堀自体は今回調査時や工事立会で経験したことであるが、現況の地表面から2.5 m程度を超えて掘削すると必ず水が湧く。これはこの地の水位がこの付近にあることを示している。江戸期と現在が同じ水位とは限らないが、さほど違いはないと仮定すると深さが3 m程度あった堀には湧水によって常に水があった可能性がある。それに雨水等も加わればさらに水量は増えたのであろう。

それが明治20年代前後には古写真（「熊本県大百科事典」所載、高瀬氏論考 PL.167）、地図ともに南北の堀が繋がり川となっている。分けられていたことで何らかの不便さがあり、明治につながれたのであろう。最初は A-2 調査区の S001 の暗渠排水路として、ついには堀同士を繋ぐ工事によって一つになったのではないかと推定している。

その後堀は何らかの都合により埋められ、一部は暗渠として、一部は狭い排水路として水を流す機能を持ちながら現在まで続いている。

では、江戸期の堀の幅はどの程度あったのであろうか。絵図によっても幅の描かれ方は様々である。ここでは調査によって堀の肩付近が確認できた箇所について推定してみる。

花岡山・万日山 A-4 調査区、A-5 調査区では、土塁の項で確認した土塁の西側線から各調査区で確認した堀の肩付近に当たる箇所まで単純に計測してみたところ、約20 mを測った。これがそのまま堀の幅とはいえないが、古写真に写された川状になった様子を見るとそのくらいあってもおかしくはない。

4 参道

(1) 発掘調査の成果

今回の調査ではこの参道跡予備調査の各トレンチ、花岡山・万日山 A-3 調査区から A-5 調査区まで、さ

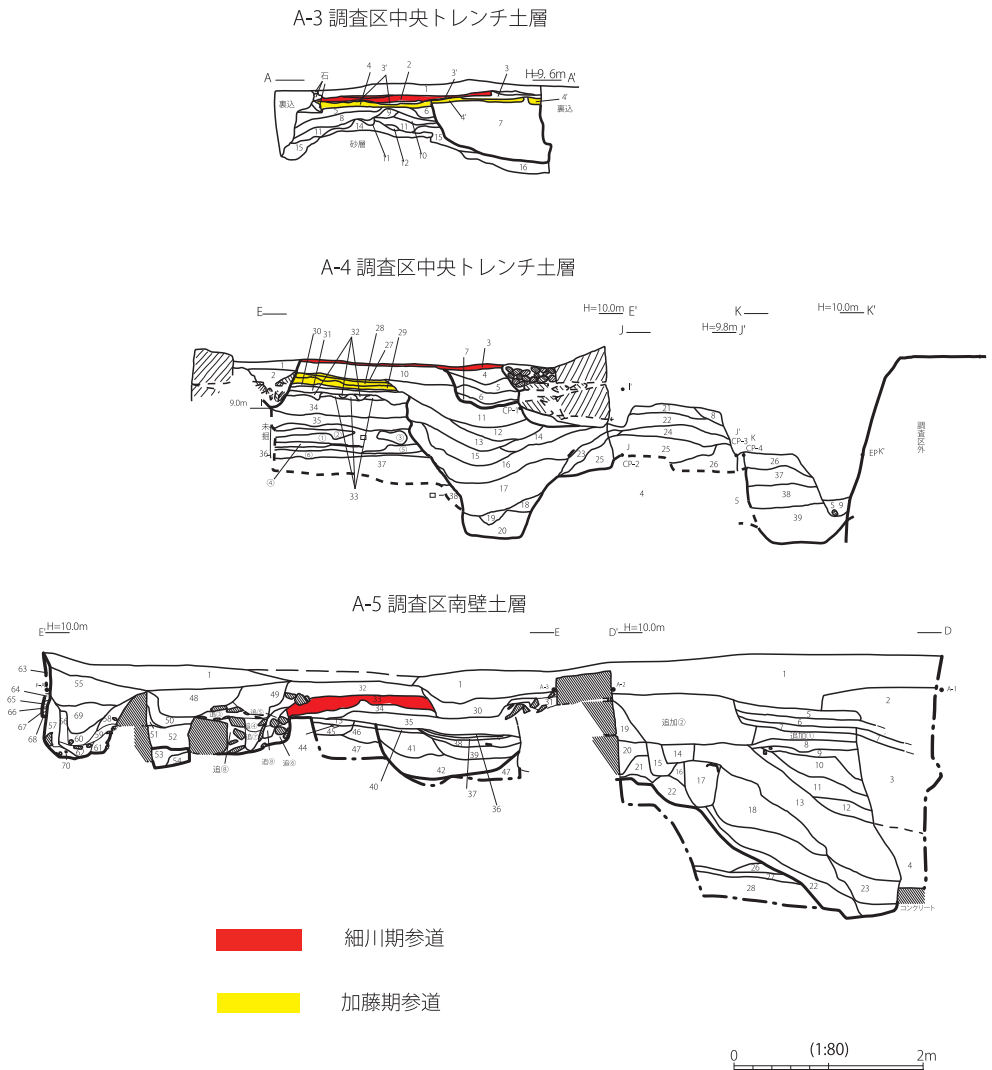


Fig.144 各調査区で検出した参道

らに追加調査として実施した下馬天神踏切以南の試掘調査 A-6 調査区の No.1 トレンチでも確認できた。

今回確認した遺構としての参道跡は、粘質土を平坦にした路面に敷き詰めて道路面とし、結果として硬化している層面の広がりとした。各調査区では鉄道に関係する高麗門踏切以南から下馬天神踏切までの間の石垣列の間でいずれも検出した。残存状況は道路面下の土層状況により異なる。A-4 調査区と A-5 調査区では層的な広がりをつかめた。特に A-5 調査区では調査区西側の壁際でも硬化した道路面を検出した。その一方、A-3 調査区では地山が砂質もしくは砂層であるため、常に水の浸食により何度も補修の繰り返された跡を確認した。道路を確認した調査区では補修孔に加えて多くの遺物を伴う土坑を検出した。A-3 調査区に見るような窪んだ場所を逐次埋めたような土層状況ではなく、掘ってすぐ埋めたような状況の見られる土坑が多い。その埋土中には多くの陶磁器、土製品などの破片のほか貝類もあり、ごみ捨て穴の可能性が高い。出土遺物は明治以降のものが入ることが多いが、中には近世の範囲に収まるものもあり、参道に対する民衆の思いの変化が考えられる。

道としては、明治に入っても使用されていたが、A-5 調査区には土層中には西南戦争時の水攻めの可能性が考えられる砂層を検出している。

加藤期の道跡として検出した層は A-4 調査区で検出した硬化した黄褐色の粘質土層がある。面的な広が

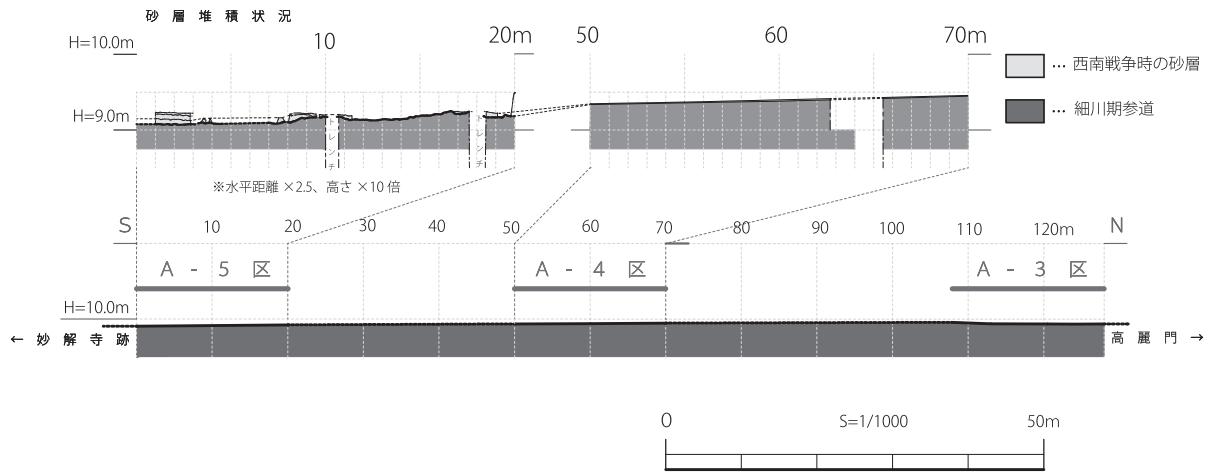


Fig.145 参道断面推定図

りを確認したが、調査区の北側付近で部分的に検出できたのみであった。同じ層は土層では A-3 調査区でも確認できたが、ごく一部に見えるのみで面的な広がり確認できなかった。

A-4 調査区で確認した加藤期の道路面を切っている溝状の遺構があり、その出土遺物として上層では近世のものが主であるが、下層になると 16 世紀後半～17 世紀初期のものが主となり、人骨の頭部も 1 点出土している。この人骨は女性のもので刀創が無数に入っていた。中世的な趣のある溝である。加藤清正の入国頃のものとしても支障はないと考える。

さらに、下馬天神踏切以南に設けた No.1 トレンチでも参道跡を確認した。No.2 トレンチでは鉄道工事で削平されたか、もともとないのか確認は得られなかった。このトレンチからは埋葬された近世人骨が出土したことから考えると道はこの付近ではそれていた可能性がある。

以上のことから、確認した調査区を繋げば、長さ 150 m 程度の長さまでは参道を確認したと考える。

(2) 発掘調査結果、絵図、古写真等による参道の変遷

発掘調査で今回確認したのは主に細川期の参道である。加藤期の道は一部の調査区で検出した。

加藤期の参道付近の道について推定できるものに『熊本屋舗割之下絵図』がある。「高麗門」外には加藤家縁の寺である禅定寺、妙永寺、安国寺がありそこに行くための道が描かれている。寺の配置は現在とほとんど変わらないとすれば、道も堀沿いに描かれるところを見ると今回確認した道と重なっていてもおかしくない。ただし、安国寺までである。

続く細川期の道は細川忠利の墓所を花岡山の麓に設け、妙解寺を建立して以後は、絵図にそこまでの参道が描かれている。先代の加藤期のものよりかなり整備したと考える。

絵図を見ていくと妙解寺まで高麗門から直線的に伸び、妙解寺前で直角に曲がり寺に入る描き方と途中でやや西側に曲がっていく描き方と表現が異なる。さらに文化 8 年から文政 7 年に描かれた絵図では何らかの門らしきものが描かれ道羽場が細くなっているものもある。このことは道そのもの改変を示しているのか、表現がより正確になったのかわからない。ただ、明治初年に新三丁目橋から壺井川沿いに参道方向を見た冨重利平撮影の古写真(長崎大学図書館蔵)を拡大してみたところ、絵図に描かれたような構築物と木製の鳥居に似た門らしきものが見られる。これが絵図の示すものとすればその先から徐々に曲がるのであろうか。すると、下馬天神南側の No.2 トレンチ付近まではまだ道は直線的に伸びていた可能性がある。ちなみにこの写真の鳥居様の門の手前に船着場らしきものがありその周辺にかなり簡便な石垣が護岸のために築かれて



Fig.146 高麗門・参道・堀・土塁復元図

いる。この石垣や、船着場は絵図には記されたものはない。

さらに西よりに屈曲した道は、妙解寺前にあった臨流院方向へ斜めに入り、そこで妙解寺へと曲がっていている。実際明治の古写真に参道方向から臨流院を撮影した写真があり、その写真からも斜め方向に臨流院に向かう様子が見て取れる。道幅はかなり狭くなっているように見える。

その後明治20年代には、参道跡に鉄道が走るがその際、高麗門付近から妙解寺前付近までほとんど直線的に進み、妙解寺をやや過ぎたところで熊本駅に向けて曲がることとなる。また、側道は線路の西側に沿って作られている。

以上の最後に、発掘調査と絵図や地図などを基に参道の幅を想定してみる。A-4調査区、A-5調査区で確認した堀への落ち際から、新幹線建設前の側道の西側までを当時の参道の範囲として計測すると約10m程の数値を得た。実際はこの幅はもっと狭かった可能性があるが、最大見積もってこれほどであろう。

5 まとめ

以上の調査成果と各種絵図、古写真などの資料を元に検討したところ、高麗門、土塁、堀を他の部分を踏まえながらもそれぞれの場所や規模を推定してきた。ここでは、それらをまとめる。

まず、高麗門は高麗門踏切近くにあったのは確実である。今回の調査区ではその一部にかかったものである。「高麗門」は今回の調査範囲に加えてさらに調査区の東側に中心域が存在したと考える。

現在、高麗門の碑が立ち、高麗門関係の礎石とされているものが出土したのは、現在の石屋の前に置かれている地藏尊の祠の付近という。とすれば、高麗門の土台の一部が出土してもおかしくない。

次に堀であるが、各調査区等で堀の肩に当たる部分を確認し、高麗門西側の工事立会の際に、堀の底と考えられる部分を確認することができた。その堀の底は、現在の地表面から3m程の深さであった。この深さになると、自然に湧水する。当時の堀は水堀になっており、この自然湧水によっていた可能性がある。絵図や地形などを考慮して幅は約20m程度と考える。

次に土塁であるが、これも土塁そのものは今回の調査では新馬借B調査区でその一部が検出されたのみである。ただ、絵図や古写真などを基にかなり大胆に想定すると、基底部は10m程度であろう。高さについては現在では不明といわざるを得ないが、明治期の古写真等によって想定できる可能性は高い。

参道とその東側の堀と境付近は、今回の調査区範囲でほぼ特定できた。しかし、下馬天神から妙解寺に至る部分については、絵図により表現が異なり、実際にどうなっていたを知るため、再度追加調査を行ったが、1トレンチでは参道の延長を確認したが、2トレンチでは確認できなかった。これが、絵図に描かれている参道の屈曲の前後をしめすかどうか、考慮すべきことである。

以上の推定と絵図、古写真などを参考にした細川期の最終末期頃の状況を復元し、Fig.147として示す。

第2節 熊本城惣構と発掘調査

1 熊本城惣構における門・土塁・堀

今回調査した範囲は近世における熊本城の惣構の西の外郭線の一角に当たり、惣構の要素としての門、堀、土塁の位置を一部であるがほぼ確認した。

熊本城惣構には、中心となる城郭部分と城下町が含まれ、それを土塁と堀によって囲い込む。惣構から外へ出る場所には門が設けられ、周りに河川等利用した堀がある場合には橋を架ける。熊本城の惣構でも内部には中心となる熊本城の城郭部分とその廻りの武家屋敷、町屋などの城下町があった。新町一帯は町屋を主とする城下町の一部である。

この熊本城惣構はすでに加藤期にはその基礎が出来上がっており、加藤氏から細川氏が受け継いだとき、細川氏はほぼそのまま導入し、人口増加等による居住場所等が不足する場合に徐々に惣構の形を変え、拡張していったようである。

今回の調査に当たっては、文献はもとより江戸期の絵図、近代以降の地図等、古写真が発掘調査の成果と共に活用することで遺跡の様相と性格をより深く掴むことができた。これには、細川氏の永青文庫史料、県立図書館蔵史料、富重写真所や長崎大学図書館に残された古写真などを活用することで、発掘調査のみで得られない情報が得られ、それにより歴史的な復元を行うことに有効であることを示している。特に古写真は、江戸末期から明治初期の状況をそのまま画像として具体的に見せてくれる。

熊本城惣構の南門として「新三丁目御門」がある。先に富重写真所蔵の高麗門の写真を提示したが、この同じ写真にはこの城門が写り込んでいる(PL182)。門の内側が遠目に見える。さらに長崎大学図書館所蔵の古写真には内側からの「新三丁目御門」そのものを、その当時のまま現在見ることができる。この写真を見ると、この城門が熊本城の中心城郭部の櫓門に決して見劣りのしないものであることが分かる。しかも写真を拡大すると上の軒先部分の平瓦にあたる場所にはいわゆる「滴水瓦」が葺かれ、正面の平入り部分のみならず、妻部分にも葺かれている。この写真は高麗門での瓦葺きの状況を考える際の参考になるし、絵図などと比較すると、高麗門の土台部分、石垣や建物の構造を考えるうえでも参考にもなる。

また、土塁・堀についても古写真・絵図等により当時の状況をつかむことができる可能性が高い。

今回遺構を確認した熊本城惣構の一角は熊本城城郭と一体のものである。さらに他の場所にも外郭線部分に配された土塁、堀、門はあり、熊本城惣構としての熊本城の把握が必要であろう。絵図や古写真を参考に場合によっては発掘調査を実施し、現状把握を行い遺跡の保護への対策が急がれる。

2 妙解寺と参道

高麗門から惣構の外側に出て、細川氏の菩提寺である妙解寺まで繋がる参道を確認した。この参道は、惣構の外側ではあるが惣構の内部同様に重要な道であった。そのため、稲葉氏の論考にあるように必要に応じて管理がなされていた。調査では、その道遺構である硬化面を幸いなことに鉄道路線の下に眠っていたのを確認したのである。また、加藤期の道も一部だけ確認できた。この道は、自然にできた道ではなく菩提寺への参拝のための道として造成・整備されたと考えられ、路面を常に管理されていたと考えられる。江戸期の絵図を見れば、高麗門を境として外界に出て死者である先祖のいる妙解寺まで向かい、その先はないように描かれる。妙解寺までの専用道である。

藩主一族の葬儀の際の様子が稲葉氏の報告にまとめられている。参道の様々な場所に葬儀・法事の際にそのように配置されどのような役割や行動を執るかが記録されている。これらの記載がこの参道を理解し、今後活用する際の助けとなろう。



PL.182 高麗門・新三丁目御門遠景



PL.183 新三丁目御門近景



PL.184 新三丁目橋から見た参道
(長崎大学図書館蔵)



PL.185 新三丁目橋から見た
参道 (中央奥拡大)
下馬口付近
鳥居状の門・土塁・船着場・
石垣等が見える。



PL.186 296 塩屋町の絵図
(文政9年(1826)製作)
(熊本県立図書館蔵)
絵図右下に船着場・土塁

また、今回下馬天神から妙解寺まで至る道筋を確認することはできなかった。ただ、稲葉氏の論考に引用された絵図では下馬天神よりさらに南に下馬口が設けられ、門らしきものが描かれている。これが他の絵図に描かれ、先に述べた明治初期の写真に写り込んだものと同じなら、先のとおりこの付近で屈曲すると考える。

PL.184 は、長崎大学図書館が所蔵しているマンスフェルト関係の古写真である。この写真は新三丁目橋から参道の方を写したものである。よく似た構図の富重写真所蔵のものがあるが、これも富重利平によるものであろう。この写真の中心付近奥を拡大したところが PL.185 である。そこには、鳥居のように木を組んだ門と、その奥に見える低い土塁状の構築物、手前には船着場と石段、右手前には低い石垣などが見える。これを、稲葉氏の論考で取上げられた妙解寺御門外図の PL.136、熊本県立図書館蔵の「296 塩屋町の絵図」(PL.296)などを比較すると、写真に見える土塁状の構築物はすべてで確認できる。手前の船着場の石段は PL.186 をよく見ると描き込まれている。松の木の生えているところまでかなり忠実に描かれている。また、低い石垣についても PL.186 には描かれている。実際に写真に写っている状況が江戸期と全く同じとは言えないが、マンスフェルトが熊本にいた期間は明治の初期であり、江戸期の状況とほとんど変わらないと考える。江戸期の絵図に描かれたものと写真に写っている状況がこれほど類似しているとする、この絵図に描かれている状況は事実に近いものと考えることができる。とすると、絵図ではこの土塁状の構築物のある場所から妙解寺の門まで続く道が屈曲していく。稲葉氏の提示された史料に描かれた位置も PL.186 ほど写真と類似はないものより道の状況を詳細に描いているものと考え古写真により近いと考える。PL.186 と同じような範囲を描く絵図は多々あり、それらを丹念に見ることで全て正確ではないにしてもある地点は正確に描いている可能性がある。絵図の表現もどこに主題を置くかで描く内容が異なると考えられるので、それを見分けて考察に利用することが必要と考える。これは古写真にもいえることであろう。

第3節 今後の課題

今後の課題として以下にまとめる。

- ・今回確認した遺構が熊本城惣構の西側部分の一角を調査し、熊本城惣構の一部として一体的に考えるべきである。
- ・今回調査した「高麗門」は、東側にまだ広がる可能性があり、さらに確認する必要がある。
- ・土塁・堀についても絵図・古写真等から推定された箇所をさらに確認するための調査が必要である。土塁の裾部、堀の肩などはまだ、調査することができる可能性がある。
- ・下馬天神以南の参道の位置を特定すべきである。

このような課題を踏まえ、保存のできた箇所と今回の周辺地を含めた一帯を熊本城の惣構としてどのように考え、またその範囲を特定していくかが、さらなる課題と考える。惣構は南、東、北と延びており、また、その中に存在した城下町も含めて、文化財としてどのように保護しつつ、現代そして将来の人々に受け継がれ、生かされていくかということが最終的に課題となろう。

報告書抄録

ふりがな	クマモトジョウアトイセキゲン (シンバシヤクイセキ、ハナオカヤマ・マンニチャマイセキゲン)							
書名	熊本城跡遺跡群（新馬借遺跡・花岡山・万日山遺跡群）							
副書名	JR 鹿児島本線外一線連続立体交差事業に伴う 新馬借遺跡・花岡山・万日山遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告 第 303 集							
編著者名	坂田和弘・師富成香・永松 望							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒 862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 1 8 番 1 号							
発行年月日	2014 年 3 月 26 日							
フリガナ 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
クマモトジョウアト イセキゲン 熊本城跡遺跡群	クマモトシチュウオウク シンマチ・ヨコテ 熊本市中央区 新町・横手	43201	206	32° 47' 00"	130° 41' 36"	20111101 ～ 2012831 20120907 ～ 20131130	新馬借遺跡 3,372㎡ 花岡山・ 万日山遺跡群 3,300㎡	JR 鹿児島本線 外一線連続 立体交差事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
熊本城跡遺跡群	門跡 堀跡 参道跡	弥生 中世 近世 近代	土塁 配石遺構 堀 溝状遺構 土坑 参道跡	1 1 2 8 30 1	弥生土器 瓦質土器、青磁、青花 陶磁器、瓦質土器、石塔 残欠、銭、土師質土器 人形型、鞆羽口、埴埜	免田式土器・ ジョッキ型土器		
要約	<ul style="list-style-type: none"> 熊本城に係る土塁・堀そして、門跡（高麗門）の遺構を検出し、熊本城惣構の西側の一角を形成している状況をつかむことができ、熊本城域を武家屋敷・町屋などを囲み込む惣構の西端を具体的な遺構として捉えることができた。 近世細川忠利の菩提寺である「妙解寺」へ向かう参道の痕跡を確認できた。さらに下層の加藤期の道の痕跡も一部確認できた。加藤～細川にわたる参道の一部をつかめた。 近世から近代に至る新町における人形町・細工町といういわれに因む遺物の出土があり、生業の一端をつかむことができた。 近代の鉄道路路に係る遺構を捉えることができた。 							

あとがき

J R 鹿児島本線外一線連続立体交差事業に伴う新馬借・花岡山・万日山遺跡群の発掘調査が無事に終了した。

2年度にまたがる調査で、一度埋戻した表土を剥ぐ等手間のかかる調査であった。また、調査面積に対して期間は短く調査員も少ないという悪条件にも関わらず、何とか期間内に調査を終了することができた。

熊本城の一角をなす遺跡とあって、専門家のみならず多くの方の関心と注目を集めた発掘調査であった。だからこそ、じっくりと時間をかけて調査していきかけたが、なかなかそうもいかず最低限の記録と確認をするほかはなかった。それでも、二度の検討委員会を開き諸先生方に御指導いただき今回の結果を得ることができた。

整理事業に入っても、量に対して作業期間も人数も合わずドタバタの毎日であった。遺跡の性格を把握したい、高麗門の位置を推定したい等やりたいことは多くあったが、思うように作業が進まず答えを導き出すことはできなかった。あと少し時間があれば…と思う事ばかりで悔いの残るところも多々あった。大変な日々の連続だったが、作業員皆さんの元気な笑顔と優しさに支えられのりきることができた。

最後に、ご指導くださった諸先生方、精一杯頑張ってくれた現場・整理事業員の皆さんのおかげで、やっとここまでたどり着くことができました。

この調査と報告書作成に関わったすべての皆様に心から感謝いたします。

諸氏（順不同・敬称略）

（現場作業員）

新馬借B調査区、新馬借A-1調査区、花岡山・万日山遺跡群A-2～A-5調査区、
試掘・確認調査に参加された作業員の皆さん

（整理事業員）

高濱悦子、岩瀬和代、福原洋子、東矢はるみ、岩瀬朱実、荒木とよみ、村中律子、松本利恵子、井島梯子、
北里五男、丸井貴志江、田中民子、益田久子、宮守富子、田中麻衣

（協力者）

橋口冬美、佐藤淳子、江見恵留、作田祐希、内田孝子、近藤広子、西田法子、平岡和子、原口美和子、
立花真利子、福島典子、石田敦子、古森信哉、土持友子、中尾規子

熊本県文化財調査報告 第303集

熊本城跡遺跡群

JR 鹿児島本線外一線連続立体交差事業に伴う
新馬借遺跡・花岡山・万日山遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成26年3月26日

編集・発行 熊本県教育委員会
〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印刷 白木メディア株式会社
〒862-0976 熊本県熊本市中央区九品寺5丁目9番35号
TEL 096-362-1255

発行 者：熊本県
所 属：教育庁教育総務局文化課
発行年度：平成 25 年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 303 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 熊本城跡遺跡群

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中心区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日